

Nihon gikyoku zenshū

日本戯曲全集
第四十巻

森鷗外
永井荷風
小山內薰

現代篇第八輯

東京
春陽堂版



「生　田　川」宗之助の處女の母・左升の僧・莚若の蘆屋處女

（自由劇場第二回試演）



「玉篋両浦嶼」林長三郎の浦島太郎・中村扇雀の後浦島太郎

（大正十五年八月松竹座にて）



「夜網誰白魚」 市川左團次・重五郎　坂東秀調・白瀧



「三柏葉樹頭夜嵐」 尾上松助・富本豊前掾　澤村宗十郎・榮壽太夫



「圓タクの悲哀」舞臺面（歌舞伎座）



「シネマトグラフ」舞臺面（築地小劇場）



「第一の世界」の市川左團次



「奈落」舞臺面（築地小劇場上演）



「息子」尾上松助・尾上菊五郎・守田勘彌（新橋演舞場）



「亭主」の舞臺面



「森有禮」の舞臺面（歌舞伎座）



「森有禮」の舞臺面（歌舞伎座）


森鷗外


永井荷風


小山内薫

日本戯曲全集　第四十卷　目次

森鷗外篇

小山內薰篇

寫眞撮影及編輯（村岡欣亮）
裝　　幀（木村莊八）
表紙文字執筆（三村竹淸）
箱文字執筆（恩地孝四郎）

森鷗外篇

玉篋兩浦嶼

上の巻

上手高二重に朱欄干。御簾を垂る。中央より少し下手に倚せ井筒。桔槔。その上に桂の木。

第一節

赤女。　十五六歳の女の童。赤銅の冠。
口女。　十歳許の女の童。樂器を持つ。鯛の冠。
女の童大勢。　赤女と同じ年頃なるならば赤女率ゐ、口女と同じ年頃なるならば口女率ゐる。皆魚の冠。後の者は種種の樂器を持つ。

赤女等の群　（共に歌ふ。口女等の群樂器を弄ぶ。）
「きずなき玉と　すみわたる
みづのふかさは　いくちひろ。
いろなきものも　かさなれば、
あをあをとして　そこ見えず。」
「人は知らねど　そのそこへ
雉堞　ととのほり
照りかがやける　たかどのに
くしきをとめぞ　住みたまふ。」
（歌ひつつ入る。樂の聲も共に入る。御簾を巻く。）

第二節

下手に唐櫃。錦の覆ひあり。鏡臺、櫛笥。
浦島太郎。几に倚りて假寐す。
乙姫。
口女。

乙姫　おん目のさめて候か。
太郎　おもひもかけぬ　夢なりしよ。
乙姫　みけしきすぐれず　見えたまふは、凶しきゆめにても　見たまひしか。
太郎　よろこびありて　なげきなき
ここのみやるに　年を經て
ひさしくわすれし　上國の
くるしきさまを　まのあたり
乙姫　さてはあの人間の　世のさまを。
太郎　いかにもわれは　世にありし

むかしのごとく　ただひとり
かがみにまがふ　うなばらに
小ぶねをうけて　こぎいでたり。
鉤をおろせば　釣絲の
わづかにゆらぐ　そよかぜに
おもてをふかせ　ここちよく
ときのうつるを　知らずして、
ただ釣るほどに　つるほどに、
堅魚に鯛に　かずしれぬ
獲ものにこころを　うばはれて、
かへらんことをも　わすれゐたり。
かかるをりしも　わが舟の
次第につよく　紗ぐに
ふとこころづき　おほぞらを
ふりさけみれば　こはいかに。
水とそらとの　さかひより
車輪のごとき　くろくもの
まろがりいでて　たちまちに
そらのなかばを　おほはんとす。
うねりの波の　おともせで
ちかづきよすと　おもふまに、
風たち海わき　雨そそぎ
いかづちさへに　なりいでぬ。
この時のれる　わがふねは
風にもまるる　木葉に似て、
みなそこ深く　かづき入り、
なみの上たかく　のせられつ。
櫓をおすわれは　いきしにの
さかひは今と　ならひえし
おす手ひく手の　陰陽
てだてをつくすと　見るほどに
女の童らの　うたふこゑ
みみにひびきて　目ざめたり。

乙姫
そはおそろしき　おんゆめを
おん身はごらん　なされしよな。
くがに獸と　たたかふも、
うみに波濤と　あらそふも、
そは人間の　命ならん。
あめかぜしらぬ　このくににて
わらはとともに　くらすをば
おん身はうれしと　おぼさぬか。

太郎
いやとよ。思はぬ　夢といへど、
まことは日ごろ　わがむねに
つつめることの　いつしかに

こめてゆめとや　なりぬらん。
渇して水を　おもふごと
このとし月の　平和に倦み
いまは事業の　したはしく
なりぬるものか　おぼつかな。

乙姫　さらばわらはが　恩愛の
なさけをあだに　したまひても。

太郎　おう。かくいはば　つれなしとも
なさけなしとも　おぼさんが、
さいつころより　なにゆゑか
をりをりこころ　たのしまず、
事もなきに　氣をいらち、
女の童らを　しかりもし、
はてはやさしき　おん身にさへ
つらきことばを　きかせしを、
さぞあやしまれし　ことならん。
わが身ながらも　けふまでは
そのゆゑさだか　ならざりしに、
いまのゆめにて　さとりえたり。
ここのみやゐの　しづけさは
えだをならさん　風だになく、
ひでりもせねば　あめもふらず、
いとめでたしとは　おもへども、
たえまなく咲く、湯津桂の
はなのかをりに　息つきて、
冱てずぬるまぬ　ゐのみづに、
ひびにのんどを　うるほさんは、
たひらかなるにも　やすきにも
ほどもこそあれ。わがむねの
さばかり悶え　もだえしは
この平和にこそ　よりつらめ。
さきに風波を　ゆめみしとき、
身うちの血汐沸き返り
氣も晴晴となるほどに、
ひごろのうたがひ　やぶれしぞ。
色も香もある　おことを棄て、
ここのみやゐを　たちさらんは、
こころぐるしき　かぎりなれど、
おことは自然、われは人、
おことは物の　おのづから
成るをよろこび　われはまた
ことさらに事を　爲さんとすれば、
ふたりのこころは　合ひがたし。

乙姫　ええ。(胸を押ふ。)げにわらはは　つみふかくも

異類のおんみを　などしたひし。
ひとたびここを　さりたまはば、
またあふことも　あるまじと
おもへば、かなしき　このわかれ。
（太郎に縋り泣く。涙まことの玉となりて、はらはらと落つ。）

太郎　（振り放して後向になり目を押ふ。）
われもおぼゆる　こひの侍。

乙姫　（俯して玉を見る。）
これが涙と　いふものか。
（口女唐櫃の上より錦の覆ひを取り、ゐざりより玉を包む。）

太郎　よしなきちぎりに　鮫人の
なみだをここに　みるあはれさ、
とは云へ男兒の　こころざし、
おもひたちては　すてられず。
すなどりしたりし　そのむかし
わが著しきぬを　いだされよ。

乙姫　はあい。（口女に。）口女よ。ここに來よ。
そなたはいにしへ　釣鉤に
のんどをきずつけ　啞となりし
便なき身ながら　さかしとて、
赤女とふたり　身ちかく召し
つかふもひさしき　ほどのこと。
赤女をばあね　そなたをいもとと
わが子のやうに　おもふぞや。
そなたもききしか、兄のきみは
われらをすてて、おそろしき
人間の世に　ゆきたまへば、
のこるわらはは　けふよりは
たれとともにか　ものいはん。
そなたとおなじ　くちなしの
色なく彩なく　くらすべし。
あのからびつの　みけしをこれへ。
（口女唐櫃より衣を出す。）

太郎　（衣を佩く。）
われもおことと　さざめごとの
かたれどつきぬ　そこひならで、
いまよりのちは　口舌を
事業のあたと　おもひつつ
おなじく口を　つぐむべし。

乙姫　（衣を受け取り夫の後に立つ。）
みぐしのみだれて　候へば、
いでなでつけて　まゐらせん。

赤女はゐぬか。

第三節

前の人人。
赤女。

赤女　（出づ。）　召したまふは。
乙姫　みぐしだらひを。
赤女　はいはあい。（入る。）
乙姫　吾兄（わがせ）のみぐしに　さはらんも
けふがなごりに　ならんかと
おもへばかなしや。
（衣を夫に著す。赤女盥を持ちて下手より出づ。井を汲む。銀の六角の吊瓶より水を盥にうつす。口女八稜鏡（やつかどかがみ）を掛けたる臺を出す。赤女二重に上り盥を進む。）
赤女　いつにない
このお支度は。
乙姫　兄のきみは
人間の世へ　かへらんとて
このおん支度。
赤女　（驚く。）　さてもわるい
おぼしたちにて　候よ。
あの人間と　いふものは
はがねをきたへて　鉤となし、
いとをむすんで　あみとなし、
うをといふうをを　とりこにし、
あまつさへその　かばねをば
あるは膾に　きりくだき
あるはかまいり　ひあぶりの
むごいしおきに　あはすとやら。
わらはも口女も　これからは
小海老や蟹を　あひてにして
いたづらごとは　せぬゆゑに、
おもひとどまり　たまはれかし。
（此中乙姫髪を撫で付く。）
太郎　（立つ。）
洞天仙境の　ゆめさめて、
またひとのよへ。　さらばさらば。
（二重を下る。）
乙姫　（赤女口女と續きて下る。）
いまがわかれか。
太郎　（吊瓶竿に目を付く。）
このさをを
とどめおかんは　おことのため

乙姫　やくなきうれへの　たねならん。
もとのうらわに　たちかへる
身のまもりにも　なりぬべし。
あれをはづして　とらせよとか。
きみとはじめて　あひみしとき
手にとりましし　あのさをは
のちのちまでの　おもひでにと
このゐにかけしを　はづせとか。
さ、あれをはづしてよ。

赤女　はいはあい。

（口女と吊瓶を上げ置き竿を手繰り下し横木よりはづす。竿赤女の手に殘る。太郎乙姫井の側に寄る。乙姫井筒に手を掛け夫を仰ぎ見る。）

乙姫　いまさらいふも　おろかなれど、
ここにきましし　はじめのころ
あかれあそびの　てずさみに
あのかつらのきの　えだを折り
髮にかざして　もろともに
このゐにうつす　みづかがみ
たがひにかげを　見くらべて
ゑみかはししも　きのふのやう。
ゐはかれねども　なさけの泉
いつか涸れたる。かなしさよ。

太郎　いざ、その竿を。

乙姫　あ、これまをし。
ちとせかはらぬ　ちぎりぞと
いひしはむかし、いまはただ
しばしのわかれを　をしませて。（太郎留る。）
おう。おもひよりたる　ことこそあれ。
この不老のゐに　いくちとせ
うきしづみせし　この銚の（吊瓶を取る。）
覆（かへ）せば返らぬ　みづにかへ、（水を傾く。口女に―
あの涙の玉と　鏡をこれへ。（口女二重に上り二品を取り渡す。）――
なみだとともに（珠を吊瓶に入る。）
心をこめ（息を噓き込む。）
しつらひなせる　たまくしげ、（鏡を蓋に掩ふ。）
これをわが兄に　まゐらせん。（錦に包む。夫の方へ向く。）
またあふことの　あらんまで
このはこをゆめ　あけたまふな。
せめては可怜　小汀まで
きみを見おくり　まゐらせてん。

赤女　口女はくしげを（匣を渡す）赤女はあの
　　おん釣竿を　持て。
　　　　はあい。
（乙姫立つ。赤女口女それぞれ物を持ち後に續く。
太郎下手へ往きかかる。道具幕。）

下の卷

磯近き朧夜。中央より上手へ海の書割。沖合に丹塗の大鳥居數級、兵旗小旗を立つ。上手いはづれに龜甲の紋付の幕。下手奥松林。熊手四五本松に寄せ掛けあり。松林の下手はづれに端舟見ゆ。篝籠に篝火。

第四節

後の浦島太郎。上の卷の太郎と同年位。色黒く逞しき士。〇。眦几。
鯔の狹五郎。五十歳位の郎黨。
漁師大勢。太刀弓箭。

後の太郎　舟よそほひは　ととのへりとな。
　　もはやほどなく　のぼる日と
　　ともに父祖の　地を離れ、
　　武運もひらく　あさびらき、
　　名を千載に　かがやかさん。

狹五郎　ちちのみことも　おん身のごと
　　國をさまれば　すなどりし
　　あだおころ日は　たちはきて、
　　田村將軍の　はたしたに
　　えぞが千島の　はてまでも
　　武名を輝かさせ　たまひしが、
　　そはまだせまき　國内のこと。
　　こたびのきみの　くはだては
　　とほき化外の　地にわたり
　　一ヶ國をも　切りしたが、
　　ちちのみことの　みいさをにも
　　まさるいさをを　たてんため。
　　さればおいたる　身ながらも
　　この筒川の　むらびとと
　　なりはてんかと　なげきしに、
　　いきがひありて　このたびの
　　おんともにたつ　うれしさよ。
第一の漁師　（花道より出づ。狹五郎に。）
　　警固の地には　ただいままで
　　なにの異變も　候はず。
狹五郎　（頷く。後の太郎に。）
　　警固のものは　おきたれど、

ふなでの邪魔に　なるべきこと、
もはやあらじと　おもはれ候。
われらのゆきて　かへらぬにも、
おんとほつおやに　ましまし
うらしまぬしの　ひとりにて
うせたまひける　むかしのごと、
海界をゆく　鰹釣
鯛釣りほこり　ひをかさね
ゆくへもしれず　なりぬるかと
いふのみにして、ことなるまで
世のうたがひは　かかるまじ。

第二の漁師　（花道より出づ）
ただいま警固の　道筋に
あやしきをとこ　ちかづくを
ささへとどめて　候へども、
わがいへざとに　わがかへるを
邪魔はしすなと　ききいれず、
つかつかこれへ　まゐり候。
あれあれかしこに。
（後の太郎始め一同花道に向く。）

狭五郎　なんと申す。

第五節

前の人人。
太郎。

（第三の漁師前に立ち弓にて支へつつ後すざりに出づ。太郎左に包をかかへ右に釣竿を持ち、静かに歩み出づ。後より第四の漁師太刀を抜き出づ。睨み合ひて花道に留る。）

第三の漁師　おしてとほらん　ものあらば、
いのちをたてと　きみのおほせ、
第四の漁師　あやしきものと　存ずるゆゑ、
第三の漁師　いんとすれど　矢もたたず、
第四の漁師　きらんとすれど　きずつかず、
第三の漁師　これまでおして　まゐり候。
（太郎舞臺に進む。）
狭五郎　（立ち向ふ。）
しや推參なり。なにものぞ。（たちたちとなる。）
後の太郎　（立ち向ふ。）
奇怪のくせもの　ごさんなれ。
そもそもなんぢが　よそほひは
われらとともに　いさなどり
海のなりはひ　するものと

見えはみゆれど、おぼろなる
よにもかがやく　にしきのつつみ
たばさみたるだに　あやしきに、
いれどいられず　きれどきれぬ
ふしぎを見せて　ちかづくは、
めでたきわれらの　かしまだちの
さまたげせんと　するにやあらん。
てなみをみせん。そこのけ。

太郎　おう。
むかしにかはらず　いさましき
ふるさとびとの　こころかな。
そらにきらめく　いなづまの
赫たるいかり、　おい木に風
いはほに波の　あらそひは、
いくちとせの　ひさしきま
わすれゐたれど、　いまこそは
われもさめたれ。　わがさとに
わがゆくみちの　さまたげすな。

後の太郎　なにわが里とは　ことをかしや。
この筒川の　むらびとの
みしらぬなんぢ　そこのかずや。
いざ。

太郎　いざ。

後の太郎　いざ。（詰め寄る。二人縺れ竿半より折る。）
あやしきは。
にしきのつつみ。　しさいあらん。
（手を掛く。引き合ふ。錦ほぐる。匣と鏡と離れ落つ。匣より無量の眞珠こぼれ散り、その邊珠を布きたる如くなる。白雲棚引き出づ。太郎よろよろと後に倒る。此間波の音聞ゆ。後の太郎後へさがり白雲を見上ぐ。太郎竿のをれを杖にし立つ。白髪になり居る。）

皆皆　ややややや。

後の太郎　（老人と見て敬ふ心持。）
つかのまに
かはりしさまの　いぶかしさよ。
（太郎左に杖をつき右に鏡を拾ひ上げ顔を見る。）
そもそもおん身は　なんぴとぞ。
かくいふわれは　としひさしく
この墨吉に　いさりする
海士の長にて　候が、
とほつおやより　よよおなじく
浦島太郎と　なのり候。

太郎　なに、浦島の　太郎とな。
さらばおんみの　とほつおやに
やへのしほぢに　こぎいりて
かへらぬひとの　ありときかずや。

後の太郎　げにげに。ことし　天長の
二年を距ること　三百年、
大泊瀬幼武の　天皇の
みよしろしめす　二十二年
月さやかなる　あきのよに
とほつおやなる　浦島は
ひとり小ぶねを　こぎいでしが、
いくひふれども　おほぞらに
雲なく、海に　なみなくして
ひともかへらず　ふねもかへらず、
たれいふとなく　わたつみの
かみのみやゐに　ゆきぬとて、
けふまでもよの　かたりぐさ。
それをおん身の　とひたまふは。

太郎　その浦島こそ　このおきな。
おんみはわが裔。ただならぬ
ふなよそほひは　なにゆゑぞ。

後の太郎　（下に居る。）
わが父なりし　浦島らの
とほきえみしを　うちしより、
平安城の　みよさかえ、
みつぎするもの　歸化するもの
ひきもきらねど　もののふの
こころは饜かず、ひのもとの
武名をなほも　あげんため、
わたつみこえて　とほつくにへ
わたらんとこそ　おもひ候へ。

太郎　おう。いさましや。わたつみの
かみのみやこを　わがいでしも
おなじこころよ。さりながら
おもふは先祖。　行ふは

後の太郎　子孫にこそあれ。

太郎　齎し
たまをば（地を指す）舟に　つみゆきて、
秋毫をだに　をかさざる
いくさのたすけに　せらるべし。

後の太郎　げに糧こそは　こころして
たくはへたれど、金銀の
ことにはうとき　わがともがら

そのそなへをば　かきたるに、
ねがうてもなき　さいはひなり。
ものども、たまを　はきよせて

狭五郎　ふねに舁きゆけ。

皆皆　はつははあ。

第一の漁師　さいはひなるかな。　まつばかく（熊手を取る。）

第二の漁師　さとのわらはの　すておきし

第三の漁師　げにもくまでの

第四の漁師　ありけるよ。

（皆皆熊手を取る。その他の漁師幕をはづして玉を受く。幕が取れば向うに日の出。松林より鶏啼き立つ。）

後の太郎　はや日の出。いで　うちたたん。（立つ。）

太郎　事業をわかき　わがすゑに
つたへおこなふ　ことをうる、
これもひとつの　不老不死。
われはこれより　やまふかく
かたちをかくし、　ひとのよの
なりゆくさまを　目守りてん。
さらばひとびと。

後の太郎　さらばさらば。

相圖の角を　吹かしめよ。

（端舟の方へ歩み寄る。狭五郎旗を振る。舞臺裏にて角を吹く。太郎杖に倚り見送る。幕。）

日蓮聖人辻說法

人物

日蓮　三十四歲
徒弟日朗　十一歲
比企大學三郎能本　五十餘歲
同娘妙　十八歲
進士ノ太郎善春　二十餘歲
禪僧
放下
老若男女

場所

鎌倉小町ノ大路

時代

建長七年正月

上手奥より斜に夷堂橋。正面名越切通方面丘陵林木の遠見。下手大路東側の築泥。午後曇天。貴賤の往來あり。傘を持ち、「雪にならねば好いが」などといふものあり。放下の筑子を弄ぶを童部等環り視る。

放下（歌ふ）
面白の　里のさかえや。
鎌倉の　山のあらしに、
雪の下の　雪吹きちらし、
色深き　花やにほはん。
しだり柳は　風にもまるる、
ふくら雀は　竹にもまるる。
騎射の犬は　馬にもまるる、
茶臼は　挽木にもまるる、
げにまこと　忘れたりとよ、
こぎりこは　放下にもまるる、
こぎりこの　二つの竹の
よよを重ねて　をさまる御代や。

（日朗花道より油壺を持ちて出づ。）

第一の童部（放下の技を見たりしが、花道の方を顧みて）みんな見い見い。名越の小法師が來をるは。

（童部等皆花道へ向く。放下下手に入り、日朗舞臺へ來る。）

第二の童部　ほんにさうぢや。師匠に飲ませる酒がな買うて來たのぢやろ。

第一の童部　（立ち向ひて）そりやなんぢや。酒か。
日朗　御菴室には酒といふものはおりない。
第二の童部　酒ぢやなうて般若湯とやらか。
日朗　お身達の知らぬ事。御佛前に上げる燈明の油ぢや。
第一の童部　そりや虚言ぢや。借せ。嗅いで見てくれるは。
（手を壺に掛く。日朗取らせじと爭ふを、強ひて奪ふとき、壺を墜して破る。妙塗笠を被り、橋を渡り來て覗ふ。童部等馳せ去る。日朗顧みずして上手へ歩む。）
妙　（笠を取り、呼び掛く）日朗樣、日朗樣。（日朗立ち留まり、顧みる）まあ、物怪な事でござんしたなあ。それにしても器はこはれる、油は流れる。お前の跡を見ずに行かしますは、なんと思うての事でござんする。
日朗　こはれた器、流れた油が、見ればとてなんとなりませうぞ。
妙　（笑ふ）ほんにさうでござんすなあ。おう、好い事がある。松葉ヶ谷へ歸らせますには、大町は道筋ぢや程に、妾がさう申したというて、内のを持つて行かしませ。
日朗　盜みて焚きし油にも、永劫身光の報あり。そんなら貰うて歸りませう。
妙　（笑ふ）それはなんの御經やら。早う寄つて取つて行かしませいなあ。
（日朗橋を渡りて去る。妙暫し見送りて、下手に行きかかる。）
善春　（日朗とすれ違ひ橋を渡り來て）妙殿。まだそれに居られたか。某は今年ゆくりなくも、御的始の交名に加へられ、今朝より由比ヶ濱にて、おん試にあづかりしが、若しおん身が日參の、いつもの時刻に遲れんかと、事の果つるを待ちあへず、米町通りをひた走りに、御邸のほとりまで引き返し、お跡を慕うてまゐつてござる。
妙　（萎れたるこなし）そのお志は、よう存じて居りますれど、先頃父がお勸め申して、あなたもどうぞ聖人樣へ御歸依遊ばすやうにと、くれぐれ申しましたのを、おん聽入が無いのみか、聖人樣を賣僧ぢやと、あなたが仰しやりましたとやら。それからといふものは、切角お尋遊ばしても、留守と申せと父のいひつけ。所詮願は協はぬものと、妾はもう諦念めて居りまする。（憂のこなし）
善春　さてはさやうの訣でおりやるか。たとひ御父上はなんと仰せられうとも、おん身の心が變らずば、此善春は引かぬ所存。必ず氣にばしかけられな。
妙　あなたに逢うて御親切な、そのお詞を聞くうちは、つい末頼もしいやうな心にもなりますれど、又お目にかかるまでは、苦勞の絶間はござんせぬ。妾の心をよう知つた母上の御病氣は、日に日に重り行くばかり。その御平癒の祈願ぢやとて、かうして一人參るのを、父が許せばあ

なたにも、人目のうるさい大路ながら、たまたまお目に掛られまする。二道かけた願ゆゑ、八幡樣にも通らぬやら、どりや、遲くならぬうち、急いで行つてまゐりませう。

（花道へ入る。善春殘り、心配の思入。老若の群慌忙しく橋を渡り來り、「又說敎に來たのぢやろ」、「めでたい正月に忌まはしい」などの白ありて、舞臺に留まる。）

善春　さては噂の日蓮か、けふも說法に出でたるよな。去年の夏より、名越なる往還に高座を補理へ、諸宗を罵詈すと聞きながら、たゞ餘所事に思ひ居りしに、比企殿の惑深きため、我身の仇となつておぢやる。憎き法師の何事を說くやらん。

（群集又どよめき、「そりや來居つた」と叫ぶ。中には石瓦を拾ひ、橋に向ひて擲つものあり。）

日蓮　（檜笠にて面を掩ひ、橋を渡りて出で、舞臺に留まり笠を右手に持ち）やら、騷がしの人人や。國に敎の地を拂ひ、目のあたりなる逸樂に、永劫盡せぬ苦艱を忘れ、あだに過ぎゆく月日を惜まで、そのをりをりの節物を、祝ふ心ぞおぞましき。たまたま信者と呼ばるるものも、譬ばかりなる念佛して、殊勝顏なる笑止さよ。（群の中より「念佛がなんで笑止ぢや。」）おう、法然がさかしらの、選擇集の毒に醉うては、その笑止さがわかるまいの。敎の主なる釋迦佛を、もてあそびにするものさへあるを、帷子ノ里に行脚して、われまのあたりに見しことあり。念佛は無間地獄の業因。禪宗は天魔波旬の邪法。

禪僧　（上手より來かかり）やよ、御僧。御身の嫉む禪宗が、大迦葉に直傳せし、我宗門を邪法とは。

日蓮　御身等讀誦の經文たる、楞伽竝に金剛般若は、皆是れ未顯眞實にて、いはゆる敎外別傳は、佛說に乖背し因果を撥無す。これを邪法と申すのぢや。

禪僧　輕忽の事を聞くものかな。相州殿の歸依深き、建長寺の道隆禪師も、御身が目には邪法の人か。

日蓮　なかなか。御僧みづから言はれた。

禪僧　あな、無益。勇猛直前の志はおはさうが、一念の瞋恚は百萬の魔障、世間の豪傑は出世の丈夫にあらず。御身の面目はや見えた。白刃頭に臨まんとき、ゆめ周章めさるなよ。（顧みずして下手へ入る）

日蓮　はははは、たとひいかなる僭越ありとも、究竟邪法は邪法ぢやまで。まつた眞言は亡國の、大惡法と申すべし。（群の中より「說法ぢやなうて讒言ぢや」、「打ち倒せ」などいふ）律は國家の蠹毒。皆是れ墮獄の惡道ぢや。

（群騷ぎ立つ。中より賤しき男一人進み出で、「わぬしが地獄に墮ちぬ先に、ここで舌を拔いてやろ」と叫び、日蓮の笠に手を掛く。日蓮手を放つ。男よろめき善春に撞き當る。）

善春　撞き放す、男油に滑り、仆れて又立つ）やあ、忝なくも三品中務卿親王のおはします、大倉ノ御所に程近き、此小町ノ大路にて、よし何事のあらうとも、喧嘩三昧尾籠ちやぞ。（賤しき男笠を持ちたるまま下手に逃げ入る。善春日蓮に）いやなに、御僧。某は北條殿の家の者、進士ノ太郎と申すものでおりやる。先の程より見てあれば、鎌倉山の風靜に、由井ケ濱の波騷がぬ、太平の世を敎無き濁世と罵り、剩へ、諸宗の立義を誹謗して市びと等の怒を激し、忍辱の衣を石瓦に、何とて撲たせらるるぞ。

日蓮　おう、その不審尤もなれど、昔不輕菩薩は、上慢の比丘等の杖にあたりて、一乘の行とし給ふ。法を說き敎を布くに、杖木瓦石をいとはうや。

善春　さらば御身の法とするは。

日蓮　わが法こそは大覺世尊が、靈山八年に說かせ給ひし、正直捨權の實乘なれ。此妙法蓮華經に比ぶれば、爾前四十餘年の權宗は、慈父の稚子に與へたる竹馬草鷄に殊ならず。

善春　その妙法とは。

日蓮　卽ち眞如。

善春　眞如は。

日蓮　やがて衆生當體、我性の眞如はありながら、煩惱の闇に迷ひ、佛性の蓮を持ちながら、無明の酒に醉ひ癡れたる、衆生の身こそ悲しけれ。

善春　さて其妙法蓮華の功德は。

日蓮　それ世間の蓮華は、夏開けども冬開かず、淤泥に生じて陸地に生ぜず。風にもまれ波に沈み、冰に閉ぢられ炎に萎む。わが妙法の蓮華は然らず。三世不變の花なれば、春夏秋冬ときはなり。遍一切處の蓮なれば、六趣三有に徧く咲けり。善惡一如の蓮なれば、惡業の厚薄を選まず。邪正不二の花なれば、煩惱の淤泥にも生じ、十惡の風にも壞られず、五逆の波にも沈まず、紅蓮の冰にも閉ぢられず、焦熱の炎にも萎むこと無し。一たび妙法蓮華經と唱ふるときは、一切の佛、一切の法、一切の菩薩、一切の聲聞、一切の梵王帝釋閻魔法王日月衆星天神地神乃至地獄餓鬼畜生修羅、一切衆生の佛性を、只一言に喚び顯す。譬へば籠のうちの鳥啼けば、空飛ぶ鳥の來り集り、空飛ぶ鳥の集れば、籠の鳥の出でんと欲するが如し。我身の佛性顯るれば、梵天帝釋の佛性、來りて加護し給はんこと、何の疑候ふべき。

善春　さらばその妙法のみ正眞の敎にして、今行はるる宗門は邪敎なりと證がおりやるか。

日蓮　いかでか證のおりやるまい。

（群を見て揮る思入。雪降り出づ。群の中より、「雪ぢ

や」、「どりや往かう往かう」、「お武家、しつかりせられい」など呼ぶ。群次第に散り、上手下手に入る。日蓮捨石に腰を掛け、善春に。）

和殿はそれを聞かうとや。

善春（日蓮の下手に跪き）なかなか。御身の天魔と編し給ふ、禪門の二祖すらも、膝を埋むる雪のうちに、立ちて教を聞きつとかや。御身の證とせらるるは。

日蓮　和殿も先より聞かれし如く、我說法は折伏を旨とし、邪を破し正を顯すに、忌み憚るところ無けれど、國家の盛衰、政道の善惡は、むざと言ふべきではおりない。わが見るところを申さうぞなら、相州人となり聰明におはし、累世の積威大いにして、四方に靡かぬ草木無く、世は泰平と見ゆれども、貴賤の風俗日日に亂れ、上下歸依する宗門は、かたばかりなるものとなつて、三寶の跡斷滅せり。さあるに依つて此年頃、天災地妖荐に起り、破國の萠夙に現る。されど爰に將來の一大難あり、かの藥師經に說かせ給ふ、他國侵逼難とは是れおぢや。國民早く迷を醒まして、捍ぎ遏めん覺悟せずば、わが大八洲の山川國土も、胡馬の蹄に掛けられん。こは折を得て柳營に勸文もて申さうと、かねて存ずる所なれど、和殿に愛でて告げ申すおぢや。（此詞のうち雪强く降る）

能本（傘さして上手より出で、日蓮に）こはおもひかけなや。聖人にはこれに居さしましたか。（日蓮に傘なさし掛く）

善春（熊本に）珍らしや、比企殿。

（雪又頻に降る。能本空を仰ぎ見て傘をつぼむ。）

日蓮（能本に）さては進士殿とやらんは、和殿の知人にて候ひしよ。生得利根の人と存じて、さきより聞書いたしておぢやる。

善春（能本に）げに聖人の御上をば、しばしば御許にて承りながら、某蒙昧にして玉石を辨たず、空しく月日を過ししに、緣ありてけふ値遇しまゐらせ、教を聽聞いたしておぢやる。ただ怖かしう存ずるは、邪宗橫行の報のため他國來りて我疆を、侵すとの御詞。武を三韓に耀かし、我日本を何ものか、觸れ侵し申さうぞ。

能本　その敵國は蒙古でおりやる。某折折大宰府の牒狀を洩れ承るに、此國東方經營を志すこと三十餘年、わが屬國たるべき高麗の王微力なれば、その侵略の衝に當り、彼の勢を挫かんもの、我國ならで外におりない。そもそも蒙古のぬしの祖先は、北陲の曠野に居りて、鷹を手馴らし狩くらに、その日を送るものなりしが、水草を逐ひ居を移す、些の部落を剪り從へ、その酋長となりしより、子孫漸く勢を得、北方の强國となつておぢやる。殊に國王の弟呼必賚は、大理を征して勳功高く、祖父鐵

木貫の遺訓に基づき、宇内を併呑せんず志、片時も已むとき無し。我國民の力を蹶せ、奮ひ起つべき時ぞ此時。聖人の御詞を、これにて會得させられたい。

（此白のうち雪一しきり强く降る。妙花道より笠を被りて出で、人人を見て笠を取り、蹲る。）

善春　はは、忝なや。その御詞を承りて、迷の雲霧霽れておりやる。身不肖ながらこれよりは、聖人の御身方。

妙　そんならあなたも聖人樣に。

善春　何がさて、歸服せいで何といたさう。（空を仰ぎ）どれ、其笠を。

（妙の笠を取り、日蓮に捧ぐ。日蓮笠を取りて起つ。）

能本　（善春に）さらば御身は日暮れぬ中、松葉ケ谷の御菴室へ、御供申してくれさしめ。

妙　（父の傍により）かうなるからは妾の願も。

能本　はて、忙しない。邸に歸つて言ふが好いてや。

（傘を開き、妙を傘の下へ入る。幕）

日蓮聖人辻說法故實　（久保田米僊）

一　衣　裳

日蓮聖人。坊主鬘。白木綿の小袖。白木綿の帶。麻の衣。（天台衣又素絹。）鼠色七條の袈裟。網代の檜笠。法華珠數。素足に草履。著物は裾高に著たり。

徒弟日朗。坊主鬘。白木綿の小袖。布衣。袈裟無し。珠數を手にまとふ。素足に半中草履。これら著物は裾高に著たり。陶器の油壺。

大學三郞。鬘下に水淺黃羽二重の頭巾を被り、その上より折烏帽子を被る。じみなる緞子の著附。鼠色襟の襦袢。松葉色に白と色物の遠雁金の模樣ある布直垂。露は白或は茶。燻革の足袋に高履。聖柄の脇差。染革の火打袋を附く。手首に珠數。白無地に油引の傘。柄は普通より長し。自然木皮付の杖。上を撞木。下を杈肢とす。

同　娘妙。前割したる下げ髮を襟の中に入る。桃色の紋綸子に花やかなる色絲の繡模樣ある中振袖。白襟の襦袢。あこめ鼠の廣袖の襠は藤紫色の織物。但し袷、壺裝束の著方。紫綸子の半足袋。（つま先だけ。）黑塗白鼻緒の下駄。法華珠數。白と紫段打の紐付きたる赤地錦の括りたる守袋を首に掛く。塗笠は黑。

進士ノ太郞。烏帽子下茶筅に折烏帽子を被る。白紫萠黃を

段打にしたる掛絡。段熨斗目刺合の小袖。淺黃襟の襦袢。淺黃色に菱の段模樣。上を粗くして肩拔と外一段を萌黃。下を細くして膝とその下の一段を焦茶に染めたる直垂。露は燻革。太刀、匕首に火打袋。五間骨の田樂扇。小櫻の革足袋。白鼻緒の草履。

禪僧。黑の禪頭巾。鼠木綿の著附。袖裏に紫の緣ある黑絽の衣。象牙の環付きたる袈裟。(南山衣。)黑組緒の手巾。輪珠數。白足袋。白鼻緒兩ぐりの下駄。

放下。束ね髮に淺黃の頭巾を被り、その上に折烏帽子。萌黃の花菱を白と鼠にて染拔きたる筒小袖。茶と白段染の括袴。鹿の皮の引敷を腰に附け、藁の行纏をして、素足に草鞋。作り花の梅の枝に色紙と短册とを附けたるを腰に挿し、引込鞘の短刀。手に筑子を持つ。

賤の男。摑み髮。朱銅の額にて、虎髭を附く。淺黃無地の肩に一文字に錢繫の白拔にしたる模樣の筒小袖。土器茶大口の切袴。短刀。素足に草履。

童部は大(十一二歲)一人、中(十歲)一人、小(七八歲)三人位。顏の色は白或は肉色。

大。束ね髮を黃螺卷にしたる鬘。玉子色に大小巴を色模樣にしたる振袖。襦袢の襟は桃色。鶯茶の大口袴。黃赤淺黃の菊綴付。(袴の手置き、脇明きの處に三つ宛付く。)袴の紐は白露紐。錦の鞘卷したる古年刀。火打袋。素足に幅廣の藁草履。

中。束ねたる髮を後に下げたる鬘(奉書のしごき紙にて束ね。)紫に色橫段を入れたる振袖。襦袢の襟赤。白精巧の袴、上に黑菊綴二つ付く。素足に幅廣の藁草履。

小三人。切禿。赤、桃、水紅の地に天神唐草、色違ひ梅鉢の飛模樣、大小渦卷の振袖。(振袖の下とおくみとを廣くして白の付紐を後にて結ぶ。)鶸無地の下着。襟を白とす。內一人は白紫段打の紐つきたる萌黃錦の括りたる守袋を首にかく。素足に藁草履。

大中小共持物は、葉付きたる竹馬、ぶりぶり、春駒、ぎつちよう杖、木の珠。

老若男女の風俗は「七十一番職人盡歌合」「鶴岡職人盡歌合」「建保職人盡歌合」「勸進比丘職人盡歌合」等に考へ、爲出しの好みに任す。使先の郞黨の心にて、藁頭巾、直垂を括上げ、靱を負ひ、弓を持つ、一本差の男などありてよし。尤も日蓮等の衣裳は、主として窪田元寬筆の繪卷物日蓮聖人行狀記に據れるものなれば、爲出しの揃も猶此中より取りて好し。(近頃下村觀山氏美術學校卒業製作の日蓮辻說法の圖あり。參考すべし。)

二　道　具

鎌倉小町ノ大路。

上手奧より斜に夷堂橋。(欄干を低くす。)

正面名越切通方面丘陵林木の遠見。
下手斜に大路東側の築泥。築泥は黄土色摺開きの檜垣塀。一間毎に笏切りあり。白にて横に五本の筋入る。檜の板屋根は大和葺。押緣は横に長く六つ割二本にて押ふ。棟は土葺。下の輔は石のかづら入り。塀の下手より二間位の處に、片扉金物無しの門。（穴門。門は塀の横筋の上一段を置きて、一尺位内におくりになり居る誂。（但し出入無し。）塀及び門は總て少し汚れたる好み。
塀の側に捨石。これは問答中日蓮の腰掛に用ゐる。（口碑に日蓮上人腰掛石といふものあり。）
捨石の後に柳の芽を吹き居らざる立木一本。（柳の枝は日蓮説法の時、頭の上に垂る。）

三　合　方

幕明、放下の謠を三味線にて節附して、小鼓入の合方。
日蓮の出には、一中節の石和川を用ゐる。
問答中は三メリの合方。
雪下しは極くかすめたる誂。
幕切は木無し。

生田川

人物

蘆屋處女
　高く上げたる髮に白銀の釵子、黃楊の小櫛。時の花（紅梅）の挿頭。淡紫の繧繝の表衣。紅染めの裙。白地に浪に鴛鴦の模樣ある薄き裳。錦の裙帶。紫絥の領巾。腰機に懸かりゐるとき傍に桛、檛、苧笥を置く。
　壁に懸け置く笠は、菅の市女笠。白栲の於須比を被りて戴く。
　はひりに置く舃は丹舃。

處女の母
　背後に上げたる髮。細かき柞の櫛。釵子。朽葉色の衣。茜染の裳。山藍摺の褶。倭文布の裙帶。織物の守袋に絥染の紐附けたるを腋に懸く。珠數。
　火桶は白木。
　壁に懸けたる笠は白き枲の垂衣附けたる市女笠。
　はひりに置く舃は秋二毛。

菟原壯士
　烏帽子。山吹色の衣、白き袴。淺縹の繧繝の襖。熊皮の淺沓。葛卷の小太刀。葛靫に交剝したる鹿矢二列に八目の鳴鏑矢一手を表指す。白檀の節木の反高なる弓。

茅渟壯士
　烏帽子。紺の纐の襖。白き衣。白布の袴。鹿夏毛の行縢。毛沓。黑漆の刀子に織物の燧袋。白銀の目貫の太刀。黑葛靫に鷲箆の矢を盛りたる鉄矢一手を表指す。所所に樺纏したる梓の弓。

法師
　鈍色の納衣。色色の裂を綴りたる糞掃衣。阿闍梨笠。麻鞋。左手に鉢。右手に白銅の五鈷鈴。

（衣裳考證　關保之助）

　攝津國菟原郡蘆屋の里なる民家。左手大黃楊の垣の間に門口。そこに沓。一間の正面の中程より右壁。笠二つ懸く。壁の前に機を立つ。中程より左の方窗。火桶。柳筥やうの物。
　蘆屋處女、機を織りゐる。その母、手を火桶に翳してゐる。

母　もう春が近いと見えて（窗の方を見る）生田川の水がぬるんだと、髫髮どもが云つてゐた。わたしのやうな年寄でも、どうやら炭櫃が疎ましうなつた。（少し火桶を

押し遣る)

處女 (機の手を停む) ほんにさうでございませう。此間の雷から時候が變つてまゐりました。どうしたわけか、わたくしはかう頭を押さへられるやうな心持が致してなりませんわ。

母 いやいや。それは時候のせゐばかりではあるまいよ。血の道も手傳つてゐるかも知れない。それに年寄つて同じ事ばかり云ふとお思ひかも知れないが、あの毎日のやうにお出でになる二人の方に、いつも曖昧な事ばかし云つてお置だもんだから、お前の氣の靜まる日は無いのだよ。

處女 あ。その事だけは、おつ母さん、どうぞ云はないで置いて下さいね。その事だけは、わたくしは考へても見たくもございませんし、申したくもございませんの。考へたり、申したり致すと、わたくしは頭痛が致してまゐりますから。

母 それ御覽な。お前の頭の痛いのは、春先のせゐばかりでは無いのだよ。お前の言ひたく無いと云ふのを、何もわたしが無理に彼此云ふのぢやあ無いが、どうも何時までも此儘にして置かれるものでは無いからね。

(處女眉を蹙めたるが、忽ち又思ひ返したる如く、素直に機を下り、母と向き合ひて坐す。間。)

わたしも初の內は、お前が面白半分に、二人の方を綾なしてお出でなのかとも思つたのさ。だが、何事に附けても、輕薄がましい事の嫌なお前の事だから、まさかそんなわけでもあるまいと思つて、よくよく見てゐると、お前は飽くまで眞面目だらうぢや無いか。わたしもねえ、かうなつて見ると、どうもお前の氣が知れなくなつてしまつたのだよ。それでお前の厭がるのを知つてゐながら、こんな事を云ひ出すのさ。一體お前はどうしようと云ふのだい。

處女 さうでございますね。

母 さうでございますねぢやあ、分からないね。お前だつて何とか思つてお出でだから、頭痛もするのだらうぢや無いか。一體どうしようと云ふのだい。

處女 それはねえ、おつ母さん、わたくしだつて思つてゐる事があるどころぢやございませんわ。思つてゐる事はございましても、どう致す事も出來ないのですもの。

母 變ぢやあ無いか。二人の內どちらかにお前が極めなくちやあ、治りつこは無いぢや無いか。

處女 それはどうも極められませんの。

母 おやおや。それでは矢張極めないで置いて、二人であんなにおしのを、見てゐたいとお云ひのかい。

處女 なんの、わたくしが、それを見てゐたうございませう。わたくしはそれを見てゐるのが、つらくてならない

のでございますわ。

母　(少し辭色を勵ます)　どうもそれでは分からないね。この津の國に、服部の女子は澤山ゐても、お前の織つた繒の値が一番好いと云はれる程、何に附けても器用なお前が、二人の男に思はれたからと云つて、まさか意氣地が無くて捌が附かないと云ふわけでもあるまいね。

處女　ええ。おつ母さんがなんと仰やつても、わたしくは腹を立てたり拗ねたりは致しませんの。おつ母さんの仰やるとほり、わたくしにはあのお二人を釣つて置くの綾なして置くのといふ心持もございませんし、それかと申して、わたくしだつてあのお二人に彼此云はれるので、只途方に暮れて、ぼんやり致してゐるのでもございません。わたくしが極められないと申しますのは。

母　ふん。お前が極められないとお云ひのは。

處女　極められないと申しますのは、それはあの、(徐かに立つ)　人間の力に及ばない事ではございますまいかと、思ふからでございます。

(二人暫く無言。忽ち群鳥の羽音、窗のあなたに聞ゆ。處女窗の戸を開け、向うをぢつと見てゐる。)

母　なんだい。

處女　あの平張の打つてあるあたりから、鴨が立つたのでございます。(間)

母　お前が極められないとお云ひのは、どなたかにお前が極めたら、殘る一人の方が、その儘にはをられないとお思ひなのだらうが、わたしはさうは思はないよ。(處女はぢつと外を見てゐる)　さうしたら、一人の方があきらめておしまひなさるだらうと思ふがね。(處女はぢつと外を見てゐる)　お前はさうはならないとお思ひのかい。

處女　(こなたへ向く)　それは大變な事になりは致すまいかと思ひますの。

母　はてね。そんならお前が殺されるとか、お前の極めた方のかたが殺されるとか、お思ひのかい。どうもお二人ともそんな氣の荒い方のやうでは無いのだがね。

處女　ええ。そんな氣の荒い方方ではございませんとも。

母　それではお前に捨てられた方のかたが死んででもおしまひなさらうと云ふのかい。

處女　(又母と向き合ひて坐す)　それは死んでおしまひなさいますわ。

母　(微笑む)　まあ。矢つ張利發なやうでも世間見ずだね。

處女　いいえ。きつと死んでおしまひなさいますわ。

母　そんなら、お前の大變な事になるだらうとお云ひのは、その事なのだね。

處女　いいえ。

母　はてね。（暫く考ふ）その方に死なれては、お前達が済まないとお云ひのかい。

處女　ええ。それは二人の間に、亡くなつた方の影が立つて入らつしやるのですもの。

母　ふん。お前の考も大抵分かつたよ。わたしの考では、少しお前が思過しをしてお出でのやうだが、わたしだつてきつとさうで無いとも云はれないのさ。併しそれはお前が出し抜けにどなたかに極めると云つたなら、捨てられた方のかたが、あきらめにくいかも知れない。どうだね。お二人の間で極まつてしまふやうにしたら。

處女　そんな事は出來ませんわ。

母　（又微笑む）何故出來ないには限らないぢやないか。

（菟會壯士、茅渟壯士柚垣の外に現る。二人共人柄詞つき處女と母とよりは、稍時代なり。弓を持ち、鴨一羽づつを提ぐ。）

どなたかお出でなされたやうだね。

處女　お二人ですわ。

菟會壯士　（一歩下がりて、茅渟壯士に）さあ。どうぞお先へ。

茅渟壯士　いえ。あなたこそ。

菟會　わたくしは此土地のもの、あなたは鄰國のお客ではございませんか。どうぞ御遠慮無く。

茅渟　いつも同じやうな事を申すやうでございますが。さう仰やると、つい愚癡な事を申したくなります。何故わたくしは思ふ人と、同じ津の國には生れずに、和泉の國に生れましたやら。

菟會　これはお詞とも覺えません。道が遠ければ、お志の深さも知れるといふものではございませんか。

茅渟　志は劣らぬ積でございますが、思ふ人とまだ片生の昔から、お識合のあなたこそ、お羨ましうございます。

菟會　いや馴れては目にも止まらぬ習でございます。珍らしく來られたあなたがお羨しうございます。かう申してゐては、果てしがございません。とにかくお先へ。

茅渟　そんならお許下さりませ。（柴の戸に手を掛く）頼みます。

（處女靜かに戸口に歩み出で、戸を開く。三人額を見合せて思入あり。暫く無言。）

處女　どうぞおはひりなさいまし。

茅渟　御免下さい。

菟會　御免下さい。

（二人の壯士、處女の母に目禮し、各弓を傍に置きて坐す。母の位置と三形角になる。處女は戸口に近き處に突居る。）

母　これはお二人ともお揃で、好うこそお出で下さいまし

た。
茅渟　丁度こなたへまゐらうと存じまして、あの平張の打つてあるあたりまでまゐりまするど。
菟會　和泉のお客と落ち合ひまして。
茅渟　鴨一羽づつ取りましたのを。
菟會　お土産に持つてまゐりました。
（二人鴨を母の前に出す。）
母　まあ、揃ひも揃つた立派な鳥でございますね。娘。厨へ持つて行つてお置。
處女　はい。
（鴨を取りて、右手へ入る。）
茅渟　（菟會に）こなたの母刀自が、立派なと仰やつたので、あの鵠の事を思ひ出しました。あれはまだあの儘浮いてをりませうかな。
菟會　きつとあの儘をりませう。何處から飛んでまゐつたものか、今朝見たときからあの通りにぢつとしてをりまする。
母　あの、鵠がゐると仰やいますか。
茅渟　さやうでございます。先程二人で鴨を射ますと、近くにゐた鴨の群は一度にぱつと立ちましたが、直その向うに鵠が一羽立たずに浮いてをりました。小舟を出して射た鴨を取つてまゐりました時も、鵠は靜かに波を切つて、二丈ばかり退いたばかりで、矢つ張立たずに浮いてゐました。
菟會　雪のやうに眞白な、大きな鵠でございます。
母　それはまあ、珍らしい（少し間を置き、思案したる様子にて、膝を進む）から申すと、なんとやら差出がましうございますが、あなた方お二人で、その鵠を射て御覧なさいませんか。二筋の矢に鳥は一羽。お中なすつたそのお方を娘の婿に致しませう。
茅渟　はつ。これは何よりの仰でございまする。菟會のお方。いかがなものでございませう。
菟會　なる程。御尤な母刀自の仰でございます。わたくしも異存ございませぬ。
茅渟　かういふ内も心が急く。直にこれから。さあ。
菟會　さあ。
（二人弓を取りて立つ。處女右手より出で、立ちたる儘にて、ぢつとこなたを見る。二人の壯士、同時に處女の顔を見、さて同時に目を母の方に移す。）
茅渟　後程お目に掛かります。
菟會　後程お目に掛かります。
母　お待ち申してをりまする。
（二人の壯士、柴の戸を出で、左手に入る。）
處女　（二人の左手に入るまで、ぢつと立ちゐて、徐かに母

の傍に進み、向ひ合ひて坐す。）又お出でなさるのですつて。

母　こん度お出でなさるのは、多分どなたかお一人で、そのお方がお壻さんだよ。

處女　何故なの。

母　（微笑む）何故だか當てて御覽。

處女　分かりませんわ。

母　（又微笑む）好い思附があつたのだよ。（間）實はね、さつき二人で持つてお出での、あの鷗を射なすつたとき、大きな白い鷗が一羽、鴨が立つても舟が來ても、逃げずに浮いてゐたのだとさ。その話をわたしが聞いて、それを取つて來た方を壻にしようと云つたのさ。

處女　まあ。そんならおつ母さんは、今朝から川に浮いてゐる、あの鷗を取つて來いと、お二人に仰やつたの。

母　さうだよ。今朝から川に浮いてゐるとは、それをお前は知つてお出でか。

處女　ええ。ここから好く見えますわ。大きい白い鷗ですもの。

母　さうかい。

（間。處女心配らしき樣子。）

變な顏をお爲でないか。又頭痛がして來たのかい。

處女　いいえ。

母　ではどうしたといふのだえ。もしかわたしの云つたことがお前の氣に入らないのかい。

處女　いいえ。

母　分からないねえ。そんならお前の出來ないと云つたことが不思議に出來て、今日一日に極まるのを、惡いとお思ひでは無いのだね。

處女　いいえ。それが惡くはございませんの。唯わたくしには久しい間、極まらないでゐた事が、そんなに急に極まるのが、恐ろしいやうでございますの。それにあの大きな鷗を、今朝ふいと見た時から、なんだか氣に掛かつてゐたのに、あれが射られて極まるといふのも、恐ろしいやうでございますの。

母　なんのつまらない。さういふ内に、その鳥はもう射られたかも知れないのだよ。

處女　（獨語のやうに）ほんに鷗はどうしたかしら。

（處女徐かに立ちて戸を開け、外を見る。間。）

母　見えるかい。

處女　（見返らずに）ええ。（語氣緩く）緑に光る水の上に、圓めた綿かなんぞのやうに、眞つ白に見えてゐますわ。

母　二人の方はどうなすつたのだらうね。（間）川はつい其所だけれど、道が曲がつて附いてゐるから、まだお出

でなされぬかも知れない。

處女　あら。

母　なんだい。

處女　白い鳥が大きくなりましたわ。（間）羽を廣げたのでございませうか、（間）又小さくなりましたわ。（間）舟が出ますの。（間）鳥が流れますわ。（間）鳥の方へ舟がまゐりますわ。（間）人が二人乘つてゐますわ。（稍長き間）舟に鳥をいれますわ。（間）こちらへ漕いでもどりますわ。（稍長き間）鳥に矢が立つてゐますわ。矢が二本。

母　なんとお云だえ。矢が二本鳥に立つてゐるといふのかい。

處女　ええ。（間）舟が著きましたわ。

（母も處女も暫く無言。處女はぢつと窗の外を見てゐる。）

二人で鳥を中に置いて、動かずにお出でなさいますの。

母　（心配らしき樣子）まだ何か見えるかい。

處女　ええ。（間）いつまでも動かずにお出でなさいますの。

（長き間二人無言。處女はぢつと窗より見てゐる。鐘の音。窗の外次第に夕映にて赤くなる。此時僧墨染の衣、受糧器を持ちて登場し、戸の外に立つ。）

僧　煩惱謂貪瞋、
　　癡慢疑惡見
　　隨煩惱謂忿
　　恨覆惱嫉慳

母　おや。托鉢の坊樣がお出でなすつた。いつも朝の内たのに、こんなに遲くなつて。

處女　（靜かに窗を離れて、懸けたる笠を取る）あの、おつ母さん。わたくしは一寸行つて見て來ますわ。

僧　依止根本識
　　五識隨緣現
　　或俱或不俱
　　如濤波依水

母　ほんとにその鳥に、矢が二本立つたのなら、お前が行つたつて極まりやあすまいぢや無いか。

處女　（戸口にて沓を穿く）いいえ、おつ母さん。あの鳥が死にましたので、今日わたくしの身の上が、どうにか極まらなくてはならないやうに思はれますの。（語氣緩かに強く）人間の小さい智慧で、どうしようの、かうしようのと、色色に思ひましたのも、夜が明けて見れば、燈火の小さい明りがあるか無いか知れないやうなものですわ。

僧　現前立少物

謂是唯識性
以有所得故
非實住唯識。

處女　おつ母さん、門に入らつしやる坊様にお上げなすつて下さいよ。

（處女僧に會釋して。戸口にて意を決したる如く早足になり、左手に入る。窗の外薄暗くなる。母柳筥やうの物より錢を取りて手に持ち出で、僧に贈る。僧受糧器にて受く。）

僧　爾時住唯識
離二取相故
無得不思議
是出世間智

（僧入る。鐘の音。）

母　おう。娘が門で云つたことは、どういふ心で云つたのやら。跡で思へば氣に掛かる。わたしもちよいと行つて見よう。（壁に懸けたる今一つの笠を取る。幕）

靜

人物

靜　伊豫前司義經の妾
紅の髻にて垂髪を上ぐ。白の練緯の小袖。紅綾の單。色色の菊を織りたる萩重の衣に、龍膽重の小袿を著く。壺折りたる體。赤地錦に紫緂の紐附きたる懸守。襪。市女笠を持つ。笠に朶の垂絹。

磯ノ禪師　靜が母
薄き垂髪を白き平髻にて上ぐ、白き小袖に香色の單。青紅葉の小袿。壺折。水晶の珠數。市女笠に薄青の垂絹。

安達新三郎清恒
一寸斑の烏帽子掛したる折烏帽子。片身替の小袖に、縹地に秋野を摺りたる直垂上下。赤木柄に銅金入れたる刀。

雜色三人
紺地に白く月を出したる扇。藺履。
折烏帽子。褐に白く引兩筋を附ける直垂。燧袋を附けたる黒造の刀。

漁師數人
折烏帽子、竹笠など。色色の手綱。四布袴に腰蓑。

怪しき漁師
茶筅髪に烏帽子無し。褐に目結の手綱。淺黄の四布袴。腰蓑。後腰に小刺刀に燧袋。

少女數人
髪は垂髪を紅薄様にて結べる、紅の髻にて上げたるなど。小袖は白、薄紅梅など。衣は櫨紅葉、萩など。

怪しき少女
紅の髻にて髪を上ぐ。白き練貫の小袖。濃色の袴。紫苑の衣。蘇方骨の透扇。

第一場

（文治二年閏七月二十九日）

由比の浦。前の方、波打際。見物より左手の空に夕照漁船一艘砂の上に引上げあり。舟に稍大なる苫。脱したる繧。舞臺中央奥まりたる處に松の木一本。漁師數人舟の周匝につどひゐる。怪しき漁師、群を離れて、ひとり松の木の幹に凭り掛かりゐる。骨格逞ましく、眼大いに、顴骨高く、頤方なり。幕開きたる時より終まで腕を組み、動かずにゐる。目は遠き處を凝視す。

漁師の會話

（會話は舟の周匝なる漁師共、誰と定まりたること無く、低く沈みたる調子にて言ふ。その間怪しき漁師は詞無し。）

○今日も好い天氣だつた。
○風が無い。
○波が無い。
○その癖漁が無い。
○もう幾日になるだらう。
○十日かなあ。
○なに、二十日あまりだ。
○いや、丁度一月になる。
○閏なんといふもののある年は直な事は無い。
○いやめでたい年だ。
○いや、惡い年だ。
○沖に出ても駄目だから、出ないが好い。
○又五郎丸といふ小舍人を摑まへて來たといふぢや無いか。
○なんになるものか。
○肝心の人は摑まりつこは無い。
○しつ。
（一同低く笑ふ。暫く默す。）
○綺麗な女だなあ。
○誰が。
○誰つて、知れた事よ。京から摑まへて來た白拍子よ。
○いつまで置くのだらう。
○分かるものか。
○お宮へ連れて行かれる處を見たが、綺麗な女だなあ。
○舞が上手だとよ。
○好い聲ださうだ。
○大鳥居まで聞えたさうだ。
○判官様の事を歌つたので、お上でお怒なさつたさうだ。
○燒けたのだ。
○しつ。
（一同又低く笑ふ。暫く默す。）
○もう餘つ程になるなあ。
○藤の花の咲いてゐた時だつた。
○いつまで留めて置くのだらう。
○分かるものか。
○風は無い。
○波も無い。
○出たつて漁が無いから駄目だ。
○いつまでこんな工合だらう。
○分かるものか。

(夕照消えて、舞臺急に暗くなる。右手より安達新三郎空色の産衣に包みたる赤子を抱きて出づ。雜色三人一人は太刀を持つ。背後に、火を點さざる松火を持てると、繩を持てるとの二人續けり。漁師等、詞なく左手に急ぎ入る。怪しき漁師は身を動かすこと無く、その目は依然遠き處を凝視す。安達は歩調急に左手に行き立ち留まり、漁師等の跡を見送る。雜色三人は舟の處に留まる。安達は歩調緩く舟の處に歸る。三人共怪しき漁師を見ること無し。安達、繩を持てる雜色を頤もて使ひ、聲低く。)

安達　そこらに手頃な石があらう。

(その雜色、松の水のあたりに行き、怪しき漁師とは異なる世界に住するものの如く、互に相見ること無く、石一つ拾ひて、兩手にて持ち、安達が前に返る。安達頤にて指圖して舟の傍に置かせ、聲低く。)

その石を縛れ。

(その雜色、石を繩にて十字に縛る。)

その石を舟に入れい。

(その雜色、兩手にて石を縛りたる繩の端を持ち、石を吊りて舟に入る。安達頤もて石を舟に入れし雜色と火を點さざる松火を持てる雜色とを使ひ、聲低く。)

この舟を水に卸せ。

(雜色の一人は松火を置き、二人にて舟を波打際より海に押し出だす。安達、松火を持ちたりし雜色を頤もて使ひ、聲低く。)

お前陸にをれ。

(安達、太刀を持てる雜色と繩を持ちたりし雜色とに頤にて指圖し、隨ひ來させ、赤子を抱きて舟に乘る。繩を持ちたりし雜色、艣を裝ふ。陸に殘れる雜色、燧にて火を切り、松火に火を移さんとす。)

怪しき漁師　(忽ち莊重なる語氣にて)　殺せ。右の手の邪魔になると云つて、左の手を切る。切つた左の手の力を右の手に添へようとする。右の手を大事にするが好い。右の手の指を大事にするが好い。己は左の手を惜みはせん。左の手の指を惜みはせん。忘れるなよ。己は左の手を惜みはせん。左の手の指を惜みはせん。

(艣の雜色、艣を裝ひ畢る。松火の雜色、燃ゆる松火を翳して立つ。松火の火怪しき漁師の顏を照す。安達は徐ろに赤子を舟の中に置く。艣を裝ひ畢りし雜色艣を掴みて身構す。)

殺せ。

(舞臺廻る。)

第二場

（文治二年九月十六日）

鎌倉の旅宿の座敷。季秋の朝。右手に駒形障子。その背後より左手に係りて手掛附襖。それより左は總て紙張の壁。舞臺の中央、壁の前に黒棚。その傍に雙陸盤。馬子を入れたる錦の袋を添ふ。黒棚の左手に軸臺と稱する龕めきたる物を据う。その前に根來塗の經机。机の上には火取香爐を中に、右樒を挿せる花瓶、左蒔繪の香盒。軸臺の左手、程好き處に柱。

磯ノ禪師旅姿にて、市女笠を膝の脇に置き、右手に倚りて据わり、低き曲物の火桶に手を翳しゐる。珠數を左の手首に掛く。少女數人、前に集へり。怪しき少女一人離れて左手の柱に凭り掛かり、据わりゐる。年は十五六。氣高き容貌。始より終まで身じろかず。その視線は一座のものの頭の上を越して空を視ゐる。

少女の會話

（會話は誰と定まりたること無く、優しく低き聲にてなす。磯ノ禪師は首を垂れゐる。怪しき少女は動かず默す。）

○　たうとう十六日になつたのね。

○　わたし、毎日指で勘定してゐたわ。

○　待つてたの。

○　あら。誰が待つもんですか。もう幾日あると云つて、勘定したのだわ。

○　厭になつてしまふ。

○　寂しくなるわ。

○　朝の内は寒いことね。（竦む）

○　わたし、赤ちやんがいつまでも生れなければ好いと思つたわ。

○　さうは行かないわ。

○　赤ちやんの事を言ひつこ無しよ。

○　おう。さうさう。

○　おう寒。（兩袖を掻き合す）

○　子供は寒がるものぢや無いつて。

○　子供ぢやあ無いわ。

（一同低く笑ふ。）

○　どうなすつたでせう。

○　氣分が惡いから、少し横になつてゐて、直つたら、お支度をすると仰やつたわ。

○　額を押へて入らつしやつたの。

○　お宮へ入らつしやる時もさうだつたわねえ。

○　あそこのお庭に藤の花が咲いてゐましたわ。

○　御堂へ入らつしやる時は、すぐにお支度が出來ましたわね。

○　雨が降つてゐたのね。

○梅雨だつたわ。
○大姫様はお好なのよ。
○似て入らつしやるわ。
○大姫様の下すつた物は、大事にして入らつしやることね。
○御息所の下すつたお召は、いつか解いて、人形にしろと云つて、わたし達に下すつたわね。
○ああ卯ノ花重のね。
○大姫様がお好で無いと好いわ。
○何故。
○戴けるから。
○慾張ねえ。
（一同低く笑ふ。）
○（龕の方を見て）佛様が無いのね。
○もうおしまひなすつたのだわ。
○わたし、香を焚いて上げたいわ。
○佛様が無いのに。
○有る積なの。（起ちて經机の前に行き、香盒より沈を取り出だし、香爐に焚く。一縷の烟立ち昇る。空しき龕に向ひて拜む。）
○わたしも拜むわ。
○わたしも拜むわ。

（一同空しき龕に向ひて拜む。）
磯ノ禪師　（徐かに首を擡ぐ）赤ちやんがさぞ喜びませう、今に姉さんが出て來てお暇乞をするでせう。皆さん、ちといつものやうに、雙陸でもしてお遊なさい。
少女の一人　ええ。
今一人　ええ。
（二人の少女起ちて、先づ馬子の袋を持ち出し、次に雙陸盤を竪に舞臺の眞中に据ゑ、二人左右に向き合ふ。他の少女等取り卷く。）
右の少女　（馬子の袋より馬子を取り出だし、盤の上に置き、筒を盤の左の方に寄せて置き、相手を見る）わたしが白よ。
左の少女　あら。何故。
右　此間爲たとき勝つたのですもの。
左　わたしも此間勝つたわ。
右　ぢや、兩拳。
左右　（同時に）じやあんけんぽん。
左　やつぱりわたしよ。
（左の少女、剪刀を出だす。右の少女、紙を出だす。）
右　惜らしいこと。

(二人馬子を分け、石飾をなす。左の少女、筒を取り上げ、釆を振りはじむ。龕の前なる香爐ゆるやかに烟を立てて、舞臺の上暫く釆を振る音と、馬子を打つ音とを聞く。磯ノ禪師は再び首を垂れて默す。怪しき少女身じろきせざること初の如し。折折少女一人起ちて、香をくべ添ふることあり。以下同じ。安達新三郎下手より出づ。雜色一人太刀を持ちて隨ふ。安達、顎もて雜色に指圖し、退場せしめ、怪しき少女の右前のあたりに立ち留まる。磯ノ禪師と安達と顏を見合せ思入あり。)

安達　はあ。もうお支度が出來ましたね。(輕きアイロニイの調子)　憎まれものが又來ましたよ。上の仰せだから致し方が無い。併し御心配には及びません。今日は只御出立の樣子を見屆けて來いといふことです。(座に著く)

(少女一二人居直る。雙陸を打つ少女二人は、ちよと見たのみにて、構はずに打ちゐる。他の少女は囁き合ひなどす。)

磯ノ禪師　(据わりたる儘にて、首を擡ぐ)　御苦勞樣でございます。お勤で遊ばした事を、お恨申しは致しません。

安達　さう仰やると、一層心苦しいのですよ。どうも役なぞをしてゐますと、進んでやるやうな事は少くて、爲方無しにするやうな事が多いものです。それを思へば、軍をしてゐる間は氣樂ですな。(間)併しあなた方も、やうやうの事で都へお歸になるやうになりましたから、とにかく御安心でせう。櫻の花の咲く頃から、菊が咲いてしまふまでは、隨分長い間ですから、上の仰せとは云ひながら、窮屈な思をして、こんな處にお出でなさつて、さぞお困りでしたらう。

磯ノ禪師　(珠數をつまぐる)　いいえ。どこにをりましても、同じ火宅の中でございます。窮屈な事はございません。

安達　靜さんはどうなさいました。

磯ノ禪師　先刻支度を致し掛けて、頭痛が致すと申しますので、少し休んでからに致せと申して置きました。それでも、もうこちらへ出て參る頃でございます。

右の少女　(喜ばしげに)　無地勝よ。

左の少女　あら　(間)　もうわたし厭だわ。

今一人の少女　そんならわたしが打つわ。

(これまでの少女と入り更はる。)

左手にゐる少女の一人　(右手駒形障子の背後を見込みて)　姉えさん。

その鄰の少女　あら。ほんとうにね。

(一同駒形障子の背後を見込む。盤に對したる二人はちよと見て、又雙陸を打つ。靜、右の手に釆の垂絹を垂れたる市女笠を持ち、徐かに駒形障子の背後より廻

り出づ。）

静　（安達と目を見合せ、思入あり。静は輕きアイロニイを帶びた諦念の態度。安達は、これもアイロニイを帶びたる、物馴れて機智ある侍の態度。静、磯ノ禪師に）おつ母さん。濟まなかつたのね。長い間待たせて。

（市女笠を傍に置き、火桶の向うに、正面を向きて据わる。）

磯ノ禪師　なんのお前。わたしは皆さんの遊ぶのを見てゐました。それは好いが安達樣が、わたし共が立つのを見屆けに、さつきから來て入らつしやるよ。

静　（安達に）　ほんに失禮を致しました。（輕く會釋す）まあ、重ね重ね色色なお世話になりますことね。

安達　いや、なんと云はれても爲方がありません。三月にお宿をしてから、もう半年餘りのお馴染です。（眞面目に、沁みたる調子）　わたしだつて、木や石ではありません。こなひだの晩のやうなお役を勤めたくは無い。いつその事、頭でも剃りこくつてしまはうかとも思ふのですが、さうした處でどうでせう。そりやあ、其時は氣分がさつぱりするでせう。痛快でせう。（静次第に注意して聞く）　併し坊主の生活なんといふものも、存外つまらないものではないでせうか。此間營中に召された西行法師は、月花に心を動かすことがあると、三十一字を作るばかりだと、云はれたさうですが、ありやあやつぱり歌が詠めるもんだから、それを性命にして渡つてゐるのですね。まあ、あんなのは好い。御門跡を擁立したり、寺領の高を爭つたり、加持や祈禱を商賣にして、手柄顏をするやうになつてはお話にならない。世を捨てた先に世がある。俗を逃れた先に俗があるのですね。つまらないぢやありませんか。

静　まあ、あなたなんぞも、そんな事を思つて入らつしやるの。（思入）

安達　意外ですか。

静　（正直に）　ええ。全く。

安達　さうでせう。都では探偵をする。鎌倉では首斬役をする。そんな人間の腹の中には、人間らしい考は無いと思つてお出でしたらう。

静　それをさうで無いと申しませんわ。ですけれど、ね、わたしを身勝手ばかし考へて、人樣の事を惡く思ふやうな女だと思つて入らつしやると、それは違つてゐますわ。あなたの仰やるやうに申せば、わたしの身の上はどうでせう。思ふお方には別れてしまふ。（間。愁の思入）そのお方が又世に出て入らつしやるといふことは、先づ覺束ないのでございますね。それに阿容阿容と生きながらへてゐますでせう。そしてこちらへ引かれて參つて、お

化粧をして、衣裳を著飾つて、舞を舞つたり、歌つたりしますでせう。それもまあ好いとして、女の子なら助けて遣る、男の子なら殺すと仰やつた。その赤さんが男の子で、それを殺されてしまつたのに、まだ阿容阿容とかうしてゐます。死んでしまひも致しません。尼法師にもなりません。人間らしい考が無いと云つて、人様を責めるには、それより先に自分で自分を責めなくてはなりますまい。まあ、さうしたものではございますすまいか。

安達　なる程。それはそんなものだ。併し、ね、静さん、その美しい黒髪をあなたが切らずにお置きなさるのも、そのつやつやした玉の肌に焼刃を當てずにお置きなさるのも、わたしなんぞの目から見れば、不思議な事は無いのです。わたしなんぞの心には、そのあなたの心持が好く分かつてゐるのです。（静微笑む）侍の意氣地では、切死をするも好い。腹を切つて死ぬるも好い。併し命を惜みさへしなければ、死なくても好いのです。それも再び世に出たい、身を立てたいと思ふのを目當にしてながらへてゐるのが好いと云ふのではありません。目當なんぞは無くても好い。一度火に當てれば、壊れてしまふ器もある。百年割れない器もある。喜怒哀樂の火の中を、大股に歩いて行く人もあつて好い筈です。男には限りません。女だつてさうぢやあありませんか。貴い玉は多くは出ない。優ぐれた人物も同じ事です。あなたなんぞが尼になつたり、自害をしたりしないのは、實に頼もしいと云ふものです。

静　（寂しき微笑）まあ。大變です事ね。それではあなたは、わたしの心の中の事を、わたしより好く御存じなのね。

磯ノ禪師　（珠數をつまぐる）安達様の仰やる事は、わたくしなどには分かりません。小さい時から孝行な娘でございます。わたくしがゐるうちは、静は自害も致しません。尼法師にもなりません。世を捨てるなんぞといふことは、年を取つてからの事でございませう。（間）大さう遅くなりました。静や。お前の氣分が好いやうなら、もうそろそろ行きませうね。（市女笠を取りて立ち上がる。盤に對する少女手を止む）

右の少女　もう入らつしやるの。

少女一同　入らつしやるの。

（静、笠を持ちて立つ。安達も次いで座を立つ。）

静　（少女等を見廻す）皆さん、今日は好く來て下すつたのね。いつかわたしの教へて上げた、あの吉野山の歌をお別にもう一度歌つて聞かせて下さいね。皆さん、お厭。

右の少女　歌ひますわ。さあ。

少女一同　（据わりたる儘にて歌ふ）

「よしの山
峰の白雪蹈み分けて
入りにし人の
跡ぞ戀しき」

（歌の間、靜親子と安達悄然として立ちゐる。歌の聲息む。）

怪しき少女（依然として柱に凭りて身じろきせず。忽ち透き徹る如く朗かなる聲にて）まだ足跡が消えませんのね。消えないうちは蹈んで入らつしやい。（間）足跡はいつか消えますのね。

（怪しき少女の聲には、誰も耳を借すもの無し。靜親子行き掛かる。幕。）

書添。吉野山の曲譜を作り給ひしことを南能衞君に、人物の裝束、舞臺の調度を考へ給ひしことを關保之助君に謝す。　著者

プルムウラ

上の巻

所
西印度信度國アロル　Alor.

時
西紀七百十二年六月十八日

役　名
信度國王妃ララア　Lalâ.
王の女、姉プルムウラ　Purumâla.
同　妹スルグ　Surug.
王の妹サチイ　Satî.
將軍ガハアミン　Galâmin.
老女サウリヂ　Sauridi.
亞剌伯亞國大將軍ムハメツト・ベン・カアシム　Muhammed-ben-Kâsim.
アロル市の總代五人
軍監
傳令
士官、侍女、兵卒等

アロルの宮殿。昧爽。燃え下りたる燭。
妃ララアに老女サウリヂ附き隨ひ、侍女許多取り卷きゐる。

老女　もう夜も明けて來たやうな。女中達。その燭火を下げられい。

第一の侍女　はい。（皆俛首きゐたるが、第二、第三の侍女と起ちて、燭火を消し、下手に持ち入る）

妃（老女に）　そち達が見て來たと云やる、廓の外に梟けたる首は、夜明けぬ程の事なれば、しかと上の御首とも極められぬやうなれど、もしながらへておはしなば、疾うに御歸遊ばす筈ぢや。誰ぞ此處へ歸つて來て、上御最期の御樣子を、詳しう知らせてくれたなら、敵に恥辱を受けぬ間に、妾もお供を致さうものを。四大の假に成せる身を、虛空に還さんあらましに、薪を積めと申したが、もうその支度は出來たかや。

老女　はい。その御支度は夜を籠めて致させましてござりまする。虧けず崩れぬ四妙の山、それに譬へしおん命を、縮めまつらんあらましの薪の山も丁度四つ。第一のみ山は、恐多くはござりますれど、お后樣のおんため、第二のみ山は、西の御殿におはします御妹君のため、第三、

第四の二つのみ山はおいたはしうはござりますれど、東の御殿の姫達お二人のためにしつらはせ、引火の料に清淨なおん膏をも整へさせ、總ての用意手落なう致させましてござりまする。敵縋み入ると見ますれば、妹君のおん許にも、姫君達のおん許にも、心利きたる女中をば、附け置きましてござりますれば、すぐ中庭へおん供致し、御最期はおん諸共に、雨期に先立つモンスウンの風の知せの朝雲を、韓紅に蘇迷路の山にはあらぬ死手の山、老いかがまりてもお供して、越えます覺悟でござりまする。

妃　おう。それで妾も安堵した。嶮しいシュドラに身を起した前の朝とは違ふゆゑ、祖父の御名を辱めぬ最期がしたいと氣は急けど、上の最期の御樣子を聞かずに死ぬるが口惜しい。

第二の侍女　（花道より出づ）　只今ガハアミン將軍がこれへお見えなさりまする。

將軍　（白髪の老武者。萎れたるさまにて花道より出づ）お后樣。それにおはしますか。

妃　おう、待ちかねた。して上の最期の御樣子は。

將軍　は。（間）そんなら上が御最期とは疾くに御承知でござりまするか。信度の岸を護らんと、世嗣の君のおん手に附き、出で立ちてより暇無く、この一とせは御機嫌をえ伺はずに過ぎました。惜むに餘るイスラムの軍を遠く西方に逐ひ斥けて若君とめでたき凱旋仕り、おん目見えをば致さうと存ぜしものを何事ぞ、かく見苦しくも打ち負けて、阿容阿容として參りしは、殘念至極にござりまする。

老女　御尤ではござりまするが、此程よりの軍のさま、上の御最期遊された樣子を早うおん聽にお入れなされて下さりませ。

將軍　言ふにや及ぶ。それを申し上げうとて、此體たらくで歸り申した。敵將ムハメット・ベン・カアシムは當年わづか二十一歲、乳の香の失せぬわかうどの姿貌は優しうして、心飽くまで猛き上、智略に富めるものなれば、侮り難しと聞き及び、東の岸へ初より敵の足を著けさせじと、足蹠焼くる暑き日も、車軸を流す雨の夜も、防禦に油斷あらざれば、流石の敵も攻めあぐみ、空しく月日を送るうち、糧道絶えて士卒病み、馬さへ多く斃りしが、此頃宰相ヒガアグの送りし千騎の新手を得て、敵軍の士氣又振ひ、カアシムこれを機會として、さいつ年よりイスラムに心寄すると聞えたる、所の民を驅り催し、進軍のため船橋を、信度の川に渡さんと、カアシム自ら岸に立ち、劍を拔いて指圖なし、身方の射る矢は繁けれど、一人仆るれば一人を進め、信度の波を血に染めて、遂に

橋をば掛け申した。かくて渡りし敵兵は、雨より繁き矢の下に、騒がず隊伍を整へて、身方に打つて掛り申した。身方もかねて期したるところ、沙上に屍を横ふとも、敵をアロルに寄せさせじと、命を棄てて防戦し、沙に眠り沙に醒むること十日十夜。身方も死傷多けれど、敵の死傷はこれに倍し、初め渡ししムハザル・ベン・サアビット・カイが二千の兵は、殆半に打ちなされ、續いて來るムハメット・ジジヤアト・アルハラが兵も、陣地を進むること出來ず、纔に渡河を掩護して、空しく三日を費し申した。敵も身方も待ち得たる、ラマダアンの月の十日、きのふが丁度決戰の日、敵は一萬六千人、身方はおほよそ四萬人。カアシムいかに猛くとも、只一押に押し破つて、腥き血を川水に流さんものと存せしに、口惜しい日に逢ひ申した。（間）昨日は大事の軍ゆゑ若君上の軍立をおん心に掛け給ひ、夜明くる頃に某を父君の御陣所へおん遣しなさりました。

妃　さては昨日の軍には、上の御許にゐやつたか。

將軍　仰の通でござりまする。某が參りしときは、南軍既に入り亂れ、アルラア、アルラアと叫ぶ敵の聲、天地を動す如くなるを、上には物ともし給はず、大象の背にハウダを置かせ、腰元を右左に侍らせ、左手にアレカの木實を持ち、右手に瑪瑙の杯を擧げてこなたを見遣り給ひ、わが軍をや見に參りし、勝利は今と覺ゆるぞ、汝も馬も疲れつらん、先づ酒にても參れよと、のたまふ詞も畢らぬに、一條の火箭飛び來つて、召されしハウダにはつしと立つ、垂れたる絹に火移れば、侍女達あなやとおどろく程に、象は怒つて身を旋し、身方の兵を蹈みしだき、まつしぐらに馳せ出し申した。この時身方の士卒等は事の不思議に恐をなし、打物棄てて狼狽す。某馬に鞭打つて、上のおん跡を追ふ程に、簇り來たる矢の一筋、おん項を貫き申した。追ひ來る敵の奴等を、おん傍に寄らせじと、馬より飛び降り揉み合ふ程に、あはひ次第に隔たりて、折しも夕闇野を褁み、進退ここに谷まり申した。（間）暫しの程は某もいかにせんかと存せしが、御殿の樣子心元無く、主を失ひさまよへる馬を捕へて打ち跨り、馳せ歸りましてござりまする。

妃　そんなら敵の梟けたのは、まことの上のみしるしぢや。此上は世の中に思ひ置くことは無い。最早間も無く敵兵がここに籠み入る事であらう。（老女に）かねがね申し付けたやうに、西東の御殿でも、それぞれ用意をしてゐやるか、早う見させに遣つてたもれ。

老女　はい。（女中等に）さやうならばお前方は、一人は西の御殿へ往き、一人は東の御殿へ往つて、御樣子を見て參られい。

第一、第三の侍女　（同時に）　はい。（上手、下手に分れて入る）

將軍　その御用意を承り、安堵致してござりまする。某は迂囘して間道より歸りしが、げに敵兵の籠み入るに、間も無い事でござりませう。承ればみ首を廓の外に梟けたとは、素速い事でござりまする。それにつけても機を見るに敏くおはする若君は、いづれへお引なされしやらん。（思入）　憚ながらお后樣、御妹君、姫君は遁れ給はん道無ければ、某これにて御先途をおん見屆け申しまする。

妃　あの、そんならゲシユヤの身の上には、昨日の軍に何事も無かつたやうに思やるかや。

將軍　しかとは知る由ござりませねど、イスカンデルの方などへ御引なされしともやと、憚りながら存じまする。

妃　おう。それを未來の樂に、妾はあの世へ往かうわいの。

（老女、女中等泣く。忽ち外にてアルラア、アルラアと叫ぶ聲聞ゆ。敵の第一の士官、兵卒大勢を率ゐて、下手よりばらばらと入り、無言にて妃以下を取り圍む。將軍無言にて身構す。）

敵將　（揚幕のうしろより）　待て、人人。某みづからそれへ參る。

第一の士官　は。

將軍　（殆同時に）　かく言ふ聲はまがひ無き敵の大將カアシムぢやな。

敵將　（花道より出づ。幕僚十八人ばかり隨ふ。カハアミン將軍に）　一年餘の對陣に、互に面を見知りたる、おん身はガハアミン將軍ぢやな。ひと時天の網を逃れし魚の跡をば追はずして、燒かれん花の木の下に、おん身はわざと殘りしか。

將軍　手に士卒無き老武者が又何事を申さうぞ。おん身がなさん殘虐をまのあたり見て死ぬる覺悟ぢや。

敵將　（妃に）　それにおん出でなさるのは、后ラアでおはするよ。おんいたはしう存ずれども、今より俘と思召されい。（妃詞無し）

第二の士官　（上手より兵卒に王の妹サチイと侍女等とを伴はせて出づ）　西の宮殿に居られました俘はこれでござりまする。この美しい姫君は、軍功に代へ某がおん申受いたしたい。

敵將　捕虜の處分を何人がいつおん身には任せたのぢや。軍監。

軍監　（幕僚の中より）　は。

敵將　上たるものの威權を犯した刑は。

軍監　斬首。

敵將　此士官を斬れ。

軍監　は。（詞を返さざる第二の士官を引いて下手に入る）

敵將 （王の妹に） おん身は誰でおはするぞ。

王の妹 （首を俯して向ひ立てり） 國王ダアヒルの妹サチイぢや。

敵將 （凝視） さてはおん身は我妻ぢや。（間）かく某が申せばとて、前の罪せしわからうどの、僭越無禮の詞とは、努一樣に御聞きあるな。事の仔細を明し申さう。后もそれにて御聞き下され。

（此時第三の士官兵卒に姉の姫ブルムウラ、妹の姫スルグ、侍女數人を伴はせて、下手より出で、敵將の氣色を伺ひ居る。）

某王の仰を受け、打ち立たんとしたるとき、夢中に天使あらはれて、怪しき事を告げ申した。汝婆羅門の國に到らんとき、汝が身を滅すもの、女子となりて近づくべし、それを妻にせば免れんと、申すと覺えて醒め申した。獲ものはアルラアと使者との物とは、神の教へしところなれば、宰相ヒガアグに仔細を告げ、敵國の王の眷屬にて、はじめて我に逢はん處女を、天使の告げし女子と定め、妻になすべきカリイフアの御許を受け申した。權利を失ふ俘たる、御身には問ひ申さぬ。自由の身たる王女サチイ、御承引下されうか。（王の妹思案するさまにて詞無し）

第四の士官 （花道より出づ） 市人の總代等が、願の筋ある由にて、只今これへ參りまする。（花道に向ひて）市人の總代。

（市人の總代五人、四十歳位より白髮になれるまで、被物無く跣足にて、花道より出づ。先に立てる一人、四十歳ばかりなるが首を擧げ居るのみにて、後なるは皆首を俯し居る。）

敵將 願とは何ぢや。

先なる總代 大將軍の部下の士卒、市中の寺院に亂入して、堂宇を毀ち、佛像を仆し、狼藉言語に絶しまする。どうぞお止下さりませ。

敵將 好いわ。寺院のあとにはメスギツトが立つわ。

先なる總代 托鉢に出る僧侶等を、兵卒達がはづかしめて、修行の邪魔になりまする。どうぞこれをも御威光で御止なされて下さりませ。

敵將 改宗すれば恥辱は受けぬわ。

先なる總代 まことの信仰無きものこそ、一宗を離れ他宗に入るも、衣を更ふるが如くならんが、婆羅門の徒も佛教徒も、さういふ譯には參りませぬ。かく申しまするわたくし等も、改宗などは致しませぬ。

軍監 （下手より出づ） 刑の施行を終りました。

敵將 （先なる總代を指さして軍監に） アロルの市でカアシムが命にさからふ最初の民ぢや。斬れ。

軍監 は。（先なる總代を引き立てんとす。先なる總代屈

する色無く、目を見張り居る）

第二の總代　（首を擧ぐ）　おん心には忤ひしが、多數に代りて申ししなれば、罪をお免し下さりませ。

總代一同　（第二の總代以下皆叩頭す）　どうぞお免下さりませ。

王の妹　おん身が國は遠ければ、アルラアの神の教をば、妾も知らん由無けれど、此國の教では、六の衢に輪廻する人の心はさまざまぢや。千年の昔此國にアショカと申す王ありしが、佛陀を信ずること深きに、婆羅門の徒はいふもさらなり、あらゆる異端の民を愛で、政道私無かりしかば、東マガタの都に居りて、信度の國のはてまでも、教化盛んに行はれ、國民德を慕ひしよし、おん身が神は殊なりとも、アショカの心を心として、國を治めたまひなば、信度の國民皆擧つて、おん身にまつろひ申すべし。市人達が請ふままに、許してお遣なさりませい。

敵將　（面を和ぐ）　ふむ。聞えたことわりぢや。一たび出した軍令は、ヂミシユクよりの命なりとも、止めがたきものなれど、王女サチイ、おん身が詞に從はう。軍監。その男を免せ。

軍監　は。（一歩退く）

敵將　（總代一同に）　宗門一切の事共は民の自由に任せ遣す。市民共に安堵させい。

第一の總代　寛仁至極のその御沙汰難有うござりまする。

總代一同　ありがたうござりまする。（總代一同花道を入る）

第三の士官　（進み出づ）　東の宮殿を見廻つて俘に致した王女ふたりを、これへお連れ申しました。

敵將　待て。（王の妹に）　おん身の願は納れたるが、わが願をばなんとせられる。（王の妹答へずして妃の方なる）

妃　（王の妹に）　おん身は妾を見遣り給へど、妾も心の定まらねば、おん身に諭さん詞には、ほとほと當惑致しまする。昨日の軍に討たれ給ひし、上のお迹をお慕ひ申し、おん身と共に荼毘の火に焚かれて果つる筈なりしに、時機をうしなひ、阿容阿容とかくながらへてあるのみか、おん身を敵にめあはする相談をさへするといふは、なんの因果であらうかと、おもへば妾はかなしいわいの。（間）これ程はかない身になつても、妾のこころの牽かるるは、討死せずに落ちたといふ、太子ゲシユヤが行くゑと、年ごろ上の惠ませ給ひし、蒼生の上ぢやぞや。妾が后に立てられし、十七歲の其昔、母の手づから賜はせしは、七つの寶をちりばめたる此匕首一つにて、いま戴ける此冠は上御手づから妾が頭におん加へなされたのぢや。ゲシユヤが武運盡きずして、いづれの城にか踏み留まり、

カクの朝の三世の王と名告るべき日があるならば、上のたばさん寳に代へて、この匕首をも取らせよう。このいただける冠は、縦ひしばしが程なりとも、慈悲忍辱を旨として、アロルの民に臨むべき、おん身、王女サチイならで誰にか傳へ申すべき。妾がこころを受け繼ぎて、事ふる神さへ異なりてふ、夫の内助を心掛け、情を民に掛けてたもれ。（冠を脱ぎて出す。王の妹ためらふ）
（此時まで姉の王女プルムウラは目を輝かして敵將の面を見たりしが、忽ち走り寄りて、冠に右手を掛く。妃冠を取り落す。冠の頂に嵌めありし珠、離れ落ちて碎く。）
（姉の王女に）はしたない。何事ぢや。おん身も最早十五歳、戯事で無いことは、分らいではならぬはず。心でも狂うたかや。
姉の王女　（やや暫く項垂れゐて、急に面を揚げ、熱心に）母上樣、この大將の妻になら、叔母上樣に代りましてわたくしがなりまする。
妃　なんといやる。（微笑む）大きうなつてもまだ子供ぢや。あの、そなたが夫にはの、（思入）廣い印度の國中で、すぐれて賢い、美しい、強い諸侯を擇んで遣ります。（間）嫁入といふものは、夫の方から貰ふのぢや。
（姉の王女項垂れゐる）

敵將　（落ちたる冠を拾ひ持ちて、王の妹に）これが后の我望を御許ありし證の冠。王女サチイ。さあ、我手から受けて下され。（王の妹ためらふ）
姉の王女　（王の妹を遮りて、敵將の前に立つ。敵將と面を見合せて、やや暫く無言）妾は王女プルムウラぢや。妾は美しうは無いのかや。
敵將　（氣色露やかになる）なんでおん身が美しう無からう美しい茨の蕾の花ぢや。どうやら刺もありさうなが、それとて茨の美しさを添へるばかりで、邪魔にならぬ。（妹の王女に）それなるは妹の王女か。ここへ、ここへ。（妹の女王おそるおそる姉の左に來て立つ）おん身の名は。
妹の王女　スルグと申しまする。
敵將　（微笑む）おう。おん身も好い子ぢや。（姉の王女に）おん身等二人の姫達をかう竝べて見てゐると、某も氣が晴晴する。さりながら某は、髪をも焦す日を浴びて、沓の裏焼く沙を踏み、夜は夜露を袂に承け、軍をするが身の務ぢや。デミシュクの王宮には、ハレムといふ園がある。おん身二人は、そこへ遣る。此冠は、（冠を取り直す）某が后の御手より受け繼ぎて、（王の妹に）おん身が頭に加へ申す。

王の妹　(思ひ定めたるさまにて跪き、頭に冠を受く)　珠は砕けしまながら。(起つ)

敵將　破れし國を治むるも、砕けし珠を償ふも、某が手の中にある。

姉の王女　(王の妹に)　叔母上樣。さき程からの御無禮はお許なされて下さりませ。

王の妹　おん身がさきの振舞は、仔細が無うてはかなはねど、妾も強ひて辭ますにかういふ縁を結ぶのは、思ふ仔細のある事ゆゑ、(妃を見る)　姉上樣もおん身等も、必ず案じて下さりますな。

妃　何事も國のため、民のためぢやと思ふわいの。さるにてもプルムウラは、仇の都へ往くとの事。又逢ふ事があらうやら。その上幼いスルグまで、一しよに遣らねばならぬとは、共に猛火に焚かるるにも增して悲しい事ぢやわいの。

(姉妹の王女、后の傍に寄る。后二人の肩に手を掛けて歎く。侍女等面を掩ひ伏す。)

敵將　后の歎は理ながら、西、西班牙の果までも威勢に服するカリイフアの賓人たらん姫宮なれば、何の疏略がござらうぞ。傳令。

傳令　(隨從の群より進み出づ)　は。

敵將　賓の長に取り置かせし、ダアヒル王の冠を、ヂミシユクに送るべき使はかねて命じ置きしが、王女二人を送らんため、更に二百騎の護衛を增し、定めし時刻に出發させい。

傳令　は。(花道を入る)

老女　(妃に)　老いかがまりて御用には立ち難き身なれども、心の知れた女中等をすぐつて妾が連れまして、そのヂミシユクの都とかへ、どうぞお供が出來ますやう、御申付下さりませ。(妃頷く)

將軍　(老女に)　サウリヂ殿。好う言はれた。老い朽ちたるは、某もおん身と同じ事なるが、自ら望んで敵國の俘となつて、蔭ながら姫君達の先途が見たい。(敵將に)なんと、此儀は許されまいか。

敵將　おう。ヂミシユクまでも名を馳せたる、ガハアミン將軍を、勝利のしるしに獻ぜんは、願うても無い幸ぢや。ワリド王の幕賓として恥かしからぬおん身を遣るに、何の異存がござらうぞ。(舞臺を見廻して聲高く)　王女二人の乘物に、兵車はふさはしからず。御殿の人人。御車の用意をせい。(老女、傍なる侍女にめくばせして立たんとす。道具變る)

下の巻

所

亞剌伯亞國ヂミシユク・エシユ・シヤアム
D'mischk esch-Schâm (Damascus.)

時

西紀七百十五年六月の半

役　名

信度國王女プルムウラ　Purumûla.
同妹スルグ　Surug.
將軍ガハアミン　Gahâmin.
老女サウリヂ　Sauridi.
亞剌伯亞國王スウレイマン　Suleimân.
大將軍ムハメツト・ベン・カアシム（死骸）
Muhammed-ben-Kâsim
侍臣
童子、侍女、仕丁等

ヂミシユク・エシユ・シヤアムの宮殿。大理石階。下手甃石の廣間。六月の午後晩く。

姉の王女プルムウラ象牙の牀に臥し居る。妹の王女スルグ立ち居る。

妹の王女　姉上様はけふも赤目をあいた儘夢を見てお出でなさると見えまする。（姉答へず）妾は今朝もサウリヂと、いつもの檸檬の林まで往つて見てまゐりました。香水にする料ぢやといふ花を集める女子等が澤山に出て居りました。

姉の王女　あの檸檬の木に花咲くも、今年でもはや三度になる。

妹　又過ぎ去つた事などを、お思出しなさりますな。（間）丘の上から見ますれば、消えかかつてゐたヘルモンの雪が再び降りました。女子達は古年の降りをさめぢやと申しまする。東の方を見まするど、今日は曇が無いゆゑに、地平線の沙原が赤く光つて見えまする。

姉　（思入）その沙原の先が故鄕ぢや。

妹　故鄕の事はわたくしも、思はぬことはござりませぬが、縱ひどれ程思うても、昔の世には歸りませぬ。母上様のお手紙では、兄上様がやうやうにお取り返し遊ばしたアロルの城は又落ちて、兄上様のお行方は分らぬさうでござりまする。歎の中の喜は、母上様が叔母君の所にお出でなさりまして、その叔母君はイスラムに宗旨を換へて夫に事へ、終始夫に說き勸めて、婆羅門教の國民をおんいたはらせなさるので、今將軍の陣所なるハダプラなどの市人は女神のやうに崇めるといふ事だけでござりまする。（間）ここへ參つた初めには、大勢后のあるといふあの恐ろしいワリド王が、姉上様をもお后にするといふ故悲しさに一人で泣いて居りましたが、姉上様が何事か王にお話なされてから、その後は何も申さずに、今年の

二月不思議にも卒に死んでしまひました。跡になほつたスウレイマンも、こはい人でござりますれど、又先代と同じ事を申し出しもいたしますまい。心配すれば果が無い。姉上樣もをりをりは外へでもお出でなさりまして、お氣をお霽しなさりませ。

姉　おん身がやうに外に出て氣が晴晴となるやうなら、姉も出ずにはゐぬわいの。スウレイマンは兄に似ず、面に慈悲を妝へど、笑の中にも刃ある、こはい人ゆゑいつまでも心を許し給ふなや。

老女　(下手より出づ) カリイフア樣が姫君の安否を伺ひまつらんと、これへおん出でなさりまする。

姉　用事があれば妹を呼んで傳へる習なるに、自らこれへ參るとは。(床を下りて立ち居り、下手を見る)

王　(侍臣一人を隨へ、下手より出づ。姉に) おん身の氣分優れぬ由は、妹君よりいつも聞けど、大醫に見せてたづぬれば、さしたる病は無いとの事ぢや。人に逢ふのを嫌はれると、サウリヂなぞも申すゆゑ、とかく遠慮を致してゐたが、今日は問ひたき事ありて、見舞かたがたこれへ參つた。

姉　あの、妾にお尋ねとは。

王　尋ねたいは外でも無い。兄ワリドが存生の日に、カアシム將軍が上に就き、おん身が密に申しゝと、去年みまかりしヒガアグが、予にも話したことがある。兄が位に在る間、寄重かりし人なる上、ヒガアグとても材能を深く信用したりしかば、信度の事は彼人の、思ふが儘になつたのぢや。予が見る所はこれと違ひ、事積次第に募り來る、かの將軍が事なれば、非法の行爲もあつたかと、疾うから思うて居つたのぢや。おん身が詞がまことなら、きつと罪を正したい。それに相違はござるまいな。

姉　(老女に) 妾が王に言ふことは、他聞を憚る仔細がある。暫しの間妹を連れて此場を避けてくりやれ。

老女　そんなら仰に從ひまして、お部屋へお連申しませう。スルグ樣。(妹の王女に會釋し、共に上手に入る)

王　(侍臣の方を見る) これは心の置かれぬものぢや。

姉　(初めたゆたひつつ、後熱心に) あの妹には繰返して聞かせたうない事ぢやゆゑ、わざと此場を立たせしが、妹とてもあの夜の事を、こはい夢でも見たやうに、覺えてゐるでござりませう。身方の軍敗北して、母上、叔母御と諸共に、妾達きやうだいも、焰の中に身を投げて死なうと思うてゐる處へ、敵の軍勢籠み入ると、腰元共が騷ぐ間も無く、優しい姿に似もやらぬ、無慙至極のカアシムは、東の御殿に入り來り、妾を捕へて無體の振舞。遮り留むる腰元等を、あたりへも寄せ附けず、妾はたうとう口惜しい辱を受けました。その汚らはしい妾が身を、

清浄無垢の處女ぢやと云うてこなたへ送つたのは、このオマイヤの王統をないがしろにした爲業かと、憚りながら思ひまする。

王　ふむ。それをおん身は兄に告げて、遺恨を霽す所存であつたか。

姉　仰までもござりませぬ。國をも家をも滅され、我身をさへに汚されたる恨は死んでも忘れませぬ。それのみならず、叔母なる人は、妾が受けた辱を日ごとに受けて居りまする。

（舞臺漸く暗くなる。侍女二人下手より燈を持ち出でて置き、上手に入る。童子一人燭を乗り下手より出で、王に侍す。）

王　おん身の心は善う分つた。宰相ヒガアグが庇はずば、今まで棄て置く筈では無かつた。王女。おん身の願は疾くに協うた。（侍臣に）信度より屆いた品を、これへと申せ。

侍臣　は。（花道に向ひて）人人。彼品を舁き入れい。

仕丁等の聲（揚幕の内にて）はあ。

（花道より仕丁二人松火を乗り、四人牛の生皮に縫ひ籠めたる品を吊臺に載せて舁き、信度の將軍がハアミン附き添ひ、廣間に出づ。四人は臺を据ゑ置き。花道に入る。）

王　（將軍に）今日信度より屆いたる、臺の上のその品は、王女への贈ものぢや。わざとおん身を煩はす。その生皮の縫目を解かれい。

將軍　腐を防ぐ生皮に、包んだ品は何物やら、茘枝、マンゴオなどならば、廚のものの手には掛けで、何故あつて某に、包を解けと仰せられるか。何はともあれ姫君への贈ものとあるからは、手づからほどいて御覧に入れう。

（小刀を取り出し、皮の縫目を解く。中より生けるが如きカアシム將軍の屍現る）や。これは人の屍ぢや。（松火を持つ仕丁左右より照す）やや。ムハメット・ベン・カアシムぢや。

姉　なに。カアシムが屍とな。（思入）

王　國のためには賊を誅し、（姉の王女に）おん身がためには讐を復した。（間）スウレイマンも今よりはお身のための恩人ぢや。（笑を帶び、姉の王女を見る）

姉　（氣色變りて王の前に立つ）笑止や、カリフイア。三歳の前にカアシムが、妾に對して無體を言ひ掛け、汚れた此身をおん身が兄に獻じたと云うたのは、跡形も無い僞ぢや。又と獲難い良將を、不便ながら殺させたは、國のため、家のため、重なる怨に報いたのぢや。

王　（怒る）は。さては少女と侮つて、欺かれたか。殘念至極。（間）さりながら、流石女子のはかない智慧ぢや、

や、世界の主たるカリイフアがカアシム一人を失うたとて、良將勇士に事は闕かぬ。無邪氣なる妹とかはり、病と稱して人目を厭ひ、年頃一間に蟄し居りしも、美しい姿に似ぬ險しい心のためであつたか。俘の女子の見せしめに、明日荒馬の尾筒に繋いで、ヂミシユクの市を引かせてくれる。（起ちて下手に入る。童子燭を秉りて隨ふ。姉の王女茫然と見送る）

侍臣（松火を持つ仕丁に）今宵は夜の警に殊更心を附けさせい。（ガハアミン將軍を尻目に見て、下手に入る。仕丁下手に入る）

將軍（石階を登り、王女の傍に寄る）手に打物が無うなつては、なんにも出來ぬ老武者は、申さう詞もござりませぬ。敵ながらカアシムは善い大將ではござりましたが、亡父君には當の仇。善う復讐をなさりました。（間）惡人なれども思慮あるカリイフア、世の聞えをも憚るべければ、前の詞を實にすべきか、測り知るべきならねども、姫君樣の御決心は。

姉の王女（我に返りたる如く）おう。ガハアミンか。おん身はまだゐやつたか、誠あるおん身が詞は、夢現の境に聞いた。おん身はどうぞながらへて、なんにも知らぬ妹の行末を見て遣つてたもれ。妾は馬に繋がれて、ヂミシユクの市を引かれうとも、身を八裂にせられうとも、少しも、厭ふ心は無い。（間）ワリド王に迫られて、ふと言ひ出した僞の種がいつしか實を結んで、復讐にはなつたれど、まことに淸い心たけで、爲遂げた事では無かつたわいの。（石階を下り、カアシムが屍に摸り寄り、薄明にて顏を覗く。幕

假面

人物

杉村茂　醫學博士
山口栞　文科大學生
金井夫人　文科大學教授の妻
遠藤徹　醫學士、杉村博士の助手
佐吉　植木屋
三太　同上
みよ　佐吉が妻
看護婦　二人
書生　二人
男女の患者大勢

駿河臺杉村博士宅の應接所。洋風木造の間。大卓に椅子數脚。卓の上に烟草筐、マッチ挿等。右手に戸ありて、博士の爲事部屋に通ず。左手に戸ありて、患者待合と診察所とに通す。二つの戸の間に窗。右手の戸に近き壁の前に長椅子。窗と左手の戸との間にあるカミン式の煖爐に火を焚きあり。爐のシエルフの上に置時計。花道を使はず。

幕開く。金井夫人長椅子に腰掛け、俯向き、物を案じゐる。束髮。吾嬬コオト。毛皮を取り附けたる襟卷。マッフ。白足袋に診察所用の赤緒の上草履。三十歲位。

暫くして左手の戸開き、看護婦登場。

看護婦　お待たせ申しました。先生が只今お目に掛かりますと、申上げて置けと仰やいました。

夫人　難有うございます。待合が一ぱいなのでございますから、御無理だとは存じましたが、是非一寸お目に掛からなければならない事がございますので。

看護婦　大學へ御出勤にならない日の午前は、いつもあの通でございます。ですから、據無い方には、御診察の合間にお逢になるのでございます。それでは暫く。

（看護婦左手の戸口より退場。夫人懷中時計を出して見、立ちて窗の外を覗きゐる。博士看護婦の入りしあとより登場。八字髭。鼻目金。黒洋服。年は四十八九。）

博士　いや、失禮をいたしました。

夫人　（會釋して）どういたしまして。まことに御無理な事を願ひまして。

博士　先日から山口君が見えますが。

夫人　實は其事で一寸伺ひましてございます。痰の御檢査が願つてございますさうで、今日も十時には御診察を願

ひに參ると申してをりましたが、どんな工合でございませうか、あんな風で、血色も宜しうございますし、いつもと少しも變つた樣子はございませんが、若し萬一結核ででもございましては、容易ならぬ事だと存じまするので、それを承りに參りましたのでございます。いかがでございませう。

博士　さやう。御免蒙つて一服します。（卓上の葉卷を一本取りて、兜兒より小刀を出し、徐に切る）まあ。お掛けなさいまし。（椅子を直す）

夫人　恐れ入ります。（腰を掛く）　栞は義理のある弟ではございますし、それに和歌山にをりまする母があればかりを便にいたして、暑中休暇に歸りますのを樂にいたしてゐるのでございますよ。昨日參りました手紙にも、近頃栞が一向手紙をよこさないが、どうかいたしたのでは無いかと、大さう心配いたして申して參りましたのでございます。當人は暮に旅行をいたした時、風を引いたのが長引くのだから、春になれば直ると申して、平氣で大學へも通つてゐるのでございますが、いやな咳をいたすのが、餘り長くなりますので、宅でも氣遣つてをりますのでございます。

博士　（葉卷に火を附け、椅子に掛く）　御尤です。單純な氣管支加答兒ではありません。

夫人　（目かがやく）　さやうでございますか。それでは。

博士　熱は少しもありませんし、大して御心配なさるには及びませんが、さうかと云つて、決して馬鹿にしてはならないのです。

夫人　結核ではございますまいか。

（右手の戸を叩く音。）

博士　おはいんなさい。

（看護婦戸を開けて登場。戸の内に立ち留まりて、博士の方を見、控へゐる。）

博士　（看護婦に）　もう新患は無いのでせう。

看護婦　さやうでございます。跡は再來ばかりでございます。

博士　そんなら遠藤君に、適宜に處置をしても好いと云つて下さい。

看護婦　はい。（看護婦退場）

博士　（夫人に）　失禮をしました。わたくしの處では、病名は言はない事にしてあるのですが、外の御婦人とは違ひますし、それに却て無益な御心配を掛けては濟みませんから、申すのです。實は。（夫人熱心に博士の氣色を覗ふ）　實は一昨年胸膜炎に罹られた跡が、本當に直つてゐないのです。癒著が殘つてゐるらしいのです。

夫人　さう仰やれば、いつでしたか、寒い日には胸の痛む

ことがあると申したことがございましたよ。それでは只今のも胸膜炎でございませうか。

博士　さやう。胸膜の方は、胸膜炎といふ程の事は無いのですが、氣管支の方が少し悪いのです。まあ、病名を附ければ、矢張慢性氣管支炎です。

夫人　それでは結核では無いのでございますね。

博士　さうです。併しあんな風なので、結核を續發することは隨分有るのですから、決して輕輕しく思つてはいけないのです。

夫人　さやうでございますか。好く分りました。實は宅で申しますのに、栗は神經の鋭敏な方だから、若し痰の御檢査をなすつて、結核にでも極まつたのを、當人にお話なすつた時、ひどく落膽(がつかり)いたすやうな事がありはすまいか。とにかく今日當人が診察を願ひに行く前に、様子を伺つて置くやうに、と申すのでございます。それで御無理とは存じながら、お忙しい中へ伺ひましたのでございます。栗も今年の暮には卒業いたすのでございますから、大さう忙(せは)しいやうには申してをりますが、體には代へられませんから、御意見次第では大學の方も休ませましても宜しうございます。それに養生のためを思つて見ますると、下宿に置きますのはいかがでございませう。栗は勉强するには下宿の方が好いとは申しますが、宅へでも參つてゐるやうにいたさうかと、存じまするのでございます。

博士　さうですなあ。卒業は一年位遲れても、さうなすつた方が好いかと思ひます。（間）どうもまだなかなか寒うございますな。（葉卷を灰皿に置き、炭斗(すみとり)の石炭を煖爐にくべ）

夫人　ほんたうに東京は隨分お寒い處でございます。母なんぞは、東京の冬には一ぺんで懲懲いたしたと申して、何と申しても出てまゐりませんのでございます。それに駒込は一層ひどいかと存じます。宅の庭なんぞは、今朝もまだ霜柱が一ぱいでございますよ。宅に寒いと申しますと、この位な事で寒がつては、伯林なんぞにはゐられないと申して笑ふのでございます。

博士　（窗の下に立つ）そりやあ伯林はもつと寒いのですとも。併し設備が違ふのです。外へ出れば、厚い外套を著る。内の中へはいれば煖爐がある。煖爐と云つても、こんな佛蘭西あたりで洒落に焚くやうなのとは違ひますからな。

夫人　（椅子より立つ）もうわたくしはお暇をいたしませう。お忙しい中を大さうお邪魔をいたしました。（マッフの置きある長椅子の方へ行かんとす。煖爐のシエルフの上の置時計十時を打つ）おや。もう十時になりました。

博士　山口君ももう見えるでせう。山口君は電車でせうから、御一しよと云ふわけには行きますまいが。お待なすつたつて好いでせう。

夫人　(立ちて卓に右手を突きゐる)　いいえ、わたくしも電車でございます。電車が出來ましてからは、もう寒くつて人力には乘れないのでございます。

博士　一體金井君なんぞも馬車にすると好いと、わたくしは云ふのですが、構はない流儀なのですからなあ。

夫人　爲ないのでは無くつて、出來ないのでございます。おれも醫學を遣れば好かつたなんぞと云つてゐるのでございます。

博士　ははは。そりやお醫者になつて見ないから分らないのです。わたくしなんぞは書物さへ見てゐれば好い人が羨ましくてならないのです。船の著く度に來る本が、(右手の戸を指さす)　あの部屋に一ぱい溜まつても、讀む暇が無いのです。

(左手の戸をたたく音。)

おはいんなさい。

學生山口栞　(左手の戸を開け入る。二十四五歳の好男子。敏捷なる態度。色白けれども、體格は强壯。大學の制服。襟にLの字の金章。大學の「コカルド」ある帽子を手に持つ。博士に挨拶せんとして姉の顏を見、驚く)　ねえさんぢやあ有りませんか。どうして先生の處に來てゐるんです。

博士　奥さんは君の事を心配して來られたのだ。

學生　(博士に)　いや、失敬しました。餘り意外だもんでしたから。

夫人　(學生に)　栞さんのやうな體格で、何のかのと云ふことはあるまいとは思つたんですけれど、痰の檢査が濟つてあるとおいひだから、樣子を伺ひに來ましたの。

學生　(夫人に)　ははは、あんまり御丁寧ですねえ。おほ方金井先生が例の用意周到で、ねえさんにいひ付けたのでせう。

夫人　ひどい事ねえ。それぢやあわたしは用意周到で無いやうに聞えるのねえ。

學生　さう云つたのぢやあ無いのです。(博士に)　いつでもあれですから。ねえさんは交際が下手だなんといふ癖に、なかなか口は達者なのです。

博士　(夫人に)　まあ、お掛けなさいまし。(學生に)　君もきやうだい喧嘩は、腰でも掛けてからにし給へ。

(主客三人卓を圍んで坐す。學生は帽子を卓の上に置く。)

學生　(博士に)　一體僕が一日に一度か二度か咳をしたつて、先生に見て貰ふなんといふ、贅澤をするんでは無いのですが、あまり金井先生とねえさんとで、やかましく

言ふので、已むを得ず願つたのです。

夫人　ついお心安いもんですから、何でも先生の處へ持つて參るのでございます。

博士　何でも持つてお出でなさるが好いのです。深く考へて見れば、醫者に見せなくても好いといふ病は、一つもあるものでは無いのです。（學生に）君のやうに咳が二月の間も出るのを、打遣つて置くなんといふのは、亂暴だからなあ。まあ、いろいろ話したい事があるから、少しゆつくりし給へ。

夫人（立つ）それではわたくしは、外に廻つて參りたい處もございますから、お暇をいたします。

博士　まあ好いぢやあ有りませんか。

夫人　子供に頼まれて參りました買物もございますし、午までに歸りませんと、都合が惡うございますから。

博士（立つ）さうですか。

夫人（學生に）それでは栞さんは萬事好く先生に伺つてお置きなさいよ。

學生　ええ。晩にねえさんの處へ往きます。

（夫人マッフを取りに長椅子の方に往かんとす。博士手早く取りて渡す。學生立つ。）

夫人（マッフを受け取る）恐れ入りました。さやうなら。（行き掛かりて振り返る）お隙もございますまいが、ちと駒込の方へ、お出でを願ひたうございます。

博士　いづれ近日伺ひます。

（夫人左手の戸を開け、退場。博士と學生と向き合ひて立ち、顏を見合せ、眞面目になる。）

學生　先生どうでせう。咳は實際二時間も三時間も丸で出ない時があるのです。併し夜左の方を下にして寢てゐると、ぷつぷつぷつぷつと云ふのです。丁度水のはいつてゐる小さい管を吹くやうな工合です。それが胸膜炎を遣つたとき、息をするとざらざらしたのとは違ふのです。

博士　うむ。そのぷつぷつと云ふ處が惡くなつてゐるのだ。其外どこも何ともありませんか。狹い間のやうだ。おれの云ふ通にしたたらうね。

學生　フランネルも遣つてゐます。藥はポッケットに入れて講堂へも持つて出て、正確に飮んでゐます。併し學校は休みません。

博士　どうもそれでは困るなあ。

學生（熱心に）併し、先生、僕はどうしても今度卒業しなければならないのです。

博士　まあ、腰でも掛け給へ。（腰を掛く。學生も掛く）君が氣管支を痛めてゐる前で、烟草を飮むのは、少し亂暴かも知れないが。（葉卷を一本取り小刀にて切り、火を附く）

學生　なに、學生控所の中なんぞは、いつも烟で眞つ暗です。

博士　それだからどうも學校に往くのは、君の體のために好くないといふのだよ。君のねえさんも休ませたいやうに言つてゐた。

學生　そりやあさう云ふでせう。誰でも人の事だとさう思ふのです。姉だつて内にゐれば金井先生のおつかさんに遠慮をしてゐて、外に出るのは、學校の教師の内へ賴みに行くとか、教科書や學校道具を買ひに行くとかいふやうな用を足しに出るばつかりです。あんなに音樂が好なのだから、今日の音樂學校の演奏會なんぞには往けば好いのです。金井先生の處へはいつも優待券が來るのですから。今日のプログラムにはChopinが三つもあります。僕は是非往く積です。

博士　往き給へ往き給へ。學校とは違つて、おれもそれには反對しないから。何でも體に惡い處のある時には精神を疲れさせないのが第一だからなあ。

學生　そりやあ僕にも分つてゐます。併し僕は和歌山の内の都合や何ぞを考へると、學校を休んでゐては、どの位煩悶しなけりやあならないか知れません。それよりか學科を遣つて行く方が、僕には迥に樂です。

博士　ふむ。大分心理上にむづかしい問題になつて來た。そんなら若し君が其儘學校を遣つてゐると、君の健康が維持せられない、君の性命に危險を及ぼすやうな事になつたら、どうする。君だつて大いに考へ直さなけりやあなるまい。

學生　（目かがやく）僕の病氣はそんなに重いのでせうか。先生、僕の胸に、若し異狀があつたのではありませんか。

（左手の戸の奥にて大勢の人の聲す。忽ち戸開き、助手遠藤徹入り來る。八字鬚。洋服の上に手術衣の如きリンネルの作業衣。三十歳位。）

助手　先生、危篤な患者が出來ましたから一寸。

博士　何の患者か。

助手　腹腔の内出血らしいのです。

（助手が開け置きたる戸の奥にて、「もうだめだ」、「死んだのだ」などと云ふ聲す。）

博士　どうしてそんな外科患者を連れて來たのだ。

助手　いいえ、邸へ木を植ゑに來てゐる植木屋です。唐人とか何とかいふ足場のやうなものの上から落ちて、生憎立石にぶつ附かつて、腹部を大分ひどく打つたらしいのです。

（看護婦戸の奥より登場。男女の患者二三人外より覗く。）

看護婦　（助手に）脈が大さう惡いやうでございますが。

助手　さうですか。
博士　待合に擔ぎ入れたのか。
助手　非常用の擔架に載せて待合に置いてあります。
博士　（立つ）患者の中に置いては行かん。診察所にも患者がゐるだらう。爲方が無い。ここへ入れ給へ。なるたけ動搖させないやうに。
看護婦　わたくしがさやう申しませう。
（看護婦退場。博士は烟草を灰皿に棄て、何か考へゐる。學生は立ちて戸の方を見る。直ちに植木屋佐吉を擔架に載せ、書生二人舁きて登場。擔架を應接所の卓の前に置く。佐吉は二十五六歳の强壯なる男。印半纏。目をねむり、大きく口を開きて、微に息をしてゐる。初の看護婦と第二の看護婦と附き添ひて登場。初の看護婦脈を取る。第二の看護婦診察箱を提げゐる。植木屋三太跡につきて登場。左手にしやがみゐる。同年位。印袢纏。男女の患者大勢戸口より押し合ひ覗く。四五人間の中に入る。）
博士　（學生に）君は失敬だが少しの間、（右手の戸を指さす）あそこへはいつてゐてくれ給へ。（一同に）みんな用の無いものは待合の方へ出て貰はう、看護婦は殘つてゐても好い。（三太に）お前もゐてくれい。
（學生右手の戸を開け、退場。書生、間の中に入りたる患者左手の戸口より退場。）
（助手に）戸を締めてくれ給へ。（助手左手の戸を閉づ。）
初の看護婦　脈が殆觸れないやうでございます。
助手　（博士に）最初から人事不省です。
博士　うむ。（靜に擔架の側に跪き、外して被ひある腹掛を除け、暫く視て、輕く按へ、極く輕く指にて打診す。助手引き添ひて跪く）とにかくカンフルを一筒。
（第二の看護婦診察箱より注射器を出してわたす。助手受取り、注射す。）
博士　（小聲にて）ラパロトミイの設備は無いし、餘所へ持つて往く餘裕も無い。
（腹掛を被ひ、靜に立つ。助手も立つ。）
第二の看護婦　（三太の顏を目守りゐる）目を開きました。
三太　（佐吉の頭の方に寄る）しつかりしろよ。
博士　（助手に）内は巣鴨だつたなあ。
助手　直ぐに電報が打たせてあります。
博士　好く氣が附いた。警察の方は。
助手　巡査が來ましたから、狀況を話しましたら、こちらの事だから、一應引き取る。用があるやうなら知せてくれろと云つて歸りました。
博士　さうか。

佐吉　おう、痛え。
博士　（近寄る）怪我が大分ひどいが、何か言つて置くことは無いか。
三太　（第二の看護婦に）水を遣つては行けないのでせうか。
博士　水は行かん。
三太　（涙聲になる）氣が附いたか、何か言つて置くことは無いか。（佐吉に）檀那の仰やるのが聞えるか。言ふことがあるなら、おいらに言ひねえ。
佐吉　なんにも言ふこたねえ。（間）おみよは。
三太　おみよさんは。
佐吉　若いから。
三太　若いから。
佐吉　どうでもならう。（間）ああ、苦しい。
（一同暫く無言。置時計十一時を打つ。左手の戸の外に大勢のささやく聲微に聞ゆ。）
初の看護婦　呼吸が止まりました。
（助手默りて跪き、腹掛を除け、右の耳を胸に押し附け、暫くして腹掛を被ひ、立つ。助手と博士と無言にて顔を見合す。）
三太　（手拭にて目を拭く。涙聲）もう行けないのでございませうか。

助手　うむ。行けない。（看護婦等に）診察所に毛布があるから、持つて來て掛けて遣つて下さい。
（看護婦二人頷きて立ち、左手の戸を開け、退場。）
警察に言つて遣らねばなりますまい。死體檢案はこちらでいたして遣りませう。
博士　うむ。然るべく遣つてくれ給へ。御苦勞でした。それから御苦勞ついでに、待たせてある患者を。
助手　宜しうございます。（三太に）お前も來い。
（助手、三太左手の戸を開け、退場。入り違ひて初の看護婦白毛布を持ちて登場。佐吉の死體に被ふ、博士椅子に腰を掛け、手を叉きゐる。）
初の看護婦　何も御用は。
博士　無いから、あつちの患者の方を遣つて下さい。
初の看護婦　はい。
（初の看護婦左手の戸より退場。博士靜に立ちて右手の戸をたたく。學生向うより戸を開け、登場。色蒼ざめ、容貌變りある。博士に顔を背け、擔架の傍に歩み寄り、毛布を被へる屍を見てゐる。博士立ちて、目を放さず學生の擧動を見る。）
博士　山口君。
學生　（夢を呼び醒されたる如き樣子にて、博士の方に向き、首を垂る。）ええ。（間）僕はもうお暇をします

博士　ふむ。(間)　君はおれの手控を見たね。

學生　濟みません。つい机の上に開けてあつたものだから、見ました。羅馬字で大きく書いてあるのが僕の名だもんですから、見ようとも何とも思はずに見たのです。Befund positiv。(激したる調子)　先生。わたくしは結核ですね。(間。兩手を顏に當つ)　ああ。(間)　僕だつて先生に卑怯な態度は見せたくはありません。もしやそんな事では無いかといふ疑は、度度僕の心頭に起つたのです。併しいつも、まさかそんな事はあるまいと打消してしまひました。それには先生の、(間)　かう云つては失敬ですが、氣休のお詞も與つて力があつたのです。打明けて申しますが、わたくしの頭の中は丸で Chaos の狀態に陷つてしまつて、なんにも明白に考へることが出來ません。先生は定めてわたくしに慰藉の詞を掛けて下さるのでせう。併しそれを承つたところで、とてもわたくしの今の頭には何等の反響をも起すことは出來ないでせう。(又兩手にて顏を掩ふ)　ああ。(博士に顏を背けて書架を見る)　死を遂げるなら、一刹那に遂げるのが一番幸福でせう。先生は、惡くなつてゐる處は狹い間だと仰やつた。それが段段に廣がつて、一方の肺を破壞してしまひ、更に進んで他の一方の肺を破壞してしまはねば、死なれないのでせう。それには少くも一年は掛かりませう。一年は十二箇月あります。一箇月は三十日あります、一日は二十四時間あります。その一時間が又分に分れ、秒に分れてゐるのです。その一秒毎に一滴宛の毒を注入せられるわたくしの心が、これからどれ程の毒を受けねばならないでせうか。わたくしは其苦痛を想像して見ることが出來ません。(間)　いや、實に未練な事を言つて濟みません。僕は先生に對して恥ぢ入ります。もうお暇をいたします。とにかく僕は、僕の意識が此新事業に慣れるまで一人でゐたいのです。(卓の上の帽を取り、博士に會釋して、左手の戸に歩み寄る)

博士　(始終瞼をも動さずして、學生の擧動を見ゐたるが、此時聲高く)　山口君。(學生振り返る)　待ち給へ、君のその不安の狀態を直ぐに直してあげるから。

(學生は一歩戻り、帽を持ちたる儘立ちゐる。)

君は慰藉の詞が聞きたく無いと云つた。尤だ。訴へる戀を卻けて道德を說いたり、困窮を告げるものに金を遣らずに、慈善事業が不可能だといふ Paulsen まがひの講釋をする程うつけたおれでは無い。(間)　饒舌はしない。君に見せるものがある。まあ、其帽を置いて、そこへ腰を掛け給へ。

(學生腰を掛け、俯向く。博士靜に右手の戸を開け入り、暫くして顯微鏡標本を入れたる疊と顯微鏡寫眞一

枚とを持ち出で、卓の上に置き、再び入りて顯微鏡一臺を持ち出で、見物に背を向けて、擔架と卓との間に立ち、顯微鏡を窗に向けて据ゑ、鼻目金を振落し、油浸装置を調へ、疊を引き寄せ、中より厚紙製の標本挾を四五枚出し、一枚を選り分け、それより標本を一つ取り、顯微鏡に掛け度を合せ置き、寫眞をその側に置き、學生に。）

これを見てくれ給へ。

學生（不精不精に）はあ。（立ちて博士と入り代る）

博士　先にその寫眞と標本に張つてある札紙とを見給へ寫眞には千八百九十二年十月二十四日の日附がある。標本には昨日の日附がある。（學生寫眞と標本札紙とを見る）それから標本を見給へ。（學生顯微鏡を覗く）細菌が見えるだらう。その絲を刻んでばら蒔いたやうなのが結核菌だ。青い地に菌が赤く出てゐる。Ziehl Neelsen の法といふので、今は大抵これで染める。（學生兩方を見競ぶ。博士の語調重く緩になる）君に祕密を言つて聞かせよう。（學生顯微鏡を離れ、博士と向き合ひに立ち、耳を欹つ）君はその寫眞の結核菌が誰のだと思ふ。（間）そりやあおれのだ。

學生（驚く）そんなら先生も結核ですか。

博士　いいや、君も見るとほり、おれは健康だ。併し結核であつたことがあるのだ。

學生　それでは先生は結核をお直しになつたのですか。

博士　うむ。まあ、聞き給へ。あの寫眞に書いてある千八百九十二年十月二十四日といふのは、僕に取つては重大の記念日の一つだ。洋行して歸つて間も無い頃なのだ。その頃折折風を引いて痰が出ることはあつたが、氣にも留めなかつた所が、十月二十四日が月曜日で、二時間續けて講義をして、控所へ歸ると、何だか溫い玉が氣管を上へ向けて升つて來るやうな心持がするのだ。そこに顯微鏡に使ふ硝子の皿があつたから、その中へ吐いて見た。すると、君、拇指の頭程の血の塊なのだ。おれも心中隨分驚いたよ。とにかく、健康な肺から血が出るといふことは、絶對的に無いのだからなあ。（間）それからおれは其血を檢査して見ようと思つたが、どうもそれが人に知らせたくないのだ。なんだか自分の運命は自分で掌握してゐたいといふやうな心持がしたのだ。ところが教授仲間が話しに來たり、學生が質問に來たりして、どうしても隙が無い。やつと十一月の三日になつて、それまで乾かないやうにして、錠前の掛かる處にしまつて置いた血を取り出して染めた。其晩は樂なやうな、恐ろしいやうな心持がした。さて翌日出て顯微鏡に掛けて見ると、立派に染まつてゐた。それがあの寫眞なのだ。（語氣を

強む）　おれの其時が丁度君の今日なのだ。君はおれがそれからどうしたと思ふ。（低く）　まあ。腰を掛けて聞き給へ。（學生腰を掛く。博士も腰を掛け、學生の顏を屹度見て、語氣を強む）　おれは十七年の間、今日君に言ふまで、誰にも言つた事は無いのだ。（緩に）　おれの沈默がいかなる Motive から出てゐるか。それは君の判斷に任す。利己主義かも知れない。そんならおれは極て冷酷な人間だらう。そんならそれを何故君に話すか。話すのは馬鹿なのかも知れない。（學生は次第に感動する樣子にて目かがやく。同時に多少博士を疑ふため、謎を解かんとする如く、博士の顏を見いる）　君は Nietzsche を讀んだか。

學生　金井先生の講義に刺戟せられて Jenseits von Gut und Böse だけは讀んで見ました。

博士　さうか。あの中にも假面といふことが度度云つてある。善とは家畜の群のやうな人間と去就を同じうする道に過ぎない。それを破らうとするのは惡だ。善惡は問ふべきでは無い。家畜の群の凡俗を離れて、意志を強くして、貴族的に、高尚に、寂しい、高い處に身を置きたいといふのだ。その高尚な人物は假面を被つてゐる。假面を尊敬せねばならない。どうだ。君はおれの假面を尊敬するか。

學生　（意氣軒昂の態度）　先生。分りました。僕も人には結核のけの字も言ひますまい。實は僕の煩悶は僕自身のための煩悶では無いのです。和歌山の母が此事を聞いたら、どんなにか歎くだらうと思ふと、目が昏むやうな心持がしてならなかつたのです。誰にも言はない事は母にも言はない。その代、先生、僕が學校に往くのを留めはなさりますまいね。

博士　（顏に微笑の影ほのめく）　うむ。留めない。（間）醫者としてのおれなら、君に學校も止めさせねばならない。轉地もさせねばならない。併しそれは家畜の群を治療する時の事だ。君に君の爲るが儘の事をさせて置いて、おれは、おれの知識の限を盡して、君の病氣が周圍に危險を及ぼさないやうにして、（間）　そして君の病氣を直して遣る。おれは君と共に善惡の彼岸に立つて、君に盡して遣る。

學生　僕は心から先生に感謝します。僕には父が無いとは今日から云ひません。（間）　併し、（稍心配らしく）先生、笑つては行けません。結核の直るといふのは、非常な破格ではありませんか。

博士　Nigeli は殆あらゆる死體に、結核の古い痕を認めないことは無いと報告してゐる。

（左手の戸をたたく音。）

おはひんなさい。

（初の看護婦戸を開けて登場。戸を閉ぢずに置く。）

初の看護婦　（背後を顧みて博士に）　巣鴨から植木屋の上さんが參りました。

博士　ふむ。（立つ。學生も立つ）

初の看護婦　お上さん。

みよ　（戸口の奥より）　はい。

（佐吉の妻みよ登場。銀杏返。半襟を掛けたる新しい銘撰の綿入。同じく半襟を掛けたる新しき半纏。餘所行の前掛。白足袋に赤緒の上草履。十八九歳の美人。目の縁を赤くしてゐれど涙は翻さず。）

（博士に）　どうも飛んだお世話さまになりまして。

博士　實に氣の毒な事をしました。手當が屆かない容態で。

みよ　どういたしまして。怪我をいたして亡くなりましても、お邸で亡くなりましたのでございますから、少しも心殘はございません。（擔架を見て、看護婦に）　あれでございますか。

（看護婦頷き、先に立ちて擔架の頭の方へ連れ行き、跪き、手布を顏だけ見ゆるやうに折り返す。みよ跪く。）

どうもお手厚くいたして戴きまして。

（みよ死骸の顏を暫く見て、襦袢の袖にてそと目を拭く。博士と學生と目を放たず女の樣子を見てゐる。博士兜兒（かくし）より札入（さついれ）を出し、卓の上に置き、又兜兒より半紙の折りたるを出し、札入の中の十圓札を數枚半紙に包み、鉛筆にて何か書き、卓の上に置く。みよ毛布を被ひ、靜に立つ。看護婦も立つ。みよ博士に。）

あの、お邸へ一しよに參つてをりました三太さんに手傳つて貰ひまして、引き取つて參りたうございます。只今あちらにお出での先生に伺ひましたが、警察の方は濟みましたさうでございますから。

博士　はあ、さうですか。（紙包を取る）　これは、お上さん、失禮だが、ほんのわたしの志だから、何か佛に供へて下さい。

みよ　（稍猶豫（たゆた）ひつつ）　さやうでございますか。お斷申上げては、卻つて失禮でございませう。（受取る）　そんなら戴いて參ります。（帶に挾み、會釋し、戸口へ往きさうにす）

初の看護婦　（みよに）　わたしが行つて來ませう。車も備つてある筈です。

みよ　それではまことに恐れ入りますが。

（看護婦戸口より退場。直ちに三太と書生一人とを連れ來る。二人擔架を舁ぎ戸口より退場。みよ博士に。）

重重（かさねがさね）お世話さまになりまして。

（博士、學生、看護婦に一一會釋して、擔架の後に附

き、退場。）

博士　（看護婦に）馬車を誂へるやうに言つて下さい。

初の看護婦　はい。

（看護婦退場。左手の戸の外漸くひつそりとなる。）

博士　（學生に）どうだ、君、あの女の態度は。（間）本能的人物には、確に高尚な人物に似た處があるなあ。家畜の群の貴婦人に、あの場合もあの位に切り拔けて行けるものは、たんとあるまい。

學生　さうです。僕も敬服しました。

博士　君なんぞも病氣が直つて細君を持つ時には、餘程考ふべしだ。

學生　まさか本能的人物と結婚するわけには行きますまい。

博士　無論の事さ。（間）おれなんぞは病氣を發見したのが、十七年前の十月で、十二月からはいくら檢査してもNegativ（ネガチイフ）だつたが、もう少し、もう少しと思つてゐる中に、ついつい無妻で通すやうになつてしまつた。併しおれの要求するやうな超人の母の無いのも一原因さ。金井君夫婦なんぞには、戀人だといふので、大いに冷かされてゐるよ。はははは。

學生　其事は姉が僕にも、不思議だ不思議だと云つてゐるのです。

博士　そりやあ假面が分らないから、其苦さ。（間）それとも。（學生の顏を鋭く視る）君はおれの結核の歷史も一の卽興詩で、其意味での假面だと思つてゐるのぢやあ無いか。どうだい。

學生　（少し考へて）そりやあ、先生、どの意味の假面でも、僕の感謝の情に厚薄はありません。

博士　ふむ。旨い事を言ふなあ。（間）これから君と一しよに精養軒へ往つて飯を食つて、それからChopin（ショパン）を聽かう。君、いやとは云ふまいなあ。

學生　ええ。參りますとも。

（左手の戸を叩く音。）

博士　おはひんなさい。

（前に擔架を舁きて出でし書生登場。）

書生　馬車が出來ました。

博士　うむ。

（書生退場。學生に。）

一寸待つてくれ給へ。

（右手の戸を開け、退場。直に外套を著、帽を被り、手套とステツキとを持ちて出で、長椅子にステツキを立て掛け、卓の上に手套を置き、顯微鏡の筒を螺旋にて上げ、鞣革（なめしがは）にて油浸裝置の油を拭ひ、手套を持ち、ステツキを持つ。此間に學生は卓の上の帽を手に持つ。）

さあ。

（左手の戸の方に歩む。學生帽を持ちたる儘跡に附く。號砲鳴る。置時計十二時を打つ。博士と學生と立ち留まる。學生は帽を左の腋に挾み、二人共兜兒より時計を出し、龍頭を卷く。幕）

曾我兄弟（四幕）

登場人物

征夷大將軍頼朝　四十七歳
犬房丸　九歳
曾我五郎時致　二十歳
狩野介宗茂
御所五郎丸
吉備津宮宮司大藤内成景
丹三郎
手越の少將
工藤左衛門尉祐經　三十八歳
曾我十郎祐成　二十二歳
仁田四郎忠常
新開荒二郎忠氏
大見小平太實政
鬼王
石田次郎
黄瀬川の龜鶴
伊出の農家の主人
大名數人
舍人二人
夜廻の卒二人
同　妻
近臣二人
雜色一人

場所

富士山西麓伊出の狩場

時代

建長四年五月二十八日二十九日

曾我兄弟宗族圖

- 高祖父（祐隆）—曾祖父（祐家）—祖父（祐親）—父（祐泰）—己身（祐成、時致）
- 高祖父（祐隆）—族曾祖父（祐繼）—族祖父（祐經）—族父（祐時　小字犬房）

工藤祐經宗族圖

- 祖父（祐隆）—伯父（祐家）—從父兄（祐親）—從父兄子（祐泰）—從父兄孫（祐成、時致）
- 祖父（祐隆）—父（祐繼）—己身（祐經）—子（祐時）

第一幕

工藤の假屋

工藤左衛門尉祐經、吉備津宮宮司大藤内、手越の少將、黄瀬川の龜鶴、犬房丸登場しあり。酒宴。

大藤内　左衛門殿。なぜ輿をば催されぬ。此度御身の先容で、本領安堵いたした祝に、下國いたす途中から引き返し、それにをる遊君二人を、連れてわざわざ參つたのは、淺からぬ某が志ぢや。（少將に）こりや、少將。主人に今一獻まゐらせい。

少將　宮司樣があのやうに仰やります。さあ、今一つお上がりなさりませ。

（少將杯を侑む、工藤受く、犬房酌をなす。）

工藤　いや、某は不興では無い。（飲む）不興な筈が無いでは無いか。

大藤内　いかにも仰せられる通ぢや。御覺すぐれてめでたく、言へば必ず聽かれる御身ぢや。不興であらう筈は無いが、それにどうも浮浮なさらぬ。

工藤　（強ひて笑ふ）それはさう見えるばかりぢや。五月雨のいぶせさが、少しは手傳ふのかも知れぬ。

少將　その五月雨が降ればこそ、けふのお狩が止になつて、晝のうちからお酒盛のお相手が出來まする。

龜鶴　さき程お縁側に出て見ましたら、雨はもう上がつてをります。降つたのでお狩は止み、止んだ跡で晴れるとは、好い都合ではござりませぬか。

大藤内　龜鶴が云ふ通りぢや。其空の晴れたやうに、主人の氣分も晴れれば好いが。

（石田次郎登場。）

石田　只今曾我の十郎殿が、大幕の内から、こなたを見入つて通られました。

工藤　なに、十郎が通つたと申すか。遠くは行くまい。呼うでまゐれ。

石田　はあ。（退場）

大藤内　曾我の十郎と申すは、奥野の狩の歸るさに、流矢に中つて落命した河津が子ではござらぬか。聞けば彼等の一族は、其頃から御身を疑ひ、中にも曾我の孤等は御身を敵と狙ふさうぢや。必ず油斷せられるな。

工藤　それは疾くに心得をる。さばかりの小冠者、何程の事がござらう。

（曾我十郎祐成登場。）

十郎　某は曾我の十郎祐成でござる。落魄不遇の身を恥ぢて、御遠慮いたいてをつたのに、なぜお呼入れなさりました。

工藤　十郎殿か。市に虎ある譬の如く、世の諺言に隔てられ、打ち絶えてはゐ申したが、始終餘所には思はぬ和殿ぢや。さあ、介意無く近う近う。
十郎　然らば御免下されい。（進む）
大藤内　某は備中の國吉備津宮の宮司大藤内成景と申すもの。以後御見識置下されい。
（十郎會釋す。）
工藤　（犬房丸を顧みて）これが嫡子犬房丸でござる。
十郎　さては犬房殿とは御身であつたか。御身の年は。
犬房　九つでござります。
十郎　御年よりは遙にねびてお見えなさる。末頼もしう存ずる。
工藤　少將。杯を持て。
少將　はあ。
（少將杯を侑む、太鼓の音、十郎氣色ばむ。）
工藤　屋形で奏づる散樂の太鼓ぢや。（飲む）十郎殿、さし申すぞ。
（十郎杯を受け、飲む。）
それを犬房に賜はりたい。
（十郎犬房にさす、犬房飲み、十郎に返す、十郎工藤に返す、工藤受く。）
いや、十郎殿。某と和殿とは本と一門のわかれぢやに、かく疎遠に打ち過ぐるは、不本意至極の事でござる。誠やらん、和殿達同胞は某を父の敵と云はれるとか。現に祖父工藤の太夫祐隆は伊東、河津、宇佐美三箇の莊を領したもので、先祖の墓ある伊東の莊は、父二郎祐繼が譲り受けた。其祐繼がみまかる時、和殿には祖父某には從父兄に當る、河津の二郎祐親殿に後見を頼うだ。然るに祐親殿は某に一箇莊をも渡されなんだ。されば遺恨が無いとは申されぬが、瓜葛のよしみ深きが上に、後見をさへいたいてくれた、祐親殿の一族になんで某が弓を引かう。然れば、

伊豆の奥野の狩競に
家路をいそぐ木下闇、
父祐親に先だちて
馬を打たせし祐泰が、
椎の木立の間より
飛び來る征箭に中りしは、
思はぬ仇に討たれしか、
さらずば尾越の矢なりしか、

當時六波羅にをつた某が、全く與り知らぬ事。世間で彼此申すのは誣言と申すものぢや。以後はどうぞ御不審無く申し承りたうござる。
大藤内　これは左衛門殿の申される通ぢや。以後は入懇に

なさるが好い。異姓他人の某すら、こなたへ頼めば立ちどころに所領を安堵いたいてござる。

十郎　御親切なる主人の仰、又宮司殿のお詞委細承り申した。弟五郎時致にも心得違の無いやうに、きつと申し聞けるでござらう。

工藤　いや。酒興の上の長物語、詞の失もござつたらう。さあ、今一獻まゐられい。

（杯を十郎に侑む、十郎遲遲す。）

なぜまゐらぬ。はあ。これは肴の御所望と存ずる。少將歌へ。

少將

誇らしかりし綾藺笠
落ちにけり落ちにけり、
河つ瀬に、瀬の中に。
それを求むと、尋ぬとせし程に、
明けにけり、明けにけり、
はかなき夏のみじか夜は。

大藤内　や。出來いた、出來いた。

十郎（飲む）　此儘御殿居仕りたうはござるが、いささか所用も候へば、これにてお暇いたすでござらう。

工藤　それは餘り殘多いが、所用とあれば是非に及ばぬ。それ、犬房。お見送申せ。

犬房　はあ。

（十郎、犬房丸退場。）

大藤内　些と密密に申し入れたい儀がござるが。

工藤　こりや女子共暫く遠慮いたいてくれい。

少將　そんならあちらへまゐりませう。さあ、ござんせ。

（少將、龜鶴退場。）

工藤　さあ、何事かは存せぬが、御隔意無く申されい。

大藤内　別儀ではござらぬが、曾我の十郎と申すは、さてさて面魂の逞しい男ぢや。まこと御身の敵でござるか。

工藤　勿論の事ぢや。彼等が祖父が祐親と申す大不心得者がござつて、某がまだ金石と申した頃、所領悉く横領いたいた。それゆゑ某に頼まれて大見、八幡と申す二人のものが、奥野の狩の歸路に、赤澤の雜木林で、彼等が祖父と生の父とを射殺さうといたいたが、祖父は左手を射られてながらへ、父祐泰は馬の鞍の後輪から前輪まで、射貫いた一矢に痛手を負ひ、落命いたいたこと決定ぢや。

大藤内　さもござらう。酒宴の席にさぶらひながら、杯を一目、刀を一目、又御身の顏を一目見て、物を案ずる樣子でござつた。御用心に若くはござらぬ。今宵は臥所をお換なされい。

（雨の音、時鳥の聲、龜鶴奥の戸を細目に開き、覗ふ。）

工藤　しつ。

（絲鶴戸を閉づ。）

さ程の事もござるまいが、折角の御存寄ぢや。所を換へて賓客たる和殿の心を安んじ申さう。

第二幕

伊出の農家。

曾我の從者鬼王、農家の主人、同妻登場しあり。妻は赤子を抱けり。

妻　ほんに物分かりの悪い人達ぢや。内のが人が好うても、もう待ちませぬ。兄弟の衆やお前方に、たつた今立ち退いて貰ひませう。

主人　さうぢやさうぢや。たつた今立退いて貰はう。

鬼王　でもござらうが、けふあたりは曾我の莊からお使が來る筈ぢや。どうぞ今暫く。

妻　いえいえ。餘り内のが人が好うて、お前樣と違うて、人の言ふ事を聞き過ぎます。わたしが不承知ぢや。もうちつとも待たれませぬ。

主人　さうぢやとも。もうちつとも待たれぬわい。

鬼王　そんならせめて酉の刻まで猶豫いたいてくれられい。御兄弟が歸られたら、なんとかいたしやうもござらうから。

妻　ほんにほんに阿房らしい。ここへ最初來なさつた時は、兄弟の衆は勿論、お前樣方も人柄が好いので、ついわたしが騙された。餘所の迫子達のお宿をすれば、前金が取られたのに、十六日に來なさつてから、まだなんにも貰はぬぞえ。わたし達が只で家を明け渡して、餘所の狹い所に這入つてをるのはなんのためぢや。それはさうと聞けばあの兄御の方は不斷虎御前と云ふ大磯のあそびの所へ通はしやる。するとそれを焼いてか知らぬが、弟御は其の跡を追ひ廻してゐなさるさうな。さうかと思へばお前樣は話の分らぬ石佛ぢや。

（赤子泣く。）

ええ、うるさい。母あちやんは石佛の話をしてをる。坊の知つた事ぢや無い。ままよ、酉の刻までは待つて進ぜませう。その時はどつちにか返事を極めて貰ひますぞえ。

主人　うん。ままよ、酉の刻までは待つて進ぜる。その時どつちにか返事を極めて貰はうかい。

（主人退場。）

妻　もし。内のはどうでもなります。色好い返事をなさるなら、山吹色で無うても好いぞえ。

主人　これこれ、何をぐづぐづしてをるのぢや。

（赤子泣く。）

ええ、うるさい。好う泣く子ぢや。

（妻退場。）

鬼王　げに富貴なれば他人も合ひ、貧賤なれば親戚も離るとやら。御兄弟の方方が、

祖父の君の世のままに
三箇の莊の主ならば、
大名衆と諸共に
同じ假屋を立て竝べ、

お家の紋を染めさせた、幕引き廻してお出でなさらう。さうであつたら我我二人も、今頃は假屋の中で、笑ひ興じてをらうもの、貧しさはげに四百四の、病に優る病ぢやなあ。

（曾我の從者丹三郎登場。）

丹三ぢや無いか。なぜ打ち萎れて歸つてまゐつた。

丹三　口惜しい事を聞いて來た。十郎樣は工藤に降參しなされたさうな。

鬼王　なんと云ふ。

丹三　いや。わけを聞かせいでは分かるまい。けふは五郎樣が和田殿の假屋へまゐられた。それは冠者原に食はせる糧の料が盡きたと云うて、金をお借なされうためぢや。わしは這入で待つてをると、四郎左衞門が來て云うた。五郎殿は知るまいが、十郎殿が今工藤の假屋で、酒飲うで興てをられる。じこちらの殿が聞かれたら、さぞ無念に思はれうと云うた。わしは聞くと其儘、お主に相談がしたさに、腹が痛むと云うて、急いで歸つたのぢや。

鬼王　さてさて、まことしからぬ事ぢや。や。十郎樣が。

（十郎登場。）

十郎　五郎はもう歸つてをるか。

丹三　いえ。和田殿にお越なされてまだお歸なさりませぬ。

十郎　早う歸つてくれれば好いが。

（奥へ退場。）

丹三　どうぢや。

鬼王　わしには別に變つた御樣子は見えぬがな。

丹三　さうぢや。不斷に變らぬはればれとした御樣子ぢや。

鬼王　ぢやが御兄弟で何か御相談なさる事でもあるやら、五郎樣のお歸を待ちかねてゐさつしやる。

丹三　ふん。それはいつもの事ぢや無いか。

鬼王　さあ。さう云へばさうぢや。所詮五郎樣でも歸られいでは物の文目は分かるまいてや。

（間、農家の主人、同妻登場。）

丹三　なんぢや。主人夫婦か。

妻　さあ。御返事を聞きに來ましたぞえ。や。丹三樣もゐなさるのか。自體わたしは選嫌はせんのに、ほんに揃ひも揃うて物分かりの惡い人達ぢや。さあ、お約束の刻限

ぢや。すぐに御返事が聞きたうござんす。

主人　さあ、お約束の刻限ぢや。すぐに御返事が聞きたうござる。

鬼王　いかにも刻限にはなつてござるが、今少し待つてくれられい。御兄弟がお二人共お歸になつた上で。（丹三に）實は先刻來られたので、酉の刻までと云うたのぢや。

丹三　いや。御迷惑を掛ける我我主從ではござらぬ。まあ、さう急かずに。

妻　いいえいいいえ。御返事のなさりやうは分つてゐなさるお二人ぢや。それに御返事をなさらぬやうなら、御兄弟の衆が揃はつしやつても、やつぱり御返事はなさるまい。もう片時も待たれませぬ。

主人　さうぢやとも、もう片時も待たれん。

妻　さあ、どうして下さんす。

主人　さあ、どうしてくれなさる。

妻　さあ。

主人　さあ。

（五郎登場。）

五郎　燈火も點さずに、かしがましい。何事ぢや。

丹三　や、物に紛れて明しの用意が。

（退場。）

妻　まあ、大きな聲ぢや、折角寢た坊やが起きる。

（丹三燭を乘り、登場。）

五郎　や、見れば主人御夫婦ではござらぬか。幸の折にまゐられた。遲滯いたいた宿の料、只今お納め下されい。

（金を渡す。）

主人　や。これは大さうな。

妻　どれどれ、わたしに見せなさんせ。

（主人妻に金を渡す、妻懷にす。）

妻　これはわたしが預かつて置くぞえ。ほんになんの色よりも、やつぱり山吹色の事ぢや。そんなら、お暇いたします。

主人　へいへい。お暇いたします。

（二人退場。）

丹三　お兄上様がお歸なされて、

鬼王　お待ちかねでござります。

五郎　さうか。兄上は歸らしやつたか。

（十郎奥より登場。）

十郎　五郎、待つてをつたぞ。（從者等に）そち達は暫時遠慮いたせ。

從者等　はあ。（退場）

十郎　（小聲にて）五郎。いよいよ今宵ぢやぞ。さて工藤が假屋ぢやがな。案内はかねて知つてをるが、精しい樣子を探りたさに、けふ午過の事であつた、大幕の間を覗

いて、ふと家人等に見咎められ、ゆくりなく酒宴の相伴をいたいた。客には吉備津宮の宮司がをる。又それが連れて來た手越、黄瀨川の遊女がをる。宮司はさして妨にもなるまい。遊女達も皆虎御前と親しい中で、手援にはならぬまでも、障にならう筈が無い。かう何もかも分つて見れば、結局見咎められたのが、僥倖かとも思うたが、又つくづくと思ひ返せば、憖に面を曝して、若し用心でもせられては、諺に謂ふ毛を吹いて、疵を求めたやうなもの、只そればかりが氣懸かりぢや。

五郎（同上）なに。用心をいたいたと申して、何程の事がござらう。ああ、時節到來、喜ばしや。此上は冠者原に、昨夜したためた文を持たせ、曾我へ返さうではござらぬか。

十郎（同上）さうぢや。遲れては門出の邪魔ぢや。（呼ぶ）鬼王、丹三。

兄弟　これへまゐれ。

（二人登場。）

二人　はあ。

十郎　そち達を呼うだは別儀で無い。雨中夜陰の遠路ゆゑ、苦勞には思はうが、今から曾我へ使に參れ。

鬼王　そんなら今宵。

丹三　お二人樣が。

二人　お打入になりまするか。

五郎　しつ。

十郎（小聲にて）いや。そち達には隱し果つべき事でも無い。さりながら、

あさましき此同胞に
年頃仕へし幸なさよ。
報せんとはしつれども、
我等の力及ばねば、

其儘けふの別になつた。免してくれい。

鬼王　物體ないお詞ながら、それより今宵の御供に。

丹三　どうぞお連。

二人　下さりませ。

五郎　いや。それはならぬ。曾我にござる母の許へ、遣るべき使者は外に無い。

鬼王　そんならどれ程願ひましても。

五郎　ならぬ。（起つ）

十郎（起つ）篤と胸を落ち著けて、得心いたいて立つてくれい。

（兄弟奥へ退場。）

鬼王　こりや、丹三。伊賀の山田の冠者が事をお主は聞いたことは無いか。

丹三　いいや。知らぬ。それがなんといいたいたのぢや。

鬼王　さいつ年伊賀の國人で、山田の小三郎惟行と云ふ、六波羅殿の郎黨があつた。それが保元の軍に八郎御曹司と對陣して、討死と心を定め、一人の冠者に故里への言傳を誂へた。すると其冠者がな、口惜しい仰を承つたと云うて、主より先に敵陣へ驅け込うで討死した。

丹三　ふん。分かつた。我我二人も死ぬるまでぢや。

鬼王　さうぢや。死ぬより外、途は無い。さりながら御兄弟と我等とは、

　まだ總角の昔より
　四人はなれぬ中なれば、
　貴き卑きの別さへ
　忘れて年を經しものを、

今宵のお供が愜はぬとは、なんたる無念の事ぢややら、思へば胸が煮え返る。

丹三　おう。さもあらう。河津家の敵は我等が敵ぢや。討ちたい心に高下は無い。なぜ下司には生れたやら。

（二人手を取り、泣く。）

鬼王　ああ。めめしい歎ぢや。

（雨の音。）

折好く降り來る雨の音に、紛れてここで刺し違へ、三途の河で御兄弟が、本意を遂げて來られるのを、お待受申すまでぢや。お支度最中のお二人が、よも聞き咎めはなさるまい。

（二人は胸を開き、互に刃を擬す。）

鬼王　いざ。

丹三　いざ。

五郎の聲（奥より）　やあ、兩人、暫く待て。

（十郎、五郎登場、打入の支度、記念の品を持つ。）

十郎　神妙な、そち達が志は、生生世世忘れぬぞよ。さりながらそち達は、稚い時に親に別れ、母を殘して死にに行く、子供の心を知らぬと見える。なんの我我兄弟が、そち達を卑しんで、具して行かぬと申さうぞ。どうぞ我等になり代つて、母上に逢うてくれい。

（遺書と記念の品とを出す。）

此文と小袖とは母上に奉る。貧しき中に飼ひ馴らせし、二匹の馬には鞍を置いて、祐信主にまゐらせる。又弓矢と行縢とは、そち達取つて記念にせい。

鬼王　さては死ぬにも死なれませぬか。

五郎　時移つては詮無い事ぢや。

十郎　疾う疾うまゐれ。

二人　はあ。

（鬼王起ち、厩より馬を牽き出し、丹三郎と共に、記念の品を結ひ付け、蓑笠を著く。）

鬼王　そんならこれで我我はお暇をいたします。

丹三　此上は只御本意を首尾好うお遂なさるやう、切にお祈。

二人　申しまする。

十郎　そち達二人も。

兄弟　堅固で暮せ。

（鬼王、丹三郎退場。〇十郎、五郎疊牀几に坐す。）

五郎　兄上、今鹿島立するからは、これが互の顔の見をさめ。（手を取る）

十郎　父の命の血をわけし

五郎　わが兄上のかんばせも、

十郎　家弟汝が面影も、

在すが如き思の種。

兄弟　お懐かしうござりまする。

（鐘の音。）

十郎　もう亥の刻ぢや。いざ、打ち立たう。いざ。

五郎　いざ。

（雨の音　〇幕。）

第三幕

幕の外

十郎、五郎登場。續松を把る。

十郎　見て置いた、これが假屋ぢや。油斷いたすな。

五郎　心得てござる。

十郎　こりや、五郎。父上がお討たれなされてから、十七年の久しい間、我我二人が念頭を、離れぬ遺恨を霽すは今ぢや。

西王母が園の桃は
三千年に只一度
花を開くと傳へ聞く。

五郎　又金輪王の出づる時、
現ると云ふ優曇華も、
稀に逢ふ日の譬なり。

十郎　待ちに待つた當の敵、左衛門尉は言ふに及ばず、出で逢ふものに容赦はいらぬ。ぢやが、女原も許多ある。逸つて無益の殺生すな。

五郎　仰やるまでもござらぬ。

十郎　いざ。

五郎　いざ。

（二人幕を褰げて入る。）

板戸をさしたる假屋の椽の前

十郎、五郎登場。

五郎　兄上、敵はどこへ參つたでござらう。

十郎　（左手を顧みる）晝酒飲うでをつたのは、今の假屋ぢや。それにあの通人影も無い。彼奴我等が寄せると悟つて、急に臥戸を換へたと見える。はてどこを尋ねたものであらう。

五郎　此上は是非が無い。假屋假屋を片端より捜す迄ぢや。

十郎　待て。大切の場ぢや。

（假屋の板戸を開き、龜鶴燭を乗りて登場。）

龜鶴　波に漂ふ沖津舟
しるべの山はこなたぞや。

十郎　さては龜鶴がしるべいたすか。五郎、續け。いざ。

五郎　いざ。

（龜鶴入る、十郎、五郎續き入る　〇夜廻の卒二人、一人は右手より、一人は左手より登場。）

第一の卒　や。これはお役目御苦勞ぢやの。

第二の卒　お互ぢや。（板戸の方を見る）　ここはどなたの假屋ぢやつたの。

第一の卒　ここか。不斷はお屋形の宿直の人達が、代り合うて下がつて息ましやる所ぢやが、今夜は工藤殿が客人と一しよに這入られた。

第二の卒　客人と云ふのは、あの象の様に太つた宮司殿か。

第一の卒　さうぢや。象のやうな宮司殿と息まつしやるのは羨ましう無いが、その象に乗つた菩薩様のやうな美しいのが二人一しよぢや。

第二の卒　ふうん。美しいのとは、そりやなんぢや。

第一の卒　さてさてお主は迂濶ぢやな。一人は手越の少將と云うて、名高い大磯の虎御前にも劣らぬ、上品な代物ぢや。それを宮司殿が連れて來て、工藤殿に當てがうて置いて、お手前は又黄瀬川の龜鶴と云ふ、小氣の利いたのを寵愛してゐなさるのぢや。今頃は、な、面白い最中ぢやろ。

第二の卒　ふうん。

第一の卒　それに我我はこの降つたり止んだりする雨の夜に、かうして濡れて歩くのぢや。同じ濡れるにしても氣が利かぬ。（空を仰ぐ）　や。又降つて來た。どりや一廻してしまはうか。

第二の卒　そんなら又後に逢ふぞよ。

（卒二人入り違ひて退場。〇大藤内板戸を蹴放ちて登場、十郎、五郎續きて登場。）

大藤内　お主達は曾我の同胞ぢやな。工藤殿を殺した下手人はわしが見極めた。後日に異論を言ふまいぞ。

十郎　何を。

（十郎、大藤内を一刀切る。大藤内俯臥になる。五郎腰を切り放す。）

五郎　馬は吼え

牛は斬く
世なればや
足二つもて
四つに這ふらん

十郎　(笑ふ)　こやつ平家の世盛には、妹尾に附いて榮を干め、その罰に召し放された領地を、又工藤の手で取り返しをつた。世盛上手奴。四這に這うて世を渡れ。

(十郎、五郎共に笑ふ。)

もうこれまでぢや。潔く名告つて討死せう。

五郎　さうぢや。兄上、いしくも言はれた。

十郎　やあ。假屋の人人。

かねて音にも聞きつらん
目のあたりには今し見よ。

伊豆の國人河津の次郎祐親には孫、三郎祐泰がわすれがたみ、養家の氏を冒して曾我の十郎祐成。

五郎　同じく五郎時致、只今假屋の內に於いて、父の敵工藤左衞門尉祐經を討ち取つたり。

十郎　我と思はん人人は
疾う疾うここに出で合ひて

二人　御討留候へ。

(二人暫く屛息して物音を聞く。)

五郎　誰も出ぬではござらぬか。

十郎　無下のものぢや。さらば馳せ廻つて名告らう。五郎まゐれ。

(右手へ往かんとす、假屋の內に烟起る、少將、龜鶴登場、衣を覆ひて火を消さんとす。)

五郎　兄上。あれは。

少將　續松の火でござんす。

龜鶴　板敷にほんの少し、燃え附いたばかりゆゑ。

二人　わたし達がつい消します。ここは大事ござんせぬ。

十郎　そんならお身達に賴んだぞ。

(十郎、五郎右手へ往く、女二人火を揉み消す。)

將軍家の屋形。蔀の外、板緣。雨。

五郎登場。

五郎　兄上。兄上。

仁田の聲　(舞臺の背後にて)　やあ。假屋の人人承れ。狼藉ものの一人曾我の十郞祐成は、伊豆の國人仁田の四郎忠常が討ち取つたり。

鬨の聲　(同上)　えいおう。

五郎　はつ。兄上はお討たれなされしか。此上は祖父樣を自滅させ、敵工藤を贔屓せられた、將軍家を一太刀恨まう。さうぢや。

(五郎緣に登る、五郎丸帽衣を被り、靡れ違ひ、帽衣

な脱ぎ、背後より五郎を抱く。五郎板縁を踏み抜く。二人無言にて揉み合ふ　〇幕。）

第　四　幕

将軍家の屋形。垂簾。簾の下には諸大名二列に坐す。中央前景に狩野介宗茂、新開荒二郎忠氏ゐる。

第一の大名　最早辰の刻になつてござる。犯人を預かつた大見の小平太はどういたいたやら。（第二の大名に）固より曾我の殿原は奸盗山賊の類でもござらぬに、笑止にも縄附になり申した。

第二の大名　情ない儀でござる。よしや御假屋を汚したとて、討つた工藤は父の仇ゆゑ、申し宥める道もござらう。御屋形の御座所近く推參いたいたと申すからは、罪科は所詮逃れますまい。

（雑色登場。）

雑色　只今これへ曾我の五郎を召し連れてまゐりまする。

（雑色退場、五郎登場、大見小平太實政縄を取る、狩野座を進む。）

狩野　曾我の五郎、承れ。只今これへ召されたは、某と新開とが承つて、夜討の宿意を尋ねるためぢや。さあ、逐一に申し立てい。

五郎　（怒る）黙れ、狩野の介。祖父伊東の次郎祐親が将軍家と不和のため、自滅に及んでから以來、久しく落魄いたいてをるが、某とても遠祖左大臣藤原の武智麿が流を酌む、由緒ある身分ぢや。申す程の事はぢきに申さう。若しそれが愜はぬなら、何事も申すまい。

狩野　怪しかる事ぢや。某は君命によつて尋ねる。

新開　それを彼此申すのは、犯人の身となつても、まだ君に楯衝く所存か。

頼朝の聲　（簾の内より）いや、待て、狩野、新開。曾我の五郎が申す條尤なれば、頼朝みづから聽いて遣はす。

（簾を半捲く。頼朝登場。舎人二人。近臣二人随ふ。狩野退く。新開中央に殘る。）

五郎　（新開に）そこを退いて貰はう。これより物申すに、和殿がそれにゐては、和殿に物言ふに似て、快う無い。

将軍　新開退いて遣はせ。

新開　はあ。

（新開退く。）

将軍　見れば昨夜の雨に、そこの土は濕つてをる。誰かある。曾我の五郎に敷革を取らせい。

卒　はあ。

（卒右手より敷革を持ち出で、敷く。）

五郎　（感激す）

此敷革を見るにつけ、
十年の昔ぞしのばるる。

年頃六波羅に勤仕して、平相國親子の覺めでたく、名利のために訴訟を構へ、怨毒によつて殘害を行うた、小賢き敵工藤が、時勢の移り變るに乘じて、宇佐美殿によつて御目見えを賜はり、伊東の莊を拜領し、猶それにも飽き足らいで、我我兄弟を殺さうと、讒舌を揮うたため、

兄一萬は十二歳
此箱王は十の時、
由比が濱邊に伴はれ、
引き据ゑられし敷革は
夢見ごこちに春を待つ
蕾を摧く悲涙の座。

今は首尾好く父の仇工藤を討つて怨を霽し、此世に思ひ置くこと無ければ、

最期を急ぐわがために、
此一枚の敷革は
父に見えん彼岸に
渡す弘誓の舟筏。

難有く拜領いたす。（敷く）

將軍　殊勝な覺悟ぢや。然らばみづから尋ねるが、此度工藤を討ち取つたのは年頃の企か、但しは俄の思立か。

五郎　それは申すまでも無い事。我等が父を討たれたは十七年の昔。兄は五歳、某は三歳、しかと意趣をも存せなんだが、兄が九つ某が七つになつて、物心を辨へてから以來は、片時忘れぬ復讐でござる。

將軍　然らば伊豆にある工藤が、十年の久しい間、月に四五たび、乃至十度も鎌倉へ通うたに、なぜ途中では討たなんだ。

五郎　いかにも其往返には心を附け、足柄、箱根、大磯、小磯、由比、小坪のあたりにたたずみ、兄弟附け狙うたが、身分ある彼が同勢、多き時は百騎に餘り、少き時も五十騎、衆寡敵せず控へ申した。

將軍　ふん。さもあらう。さて工藤は父の仇ゆゑ仔細無いが、多くの麾下の侍をば何故妄に傷つけた。

五郎　固より我等兄弟は、かかる狼藉を企てたからは、刃向ふもののあらん限、千萬騎をも切り離けうと存じたが、我等の名告る聲を聞いて、足の立所も知らず逃げ行くゆゑ、後日のために一太刀づつ印を附けたまででござる。

將軍　して大藤内はなぜ討つた。

五郎　あれは笑止なものでござつた。恩ある工藤に助太刀もせず、廣言を申したゆゑ、切り棄てはいたいたが、所領安堵を喜んで下國する途中、報謝のために引き返したは、せめてもの心掛、今はなかなか不便に存ずる。

將軍　神妙な詞ぢや。ぢやが、それ程義理を辨へたそちが、既に敵を討つた上、なぜ予が座所に蹈み込んだ。

五郎　これは憚りある申條かは存ぜぬが、流人となられた將軍家の御爲には、祖父伊東の次郎は東道主人ではござらぬか。それが、成行とは申しながら、三浦殿にあづけられて自滅いたいた。又敵工藤は格外の御引立を蒙つた。これ等の遺恨無きにあらねば一太刀おうらみ申した上で、自害いたす覺悟でござつた。

將軍　おう、好う藏さずに申したぞ。此度の企を前以て存じてをつた同志のもの、乃至手引のものがあらう。事の序にそれも申せ。

五郎　さやうなものは一人もござらぬ。

將軍　さは云へ、母には打ち明けたであらうな。

五郎　こは仰とも存ぜぬ。鳥獸も子をば思ふ。二人の子供に死にに往けと申す親のござらうや。

將軍　おう一族否運に陷つたそちが申條としては、一一尤至極に存ずる。仁田の四郎はをらぬか。

仁田の聲（上手背後にて）　はあ。四郎忠常只今それへ。

（仁田首桶を持ち、登場。）

仁田　仰せによつて曾我の十郎が首級。これに持參いたいてござる。

將軍　五郎。兄に逢はせて遣はすぞ。それ、いましめ解け。

（犬見、五郎の繩を解く。）

仁田　實驗の上申し請ひ、和殿に見せる十郎が首級ぢや。いざ、對面いたされい。

（首桶を開く。）

五郎　懷かしや、兄上。

點し列ねし松の火の
消えなば共にと思ひしに、

不覺を取つて縛められ、口惜しくもながらへ申す。さるにても、兄上、どうしてお討たれなされたか。よし仁田殿は猛くとも、時致だに居合はせたら。

仁田　いや、和殿の助太刀までも無い。十郎が鋭き太刀風に、某は切りまくられ、右の肘と小鬢とに薄手をさへ負うたれど、十郎が運拙く、我薙刀に拂はれて、刃はぽつきと鍔元から。

五郎　なに。兄上の太刀が折れたとか。なぜ我太刀を兄上に佩かせなんだか。

仁田　おう。その悔み道理至極ぢや。某とても一門の十郎ゆゑ。首討つ所存は無かつたが、引かうといつた某を、十郎みづから呼び止めて、首を我手に授けたのぢや。

五郎　さてはよしみある御身の手に、兄上好んで掛かられたか。

（五郎歎く。犬房丸鞭を持ち走り出づ。）

犬房　父上の敵、思ひ知れ。
（五郎を鞭うつ。）
五郎　や。この小童は何者ぢや。
（五郎睨む。犬房たじろく。）
仁田　犬房丸。御前ぢやぞ。
五郎　なに。犬房丸が御身か。
　　彼も人の子、稚くて
　　親を討たれし悲は
　　いかでか我に殊ならむ。
　　果報の繩に引かれずば、
　　刃を取りて立ち向ひ、
　　御身に討たれん我身なり。
刑場の土になるわしぢや。せめてもの心遣に、さあ、其笞で打つてくれい。
犬房　父上を討つたお前は強い人ぢやと思うたに、優しい事を言うて下さる。それではどうも打たれませぬ。
五郎　おう。さうか。さあ、につくい小わつぱ、打たれるなら、打つて見い。
犬房　なんの打たいで。おのれがおのれが。
（連打す。）
将軍　もう好い好い。犬房、それで勘忍いたせ。
犬房　はつ。（鞭を棄てて平伏す）

将軍　五郎。此上問ふべき事も無いが、頼朝閫外の職を辱うして、勇士猛卒を惜むこと何物にも替へられぬ。どうぢや。志を翻して奉公いたしてくれまいか。
五郎　それは存じも寄らぬ事。若し處刑を宥められて、行住心に任せるなら、某は犬房に此素首を取らせ申さう。
犬房が討たいでも、
　　近き恵に代へられぬ
　　遠き恨のまつはれば、
いつ謀叛人にならうも知れぬ。一しよに死なうと誓うた兄を、久しう待たせるも心苦しい。刎ねられるを待つ外ござらぬ。（大見に）さあ、繩を打たれい。
大見　いや。某は五郎丸が、掛けた儘の御身の繩を、君命によつて預かり、又君命によつてほどいたばかりぢや。御身に繩打つすべを知らぬ。
将軍　待て。勇士を失ふは遺恨ながら、其志は奪ふべからず。五郎が繩は頼朝が手づから打つて遣はさう。
五郎　（居直る）　こは思ひも掛けぬ仰せぢや。今生の思出に、さあ御繩を拝領いたさう。
将軍　（起つ）　わが打つ繩は不動の羂索、難伏のそちには相應はしからう。いでいで。
（階を降らんとす。○幕。）

女がた

温泉宿の離座敷。冬日和。

俳優高岡、小川、蓮田の三人革包(かばん)に物を詰めゐる。

小川　さあさあ。もう好い加減で好い。あつちの座敷まで運ぶのに、何も洋行する時の荷物のやうにしなくても好いぢや無いか。

高岡　又洋行が出たぞ。君の洋行した時の荷物が果して旨く整頓してあつたかは疑問だ。

蓮田　（丁寧に物を詰めゐる）好い加減にして置くと、何がどこにあるか分からなくなつて跡が困るから。

小川　一體こんなにして自分で引き越さなくたつて、いざと云ふ時になりやあ、ここの内でどうかしてくれるのだ。襟に附きやあがつて。ここの親爺なんぞの眼中には金力以外に何物も無いのだ。

高岡　爲方が無いさ。君なら何か西洋の Proverb でも出す所だが、まあ、長い物には巻かれろだ。

蓮田　（同上）それはあのお松どんにでも頼めば、一攫に攫んで擲ち込んでくれるがね、そいつは眞つ平だから。

小川　大いにお松どんに攫まれることを怖れてゐるから可笑しいや。

高岡　蓮田の怖れるのも無理は無いよ。薄馬鹿で力持と來てゐるからな。

小川　ああ云ふのが大いなる戀愛といふのだらう。

（蓮田は小川に「うるさい」と云ふ表情をなす。○宿の主人登場。）

主人　はあ。すつかりお片附になりましたな。誰かお呼下さればお手傳に出ましたに。

高岡　なあに。形勢非なるときは、手際好く退却する。時にも所にも執著しないと云ふのが、我我の慣用手段ですからね。

主人　いや。どうも申わけがございません。一月前からお約束になつてゐることがあるかと思ふと、又今度のやうに電報で、「あす行く」なんと云つてよこされますからね。とにかく毎年お座敷はここに極まつてゐますので。

小川　すると我我は二三日 millionaire の部屋にゐたわけだね。

蓮田　（革包(かばん)を整頓し畢る）富豪と云ふのも、僕の知らない性格の一つだ。

高岡　逢つて見れば好い。

蓮田　（主人に）どうでせう。ここに泊つてをられる間、

人に逢はれますか。
主人　ああ。なかなかむづかしうございます。こちらへ遊びに來てゐられる間は、誰にも逢はないと云ふ立前なのでございますから。（表情）女なら格別。
高岡　そんなに女好ですか。｝（同時に）
小川　それは知つてゐらあ。｝
主人　實はこちらへお泊になつても、その晩に女中に手を出されるには困ります。
高岡　なぜ。皆喜んで仰に從ふのでせう。いづれ跡の始末は立派に附くだらうから。
主人　所がさうばかりも行きません。お金のある方は存外お使にならないもので。
小川　當然さ。使はないから持つてゐるのだ。そこで幾ら位出すのです。
主人　それが妙に相場が極まつてゐましてね、「誰誰には特別に世話になつたから、嫁入支度の內へ簞笥を一棹遣す」と云ふことになるのでございます。
小川　なるほど。するとお簞笥附なことは慥で、御落胤附だかどうだかは疑問だと云ふよめさんが出來るわけだ。そこでお手當に皆滿足するとも極まつてゐないのですか。
主人　どうも堅氣な奉公人ばかり使つてゐますので、隨分面倒が起ります。簞笥なんぞはいらないから、あやまり證文を書いて貰はうなんと云ふのがあります。
高岡　ふん。感心な奴がありますなあ。
小川　なんかと云つて、簞笥以上の要求をしようと云ふのぢや無いのですか。
主人　いえ。さうだと割合に始末が好うございますが、先方の言ふなりにはなつてゐたく無い。金で默つてしまつたとも云はれたく無い。どうして好いか自分にも分らないと云ふやうな手合がございますので。
小川　はてな。そいつは始末がむづかしいですね。
主人　それにさう云ふ時、惡い奴が中に這入つて、話を面倒にした事がございまして、東京のお內でも困つてをられます。實は奧樣の內內のお使に支配人の方が來られまして、どうにかして檀那のあの癖を止めさせてくれと云ふお賴があつたのでございます。そこで昨年はじやんこで目つかちのお鹽と云ふ女中一人しかお側へ出さないことにしました。ところが。
小川　そのじやんこの目つかちもお簞笥附になつたのですか。
主人　なりましたよ。
小川　はてね。
蓮田　無邪氣ですね。僕はすつかり氣に入つてしまつた。
高岡　君一つ富豪研究の手段として、お得意の女方で接近

して見てはどうだ。

小川　でも簞笥は貰へないね。

主人　（思案して）お待なさいましよ。これは思附だ。――つさう云ふ事に願ふわけにはまゐりますまいか。

小川　さう云ふ事とは。

主人　その蓮田樣の女方と云ふ事に。

高岡　あれは僕が洒落に云つたのだ。がそんな事をして、それがなんになるのですか。

主人　いえ。實は昨年の跡始末に支配人の方が來られた時、なんとか工夫をして、せめて一年でも跡始末なんぞをせずに濟むやうにしては貰はれまいかと云ふ事でございました。檀那を立派にはね附けた女があつたら、奧樣から三百圓出る。檀那がお懲なさるやうに、少しはひどい目にお逢はせ申しても好いと云ふ事で。

小川　なる程。それは至極の御名案だと云ひたいが、蓮田君では簞笥も貰へないし、その奧さんからの三百圓も貰へまいね。

蓮田　貰へもしないが、貰へたつて貰はない。

高岡　知れた事さ。（主人に）所で蓮田君を出すは好いとして、正體が顯れたらどうするのですか。

主人　それはかうでございます。今日のお待受はあのお松にさせることになつてゐました。お松にはかねて言つて聞かせてありますから、捩ぢ伏せられさうになつたら、檀那を摑まへて投げ出しでもしませう。併し檀那はきつとすぐに手をお出しなさる。お松が腕立をする。それが目の前に見えてゐますから、ならう事なら少しでも先へ延ばしたい所から、蓮田さんに出てお貰申さうかと思ふのでございます。

小川　ははあ catastrophe を先へ延ばさうと云ふのだ。一寸延びれば尋とやらと云ふわけですね。

主人　へえへえ。先づさやうで。

小川　さあさあ。蓮田君。ここは一番義俠心を出して出て遣るべしだね。

蓮田　何も研究のためだ、遣つて見よう。だが支度が出來れば好いが。

小川　面白い面白い。（主人に）時に時間はありますか。

主人　（時計を見る）あなた方が餘りお早くお片附けになりましたものですから、まだたつぷりございます。

高岡　時間はあつても、拵へが出來まい。

主人　おつむりがどうにかなりますなら、お召物はどうでもいたします。

蓮田　頭は今度の地方興業に使つた鬘があります。こはされると困ると思つて、僕があの大きい行李に入れて持つてゐるのです。

小川　熱心家は違つたものだね。とにかくそれは誂向だ。さあ、御主人、衣裳をお頼申しますぜ。

主人　承知いたしました。

（主人ベルを押す、○女中松登場。）

女中松　こつちでお呼なさりましたかな。

主人　お上さんにちよいと來て下さいと云つてくれ。

（松蓮田に對する表情あり。）

主人　何をぐづぐづしてゐるのだ。早く往つてさう云ふのだ。

松　お上さんが來なされば好いのでござりますな。

主人　さうださうだ。じれつたいな。

（松退場。）

小川　（あたりを見廻す）樂屋にするには少し片附けなくては。

主人　いえ。これだけになつてゐますから。お荷物さへ運ばせれば好うございませう。

（女房よし登場。）

女房よし　（高岡等に）まことに飛んだ御無理を願ひまして申しわけがございません。

高岡　どういたしまして。

小川　いや。お上さん。面白い事が持ち上がつてゐますよ。

主人　（女房に）まあ、お荷物を早くあちらへ運ばせてくれ。それから少し話がある。

（主人女房を傍へ連れ行き話す。）

小川　（蓮田に）君行李を持つて行かれないうちに、鬘を出して置き給へよ。

蓮田　おう。さうだつけ。

（蓮田奥へ退場。）

小川　段段面白くなつて來たぞ。鉅萬の富を積んで、王侯貴人に頭を下げさせる男でも我我のためには性格研究の材料たるに過ぎない。材料になる日には Rothschild だらうが、Rockefeller だらうが、頭の古い奴等に河原乞食と云はれる我我も同じ事で、釣り寄せられるのは、喰氣で無ければ色氣だ。いく地は無いなあ。

高岡　どうだらう。跡で祟が來はすまいか。

小川　なに。受けてゐない恩惠は亡くする慮も無いのだ。

主人　（女房に）早くするのだぜ。

よし　（躊躇す）なんだかこはいやうだわ。

主人　好いと云ふ事よ。なんでも考へることは夫に任せて置いて、女房は立ち働けば好いのだ。

よし　だつて檀那さんがおおこりなすつて、來年から外へ入らつしやると困るわ。

主人　好いよ。その位の事の分からない己だと思ふのかい。何年夫婦になつてゐるのだ。

よし　まあ。それは十年も連れ添つてゐるから、わたし安心が出來ないのだわ。

主人　ええ。うるさいなあ。そんなら智慧の無いお前に分かるやうに言つて聞かせよう。好く聞くのだよ。檀那がお出でなさらないやうになれば、奥さんが毎年來て下さるのだ。檀那はお一人だが、奥さんはお孃さん達を皆連れてお出でになるのだ。

よし　（嬉しがる）さうなの。難有いわねえ。そんならすぐに持つて來るわ。

主人　それ見ろ。安心の出來る亭主だと云ふことが、十年振に分かつたらう。

（女房聞き果てずして退場。）

まあ。急いで片附けなくては。ここが樂屋になるのだから。

（革包三つ、その外そこらにある風爐敷包などを持つ。

（見物に。）

舞臺を一ぱいで濟ませるとなると、なかなかむづかしいものでございますよ。

（高岡、小川に。）

まだ何かございますか。

高岡　跡は奥にある我我の共同の大行李だけです。

（下男登場。○同時に奥より蓮田甕を持ちて登場。）

下男　（主人に）お荷物を運びに參りました。

小川　まだその上に持つ積りですか。

（同時に）

蓮田　これを本物に見せるのは無理かなあ。

主人　（革包を主人の手より受取らんとする下男に）奥に行李があるから、お前はそれを運んでくれ。

小川　（蓮田に）なあに。女に目の無い人に分かるものか。

（同時に）

（下男奥に入りて行李を擔ひて出で、その儘退場。）

主人　それにお著きになる頃には日が暮れます。

（下男に續きて退場。）

小川　なあに。度胸だ。晝間だつて分かりやしないよ。

（女房衣裳の風爐敷包を持ち、松鏡臺と化粧道具とを持ちて登場。）

やあ。衣裳が來たな。

よし　（包を開く）お間に合ひますか、どうですか。

小川　どれどれ。（衣裳を見る）何から何まで好く揃へて來ましたね。（上衣を引つ張り見る）や。ゆきがどうかな。これは女竝でせう。

よし　ええ。六寸五分でございます。

小川　では大ぶ小さいぞ。

高岡　そんなら手を引つ込めてゐれば好い。

蓮田　困つたな。變な恰好になるから。

小川　なに。寒がりだと思ふ位のものさ。〇帶に帶揚に帶留と、此足袋は少し間に合ひかねますね。

蓮田　足袋は穿き替へなくても好いよ。

よし　（松が鏡臺と化粧道具とを持ちたる儘立ちゐるを見て）お前それはそこに置いてね、金盥にお湯を取つてお出で。

松　金盥にお湯でござりますな。

よし　さうだよ。それからバケツに水を汲んで一しよに持つて來るのだよ。

松　金盥にお湯とバケツに水でござりますな。

よし　さうだよ。早くおしよ。

松　金盥に水と。バケツにお湯と。あ。さうぢやない。金盥にお湯と。バケツに水と。

（松蓮田に對する前の如き表情ありて退場。女房鏡臺を据ゑ座布團を敷きなどす。）

蓮田　どうもお上さんに見てゐられちや間が惡いなあ。

小川　おい。まだ娘になつて物を言はなくつても好いぜ。間が好いの惡いのつて、それはなんの事だい。

蓮田　さうで無いよ。舞臺で平氣でする事も、往來では出來ないやうなものでね。

よし　わたくし蓮田さんが女におなりになつた處が、早く拜見したうございますわ。どういたしたつて、ほんたうの女なんぞは愜ひつこはありません。

蓮田　ところが劇評家と云ふこはい人に、ついこなひだも、腰から下が女になつてゐないと云はれた位の爲合せですからね。

高岡　拵が出來たら、少しお上さんに爲込んで貰ひ給へ。

よし　どういたしまして。飛んだ事を。

（松盥に湯を取り、バケツに水を入れ來る。）

あの、何かまだおいり用の物はございますか。

蓮田　さあ。大抵好いやうですね。

小川　好し。とにかく急いで首から拵へるのだ。

高岡　お上さん。お蔭で樂屋が出來たやうですから、帳場の方がお忙しいやうなら。

よし　そんなら後程お美しくおなり遊ばした所を拜見に出ますわ。

小川　お松どんは借りて置いても好いでせう。

よし　えゝえゝ。どうぞお使下さいまし。さやうなら皆さん。

（女房退場。）

蓮田　さあ、業晒しに取り掛かるか。（肌を脱ぎ、化粧に掛かる）や。馬鹿に熱い湯だなあ。おい。お松さん。その水を少しこれへ入れておくれ。

松　これへ水を入れるのでござりますな。

蓮田　さうださうだ。

（松蓮田の顔を眺めつつ、バケツの水を盥にさす。これより蓮田が化粧し、鬘を被るまで、松は失神せるが如く蓮田の顔を眺めゐる。高岡、小川は紙巻煙草を呑みつつ傍看す。）

小川　蓮田君。手ばしつこく遣らなくつちや駄目だぜ。

蓮田　僕も見物を傍に引き附けて見せる化粧法は研究してゐないから困つちまふ。油畫かきが日本畫をかかせられるやうなものだからね。

小川　まあ、西洋畫でも好いから、極彩色に塗り上げ給へ。

（間。）

小川　おい。蓮田君。親王の前に出るのは好いが、君は一體どんな話をする積だい。

蓮田　（化粧しつつ）さうさねえ。

小川　胸に成竹は無いのかい。

蓮田　（同上）さあ。

小川　困るなあ。黒ん坊は附いてゐないのだが、大丈夫かい。

蓮田　（同上）それは承知だよ。

小川　なんだか僕はあぶなくつてならないぜ。端から絶句してしまやしないだらうか。

高岡　まあ、待ち給へ。端から絶句して、おどおどしたら、却つて好かあるまいか。憖つか饒舌るとあぶなからう。一體身分はどう云ふ女だとしたものだらうか。

小川　それは極まつてゐるさ。僕はさつき衣裳を調べて見たが、無論並の女中では無いのだ。特等のお客にばつかし出す女中さ。特別任務の訓令を受けてゐると云ふ性だね。一歩進んで言へば、親類の娘が來てゐるのを、お給仕に出すと云つても好いかも知れない。要するに僕は蓮田君が十分地歩を占めて掛かるが好いと思ふのだ。ねえ蓮田君。

蓮田　（同上　さうさねえ。

小川　おい。何を言つても、さうさねえと、さあで持ち切つてゐては困るなあ。君がその場になつて困るだらうと思つて、我我は心配して遣るのだぜ。

蓮田　（同上）それは感謝するよ。

小川　じれつたい返事をする男だなあ。

高岡　まあ、そんなに氣を揉まないで、蓮田君の遣るやうに遣らせて置き給へ。

小川　でも蓮田君が第二のお松どんになつて、おとなし過ぎると困ると思つて。

高岡　なに、さうなつた所で差支ないよ。

小川　妙だねえ。君はあぶながつてゐた癖に、なぜ急に落

ち著き拂つてゐるやうになつたのだい。

高岡　いや。それは爲事はあぶないのだ。だが斷行するとなつた以上は、自然の發展に任せて置くが好いぢや無いか。

小川　さう云つてしまへば、それまでだ。どうも僕はさう暢氣になつてゐられない性分なのだ。

（間。）

小川（時計を見る）大ぶ拵に念が入るやうだが、好いか知らん。おい。蓮田君。もつと急がなくても好いかい。

蓮田（同上）もうすぐだ。

小川（高岡に）時に、僕は實際の場が見てゐたいのだがどうにかなるまいかねえ。

高岡　そして絕句したら附けて遣らうとでも云ふのかね。

小川　なにさうぢや無い。只見物になつて見てゐたいのだ。

高岡　それはむづかしいなあ。只の好奇心なら、まあ、我慢してゐ給へ。

（蓮田化粧して鬘を被り、立ち上がる。）

蓮田　さあ、衣裳だ。お松さん。手傳つてくれ給へ。

（高岡、小川立つて見に來る。）

小川　やあ。首だけは可なりに出來たぞ。

蓮田　シヤツは控鈕をはづして、襟を內へ折り込んで置く位で、御免を蒙らう。

小川　それで衣裳が旨く附くかい。

高岡　なに。ぼちやぼちやして可哀らしくつて好いかも知れない。

蓮田　や。此湯文字には紐がある。まあ、好いや。

小川　火事の時御用に立つ奴だな。

蓮田　さあ、その長襦袢を取つとくれ。

松　長襦袢でござりますな。

蓮田　さうださうだ。さあ困つた。紐が無い。おい。お松さん。お前さんの紐を一本ほどいて貸しておくれ。

松　紐をほどいて上げるのでござりますな。（端折の腰紐を解きてわたす、引際になる）

蓮田（紐を結ぶ）好し。まあ。著物だ。

松　著物でござりますな。

蓮田　さうださうだ。や。紐がもう一本いる。お松どんに帶を解かせるわけにも行くまい。おい。小川君。そこらに僕の兵兒帶がもう一つあつた筈だから、取つてくれ給へ。

小川　うん。あのメリンスの絞りだな。どこにのたくつてゐるか知らん。あ。あつた、あつた。（取りてわたす）

蓮田　待てよ。腰紐を締めたところで、まだ帶の下に締めるのがいる。小川君、濟まないがそれを眞ん中から二つに裂いてくれ給へ。

小川　好し。心得た。お松どんそつちの端を持つておくれ。
松　こつちの端を持つのでございますな。
小川　好し〻しつかり持つてゐるのだよ。
（兵兒帶を引き裂く。裾を引きたる松と、小川と左右に立ち別れて大袈裟に裂く。）
高岡　いやな音がするなあ。
（旅客登場。外より戸を開く。高岡、小川、蓮田、松當惑す。旅客も驚く。場面 tableaux になる。○女房急ぎ登場。）
女房（旅客に）あのあちらの方の離れでございます。
旅客（女房に）あ。さうでしたか。（高岡等に）これは失敬しました。
小川　いえ。どういたしまして、少し幕の開きやうが早過ぎただけで。
（旅客何事とも辨へざる樣にて、女房に案内せられて退場。）
蓮田　僕は親玉が出し拔に來たかと思つてびつくりした。
小川　いや。僕もさうかと思つた。
高岡　誰だつてさう思ふよ。本物の來ないうちに、早く片附け給へ。
小川　さうださうだ。それ、お松どん、又ばりばりだ。
（松目を瞬りゐる。）

裂くのだよ。
松　裂くのでございますな。
小川　さうよ。裂いてしまふのだ。さあ。
（兵兒帶を裂き畢る。）
蓮田　一本くれ給へ。
小川　はてな。僕のを遣つたものだか、お松どんのを遣つたものだか。まあ、貴夫人に一歩讓るとしよう。さあ、お松どん。それを蓮田君に奉るのだ。
松　これを上げますのでございますな。
（表情ありて切れをわたす。）
小川　ようよう。
蓮田（切れを受け取り、腰紐にす。松を見て、小川に）君あんまり揶揄ふのはよし給へ。こん度はそつちのをくれ給へ。（小川の持ちたる切れを受け取り、帶下に締む）妙に袂がぽてぽてしてゐるな。（撮み出す）紙屑か。（投げ出す）まだある。（投げ出す）まだあるぞ。（投げ出す）さあ、帶だ。お松さん。手傳つてくれなくちや行けないぜ。それ。しつかり引つ張るのだよ。
松　これを引つ張るのでございますな。
蓮田　さうださうだ。ああ。痛い。もう好い。息が詰りさうだぞ。
（女房急ぎ登場。）

女房　あの、ステエションへお出迎にまゐつてゐるものから、電話が掛かりまして、只今お著になつたさうでございます。

小川　や。こん度は本物だな。ステエションから車で何分掛かるだらう。

女房　五六分でございます。もう今にお見えになりませう。早く片附けませんでは。

小川　いや、そいつああ大變だ。お上さん。なぜ誰か連れて來て手傳はせないのです。

女房　でもあんまり皆にこちらの様子を見せますのも。

小川　なる程。御尤千萬だ。

高岡　好いぢや無いか。皆でそこら中の物を一つ宛持つて行かう。

（高岡、小川、そこらの物を掻き寄せ、手に手に持つ。女房蓮田の脱ぎ棄てし衣類を始末す。蓮田鏡を覗く）

小川　（蓮田に）君も何か持つてくれんか。めかしてゐちやあ困るなあ。

蓮田　僕はここに居殘るのだ。まだ著物を著てから鏡を見ないのだからな。

小川　なる程。御尤千萬だ。お松どんも何か持たないか。

松　何か持つのでございますな。

小川　それまだ金盥もあらあ。バケツもあらあ。

松　金盥とバケツを持つのでございますな。

（松金盥にバケツを持ち添へんとしてまごつく。）

小川　じれつたいなあ。その湯をバケツにあけてしまへば、樂に持てるぢや無いか。

松　お湯をバケツにあけるのでございますな。

（小川何か言はんとして resignation の態度をなし、默す。松湯をバケツにあけて持つ。）

小川　ああ。Manager はなかなか世話が焼ける。（あたりを見廻す）まだ紙屑がある。（蓮田に）あれは君が袂から出したのだから、君に殘して置いて遣る。

女房　（蓮田に）おや。その袂にございましたの。まことに濟みません。（紙屑を拾ひて袂に入る。車輪の音。車夫の掛聲。）おや。今塀の外をお出でになるのが、そかも知れません。

小川　大變大變。

高岡　なに。ぐるつと廻つて來るのだから、慌てなくても好い。

小川　慌てはしないが、さう悪く落ち著いても困るなあ。庭で出逢つて、引拂の體たらくを見られてもまづいからね。

（女房衣類の包を持ちて、退場せんとす。）

女房　そんならわたくしは。

蓮田　（女の聲）　あの、そんならわたくしはこちらでお待受いたしまして宜しうございませうか。

（一同表情あり。）

小川　うふ。凄い聲をするない。

蓮田　（男の聲）　なに。ちよつと吭を驗して見たのだ。

小川　笑談ぢやないぜ。さあ、行かう行かう。

（女房先に立ち、一同急ぎ退場。松表情ありて殿す。蓮田殘る。）

蓮田　（男の聲）　ああ。我ながら馬鹿げた事を引き受けてしまつたな。（室内を歩き廻り、外を覗く）　庭で鉢合せだけはしなくて濟んだな。お松どんがまだ盥とバケツを持つてまごまごしてゐるぞ。あ。こつちを見やがる。やつと這入つて行つた。（間）　なかなか來さうも無いな。亭主がばつを合せようと思つて、茶か何か飲ませて、引つ張つて置くかも知れない。それともすぐに一風呂浴びると云ふやうなわけかな。面倒くさいなあ。來るのなら早く來れば好いのだ。（胡坐をかく）　ちよつと一服遣りたいな。シガレツト入れを袂に入れといて、持つて行かれてしまつた。ああ。富豪研究は好いが、隨分大なる犧牲を拂はせられる事だぞ。

（間。舞臺漸く薄暗くなる。）

日が暮れて來た。お誂向だ。所で電氣はどうしようかな。附けといたものだらうか。ええ。構はずに置いて遣れ。

（富豪古川浮造、宿の女房、松登場。松は臺十能に火を入れて持ち出で、臺十能を置きて退場。）

女房　（先に立ちて）　あの、お座敷はいつもの所をあけましてございますが、急な事でろくにお掃除も出來ません。

古川　いえ。どうぞ構はないで下さい。

（蓮田を見る。表情。蓮田は片隅に寄り、小さくなりゐる。○女房に。）

いつ來て見ても、庭から山を見た所は好いですよ。

（女房臺十能を引き寄せ、火鉢に火をつぐ。）

女房　でも今日はお天氣が宜しうございまして。

古川　はあ。ほんたうの小春日和でな。日が暮れてもなかなか明るい。

女房　（火鉢を薦めつつ）　ほんにまだ電氣が。

（蓮田起ちて電燈を捩る。）

古川　（小聲にて）　お上さん。あれはまだ見掛けたことのない姉さんだが、誰ですか。

女房　へえ。親類のもので、泊掛にまゐつてをりますので、當分すけて貰ふことにいたしました。

古川　はあ。さやうで。大さう好い子ですな。

女房　難有うございます。まだ慣れませんのでございますから。

古川　いや。わしのやうに老人になると、世話をして貰ふには、御つておとなしい、孫娘のやうなのが、可哀くて好いですよ。（蓮田に）わしはな、ここへ來ると、いつも内にゐるやうに、氣樂にしてゐるのだから、どうぞ遠慮をせんやうにしておくれ。

蓮田　はいまことに行届きませんで。

古川　年は幾つだね。

蓮田　十七でございます。

古川　はあ。十七にしては大柄だ。

（蓮田著物のゆきを氣にしてゐる。〇松茶と菓子とを持つて登場。〇古川女房に。）

どうぞ構はないで下さい。さつき店で言うたやうに、晩は汽車の食堂で食べて來たから、もう何もいりません。あ。序にお上さんに話して置くが、わしは近頃小用に砂糖が交つて出るさうでな、肉ばかり食べてをります。あしたからも三度共洋食にして下さい。それから好な酒ぢやがな、あれもそのお醫者さんがやかましう云はれるので、やめにしました。そのお醫者さんの云はれるには、人間は年を取ると、動脈に石灰が來て食つ附いて、堅くなるさうな。それがぽつきり折れると、中風だと云ふことだ。所がな、わしにその。

（次の詞聞えず。女房笑ふ。蓮田は解せぬ振。松はぼんやりしてゐる。）

いや。わしは又病氣の話をしましたな。（自ら笑ふ）こなひだも娘がかう云ひました。お父う様と御一しよに餘所へ往くのはもう厭だ。誰に逢つても、病氣の話や手水の話ばかしおしなさる。あれが止められぬなら、もうどこへも御一しよには往かれませんと云ふのぢや。（自ら笑ふ）

女房　ほんに御酒をお上がりになりませんでは、御退屈でございませうね。

古川　なに。飲み掛けて途中で止めるのはつらいが、端から飲まずにならゐられますよ。

女房　でも今一つの方をお止め申さないだけ、お醫者様も御如才がございませんわねえ。

古川　いや。それを止められてはおしまひぢや。旨い物も食へず、酒も飲めず、その方も駄目となつては、生きてゐないも同様となるからな。ぢやが年は取るまいもの、汽車に一日乘つてゐて疲れましたよ。

女房　あら。それはお若い方だつてお疲れなさいますわ。〇松や。あちらへお床を展べてお置き。

松　あらちへお床を展べますのでございますな。

（松奥へ退場。）

古川　好う太つたお女中ぢや。（起つ）

女房　お手水でございますか。(起つ)

古川　いや。知つてゐるからお構ひ下さるな。小用の近くなつたのも、お醫者さんは病氣のせゐだと云ひなさるが、矢張年のせゐもあるかも知れぬて。

(古川に女房附きて退場。)

蓮田　(伸をする。男の聲)　ああ。此樣子では富豪研究をする餘裕も何も無ささうだな。だが飮食の話と色氣の話とを聞いたから、その外には何も無いのかも知れない。待てよ。まだ年が寄つたと云ふ話を聞いたぞ。一代富限の金の溜まるまでには年も寄るだらう。ええ。こんな事なら此場はもうお松どんに任せて置いて、己は御免を蒙りたいものだな。

(主人樣子を覗ひつつ登場。)

主人　どんな按排でございますね。

蓮田　いや。まだしあはせと化の皮だけは剝げないでゐますよ。

主人　親王はどうしました。

蓮田　今便所に往つた所です。

主人　しつ。

(古川、女房登場。)主人古川に。)

古川　いや。毎度お世話になりますなあ。どうも温泉宿の數は多いが、ここの內程好く氣の附く內はありませんよ。

主人　恐れ入ります。もう今晩はお湯は召しませんでございませうか。

古川　いや。さつき車から下りると、顏を洗ひに往つて、飛び込んで來ましたから又あすの事にします。とかく年を寄ると、何事も氣が短くなつて、汽車に乘つてゐるうちから、著いたらすぐにあの綺麗な湯を浴びようと思つてゐました。何をするにもさうしたわけで。

(松登場。)

主人　お床を展べて來たのだな。奧のお火鉢にも火を入れて、お湯を掛けて置け。お湯呑も持つて來るのだぞ。

松　奧のお火鉢に火を入れるのでございますな。

主人　それからお湯を掛けて置くのだ。

松　そんなら奧のお火鉢に火を入れて、お湯を掛けて置くのでござりますな。

主人　それからお湯呑も持つて來るのだ。

松　(指を折る)　そんなら奧のお火鉢に火を入れて、お湯を掛けて置いて、それからお湯呑も持つて來るのでございますな。

主人　さうださうだ。

松　お火鉢の火と、お湯と、お湯呑と。

(指を折りつつ退場。)

古川　やれやれ。いつもながらえらいお世話になりますな。そこでお世話序に又面倒な事を頼みますがな。わしも丈夫のやうには見えてゐても、何分年が年だからいつどんな事があるかも知れませんて。どうぞ女中を一人こつちに寢させて置いて下されい。

（主人、蓮田表情あり。）

主人　へえ。仰やるまでも無く、それはその積にいたしてございます。（蓮田に）どうぞ好く氣を附けてお上申して下さい。

蓮田　あの、まことに行き屆きませんが、わたくしでお宜しい事なら。

古川　いや。あんたがゐてくれなされば安心ぢや。

主人　さやうならお休なさいまし。只今お湯を持たせてさし上げます。（退場）

古川　（獨語のやうに）やれやれ。年を取るといく地が無くなる。一日汽車に乘つてゐただけで脚がだるうてならぬ。

（羽織を脫ぐ。○蓮田に。）

あつちで横になるから、少し足を敲いて下さい。

（蓮田羽織を疊む。）

お前さん名はなんと云ふね。

蓮田　蓮と申します。

古川　はあ。お蓮さんか。そんなら、お蓮さん、御苦勞ながら少し敲いて貰ひませうか。

（古川奥へ退場。○蓮田表情ありて跡に隨ひ退場。舞臺一瞬間空虛になる。○小川拔足して登場。）

小川　（登場しつつ）どんな話をしてゐるか知らんが少し傍聽して遣りたいものだな。（窺ふ）や。もう奥へ連れて行つてしまつた。親爺なかなかすばやいな。（間）するとcatastropheが目前に迫つてゐるぞ。

（主人拔足して登場。○小川主人に。）

もう奥へ連れて行つてゐますぜ。

主人　へえ。（間）どうなりますかなあ。

小川　それは僕にも分からないですよ。とにかくまだ何事も無い所を見ると、化の皮が剝げずにゐるのですね。

主人　剝げずに濟みませうか。

小川　それは親玉が神妙にしてゐりやあ、あすまで位剝げずに濟むでせうよ。

主人　いえ。神妙にしてはゐない方でございますて。

小川　では剝げますね。

（古川奥よりあらあらしき樣子にて登場。）

古川　怪しからん。わしを誰だと思ふ。

（あたりを見廻してベルを搜す。）

亭主が承知して出したのなら、勘辨ならん。

（ベルを見附けて押す。）
瓣の無い女があるものか。
（松臺十能、薬罐、盆に載せたる湯呑を持ちて登場。）
こら。
松　はい。なんでござりますかな。
古川　まあ、そんな物はそこに置け。
松　これをここに置くのでござりますな。
（手に持ちたる物を置く。）
古川　お前は女か。
松　はい。女でござります。
古川　きつと女か。
松　きつと女でござります。
古川　瓣があるか。
松　なんでござりますな。
古川　瓣があるかと云ふのぢや。（手眞似）
松　（笑ふ）あんた、それはありますがな。
（蓮田恬然たる態度にて奥の口に立ち現れ、笑を忍びて覗ふ。）
古川　どうか知らんて。まあ、そこにすわつて見い。こんな怪しい内にゐる奴は、女が男やら、男が女やら、てんで分らんからな。どれ、ちよつと見せい。
（古川松の胸を探る。）
松　何なされます。好かん。
（古川の手を攫み、投げ倒す。十能覆る。○蓮田は奥より、亭主と小川とは外より登場。亭主は十能よりこぼれたる火を拾ふ。）
古川　（起き上がる）あゝ、痛い。わしを手籠にしをつた。これ。御亭主。
主人　（火を拾ひつつ）へい。あ。熱。換へたばかりの疊が。
古川　御亭主。火なんぞは拾はんでも好い。
主人　でも火事になります。
松　（主人に）あれで好うござりましたかな。
主人　（睨む）默つてゐるのだ。
松　默つてゐるのでござりますな。
古川　何があれで好い。何を默つてゐるのだ。
主人　（火を拾ひ畢りて）いえ。あれは別の話で。
古川　何から何まで怪しい内ぢや。御亭主。
主人　へい。
古川　（蓮田を顧みて）あの女は瓣が無いが、あれはどうしたわけですか。
（主人解せぬ振り。）
小川　わたしは此女の親戚のものですが、どう云ふ間違をいたしましたか。どうも。

古川　嗉が無い。（兩手にて我胸を押ふ）嗉が。

小川　（首を傾く）はてな。そんな筈はありませんがな。わたしは小さい時から一しよに育つて知つてゐますが。嗉首なら確かにあります。人並に二つあります。

古川　ふん。あるかも知れん。あつても小さい。まるで男ぢや。

小川　なる程、近頃改めても見ませんから、それは小さいかも知れません。男でも鴿の鳩のやうに嗉の大きいものもあれば、又女でも。

古川　それに胸毛が一面に生えてゐるが。

小川　へえ。それは心附きませんが、いつ生えましたやら。なに、パリイの女なぞには立派な八の字髭が生えたのもありますから。

古川　いや。もうあなたの御說明は承らんでも好い。○御亭主、嗉の無い、胸毛のある熊のやうな女やら、又牛馬のやうな力のある女やら、さてさて珍らしい奉公人を揃へてをられますな。わしはそんな家は嫌ぢや。どうも溫泉宿は數は多いが、ここの內程わけの分からぬ內はありませんよ。甚だ御面倒ぢやがすぐに勘定をして、車を一臺雇つて貰ひませう。

主人　恐れ入ります。以後氣を附けますが、御勘辨は。

古川　いえ。わしの方で御勘辨が願ひたい。

小川　なるたけ嗉をふくらませますやうに申し附けますが。

古川　お默りなさい。○あゝ羽織は。

（蓮田疊みありたる羽織を恭しく出す、古川憎げに見て、手より奪ふやうに羽織を取る。○幕。）

なのりそ

人物

大島崇　前某省次官。實業家

夫人芹子

令孃耿子

廣前漣　法學博士

石原介　畫家

書生

女中

時代

現代

場所

麹町。大島の居間

洋室。三つの戸口あり。正面の戸は二階に登る梯子に通す。見物より右の戸は日本造りの奥と勝手とに通す。左の戸は廊下にて玄關と書生部屋とに通す。戸口と戸口との間に窗。

右手に背景の壁に附けて、大なるデスクを据ゑあり。その前に籐の腕椅子を置く。中央に大卓。盆栽、大册の書籍、火具、灰皿など載せあり。花瓣形の硝子に花を挿したるものあり。左手にピアノあり。その上に、In-quarto 板の樂譜あまた亂雜に積み上げ、中央に Wagner の石膏胸像を据ゑあり。

幕あくとき、主人和服著流しにて、白縮緬の兵兒帶を締め、見物に背を向けて、腕椅子に掛け、デスクに向ひ、日本文房具を使ひ、卷紙に手紙を書きゐる。頒白の五分刈頭。嚴めしき容貌。左手の戸を外より叩く音す。

大島　お這入りなさい。

（書生登場。小倉袴。）

書生　（名刺を出す）此方が御面會を願ひたいと仰やります。

大島　（名刺を受け取り見て、デスクの上に置く）ここへ通してくれ給へ。

書生　はい。

（書生左手の戸口より退場。主人書きさしたる手紙を置きて起ち、中央の卓の前に歩み寄る。再び左手の戸を外より叩く音す。）

大島　お這入りなさい。

（廣前博士左の戸を開き、登場。黑の洋服。八字髭。

立派なる風采。）
廣前君ですか。どうぞお掛け下さい。
（廣前坐す。大島も坐す。）

廣前　どうも唐突に伺ひまして甚だ。（間）實は那珂君に萬事依頼して置きましたところが、妙な成行になりまして。

大島　いや。こちらから破格な事を申し出して、たうとう御苦勞を煩はなくてはならないやうな次第で、丁度唯今那珂君に御返事を出さうと思つてゐた處でした。どうも娘が我儘な事を申すものですから。

廣前　いいえ。わたくしは又お孃さんのお考が至極面白いと思ふのです。遣るだの、貰ふだのと云ふのは、女を品物扱ひにするのだ。先づ知合になつて、その上で雙方得心づくの結婚が成り立たなくてはならないと仰やるのださうですな。さう云ふお考の方なら、これから先き新しい世の中で用立つ樣に、子供を教育して行くことも、十分お出來にならうと思ひます。とにかくお近附になりたいと存じまして。

大島　なる程。さうお取りになつて下されば、實に望外の爲合せです。これまでも諸方から話がございましたが、娘の申すことが、餘り在來の習慣と違ふものですから、皆纏まらずにしまひました。

（小間使茶を持つて、右の戸口より登場。客の顔を偸むやうに、しかも念入りに見る。主人小間使に。）
奧さんに廣前さんがお出でになつたと云つてくれ。それから香茶でもな。

小間使　はい。
（右の戸口より、廣前を振り返り見つつ退場。）

大島　まあ、あなたのやうな方がお出でになるので、こちらの娘のやうなものが爲合せします。實はわたくしにしたところが、もう殆二十年前の事ではありますが、洋行もいたしたものですから、歐米の風俗習慣でも、善いものは他山の石として、取つて用ゐることに異論は無いのです。（少し聲を大きくして）唯大和魂だけは無くして貰ひたく無いので。

廣前　いや。御同感です。なんでもこれから先き、日本の國家社會で有用の材となるには、和魂洋才で無くては行けません。

大島　いや。これは頼母しい。ははは。（傲大に笑ふ。廣前も主人と顔を見合せて、附合ひに共に笑ふ）ところがですな。娘なんぞはどうも少しヨオロッパに心醉してゐはしないかと思はれてならないのです。まあ、このお話が旨く運んで、娘をあなたのやうな方に托することが出來ますれば、安心ですが。

（夫人卉子登場。和服。跡より小間使香茶を持ちて登場。小間使香茶を主客の前に置き、退場。）

これが妻で。（夫人に）廣前さんだ。

（廣前立つ。）

夫人　初めまして。好くお出で下さいました。あの那珂さんから色色お話を承はつてをります。どうも娘が不束ものでございまして。

廣前　（愛想に微笑む）いや。わたしこそどうも落第いたしさうでございます。

夫人　（著座す。廣前も席に復す。夫人間の悪き様子）ほんに飛んだ不躾な事を申しまして、宅でも申わけがないと申してをりますのでございます。好くまあおおこり遊ばさないで、入らつしやつて下さいました。（間）いいえ。實は極正直な、心になんのわだかまりも無い子なのでございますが、あまやかして育てましたものでございますから、我儘を申し出しますと、誰がなんと申しても聞きません。宅も初めの中は小言を申しましたが、もう此頃は駄目だと申しまして、取り合ひませんのでございます。それだもんでございますから、わたくしが一人で心配いたしまして、どうぞまあ、あんなものでも、面倒を見て遣らうと仰やる方がございますなら、さう云ふ方にお願ひ申して、少しも早く安心がいたしたいと存じまして。

廣前　（匙にて香茶を掻き廻しつつ）ははあ。なる程、なる程。

大島　（夫人に）耿子はゐるかい。

夫人　いいえ。あの、指ケ谷へ預けてお置きになりました馬が、もう調教が出來まして、大丈夫だと申して、調馬手が今朝乘つて參りましたのでございます。それを見ますと、直ぐに乘つて出ると申しました、わたくしが留めましても、どうしても聽かないのでございます。

大島　乘つて出たのか。

夫人　たうとう乘つて出まして、まだ歸つて參りません。先刻から石原さんがけふは耿子がポオズをいたすお約束だと云ふので、來て待つて入らつしやるのでございますが、なかなか歸りませんので。

大島　困つた奴だなあ。新馬はあぶないが。

廣前　馬にお乘りになるのですな。

夫人　はい。馬が大好でございまして、自分で飼を附ますのでございます。宅が馬車の方があぶなく無くて好いと申しましても、どうしても聽かないのでございます。自動車を買つてくれるなら、乘つても好いなんと申してゐますので。

廣前　なる程。それは自動車の方がお好きでせう。とにか

くお元氣ですなあ。

（右手の戸を叩く音す。）

夫人　お這入り遊ばせ。（主人に）きつと石原さんでございます。

（畫家石原介登場。背廣。頭髪など好くも梳らず、總て身なりに搆はざる様子。主人に輕く會釋す。廣前を一目見て。格別意に介せず、棒立ちに立ちゐる。夫人石原に。）

あの、まだ歸りませんのでございます。（廣前に）この方は、あの、油畫をおかきになる石原さんで入らつしやいます。（石原に）法科大學の廣前さんで。

石原　（廣前に）石原介です。

廣前　わたくしは廣前で。お孃さんのポルトレエをおかきださうですな。拜見いたしたいもので。

石原　まだなかなかですよ。跳ね廻つてばかりゐて、ポオズをしてくれませんからなあ。

（廣前主人夫婦を、氣兼をするやうに見て、短く、わざとらしく笑ふ。）

夫人　あんまり苦情を仰やいますから、さつきもわたくしが身代りに据わつて上げませうかと申したのでございます。併しわたくしではお役に立たないさうでございます。

（笑ふ）

廣前　なる程。お身代りではむづかしいでせう。

石原　なに。首と體と別別のモデエルも無いことは無いのですが。

廣前　奥さんのシヤルムとお孃さんのシヤルムとは、自らその趣を殊にしてゐるでせうてね。

石原　（廣前の世辭にあきたらざる態度にて、ちよいと顔を見る。夫人に）僕はけふはお暇をします。

夫人　あら。なんぼなんだつて、もう今に歸つてまゐりますわ。それに、（主人と廣前とを顧みる）廣前さんもどうせお午にお殘り下さいますでせうから、あなたも入らつしやつて下さいましな。

大島　うん。廣前さんにはまだ伺はなかつたが、是非さう願ふ積でゐたのだ。（廣前に）お差支が無いなら、どうぞさう願ひたいのですが。

廣前　いや。難有うございます。御馳走になりませう。

夫人　（石原に）ねえ、あなたもお午まで入らつしやいましな。

石原　さうですな。（時計を出して見る）では、どうせ御來客もありますし、セアンスは駄目らしいから、僕は少し散歩をして、お午頃に歸つて來ます。

（石原左手の戸口より退場。）

夫人　（跡より）そんならお忘れにならないでね。（間）

あら。もう行つておしまひになつたのね。ほんたうにぶつきらぼうの方だこと。

廣前　面白さうな人ですね。

夫人　ええ。それは變つて入らつしやいますの。厭な肖像は頼まれてもかかないと仰やるのですつてね。耿子は妙な事でかいて戴くことになりました。それはあの此頃又開店いたしました、あの神田の琅玕洞で、あの方の畫ばかし見せましたとき、耿子が行つて見てゐますと、あの方の方からかかせてくれろと、お頼みになりましたさうで。

廣前　そりやあ御承諾になつて喜んだでせう。

大島　（笑ふ）内では石原さんが來出してから、耿子の事を七色唐芥子と云つてゐます。

廣前　どう云ふわけですか。

夫人　いいえ。それはかうなのでございます。耿子が石原さんにかかせて上げるのだ、かいて貰ふのとは違ふと云つて、大さう息張つてゐますと、新聞に可笑しい話が出ましたのでございます。まだ石原さんが只今のやうに、名高くおなりなさらない時の事で、淺草の仲見世に七色唐芥子を賣つてゐる婆あさんがゐるのを、あの方が御覽になつて、丁度耿子に仰やつたやうに、是非お前の顏をかかせてくれろと仰やつたのださうでございます。ところが、その婆あさんは耿子と違つて、どうしてもかかせなかつたとか申すことで。

（三人笑ふ。主人ふと窗の方を見る。）

大島　（夫人に）孃が歸つたと見えて、既に馬を引きいれてゐるやうだね。

夫人　それではわたくしちよつと。（右手の戸口へ行かんとす）

大島　まあ、待つてくれ。お前が行つて、彼此指圖がましい事を言ふと、却つて惡いかも知れないよ。（廣前に）これが世間の娘ならば母が行つて氣を附けて遣つて、お引合せをするのが、當り前でせうが、例の變りもののことですから、どうかすると反感を起して、まづい事になるかも知れませんからなあ。

廣前　ははあ。なる程。

夫人　ではどういたしませう。

大島　さうだて。己の思ふには、なんでも自分の事は自分で捌きたいと云つてゐるのだから、われわれは手を引いてゐて、孃が一人で廣前さんにお目に掛かるやうにした方が好いだらうと思ふのだ。己は二階に調べ物のし掛けたのがあるから、それを遣つてゐる事にする。そこでお前が行つて、お客にお目に掛かれと、孃に言ふのだな。

夫人　（案ずる樣子）さやうでございますね。そんな事を

いたさせましたら、廣前さんに飛んだ失禮な事なんぞを申上げはいたしますまいか。

廣前　その御心配はありません。わたくしの方では、お孃さんがどんな事を仰やつたつて驚きません。（反身になつて、得意の様子。さて何か思ひ附きたる如く）おう。それから、わたくしが廣前だといふことを仰やらないで、只那珂から話のあつた事で、逢ひたいと云つて來てゐるものがあると、さう仰やつてお貰ひ申したいのですが。

夫人　はい。それでは、あの、丸でお名前を申しませんで。

（合點の行きかねる様子にて、主人を顧みる）

廣前　ええ。さうです。誰だと仰やらないで宜しいのです。

大島　廣前さんがさうしたいと云はれるなら、それで好いぢや無いか、何かお考のあることだらうから。

夫人　では、まあ、そんな風に申して置きませう。（廣前に）まことに我儘ものでございまして、失禮を申上げるかも知れませんが、どうぞお氣にお掛け遊ばさないやうに。そんなら、ちよつと御免下さいまし。

（尙釋然たらざる様子にて、右手の戸口より退場。）

大島　どう云ふお考ですか。

廣前　いや。別にむづかしい考は無いのですが、實は此場合お孃さんとテタアテツトでお話をして、直ぐに撃退せられるのもつらいです。そこで先つき奥さんのお話のあつた、身代りのボオズと云ふことから思ひ付いて、先づ廣前で無く序開きをして見ました上で、或る機會を見て、實はわたくしが本人だと、假面を脱がうかと思ふのですが。

大島　なる程。さう云ふお考ですか。いや、とにかく一筋繩では行かない奴で親も持て餘してゐるのですから、その位なタクチツクはお用ゐになるも好いでせう。どうもかう云ふ世の中の様子になつて見れば、いたし方が無いですから、自由結婚がしたいと云ふものには、形式だけの自由結婚をさせて、こつちの腹は女大學で行くですな。（二人肝膽相照すと云ふ風にて笑ふ）　申すまでも無いですが、娘さへ折り合へば、わたくし共夫婦のためには、あなたは此上も無い佳婿です。そんなら暫時御免を蒙つて、蔭ながら御成功を祈つてゐませう。いづれ後程。

（主人會釋して、中央の戸口より退場。廣前默して會釋し、主人を見送り、一人殘りてあたりを見廻し、日覆にて蔭になりゐる方角の窗硝子を鏡にして、容儀を繕ひ卓の上の新聞を取り、椅子に坐して讀みゐる。暫くして右手の戸口より、令孃耿子登場。乘馬服を著て、手に鞭を持ちて入り來り鞭を卓の上に置く。廣前は間の惡き中に、高が女なればと、相手を侮りたる態度、耿子は極て平氣なる様子にて、暫時對立して互に顔を

見合せゐる。）

耿子　わたくしが耿子でございますが、あの那珂さんからお話のあつた事件に就いて、わたくしにお逢ひなさりたいと仰やるのはあなたでございますか。

廣前　お嬢さんですか。お會ひを願つたのはわたくしです。（以下考へ考へ捏造して言ふ樣なる語調）　實は廣前はわたくしの親友ですが、いよいよこちらへお尋ねをしなくてはならない事になりましたので、色色心配しましてね。家庭によつて色色習慣やなんぞがあるものですから、どんな時にお尋ねしたら好いだらうか、どんな時ならお嬢さんにお目に掛かるに都合が好いだらうかなんと云つてゐるのです。那珂君に相談をしても、お嬢さんは只自然の成行きに任せると云つてをられるのだから、打ち合せたやうな事は出來ないと云つて相手にしないさうです。なる程、人は最初に逢つた時の感じが大切なものですから、廣前の身になつて見ますと、取返しの付かないやうな事をすまいと思つて愼重に考へてゐるのも無理は無いやうです。

耿子　（油斷無く相手を觀察してゐる樣なる樣子）　まあ男の方と云ふものは、そんな風に物をお考へになるのでせうか。（稍卑む調子）　それではさぞお窮屈な事でせうね。それは最初に逢つた時の感じは大切でございませうとも。わたくしもさやうかと存じまするの。でもわたしなんぞはなん時でも最初に逢ひますわ。前極め無しにでございますね。（間）　まあ。あなたお掛け遊ばせな。（椅子に掛く）

廣前　難有う。（椅子に掛く）

耿子　（肘を卓に衝き、觀察の態度を維持しつつも、緊張を弛め稍 se laisser aller の心持になる）　わたくしなんぞは只今も始ての馬に乘つて見ましたの。

廣前　お父樣に伺ひましたよ。どうでした。

耿子　とにかくまだ向うの癖だの、習慣だのは丸で分つてゐませんでしたのね。でも、もうなんだかお互に氣心が分かつたやうな心持がいたしますわ。

廣前　最初の感じですか。

耿子　ええ。もうわたくしそんなに馬鹿にはせられない積りでございますの。今日始て乘らなければ、明日始て乘らなくてはなりませんのでしたからね。

廣前　なる程。（少し間の惡き樣子）　併しですな、結果がどうなるか分からない事は跡へ延ばして置いて見るといふのも、場合によつては適當な處置では無いでせうか。待つてゐるのですね。觀望してゐるのですね。政治家なんぞは隨分さう云ふ態度を取らなくてはならない場合がありさうですが。

耿子　それはありませうとも、でも、それはきつと弱點のある場合ですわ。外交で言つて見ますると、その政治家の知つた事では無いまでも、國に戰爭の準備が出來てないとかなんとか云ふ場合で、きつぱりした處置が出來ないのですね。觀望なんと云ふことは、已むを得ない時に限るのですね。若しさう云ふ弱點が無いのに、觀望なんぞをしてゐれば、その政治家が意久地無しですわ。

廣前　併し少しも待たずに、なんでも直ぐに遣つて見ると云ふのは、冒險では無いでせうか。弱點があるのに、萬一を僥倖して遣るのは無論非常に危險ですし、さうで無くても、なるたけ損害を少くして、なるたけ利益を大きくしようと云ふには、時機を待つ必要があるのでは無いでせうか。

耿子　おや。それであなたは萬全の策を取ると好いと仰やいますのね。

廣前　さうですね。萬全の策を取ると云つては、あんまり用心し過ぎるやうに聞えるかも知れません。併し身を保つ、自己を保存するといふことを考へなくちやあ。

耿子　わたくし、もう分かりましたわ。あなたは大ぶわたくしとは違つたお考へを持つて入らつしやいますのね。わたくし冒險が大好きでございますの。

廣前　（强ひて笑ふ）　空想の上でせう。

耿子　いいえ。實際。

廣前　空想を實際のやうに思つてお出でなさるのでは無いでせうか。

耿子　（眞面目に）　あら。そんな事を仰やれば、侮辱ですわ。

廣前　（又强ひて笑ふ）　いや。これは失敬でした。（たゆたひつつ）　なる程わたくしも、お孃さんのやうな若い婦人の心の持方を考へて見れば、あなたの仰やるやうな生き生きした、面白いお心持でお出でになるのも好いでせう。男はどうもさうは行かないですね。あなただつて、安心して、たよりにして入らつしやる夫は、冒險家で無い、輕はずみな事をしない人で無くてはならないでせう。

耿子　あなたやつぱりわたくしを侮辱して入らつしやいますのね。女なら好いが、男はかう無くてはならないと仰やるのは、可笑しうございますわ。それに輕はずみなんぞは、女だつて男だつて行けませんわ。わたくしが冒險と申したのは、あぶなくつてもなんでも、自分のしようと思ふ事をするのが好いといふ意味でございます。なんでもわたくしの夫になる人は、わたくしより一歩先に進んで行く人で、わたくしがやつと追附いて行くやうで無くつてはつまりませんわ。（立ちて硝子に挿しある花を一輪摘みて弄ぶ）　あの廣前さんはあなたのお友達なの

ですつてね。どんな方で入らつしやいますの。矢つ張りあなたとお氣が合つて入らつしやるのでせうね。輕はずみな事がお嫌ひで。

廣前　（答に窮する樣子）　さやうですね。わたくしと全然同じ考へを持つてゐるといふわけでも無いのですが、とにかく洋行して歸つても西洋に心醉はしない。彼れの物質的の開化は勿論、道德や宗教の方面をも觀察して歸つて、好い處は取つて用ゐる。併し日本人の日本人たる所は飽まで棄てないといふ考へでゐるらしいのですね。

耿子　（微笑む）　あら。そんな事を承はつたつて、どんな方だか、ちつとも見當が附きませんわ。日本人の日本人たる所なんといふことは、それは誰だつて默つて行つてゐれば宜しい事なのでございます。あなたの仰やるやうな事は極物の分からない、頭の古い人が洋行して歸つても、丁度そんな風に申してゐますからね。それから横著な方が、今の反動の世の中で爲事をするために頭の古い人の受けの好いやうに、あなたの仰やるやうな言草を、洋行土產に持つて來て、人に配るのもありますわ。そんな人は皆駄目ですからね。（花をゆつくりむしりて棄つ）あの、廣前さんは心から得意で入らつしやる方なのでせうか。

廣前　さやう。まあ、失意では無いでせう。

耿子　では不平なんぞはおありなさらないのですね。（廣前をきつと見て、殆宣告する如く）　わたくし生利な事を申しますやうですが、只今の外國の樣子を見てお歸りになつて日本社會に對して不平のおありなさらないやうな方なら、それはつまらない方かと存じますの。

廣前　（耿子の詞と態度とに刺戟せられて、覺えず少しく反抗す）　では、あなたは不平家がお好きですか。物好きですね。（强ひて笑ふ）　廣前なんぞは先づ順境ばかりを渡つて來た人間と云つて好いでせう。現に今だつても逆境にゐるといふわけでも無いやうですから、不平家ではありますまい。社會で自分の占めてゐる地位に安んじて、別に誰を羨むとか妬むとか云ふことも無く、まあ、こつこつ爲事をして行くらしいですから。

耿子　（又はればれしして微笑む）　あなた感心な方ね。熱心に辯護してお上げなさいますわねえ。ですけれどあなた誤解して入らつしやいますわ。わたくしの不平と申しますのは、そんな地位が出來れば無くなつてしまふやうな不平ではございませんの。

廣前　（少し慌てて）　そしてどんな不平ですか。

耿子　まあ、なんと申したら好いでせう。立派な地位にゐても、順境に立つても、持つてゐる人は永遠に持つてゐる不平ですね。神聖なる不平とでも申しませうか。此不

平は、それを持つてゐたつて、繼子根性を起して、引つ込んでしまふやうな不平ではございません。人間は此不平が動機になつて斃れるまで働くのでございますね。

廣前　(前の相手を侮りたる態度に復る)　ふん。やつぱり理想に向つてのあこがれと云ふやうな物ですね。男子は當面の事實を目當に爲事をして行くのですから、さうは行かないですね。

耿子　(rudement に廣前に背を向けつつ)　まあ、男の方といふものが皆そんなものでせうか。ほんたうに厭になつてしまひますわ。

(耿子ピアノの前へ進み行き、回旋椅子に掛け、手當り次第に樂譜を取り卸し、翻し見る。左手の戸を敲く音。)

どなた。

(石原左手の戸口より登場。默りて棒立ちに立ちゐる。ぼんやりしてゐる如くなれども、直覺的に situation を看取したる樣子。耿子樂譜を手より放し立ち上がる。)

おや。石原さん。

石原　實はけふ手の處をしつかり遣る積りで來たのにあなたが馬に乘つて出てしまつたもんだから、駄目になつたのです。

耿子　あら。濟みませんわねえ。直ぐに歸る積りなのが、つい遲くなりましたの。

石原　丸で忘れたのでは無いのですか。

耿子　ひどいわ。いくらの事だつて、忘れてなんぞしまふもんですか。もう石原さんが入らつしやりはしないかしらと、思ひながら乘つてゐましたの。

石原　思ひながら乘つてゐたのですか。(無遠慮に笑ふ)なんにもなりやしない。

耿子　でも忘れたのでは無いのですわ。

石原　ふん。覺えてゐて歸らなかつたとすると、忘れたより罪が重いかも知れない。

耿子　さうだと、つまらない分疏(いひわけ)をしましたわね。(獨語のやうに)　ほんたうに知つてゐた方が惡いかしら。

石原　それは法律家の扱ひさうな心理問題ですなあ。廣前さんにでも聞かなくては。

(廣前の方へ歩み寄る。これまで廣前は勉めて平氣を粧ひ、あちこち歩き此時窗の外などを見出してゐる。廣前は精神上に苦痛を覺ゆるにはあらず。只 ridicule なる愧めより、奈何に身を脫せんかと思ひゐたるなり。此時何事も無き如く、寧ろ大樣に石原に立ち向ふ。耿子は「廣前さん」と云ふ詞を聞きて、目かがやき、二人の樣子をきつと見る。石原、廣前に。)

先刻は失敬しました。

耿子　（殆同時に、廣前に）　あなた廣前さんでございますつてね。

廣前　（平氣な粧ひ得て、殆成功したる態度にて笑ふ）　さつきからお孃さんと大いに議論を上下しましたよ。

耿子　（廣前の前に一歩進む）　あなたひどい方ね。

廣前　（考へ考へ云ふ）　わたくしが名告らなかつたからと云ふのですか。實は御遠慮の無いお話を伺ひたいと思つたものですから。

耿子　まあ。名告りなすつたら、御遠慮をいたすかとお思ひなさいましたの。（廣前默りゐる）　わたくし、どなたにだつて、御遠慮なんぞいたしませんわ。

廣前　それでは徒勞でしたかなあ。（强ひて笑ふ）

耿子　全くですわ。（石原に）　ねえ、石原さん。わたくし御遠慮なんかしませんわねえ。

石原　さうですなあ。世間のお孃さんといふものは、もう少し遠慮するものでせう。併し僕なんぞはあなたの流義の方が、面倒で無くつて好いのです。

女中　（右手の戸口より登場。耿子に）　御飯に入らつしやいますやうに。

耿子　ああ。さう。只今お客樣を御案内申しますと、さうお云ひ。

（女中退場。石原に。）

わたくし二階へ參つて、父にさう申してまゐりますから　あなた廣前さんと御一しよにお先へ入らつしやつて下さいましな。（梯子を登り掛かる）

石原　（廣前に）　さあ、僕が御案内しませう。（二人右手へ行き掛かる。幕。）

團子阪（對話）

女學生（手に violin を持ちゐる）それでは送つて來て下さるの。御迷惑でせう。

男學生　僕は迷惑だと思へば強ひて爲やしません。それでも自分の爲るだけの事は責任を以て爲る積です。

女　それはわたくしだつて、良心に問うて見て悪いと思ふやうな事はしませんわ。でも、又あなたの處へ寄つたのは祕密よ。

男　その祕密ですがねえ。僕は疾うからあなたに言はう言はうと思つてゐましたが、あなたはこんな事をいつまでも繼續しようと思つてゐるのですか。

女　まあそれぢやあ矢つ張り御迷惑なのね。（間）　さうならさうで好くつてよ。

男　僕の云ふ事を誤解しては行けません。僕はこんな事を繼續するのは不可能だと思ふから、さう云ふのです。

女　何故でせう。不可能だと仰やるのは、お嫌だからでせう。

男　そんな風に話が tautological（トオトロジカル）になつてしまつては爲樣が無いのですが、僕は嫌だの嫌で無いのといふわけではありません。こんな事は繼續が出來ない。早晩どうにか變化せずには已まない。あなたが何と思つてゐたつて、僕が何と思つたつて、變化しないわけには行かないと云ふのです。

女　それがわたくしには分かりませんわ。意志次第では無いでせうか。

男　そりやあさうです。併し意志なんといふものは、馬のやうなもので、馬には引掛けられることもありますからね。

女　それでは意志が弱いのでは無いでせうか。

男　ええ。その通です。僕の意志は弱いといふことを、僕は發見したのです。

女　まあ。あなたなんぞがそんなことを。（間）　おや。もう橋の處へ來ましたのね。

男　三四郎が何とかいふ綺麗なお嬢さんと此所から曲つたのです。

女　ええ。Stray sheep（ストレエ　シープ）!

男　sheep なら好いが、僕なんぞはどうかすると、wolf（ウルフ）になりさうです。

女　（笑ふ）　あなたのやうな wolf なんか剛（こは）かありませんわ。

男　あなたはさう思つてゐますか。剛いと思ふものに對しては警戒するから大丈夫です。剛く無いと思つてゐるものが危險なのです。

女　あなたは悪い方ね。そんな事を言つて人を嚇かさうと思つて。

男　笑談ぢやあ無いのです。僕があなたを嚇して何にするものですか。僕は意志が弱いと云ひました。僕がさう云ふのは、つまらない謙遜なんかするのでは無いのです。僕は自分の事だからつて、實際より悪く云ふことは嫌です。意志が弱いと云つては、僕の思つてゐる事をはつきり言ひ顯はしてゐない。僕の意志には鞭を加へねばならないやうな事はありません。轡が利かなくなるかも知れないと云ふのです。轡で控へてゐるのが面倒になるときが來はすまいかと云ふのです。

女　でも、あなたがそんな事を言つて下すつては、わたくしはどうして好いか分からなくなつてよ。あなたとお話が出來なくなつてしまつては、わたくしの生活には光明も何も無くなつてしまふのですから。

男　そりや僕だつて平氣であなたと交際をしない樣になれるといふのではありません。實はあの初音町の下宿はもう廢してしまはうかと思ふ位です。あなたが此所の處にすわつてゐてから云つたといふ樣な記念があつて僕だつて落ち付いてゐられないかも知れません。（間）藪下の方へ行きませうか。

女　どつちでも好うございますわ。あつ。あぶない。だしぬけに駈けて來て。も少しでぶつ付かる處だつた。

男　藪下へ曲れば好かつた。此通ぐらゐ子供のうようよしてゐる通はありやしない。

女　何故でせう。

男　この邊のものは繁殖の力が強いのでせう。Fecundity といふ小說を、千駄木町を舞臺にして書くと好い。歩くにも歩けやしない。

女　打つ附かつたつて、子供は憎くはありませんわ。

男　あなたの考へは飽くまで女性的ですね。それだから僕の云ふことなんか分からないのです。

女　さうでせうか。でも、わたくしの方では、樂しく思つてゐられるのに、あなたばかり不可能になるといふのが不思議なのですもの。

男　それが女性的だといふのです。なんでも物を情緒の薄明で見てゐるのですから。

女　それはさうですとも。あなたのやうに、なんでも掴まへて、殘酷に分析してしまひたくは無いわ。

男　それです。だからあなたには現狀維持が出來て、僕には出來ないのです。あなたはいつでも清い交際といふこ

とを言つてゐるでせう。あの淸いといふのが、情緒の薄明で見るから、淸いのです。僕はわざわざ強い、caustic な藥なんぞを使つて分析するのではありません。唯自ら欺きたく無いのです。僞善者になりたくないのです。あなたが僕の傍に來て、いくら堅くしてゐたつて、僕の目はあなたの體のどんな線をだつて見ます。そしてあなたはそれを防ぐことは出來ないのです。

女　隨分だわね。（下を向いて歩く）

男　一體あなたのいつも言つてゐる淸い交際といふものですね。僕の方でも云つてゐたのですが、そんな事が不可能だといふことは、歐羅巴なんぞには一人だつて知らないものはありますまい。男ばかりでは無い。女だつて知つてゐませう。あれはつい此頃皮相な西洋風の學問をした日本人の言ひ出した事です。小說家なんぞも手傳つて廣めたのでせう。Nonsense です。

女　（突然笑ふ）おう。剛い事。あなたは此頃きつと何かお讀なすつたのね。Mephisto とかいふ鬼なんぞは、そんな事を言ふのでせう。わたくしほんたうは剛くもなんとも無くつてよ。（間）あら。御覽なさい。紅葉屋の看板が逆になつてゐますのね。

男　破産したのです。

女　まあ。それでは此邊にはあなたと御一しよに參る處は無くなりましたのね。

男　さうです。あなたと始て行つて珈琲を飲んだ菊香堂が潰れてしまつて、こん度は紅葉屋が潰れたのです。この次は初音町の下宿が明間になるのです。

女　あなたはどこかへ越してさへしまへば、わたくしが行かなくなると思つて入らつしやるの。越すと云つたつてどうせ大學に近い處なんでせう。わたくし尋ねて行くわ。（間）あら。眞直に行つておしまひなさるの。

男　（默りて跡戾して太田の原へ曲る。間）それでは僕が何と云つても聽かないのですね。

女　嫌だわ。そんな眞面目な顏なんかして。そんなにわたくしを窘めなくつたつて好いでせう。（男學生默りてゐる）好いわ。あした寄つて好く伺ふから。

男　僕はあしたまでに越してしまひます。

女　まあ。（眞面目に）越して入らつしやつたつて、あの、わたくしはこれ切お目に掛からずにゐることは出來ないのですから、どこまでも尋ねて參りますわ。（語氣強く）そして好く伺はなくつちやあなりません。（間）悔やしいわ。

男　（默りて少し歩く）たうとう此所の處まで來てしまつた。そんなら僕はもう卑怯らしく越すなんとは云ひません。僕はあなたを憎いとも思はないし、侮辱しようとも

思はないのです。それではあした待つてゐます。（立留まる）

女　あしたはわたくしも決心して參りますわ。（小走に狹き生垣と生垣との間に曲る。終。）

さへづり（對話）

洋室。卓。椅子。長椅子。瓦斯爐。
家の娘梅子卓の上の灰皿などの位置を直しゐる。束髪お召の不斷着。

小間使　（登場）　入らつしやいました。（退場）
（續きて客百合子戸口に現る。手縫の青色薔薇の花を着けたる、黒の大帽子。黒の paletot 式外套。鼠色の毛皮の襟卷。同じ色のマッフ。鼠色の肘まである手袋。チラン附小形の蝙蝠傘を持つ。）
梅子　まあ。（二人暫く顏を見合せてゐる）
百合子　久し振だわねえ。
梅子　（歩み近づきつつ）　まあ、もつとこちらへ這入つて好く見せて頂戴よう。
百合子　でもここに這入ると暑いわ。
梅子　（目を睜りて百合子の姿を見ゐたるが）　ほんとに好いことね。それでまだ日本語を忘れずに入らつしやつたところが不思議だわ。それはさうと、もう澤山拜見しましたから、さあ、樂におしなさいよ。
百合子　（長椅子に歩み寄り、傘を寄せ掛け置き、マッフを置き襟卷を脱して置く）　大變お内の樣子が變つたことね。洋室がお出來になつて。
梅子　木に竹を接いだやうね。まさか直ぐにお歸りでは無いでせう。帽や外套は。
百合子　今取りますわ。わたしは泊らずに歸つては行けないのでしたつけね。（鏡の前に行き、手袋を脱ぎ、帽の留針を拔き、帽を脱ぐ。幅廣けれども匾たき束髪現る）可笑しいのよ。此頃あつちでは此針が長過ぎると、巡査が小言を言ふの。（髪を直す）
梅子　まあ。危ないからなのでせうか。
（小間使香茶と菓子とを持ちて登場。卓の上に置きて退場。）
お茶をお上りなさいよ。
百合子　（外套の控鈕を脱しつつ）　今戴きますわ。（外套を脱ぐ。一切の紐などの飾を避けたる、薄青色の羅紗服。前中央にて、襟より足首まで一綫に合せあり。天然の形に隨ひて垂る。襟には狹きアイルランド製のレエスを著け、肘と足首とに毛皮の縁を取りあり。幅廣き黒き帶を左乳の下にて留む。外套に手袋を持ち添へて、長椅子の上へ運ばんとす）
梅子　あらわたしが。（手を出だす）

百合子　いいえ。そんなに不精になつてはゐませんわ。（自分にて持ち行く）いつでも一しよに遊ぶと、わたしが片附役だつたぢやありませんか。

（卓に倚る。）

梅子　（同じく卓に倚る）お茶をお上んなさいよ。（二人茶を飲む）わたしが何もかもごちやごちやにして置くと、あなたが壞しては行けないものと、壞しても好いものと、別別にして置けと云つて、敎へて下すつたつけねえ。西洋の子供もやつぱりおもちやを壞すでせうか。

百合子　それは同じ事よ。中がどうなつてゐるだらうかと思つて、壞して見る氣になるのだわ。それでもつまり誰かしら傍にゐて、お師匠さん振つて世話を燒くのね。どこの家庭でも秩序を敎へ込むといふことがやかましいのですから、家庭敎師のゐる內となると、子供が可哀さうになる位よ。

梅子　Gouvernante（グエルナント）つてこはいものでせうね。

百合子　さうよ。あなたまだ二葉會へ行つて入らつしつて。

梅子　行つてゐますの。もうあなたの入らつしつた時とは、人が大變變つてしまつてよ。

百合子　その筈だわ。丸二年立つたのですもの。

梅子　さう。丸二年だわねえ。そして隨分いろんな處へ入らつしつたのね。繪葉書を澤山下すつて有難うよ。わたし新しいAlbum（アルバム）を買つて、あなたの所から來たのだけ別にして置いてよ。

百合子　そりやあ、なにしろ、ヨオロッパ中大抵歩いて、一晩でも泊つた所からは、きつと葉書を出したのですもの。

梅子　でもパリイのが一番多かつたのね。

百合子　そりやあ丸一年ゐたのですもの。

梅子　パリイの處女時代の生活はどんな工合。

百合子　上流社會では日蔭者なの。寄宿舍に入れて置かれて、外へ出るときは監督が附いて出るといふ風なのですからね。

梅子　でも世界の流行の家元なのですから、好い著物を著るでせうね。

百合子　さうね。それは隨分憂身を窶すのよ。三越のやうな家へ行つて、梯子を上がつたり降りたり、勘定して見たら、何里あるか知れない程歩いて、何か選り出すとなると、膝の下で縛られてゐるやうな著物を著て一時間も立つてゐて、やつと見附けると、そこを出て、又外の三越のやうな家へ行つて、又同じ事をして、草臥れたやうな顏もしないの。それから爲立屋（したてや）へ行くでせう。東京では飯島がまだ一軒しか無くつて、少し好いのを拵へるとなると、橫濱のイギリス人のゐる店まで出掛けなくては

ならないでせう。それがパリイでは立派な服の出來る内が何百軒あるか知れないわ。まあ、そのどれかへ行くでせう。爲立物師は大抵女なの。その相談がなかなか大變よ。まあ、相談が纏まるまで一寸三時間は掛かるのね。右へ向かせられる。左へ向かせられる。前から見る。背後から見る。著せられる。脱がせられる。間で腰を掛けて休むなんといふことは無いわ。丸で鏡の前でぐるぐる廻りをさせられて、平氣なのよ。

梅子　まあ。大變お金が掛かるでせうね。

百合子　それが妙なわけなの。ほんたうにお金の掛かるのは寶石なのよ。それは際限は無いわねえ。寶石を除けては、裸で行つて、あらゆる場合に一通り間に合ふやうな服裝をそつくり調へた所で、千圓までは掛からないわ。

梅子　Décolletéは大變でせう。

百合子　Décolletéだつて、二百圓も掛けりやあ立派なものよ。

梅子　割に廉いわねえ。でも寶石無しには出る所へ出られないでせう。

百合子　それは妙なのよ。まあ、一番好い寶石を持つてゐる人と云へば、由緒のある貴族とか、Rothschildのやうな金持とかいふのは別として、女役者でせう。Primadonnaだとか、Primaballerinaだとか云ふ女でせう。そんな人は、そりやあ何萬圓どころぢやあ無い。何十萬圓といふ品物を持つてゐるのですが、その本物はちやんと金庫の中かなんかに入れてしまつて置いて、大抵の場所へはそれと同じやうな贋物を持つてゐて、それを掛けて出るの。そら。Maupassantの短篇にあるでせう。小役人の女房が、生涯に一度の舞踏會に出るのだからと云つて、貴婦人の頸飾を借りに行つて、それを亡くしてしまつて、同じのを買つて返して置いて、爺いさん婆さんになるまで、食ふものも食はずに稼いで、やつと借金が無くなつてから貴婦人に打明けたら、あれは、贋物を貸したのだつたと云つたといふ話ね。あんなわけで、立派な貴婦人が隨分平氣でimitationの物を掛けてゐるの。

梅子　隨分だわねえ。それで恥かしくは無いでせうか。

百合子　そりやあ贋物を體に附けて人に見せてゐるのは、嘘つ衝きも同じ事ですから、武士道に愜はないわ。西洋でも正しい意味で、chevaleresqueでは無いわ。だから心立の立派な女には、誓つて贋物は持たないと云つてゐるものもあるのよ。だけれど、それは少數の人で、大抵は本物を持つてゐる人も掛けるなら構はないと云ふのを分疏にして、自分の良心を欺いて掛けるのだわ。

梅子　ではあなたも掛けて。

百合子　わたし掛けた事は無くつてよ。それは何も立派な

考で掛けないのぢや無いが、處女は joyaux を證に附けなくても好いことになつてゐるの。

梅子　では奥さんになつてゐたら、贋物を掛けたかも知れないと仰やるの。

百合子　それはその時の考にするのよ。

梅子　さうね。何十萬圓の寶石でも買へるやうな方の奥さんにおなりなさるかも知れないわねえ。

百合子　さぞさうでせうよ。

梅子　あのパリイの娘はどんな良人を持ちたがつてゐるでせう。

百合子　まあ、どこだつて同じ事ね。それは口では、「Une chaumière et ton cœur」なんと云ふことも云つてゐるの。手鍋提げてもと云ふわけなのよ。でもほんたうは地位とか財產とかが當だわ。口で云ふにも、幾らか irony の心持で云ふのだわ。パリイはまあ、そんな風だけれど、マドリッドなんぞの娘は、今でも氣立が好い方ですつて。「Congito pan y cebolla」と云ひますつてね。あなたエスパニヨルは遣らないわねえ。お前さんとなら、麪包と葱とを食べてゐますと云ふ事なの。心からそんな心でゐるのが多いのですつて。

梅子　なぜでせう。

百合子　それはスパニアの方が、フランスよりはまだ民間に古い宗教が破壞せられずにゐるせゐだらうと思ふわ。日本からロンドンやパリイへ一寸行つて見て來て、どこでも宗教が盛んに行はれてゐるなんと云ふ人があるが、大間違よ。それは會堂へ著飾つて行つて、神妙にしてゐるやうだけれど、東京の人が祭禮を見に行つたり、縁日に行つたりするのと同じ事だわ。スパニアなぞにはまだ、大分正直に Madonna なんぞを拜んでゐる女があるのですつて。女が惡いと思ふことをするとき、そつとマドンナの像を背中向きに直して置くなんと云ふ話がある位ですからね。

梅子　では開けない所が人が善いといふやうなわけね。

百合子　まあ、一寸そんな工合ね。ですけれど、ずつと開けてしまへば、新しい宗教と云つたやうなものが出來るかも知れないわ。亡くなつた Tolstoi ね、あの人なんぞの云つてゐることは偏屈ですけれど、あんなのでは無く、科學なんぞが開けるだけ開けて、その上に人心を維持する宗教といふものは出來るだらうと思ふわ。なんでも途中半端の所が惡いのね。

梅子　ではマドリッドだつて、一度はパリイのやうになるでせうね。

百合子　それはさうだらうと思ふわ。今の內閣は進步主義で、坊さんを逐つ拂つた位ですから、それにお鄰のリサボ

ンは去年のやうな革命を遣つて見せるのですもの。

梅子　さうさう。大變でしたわねえ。王様はイギリスへ逃げて入らつしやつたのですつてねえ。あなたロンドンに入らつしやつた時でしたのね。

百合子　ゐてよ。イギリスでは内内知つてゐたらしかつたの。あの若い王様の緑談のあつたのが、そのせゐで運ばずにゐたといふのですもの。

梅子　ではあなた、Suffragettes（サフラジエツト）の騷ぎも御覽なすつたのね。

百合子　ええええ。Hyde-park（ハイドパアク）の示威運動を見てよ。大學を卒業した女だとか、政治運動のために監獄に這入つたことのある女だとか、一一分かれて、隊伍を整へて繰り出したのですから、それは大した見ものよ。

梅子　あれは女に選擧權を與へて貰ひたいと云ふ運動だと云ふことですが、唯それだけなの。

百合子　まあ、それが主なやうね。

梅子　ドイツの天子様があれに當てこすつて、女といふものは家の内さへ治めて行けば好いものだと云ふ演說をなすつたつてねえ。その方が道理に憾つてゐるのでは無いでせうか。

百合子　それは人のお上さんになられる女だけの事を考へればさうよ。ところが、生涯結婚する目的の無い女が澤山ゐて、それが段段殖えて行きさうなのですからね。お金の無い人達ばかりでは無くつて、上流の人も結婚の口の無いことが隨分あつてよ。アメリカから澤山お金を持つた娘がぞろぞろ出て來て、猛烈な競爭をして、好さささうな男を擽つて行くのですもの。そこでいろんな職業に就く。稅金を取られるといふことになる。同じ稅金を取られるなら、稅金で制限せられてゐる選擧權が得られない筈は無いといふことになるのだわ。丸つ切り無理な要求だとも云へないのよ。男ばかりで拵へる法律だものだから、男の都合の好いやうにばかり出來てゐると云ふのも、まあ、事實らしいわね。

梅子　それはそんなものね。でも餘り荒荒しい騷ぎ様をすると思ふわ。

百合子　さうよ。それは言つて見れば、なんだか少し滑稽染みてゐるのよ。同盟國の人の事をさう云ふのも變ですが、一體あの國の人のする事は、眞面目でゐて、どこか滑稽の所があるわ。あの騷ぎを Bernard Shaw が一幕物に書いてゐますの。總理大臣が女の隊に包圍せられて、男のなりをしては參謀總長の内へ相談に行かれないので、女に化けて行くといふ筋なの。今の首相の名が母音を一つか二つか換へてそつくり使つてあつてよ。それは滑稽よ。それから見ると、ストックホルムの女の方が落

ち著いて遣つてゐるから凄いわ。Elin Wägner の「ペン軸」といふ小說は、女の選擧權を問題にして書いたものので、むやみに賣れてゐるといふことなの。大抵 Proja-ganda の本なんといふものは廉く出來てゐて、大勢が買ふのですが、「ペン軸」は一册二圓もして、それで賣れるのですからね。まあ、中流以上の家に廣がつてゐるらしいのね。それから Idun といふ隨分贅澤に出來た、貴い婦人新聞があつて、それも女の選擧權に肩を持つてゐるの。ですから、スヱエデンの女の方が、今に何か遣り出すかも知れなくつてよ。

梅子　スヱエデンがそんなでは、ノルヱエイもさうぢや無くつて。

百合子　ノルヱエイではもう選擧權を得てゐるやうな形になつてゐるのですとさ。そんな風だから、女はなかなかしつかりしてゐてよ。馬に乘れば、en cavalier に乘るし、何か暇潰しにすると云つても、編物なんぞはしないの。製本がひどく流行つてね。本は假綴で買つて、自分で製本するの。それから建築の圖案なんぞを專門家の驚くやうにする娘もあつてよ。結婚をするとき、大筵會をしようの、新婚旅行をさせようのと云はうもんなら、笑つてしまふのですつて。料理法の本を諳記するまで讀んでゐて、早く行つて勝手が整理して見たいなんと云ふのですと。

梅子。おや。もうお菓子が無いわ。（ベルを押しに起たんとす）

百合子　廢して頂戴。わたし御遠慮無しに戴くけど、もう澤山よ。全くおいしい macrones でしたわ。（腕輪の時計を見る）まあ、大變にお饒舌をしてしまつたのね。

梅子　まあ、軍人の持つてゐさうな時計なのね。

百合子　コッペンハアゲンで買つたの。もうお暇をするわ。今に又泊り掛けに來ませうね。（起たんとす）

梅子　わたしもつとお話が伺ひたいわ。

（百合子が起つゆゑ、梅子も一しよに起つ。）

百合子　ええ。幾らでも話してよ。まだイタリアだの、ドイツだの、オオストリアだの、ロシアだの、いろいろあるのですから。皆それぞれ特色があつてよ。

（梅子外套を取り上げて、百合子に着せ掛く。）

濟まないことね。

影　と　形

（煤烟の序に代ふる對話）

人　物

ジヨルジオ・アウリスパの影　Giorgio Aurispa.
ヒポリタ・サンツオオの影　Hippolyta Sanzo.
小　島　要　吉
眞　鍋　朋　子

時　代

現　　代

場　所

第一場　伊太利サン・キト　San Vito.
第二場　日本東京

第　一　場

サン・キトの斷崖。橄欖の林。七月の夜。空曇りて月無し。
男女の影一株の橄欖の下に現れて語る。對話の間、苧を打つ槌の音のアドリアの浪の音に和するを聞く。

ジヨルジオの影　又同じ月同じ日の夜中になつたなあ。

ヒポリタの影　さうね。丁度今宵のやうに曇つた晩で、オルトナの祭の火が美しうございましたね。

男の形　お前には濟まなかつた。併しどうもお前を跡に殘して置いて、ひとりで死ぬることは出來なかつたのだから爲方が無い。己は次第に枯れて行くのに、お前は次第に榮えて行くやうな心持がして、その榮えて行くお前を、人の手に渡すのが何よりつらかつたのだ。己が墒つて起したお前の火が、餘所の竈の下で燃えるだらうと思ふと、どうしても己はひとりでは死なれなかつたのだ。だがなんと思つて、お前を崖の方へ引張つて行くかといふことが、お前に分かつたとき、どこまでも生活に搦み附いた指を放すまいとして、お前は一しやう懸命になつて角力つたのだ。併し己は夢中になつてゐた。唯そこの海に飛び込まうといふ一筋の道の外は、己の目に見えなかつたのだ。

女の影　ええ。それは善く分かつてゐますわ。あなたが死なうとなさるのに、わたしが生きてゐようと思つて角力つたといふと、大さう卑怯なやうですが、それはあなたが騙して死なせようとなさつたからですわ。わたしだつてお中に病氣を持つてゐたのですから、あなたを衰へさせて、自分が榮えようと思ふ筈がありません。無意識にだつて、そんな風になるものですか。誰だつて、出し拔け

に殺されるのだなと思つた時に、素直には殺されませんわ。よしや相手が戀人だつて、角力はれるだけ角力つて見ますわ。

男 (微笑む) うむそりやあ己だつて、お前を卑怯だと思つた事は一度も無い。併し出し抜けで無かつたら、素直に一しよに死んだのだらうと云ふのは、少し受け取りにくいぞ。トリスタンとイソルデとを浚つて聞かせた迹で、一しよに死なれるかと云つたら、逃口上ばかり云つてゐたぢや無いか。

女 (同じく微笑む) そんな事を言ふのなら、わたしも言ひますわ。死ぬる氣になるなんといふことは、相手の態度次第でなれるのですわ。あなたのやうな利己主義で死ぬる相談をし掛けては誰だつて、聞きはしませんわ。

男 それだから、無理に一しよに死んで貰つたのだよ。

女 まことにお手數を掛けまして、相濟みませんでしたのね。

男 (短く笑ふ) はははは。(間) 實は己は餘程前から死ぬる氣になつてゐたのだ。己は繁殖の力の無い體だつた。然もそれが不治なのだつた。所詮超人を拵へる器械にはなれなかつたのだ。それなのにお前が可哀くつて可哀くつて溜まらない。お前の髮の毛にちよいと障つても、お前の肌をちよいと見ても、己はすぐに電氣に撃たれたやうになる。己の體に張つてある感覺の絲は、キルツオヅの殘酷な手に搔き廻されて、徒に音に鳴くのだ。鳴きながら細つて行つて、いつ斷えるか知れないのだ。そこで他動的には絲が切れさせたく無い。同じ切れるなら、自動的に、意識して切れたいと思つたのだ。(間) 所が、その時の己には、どうもその命の絲の細るのがお前のせゐのやうに思はれて、お前が可哀いと同時に、又憎くつて溜まらなくなつたのだ。

女 それは全くあなたの思ひ做しなのよ。

男 ふむ。お前のさう云ふのは無理は無い。お前にも體に皺が入つてゐるといふことは、己も知つてゐた。飛んだ時に痛み出すやうな事があるのは、己も見てゐた。それだからお前の方で、己の命を吸ひ取つて太つて行くやうには、思つてゐなかつたのだ。(間) だがね。お前は女性だよ。女性といふ不可抗力だよ。

女 そんなわけの物でせうか。

男 それが自然なのだ。

(二人の影暫く無言。波の音。苧を打つ音。)

女 あれ、お聞きなさい。やつぱり夜通し苧を打つてゐますのね。

男 うむ。

(波の音。苧を打つ音。)

女　ちよいと。あの、わたしはあなたに伺はう伺はうと思つてゐて、生きてゐる間、たうとう伺はずにしまつたのですが、あなたがわたしをお憎みになつたのは、只女性の力をお憎みになつたばかりでは無いのでせう。あなたはわたしを疑つてゐましたのね。

男　さうさ。さう云ふ心持もあつた。

女　そしてそれが全く無實でしたのね。

男　なる程。そりやあ己に二心（ふたごころ）を懷いてはゐなかつたのだらう。（間）　併し己の氣にしてゐたのは、現未のリワルでは無い。過去のリワルだつた。お前が一度夫に持つた男を嫌つたといふのは事實だらう。婚禮の晩にも、殆暴力に捉かれて身を任せたといふのも事實だらう。それから間も無く腹の病氣が出たので、その病氣が好い鹽梅に、愛情の無い夫婦の間に据ゑた關になつたといふのも事實だらう、だがなあ。とにかくお前は一旦亭主を持つた事のある女だ。サンツオオといふ苗字がお前の呼名に連（つらな）つてゐるやうに、先の亭主の記念はお前の頭を離れないのだ。己はそれを氣にせずにはゐられなかつた。お前が夢に魘されたり、聞き取れない囈語（ねごと）を言つたりするときも、己と話をしてゐる間に、視線が遠い處を辿つてゐて、返事に手間が取れたりするときも、その時お前の夢の中、空想の中を、何物が往來するかといふ事が、氣になつてならなかつたのだ。それにお前はちよいちよい昔話をし出すだらう。己はそれを聞く度に、その話して聞かされる事と一しよに、まだどれだけの事がお前の心に浮んでゐるかといふことを、己は考へずにはゐられなかつたのだ。（女の影は默つて、額を蹙めて聞いてゐる）　かういふと、無理な事を言ふ人だと思ふだらう併し影が形に添ふやうに妬は戀を離れない。現在に妬むべき事が無ければ、未來に妬むべき事を求める。未來に妬むべき事が無ければ、過去に妬むべき事を求める。男が妬まも無ければ、女が妬む。女が妬まも無ければ、男が妬む。戀の相手の心の中には、X（エツクス）の存在してゐることを許したくない。ところが、人と人との間には、縱ひどんなに打ち明けても、一しよに死なうと誓つても、ほんたうに一しよに死んでも、破ることの出來ない鐵壁の隔てがある。その鐵壁を無理にどうにかして破らうとするのが妬だ。妬むのと妬まれるのとは氣質次第だ。どうしても妬無しには濟まないのだ。

女　（眉を顰ぶ）　おやおや。そんならわたしの方から燒餅を燒いて上げれば、宜しかつたのでせうか。

男　さうだつたかも知れないよ。先鞭を著けられたら、己の方が受身（うけみ）になつたのだらうよ。

（二人の影暫く無言。波の音。亭を打つ音。忽ち波の音と槌の音との單調なる寂しさを破りて、けたたまし

く泣く赤子の聲。少しかすみて聞ゆ。）
女　きつとカンチアの生んだ赤ん坊なのね。
男　さうかも知れない。あの晩に生れたのだつけ。カンチアは新しい人間を一人世の中に出さうといふので、陣痛でうめいてゐる。お前は殘物のシャンパニエを呷ふつて、燃え上がつた體の火を、死神に手を引かれてゐる己に蹈み消されて、留め所も無く笑つてゐたのだつけな。
女　もうあの時の事は言はないで下さいよ。あんまり殘酷だわ。
男　あやまつた。あやまつた。もう決して言はないよ。（間）生きてゐてもステリイルで、つまらない中だつたが、こんなに二人共影になつてしまつては、かうして逢つて話をしても爲様が無いなあ。
女　わたしはもう一遍人間に生れて見ようと思ふわ。
男　氣が多いなあ。
女　又そんな事を。
男　つい笑談を言つてならない。（間）もう一遍人間になるのも好からうが、赤ん坊になるのは氣が利かない。それより氣に入つた女を見附けて取り附いたら好からう。
女　さうですね。（間）わたしそんなら處女にするわ。
男　何故。
女　赤ん坊にはならないにしても、とにかく初から遣り直して見たいから。
男　さうか。（間）もうデカダンスに氣觸れた歐羅巴は廢せよ。そんならと云つて、エスキモになつて氷の中に潜つたり、黒人になつて裸で歩いたりして、原人生活をするのもつまるまい。（少し考へて）うむ。好い事がある。日本の處女に取つ附くが好い。
女　日本といふ國はどんな國でせう。
男　デカダンス風が多少吹いてゐるかも知れないが、まだ大分郷土の土臭い處が殘つてゐる見込だ。往けば、そこを買つて往くのだなあ。
女。それぢやあ、わたし日本に極めてよ。（間）あなたはどうなさるの。
男　己か。獨り殘されてゐても面白く無いから、しつつこいやうだが、己も附いて行かうよ。そこでお前が處女を見立てて取つ附くのだから、己は生息子を見立てなくちやあならないのだが、その生息子といふものが、此頃の日本にはなかなか見附かりさうも無いやうだ。まあ、なるたけおぼこらしい青年を見立てることにしようよ。
（忽ち犬の吠ゆる聲聞ゆ）
女　あら。ジャルヂノですよ。（短き間）そんなら、御縁があつたら、又日本でお目に掛かりませうね。
（犬の聲次第に近づくとき、女の形先づ消え失せて、

次いで男の影も見えずなる。一匹の犬舞臺の右手より駈け出でて、橄欖の木の下に止まり、空を仰ぎて吠ゆること頻なり。莩を打つ音。波の音。○舞臺廻る。）

第 二 場

猿樂町の會堂。新年。中央に說敎壇。背後は裝飾無き白壁。右手と左手とに扉。右手のは開きあり。左手の扉に近き處にカミン式の煖爐。壇の下にピアノ。嵌硝子の窗よりさし入る青、赤、黄などの光線、象牙のキイの上に流る。文學士小島要吉。ピアノの前の回旋椅子に腰を掛け、何を彈くとも無しに二三音を試みゐる。右手の戸口より眞鍋朋子徐かに出で、要吉の背後に來て立ち止まり、兩手を前に、帶の下のあたりに握り合せ、立ちゐる。小島背後を振り向く。二人顏を見合せて暫く詞無し。朋子は只見るとも無しに小島の顏を見ゐる。小島ピアノを離れて立つ。

小島　あなたこれをお彈きになつて。

朋子　ほんの鳴らすだけでございます。

小島　ぢや何か一つ聞かせて下さいませんか。

朋子　いいえ。駄目でございますの。

小島　（思入あり）あなたはどう考へてお出ですか。

朋子　（手をピアノの端に掛く）何をでございます。

小島　僕は戀といふものの事を考へてゐたのです。一體戀といふものは、笛の歌口を強く吹き込むやうに、一の女を劇しく戀ふるのがほんたうの戀でせうか。それともピアノの鍵盤の上に指を走らすやうに、女の群から群へ早く移つて行つて、其間に諧音を見出だすのがほんたうの戀でせうか。

朋子　そんな事は先生なんぞのお心では、もうとつくに極めて入らつしやいますだらうと、わたくし思つてゐましたの。

（二人暫く無言。○舞臺の左手の扉忽ち開いて少女三人顏を出す。）

一人の少女　眞鍋さん。ここに入らつしやつて。さつきから隨分搜してよ。

朋子　さう。（小島に會釋して左手の扉を出で去る。○小島獨殘りて、茫然と朋子の出で去りし扉を見詰めゐる。）

建築師（序に代ふる對話）

千葉　もう本が出來たのですが、いつか賴んで置いた序文が貰つて行かれませうか。

森　やあ。そりやあ大變ですねえ。「建築師ソルネス」は十何年といふ前に讀んだばかりですから、是非もう一遍讀んで見て何か書く積りでしたが、御存じのやうな境遇に住してゐるので、たうとうそれつきりになつてしまひましたよ。此頃は「ボルクマン」の校正をしてゐるので、「小さいエヨルフ」と「ボルクマン」と「若し我等死したるものが目醒めば」との三つを一冊にしたのが手元に出してあるばかりで、建築師ソルネスは藏にありますよ。

千葉　爲樣がありませんなあ。それでも少しは記憶に殘つてゐるでせう。

森　そりや、いくらか殘つてゐます。

千葉　そんなら、その殘つてゐる記憶にたよつて、何とか言つては貰はれますまいか。

森　さうですねえ。（間）とても直な事は言へますまいが。

千葉　一體ハルワルト・ソルネスといふ人物をどう思つてお出でですか。

森　さう。自分の精力の足りないのを知らずに、空想に欺かれてゐる、氣の毒な人物で、僕は餘りシムパチイを持つてゐませんね。

千葉　そこでドラマの主人公としては不適當な人物だと思つてお出でですか。

森　いえ。不適當どころではありますまい。僕なんぞは隨分身につまされるといふやうな處があるのですから。

千葉　そりや矛盾では無いでせうか。

森　矛盾かも知れません。併し精力の足りない、氣の毒な男だと思つてゐるのに、男の云つたり爲たりする事が、ひしひしと身に染みるといふことも有り得るだらうぢやありませんか。

千葉　そりやあ、さういふこともありませうとも。

森　僕にはそれがあるのです。（間）實は僕なんぞも矢張ソルネスなのかも知れませんよ。

千葉　どういふわけです。

森　古い事を言ふやうですが、僕だつてリサンゲルの塔の占風旗に輪飾を掛けるやうな事をしたこともありますからね。（間）若い時代の夢のうちで。

千葉　うむ。

森　それから子供幾人かのおとつさんになつて、ぐづつとして一間に閉ぢ籠つてゐます。戸の外には、新時代の恐ろしい若者達が復讐の刃を磨いてゐるやうな心持がするのです。その時戸が不意に開いて、可哀らしいヒルデ、ワンゲルが這入つて來ますよ。

千葉　なんです。君のヒルデといふのは。

森　分かりませんか。僕の處へ來たヒルデは昴(すばる)です。

千葉　なる程。こりやあ好い。はははは。

森　どうです。僕のソルネス臭い處が分かりましたか。ヒルデの昴も新時代の旗の下に立つてゐて、そして僕の處へ來て、色の褪めた僕の記憶を呼び活けてくれたのです。(間)　僕だつて平生勉強して、自分だけの家は新築してゐます。塔も立ててゐる。その塔に足場も掛けてある。併し自分でそれへ登らうとは思はない。塔の尖(さき)へのあこがれはあつても、自分で登らうといふ決心は無い。それをヒルデの「昴」が來てそそのかしたのです。

千葉　併し君なんぞは塔から墜ちる氣遣は無いでせう。

森　さう思つてくれるなら、君もヒルデの仲間かも知れません。僕が年寄の冷水を遣るのを見て、君も白いショオルを振る方かも知れません。ソルネスが塔から墜ちて砕いた五分刈の頭にはまだ褐色(かきいろ)の髮が生えてゐた筈だ。僕の頭はこれから白くなつて禿げるまで砕けずにゐるかも知れないが、とにかく僕の塔に登つて行くのは冒險ですよ。實は僕の神經を氣にしてくれるヘルダルもあるらしい位ですから。

千葉　さうでせうか。

森　森はどうかしてゐやしないかなんぞといふ人があるさうですからね。(間)　併し僕が塔に登つてゐるのを見て、歌はない歌の聲、彈せないハアプの音を聞く人が、一人でも二人でもあれば、それで登つただけの事はあるといふものではありますまいか。

千葉　なる程。それだけ聞かせて下されば、大抵君の建築師に對する考も分りますね。

森　ええ。うろ覺の建築師ソルネスに對する、極平凡な僕の考が分つたのでせう。

永井荷風篇

平維盛　一幕

平維盛
與三兵衛景重
石童丸
舍人武里
小宰相局
皐月
衞士四人

屋島の海邊砂山の體。くもりたる春の夜。舞臺奥深く海の書割、處々に岩枯蘆あり。後方次第に波打際に下る心。上手寄りに引上げたる漁船一艘。彼方此方に松の立木。何れも風の爲に揃ひてその幹を斜にして下手へ行くに從ひ次第に繁りし林をなす。幕明くと舍人の武里腰簑をまとひ櫂を持ち下手松林の中より歩み出で、

舍人　人目を忍ぶ此處等の岩かげ。舟の付場はないものか。合圖の時刻には間もあれど何となく心がせく。松火が見える。番のものに相違ない。

（ト漁船の蔭にかくれソツト上手へ入る、松火を持ちたる衞士四人上手より出で、）

其ノ一　氣は心といふがアノ一の谷の塞では間もなく都へ上れると思つた故か。

其ノ二　毎夜を明す立番も眠いなぞとは思はなかつたが。

其ノ三　この屋島の浦へ落ち延びてからは着てゐる鎧が重くてならぬ。

其ノ四　松の火の消えぬ中早く廻つて休むとしよう。

（ト下手に入る。上手より平通盛の妻小宰相馳出るを乳母皐月追縋りて引留め、）

皐月　小宰相さまお待ちなされて下さりませ。

小宰相　イエ〳〵放して放してたもいな。

皐月　小宰相さまお待ちなされて下さりませ。命にかへても此の乳母が御とゞめ申さねばなりませぬ。

小宰相　覺悟きはめし上からはこなたがどのやうに止めたとて最早やながらへる心はない。コレ皐月思うても見や。いとしいお方に死別れ此のやうな淋しい海のはて。何たのしみにながらへて居られやうぞいな。

皐月　その御歎きは御尤ながら、此の乳母が申すこと、どうぞ今一度御聞きなされて下さりませ。

（皐月小宰相を下に坐らせ、）

思へば二十歳この方、一日とても御傍をはなれず、都を落ちて西海の此果までお供申した乳母皐月。あなた御一

人を見殺しに、何にしに生きて居られませう。通盛様御最期の御歎き、さる事ながら、此の皐月を置去りに御生害あそばさうとは、あまりといへば情ないなされ方、お恨み申さねばなりませぬ。

小宰相　母にも増さるこなたの親切。それと明して言はれぬ故隙を窺ひ忍出で、海より深い悲しみを、此の身と共に人知れず千尋の底にかくさうと疾よりきめし身の覺悟。どうぞこなたは生き殘り、わらは二人が亡き後の菩提を弔うてたもいな。

皐月　衣の色を墨染に變るは易き事ながら、現在乳母のこの身にて、あなたの御入水遊ばすを見て見ぬふりが成りませう。モシ小宰相様あなたは何故皐月にも共にあの世へ供せよと仰せなされては下さりませぬ。

（小宰相當惑の思入。）

皐月　サそれも叶はぬ事なれば此の乳母ともぐ〵妾を變へ、後生の障りなきやうに通盛様の御回向を。

小宰相　それは此の身も今までに、幾度か思ひ返しはしたなれど、在りし昔のなつかしさ。よしや妾は變へたとて、身の淋しさは同じ事。あの世此の世の憂き隔て。わかれわかれの片時が地獄の責にも増さる苦しみ。コレ乳母。血の池針の山も何のその早うあの世で只一目、わらははお顔が見たいわいな。

（物狂はしく泣き沈む。皐月是非なき思入、）

皐月　何を申上げても御聞き入れは下さるまい。御生害の妨げは御側はなれぬこの皐月。サ小宰相さまどうぞこれにて皐月が生命御取りなされて下さりませ。

（皐月懐劒を取出す。）

小宰相　何を云やる。何で妾がこなたをば。

皐月　それなら乳母が申す事。

小宰相　是非もないわいな。

皐月　よう御聞き入れなされて下さりました。此の世の辛苦は後生の頼み。

小宰相　とは云ひながら唯ひとり此の世に殘る悲しさは。

皐月　もし何やら人影。早うお出でなされませ。

（皐月小宰相ないたはり上手へ入る。後暫く寂として鐘の音聞える。平維盛松の木かげより忍び出づ。）

維盛　今鳴る鐘は早や九ツ。武門の譽れを振捨て都に殘せし妻子を尋ねんと心きゝたる家の子に事の次第を語り置きしが首尾よく舟の支度を致せしやら、暫くこゝにて待ち合はさん。

（海の方を見渡し。）

夢かとまがふ朧夜の、靜けき海は今宵こそ、卑怯未練の兵者の心をあはれと察せしか。過ぎし嵐の名殘なく、藻草漂ふ渚をば、鷗の夢に心して、蘆の茂りの見えがく

れ、屋島の浦邊を離れなば、漣たつる不知火に、よし夜迴の者供が追手の舟を出すとも木の葉に似たるわが舟は、やす〳〵淡路の方へ落ちるであらう。

（鐘の音また聞える。松林の奥より維盛の郎黨與三兵衞（老人）石童丸（少年）の二人忍び出ですかし見て、）

與三兵　そこに在すはわが君。

維盛　與三兵衞か。

石童　石童丸も共々に船路の御供致さんと此處まで忍んで參りました。

維盛　シテ船の用意は。

與三兵　舍人の武里と申すもの最前彼方の岩蔭に漁船の用意致して居りまする。程なくお迎ひに參るで御座りませう。

石童丸　わが君には瞬時も早う舟ある方へ。

與三兵　その道とても人目をはゞかる御身の上見苦しけれど用意の簑笠。

維盛　その心遣ひ忝けない。然し與三兵衞、其方はこの維盛がふるまひ、云ひがひなきものと思うてゐるであらうな。

與三兵　何と仰せられます。

維盛　源氏平氏の分ちなく、武士の家に生れし身は、屍を路傍にさらすとも、名を千歳に殘さんこと誠の望である

べきに、言甲斐なき維盛を主に持ち後々までも卑怯の者とそしらるゝ其方が心中さぞ無念であらうな。

與三兵　イヤわが君そのお心遣には及びませぬ與三兵衞は旣に先年御父上小松內大臣樣遠からず斯くあるべき御一門の行末を思召され御病床にもわざと藥を退け住むに憂き此の世を御辭退遊ばされし時より某は功名の念を斷ち身に太刀は帶びますれど心はひたすら洛中洛外の寺々に響き渡る鐘の音に朝な夕な來世の安樂を祈願致して居りました。されば今宵屋島の浦を忍出で都まで御供致せし曉は今一度內大臣樣の御靈所を伏拜み心安く此の白髮を落したき願ひ何卒此の儀御聞き入れ下さりませ。

維盛　さては與三兵衞其方も疾より遁世の心であつたるか。われも餘所ながら都に殘せし妻子に暇を告け高野の御山に修行の覺悟。

與三兵　しからばわが君彌陀をたのみに。

石童丸　誓ひの御舟。

（武里上手より出で、）

武里　その御支度仕りました。幸ひ浦邊に人もなし方々早う。（云ひすて入る。）

維盛　さらば一門の方々此の維盛は今宵をかぎり永のお暇仕る。お許し召されよ。

（維盛下手の方を眺めて暇を告ぐる。此の中與三兵衞

（石童丸四邊に氣をくばる。）

石童丸　モシ與三兵衞殿あれなる行手の岩角に女性と覺しき人の影。

與三兵　ム、いかにも（ト立戻つて）もしわが君あれを御覽せよ。糸のやうなる兩手を合せ岩の上に跪かるゝは。

維盛　朧夜に月の光も薄ければ誰とも定かに見分かねどわが一門の姫ならん。

石童丸　松風と共に聞ゆる彌陀の稱名。

與三兵　入水の覺悟と見えまする。路遠けれど與三兵衞唯一走り。

（與三兵衞馳せ行かんとする時水の音鳥の羽音聞えて鷗數多上手奥より飛び立ち松林のかげに消える。）

石童丸　早や御姿は何所へやら。

與三兵　波の面に不知火の燃え立つばかり。

維盛　不憫な事をいたしたな。然し與三兵衞やがて滅び行くわが一族。取分けかよわき女の身、人知れず此の夜深に入水なせしは在るにかひなき憂世にさすらひ矢叫びの聲に魂を消さんより必定西の御國へ志す悟りの爲めと覺えたり。南無西方極樂世界。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

（此の中片割月出づる。維盛笠を取り直す時上手より皐月走り出で）

皐月　小宰相さまいなう。

（維盛主從三人笠にて顏をかくし身を避けながら上手に入る。皐月三人の間を縫ひよろめきながら小宰相の名を呼びつゞけ下手に入る。鷗再び松林の中よりあまた飛び立つ。此の模樣幕。）

（明治四十三年九月作）

秋の別れ　一幕

人　物

白樂天といへる老いたる詩人　（Baryton の聲）
若き旅の書生　（Ténor の聲）
さまよふ都の女　（Soprano の聲）
船頭二人　（Basse の聲）
童子二人　（Contralto の聲）

時　代

國及服裝を問はず

場　所

潯陽江とよべる大河のほとり

晩秋の日は渺茫たる大河の面に暮れんとす。

蘆、楓、水楊なぞ水の中より亂れ生じたる草木は、遠近の別ちなく一齊に黄し。

何處までが岸、何處までが河とも定めがたき、水溜り多き低地の果に、夕照の美しき空ひろがりたり。

近く浮洲の如く突出でたる岸邊に、一艘の舟、水の上に落ちかゝりたる柳の下につながる。舟の上には老いたる船頭一人居眠りたり。

遙か彼方より、牛飼の童が吹く草笛の調、農家の女の打つ砧の音。驛路に響く驢馬の鈴の音なぞは、水の音蘆の葉のそよぎと交りて、秋の夕暮の悲しき音樂を奏す。

落葉雨の如く紛々として降りしきるにつれ、夕照の焔次第に薄らぎ、蒼然たる夜の色あたりを蔽ふ。

何處よりとも知れず男女の歌ふ聲聞ゆ。

夜となりぬる
秋はふけ行く。
夜はたゞさへかなしきに。
秋はたゞさへさびしきに。

暮るゝ日につれ、
ふくる秋。

春の思出いづこぞや、
夕の風に柳は散りて。
夏の名殘の跡もなし、
流れの岸に藻の花朽ちぬ。

鳥はとびさり
鐘のねはきゆ。
音なき夜のかなしさを
聲なき秋のさびしさを。
落葉がなげく。
蘆が泣く。

（この歌聲の中、扮裝卑しからざる若き旅人一人、冠りし笠にて落葉の雨をよけつゝ歩み出で、此のあたりに渡場ありやと船を求むる體。）

若き旅人　暮れぬ中にと、行先いそぐ旅ながら、夢のやうにもなつかしく、悲しく淋しき歌聲に、我にもあらず聞きとれた。故里の夏の流れに勇しく、菱の花摘む喜びの、歌の調は何處へやら。同じ若さの咽喉より出る聲ながら、知らぬ他國の、あゝ、あの秋の歌のさびしさよ。誠や、鳥も鳴かぬ。鐘も聞えぬ。何と云ふ悲しい蘆の葉の戰り泣き。暮れては河を越すに難儀であらう。どこぞ近くに渡しの船はあるまいか。うれしや、あれなる柳の木蔭…もしもし。旅のもので御ざります。御苦勞ながら向うの岸へ渡して下されい。もしもし。

船頭　秋とは云へ晝中は、木犀の花香る南國の、十一月の日の暖かさ。いつとも知らず眠る間に、おゝ、もう日は暮れた。鶏もなかず。鐘も聞えず、秋の日は暮れた。日は暮れた。

旅人　御苦勞ながら向うの岸へ渡して下されい。旅の者で御ざります。

船頭　見ればお若い旅のお方。いづこの公達か存せねど、この船は渡船では御ざりませぬ。夜釣を好む此のあたりの隱居が持舟、お氣の毒ながら、餘所を御尋ねなされ。

旅人　さらば是非なし。見る〳〵中にも暮れて行く、河邊の景色。明き中に渡しをさがさねばならぬ。御免なされ。夕暮は譯もなく心のせかるゝもの。

（云ひすて去る。）

船頭　まこと夕暮は靜な晝に引きかへて、何とてかやうに、蘆の葉の騷ぐ事ぢや。飛び散る落葉の間からは、いや、もう星が見え出した。日の出を待つ潮時に、おッつけ旦那さまがお出であらう。どれ、そろ〳〵、夜釣の道具の支度をしよう。

（船頭は釣道具の支度をなす、この中日は全く暮れて夜となり、落葉の雨一際烈し。詩人の歌ふ聲次第に近き來る。）

かくれ住む片里。唯一人

移り行く春と秋を眺むる。
譽れを追ひし時
譏りをおそれき。
巷の聲に
門を掩へば。
花なき冬に思出の春賑しく
木の葉散る秋觀念の泉清し。
譏りをいなまざる時
ほまれは誘はず。
孤獨の室に
寂寞の戸を閉せば。
風吹く夜半に燈火の光動かず
雨降る朝に靜安の琴は鳴る。
かくれ住む片里。唯一人
移り行く春と秋を眺むる。

船頭　旦那さまのお聲が聞える。

（二人の童子を伴ひて、白き髯ある老詩人片手に詩集を持ちて現れ出づ。一人の童子は酒壺を提へ、他の一人は燈火に道を照らす。）

童子の一　お師匠樣。おあぶなう御ざります。河水の面も岸の小徑も、どれがどれやら分らぬほどに、積つた上にも落葉が積つて居ります。お氣をつけなさりませ。

童子の二　お手を引きませう。風に掃かれて、落葉のつもらぬ處には、滑かな濕地の苔が磨いた瓦のやうに輝つて居ります。

老詩人　いや、そのやうに案じる事はない。磨いた滑かな敷瓦の上、鏡のやうな珠の階段ならば、幾年の昔、宮殿の花の筵に、歌舞の少女の幾人と鳥のやうに飛び舞うた覺えもある。其方達にはもう用はない。酒瓶を爺に渡して、早う歸つて休むがよいぞ。

船頭　旦那さま。夜毎更け行く秋につれ、冷たい夜露は雨のやうに降りまする。今宵は舟に苫をかけて置きました。夜釣の支度もできて居ります。

詩人　何かの心遣ひ忝けない。

（舟に乘る。童子二人は禮して去る。船頭は岸に上りて、柳の幹に繫ぎたる綱を解きつゝ、）

船頭　旦那さま、今夜はよほど遠くへと漕ぎ出し、深い蘆の繁みへでも分け入つて見ませねば、もう獲物はござりますまい。秋の水が一夜一夜に冷たくなりますと、魚は冬の隠れ家に流れの遅い水溜りのやうな蘆の繁みへ潜込み、柔かな藻草の褥を冠つて眠つてしまひます。

詩人　いかにも。南の國の河畔とは云ひながら、秋もいつしか十一月であつた。夕となれば折々に風が吹けども、晝中は晴れ渡る空の青さに、わればかりは冬をも知らず、唯だうかうかとのみ暮してゐたが、實に小鳥はわれより賢く、魚はわれより先に己れを知り。悔いと悲しみに先立ちて、喜びの中に隠家を求めて退く。愚かなるは人の迷ひであつた。南の國の秋晴れに、僞りの春を忍ぶも今日かぎり。いざ。爺よ。纜を解いて、流れの唯中に漕出でよ。蘆の繁みに突入りて、闇に潜める冬を捕へん。

船頭　蘆の繁みに突入りて、闇に潜める冬を捕へん。

（舟に乗りて櫂を取り上る。此時以前の旅人あわただしく馳け出で呼び止むる。）

旅人　しばらく。しばらくお待ち下されませ。最前物をおたづね致した旅人で御座ります。此方の岸より彼方へと渡しの船を其處此處と、さがし歩いて見ましたが、夜の暗さにそれらしい柳の立木の影さへ見ず、今宵の宿も如何かと再びこゝまで迷つて參りました。お氣の毒なれど、そこなる夜釣のおん方都へと志す名もなき書生の身の上に、しばしの御情を、所望いたしまする。

詩人　なに、都へ。

旅人　いかにも私は、南の端れの片里より、北なる大都の繁華を見んと、幾百里の道程を幾年月、春より秋へと旅立ちし、若い身空の書生でござりますが、端なくも大河のほとりに行き暮れて、渡るすべなき苦しさに、禮儀を忘れし突然のお願ひ、お許し下さりませ。

詩人　何の、其の御言葉には及びませぬ。これは夜釣と申せど、たゞつれづれの慰み事。秋の夜の景色をめづる遊びの舟。さ。御遠慮なくお乗りなされ。（旅人の手を取りて船に乗らしむ。）お急ぎの旅ならずば今宵のお宿も苦しうは御ざりませぬ。何はさて置き、長途のつかれを休むる一杯の酒。これ爺よ、酒瓶と果物の籠を開け。

（船頭は酒壺を詩人の傍に持ち來り、干したる果物を入れし竹籠を開きなぞす。詩人と旅人盞をかはす。）

旅人　何と云ふ香しさ。嘗て覺えし事なき此の酒の味ひは。

詩人　今君が志して行く、北の都の名酒で御ざる。敗残の老の身を哀れみて、時々に都の友より送り届くる葡萄の酒。さ、今一獻お重ね下さい。

旅人　さては、都に縁故あるゆゝしきお方と覺えまする。夜釣の翁と姿をやつし、世を忍び給ふ誠の御身は。

詩人　何の仔細があらう。二十年前白樂天と人によばれし詩人が身の果。

旅人　こは如何に。夢にはあらずや。行き暮れて渡りを求めし其の人は、わが日頃慕ひまつりし詩人の君にておはせしか。

詩人　若き旅人。さては其方も……

旅人　さやうに御ざりまする。われも都に上りて、傳へ聞く彼の珠の樓臺の、夜の宴に詩を賦して、名を千載に留めんと、故郷の春を後にして、他國の秋をも悲しまず、ここまで辿つて參りましたが……

詩人　いさましや。君が廿歳の其の聲は、老の身の腸に、春の夜明けの鐘かと響く。道は遠いであらう。夜は暗いであらう。然したゞ進め。前へ、前へとたゞ進め。

旅人　その力も、今はどうやら覺束なう御ざります。大河に落つる夜の影。初めて逢ひし他郷の秋。蘆と落葉のささやきは、今まで知らぬ何かの謎と思はれます。あゝ先生。私は急に都へ行くのがいやになりました。私はいつまでも先生の樣に、落葉の多い此の南國の河のほとりに、人知れず思ふかぎり、見渡すかぎり、秋の更けて行くのを見てゐたいやうな氣がしてなりませぬ。渡しをさがす夕暮に、ふと聞き取れたあの秋の歌のなつかしや。

詩人　旅人よ。よしなき悲哀の甘さにのみ醉はうとはしたまふな。悲しみばかりが詩の泉では御ざらぬ。悲哀の眞の味ひは、狂ひさわぐ歡樂の杯の底からも、時來れば自づと湧くものを。二度とない君が若さ、君が廿歳を等閑にしたまふな。

旅人　情深き其のお言葉、ありがたう御ざりまする。然しながら今にして思返へせば、古里を出でゝ幾百里、都へいそぐ途上の此の身は、嘗て故里の春の空を眺めて、たゞ都へ都へと叫びつゞけた其の夢の影で御ざりました。行邊知れず木の葉飛び散る秋の夕暮、私は都へ上る今の身の上を、もう嬉しいとは思ひませぬ。私はたゞ、昨日まで都へ都へと叫んだ其の叫びの聲の反響を、私の胸の底に聞く、云ひがたい心持を愛するばかり。

詩人　よくも云はれた。現實の世界のあらゆる響を心の洞の底に聽く。これぞ詩人が夢の極樂。されば其の響のさま〴〵にして、其の夢の色濃きを望めば、先づ現實の世界にありと云ふ、あらゆる物の色と響を求めよ。耳に聞く音、目に見る色のさま〴〵を一ツ〳〵に樂しみ味ふ時は、自づからわれにもあらず、現實の色現實の響より猶美しく猶滅びざる、夢の世界のさまをば見るに至るであらう。夢の城を築かんとせば、先づ彼方なる現實の都に進み入りたまへ。喜びの流れ、苦しみの山、何れの道を辿るとも、若き人の歩み行く運命の街道は、人多く集まり燈火

輝く都の城門に至らねば止まぬ。歩みたまへ。歩みたまへ。野のほとりには日蔽ひの木もあらう。岩のかげには泉もあらう。風吹かば其の風に、君が旅の衣の袖を吹かせ、雨降らば其の雨に、君が笠の塵を洗はしめよ。廿歳と云ふ怪しき力は、おのづと水の流るゝ如く、君が身を都の城門に導くであらう。若人、首を上げて彼方を見よ。都の城門は嚴にして高く聳ゆると雖、恐るるな、躊躇ふな。四方の街道より此處に集り來る旅人と荷車の群と共に、城門の扉の中に進み入りたまへ。

旅人　進入りて初めて窺ふ扉の中。そも／＼それは、いかなる處で御ざりませう。ああ、何やら胸騷ぎが致します。

詩人　狭けれど女心の究めにくゝ、短けれど人の一生の定めがたきに等しく、都は四方より、城の壁に包まれ限られてゐるとは云へ、一度び其の中に進み入る時は、七重八重なる大路小路は迷宮の如くに、さま／″＼なる人をさま／″＼なる處に誘ひ行くであらう。車の音いそがしき敷石道は、忽にして樹木森の如くに生茂る庭園に到り、乞食の群居眠る醜き小道には、石の噴井戸ありて淸き水谷川の如くに流れ迸る。日の光かゞやく時、靑空に聳る宮殿の屋根、鐘の音と共に夜の闇に沈めば、君は忽ち思ひもかけぬ斜なる裏街に、たゞならぬ燈火の海の湧出るに驚くであらう、およそ計りがたく、定めがたなき都のさまのさま／″＼は、これぞ誠の浮世の鏡である。此の鏡に君は其の姿を映して、疑ひを疑ひとして眺め、迷ひを迷ひとして觀ずる事を忘れずば、自づと君は其の誠の姿を見出すに到らん。凡のものは都にある。極悪も都。大善も都なり。旅人よ。たゞ悪と見て猥りに恐れず、善と見て、輕々しく誘はれずば、苦しまずして君はやがて、世の行く道の目標に逢はん、健在なれ、若き旅人。

旅人　あゝ、先生の眞白き髯の間から、歌のやうに響き出る其のお言葉。一ッ一ッに言葉の意味は分りませぬが、其の聲の強さ弱さの調子につれて、私のこの胸は唯だ譯もなく、蘆の葉より蘆の葉に、さゝやく音の傳るやうに波立ちました。

詩人　いざ、彼方の岸に、都へ行かるゝ門出の盃。

（再び酒盃をかはす。前方に茂りたる蘆の間次第に明るくなる。船頭眺めやりて。）

船頭　あれ／＼月が出まする。

旅人　不思議な光。秋の夜の河の景色は、物に驚く少女の眼のやうに動き出しました。一層高く聞ゆる落葉の聲、水の音、蘆の囁き……。いや、あれは。お聞きなされませ。何人か月の出を待ち奏づる音樂。

（琵琶の調かすかに聞ゆる。皆々耳を傾むくる中に、女の歌ふ聲蘆の茂りの間より次第に近付き來る。）

星祭る夜の高樓や
更けて人なき私語………

詩人　何やら聞き覺えある歌の節………

歌の聲　天にありては比翼の鳥、
地にありては連理の枝。

旅人　先生。其の筈でござります先生がお作の長恨歌ではございませぬか。

詩人　はてさて不思議な。思返せば二十年の昔。奢に飽きし放蕩の子の幾人と、とある都の花園に、咲き誇る牡丹の花を眺めし時、酒醒め際の何故か、われのみ一人心淋しく、春の夕の風につれ、あの美しい花瓣の一片二片と散るを見て、ふと心の琴の動くまゝ、漢の御帝の歡樂の、さめて果敢なき哀傷の、想ひを詞に綴りしを、傍にありし戲園の樂人、歌の言葉のわが口より洩るゝを遲しと、琵琶の曲に移して歌ひしより、忽ち都の人の口々に傳ひ囃され、巷に物賣る童までわが歌知らぬものとてもなかりしが、恰も花の散る如く、いつとはなしに忘られて、今は誰一人、其の合の手の一節をだに誦するものもなし。あゝ、わが青春の夢美しかりしよ。

歌の聲　忽ちに北の夷のさけび聲
都の城をつゝみたり。

（歌ふ女の聲は吹き起る夜風にかき消されて、蘆の葉音一際烈しく、落葉夥だしく舞ふ。忽ち蘆の茂りの陰より一艘の舟流れ出で、詩人の舟と舷を觸れ合す。）

第二の船頭　どうぞお許し下され。老の力の櫂よりも、潮の流れ、風の力が、あまりに強う御ざりました。

旅人　いかなるお人か存ぜねど、隈なく照らす入江の月、まづ苫をお上げなされませ。淋しくも木の葉の散るを打ち眺め、都へ門出の盞をかはして居る者で御ざります。

詩人　忘られしわが昔の歌を、蘆の葉蔭にお歌ひなされた舟の主。矢張都のお方と覺えまする。おさはりなくばわが舟に、いざいざ苫を。

女　あゝ、なつかしや、都のお方と聞くからに、見るかげもなく、やつれ果てたる我ながら、然らば苫を。

（片手に舟の苫を上ぐ。琵琶を持ちたる女の姿現る。）

女　お恥しう御ざります。

旅人　はて美しや。散り舞ふ落葉諸共に、何處よりとも知れず流れ來て、月の光のわが前に現れ出でしお姿は。

詩人　過ぎし我が世の夢の現れか。二十歳の昔の幻影か。あゝ美しい女御衆。お名は何と申されます。

女　おはづかしう御座ります。

旅人　何處のお方で御ざります。

女　おはづかしう御座ります。

詩人　これは私共の誤り。おゆるし下され。いかなるお人。現實と今とは我等の仇。忘られし我が昔の歌を、不思議にも誦じ給ふ、唯だ過來しかたの御身の上。御さはりなくばお聞かせ下され。

女　さては過る年、花の都の巷にて、もしや彼の歌知らずと云へば、物の道理わきまへぬ北の夷かと、人々の笑ひしが、忘られしは戀の巷のわれのみならず。人なき入江の秋の夜に、淋しく月を眺めたまふ、蒼白い學者のそなたは、かの美しい歌の主にておはせしか。美しい歌の主と云へば、不老不死の泉を飲みし人のやう、いつまでも若くて若くておはすと思ひしものを。

詩人　いづれは凋落の秋に遇ふ、人の世の定めは是非もなし。いざ、美しい女御衆よ。都のお方と覺ゆるに、そなたは又いかなれば、淋しい落葉の水の上、月照る夜を唯だ一人、肌寒の露もいとはず彷徨ひたまふか。物語られよ。語られよ。

旅人　覺むるを恐るゝ戀の夢、さまたげられず見果てんと、殊更に其方は騒しき都を去り、落葉散り敷く片里に、かくれ住むのでは御ざりませぬか。

女　あゝ、旅の扮装なされます若いお方、光澤ある其方の唇から、玉のやうに漏れ落ちた戀の一語。それは春を呼ぶ鶯の囀りか。すさみ果てたわが胸の、冬の荒野に時ならぬ、思出の返り咲き花を咲かせて下さりました。

詩人　思出の返り咲き、いで其の花の香を。

旅人　花の香をかざしめよ。

女　思出の其の花の數々は多けれど、色も香もいづれは同じ戀の夢。十三の時よりして、戀の巷に歌唄ふ流れの身には、數ある戀に遇ひましたが、それはみな空飛ぶ鳥に異ならず、唯だ閃き過る束の間の、影を見せたばかりで御ざります。捕へられぬ其の影を追ふ度び／＼に、私が兩手を振り上げ、打仰ぐ空からは、絶望の北風が、遠慮もなう私の黒髪を吹き亂しました。あゝ、絶望のあの北の風。あの北の國の荒野には、幾人私の戀人が私を見捨て行きましたらう。遠征の功名を、歴史と申す紙の面に記し付けようと、私の戀人は、あの人も、この人も、皆私の懐ろから飛び去りました。若い男に、戀といふものはまどろむ蠶の繭でござります。繭といふ戀の情の懐中に、若い力のやすらふは、たゞ暫くの假の宿、永への平

和の床ではござりませぬ。忽ちひろげる恐しい野心の翼に、眠りの床を打ち破り、功名の燈火目がけて飛び去りまする。南の方から來たと云ふ眼付の優しい私が第一の戀人よ。あのお方は大臣になりました。西の方から來たといふ髪の毛の濃い私が第二の戀人よ。あのお方は大將になりました。あゝ破れた繭、失うた戀、裂けたる胸、すさんだ心。情賣る色里のみは、昨日に變らぬまた今日の夕暮に、さびしくも唯だ一人取殘された私は、戀恨めしの一念に、其れからと云ふものはいかに多くの若人に、いか程辛く當りましたで御ざりませう 然し我ながら、ふと心付きました其時は、もう取返す由もなく晩う御ざりました。女かと思ふ美しい三人の貴公子は、情を受けぬ私の心の根强さに、この世をはかなみ、都の堀、庭の池水に身を沈めて死んだとやら、巷の人の噂とり〴〵。私はたゞ物恐しく夜にまぎれて都の城を拔け出でました。幾年は旅より旅のさすらひに、昔の姿は昔の誇りと共に跡もなく、其の日の飢の淺間しや、私はいつとも知らず物の情もわきまへぬ旅商人に身をまかせ、今も猶このあたりを流れあるきまする不仕合。おはづかしう御ざります。

詩人　あはれなる物語。それにつけても人の世の初めより、いつ解くるともなく殘されし宇宙の謎。功名の爭か。平和の眠か。二つの道の果はいづこぞ。春來る土地には冬も來ん。夜なき國に晝はあらじ。眠に飽きて戰ひを思ひ、戰ひにつかれて眠りをのぞむ。宇宙には何故に、水と、火と、敵同志の此の二ツ、二ツながらに並びてありや。知らぬ顏して、都の街に、矛と盾賣る男の顏の情なさよ。

旅人　月の光に蘆の葉のさゝやく言葉は聞きとれず。

女　數知れず輝く星に聲はなし。

詩人　あゝ不思議なる空の下、行く水はたゞ行くばかり、行くばかり。夜も休まず、晝も休まず。

船頭　おのづから朝と夕との時を知り、滿ちし潮はいつとなく、河の流と共に引き初めました。御覽ぜよ。蘆の細葉は悉く西の方へと傾き、落葉は皆西の方へと漂つて行きまする。

旅人　思ひもかけず夜を更かしました。風の出ぬ中、潮の流のゆるき中、先生それでは向うの岸まで、夜釣のお舟を拜借いたしまする。

詩人　わけもなく行手のいそがるゝは、旅する人のならはしか、酒瓶の酒も早や空しうなつた。お引留めはいたすまい。お名殘惜しや。

女　望みなき世にながらへば、過ぎし日の憂きを語るがせめての慰めで御ざります。潮の流の漂ひに、またいつかお目にかゝる折も御ざりませう。爺よ。わが舟も。さら

ば、彼方に。

詩人　わかれ〳〵の行手の岸。われは木陰の隠家に、昨夜と同じく今宵も一人。屋根打つ落葉を聞いて眠らん。

（詩人は獨り岸に上りて柳の老木の下に佇む。旅人の舟、女の舟、異りたる方向に流れ行く。）

旅人　さらばよ。詩人。

詩人　若き旅人の舟、さらば。

女　さらばよ。詩人。

詩人　漂ふ女の舟。さらば。

（二艘の舟蘆のかげに隠る。風の音。落葉渦巻く如く飛び散りて、佇む詩人の身を包む。いづこともなく男女の歌ふ聲す。）

夜となりぬる
秋はふけ行く。
……………
……………
落葉がなげく
蘆が泣く。

（然れどもその聲餘りに幽にして弱ければ、明かに歌の調を聞き分けず。落葉いよ〳〵はげし。）

（月光物凄きまでに蒼く澄みたり。）

（明治四十四年一月作）

わくら葉　三幕

人物

藤坂大造　某會社重役、　五十八歳
藤坂恭次　大造の兒、學生、　二十二歳
吉田三郎　文學者、　三十五歳
樋川雨聲　畫家、　三十二歳
お民　藤坂大造の妾、　二十八歳
みよ子　藝者、　十九歳
學生の友達二人
女中一人
執事一人

時代

現今

第一幕

實業家藤坂大造の邸內、其子學生恭次の部屋。十月中旬の午後。左右ともに襖。正面床の間と窓。床の間には油繪の額をかけ、丸善の店頭に飾つてあるやうなハイカラ風の書棚を置き、其の上に沙翁ゲーテの小さき半身像を据う。左手にテーブル及び一脚の椅子を置き、つゞいて洋裝の書物を並べし硝子戸付の本箱。左右の襖にはいづれも一二枚の西洋畫をピンにて留めある杯、凡て文學を好む青年の居間らしく飾る。疊の上には火鉢と座蒲團あり。恭次、小綺麗に着こなしたる飛白銘仙の袷に同じ羽織。五分苅の頭髪稍のびて顏色蒼白し。疊の上に旅革包と行李をひろげ、明日鎌倉へ轉地に行く用意にと、頻に本箱の中の書物を入れてゐる。幕明く。

第一節

恭次　これア何だ。漱石先生の「それから」か。あんまり本ばかり入れると荷物が重くなるからなア。（机の上に投げ出して別の書物を取り背の表題を讀む）森林太郎譯「即興詩人」これア持つて行かう。幾度讀んでも飽きないからなア。「きみが姿を仰ぎみて、君がみ聲を聞くときは、おほぞら高くあま翔り、わたつみふかくかづきいり、かぎりある身のかぎりなき、うき世に遊ぶこゝちして……」「立ちながら早口に一二行を讀み、其のまゝ行李の中に投げ入れる。机の上の置時計を見て）もう三時になつた。藥を呑んでそろ／＼體溫を計る時分

だつけ。

（床の間の片隅に置きたる盆の上の袋より丸薬を取り、コップに水み入れて呑む。そのまゝ床柱に背をよせかけ。）

あの醫者ほど馬鹿な奴はない。肋膜が惡いのだとか何とか云つて頻りに病氣を乃公に知らせまいとしてゐるけれど、乃公はとうからこの藥の匂ひをかいで肺が惡くなつたといふ事はちやんと知り拔いてゐるんだ。もう乃公の運命は定つてゐる。藥を呑む必要もない。轉地なぞに行く必要もない。十年前に死んだ母の後を追ふばかりなんだ。

（感慨に沈み、手を伸して窓の障子を明け庭を見る。）

もう木の葉が黄くなつて來た。おみよに別れたのも丁度一昨年の今時分だつた……。

第　二　節

女中左手の襖を明けて居る。

女中　若旦那樣立川さんと最うお一人どなたか被入いました。

恭次　（窓の障子を閉め）　お通し申せ。それからお茶と菓子とを持つて來るんだ。

（退儀さうに立上つて座敷の眞中に取亂した行李や書物を片隅へ押し遣りなどする。學生立川と清田の兩人左手の襖より出る。いづれも恭次と同じ位の年輩、立川は羽織袴にて髯を生し、清田は制服にて眼鏡をかけてゐる。）

恭次　や、失敬。さア敷き給へ。（座蒲團をすゝめる）

立川　手紙をありがたう。明日鎌倉の方へ行くさうだね。

恭次　あゝ。醫者が是非轉地しなくつちやいけないと云ふから。然し轉地したつて治る病氣ぢやないし、云はゞ無駄な話さ。

（此の間に女中茶菓を持ち出で去る。此れより以下の會話中三人いづれもよき程に烟草を喫し、茶を呑み、菓子を摘み、思ひ〳〵の居住ひと態度をなす。）

清田　見たところぢや何とも無いぢやアないか。然し兎に角養生した方がいゝねえ。

立川　病氣でなくたつて在學中は打續けに轉地してゐるに限るよ。東京にゐたつても學校の試驗に追はれて規則にばかり縛られて居た日にやア、實際生きてるかひがないからねえ。

恭次　大學へ行つても矢張り駄目かい。僕はとう〳〵病氣で一年おくれて了つたけれど、寧そもう此れきり學校はよした方がいゝかも知れないね。此の上また三年間も、殊に僕なんざア到底親爺が文科に這入る事を許さないん

だから……志に違つた學科を修めて、試驗制度の爲めに壓迫されるなア全く馬鹿々々しいからねえ。
清田　さうとも、僕なんざア末は野となれ山となれだ。此學期が始つてから一度も敎場なんぞへ出やアしない。實は一昨日旅行から歸つて來て立川のところで君の手紙を見てびつくりしたんだ。肺が惡いなんて君の神經だらう。
恭次　いや、實際だ。
立川　醫者がさういつたのか。
恭次　醫者は隱してゐるさ。然し僕は二三日前醫者が吳れたあの藥を呑んだ時、確かに僕はさうだと思つた。
清田　それが神經だよ。
恭次　まア聞きたまへ。（叱するやうに云つて）あの臭い藥の匂には僕はちやんと覺えがある。もう十年も前の事だけれど、死んだ僕の母の衣服から蒲團から病室までに浸み込んでゐたあの恐しい藥と同じ匂ひだ。僕は母が大理石のやうになつて死んでゐる其の手を握つて、お母さん〳〵と云つて呼んだ時の事を、今度の藥の匂でありありと思ひ出した。手紙の中に書いた「藥の匂ひ」といふ僕の詩……讀んでくれたか。
（兩人默つてうなづく。）
僕の病氣は遺傳だよ。とても治りやせん。
立川（靜な調子にて）然し君の兄さん。旅順口で戰死された君の兄さんは、軍人になられた程の健康體を持つてゐた人ぢやないか。
恭次　兄貴は性質から云つても親爺そつくりだつたから、母の病氣などは遺傳しなかつたのだらう。
清田　兎に角醫者がまだ何とも云はないのなら、自分から餘まりつまらない事を考へない方がいゝよ。明日何時にたつんだ。
恭次　もう一度醫者の處へ行つてからだから、いづれ午過ぎになるだらう。家の別莊へ行くんだし、それに誰れもゐないから、遊びに來てくれたまへ。君の方で僕の病氣さへ氣にしなけれア幾日宿つたつて構はない。
立川　君の病氣なんぞ氣にしてゐるものか。僕は病氣が人間の最大の不幸だとは思つてゐないんだよ。健全とか何とかいふ神經遲鈍な平凡な狀態より、病氣を持つてゐる身體の方がどれだけ悲壯だか知れないぢやないか。樗牛だつて獨步だつて皆病氣で若死をした天才だ。僕ア愚圖愚圖して長生なんぞしてゐたいと思つた事なんざア一遍もありやしない。人生の價値は長さぢやない深さによるんだ。ねえ、君。
清田　さうとも。蟻のやうに勞働して多籠の土の下に生きてゐたつて何になる。蟬のやうに花やかな夏を歌つて夏と共に死すべしさ。一瞬間でも深く強い生の快樂を味へ

ばそれでいゝ。人生の目的は唯だ生の享樂にある。

恭次　例の議論が出たね、君、あの原稿はどうしたね。もう書き上げたのか。

清田　實はどうも巧く行かないんで煩悶してゐるんだよ。何だか自分ながら厭になつた。

立川　兎に角書上げて見たらいゝぢやないか。大家だとか云つてるけれど此頃の小說の平凡な事ッたらお話しにならないぢやないか。皆行き詰つて了つたんだな。

恭次　だから、どうしたつて、新進作家が出なけれアならない時代だ。僕は受け合ふ。きつと評判になるよ。兎に角發表して見たまへ。君は文壇で知つてゐる人があるんだらう。

清田　あゝ文壇の知己は隨分多い方だ。さう云へば君。鎌倉と逗子には此頃大分大家の人達が田園生活をしてゐるぢやないか。何なら僕が紹介狀を書かう。君の愛讀してゐる「南歐の藝術」を書いた吉田先生、あの人も矢張り鎌倉にゐる。どうせ彼方へ轉地療養に行くんなら、時々訪問して見たまへ、屹度得る處があるよ。

立川　吉田先生か。あの人の評論はまるで熱情的な詩のやうだね。いつ見ても感じのいゝ文章を書く人だなア。

恭次　其れぢやアついでの時紹介して置いてくれ給へ。訪問して見るから。（間を置く）　やつぱり時々は專門の人達の意見を聞く必要があるねえ。殊に詩なんぞになると全く文字の技巧だけでいゝ調子のものが出來るからね。僕も實は北原白秋の「思出」見たやうな綺麗な詩集が出して見たいと思つてゐるのさ。

立川　もう餘程たまつたらうねえ。君の詩はいつ見ても夕方の川岸を步くやうな風で、何となく淋しくつて、僕は實にいゝと思ふ。もし君が全く……

恭次　全く何んだ。

立川　全く……氣にしちやいけないよ。君がね、全く君自身の云ふやうに肺が惡いのなら君はどうしても日本のアルベエル・サマンだと思ふがね。

恭次　はゝゝゝは。さう賞められると、もう後が出なくなッてしまふ。

清田　僕は君の詩の中ぢやア、あの「鼠」と云ふのが一番好きだ。

山の手の奧深く教嚴しき家の子の、
ねられぬ夜半の或る時に、家の鼠と語りける。
十一にて落第し十三にして煙草呑み、
十六にして盃の味は知らねど早や既に、
夜をばわれはよろこびぬ…………

（なかしき節をつけて誦する時、突然襖のあく音に清田は吃驚して默る。左手の襖の間より恭次の父大造の

妾お民半身を出す。丸髷。大島の袷。薄色の紋付。年よりは若く二十四五にしか見えぬ色白の小作なり。)

第三節

お民　あらお客様ですか。どうも失禮……。(あわてゝ襖を閉めようとする)

恭次　いゝんですよ。何か御用ですか。(座を立つ)

お民　旦那様がお歸りになりましてね。御用があるとか仰有つてゐらつしやるんです。きつと御別莊の事か何かでせう。

恭次　さうですか。(友達の方を顧みて)それぢやア君、烏渡失禮するよ。煙草なら其の箱の中に澤山這入つてゐる。(襖をしめて去る)

第四節

立川　(聲をひそめて)淸田。あの女の人を見たか。

淸田　若い人だねえ。藤坂君の二度目の母さんなのか。

立川　まアそんな様なものだね。

淸田　そんなやうな者とは。をかしいぢやないか。

立川　君にも似合はないなア。そら、いつか新聞に長く出てゐたぢやないか。藤坂君の父君の、あれがお妾さんだよ。

淸田　うむ〳〵。さうか。築地の何とかいふお茶屋の娘だつて……父君が無理遣りに手籠めにしたとか何とかいふ例の醜聞だらう。あゝ云ふ人が家庭にはいつて居ちや藤坂の境遇も實際氣の毒だねえ。

立川　ところが君、事實は小說よりも奇なりだ。藤坂自身の話す處によると彼の人と藤坂との間は、すこしも軋轢しちやゐないのださうだ。藤坂の兄が戰死した時分には、藤坂は丁度學校の寄宿にゐたもんだから、父君はそれを機會にしてずつと前から外妾にして圍つて置いた彼の人を家へ入れたんだとさ。藤坂が寄宿をやめて家へ歸つて來た當座は、餘程妙なものだつたさうだけれど或る事件から突然藤坂はあの人に對して永遠に精神上の恩義を感ずる譯になつて……

淸田　それアどう云ふ譯なんだ。

立川　今ぢや藤坂も秘密にしてゐるやうだから、僕の口からは云ひにくいけれど……藤坂が嘗て失戀した事があると思ひたまへ。其の時に彼の人が父君との間に立つて、藤坂君の爲めに一方ならず盡力したといふやうな事件があつたのさ。その爲めに藤坂は非常に感動して、境遇の正當でない彼の人に對して却つて同情するといふやうな工合になつて來たのだ……。兎に角込み入つた事情だよ。

淸田　さうだね。(間を置く)藤坂はほんとに肺がわるい

んだらうか。たいして驚いたやうな顔もしてゐないけれど、心中ぢや餘程絶望してゐるやうだね。

立川　然し藤坂が自分から肺病だと云つて鬱ぎ込むのは、今に始まつた事ぢやない。君も知つてるやうに、あの男は何かといふと直ぐ胸を押へちやア「もう駄目だらう」と云ふのが癖だ。幼少い時分に別れた母親が肺病で死んだといふ記憶が始終胸の底に蟠つてゐるんだね。そして現在父親と思想上の意見が合はなくつて、段々不愉快な事が多くなるに從つて、或時はわざと病氣を迎へるやうな眞似もすれば、また或時は、自分から造り出した幻影を見て戰慄してゐる。凡ての行動が全く感情的だからね、實際の事實は殆ど他人には窺ひ知る事ができないよ。

清田　それが乃ち將來詩人として有望な處だ。現在から見ても其の境遇が已に爭れない優れた資格を作つてゐるぢやないか。亡き母の悲しい記憶。家庭に對する不滿と反抗。失戀の經驗。暗黒な疾病に對する恐怖……

立川　要するに僕等は境遇が平凡過ぎるんだね。斷然學校なんぞ止めてしまつて放浪生活をして見ようかなア。

清田　伊豆の下田へ行つて見たまへ。僕は實に忘れない…

第五節

恭次左手の襖を明けて出る。

恭次　おそくなつて失敬。實にいやになつちまふ。相變らず分り切つた事ばかり云つてるんだから。

立川　何だ。父兄の訓戒かね。

恭次　鎌倉へ行つてからの心得だとさ。近所によくない料理屋なぞが出來たさうだから、第一に品行をつゝしむんだとさ。馬鹿にしてゐるぢやないか。

立川　そこが即ち老人たる所以だ。僕の親爺なぞも人を叱る時には自分の缺點なぞは、棚へ上げて知らない顔をしてゐる。お目出度いものだ。食言を恥ぢざる健忘性と云ふ奴は人生最上の幸福だよ。

清田　最大無限の破廉恥漢だ。極惡の僞善者だ。（間を置く）全體今の老人とか先輩とか云ふ奴は何かと云ふと口癖の樣にすぐ現代の青年は墮落してゐると云ふが、そんな事を云つて讒謗する教育家は第一にどうだ。天秤にかけて計つて見たら、學生と教育家とはどつちが惡い事を餘計にしてゐると思ふ。學生は煙草を喫む。酒も飲む女も時には買ふだらうよ。然し教育家のやうに上官に諂つたり、金錢を欲しがつたり、己れを欺いたりすることは決してない。學生は唯だ教育家ほど己れの缺點を巧みに隱す術を知らないだけだ。

立川　學生は人間だもの、眞正の人間、善良な人間だもの。教育家のやうに魔術を使ふ化物ぢやないからなア。

恭次　然し其の魔術ももう駄目だ。世間の奴等はまだ瞞着されてゐるかも知れないが、もう吾々青年の眼にはすつかり化の皮が剝がされてしまつた。全體青年を教育指導するものは第一に青年が抱いてゐる深い憂苦を知るものでなければならない。青年の心理を知らない唯だ世故にばかり長けた人間が幾人出て來て尊長者の權威を振つて、吾々を壓伏しようたつて、何で吾々が心服するものか。今に時代の危機(クライシス)が必ず來る。

清田　一日でも早く來てくれゝばいい。さうすれば吾々は吾々自身に教育制度といふものを作つて、吾々自身に吾々を教育する。一體今の教育制度は皆な老人が勝手次第に彼等に都合のいゝやうに、彼等の爲めにばかりなるやうに作つたものだ。專制政治の時代はもう過ぎ去つた昔の夢だとすれば、教育も道德も凡て出來得る限り多數者の意思を基本とした自治獨立のものにするのが正當ぢやないか。吾々青年は自由の國民が大統領を選ぶやうにその團隊の投票によつて、吾々の教師とすべき人物を選擇する權利を獲取したいもんだね。

立川　はゝゝゝは。それア名案だ。

恭次　不適當な教師には、どん／＼宣告を下して追放するんだね。はゝゝゝは。

清田　よき意味に於ける姥捨山さ。

（此以前より窓の障子に夕日の色次第にさして來る。）

立川　日が短くなつたなア。何時だらう。

恭次　まアいゝぢやないか。ゆつくりして行きたまへ。

清田　ありがたう。鎌倉へたづねて行くから。それぢや君。大事にしたまへ。

恭次　ついでの時、それぢや、立川君。吉田先生の處へ持つて行く紹介狀を書いて置いてくれたまへ。

清田　あゝ。すぐ書いて送る。

立川　もう君。こゝでいゝ。ぢや失敬。

（恭次兩人を送りながら左手の襖を開けて去る。）

第六節

恭次の父藤坂大造、白髪無髯の赤ら面にて、肥滿したる大男。着流し七子の五ッ紋にて左手の襖を明けて出る。室内を見廻しながら、

大造　この煙はどうだ。まるでえぶされるやうだ。恭次の病氣なぞには殊更煙草をつゝしまなければならんのに、仕方のない奴だ。疊は燒焦しだらけにする。床柱は此の通り疵だらけだ。幾年(いくつ)になつてもまるで駄々ッ子見たやうに、手がつけられん。

（窓をすこし明け机の前に彳んで紙片書物なぞを手に取り。）

何だ。「午後三時」吉井勇著……小說だな。相變らず此樣くだらんものばかり讀んで居る。何だ。「牡丹の客」「すみだ川」みんな小說だ。學校の敎科書らしいものは一册もありやしない。

（恭次左手の襖より入り來り、父の姿を見て吃驚する。）

恭次　お父さん。何の用です。

（矢庭にその後よりテーブルの上に置いた原稿らしき紙片をひつたくる。大造靜に振返りわざとらしく和げたるどら聲にて、）

大造　恭次。醫者は何と云つたね。から無暗に烟草を呑んぢやいかんぢやないか。

（恭次の顏を見ながら肥滿したる體軀を重さうに籐編の長椅子の上に据ゑる。恭次默つてゐる。）

病氣中だから私もさう詰めて勉强ばかりしろとは云はないが、少しは爲めになる本を持つて行つたらどうぢや。これア皆小說ばかりぢやないか。英語がいやなら漢文を讀みなさい。論語でも孟子でもよい。古人の書いたものは何度讀んだつて損にはならん。今時のこんなくだらない小說本などは無益なばかりならまだ結構ぢや。自然主義とか社會主義とか云つて、兎角惡い智慧ばかりつける。

（大造は次第に其の持前なる不愉快に皺枯れたる音聲になり、知らず〱壓伏的の調子になる。恭次はせき込みたる調子にて、）

恭次　お父さん。自然主義だつて社會主義だつて何がわるいんです。實際あなたは今の小說をよく讀んで研究した上でさう仰有るんですか。讀みもしないで唯惡く云つたツて、それア駄目です。

大造　高が小說本ぢやらう。一々讀んで見ないでも、大抵の見當はつくぢやないか。昔から小說なんどを書くやうな者に碌な人間はない。碌でもない人間の書いたものにいゝものゝ有らう筈がない。それぢやから私は論語か孟子を讀めと云ふのぢや。史記や通鑑でもいゝ山陽先生の日本外史でも結構ぢや。兎に角もう少し高尙なものを讀まんといかん。

（大造は絕えず其の不愉快に皺枯れたる聲を殊更に和げて、恭次を全くの子供扱ひにしてゐる。）

恭次　日本外史は高尙なもんですかね、

（恭次冷笑を浮べながら、）

大造　高尙ぢやないか。恐れ多くも大義名分を明かにした尊い書物ぢや。

恭次　その代り史學の價値から見ればゼロです。太平記を漢文に書き替へたばかりだ。

大造　何かと云ふと、お前はたゞ口答へさへすればよいと思つてゐる。今日は私は何にも云はん。お前は病氣なん

ぢやから、心掛けよりかまづ身體の方から、直して行かなくちやならん。東京にゐて下らん友達なぞと愚にもつかん議論をして遊んでゐるより、鎌倉へ行つたら、せつせと運動するがえゝぞ。朝は何でも日の出ない中に早く起きて、朝飯前に海邊をズーッと一廻りして來るのぢや……

恭次　もう、そんな事ア分つてゐます。

大造　分つてゐてもお前は更に實行せんのだから困る。醫者に烟草をよせと云はれても一向によさんし……一體お前は生命が惜しくないのか。

恭次　こんな生命なんぞ……僕ア自殺しようかと思つてる位です。

大造　またツ。いかんねえ。どうも。だから運動して身體を強壯にしなければいかんと私は云ふのぢや。健全なる思想は健全なる身體に宿るんで、お前はまア身體を直してからでなくちや、殆ど話しにならん。

恭次　私の身體はもう直りツこありやアしません。養生するだけ無駄です。

大造　又そんな駄々をこねる。恭次。（調子をきつぱりさせて）お前には親の心持と云ふのが分らんのか。少しは考へて見るがいゝ。

恭次　（突然聲を顫はして）ですから、私はあなたの心持が分つてゐるから、私は死にたいと云つてゐるんです。一日でも早く死んでしまひたいと云つてゐるんです。お父さん。あなたは萬一私の身體が舊のやうに直つたら、あなたはまた私の身體、私の一生涯をあなたの虛榮心の道具に使はうとなさるのでせう。然し私にはもうそれは無理です。出來ない事です……。

大造　恭次何を云ふのだ。お前の一生涯を私の虛榮心の道具に使ふ。馬鹿な事を云ふにも程がある。少しは言葉をつゝしむがいゝ。

恭次　だつて然うに違ひないぢやありませんか。お父さんあなたは唯だの一度だつて眞底から私の生涯の幸福と云ふ事を考へて下すつた事はない。あなたが私の文學者になる事を嫌つて、將來實業家か役人か外交官にでもさせようと云ふのは、私の幸福と云ふ事を思ふ爲めからぢやなくて、つまり私を世間に羽振りのいゝものにして、それを見てあなたは樂しまう自慢にしようと云ふのでせう。あなたの虛榮心の道具に使ふと云つたのが何で惡いんです。

大造　お前はもう根性がねぢくれて仕舞つたから、親の親切といふものが分らなくなつたのだ。親切で云つてやる事がみんなお前には惡く聞えるんだ。困つたものだ。

恭次　いゝえ。決してさうぢや有りません。私は唯だあなたの、淺間しい親の心の底といふものを見拔いてしまつ

たからなんです………

大造　淺間しい心だ。云はして置けばいよ〳〵以て怪しからん事を云ふ。

恭次　淺間しいから淺間しいと云ふのです。眞實のことを云ふのに、何も私は憚り恐れる處はないと思ひます。お父さんはいくら孝行だの道德だのを楯にして叱りつけて胡魔化さうたつて、もうちやアんと、私の眼にはお父さんの心は見えすいてゐるんです。お父さん。あなたはいつかも、物質的に將來私なぞの保護を受けるやうな心配はないと、あなた御自身の口からも、さう仰有つた事があるぢやありませんか。そんなら、私はつまり金を澤山儲ける商賣人なんぞにならずとも、自分の信ずる學問を熱心に硏究して、人間として恥ぢざる行ひさへして行けば、それで立派に人の子たる義務を盡す事ができると信じてゐるんです。いろ〳〵な口實を設けて、お爲めごかしや、親切ごかしに、私の目的を妨害するのはそれア無理です。不正です。親にはそんな權利はないんです。

大造　（再び和げたる聲になり）　またッ、さう理窟ばかり云つたつて……理窟ばかりで世の中は通りはせん。私はお前に金儲けをさせたいから、文學者になるなと云ふのぢやない。お前の長い一生涯の末の事までを考へるから、それで文學者だとか、小說家だとか、新聞記者だとかさう云ふものには、斷じてさせたくないと云うて居るんだ。人間は一生涯、書生をしてゐる時のやうに好勝手な事ばかり云つて騷いで居られるものぢやない。お前ももつと大きくなつて、世の中に出て見れば分る。世の中を知らずに無鐵砲なことばかり云つてゐる連中は、つまり自分から段々に困り抜いた揚句が、社會主義見たやうな同類と一所になつてろくな事はしなくなる。私はお前の身の末を案じるんぢや………

恭次　あ、お父さん、何かと云ふとすぐに行末とか身の末とか仰有るけれど、私なんぞにはもう、行末も將來も何も有りやアしません。此の現在といふものさへ、どうして行つていゝか分らないのぢやありませんか。私は親といふものが何故こんな世の中に私見たやうなものを產み落してくれたのかと、恨むより仕樣がありません。私はあなたがどんなに仰有らうとも、私は私の天性の性分をどうする事も出來ないのです。私見たやうなものは一日も早く死んで了ふのが、一番の親孝行なんです。お父さん、私はかうして生きてゐるのが、もういやでいやでたまらないんです。私は自分の身體や知識がかうして今日まで養育されて來たのは、みんなお父さんがあの不德な僞善な社會から儲けて來る金錢のおかげかと思ふと、私はもう自分の身體に觸つて見るのもいやです。私はあなたの

力で育てられたり、養はれたりしたからこそ、いろいろな干渉を受けるんです。私は死んで自由になります。死にます。死にます。死んで自由になります……。

（次第に狂氣らしく叫んで、椅子の上に崩れ落ち、俯伏に額を机の上に押つける大造呆氣に取られながら。）

大造　これ、恭次。恭次。貴様はもう氣がちがつてゐる。困つたものだ。

（此時お民右手の襖より恭次の鎌倉に持ち行くべき衣類なぞを手に持ち出で來り、此の樣子を見て。）

お民　まアどうなすつたんです。

大造　身體ばかりぢやない。頭も餘程どうかしてゐるやうだ。困つたものだ。

お民　あなたは少し彼方へ行らつした方がようございますよ。却つて何にも仰有らないで、少しの間そうッとしてお置き遊ばした方が……

（お民恭次の傍に進み寄り心配さうに顔を差覗く。）

大造　困つたものだなア。

（心配さうに右手襖より去る。）

第七節

お民は疊の上に坐つて其の邊に取り散らされたる書物を片づけながら、

お民　明日行らつしやるッて云ふのに、まだ何にも荷拵をなさらないんですね。恭次さん。あちらでお召しになるお寢衣や何かを持つて來ましたけれど、此の儘でようござんすか。何なら私がお手傳ひします……。

（恭次は顔を上げながら。）

恭次　いゝですよ。僕がやります。

お民　あなたも餘りお父さんにおさからひにならない方がよござんすよ。其場だけ唯だはい／＼と云つて居らつしやれば何でもその儘すんで行く事ぢやありませんか。

恭次　僕もさう思つては居るんだけれど、あんまり口惜しい事を云ふから……

お民　いゝぢや有りませんか。何て仰有られたつて……此の御本も皆持つていらつしやるんですか。

恭次　えゝ。いゝですよ。飯でもくつてから、ほんとに僕がやります。

お民　シヤツなんぞ揃つてましたね。ついでゞすから、ざつと入れるものだけ入れて置きませう。その場になつて急いでするると忘れ物をしていけませんから……

恭次　ありがたう。實は何をするのもいやだものだから、唯滅茶々々に押込んであるだけなんですよ。

（恭次も疊の上に坐つて荷支度をする。お民は行李の中へ衣服と本なぞを順よく入れかへようとする拍子

に、一冊の本の間から一枚の寫眞バタリと疊の上に落ちる。）
お民　おや。（と何氣なく取上げて見て）まア、此れアおみよちやんの…………
恭次　えツ。（と振向き喫驚りして寫眞を引取つたまゝ暫く顏を見合せる）
お民　恭次さん。まア……あなたはいまだにあの娘の事を…………
恭次　（ぢつと寫眞を見入つたまゝにて）忘れるもんですか。どうしたつて忘れられるもんですか。僕アあなたにも隱してゐたんです。然し僕アどうしても忘れられないから毎日寫眞を見てゐるんです。
お民　もう一昨年の事でしたねえ。それだのにまだあの娘の事を…………
恭次　はゝゝゝは。だつて仕方がないぢやありませんか。何年たつたツて僕はおみよの事は忘れられないんです。
（お民身につまされた體にて考へ込む。恭次は再び寫眞を見詰めてゐたが突然調子をかへ。）
恭次　お民さん、あなたは今でも私の戀に同情してゐて下さるんですか。
お民　それア、あなた…………
恭次　そんなら、お民さん。あなたは現在おみよがどうしてゐる位の事は私に敎へて下すつてもいゝでせう。ねえ。おみよは今どこにゐるんです。おみよは、私の爲めに此處の家を追出されてからどうしました。私はあなたが其れを云ひにくがつてゐるのはよく分つてゐます、だから私は今日と云ふ今日まで、默つて何にもきかずにゐたんです。
（お民困つたといふ風にて唯だ俯向く。恭次膝を進めて）
恭次　私はかう云出したからは、どうしたつて聞かなければ承知しません。私にはあなたより外におみよの事をきく人は誰もないのです。おみよはあなたの世話で、家へ小間使に來た女ぢやありませんか。あなたが其の後の事を知らないと云ふ筈はない。お願ひですから聞かして下さい。私はおみよの居處を知つたからツて、今直に逢はうとは決して云ひません。けれども私はもういつ死ぬか知れない身體……もう到底直る望みのない病氣にかゝつてゐるんです、私はたつた一言でいゝから、私は死ぬまでもおみよの事を思つてゐたといふ事だけを知らしたいのです。だから話して下さい。おみよはどうしてゐるんです。結婚でもしたんですか。
お民　結婚……いゝえ。
恭次　それぢやア家にゐるんですか。其れとも何處か又奉

公にでも行つてゐるんですか。

お民　まア……こゝでは何だか氣がせいて、ほんとにおちついてお話しが出來ませんから、ねえ、恭次さん鎌倉へ行らしつてから、ゆつくりお話ししようぢや御在ませんか。

恭次　さうですか。あなたは父から口留めされてゐるから、それで知つてゐても云ふ事が出來ないッて云ふんですね。

お民　さうぢや御在ません。ですけれど……………。

恭次　そんなら一言おみよがどうしてゐるか位の事は、敎へて下すつたつていゝぢやありませんか。お民さん。此の通り拜みます。一生のお願ひだから敎へて下さい。

お民　まアどうしたらいゝでせう。恭次さん、そんなに仰有られると私は途法にくれてしまひます。

恭次　敎へて下さい。後生だから、敎へて下さい……

（恭次夢中になつてお民の手を取る。お民仕方なく）

お民　それぢや申します。おみよはお屋敷を下つてから家の都合で……。

恭次　どうしたんです。

お民　實は去年の暮、横濱で藝者になつたんで御在ます。

恭次　藝者に……かはいさうな事をしましたねえ。

（恭次おそろしい吐息をついて俯向いたまゝ無言になる、お民も今は決心したる體にて）

お民　恭次さん。もう何も彼もお話ししますから、どうぞ勘辨して下さい。おみよは去年の暮藝者になる前、一度外目ながらでもいゝから、お別れにお顏が見たいと云つて私の處へ手紙を寄越しましたしまたあなたへ宛てた手紙も其の中に入れて寄越したんですけれど、何しろ嚴重な旦那樣の手前もありますし、もしもの事でもあつてはと、つひ私の一存で其の儘にして仕舞つたので御在ます恭次さんどうぞ惡く思はないで下さい。

恭次　（漸く氣を取り靜めたる體）僕が何であなたの事を惡く思ふものですか。みんな彼の壓制な父の爲めです。一生涯の目的を妨げる。生命の泉なる戀を禁ずる。僕の身の上を滅茶々々に踏にじつて仕舞つたばかりぢやない、僕の父は實に人道の敵だ。お民さんあなたの若い時分の戀と幸福をも、私の父は飢ゑた鷲のやうに、金力の爪で掻き裂いてしまつた。僕はあなた自身の口から聞かないでもまた父がいくら秘密にしてゐても、世間の口は閉されない。僕は何もかもちやアんと知つてゐます。僕はあなたが父の爲めに破壞された不幸な餘生を、かうしてつまらなく送つてゐらつしやる心の中を、どんなに辛い事だらうと、つく〴〵同情してゐます。私の父さへ存在してゐなかつたら、私はこの世に生れて來ないでも濟んだし、又あなたは人の妾なんぞになつて居ずとも、お互に相愛

した最初の戀人と今頃は幸福に正當な妻となつて暮してゐられたのです。私の父は實際人道の敵だ。幸福の破壞者だ。あいつは惡魔だツ。惡魔だツ。

お民　あなた、そんな大きなお聲を………。

恭次　聞えたつて構ふもんですか、人道の敵だ、惡魔だツ。

お民　まア靜かになさい。おみよからの手紙を持つて來て上げます。

（お民右手の襖を明けて去る、恭次後を見送る。此の以前より部屋は次第に暗くなつてゐる。）

恭次　あゝ又夜が來た。もうおみよの顏も見えなくなつた。

（手に握つた寫眞を再び見詰る。幕。）

第二幕

吉田三郎鎌倉住宅の庭、舞臺奧深く、低く刈込みたる「さんご」樹の生垣をめぐらし、右手寄りに小さき扉をつけたる門あり。生垣を越して松及び黃葉せる樹木の頂き、漁家の藁屋根（その間所々干したる網）次第に低く重なりて海際につゞく體。向一面うらゝかなる日光を浴びたる海と濃き青空の眺望。舞臺前側右手寄りに硝子戸を引きたる住家の一部を見せ、踏石のほとりには西洋鍬、じようろ、土製の鉢など捨てゝある。庭上よき處に落葉の立木。薔薇花壇、木の切株、竹製のベンチ、椅子などあり。十一月中旬の午後。

幕明くと主人吉田三郎、リボン付の鼻眼鏡をかけ、頭髮を四角にかり、縮らしたる口髭、刈り込みたる顎髯。縞のヅボンに天鵞絨のスモーキング・ジャケットを着、大きなパイプを啣へて庭上を歩きつゝ、やがて生垣のほとりに佇んで海の方を見てゐる。暫くして生垣越しに、人の來る姿を認めたる體。

第一節

吉田　藤坂君いよ／＼今日だね。好い天氣になつたぢやないか。

（藤坂恭次ツバを下げたるソフトハツト、絣の着流しにて、手に雜誌風の書物を持ち、右手の門に現はる。）

鎌倉の海や空も今日は君の戀人を迎へるつもりなんだらう。

恭次　（稍向きながら進み出で）先生。ほんとに御迷惑ぢやないんでせうね。僕はなんだか、あんまり自分勝手のやうで申譯がありません。

吉田　また。そんな心配は無用だよ。（庭を歩みながら）君の方さへ差支がないのなら、僕の方は更にかまはないのだと、昨日もあれほどさう云つたのぢやないか。日本

といふ處はいくら田舍だつて、女の姿を見ると人が直ぐに猜疑の眼を光らせる處だ。まさか往來や畠で立話もできなからうぢやないか。（此の間に恭次は有合ふ竹の椅子に腰をかける）

恭次　ほんとです。だから私は先生がさう云つて下さらなかつたら、實はどうしようかと思つてゐたんです。家の別莊は誰も居ませんけれど、矢張り番人の爺やなんかゞ妙に思ひますからねえ……。

吉田　僕等の時代には高等學校なんかぢやア、兄と妹が話をしながら往來を歩いてゐるのさへ、學生にあるまじき所業だと云つて鐵拳制裁を加へた位だ。馬鹿々々しい道德もあつたものだ……。（木の切株に腰をかける）それアさうと、立川君は此頃どうしてゐるね。あれア先月の末だつたね。初めて君を連れて僕の處へ紹介に來た彼の時ツきり、一度も姿を見せない。東京にゐておとなしく學校へ通つてゐるんだらうか。

恭次　私の處へも手紙一ツ與れません。旅行でもしてゐるんでせう。どうせ眞面目に教場なんかへ出る男ぢやありませんから。

吉田　まア遊べる中にたんと遊んで置く方がいゝ。今に遊びたくつても遊ぶやうな氣になれなくなる時代が來る……戀愛にしてもさうだ。もう僕なんぞはいかに悶えたつて、君達のやうな初々しい花やかな心持にはなれない。（調子をかへて）大丈夫かね。もう來る時分ぢやないか。何時だ。

恭次　まだすこし時間があります。（懐中時計を見る）

吉田　待たれても待つ身になるな。（微笑して）僕も覺えがある。戀人を待つ瞬間ほど心のいら〳〵する苦しいやうな切ないやうな思ひのする時はない。一層此まゝ切れてしまつた方がましだと思ふ事もある位だ。然しもう僕なぞは……みんな過ぎ去つた昔の夢になつた。僕は君の若い姿と、若い眼の色を見てゐると、何となく自分の過去を鏡に映して見せ付けられるやうな心持がする。經驗と云ふ奴は感情をすり減す恐ろしい砥石だね。將來から何一ツ新しい事珍らしい事を期待させなくする。世の中から驚嘆する事がなくなつたら實にみじめなものさ。

恭次　（膝の上にて雜誌を弄びつゝ伏目になり）先生見たやうな悟つた人から見たら、僕なんぞのすることは實に滑稽でせうねえ。

吉田　何に？　悟つた人だつて？　さう、君。人を仙人扱ひにしちア困るなア。それア、いろ〳〵悲しい事や、嬉しい事は經驗してゐるけれど、僕だつてまだ白髮の老翁ぢやないよ。（笑ふ）

恭次　ですけれど、僕なんぞの眼から見ると、先生はいつ

も悟り切つたやうな事ばかり云はれるから、實際今日見たやうな日には、僕は何だか氣まりがわるくッて仕樣がないんです。

吉田　君にも似合はない。若い者が若い戀を樂しむのは、乃ち若いものゝ特權ぢやないか。誰を憚る必要もない。然し藤坂君。君は今日こゝで久しく別れてゐた戀人に再會したら、其後はどう云ふ風にして行かうと云ふ考へなんだ。將來機會をまつて結婚するつもりか。

恭次　いゝえ　何しろ僕は此の身體ですもの、結婚なんぞしようとは夢にも思つてゐません。結婚どころか、僕は長く向ひ合つて話しなんかもしないつもりです。唯だもう一度顏を見て、そして鳥渡一言でもいゝから、聲が聞きたいだけなんです。今ぢやアもう向うも境遇がちがつてゐるし、實際僕の事を思つてゐるかどうかも分りやアしないんです。だからほんの此の世の思出に、いつ死んだつて思殘りのないやうに、顏が見て置きたいと思つて、それで僕は無理に賴んで今日此方へ來て貰ふ事にしたんです。

吉田　君は何かと云ふと、直ぐ明日にでも死ぬものゝやうに云ふけれど、それアいかん。君は實際の健康よりも殆ど自分の空想で身體をこはしてゐる。今日戀人に出遇つたら、宜しく其の若い華やかな戀の力で、君の身體を包んでゐる暗黒な死の妄想を取拂つて貰ひたまへ。（恭次はうつむく。吉田は其樣子を見詰めながら、遠い記憶を呼び返すものゝ如く）僕もアメリカに放浪してゐた時分には、丁度君と同じやうだつた。（立ち上つて歩みながら獨語のやうに）生涯の目的の事で國元の親とは衝突する。自己の境遇は思ふやうに行かない。さうなると唯だ無暗に自分の現在を亂暴に取扱ひ、又自分の將來をわざと復讐的に悲觀して見る事が唯一の果敢ない慰みになつて來るばかりだ。結局は自殺といふ事を極點まで偉大に詩的に空想して、僕は紐育中の藥屋をあさり歩いて、遂にモルヒネまでを手に入れた事があつた。

恭次　先生はモルヒネを呑んだ事があるんですか。

吉田　いや、呑まうと思ひながら、矢張駄目だつた。幸か不幸か僕はたうとう其の時には自殺する事が出來なかつたのだよ。（再び切株に腰をかけ）それア外でもない。僕は大々的に自殺の理由、「死」の福音と云ふ事を國元の友人や親達へ說明してやらうと思つた事だ。一生の仕事だから出來る上にも出來るだけ素敵らしいものを書いてやりたいと思つて、僕は先づ自分の論據を確かにするためにショッペンハウエルからハルトマンを讀み出したものだ。そして一週書き上げると立派な上にも猶立派な論文にしようと思つて、それからそれと參考書をあさりあ

さり月日を送つた。さていよ／＼書き上げてから、自分で其れを讀み返して見ると流石苦心した論文だけに、僕ながらも聊か滿足を感じたのはよかつたが、肝腎な僕自身は妙に心がおち付き拂つてしまつて以前ほど自殺したいといふ熱情がない。僕はつまり大汗をかいて一人で滑稽劇の主人公を勤めてゐたのだね。然し藤坂君。僕は此樣な話をして小さな僕一個の經驗から、君に對して厭に教訓らしく「生」が「死」よりも價値があるものだと說明するのぢやない。僕は唯だ「死」といふものが此の世の煩悶苦惱を救濟する絕對唯一の方法だとは限らない。或場合には何等かの方法を取りさへすれば、吾々は强て自分から「死」を招かずともどうにかかうにか、此の騷がしい生命の上にも「死」と同じやうな寧ろ「死」よりも暖かく柔かな、心の平和靜寧を見出す事ができるものだと云ふ事を君に知らしたいのさ。もし君の參考になるならば…と思ふだけなんで、僕は決して教訓らしい事は云ひたくない。（調子を强くさして）多くの場合、天下の青年を自暴自棄に陷らせるのは、いやに尊大ぶつた年長の教訓、それに對する青年の反抗からだからねえ。僕は教訓らしい事を云ふのは大の大嫌ひだ。

恭次　（獨語のやうに）死よりも暖かく柔かな心の平和を見出す……先生、それア一體どうすればいゝんです。僕なんぞは實際どう考へたつて、死より外には慰藉も復讐も何にもないぢや有りませんか。壓制な父からは一生涯の目的を妨げられる。戀人は家から追はれて藝者になつてしまふ。實際生きてゐたつて何が面白いんです。僕ア意思が薄弱だと云はれたつて少しも構ひません。人から意思が强いと云はれたい虛榮心の爲めに、目的のない生活をつゞけて行くなんて其樣事アとても僕にや馬鹿々々しくつて出來ませんからねえ。

吉田　君のやうにさう一足飛びに最後の結論ばかりを急いだ日には身も蓋もなくなつてしまふ。君の云ふのは皆動かすべからざる眞理だよ。けれども君、人生はさう眞理ばかりでは押通して行かれない場合がある。人生には眞理の外に運命といふもの、皮肉な、不思議な暗黒な運命と云ふものがあるぢやないか。吾々は生命の不幸である事を斷言しながらも、其の生命と云ふものを兎角に自分の手に持つてゐる限り、目前の問題として此れをどうにか取扱つて行かなくちやならないぢやないか。僕の云はうとする處は、つまり君の云ふやうな眞理に至るまでの中間の階梯を往來してゐる問題なのさ。世の中がいやだ。だから死ぬ——さう云ふ論理的な解答ぢやない。僕は世の中が何故いやになつた。いやになつたらどうしよう。どうしたら厭な心持を他に轉ずる事が出來るだらう、と

云ふ方法を研究したいんだね。

恭次　方法があるでせうか。

吉田　それア有るさ。自分と云ふものを他人の身の上のやうに客観して、自分を壓迫し苦しめる力を解剖し研究するんだね。

恭次　先生、そんな事ア僕にやアとても駄目です。僕は自分を壓迫する家の事や親爺の事なんぞを考へ出した日にやア、ます／＼世の中がいやになるばかりです。今直ぐにでも絶壁の上から千仞の谷底へでも飛び込んでしまひたいやうな氣になります。先生僕アほんたうに、家の事を忘れるために、酒でも飲んでグデン／＼になつて見たいと思ふ事があるんです。

吉田　（腕組みして、ぢつと恭次の顔を眺め）　何處の國にでも、一度はかう云ふ不幸な時代があつたのだらう。時代の犠牲ほど傷ましいものはないなア。君と僕とは十年以上年が違つてゐるんだがねえ……然し同じ明治の兒は何年たつても、矢張同じやうな不幸な生涯を送つて行かなければならないのだ。僕は此頃君達の時代の人に逢つて話をする度び、自分の過去を追想して見るんだが、それにつけて僕はこの混沌たる明治現代の社會に於ける新舊兩思想の傷しい衝突について日に増し激しく心を惱ませられる………

恭次　先生。吾々青年の運命は遂にどうなるでせう。吾々はいかほど熱誠を籠めて、個人の自由、思想の解放、戀愛の神聖と云ふ事を叫んでも、世間は到底それを認めてくれないでせうか。

吉田　百年か二百年もたつたら知れない事、まア僕や君の生きてゐる中は、到底駄目だらうねえ。君は現代の社會を支配してゐる勢力と云ふものは、一體どんなものだと思つてゐる。

恭次　政治家の思想や方針ですか。

吉田　政治家……ばかりぢやない。もつと廣く……此の明治と云ふ世の中一般を支配してゐる群衆の精神さ。つまり吾々が父兄と呼んでゐる然う云ふ人達の考へだね。もつと委しく云へば、此の明治と云ふ新しい時代を經營した老人達と、其の後に追從して段々に現代有力の地位を占むるに至つた中老の人間――つまり社會にあつては、大臣、局長、重役、頭取、校長とか云はれ、一家にあつては、父とか舅とか叔父とか稱せられる年齡四十から以上の成功者さ。君は一體あの人達をどう云ふ種類の人間で、どう云ふ思想を持つてる人だと思つてゐる。

恭次　（無造作に）　儒教主義の…保守主義の人間でせう。

吉田　保守主義、單にそれだけなら結構だ。寧ろ始末がいいのだ。君はあの人達を眞面目な儒教の信仰者、節操あ

る保守主義の擁護者だと思ふのかね。煩悶して覺醒して、そして儒教といふものゝ眞精神を研究して是非とも人間の賴るべき道は、此れでなければならぬといふ處まで深く考へて、その上儒教を奉じてゐる人達だと思ふのかね。

恭次　いえ、さうは思へません。

吉田　さうだらう。あの人達は唯だ此れまで何百年となく偉い人達がいゝものだと云つてゐたから、其れでいゝものだ位に考へて、因襲的に精神上の奴隷になつてゐるのに過ぎない。

恭次　論語よみの論語知らずなんですね。

吉田　それだから見給へ、毎日々々あの人達は矛盾な滑稽劇ばかり演じて喜んでゐるぢやないか。絶對に社會主義の思想を否定しながら、其以上の過激な手段で蒼生會とかいふ慈善事業を起す者があるかと思ふと、一方には二宮尊德の消極主義を迎へるやうな事を云ひながら、道普請の往來を自動車でブウ／＼驅け廻つたりする。なかなか一筋縄ぢや行かない輩さ、君達が考へるやうな單純な眞面目な保守主義ぢやない。

恭次　實際吾々には解釋が出來ませんね。世間の奴等はどうしてさう云ふ風に破廉恥に無節操になれるでせう。

吉田　思想といふものを無視した結果はみんな然うだ。だからあの人達を咎めるのは、一歩進んで考へて見れば無理だ。かはいさうだ。あの人達は宇宙や靈界の神祕なぞについては全く心を向けて見る能力がないのだから、眼前の利害より外には精神上の恐怖も懷疑も何にも知らないで生きてゐる。自分と云ふものを一度だつて强いとも弱いとも感じた事のない人達なんだから、他人の苦しみや悲しみ、廣く云へば一般の惱みと云ふ事なんぞに、考への向けられよう筈がない。唯だあの人達のえらい處は、勇氣の沮喪してゐる今日の若い吾々とは違つて懷疑や皮肉と云ふ事を知らないから、昔から使ひ馴れた道具のやうに勤勉と云ふ利器を持つて進んで行く。獸のやうな恐ろしい健康と意思とを持つて狹い汚ない此の現實の中だけに安心して、盲目滅法界に進んで行く……彼等が盲進して行く凄じいあの力が、乃ち明治現代の社會の進步發展の現象となつて、日々吾々の眼の前に現れて來るんだ。政治敎育藝術商業から一般の風俗に至るまで今の世の中をよく見て見たまへ。勤勉なあの人達の恐ろしい意思の力……乃ち現代的勢力が一步々々に現れるたんびに、眞なもの美なるものは一ッ一ッに滅されて行くんだ……。

恭次　先生。先生はそれほど深く感じて居られるなら、何故立つて吾々のために叫んで下さらないです。先生。不幸な、虐げられた吾々青年の爲めに。

吉田　それア困る。それア僕の任でない。

恭次　何故なんです。先生………。

吉田　何故だつて、君、僕はもう疲れてゐる。（この時近くの山寺より打出す時の鐘幽かに聞ゆる）僕はもう十年若かつたら、或はもう十年、年を取つてゐたら、僕は唯た一人でゞも立つて戰ふ。けれども君、僕はもうルウソオやユウゴオの叫び聲に我を忘れて引き入れられるほどの熱誠もないし、と云つて君達のやうに、息もつけないほど眞面目に時勢の壓迫に呻吟するほどの正直でもない。中間に立つてふら〳〵してゐる人間だ。十九世紀末のデカダンなんだねえ。勇氣の沮喪した人間だ。

恭次　先生はすつかり悟つて了つたんです。私は先生の事を、どうかすると支那の詩人見たやうだと思ふ事があります。世間と戰ふなんて云ふ事は、先生にやア馬鹿らしくなつちまつたんですねえ。

吉田　全く、馬鹿々々しくならざるを得ないからねえ。君も今に、何かすこし世の中の仕事らしい事をやつて見たまへ。すぐに氣がつく。今の世の中では、君、良い事をしようと思へば、其の爲めに先づ卑劣な惡い事からし始めて行かなければならないんだからねえ。例へば雜誌を發行したり演說會を開いたり或は理想の團隊を組織するにしても、多少なりとそれが社會一般に認められやうとするには、先づ一方では係りのお役人樣に媚びて、甘んじて其の干涉を受けると同時に、一方では下賤な新聞記者と結託し、若しくは彼等を籠絡して評判を作る。虛勢を張る。この二ツの屈辱を敢てしなければ如何に立派な事業でも、一歩たりとも實行の道に進む事はできない。何に限らず事業の經營と云ふものは、保險會社の勸誘員的の態度を取らなければ成立たないもんだからねえ。僕はいゝ事をしまい、惡い事もしまい。何にもしないでゐるのが、つまり一番いゝ事をしてゐるのだと諦めてしまつたのさ。僕はかうして晴れた海と綺麗な花でも見てゐれば、もう其の外の望みはない。目に見えない眞理の探究に苦しむよりも、目に見える綺麗なものに、僕は萬事を忘れて恍惚としてゐたいのだ。

（二人とも暫く無言になる。木葉散る。吉田は花壇の方に歩み寄り、ばらの花を手折りながら）

吉田　藤坂君。秋も最ういよ〳〵末だ。誰かの詩にある通り、「最後の薔薇のあがき悶える匂ひ」………君の戀人が來たら、僕からだと云つて此の花を進呈してくれたまへ。（恭次の方に手折りたる一枚を投げ、己れも一輪のばらを取つて上衣の襟にさしながら）よかつたら、もつと澤山切つて上げて吳れたまへ。

恭次　（默つて薔薇の花の匂をかぎゐる。やがて）先生。もう汽車がつく時分かも知れません。僕はそろ〳〵停車

場の方まで見に行つて來ます。

吉田　それぢや、君。いゝか。遠慮なしに僕の家を會合所にしてくれたまへ。一番此處が世間に知れなくつていゝ。丁度今日は僕の妻も實家に遊びに行つて留守だし、僕は君達の來る時分には裏口から海の方へ散歩に行つてしまふから、遠慮なしによく話をしたまへ。女中は田舍者で耳が遠いんだから何をしたつて大丈夫だよ。

恭次　先生。ほんとに心から感謝します。

吉田　そんな事はどうでもいゝ。それよりか藤坂君。君達の若い華やかな戀の焔で霜枯の詩人の家の空氣をあたゝめて置いて吳れたまへ。はゝゝは。

（吉田は笑ひながら硝子戸の內へ這入る。恭次其の儘右手奧の門より去る。）

第二節

舞臺暫く寂として物音なし。木葉靜かに散りて、小春の日光一段麗かに照り輝く如き心地す。やがて家の中より蓄音機の音聞えて、伊太利亞歌劇カワレリヤ・ルスチカナ中のインテルメッツォの一節を奏する。よき程に吉田三郎パイプを啣へ手に書物を持ちながら、再び出で、庭に下り、花壇の傍に椅子を引寄せ、後向きに腰をかけ、海の方に向ひてパイプをふかしつゝ、家內の音樂に聞き入る。音樂まだ消えざる中、右手の小門より日本畫家樋川雨聲、薄色縞地の背廣、中折帽にて出で來り樣子を窺ふ。漸くにして吉田の姿を見出したる體。二三歩進み出でて、

樋川　吉田君。しばらく………。

吉田　（驚いて振向き）や、樋川君か。僕が此方へ越してから一度も來ないぢやないか。何か大きい製作でもやつて居るのか。

樋川　いや。今年は展覽會へも出品しなかつた。（腰を掛ける）

吉田　いつだつたか結婚するやうな噂さを聞いたけれど、まだ纏まらないのかね。

樋川　とても駄目さ。僕のやうな亂暴な放蕩兒には……もう第一に人が相手にしないやね。

吉田　君の方でもまた選好みが烈しいのだらう。何しろ結婚といふ奴は譯はないやうで、六ヶ敷く考へた日にア實際きりのないものだからね。いつかも僕の妻が頻りに君の事を心配して、いゝのをお世話したいとか何とか云つてゐた事があるよ。樋川君。君は何ださうだね。非常に小說的な波瀾のある失戀をした事があるんださうだね。

樋川　君の材料になるかも知れんが、まア其の話は他日に讓つて貰はう。僕が鎌倉へ來るのを厭に思ふのも實は矢

張さう云ふ譯からなのさ。

吉田　其れぢや今日は、どう云ふ風の吹き廻しなんだね。全く珍らしい。半年以上も會はなかつたのだからね。何か新しいラブ・アッフェーでも出來た爲かね。

樋川　實は君。僕は今日意外な人に出遇つたんだ。少し用事があつて、大磯へ行かうと思つて、汽車に乘つたんだが、すると大船の停車場で僕は計らず七年昔の初戀の人に遇つたのさ。尤も綺麗な若い女の連れと一所だつたしね。先方ぢや無論氣がつかなかつたに違ひない。然し僕は其後の女の境遇を人傳にすつかり知つてゐるから、此れアきつと鎌倉の別莊へ行くんだなと、すぐに當をつけたんだ。はつと思ふと同時に其の後姿が何とも云へないほど懷しかつたんで。僕は見え隱れに汽車を乘り替へて、知らず〳〵鎌倉まで來てしまつた。下りてから氣がついてつまらない事をしたと思つたが、もう仕樣がない。久しく御無沙汰してゐるから君の家でも訪ねて、何か話でもして氣をまぎらして歸らうと、實はさう思つてやつて來たのさ。

吉田　一體失戀した人ッて云ふのは、どうしたんだ。外へ結婚してしまつたのか。

樋川　まアさう云つたやうなものさ。實はお妾になつてゐるんだがね……。

吉田　何て云ふ人のお妾だ。鎌倉に別莊があるんだね。

樋川　それだけはまア云はずに置かう。わるいからなア……。

吉田　商賣人かい。

樋川　くろとぢやない。然し幾分かそれに近い方だ。

吉田　それぢや……。

樋川　僕が其の時分襖の繪を書きに行つてゐた或るお茶屋の娘さ。

吉田　さうか。(以前より話の樣子にてそれを悟りたる體)君驚いちやいかんよ。其の人ならもうそろ〳〵此處に來る時分だらう。

樋川　何。君の家…………?

吉田　少し事情があつて、其の人なら今日僕の家へ素人風に仕立てた若い藝者をつれて來る筈になつてゐるのだ。君は其の人達と同じ汽車で停車場に下りたんだね。それぢやアいくら女の足が遲くつても、もう來る時分だ。吾吾がこゝに居ちやア邪魔になる。樋川君事情は僕が說明する。裏の山へ行かう。さア來たまへ。

樋川　何だか、まるで狐につまゝれたやうだ。

(吉田に引っぱられて樋川も共々家の中にはいる。)

第三節

恭次。右手の門より出で、一寸あたりを窺ひ、再び門際に立ち戻りて、

恭次　さア。這入つて下さい。（間を置く）　お民さん、それぢや、どうしていゝんだか、僕一人で困つちまふぢやありませんか。さア這入つて下さいッたら。

（お民はおみよを後にして、おそる／＼庭内を窺ひながら門際に佇む。お民は丸髷の品よき奥様風。おみよは庇髪の令嬢風に着なしたり。）

お民　恭次さん。ほんとにいゝんですか。どなたも居らつしやらないんですか。

恭次　いゝんですよ。手紙にもあれほど委しく書いて上げたぢやありませんか。おみよ。さア早く、這入つておくれ。

お民（おそる／＼進みながら）　まア綺麗なお庭です事ねえ。

みよ　どなたも居らツしやらないんですか。

恭次　僕達の爲に家の人はみんな外へ行つちまつたんだよ。世間には慘酷な奴も多い代り、先生のやうな同情の深い人もある。わざ／＼僕達の爲めに明けて置いてくれたんだから、一時間でも三十分でも、安心して、ゆつくり僕の氣のすむ樣に話をしてくれ。もう此れきり僕は今日のやうな無理な事はいはないから。

（恭次竹の椅子をすゝめる。みよは何とも云ひ兼れて俯向く。お民漸く氣を落ちつけたる體。）

お民　おみよさん。それぢや少しの間、お邪魔をして行きませう。（椅子に着く）　靜ですことねえ。全くのところ此方のやうなお家でもなかつた日には、かうして鎌倉まで來たからつて、まさかお屋敷の御別莊へは、番人の爺やなんぞがみんな顏を知つてゐますから、參る譯には行きませんし、と云つて、知らないお茶屋や何かへも這入りにくいし、ほんとにいゝ都合で御座いましたねえ。

みよ　私さへ、こんな家業さへしてゐなければ、どんな汚い家だつて、お話しする位なら私の方でどうにでも成るんでしたけれど、何をいふにも、もうこんな身體になつてしまつたんですから、何だか氣が咎めて、若樣にだつて……………。

恭次　みよ。また若樣なんて。お願ひだからもう其樣事云ふのはよしておくれ。僕はお前が僕の家にゐる時分から、二人の間きりで話をする時には、お互に名前を呼び捨にするやうにッて約束したんぢやアないか。そんなにいつまでも改まつた言葉使をされると、僕ア何だか悲しくなつちまふ。（間）　みよ。僕はほんとに嬉しいよ。もう一生逢へないのかと思つたのが、たつた一時間でも三十分でも、かうして顏が見られゝば、僕はもう此の世に何

にも望はない。

みよ　まアそんな悲しい様な事仰有らないで、ねえ、旦様……。若様は先から陰氣な事ばかり仰有るのがお好きだから、私は困つてしまひますわ。

お民　恭次さん。此方は随分お廣いやうですねえ。裏の方はずつと畑になつてゐるんですか。（歩きながら）久し振りで外へ出て日に當つたせゐですか、身體が鳥のやうにふわ〳〵するやうですよ。どなたも居らつしやらないのなら、私は少し畑の方を歩いて見ます。

（お民はその場を外す爲め、獨語のやうに云ひながら上手より家の後へはいる。）

第四節

みよもぢ〳〵しながら、椅子を立ち俯向いたまゝ佇む。恭次進み寄りて、其の手を取り、しやがむやうに椅子につき、下よりみよの顔を見上げながら、

恭次　みよ。お前はさぞ僕の事を恨んだらうね。藝者になる時手紙を寄越したさうだけれど、僕の手へ屆かなかつたものだから……。

（みよ默つてゐる。）

恭次　お前はいつまで藝者をしてゐなくツちやならないのだ。え。みよ。

みよ　三年の年期ですから。

恭次　三年たてばお前は藝者を止めるのか。

みよ　初めツから好きこのんで成つたのぢや御在ませんから、止められるものなら今直ぐだつて止めますけれど、何しろ、家があゝ云ふ風になつてしまひましたから。

恭次　僕は三年でも五年でも何年でも待つ。みよ。僕は一生懸命になつて養生して身體を直す。もう今日からは斷然烟草も呑むまい。夜晩く本を讀む事も止める。そしてすつかり身體を直したら、僕はどんな事をしてもお前と一緒になる。それまでお前は待つてゐてくれるか。え。みよッ。約束してくれるか。

みよ　若様、もうこんな賤しい家業をしたものが。どうして若様のやうな方と、そんな事が出來ますものか。若様の御親切はわかつて居ります。ですけれども……。

恭次　お前はいつでも身分がちがふと、そんなつまらないことばかり云ふんだね。身分なんざ人間のつくつたものだ。人間のつくつたものは人間がこはして仕舞へばいゝぢやないか。みよ。お前は僕と約束する氣があるのかどうか。一言でいゝから、返事を聞かしてくれ。僕は今直ぐにお前をどうしようと云ふのぢやない。僕は病氣だ。萬一の事でお前にうつりでもしたら、それこそ大變だから現今はお前の方から近付いて來たつて、僕は病氣が直

るまではお前の身體から遠ざかつてゐなくツちやならないのだ。僕は唯だお前の心が知りたい。みよ。僕の心持が分つたら、返事をしてくれ。お前の返事次第で、僕は養生もする。又生命も捨てる。僕はもう外に望みはないんだ。

みよ　若樣。どうぞ御養生なすつて下さい。私見たやうなものでも、若樣の方さへお心變りがなければ、私の方は何年だつて心の操は守つて居ります。もうこんな泥水に沈んだ身體ですから、世の中から捨てられたも同じ事で御在ます。その日その日の慰みか弄物にする爲めには、人樣が何とか仰有つて下さいませうが、頼りにも助けにも何にもなれア致しませんから……。

恭次　みよ僕は今日から生れ代つたやうに心を入れ代る。文學も捨てたつて惜しくない。僕は一生懸命になつて、第一に身體を治すから、これからは毎日手紙を寄越してくれ。新しく取つた寫眞を寄越してくれ。手紙と寫眞さへあれば、僕は淋しい月日をどんなにでも我慢して過して行く。

（みよ默つてハンケチにて顏を蔽ふ。）

第五節

此の時突然右手奥なる家の後より、お民あわてゝ驅け出でうろ〳〵する。恭次はみよを庇ひながら立ち上り

恭次　誰れか來たんですか。

お民　いゝえ。あの……。

（猶うろ〳〵しながら木の蔭にかくれる。此の時樋川雨聲物に引かれる如く家の後より歩み出で、茫然として此方を眺め入る。其の後より直樣吉田出で來り樋川の腕を取つて。）

吉田　おい、樋川君。もう一ト廻り、今度は海の方を歩いて見よう。さア來たまへ。

（お民などにはさあらぬ體にて其のまゝ引きつれて門より去る。）

第六節

恭次　お民さん。あの人は、あなたの知つてる人なんですか。

みよ　奥樣の迷惑にでもなるやうな事だと私が申譯が御在ません。

（恭次とおみよ心配さうに進み寄る。お民胸に手を押へながら。）

お民　いゝえ。別に迷惑するやうな人ぢやないんですけれど……私はほんとに吃驚しました。

恭次　家に來る人なんですか。親爺を知つてゐる人なんですか。

お民　いゝえ。そんな人ぢやありません。

恭次　隱さずに云つて下さい。僕の爲めにあなたまで迷惑しちやア僕が濟みませんから。ほんとに隱さずに云つて下さい。それなら其れで、何とか方法を考へなけれアならないんですから。

お民　いゝえ、ほんとに大丈夫だから安心して下さい。御屋敷の方とはちつとも關係のない人なんです、たゞ私が先に知つてゐた人なんで、あんまり久しく會はなかつたもんで……唯だびつくりした丈けなんです。

みよ　それなら、よう御在ますけれども、私はまたお屋敷へでもいらつしやる方だつたら、ほんとに、どうしようかと思ひました。

恭次　先生の處へ尋ねに來た人なら、矢張り文學者だらう、(獨言のやうに云つて) お民さん、あなたとは先から知己なんですか。何といふ人です。文學者ですか。

お民　(云ひ淀みながら) いゝえ……繪をかく人です…。

恭次　美術家ですね。(お民の顏を見ながら其れとさとりたる體) それぢや、若しやあの人が昔のあなたの……さうぢや無いんですか。

お民　恭次さん。あなたになら何も隱くす事はないから、云ひますが……私は全くびつくりしましたよ。まさかこんな處で逢はうとは夢にも思ひませんでしたから。

恭次　なぜ、あなたは逃げたんです。そんなら、願つても無い好機會だつたぢや有りませんか。ゆつくり話をすればいゝのに。僕にはあなたの心持がわからない。僕等の手前があるからなんですか。

お民　さうぢやありませんけれど……まさか、あなた……。

恭次　そんなら、いゝぢやありませんか。お逢ひなさい。僕はみよと一緒に海の方へ馳けて行つて、先生にさう云つて連れて來て上げます。(みよの手を取る)

お民　まアあなた。そんな事が出來ますものか。今更逢つたところでお互ひに思ひの種をますばかりで、どうする事も出來やしません。私は全く夢のやうな心持がします……何にしろ七年といふもの、あれきり、一度も逢つた事がないんですし、それにまた此の二三年は一足もお屋敷の外へは出た事がないんでせう……それですから今日は……汽車に乘つて新橋を出た時から何だか見るもの聞くものが皆な夢か繪のやうで、此の暖い日當りがまるで身體へしみ込むやうな心持がします……それに此の靜かなお庭と云ひ逆上せるやうな強い薔薇の花の匂ひと云ひ私は何だか氣が遠くなるやうな……自分の身體までが何處にゐて何をするんだか、まるで譯が分りません。

恭次　（猶おみよの手を握りたるまゝにて）それが牢屋を出て自由の空氣に觸れた心持なんです。幸福と云ふ大きな翼にゆすられて、青空を翔けて行く時の眩暈なんです。お民さん、私は先からあなたに云はうと思つては云ひ出さずにゐたのです。古臭い義理だとか人情だとか、そんなつまらないものに縛られて、二度とない此の一生涯をあんな薄暗い牢屋の樣な屋敷の中に這つてゐたつて何になります。自分から自分の心を欺いたり僞つたりしてゐる噓の生活を捨てゝ、幸福な自由な誠の人生をお迎へなさい。あなたの戀人はあなたをあの牢屋から救ひ出さうとして、此の鎌倉まであなたを追掛けてきたのに相違ありません。お民さん。勇氣をお出しなさい。江戸ッ子の意地をお出しなさい。あなたの身體を七重八重に縛つてゐる因襲の繩を切りほどくのは今此の時です。しつかりなさい、しつかりなさい。

お民　何だか私は……目がぐら〳〵して來ました。何處か日の當つてゐない處へつれて行つて下さい。

（お民みよの方によりかゝる。みよお民を支へながら四邊を見廻し。）

みよ　木の葉がみんな散つてゐますから、お庭中は一ぱいに日が當つてゐる……。

恭次　暫く家の中へ這入つて休みませう。誰れもゐないんですから……すこし氣をおちつけた方がよござんす。

（恭次とみよとは左右よりお民をいたはり家の中にはいる。）

第　七　節

主人吉田三郎樋川雨聲を連れて左手の門より出る。吉川は樋川を手にて制しながら、

吉田　まア待ちたまへ。君が其れ程までに誠實に思つてゐるのなら、僕だつて惡いやうには計らない。まア暫らく待つてゐたまへ。

（吉田は暫く庭上に佇み家の樣子を窺ひ、靜かに其の中へはいる。樋川はベンチの上に腰をかけ、木の葉の散る中に默つて俯向き思ひに沈む幕。）

第　三　幕

某會社重役藤坂大造の居間。西洋室、煖爐、椅子、テーブル、長椅子、九谷燒の花瓶なぞよろしく、左右ともに出入の扉。正面に窓。右手奥によせてデスク。壁には伊藤公、山縣公、東郷大將なぞいふ人の筆跡を見せたる額と掛物をかけ、室内よき處に植木の鉢物と大きな佛像の置物を据う。二月の夜。風の音。

幕明くと、直ぐに左手の扉より、女中一人片手に石炭入れをさげ出で來り、消えかゝりたる煖爐に石炭を入れてゐる中、續いて藤坂家の執事（木綿の紋付、嘉平治平の袴、半白の老人）郵便の書狀を持ち出で來る。

第一節

執事　外は大變な大雪だといふのに、此お座敷ばかりはいつ來てもまるで春のやうだな。（手紙をデスクの上に置き）お濱さん。今日はお歸りが。大分遲いやうぢやないか。

女中　さうだね。虎さんはいつもの時間にお迎に行つたのだがね。

執事　此の大雪ぢやアいくら力自慢の虎さんでも難儀だらう。何しろ家の旦那樣と來たら、どんなに輕く見たつて二十貫はたつぷりだからなア。並大抵の車夫ぢやア勤まらない。

女中　さつきの號外ぢやア、丸の内の何處とかで電車の上へ電信柱が倒れて來て、大變怪我人が出來たんだつてね。

執事　今朝から妙にしぐれちやゐたけれど、まさか此樣大雪にならうとは思はなかつたよ。（風の音）ひどい風の音だ。お庭の松でも折れたんぢやないか知ら。

（執事の老人は窓際に進みカーテンを片寄せ、庭を見ようとて何氣なしに硝子戸を明けかける。風の音と共に雪は礫の如くに室内に吹き入る。執事は驚いて飛び退き。）

や、此れア大變だ。（と袴の雪を拂ふ）

女中　あら、お前さんの衣服どころぢやない。お座敷へ雪が吹込むぢやないか。早く窓をお閉めなさいなね。

執事　や、此れア大變……

（女中も馳寄りて執事と共に窓をしめる。）

女中　こら、御覽なさいな。仕樣のない人だよ。

執事　いや、ひどい日に遇つた……

（執事は懷の手拭にて顏を拭きゐる。此の時お民、庇髮にて右手扉より出で。）

お民　そんなところに何をしてゐるんだね。

女中　青木（執事の名）さんが又とんまな事をするんで御在ますよ。お庭の松が折れやしないかつて、此の吹雪に窓なんぞ明けるんで御在ますもの……

執事　まさか此樣にひどい風だとは思ひませんでした。奧樣ひどい雪で御在ます。

お民　お庭の松と云へば、お前あの欅の植木鉢をお庭へ出し忘れて置きはしないだらうね。

執事　あの大きな平（ひらつた）い植木鉢で御在ますか。つひ、どうも………。

お民　だから。云はない事ぢやない。もし枝でも折れようものなら其れこそ私が申譯がないぢやないか。旦那様が駿河臺の御前から頂戴したんだつて、大變大事にしてゐらつしやるのはお前もよく承知してゐるんだのに。氣の毒だけれど早く行つて、緣側に上げて置いて下さい。
執事　畏まりました。まさか此様大雪にならうとは思ひませんでしたものですから。
（執事女中と共に右手より去る。）

第二節

お民　年を取つてゐるから仕様がないけれど、ほんとに困つてしまふ。郵便だつて、いつかなんぞも、ちやんと大きく私の名前が書いてあるのに平氣で旦那様の方へ持つて行かうとするんだもの……私は樋川さんから手紙が來る度、もしや間違つて旦那様の方へ持つて行かれた事でもありやしないかと、どんなに氣を揉むか知れやしない。
（デスクの方に立ち寄りて其の上に置いた郵便物を見る。其のまゝ長椅子の上に身を落す。外には吹雪の音ますます烈し。）
お民　然しいくら隱してゐたつて、此の儘いつまでも知れずに濟むと云ふ氣づかひはないんだから、いつそもう斯うなつたからは一日も早く知れてしまつて、どつちへなりときまりが付いてしまつた方が、寧そ苦勞がなくつていゝんだけれど……何ぼ心はきめてゐても、女の口からお暇を下さいとも云はれないし……
（一人思に暮れてゐる。此の時扉の外にて突然車夫の呼ぶ聲聞える。）
車夫の聲　お歸り——
（お民長椅子より立つて左手扉を明けて出て行く。表玄關の戸を明ける音、執事の老人の聲なぞ聞ゆる。）
執事の聲　大變な雪になりました。さぞ御難儀で御在ましたらう。
大造の聲　庭の植木鉢を片付けて置いたらうな。此の雪に一晩外へ出して置かうもんなら皆な枝が曲つてしまふ。
（大造云ひながら洋服に外套、山高帽を冠りたるまゝにて左手扉より出で來る。お民其の後に從ひながら）
お民　先程緣側の方へ片付けさせて置きました。
（お民は大造の外套と帽子とを受取り）
お民　すぐもうお寢衣を持つて參りませうですか。
大造　いやまア此儘でよい。（立つたまゝにデスクの上の手紙を見、其一通を開き讀む。此の間に暫く茫然と彳み居たるお民は外套と帽子を持ちて左手扉より去る）
「拜呈嚴寒の候益々御多祥奉賀候陳者、嘗てより實業界有力者の叙爵及叙勳の內儀につき貴殿よりも內密に御

依賴有之候ふ儀、小生も其れ〴〵當路の顯官に運動罷在り候ふ處、明日の會議にていよ〳〵決定致さるべく貴會社の社長以下樞要の地位に立つ實業家にはいづれも相應の勳位を授かるべき筈に有之、職務上未だ確然とは申上兼ね候へども貴殿に於ては先日來蒼生會其他の御盡力により、從四位に叙し勳三等瑞寶章を賜るべき事だけ內々御漏し申上可く……」

はゝゝは。此樣事は、もう疾うに知つてゐる。（得意の笑を漏して）從四位勳三等……いよ〳〵大禮服を作り替へなけれアならんな。

（お民右手の扉より茶器を載せたる盆を持ち出で、テーブルの上に置き。茶をつぐ、大造椅子に腰を下して茶を一呑した後葉卷の箱よりシガアを取り出す。お民マッチをつけて差し出すと、大造ぢつと其の顏を見詰めた後室內を見廻しながら。）

大造　扉をよく閉めて置いてくれ。

お民　は。閉つて居ります。お寒いんですか。もつと石炭を入れませうか。（煖爐の方に行かうとする）

大造　いや。寒いのぢやない。ちつとお前に聞きたい事があるんぢや。

お民　何で御在ます。（お民びつくりして立ちすくむ）

大造　まア、そこへ掛けてくれ。突然だけれど……私は今日妙な話を聞いたんぢや。或る處へ夕飯に呼ばれて行つて其處で思ひがけなく聞いた話なんだが、お前は私に默つて鎌倉へ行つた事があれアせんかね。

（お民だまつて俯向く。）

然も若い男とそれから若い女と三人連れで鎌倉の停車場から汽車に乘つたのを見たものがあるんぢや。そして其の若い女は橫濱で下りた後、お前は其の若い男と二人づれで新橋へ下りたといふ處まで、ちやんと見付けられてゐる。

お民（俯向いたまゝ）申譯が御在ません。

大造　それぢやお民。お前は眞實鎌倉へ行つたんぢやね。外の事とは譯がちがふ。唯だ申譯がないだけでは濟ん事ッた。

お民　はい。

大造　日頃何かにつけて私の云うてゐる事を、お前は何と思つてゐるんだ。お前を此處の屋敷へ入れる時にも私はくれ〴〵も云聞かして置いた筈ぢや。人間は第一に品行をつゝしまんければならん。其の中にも取分け女は品行をつゝしみ他人からは聊でも蔭口をきかれるやうな後目たい事をしてはならん……私はまだ充分な證據を見ん中は、お前が已に不品行を敢てしたのだとは云ふまい。けれども人からさういふ疑ひをかけられるやうな事はお前

のやうな身分の者は人一倍氣を付けてゐなければならん筈ぢや。

お民　全く申譯が御在ません。

大造　一體鎌倉なぞへ何しに行つたのだ。連れの女や男といふのは其れア一體何者だ。

お民　もう、どうぞ何も仰有つて下さいますな。この上、私の不身持からお屋敷のお名前を汚すやうな事が御在ましては、それこそ申譯が御在ませんから、旦那様何とも仰有らずにどうぞ此の儘……私はお暇を頂きたう御在ます。

大造　何ッ。暇をくれ？　お民、お前は何を間違へてそんな馬鹿な事を云ふのだ。私はお前に出て行けとは云やせん。以後をよくつゝしむやうにと云聞かして居るんぢや。

お民　旦那様のお心持はよく分つて居ります。それですから私は、もう去年の末からで御在ます。私の方から事情をお話して、お詫びをしようと思つて居た位なんで御在ます。私はもう到底……此の儘お屋敷に居りましては、此の上にも申譯のない事を致さねばならない身の上になつて仕舞つたので御在ますから……旦那様、どうぞお暇を……。　……

大造　わかつた。お前は他に男をこしらへたから、私の家には居られなくなつたと云ふんぢやね。是非にも暇をくれと云ふなら、さう云ふ心の腐つた者を家に置いても仕様がない。私は無理にゐろとは云はん。然しお民。私は今日まで此の七年間と云ふもの、實はお前の心立てにはつくづく感心して居つたのだ。待合や料理屋なぞに生れた女にしては珍らしい心掛けだと、私はお前の事を非常に賞めて居つた位ぢや。お民、よく聞くがいゝ。私は妻が死んだ後、幾度も後妻を迎へようと思つたのだが、萬一子供と繼母の間が折合よく行かないやうな事でもあつてはと思ひ直してゐる中に、段々年を取つてしまつた。今更再婚すると云ふのも世間へ對して妙なものだ。それで私は幸ひお前を赤坂へ圍つて永らく世話をしてゐたのだし、子供も已に相當の年にもなつて居つたから、表向きこそ本妻にはせんが實際は私の後妻だと思つてこゝの屋敷へ入れて、家計萬事をお前に任した譯なんぢや。それはお前もよく承知してゐる筈だ。私は此の七年間飽くまでお前を信用して居つた。現在お前自身の口から云出されても私にはお前がそんな無考へな事をしでかさうとは、どうしても信じられない位なんぢや。お民、私はお前が此の後を屹度つゝしむ心なら、私は、此れまでの心掛けに免じてお前の罪は咎めまい。お民どうぢや、お前は惡い事をしたと心に恥ぢて居るか。

お民　どうぞ、もう何とも仰有らないで……。

大造　此れまでに云つても、お前は先非を悔いないのぢやね。其れぢやア、もう是非もない。お前は暇を貰つてどこへ行くんぢや。實家へ歸るのか。

お民．い丶え。どうして家なんぞへ。

大造　ふゝ…（冷笑を漏して）男の所へ行くやうに手筈をきめて置いたんぢやね。（間）お民。誰れだ。お前がそれほどまでにして、行かうと思つてゐる男といふのは、一體誰だ。お民、かくさずに云ふがいゝ。私はきつぱりお前に暇をやる。

お民　まだ私が家に居ります時分に、家の襖の繪を書きに參りました畫家で御在ます。

大造　彼奴か……。お前は、それぢや此の七年といふもの巧みに私を欺きつゞけてゐたんぢやね。私は夢にも知らなかつた……。（恐ろゝ如くにお民の顏を見る）

お民　旦那樣。それはあんまりで御在ます。私は何ぼ何でもそんな大それた者では御在ません。私もあの時には……家の店が借金や何かで大變に困つて居りました時分の事で、旦那樣の仰せ通りお世話になつてくれと兩親からもいろいろに申されたもんですから、私も親の涙にほだされて、あの方には濟まないと思ひながら全く緣のないものとすつかり諦めをつけて、此方のお世話になる事になつたので御在ます。私は全く此の七年間といふものは、一足でもあなたのお許しなしにお屋敷の外へ出た事は御在ませんでした。ところが、矢張り何かの因緣なんで御在ませう。思ひがけないところであの方に七年振りにお目にかゝりいろ〱あの方の心の中や、また其の後の事なぞを聞かされました……。

大造　それでお前は此の家にゐるのが厭になつたんだと云ふのぢやね。お前は男の口車にうまく載せられて居るのだ。お民。お前はあんな放埒な繪師なぞに欺されて、一時はどうにかなるだらう、然し行末の事が恐ろしいとは思はんかね。

お民　其れも私はよく考へて見たので御在ます。私はたとへ捨てられるやうな事があつても、それを口惜しいとは思ひません。旦那樣。私は今になつては、赤坂の妾宅に居ります時分に旦那樣のお言葉で、學校へも入り本も讀むやうになり、其れからは、いろ〱世間の人樣の仰有る理窟も少しづゝは覺えるやうになりましたのを、私は嬉しいとも思ひますし、又何にも知らずにゐた昔の無教育の娘の時分の事を一層氣樂だと後悔も致して居る位なので御在ます。私は昔のまゝの無教育な女で御在ましたら却て、こんどのやうな大それた事はしなかつただらうと思つて居ります。私にはもう旦那樣、かうしてお屋敷の御用をしてこの一生を暮す氣にはなれなくなつて仕舞

つたので御在ます。私はあの樋川さんのお友達や其の外の若い今時のお方とも、今度の事についてはそれとなく色々にお話もいたしました。私は女と生れましたからには、一日でも半日でもかまひません。私が好きだと思つた人と一所になつて暮して見たう御在ます。それが出來ないのなら全く生きてゐるかひが御在ません。

大造　もういゝ。あつちへ行け。

（此の時執事左手の扉を明けて出る。）

執事　旦那樣。麻布のお屋敷からお電話で御在まして、勳章の事が御内定になりましたお喜びを申上げるやうにといふ事で御在ます。それから郵便が參りました。

（此の間にお民俯向いたまゝにて靜に右手の扉より入る。）

大造　よろしく申上げて置け。

執事　はッ。（執事は左手より入る）

第　三　節

大造手紙を取上げ椅子より立つてお民の去りたる方を見送りながら、

大造　馬鹿な奴だ。矢張りあゝ云ふ處に育つたものは駄目だ。教育すればするほど悪い事しか覺えない……。

（状袋の文字をよみながら次第に卓椅子の方に歩み寄る。）

何だ。藤坂大造樣至急、鎌倉病院々長醫學士……（封を切つて手紙を讀む）

「前略陳者時下益々御清榮………」こんな處はどうでもいゝ。「過般來一時御快方に赴かれ居候御令息恭次殿……今朝突然二回喀血に及び午後より發熱頻りにて御病勢急に一變致し候……尤も御別莊閑靜に有之候間當方へ御入院なされ候ふより却て御便宜かと存じ、今夕病院付の看護婦一名だけ差遣はす事に取計らひ申候今日診斷仕り候處にては未だ何とも申上兼ね候へ共兎に角餘程の注意を要する事と存じ候ふに付き、此の手紙屆き次第一刻も早く御出向きの程然るべきかと存じ候。猶東京の大醫中特に貴殿の御信用なさるゝ向も有之候はゞ念の爲め出張診察を乞はるゝ方よろしきかと愚考仕り居り候………」

東京のいゝ醫者をつれてこいと云ふ。此アもう事によるとむづかしいのかも知れん。鎌倉行の終列車は何時か知ら。（急に立上つて壁の上の呼鈴を押す）

執事　御用で御在ますか。（左手扉より出る）

大造　恭次が急に悪くなつたさうぢや。お前の方に汽車の時間表を渡して置いた筈ぢや。鎌倉行の終列車は何時に出るか、急いで見てくれ。

執事　はツ。（執事急いで這入り、直樣、鐵道案內を持つて出る）

大造　何時だ。もう最終列車に間に合はんか。

執事　（眼鏡をかけながら）　えゝ。新橋橫須賀線……下り……十時十分……と此れで御在ませうな。（時間表を差出す）

大造　さうだ。下り午後十時十分。（時間表を引取つて見た後、懷中時計を眺め）もう九時四十分過ぎてゐる。今から網引で駈けつけても最う間に合はんなア。

執事　此の雪ではもう電車も動きますまい。

大造　明日一番の汽車で行くから車夫に云付けて置け。

執事　畏まりました。

（此時玄關の方にて呼鈴の音響く。）

執事　今時分……お客樣か知ら。

大造　電信かも知れん。早く見て來い。

執事　はツ。

（執事左手扉より去る。大造長椅子に腰をかけ、病院長の手紙を讀返しながら樣子を窺ふ。執事再び出で、名刺を渡す。）

大造　吉田三郎。東洋文學院教授……

執事　わざ〳〵鎌倉からおいでになつたのださうで、夜中甚だ恐入りますが、御令息樣の事につきまして一寸お目にかゝつて話しがしたいと仰有てゞ御在ます。

大造　どう云ふ樣子の者だ。

執事　洋服を着ておゐでになります。旦那樣のやうな大きな外套を着ておゐでになります。眼鏡を掛けて髭を生して立派な方のやうで御在ます。

大造　さうか。何の用だか分らんが、まアこゝへ通して見れ。

（執事去る。直樣吉田三郎黑のモーニングコートにて手に書物風の紙包みを持ち、左手より出る。）

第　四　節

吉田　初めてお眼にかゝります。突然夜中に伺ひまして甚だ恐れ入ります。

大造　まアどうぞ……（椅子をすゝめる）

吉田　私は鎌倉の御別莊の御近所に住つて居ります者ですが、一寸御令息樣のことについてお願ひ致したい事が御在まして…………

大造　どんな御用事です。

吉田　外でも御在ません。今朝程、御別莊から私に是非用事があるからといふお使なので、何事かと行つて見ました處、御令息は御容體が惡くなつたのださうで、丁度病院長が診察してお歸りになつた後で御在ました。私はお

枕元でいろ〳〵お話を致したのですが、あなたも已に御存じでゐらつしやる事と思ひます。御令息には兼ねてから文學を以て世に立たうといふお志がありまして、鎌倉へおいでになつてからも、絶えず見事な詩を作つてゐでになつたのです。今朝程御容態が悪くなりますと、もう僕はいつ死ぬか知れないのだから、今までに作つた詩を一册の詩集にして此の世に生命のある中、一日も早く出版するやうに盡力してくれ、といふ御依頼なので御在ます。それについて、出版費一切の事は、御自身から直接あなたへ御頼みすべき處であるが此れまでは何としても文學をお許しにならなかつた樣な譯もあるので、却て直接に云ふよりも、他人の私から改めて御相談して見た方がよいかも知れないと仰有るのです。それで私は至急に其の御返事を伺ひたいと思ひまして、夜中の雪をも顧みず、わざ〳〵鎌倉から出て參つた譯なので御在ます。

大造　どうも非常な御迷惑をかけまして……實にあの我儘者にも困つてしまひます。

吉田　詩集の原稿はこゝに持つてまゐりました。（紙包を開きて詩稿をテーブルの上に置き）どうぞ御覽下さいまし。詩集は「わくら葉」と云ふ題で御在ます。あなた方にはいかゞですか知りませんが、私共の眼には實に立派な詩集で御在ます。

大造　成程、詩集わくら葉――藤坂恭次著。（おもむろに眼鏡をかけ表紙の題を讀みたる後）「墓場に赴く日、この詩集をわが父君とわが戀人に獻ず」……目次、第一篇、「藥の匂」。第二篇、「忍び逢ひ」。（更に紙をまくりて中を見ながら）これが詩集ですか。何だか歌のやうなものらしいが………

吉田　さうです。この頃の若い人は一般にさういふものを詩と申して居ります。

大造　山陽先生なぞの詩とはまるで違つたものらしいですな。

吉田　其の時分とは、時代や思想が違ひますから、自然形式もちがつて居ります。

大造　文學上の事は、私には一向分らんですが、この「戀人」だとか「忍び逢ひ」だとか、いろ〳〵女の事ばかり書いてある。これを出版して賣弘めようといふのですか。

吉田　もと〳〵詩集の事ですから利益を目的とするのでは御在ませんが、然し一册でも多く世人に讀まれたいといふのが誰れにしろ、書物を著すもの丶本旨で御在ませうから、其の爲めには自然書物店で賣る事になります。

大造　あなたの御考はどうか知らんですが、困りますなア。私自身の口からさう申しては失禮ですが御覽の通り……（眼鏡を持ちたる指先きにて壁にかけた伊藤公なぞの掛

物を一寸指さし）兎に角私は今の世の中に多少の地位もあり、名譽もある身分です。貴顯の方々とも交際をしてゐる。其れにかう云ふ「戀人」だの「忍び逢ひ」だのと云ふ事ばかり書いた書物に私の名前を出されるのは、非常な迷惑だ。忰の恭次もまた……先刻醫者からの手紙も見たのですが、まだ全く生命が覺束ないと斷定された譯でもないやうです。萬一幸ひにも回復した上は、矢張眞面目な學生として大學へ行つて修業すべき身分のものです。それがかう云ふ妙ないかゞはしい物を書いて賣つたといふ事になると、矢張り忰の名譽や將來の出世にも關する譯ですし………

吉田　それでは詩集の出版はお許し下さらないので御在ますか。

大造　許さんと云ふ譯でもないですが、兎に角少し、人に見せても恥しくないやうなものでないと困るぢやありませんか。女の夢……接吻……失戀……鷄頭の葉蔭に君と忍び逢ふ秋の月夜の……何だか大きい聲ぢや讀みにくいやうな事ばかり書いてあるですなア。……此れア詩ぢやアない都々一の文句見たやうなものばかりぢやありませんか。私には一向分らないですが、あなたは文學院の教授をもなされる方だ。專門の學者達にはこんなものが詩に見えるのですかなア。

吉田　兎に角熱誠をこめて書かれたものですし、それにさう申しては何ですが御病氣もあの通りな譯です。御令息の一生の御希望として、あなたには嘸ぞ御不滿足かも知れないですが、詩稿の出版だけは、單に御令息の爲めばかりではない、日本の文學の爲めに私が切に御許し下さるやうお願ひ致し度いのです。出版費と申しても甚だ僅かの事ですし……

大造　それアほんの此れだけの物ですから。其の位の事は無論私は何とも云はないです。然し私の名前を出される事と、女の事ばかり書いた處だけはあなたのお考へで一ツ何とか删つて頂くわけには行かんですかなア。實際人に見られても困るですからなア。

吉田　私は著作者ぢや御在ませんから、どうも私の勝手には一字一句でもけづるわけには行きません。詩は善惡に係らず其の人の生命ですから。

大造　それぢやアあなたからでも恭次に御命令なすつて頂きたいです。出版費は出す。其代り私の名前と女の事なぞは一切除つてしまふやうにと仰有つて頂きたい。

吉田　畏まりました。然しお聞き入れにならない時はどうしませう。

大造　其の時は、斷じて出版を禁するより仕樣がないですなア。

吉田　さうですか。然しあなたが御禁じになつても若し此の詩稿が書肆の手に移つて、出版商が出版すると云ふ事になつたら、あなたは、どうなさる御考です。私は自分の利益や何かの事で此の詩稿を出版しようとは思ひません。私は唯文學者として、此れだけの名篇を埋沒するに忍びないのです。私はあなたがどうしても此の儘出版を御許しにならないと云ふなら、私は廣く文學の爲めに私一個の力でも實は出版したいとまで思つてゐる位なので御在ます。

大造　そんな事は斷じて許せません。

吉田　失禮ではありますが、あなたが許さないと仰有つても、この詩稿はあなたのものではない。あなたの御自由にはならない。

大造　私のものでなくても、私の悴が書いたものなら、私には止める權利がある。悴の爲めにならぬものは親たるものゝ義務として此の私が禁じます。

吉田　お言葉では御在ますが、如何に親の權利だと仰有つても、子供の思想までをどうしようと云ふ譯には參りますまい。此の詩稿は恭次さんの思想から出たもの。恭次さんより外には如何なる法律も勢力も其の所有權を奪ふ事は出來ないもので御在ます。私は少し言葉が過ぎますかも知れませんが、思想の自由思想の神聖と云ふ事に對して、詩集出版の全權は凡て其の著作者にあるものだと斷言致します。今日お願ひに出ましたのは、あなたが親子の御關係上から出版の費用を快く御出し下さるかどうかと云ふ事を伺ひに參つたので、出版の許否を御相談に參つたのでは御在ません。あなたが出版をお許し下さらなければ、止むを得ません。私は此の儘持ち歸つて知己の出版業者に相談致します。若し承諾する出版業者がない時には、私は私財を投じてでも、日本の現代にもかう云ふ立派な詩人の詩があつたと云ふ事を知らしたい覺悟なので御在ます。（机の上の詩稿を取つて紙に包みかける）

大造　其れまでに云はれゝば私も致し方がない。不幸と諦めてあなたの爲すまゝにさせて置くばかりだ。

吉田　私も實に不幸だと諦めるより仕樣が御在ません。初めてお目にかゝりまして議論がましい事ばかり申上げて相濟みませんでした。然し已に申上げた通り私は全く明治の文學のために、此れだけの詩集をむざ／＼埋沒して了ふには忍びないと思ふ一片の赤心からつひ種々失禮な事を申上げたので、どうぞ惡く思召さんやうにお願ひ致します。

大造　それア私も承知して居ります。互に意見の合はん事は此れア是非もない。然し……吉田さん。あなたが其樣にまで肩をお入れになるほど、こんな女の事ばかり書い

た都々一のやうなものが、そんなに尊いものなんですかなア。

吉田　一概に女の事ばかり……と仰有るが、女の事ばかり書くのが何にも卑しいと限つた事はないぢや御在ませんか。まア、この詩集の事を離れて廣く人生の事、世の中のことをお考へなすつて下さい。女といふものがどれだけ吾々の生命に深い不思議な關係を持つてゐるか、そんな事は今更申上げるまでもない事ぢや御在ませんか。御令息のお書きになつた此の詩集にはまだ世の中の傷しい風波にもまれない純潔な少年の肉と心が、不思議な生命の誘ひを受けて、女と云ふ、異性と云ふ、大きな祕密の前に苦悶し恐怖し、懊惱する心境が實に驚くほど正直に大膽に、深刻に描かれてゐるので御在ます。御令息の健康は去年の秋、たつた一度其の戀人に出遇つて「將來」といふ希望に觸れた當時だけ、殆ど怪しいまでに囘復して參りました。それと共に今まで胸の奧底に封じられてゐた天禀の空想は恰も氷を碎いて溢れ出る春の泉のやうに滾々として流れ出たので御在ます。然し吾々にはいつも不可知なこの人生の運命は、昔から今日まで決して彼の飜弄の惡戲を止めません。如何程戀の力、戀の希望の夢にすがつて生きやうと悶え悶えても、病魔の冷い無差別の手は、若い詩人の生命を一日一日暗い死の方へと引いて行きます……御令息の御書きになつた詩集の後半は、まるで古城の砦に唯一人、イソルデの來るのを待つて死ぬまいと踠き苦しむトリスタンの歎の叫びで御在ます。ゴルフイオ・ミスチコから湧き起るワグネル音樂のやうに、生命の苦惱と絶望と靈魂の神祕と悲愁とが渦卷く如くに騷いで居ります。私は御令息の此の詩集は確かに明治の文明の誇として後世に傳ふべきものだらうと存じて居るので御在ます。私は實に殘念に思ひます。これほど立派な詩集に對して、あなたは全く三文の價値すら認めては居らつしやらない。不幸な失戀の詩人に對して、唯仕樣のない奴だと云ふ監督者の眼を以てしか御覽になる事が出來ない。然し此れが所謂時勢と云ふものなんで御在ませう。永久に日本の父と子とを分離させる國民的悲劇の根本なのでせう。不意に伺ひまして大變御邪魔を致しました。それでは此れで失禮を致します。私は參りました時のやうに、また雪の中を大事に、この詩集を持つて行きます。

（吉田は詩稿の紙包を小脇に抱へて、恭しく禮をなして去らうとする。大造考へ込みたる顏を上げ、）

大造　一寸待つて下さい。

吉田　（戸口の前に立止つて）　何か御用ですか。

大造　恭次も最う長い事はあるまい。公然親の身として許

す事は出來ないが、兎に角萬事あなたにお任せする事にして、私は出版費をあなたにお渡して置きたい。いくらほどあればよいのです。

吉田　二百圓か三百圓も御在ましたら………

大造　ぢや、小切手を差上げます。

（デスクの前に歩み寄り、手早く小切手を書き吉田の方に進み寄る。）

吉田　出版をお許し下さるのですか。感謝いたします。

（吉田小切手を受取り）　もう汽車も御在ますまい　私は此れから妻の實家へ一泊しまして、徹夜をして此の詩集の序文を書くつもりで御在ます。それではこれで失禮いたします。

（再び禮をして靜に扉をしめて去る。大造茫然として其の場に立ちすくむ。吹雪の音又もや起る。）

大造　世の中は變つた。私には何の事だかさつぱり譯が分らなくなつた。

（此の時執事再び左手扉より出で、）

執事　旦那樣またお電話で御在ます。河田町樣から從四位勳三等の御喜びださうで御在ます。（いひすてはいる）

大造　從四位勳三等………

（ぼんやりした聲にて繰返しながら二三歩、歩みてまた立止る。風の音烈し。）

あゝ寒くなつて來た。おい、ウイスキを持つて來い。お民、ウイスキ……（突然思付いて）あツ、お民はもう居ないのだつた。恭次は死にかゝつてゐる。お民はもう居ない………。

（椅子に腰をかけて頬杖をつく幕。）

（明治四十四年十月作）

煙　三幕

人物

川原忠澄　伯爵　三十二歳
川原忠正　川原伯の叔父、陸軍少將男爵　五十九歳
鶴田十郎　川原伯爵家の家扶　六十五歳
水山新太郎　外務省高等官　三十五歳
守谷青崖　極東新報主筆　三十五歳
君塚孝平　銀行頭取　六十歳
君塚千代子　頭取の令孃、後に川原伯爵の夫人　十九歳
春の家小富　藝者　二十七歳
其他。園遊會の來客、新聞記者、女中等。

第一幕

銀行頭取君塚孝平の庭園。園遊會。十月半の午後。舞臺は小高き丘の心にて、正面深く坂道の下り口。この邊の大木は皆後に向ひて斜に其の幹をのばし、崖下には廣き平地の庭ある事を想像せしむ。右手に狹き天幕を張りたるビイル店。庭上よきところに、青きペンキ塗り、ブリキ製のテエブル二三脚を据ゑ、左右ともに古びたる木立。色づきたる木の葉靜かに散る。

幕明くと、銀行員らしき男六人。（背廣、モオニング、フロックコオト、羽織袴等）思ひ〳〵の服裝にてテエブルの一ツを圍み、ビイルを飮みゐる。其れより隔りたる處に置かれし他のテエブルには同じく來客の一團（四人程）ビイルを飮み終りたる體にて、幕明くとぢきに椅子を立つて左手に入る。天幕の中には、赤前垂に赤襷をかけたる藝者風の女一人コップをふき居る。

第一節

來客の一　今日は君。隨分いろ〳〵な方面の名士が來てゐるやうだね。

來客の二　實業界の歷々ばかりぢやない。大臣や華族なんかも隨分來てゐるやうだぜ。

來客の三　現代の勢力を盡く網羅したんだね。非常なもんだなア。

來客の四　此れも金權と政權とが提携し出した現象なんだらう。かういふ世の中になつちやア地位も金もない奴は、

ます／＼世の中から蹴落されるばかりだ。
來客の五　兎に角大した庭だ。日比谷の公園よりも餘程閑靜だ。
來客の六　これで大きな瀑でも落ちてたらまるで日光か箱根もよろしくだ。
來客の一　何しろあれだけの來會者がちり／＼ばら／＼になると、何處へ行つたか分らない位に靜なんだからなア。
來客の二　何か又餘興でも始まつてるんぢやないか。
來客の三　もう一杯やつたら出掛けやう。
來客の四　おい、姐さん。ビイルを呉れ給へ。
ビイル店の女　はい、唯今。皆さんですか。
來客の五　左樣々々。六つだ。
ビール店の女　かしこまりました。（ビイルをつぎ始める）
來客の六　なか／＼美人だな。
來客の一　君、さつき、お汁粉屋を出してゐた姐さんを見たかい。實に凄い位だつたね。
來客の二　假裝の令孃か。それとも何處かの藝者か知ら。
來客の三　君にも似合はないなア。有名な新橋の小富ツて云ふ藝者ぢやないか。僕は繪葉書で見覺えがある。
來客の四　さう云へば去年會社の忘年會にも來た事があつた………
來客の五　摸擬店の姐さんはそれぢやア大概藝者なんだね。
ビイル店の女　どうもお待遠うさま……（コップを盆に載せて持出でテエブルの上に並べる）
來客の六　姐さん、お名前を伺ひたいもんだね。
來客の一　姐さんは新橋の方か。
女　ほゝゝ。存じません。
來客の二　滅多な事を云つて、何處か華族樣の御令孃だつたら大變だぜ。
來客の一　姐さん。お前は御孃さんかい。
女　見かけによらないでせう。これでも落胤ですよ。ほほゝゝゝ。
來客の三　姐さん。どこかお孃さんの出してゐる店があるなら、此の男に敎へてやつて下さい。
來客の四　持參金付き、お臺所持ちのお嫁さんを貰はうと思つて、鐘太鼓でさがして步いてゐるんだから、功德になるぜ。
一同　はゝゝは。
（此時舞臺の彼方にて遠く拍手する響聞ゆる。同時に奥の坂道より、同じ赤前垂の女出で來り。）
女の二　姐さん。お前さんも御覽なさいよ、宗十郎さんの汐汲が始まるところよ。六代目さんも來てるわ。
來客の一　役者の話が出たら、もう吾々は退却すべしだ。

來客の二　行つて見やうぢやないか。
來客の三　姐さん。一緒に行かうかね。
來客の四　何なら、僕が此の店の留守番をしやうか。はゝはゝは。（笑ひながら立つ）
ビイル店の女　御親切さま。お後からすぐ參ります。
（一同はがや〳〵云ひながら坂道に這入る。同時に思ひ思ひの服裝したる來客の男女三四人づつ左右の木蔭よりいづれも急いで坂道に入る。女二人だけ居殘る。）

第　二　節

第二の女（くたぶれたといふ風に腰をかけ）姐さんとこは靜でいゝわね。私のところは皆さんの通り道なんでせう。忙しくつて目が廻つちまつたわ。
ビイル店の女　それだつて顏が見られゝば結構ぢやないか。
第二の女　もうあんな岡惚れは止めたのよ。
（テエブルの上の卷煙草を取て呑む。ビイル店の女はテエブルを片づけながら。）
ビイル店の女　今日は葭町のねえさん方も來てゐるやうだね、此處にゐるとちつとも樣子が分らない。山奥だから。
第二の女　その代り氣がせい〳〵するわね。下にゐると逆せちまつてよ。
ビイル店の女　小富さんは何を出してるの。
第二の女　お池のそばでお汁粉屋さんを出してゝよ。
ビイル店の女　色消しだねえ。
第二の女　姐さん。あの方にもお目にかゝつてよ。ハイカラな洋服を着てゐらつしやると、まるで〇〇屋さんそつくりだわね。小富ねえさんが夢中になるのも無理はないわ。
ビイル店の女　此頃は氣の毒なほど鬱いでゐるよ。
第二の女　どうして。
ビイル店の女　奥樣をお貰ひなさるんだとさ。しやうがないわね。何しろあちらは伯爵の殿樣だし、此方は賤しい藝者風情だもの。小富さんだつて心ぢや諦めをつけてゐるだらうけれど。そこがねえ……
第二の女　あゝつまらない。私やそんな話を聞くと人事だとは思はないわ。姐さん頂戴、私にも一杯。
ビイル店の女　いゝのかい。お前さんもう隨分飮んだらう。（ビイル店の女はビイルをついでやる）
第二の女　はゞかりさま。
（ビイルをのむ。此の時伯爵川原忠澄、外務省高等官水山新太郎の兩人話しながら左手の木蔭より歩み出る）
（川原伯爵は一見して貴族と見らるべき秀麗なる容貌鼻下に美しき髯を蓄へ、フロツクコートにシルクハツ

ト、手に杖を持つ。水山は品格ある無髯の好男子、同じ服裝。）

第　三　節

伯爵　この邊なら誰も來やしまい。
水山　成程靜でいゝ。それに君、秋の日といふ奴は妙にぢり〳〵照付けるから、日向にゐるとたまらないよ。
伯爵　（歩み出て、女達の姿を見て）何だ。お前達はこんな處にかくれてゐるのか。
ビイル店の女　あら、御前……先日はどうも。
第二の女　私はさつき下でお目にかゝつたのよ。だけれどわるいと思つて默つてゐたわ。
伯爵　だまつてゐずと大きな聲で、よべばよかつたのに。
（水山と共に椅子にかける）
ビイル店の女　召上りますか。（とコップを見せる）
伯爵　（頷付きながら）お前達も見に行くがいゝ。此の次には寺島が踊るさうだ。
第二の女　拜見したいと思つて相談してゐましたの。六代目さんも矢張素踊りで御在いますか。
伯爵　そんな事は知らん。直接にきいてみるがいゝ。（シヽガアに火をつける）
ビイル店の女　（ビイルをテエブルの上に置き）御前にお留守番をして頂けばたしかだから、鳥渡拜んで參ります。
伯爵　其代りのろけ賃をとるぞ。
第二の女　よろしうムいますとも。
（女二人手を引きつれて坂道へはいる。）

第　四　節

伯爵　やつと追出した。これでゆつくり話が出來る。
水山　何だい。この間聞いた著述のことか。
伯爵　それも話したいのだが、それよりもつと緊急な事件が起つてゐる。水山君、僕はいよいよ結婚することになつた。
水山　さうか。それア結構だ。（あたりの木立などを眺めたまゝにて答へる）
伯爵　家の家扶だの親籍のものなぞが、頻りとこゝの家の令孃を押付けやうと思つて、一生懸命になつて騷いでゐるんだがね……君は見たかい。頭取の令孃を。
水山　さつき二三人づれで池の縁を歩いてゐた、あの一番丈の高い令孃だらう。あれなら上野の音樂會なぞでも見た事がある。
伯爵　君は僕の結婚についてどう思ふ。
水山　別にどうとも思はない。似合はしい結婚だと思ふだけだ。

伯爵　さうか。（と考へる）

水山　君は伯爵だし先方は、銀行の頭取で、こんな立派な屋敷を持つてゐる富豪の令嬢だから……

（水山は冷淡かと思はれるまで落ついた調子にて云ふ。伯爵は急き込む調子を强ひて和げ。）

伯爵　そんな事を訊くのぢやない。君は僕のやうな放蕩無賴な男が、あゝいふ可憐な處女を娶るのを見て、どう感じるか、君の考へがきゝたいのだ。水山君、僕は白狀するが、良心の苦痛に堪へられないやうな氣がしてならんのさ。

水山　良心の苦痛……？

伯爵　さうさ。僕の過去をよく知つてるのは君ばかりだ。それだから僕は君にきゝたいのだ。君と二人で巴里やロンドンに遊んで居た時分の事を考へて見給へ。尤も君は外務省の役人といふ身分もあるし、それに、歸朝してからは非常に穩かな人になつたけれども、僕は今だに相變らず、賤しい女ばかりに接近してゐる……、君は僕のやうな放縱無賴なものがあゝ云ふ無垢な世間見ずの處女を娶るのを見て、實際何とも思はないかね。すこしも道德上の義憤を感じないかね。

水山　さうさな……

伯爵　君自身の經驗はどうだつた。君は外國で放縱な生活を送り拔いた後今の妻君を迎へた時にどんな心持がした。

水山　さうさ……何となく氣の毒だつたね。

伯爵　單に氣の毒……たつた其れだけか。君は別に衷心から湧き起る苦痛を感じなかつたか。

水山　感じたかも知れんが……僕は萬事につけてさう云ふ不便な問題は、なりたけ自分から閑却するやうにして行く流儀だ。理想は理想、現實は現實と、僕はその間にちやんと區別を立てゝ置く……

伯爵　君の主義は僕もよく知つてゐるよ。今の時代は眞面目に憤慨して戰ふ時代ぢやない。冷かに傍觀して笑ふ時代だ……と云ふ君の說には、僕も此頃は大に同感してゐる。けれども君、それは吾々一個人が大きな時代に絕望した揚句、社會とか時代とかに對して云ふ話だらう。一身上の問題にまで應用する必要はないだらう。

水山　「必要」といふ言葉は、其の人々によつて其の場合に解釋を異にするもんだからな……

伯爵　わかつたよ。君の場合は僕のよりも非常に範圍が廣いと云ふんだらう。さうかなア、吾々は個人としての生涯までを、矢張世間同樣に冷視して行かなければならないかなア。

水山　だから。思想の問題は別さ。女だの結婚だのと云ふ

事は、そんな高尙な眞面目な問題の中に入れべきものぢや無い。銀行や役所のデスクの上で取扱ふ事務と同じもんだ。まだ覺醒してゐない女性を取扱ふには、矢張其れ相當な覺醒しない心を以てすれば、それでいゝぢやないか。僕は自分の妻なぞに對しては、僕が思想上の問題として抱いてゐる婦人觀なんぞを決して應用しやうとは思はない。先方は此れまで通り有り來りの妻君として幸福に平凡に家事を收めてゐるのだ。親類のものや女學校時代の友達なんぞに對して、高等官の奧樣だ位の淺薄な虛榮心をほのめかして得々としてゐる。小學校で成績のいい子供の事を神童のやうに思つてほく／＼喜んで自慢にしてゐる。そんな事を一々むきになつて咎目立てをしてゐた日にはきりがない、だから僕も妻に對しては妻に對するだけの、平凡な宿六になつてすましこんで、脂下つてゐる……それが乃ち天下泰平家內安全の極意だ。

伯爵　情ない話だな。

水山　その代り甚だ便利だよ。何しろ生きてゐる人間を日常の必要品として見て行くんだからね。下女の取締に食事の注意と、それから尙一つ付け加へれば性慾の整理かね。はゝゝゝ。兎に角家事といふ經濟上の道具にして行けばいゝ。いゝのぢやない。道具として見るのが双方の平和幸福の爲めに必要なんだから、何も自分から煩悶して平地に波瀾を起す事はないのさ。尤も此ア僕達の境遇についての話なんだが、君なんぞの身分ぢやア經濟上の遣繰りは全く不必要なんだから、猶更譯けのない話ぢやないか。妻君をして幸福たらしめんと欲したら、理想だの人生だのとそんな事を考へるよりも、我輩位の中流社會だつたら、先づ充分に朝寢坊をさせて、間食をどしどしさせてやるんだね。それから藝者買をしたつて差支はないから、晩くても家へは歸つて來るのだ。それから氣に入らない事があつたら、皮肉な態度をせずに、頭から眞面目に怒鳴りつける方がいゝ。その代り時々は曲馬の馬を馴らすやうに眼の縁へ接吻してやるのさ。わけアない話だ……

（此の時左手の木蔭より藝者小富、（凄艶なる容貌）水淺黃の前垂をかけ茶店女に粧ひたるまゝの姿にて出で鳥渡此方を窺ひて、直ぐに這入る。伯爵と水山は更に心つかざる體。）

伯爵　（俯向きて）君の話をきいてゐると、僕は深い穴の底へでも沈んで行くやうな、冷たい、厭アな、悲しい心持がする。現實の生活に接近して苦しむと、人間はそこまで悟つてしまはなければ成らんものかねえ。僕なぞは如何にしてもこの世襲の地位と財產とがつきまとつてゐる爲めにそれまでに傷ましく實生活の苦惱に接觸する事

か出來ない……つまり何時までたつても華族の馬鹿殿樣だ。どうしても生活の底の底を割つて見る事ができない。誰れかの云つた通り眞理を得んとする者には、哲學よりも飢を與へよだ……

水山　君は幾歲になつても、學生のやうに眞面目に煩悶してゐる。全く敬服する。けれどもつまらんから止め給へ。少くとも家の事だの細君の事だのについては、苦しんでも功のない事だから、止した方がいゝ。

伯爵　僕もよさうと思つてゐる。だから歸朝した當座のやうに、世間の事についてあんまり憤慨しなくなつただらう。貴族院の選擧にも全然關係しないし、外交官にならうと云ふ計畫も捨てゝしまつたし、新聞社を起す事も思ひ止つた。唯だ自分の好きな本を讀んだり、道樂に文學をやつて見たりしてゐるばかりだ。自分ぢや此れでも非常に悟つたつもりなんだよ。

水山　それア僕も大に察してゐる。非常に角がとれて來たよ。

伯爵　二三年前だつたら、今度のやうな結婚なんぞは、てんで頭から受け付けやしないさ。然し僕も此頃ぢやア、出來るものなら世間竝に暮して行かうと心掛けてゐるから、それで先方さへ、僕のやうな放蕩兒といふ事を承知の上なら、結婚してもいゝと、家扶の鶴田にも其話をしたわけさ。然し君、いざ話がきまつたとなると、僕は非常な不安を感じ出した。自己を欺くといふ良心の苦痛に迫まられてならなくなつた。

水山　君は自分に對しても他人に對しても餘り嚴格過ぎるよ。

伯爵　まア僕のいふ事を聞いてくれたまへ。いつだつたか、社會に名を知られてゐる紳士で、何遍細君を取代たか分らないといふ奴の話が出た時、吾々は何と云つてそれを批評したか、君は忘れやしまい。君は例の皮肉な冷笑を浮べながら、日本といふ國は、助兵衞な爺共には實に便利に出來てゐる處だ。血統の爲めといふ口實の下には、社會的道德の上からでも、立派に多妻主義が許されてゐるし、一家の事情と云ふ勝手な申譯を楯にさへすれば、男は幾度でも新しい妻を持ちかへる事が出來る。結婚といふ事は法律制裁の保護の下に處女を弄ぶのも同樣だ。半玉を水上げして遊ぶよりも、社會から非難を受けないだけでも、此の方が餘程利功な遣り方だと云つたぢやないか。僕が英吉利から佛蘭西、佛蘭西から伊太利亞、それから埃及まで遊び歩いて、何十度戀人を替へたか知れない。その揚句に、あの可憐な處女と妻の契りを結ぶ。それをば親類のものや家扶共は、殿樣のお身持が直つたのだと云つて、お目出度がつて喜び騒ぐのだ。妻になら

うと云ふあの處女自身も、平然として僕のやうな放蕩兒を不潔だとも何とも思つてゐないらしい。一時は恐しい病氣の爲めに、腐りかゝつて行く肉體を、辛くも醫者の手で救ひ上げられた、さう云ふ僕の身體を何とも思はない。さう云ふ恐しい祕密の隱れてゐた事を、探求しやうとも何とも思はない。馬鹿と云はうか、無神經と云はうか、僕はもう呆れるばかりだ。

水山　まつたくだね……

伯爵　君だつて呆れ返るだらう。

水山　だからさ。呆返つて、その儘先方の云ふまゝにして置けばいゝ。いつまでも唯だ呆れてゐたまへ。憤慨するだけ餘計な事だ。一杯どうだ。

伯爵　いや。ありがたう。

（俯向いたまま杖の先きにて地面をつゝいて居る。舞臺奥の方にて再び拍手の響と共に、囃子入長唄の三味線（連獅子か何かのごく早き合方）かすかに聞える。）

（兩人暫くだまつて耳をすます。此の時木蔭にかくれたゞ以前の藝者小富二三歩あゆみ出で、物思はし氣にためらふ。水山早く認めて、）

水山　や、小富か。君、小富が來た……

小富　水山さん。先日はどうも……。

（然し伯爵は依然として俯向てゐる。小富は進出で、）

水山　大分いそがしさうだな。

小富　水山さん。此間からお目にかゝりたいと思つて、隨分焦れてゐました。此頃はちつとも御出掛けになりませんね。

水山　何か耳寄りな話でもありますか。

小富　すこしお話ししたい事があるんです。

伯爵　おい／＼水山君をつかまへて、またつまらない愚痴を聞かせやうと云ふんだらう。近所迷惑だから止すがいいよ。

小富　またそんな、邪慳な事ばかり仰有らないだつて能う御座んすよ。もうちやんと分つてるんですから……

水山　いや、そろ／＼近所迷惑になりさうだ。……誰か來やしないか。

小富　それぢや水山さん、ほんとにお約束しましたよ。

水山　僕も賑な方へ行つて見やう……どうだ、君。

伯爵　大勢の人に挨拶されるのが面倒だから、もうすこし此處にゐやう。

（水山と小富とは伯爵を置いて、左手の木蔭へ這入る。伯爵は茫然として、木の葉の散り來るを眺めてゐる。）

第五節

正面の坂道より、人々の醉して、園遊會の主人、君塚

孝平（丈低く肥りたる老人、フロックコオト）其の令孃千代子（高島田、裾模樣）つゞいて伯爵家々扶鶴田十郎（羽織袴、少しく腰の曲つたる頑固らしき白髪の老人）出て來る。

鶴田　能く御掃除が行き屆いて居りまするな。

君塚　いやもう植木屋まかせにして置きますので、荒地も同樣で御在ます。（坂道を上り盡して舞臺に來り）　いや伯爵はそこにお居でゝしたか。

（伯爵は眉をひそめ、聞えぬ振りして左手の木蔭に這入らうとする。家扶鶴田十郎二三歩追ひ行きながら、大きな聲にて。）

鶴田　もし、御前、頭取がお呼びで被居います。

君塚頭取は千代子と共にビイル店の椅子に腰をかけ、伯爵の方に向きながら、

君塚　混雜して居りましたので、ついまだ御挨拶も致しませんでした。どうぞ……。（隣の椅子を引き出す）

伯爵　どうも恐れ入ります。

（伯爵は腰をかけたまゝ俯向いて沈默する。鶴田は椅子を少し後に引き下げて同じく腰をかける。）

鶴田　大木の繁つた工合から木の葉の散る風情まるで深山幽谷のやうで御在ますな。

君塚　いやおほめに預つては却て痛入ります。今時分はまだよいのですが、冬になつて風が吹きますと、庭中一面どこもかしこも枯葉だらけにされますので、いつも困り切ります。

鶴田　いや、お庭は餘り細々しく手を入れますより、自然の風趣を備へて居るのに限ります。

君塚　鶴田さん。いづれ改めてあなたから伯爵へ御相談を願はうと思つてゐたのですが、婚禮の日取りもいよ〳〵來月の十日と云ふ事まで定まつて居るのですから、いかがでせう其の前に近々に一ッ、伯爵のお出でを願つて、私の方の家中のものだけで、極く略式の食事のやうな宴會のやうな事がして見たいと思つて居りますが……御懇意な上にも猶御懇意になつて置きたいと思ひまして……

鶴田　はい〳〵。いかにも御尤な次第で。

君塚　伯爵はいつ頃が御暇でゐらつしやいます。此の土曜日頃はいかゞでせう。

伯爵　有りがたう御在ます。實は此三日中に友達と秩父の方へ銃獵に行かうかと思つて居りましたが……。

鶴田　御前、御延し遊ばしたらいかゞです。御前は御閑散の御身分ですが、君塚さまの方は、いつもなか〳〵お忙しいのですから……。

伯爵　それですから君塚さんの御都合のよい日にいつでも參上します。お前からも宜しく御禮を申して下さい。

君塚　それでは此の土曜日にお出でを願ひませう。（令嬢千代子の方を振向きて）千代子、お前も其の時までに何か御聞かせ申すやうな物をよく練習して置くがいゝ。

鶴田　御令嬢には大層ピアノが御手練ださうで御在ますな。

千代子　いえ。

君塚　私には一向分らんですが、學校へ行つて居る時分から、もう彼れこれ四五年稽古して居ります。

鶴田　それでは定めし御熟練の事で御在ませう。私共のやうな武骨に育ちましたものには、一向風流の嗜みが薄う御在ますが、然し音曲を聞いて居りますと自然と氣が軟いでまゐります。

（此時又もや下の方にて人々の喝采拍手する聲起る。）

君塚　役者の踊りがすんだのかも知れん……。

（幕明きに出でたる若き來客の三名、此時がや／＼云ひながら左手木蔭より出で、頭取の姿を見て、びつくりして立止り、一同帽子を取つて禮をする。）

來客の一　今日はいろ／＼どうも……

來客の二　芝居より餘程面白う御在ました。

來客の三　營業部の増田さんが頭取を捜してお居でになりましたやうです。

君塚　さうですか。ありがたう。

來客の一　失禮いたします。

（一同再び禮をして急ぎ足に右手へ這入る。君塚頭取は立ちかけながら。）

君塚　何の用か知らんが……それでは土曜にはお待ちして居ります。どうぞ御ゆるり……

（令嬢千代子も立つて恭しく禮をする。伯爵も長椅子を去つて禮をして鶴田と共に二三歩おくれて同じく坂道の方へ行きかける。同時に右手より「極東評論」の主筆守谷青崖（鼻眼鏡をかけたる美髯の紳士。フロックコオト、シルクハツト、外套の服裝）急ぎ足にて出で伯爵を呼び止める。）

第六節

守谷　伯爵閣下。大變御無沙汰をいたして居りました

（伯爵振向いて立止る。此の間に家扶鶴田は君塚頭取と共に這入る。）

伯爵　や、守谷君。

守谷　京都の方へ旅行して居りましたので、大變御無沙汰してしまひました。先達伺ひました御著作はどうなりました。實は明日にも御屋敷へ伺つて拜見したいと思つて居ります。もう大分御出來になりましたらう。

（伯爵は守谷の話の中、ひそかに四邊を見廻し、鶴田

の姿の見えざるに安心する體椅子に腰なかく。)

伯爵　一心不亂に勉强してゐるんだがね。なか〳〵筆が運ばない。普通の小說や何かとは違つて、歷史的考證がなか〳〵困難だし、それに君。何にしろ發表するまでは、祕密にしてゐなければならんのだから、自分の家の倉とは云ひながら餘り大袈裟に參考の書類や記錄を取り出す譯にも行かないしさ。非常に困難だよ。

守谷　さうでせう。然し困難なだけに出來上つた時は痛快です。少くともこれから曲學阿世の學者共が作出さうとする嘘八百の歷史を、見事根柢から破壞してしまふのですからな。

伯爵　全く痛快だ。守屋君、僕は實際、今日までどうしてあんな貴重な材料が自分の家の土藏の中にしまつてある事を知らなかつたのかと、不思議に感じてゐる位だ。今年の夏……僕は生涯忘れない、眼のくらむやうな著い日だつたよ。丁度其の前の晩、君と二人で頻に學問の神聖歷史的眞理の獨立といふ事について熱心に論じ合つた事があつたツけね、すると丁度その翌日の事だ。家では土藏の蟲干で、庭中にいろ〳〵なものが干てある。僕は何の氣なしに其邊に出てゐる書類などを見入つてゐる中計らずあのやうな不思議な寶を手に入れた…… その時の僕の心持はどんなだと思ふ。敢て明治維新の歷史に關する事ばかりではない。亡つた父を始じめ今日まで叔父の男爵や家令や家扶や老女供までが、幾度となく子供の時から僕の耳に話して聞かしてゐた川原家の歷史や先祖の遺話と云ふものはあれア皆な嘘だ。少くともそんなに偉いものではなかつたと云ふ事が始めてわかつた。其の時の心持はどんなだと思ふ。僕は燒くやうに照りつける烈日の下に立つて、三十何年周圍のものから欺かれてゐた此の憤慨をいかにして癒すべきかと瞑想してゐる中に、突然すさまじい雷鳴の轟きと共に、黑雲は忽ち天を蔽ひ、夕立は瀧のやうに降り注いで來たぢやないか。僕は今日まであんな悲壯な雷鳴、神祕な夕立に出遇つた事はない。守谷君、僕は實際あの瞬間には、何とも云へない英雄的な偉大な魂が、天上から閃いて來て、僕の身體の中へ乘移つたやうな心持がした。

守谷　不意の天變地妖と人間の思想の大波瀾とには、必ず何か深い不思議な連絡があるものだと見えます。新しい宗教を興したり新しい國を建設したりする偉人英雄の傳記は、皆さう云ふ事を證明してゐます。私は伯爵閣下のお話を聞いても、矢張さう云ふ風に、神祕に偉大に考へます……考へないわけには行きません。私は實に痛快でたまりません。伯爵の文章がいよ〳〵私達の經營してゐる雜誌社から世の中に公表されると云ふ其時には、天下

の腐儒どもはどんなに狼狽して騒ぐだらうと思ふと、もう實に痛快でたまらないやうな心持がします。

伯爵　はゝゝゝは、もう暫くの間だ。樂しみに待つてゐてくれ給へ。僕はどんな社會の迫害を受けたつて一向構はん、やりだしたとなつたらどんな事をしても後へは引かないのだから……

守谷　いざと云ふ時には、理想の爲めです。私だつて獻身の覺悟はちやんとして居ります。然し伯爵、世の中は唯だ苦々しく顔をしかめるだけで實際はどうする事も出來ますまい。政治上や社會上の問題ぢやなくて、論ずる處は單に純粹な學問上、史學上の研究方法についての事なんですから。直接には何とも迫害の與へやうがありますまい。それだから猶更痛快です……

伯爵　兎に角一生懸命に勉強しなくちやならん。この頃はその爲めに一切酒も止めてゐる位だよ。實はもうやけ酒を飲む必要がなくなつたんだから。

守谷　私は今日から伯爵の成功をお祝ひ申して置きます。あんまり長くお話をしてゐて、人に怪まれてもつまりませんから、それでは又明日にでもお屋敷へ參上してお話を伺ふ事にしませう……

伯爵　是非やつて來給へ。いろ〳〵君の助力を得たい處があるから。

（守谷は立上ると共に何者か人の來る樣子に心付きたる體にて、樹木の間を見すかしながら、）

守谷　伯爵、向から厭な奴がやつて來ます。きつと私に伯爵を紹介しろと云ふに違ひありません。

伯爵　誰だ。（伯爵も立上る）

守谷　さくら新聞の記者です。一度口をきくとうるさく付き纏つて來る下等な奴です。

伯爵　それア堪らん。

守谷　あゝ云ふ連中に逢つちや、實際たまりません。（二人とも右手の木陰に這入る）

第七節

新聞記者某（無性髯を剃らざる汚き顔付。山高帽子を少し阿彌陀にかぶり、膝の出たるヅボン、古びたるフロツクコオト、垢じみたるインバネス）きよろ〳〵しながら右手より出で來り、伯爵の去りたる方を見送りながら、

新聞記者　己れの姿を見ると何奴も此奴もみんな厭に敬遠主義を取りやアがる。失敬な奴だなア。（ビイル店の方に歩み寄り椅子に腰をかけ）ビイルをくれたまへ。ビイルだ、ビイルをくれんか。誰もゐないのか。空ッぽの店とは驚いた。（テーブルの上に伯爵の捨行きたる飲みか

けの葉巻を見付け）　すばらしい葉巻が置いてある。（取り上げて）　コレア奇妙だ自然に火がついて烟が來る。流石は富豪の園遊會だ。巻煙草がいやに澤山積んであるなア。（テエブルの皿の上に積んである紙巻煙草を取つて見て）　此れア敷島ぢやない、ヅッと上等の十本十五錢のオリエントだ。（あたりを見廻しながら、オリエントを鷲掴みにして無暗にポッケットの中へ盗み入れる）新聞記者だと思つて侮蔑されても此れだけ收入があれば結構だ。（人の來る様子に心付き、あわて、椅子より立ち、こそ／＼と左手木蔭へ這入る）

第八節

右手より以前の水山新太郎、藝者小富と話しながら來る。

水山　つまらない取越苦勞はしない方がいゝよ。世の中の事はいくら苦勞したつて成るやうにしきやア成らないもんだから……。（二人とも椅子につく）

小富　いつか一度はかういふ事になるんだらうと、私も最初から諦めはつけてゐたんですけれど、やつぱりいゝ心持はしませんからねえ。

水山　それも當分の中だよ。僕が受合ふ。すこしの中辛抱してゐなさい。どうせあの人の事だもの、結婚したつて、なか／＼家におとなしくしてゐる氣遣ひはない。おとなしく默つてゐるに限るよ。何しろ非常な癇癪持ちなんだから、怒り出すと手がつけられない……。

小富　それですから、私はだまつておとなしくして居ます。水山さん。此間もかうなんですよ。すこし加減がわるくつてお酒を頂戴しなかつたらこはい顔をなすつてね、何を鬱いでゐるんだ。云ふ事があるならずん／＼云つてくれ、と仰有るんぢやありませんか。ほんとにこまつてしまひました。

水山　それも心の中では、お前さんに對して非常に氣の毒だと思つてゐるからだよ。つまりいろいろの事が思ふやうにならないんで、獨りで焦れきつてゐるんだからね。兎に角逆はないやうに唯だはい／＼と云つてるが一番だ。我儘なやうで、あれでなか／＼分つたところがあるから……

小富　それア私も知つてます。何も彼も氣がついて、それで何にも知らない顔をなすつて居らつしやるんだから……却て困ることがあるんですよ。華族様のやうぢやありませんねえ。

水山　それといふのが、子供の時分から、あんまり嚴しく責められ過ぎたからだ。華族なんてものは矢張苦勞させずに薄野呂間に、お目出度く育て上げるに限るんだ。い

くら其の人だけ世間優れて利功に育ッたつて、周圍の世の中が昔の通りぢや、却て其の人の不仕合せになるばかりだ。

小富　御前はお小い時から、そんなに苦勞をなすつたんですか。

水山　先代の伯爵が生きてゐられたら、さうでもなかつたんだらうが、何にしろ十二三の時男親に別れてから後は鍾馗さま見たやうな陸軍少將の叔父さんに嚴しく監督されたんだ。それがつまり伯爵の性質をすつかりひねくれさして仕舞つたんだね。叔父さんの方ぢや決して惡い氣でさうしたのぢやない。兎角世間にある通り華族の殿様にや馬鹿が出來るもんだから、さう云ふものにしてはお家へ對して申譯がないと云ふので、度合を計らずに無暗に嚴しい軍人教育を施した譯なのさ。だから伯爵は華族學校なんぞに行かずに、吾々平民の子ばかり行く町の中學校へ通はされた揚句柔道と漢學を教へる私塾へ入れられてゐた事もあつた。

小富　そのせゐだわね、御前は軍人さんは大嫌ひねえ……いつだつたか伊香保の方へお伴して行つたときなんぞ、軍人さんが這入つて來ると、いやアな顔をなすつて、わざわざ下りて別の汽車に乘り替へてお仕舞ひなさるんですよ。

水山　はゝゝゝは。軍人さんばかりぢやないよ。伯爵の嫌ひなものを數へ出した日には限りがない。華族に、役人に、金持に、新聞記者に、議員さんに、ハイカラの藝者に、帝國座の女優に……大概なものはみんな嫌ひだらう。お氣に入つてるのはお前さん位のものだらう。はゝゝゝは。

小富　御冗談ですよ。

水山　實際だよ。時々手嚴しいおのろけを拜聽させられる事がある。だから僕は、先刻から安心してゐる方がいゝと云つてるんぢやないか。

小富　さう仰有つて下されば、嘘でもうれしう御在ます。

水山　嘘ぢやない。伯爵は眞實お前を愛してゐる。一體お前さんは伯爵がどう云ふ譯でお前さんを贔屓にするのかその譯をよく吞み込んでゐないからいけない。ちつと六ヶ敷い話だが、伯爵はお前さんがすいも甘いも浮世の苦勞といふ苦勞をしぬいた身の上に打込んでゐるのさ。まづ海山千年といふ經歷が、伯爵のお氣にめしたんだ。全く、お前さん位いろ〳〵な身の上話を持つてる女は、今時の藝者には恐らくあるまい。伯爵はもう遊び倦きてゐるのを無理に遊んでゐる人だから、お前さんのやうな女でなくつちや、つまりお相手が出來ないんだ……

小富　わかりました。そんな事を仰有られると何だか悲し

いやうな、妙な心持になります。あんまり此樣處で休んでゐると皆さんにわるいから、私はもう下へ行きます。水山さん、それぢや、ほんとにお近い中に。

水山　僕も伯爵と久しく一緒にならないから、きつと出掛ける。それアさうと伯爵はどこへ行つちまつたのか知ら……

（話しながら歩いて共々坂道に下りる。以前の新聞記者再び左手木蔭より出で、取り殘したる皿の上の卷煙草を盜まうとする。突然花火の響轟く。新聞記者驚いて椅子の上に尻餅をつく。同時に、上の方より花火に仕かけた風船の達磨ふわ／＼と落ちて來る可笑味よろしく、左右の木蔭より園遊會の來客男女大勢出で空を仰ぎながら拍手する。この模樣よろしく幕。）

第二幕

川原伯爵の書齋、凡て近世式佛蘭西風の家具及裝飾よろしく、正面出入りの硝子戸、其の外ヴエランダ。うつくしく庭園の樹木見ゆ。左右の壁に出入りの扉。五月末の午後。

幕開くと、川原伯爵、二重ボタンの背廣にて、机に向ひ、已に綴ぢ終りたる厚き原稿を前にし手に持ちたるペンを投げ捨てゝ、疲れたる吐息をつく。

第一節

伯爵　あ。やつとこれで、おれの事業も完成した。（窓際に立寄り）いつの間にかもう夏になつた。

（再び机の上なる大册の原稿に眼を注ぎて沈想する。輕く扉を叩く音聞える。）

誰だ。

女中　（扉を開けながら）お茶を入れて參りました。

（高島田の女中、紅茶と西洋菓子一皿とを載せたる銀の盆を持ち出る。）

伯爵　もうお茶の時分になつたのか。

女中　はい。もう三時過ぎで御在ます。

（片隅のテエブルの上に盆を置き其の儘立去らうとする。伯爵は机を去つてテエブルの方に歩みながら、突然思出したやうに、）

伯爵　おい。お高。

女中　（扉のそばに立ち止り）はい。

伯爵　今日は私も最う暇になつたから、千代子にも一所にお茶を呑むやうに、奥へ行つてさう云つて來てくれ。

（女中禮をなして這入る。伯爵は紅茶を一呑した後、葉卷に火をつけ、何事か考へながら室内を歩き、立止つ

て窓外の庭を打目戍る。）

（再び扉をたゝく音と共に、伯爵夫人千代子、庇髪、羽織にて出る。伯爵は急いで其の方に歩みながら。）

伯爵　今日から私も最うすつかり暇になつた。これからは、旅行なり、芝居へなり、何處へでも一所に行つて、ゆつくり遊ばうと思つてゐる。

（伯爵は自ら扉を閉め、寄添ふやうに夫人と共に長椅子に腰をかける。）

伯爵　仕事を仕上げてしまはない中は、どうも氣がすまないので……ろくろく話をする暇もなかつた。もういゝ、今日ですつかり重荷を下してしまつた。

夫人　幾晩もつゞけて徹夜をなすつて被居いますから、お身體にさはりはしないかと、それはかり心配して居りました。もうすつかりお書き上げになつたんで御在ますか。

伯爵　うむ。すつかり書き上げてしまつた。（机の方を指して）何にしろ紙數にしても五百枚からある。それにあれを書くには、一々昔の書類なんぞを調べなければならないものだから、隨分骨が折れた。

夫人　どう云ふ御本なんで御在ます。

伯爵　御維新時分の私の家の川原家の歴史を書いたのだ。今日にでも守谷といふ男が來たら、直ぐに出版の準備に取りかゝらせるつもりだ。然し千代子。それまでは此間からも注意した通り、必ず家扶の鶴田なぞに云つてはならんよ。

夫人　はい。それは承知して居ります。然しあなた、もう鶴田はとうからあなたの御様子を變に思つて大變心配してゐるやうで御座いますよ。

伯爵　なに。鶴田が……うむ、それぢやア、私が土藏の中に收つてあるいろ／＼な書類を盜み出したのを感付いたに違ひない。どうせ一度は知れる事だ。もう此れさへ書き上げてしまへば書類なぞは反故も同様だ。どんな奴が反對したつて少しも恐れる處はない……

（この時女中再び紅茶を持ち出で、テエブルの上にて茶をつぐ。伯爵は茶碗を取り上げつゝ。）

伯爵　まア、ゆつくりお茶でも呑んで面白い話をしやうぢやないか。兎に角私はお前に氣の毒でならない。

夫人　まア、どうしてゞ御座います。（夫人も茶碗を取り上げる）

伯爵　どうしてツて。ほんのお儀式に二日ほど新婚旅行をしたつきり、まだどこへも一所に遊びに行つた事がないんだから、……隨分私の事を妙な男だと思つてゐたらうねえ。

夫人　いゝえ、あなた。お仕事の方がおいそがしかつたんですから、仕様が御座いません。

伯爵　お父さんの家の方でも別に何とも云つては居なかつたか。
夫人　いゝえ。別にあなた、何とも申す譯が御座いませんもの……
伯爵　さうか。（云ひ切つて夫人の顏を眺め）千代子。それぢや、お前も別に何とも思つてはゐないんだね。
夫人　何をで御座います。
伯爵　かうして私の家にゐる事を、お前は別に不幸だとも何とも思つちやゐないのだね。
夫人　あら、まア。何を仰有るんで御座います。こちらへ參つたのが不幸だなんて……
伯爵　お前さへ何とも思つてゐないのなら、それでいゝ。私は唯だ、これまでお前が、嘸ぞ不滿足に思つてゐた事だらうと心配してゐたんだが……お前さへ不幸でないと云つてくれゝば、私も其れで安心した。私はこの仕事を仕上げてしまひさへすれば、心もおちつくし、氣もゆつくりするんだから、これからはさう癇癪なぞを起す事もあるまい。（再び千代子の顏をつくづく見ながら）人間といふものは矢ッ張り安樂に豐かに可愛がられて育たなければならんものだ。千代子。お前は生れてから今日までに一番悲しいとか口惜しいとか思つた事はどんな事だつたね……
夫人　一番口惜しいこと……
伯爵　口惜しいなぞと思つた事はなかつたかね。
夫人　いゝえ、それア御座います。（少し考へて）學校に居ります時分、先生から人違ひをされて叱られた事が御座いました。それから……
伯爵　それから……
夫人　それから……もう大抵忘れてしまひました。
伯爵　ほゝゝゝは。それぢや矢ッ張り悲しいと思ふ事なぞは一度もなかつたのだ。忘れてしまへるやうな悲しい事なら、ほんとに悲しいのでも口惜しいのでもない。お前は實に、羨しいほど幸福に素直に育つたのだな。
夫人　（急に思ひ出して）あ、御座いました。
伯爵　何だ。悲しいと思つた事があるのか。
千代子　御在ます。あの家に居ります時分一多飼つて置いた小さな雀の子が死んだ時で御座います。その時はほんとに口惜しう御座いました。あの冬の寒いしぐれた夕方で御座いました。縁側の雨戸を閉めて居りました家の女中が、いきなり大きな聲でお嬢樣々々ッて呼びますから、私は何だと思つて行つて見ますと、雀の子が一羽、逃げやうと思つてばた〳〵翼ばたきをしても、翼がきかないので、逃げる事が出來ないので御座います。女中と二人でつかまへて見ますと、きつと鴉にでも追はれたのだと

見えて、方々の羽が抜けてゐるんで御座います、……もう止しませう。何だかあんまり子供らしくつて……

伯爵　いゝよ。子供らしい方が無邪氣でいゝ、罪のないお前の話を聞いてゐると、私はまるで兒守歌でも聞いてゐるやうな懷しい心持がする。お前が助けてやつた其の雀は死んでしまつたんだね。

夫人　はい。冬中は丈夫に生きてゐましたから、もう此れで安心だと思ふと間もなく、却て春になつて暖かになる時分にころりと死んでしまひました。よく馴れて私の手の上からでも餌をたべる位で御座いました。

伯爵　私も人間と生れたからは、お前のやうなたわいもない懷しい時代がほしかつた。苦しい過去と不安な現在と暗黒な將來……。私は罪のない穩なお前の眼を見てゐると、何となく泣きたいやうな淋しい心持がしてならない。

（伯爵は俯向いて考へ込む、千代子は心配さうに寄り添ひ。）

夫人　あなた。すこしお庭の方でも御運動なすつたら……あんまりお部屋にばかり閉籠つてゐらつしやるからですよ。何だかお顏色もよくないやうです。

伯爵　（額を上げて頬を撫で乍ら）　この二三日髯も剃らずにゐたせゐだらう。湯にでも這入つて髯でも剃ればすぐに直るよ。今夜は一所に帝國ホテルか何處かへ晩餐でも食ひに行つて、それから芝居へ廻つて見やうぢやないか。

夫人　はア。大變歌舞伎座が面白いさうで御座います。日延べをしたさうで御座います。

伯爵　それぢや歌舞伎座へ行く事にしやうかね。

（伯爵は立ち上つて退儀らしく欠伸をするやうに手を動かす。扉を叩く音して女中出る。）

女中　お客樣で御在ます。

（小さき皿に載せたる名刺を示す。伯爵名刺を取上げて。）

伯爵　何だ。守谷か。すぐこゝへ通してくれ。

（女中這入る。伯爵は夫人を顧みて。）

伯爵　それぢやお前も支度をして置くがいゝ。

（其のまゝ右手の扉より這入る。）

第　二　節

同時に左手の扉より守谷青崖、背廣、中折帽にて出る。

守谷　先日は失禮をいたしました。いかゞです。もう御書き上げになりましたか。

伯爵　君。この通りだ。すつかり出來上つた。（机の方を指さす）

守谷　非常な大部なものになりましたな。一ツ拜見しませう。

（伯爵は自ら椅子を机のそばに引き寄せ、）

伯爵　さア掛けたまへ。

守谷　いや、恐れ入りました。（伯爵の動したる椅子につく）

伯爵（机の前の肱掛椅子に坐って）おしまひの方は大分亂暴だよ。（稿本を守谷に渡しながら）兎に角邪魔のない中に早く書き上げてしまはうと思ふものだからしまひの方になると猶ほ氣がせくので、一昨日の晩は二時まで起きてゐたし。昨夜はたうとう徹夜をして仕舞つた。

守谷　それア、どうも、非常な御勉強でしたなア……。（原稿を開いて見ながら）この邊のところは先日拜見したやうです……第六篇、あゝこゝからです。（默讀する）

伯爵（新しき葉卷に火をつけつゝ）どうだ。さう云ふ風な書き方をして置けば、事情を知らん奴は唯だの小說だと思ふから、一向差支はあるまい。

守谷　閣下も大分巧妙な筆法をお用ひになるやうになりましたなア……然しあの當時には實際こんな事があつたんですかな。（猶續けて默讀する）

伯爵　全く小說よりも奇なりさ。

（伯爵は會心の笑みを浮べて葉卷をすふ。扉を叩いて女中出る。）

女中　御前。鶴田さんが一寸お目通り致したいと仰有つてで御在います。

伯爵（守谷の方を顧みつゝ）はゝア、たうとう嗅ぎつけて、やつて來た。うるさい奴だなア。

守谷　私が居たら、却てなんでせう。また改めてお伺ひしませうか。

伯爵　さうだね。家ぢや兎角氣をおちつけて、ゆつくり話も出來ないしするから、二三日中に僕の方から會合の場所を通知しやう。

守谷　さうして頂けば結構です。活字の組方や書物の體裁などについても猶いろ〱お話を伺はなければなりませんから。それでは……

伯爵　それではこゝで失禮します。

（守谷禮をして這入る。女中も其の後につゞいて這入る。家扶鶴田十郎すぐに出る。）

第三節

伯爵　何の用だね。（冷かなる調子にて云ふ）

鶴田　すこし折入つてお話し致したい事が御座います……。

伯爵　さうか。まア掛けるがいゝ。（長椅子に腰をかけ、）また經費節減の話かね。

鶴田（猶立ちたるまゝにて）いや、其の事では御座いません。お家の大事件で御座います。

伯爵　まア、立つてゐずと掛けるがいゝ。（鶴田禮をなして椅子にかける、伯爵はそしらぬ顔にて）屋敷の事なんぞ一々私に相談せずとも、お前のいゝやうに取計らつたらいゝぢやないか。お前さへ居ればどんな大事件が起つても安心なものだ。

鶴田　恐れ入ります。然し今度の事は私一存では計ひ兼ねます。私から一應お願申した上、もしどうあつてもお聞き入れになりません時には致し方が御座いません。叔父上樣の男爵閣下にお願ひ申す覺悟で御座います。

伯爵　それアどうも。大變な騷ぎだね。

（伯爵は他を向いて煙を吹いてゐる。鶴田は急き込みたる調子になり）

鶴田　御前。私はもうとうから御前のなすつて被居ることを知つて居ります。なまなか御異見を申上げてもお聞入れ遊ばさないだらうといふ事も承知して居ります。それ故どうしてよいものかと、わざと今日までは知らない風をして居りましたが御前、どうか其の御本の事はお思ひ返しを願ひたいもので御座います。

伯爵　此の原稿か。

鶴田　はい。御出版は是非とも御見合せを願ひたう御座います。

伯爵　それア出來ん。

鶴田　どうあつても御聽き入れ下さいませんのですか。

伯爵　無論の事だ。

鶴田　それでは是非が御座いません。男爵樣へお願ひ申して御異見を申上なければ成りません。

伯爵　（立ち上つて）誰が何と云はうとも無駄な話だ。私は此れまで幾度びお前達の云ふ事を唯だはい〳〵と云つて、承知してやつたか知れないぢやないか。政治運動も止めにする。新聞社を起さうとした事も止めにする。それが爲め私は今日でも守谷なぞに對して、どれだけ面目を失つてゐるか知れないのだ。それにまた、去年の秋にはたうとう心にもない結婚といふ大事件までも、私はお前達の云通り、默つて承知してやつたぢやないか。もう其れで澤山だ。私は此の上一歩たりとも讓る事は出來ん。お前達に話をしたつて分らんのだから、云ひたい事があるなら、さつさと男爵を呼んで來るがいゝ。家の自動車に乘つてさつさと迎ひに行つて來なさい。

鶴田　さう御立腹遊ばしては恐れ入ります。

伯爵　鶴田、私は……よく聞くがいゝ。例へ家が潰れやうとも、私の地位財産がなくならうとも、今度の事はやり通す覺悟だ。お前もそのつもりで頑迷な、男爵にもよく然う云つてやるがいゝ。（鶴田は伯爵の見幕に茫然としてゐる）何を愚圖々々してゐるんだ。早く迎ひに行かん

のか。

鶴田　御前、それではあまりに御癇癖が過ぎは致しませんか。

伯爵　過ぎるも、過ぎないも、お前なぞの知つたことぢやない。

（兩人暫く無言になる。伯爵は靜に机の方に進み原稿を取上げ鶴田の方に示して、）

鶴田能く見ろ。これは私の命だ。私がまだ生れない先から、お前達が私の魂の上に蒙らした、いろ／＼な束縛に對する憤恨の妄念が、今この書物になつてこゝに現はれ出たのだ。鶴田。お前達は御維新の騷動の時分、先々代の主人に對してどう云ふ事をしたか、ようく反省して見ろ。人間の身體は亡びても、人間の魂は決して亡びないものだぞ。

（原稿を小脇に抱へたまゝ、腹立し氣に庭に面する扉より外緣に出で、有り合ふ椅子を引寄せ後向きになつて腰をかける。（この有様硝子戸越しによく見える）鶴田暫く茫然として眺めてゐたる後、しを／＼として室內右手の扉より這入る。）

第四節

伯爵は靜かに立上り、煩悶に堪へぬらしく一二回外緣の上を往來してゐる。此の時左手の扉より、前幕に出でたる外務省高等官水山新太郎、莚り地のモォニングコオト、薄色の山高帽、手袋、ステツキにて出で、一寸室內を見廻したる後、直樣伯爵の姿を認めて、進み出でながら、

水山　しばらく……。いゝ時候になつたぢやないか。

伯爵　や。（驚いて振向き、戶口に立止る）

水山　天氣はよし、それに日曜日だから、お留守ぢやないかと思つてゐた。（長椅子に坐つて、手袋を取りかける）

伯爵　（室內にすゝみ入りながら）さう／＼今日は日曜日だつたね。無職業の遊民はこれだから困るんだね。（机の上に原稿を置く）

水山　大層勉强だね。

伯爵　此間話したあの原稿だよ。昨夜徹夜してたうとう書き上げた　水山君。いよ／＼此れから大活劇が始まらうといふ處だ。鶴田の老人が自動車に乘つて叔父の男爵を呼んで來るといふ騷ぎさ。

水山　さうか。それア面白い處へ來合はしたな。何しろ傍觀者には結構な事だ。

伯爵　ゆつくり遊んで見て行きたまへ。

水山　男爵は今でも、矢張り報恩會の會長をして居られるのかね。

伯爵　己れを知らざるにも程があるよ。退職した古手の軍人なんざ、有難く恩給を貰つて引込んでればそれでいゝんだ。あゝ云ふ古い人間が新しい世の中に顏を出すのは、何かにつけて、どれだけ社會の公益を害するか知れやしない。

（此時、女中ウイスキイを持ち出で去る。水山盃を手にして。）

水山　君は此頃あの方面へはちつとも出掛けないさうだね。

伯爵（頷付いて）此の二た月といふものは勉強しづめだ。何にしろ邪魔の出ない中一日も早く書上げてしまはうと思つたもんだから庭へもでないで勉強した。君は此頃、あれに逢つたか。

水山　小富の事か。四五日前送別會の座敷で一寸見掛けた。

伯爵　何か云つてゐたか。

水山　いや、別に何とも云つてはゐなかつた。苦勞した女だけに話は分つてゐるやうだ。たいして心配する事はない。

伯爵　それだから、僕は猶の事氣の毒でならん。女といふものは、あればかりには限らない……女ほど自分の身の上の不仕合せに對して、反抗しない、諦めのいゝ哀れなものはない。僕は自分の妻の、罪のない穩かな顏を見ただけでも、どうかすると、胸が一杯になつて、妙に氣が沈んでしまふ。また君に笑はれるかも知れないが、僕はどうして、かう思切りがわるいのか知ら。悟れないのか知ら。

水山　まだ絶望の仕方が足りないからだらう。人間の生活は人間の力でよくなり得べきものだ。といふやうな希望や信念を根本から捨てゝしまふ事が出來ないからだ。

伯爵　僕は別にそれほど深い信仰を持つてゐるわけではないのだが……。

水山　それぢやア、あんまり本を讀み過ぎたからだらう。書物といふ奴は人間の感情を絶えず刺戟して、人間の知識を鞭撻するもんですからな。書物をよんで物を深く考へる癖をつけると、何にかぎらず事が面倒になつていかん……。

伯爵　大きにさうだな。

水山　だから、そこへ行くと、性來懶惰な僕なんぞは、實に有難いものさ。世の中にどんな事が起らうと、例へば秦の始皇帝見たやうな人が出て來て、馬を鹿だと云はせる世の中にならうとも、僕なぞの連中は、根が無性で、物事を根本に溯つて、眞面目に探究するのが、面倒で厭だからどつちにでも、成りたけ都合のいゝ方に、すぐと覓をつけてそれで納つて行ける。處が君のやうな學者に

なるとさうは行かない。人の云つた事世の中の定めた事は何に限らず、一々自分の心に問うて、判斷したり吟味したり反省して見たりした上でなくつちや、なか〳〵承知ができないといふのだから誠に面倒だ。

伯爵　いや〳〵追々僕もわかつて來た。世間を渡るには矢張り君のやうにして行かなくつちや成らない。君は偉い。僕なぞよりは遙に人物が大きい。

水山　さう云はれては甚だ恐縮するよ。

伯爵　僕はつまり、人間が古かつた。節義だとか、節操だとか云ふ古い時代の根無し言を眞に受けて、今だにはつきり目が覺めない。そこへ行くと、君はえらい。世の中の嘘の皮をすつかり剝取ッて了つて、それで悲しみもせず絶望もせず自棄にもならず、平然として笑つてゐられるのだから、此頃ぢやつく〴〵偉いと思ふより外に思ひやうがなくなつた。

水山　はゝゝゝ。いよ〳〵以て恐縮するね。（庭の方を見返つて）さすがに君のとこの庭は、いつ見ても好い心持だ。あれアみんな楓かね。

伯爵　すこし庭でも散歩して見やう。

（二人庭に下りる。）

第五節

男爵川原忠正、陸軍少將の軍服、白髪白髯にて、鶴田と共に左手扉より出る。鶴田額の汗をふきつゝ室内を見て、

鶴田　お庭へでもいらしつたのかも知れません。どうぞお掛け下さいまし。唯今お呼び申してまゐります。

男爵（椅子につきつゝ）實にどうも……言語道斷の事を爲出したもんぢや。

鶴田　少々お待ち下さいまし。

（鶴田恐縮しつゝ庭に面する前面の入口に進み行く。外縁の向うの見えざる處より高らかに笑ふ伯爵の聲聞ゆる。鶴田外縁に進み出で。）

鶴田　御前、もし御前。男爵樣がお出でゞ御座います。（呼びながら庭に下りる）

（伯爵手に薔薇の花を携て、外縁より靜かに室内に進み入り、叔父の男爵を見て。）

伯爵　しばらく御目にかゝりませんでした。お變りも御座いませんか。

（冷淡なる調子にて云ひ、煖爐棚に置きたる花瓶に薔薇の花をさしてゐる。男爵はもう我慢が出來ぬといふ風にて。）

男爵　私はもう何にも云はん。唯だ一言返事を聞けば、私の方にも量見がある。忠澄、お前はどうあつても、鶴田

の意見をきかないつもりか。

伯爵　無論で御座います。（靜に腰をかけ）　私の方でももう、とやかく私の考へをお話し申す必要がないと思つて居ります。誰が何と仰有らうと私は斷行する覺悟ですから……

男爵　よろしい。さう云はれゝば私の方にも相當の覺悟をせんければならん。お前は惡意を持つて、わざと伯爵家の名譽を毀損し、祖先の家に對して侮辱を加へやうといふのだな。

伯爵　あなた方の眼から御覽になつたら、或はさういふ風に見えるかも知れません。どうも致し方のない話で御座います……然し私は實際、自分の家の名譽を高めやうとも、傷けやうとも、そんな事はどつちとも、一向念頭に置いて居らないのです。私は唯だ正當な眞實な、嘘のない家の歴史と其れに關連した維新當時の事件の一部を書き著したい。唯それだけが私の目的です。あなたが何うお考へにならうと、一向私には關係がありません。

男爵　名を歴史に藉りて、吾々に迷惑をかけて喜ばうと云ふのだ。氣狂ひの仕業でない限りは誰が見ても惡意を以て、家名を傷けるとしか思はれん。實にどうも……不埒千萬な、言語道斷な事を思ひ立つたものだ……。

伯爵　何とでも御憤慨なさるがいゝです。あなたが其程不埒だとか言語道斷だとか仰有るなら、直接私へお話しにならずとも、あなたの方はあなたの御隨意に、私を親族會議に廻して戸主の權利を廢止させるなり、どうなり御勝手になすつて下さい。或は又、私のこの著述に對して御不同意の處があると仰有るならば、あなたも堂々として私の著述に對する反駁の論文をお書きになつて、其の判斷を天下の公論にお問ひなすつたらよろしいでせう。維新の當時、德川幕府と薩長とに關連した川原家八萬石の歴史の一部分は、一家私有の歴史ではありません。時代一般の共有する日本歴史の一頁です。其の歴史的事實の眞僞に對する判斷は、社會一般の輿論に任かすのが當然でせう。私の著述について何か仰有る事がありましたら、どうぞ社會に公表してからの事にお願ひします。その事についてなら、私は一々責任を帶びて御答辯致します。

男爵　いよ／＼以て怪しからん事をいふ、忠澄その著述はどこにある。私に見せろ。

伯爵　それをあなたにお見せ申せば、あなたは乾度取上げて破くかどうかしてお仕舞ひなさるに違ひない。著述は私の生命も同樣です。鍵のかかつたこの抽斗の奧に、ちやんと仕舞つてあります。然し叔父さん、私が此處の家の主人である限り、こゝは私の書齋です。軍隊では御座

いませんから暴惡なミリタリズムは實施されません。

男爵　もう、その儘には捨て置けん……

（憤然として立ち上る。鶴田は兩人の様子を見て茫然として立ちすくむ。伯爵は手を擧げて制し、ます〳〵冷靜なる調子になり。）

伯爵　さう御立腹なさるには及びません。それほど御覽になりたければ、お見せ申しても宜しう御座います。もしあなたが、私の著述を取上げて、あなたの其の長い軍刀で、ずた〳〵に裂いてお仕舞ひになれば、私はまた最う一度書き直すばかりです。紙は裂いても思想は裂く事が出來ますまい。思想に對する武器は思想より外には無いので御座います。私の著述に對して御不同意の點がありますなら、今申上げた通り、堂々として社會公衆の前でお戰ひなさつて下さい。八萬石の川原家は元來ならば子爵になる譯です。それがどういふ譯で、特に伯爵に叙せられたかといふ其の魂膽を忌憚なく暴露しました。先々代の老公は熱烈な佐幕黨であつた事は勿論です。其の爲め、薩長の鼻息を窺ふあなた方一派の爲めに僞狂人にされて座敷牢に入れられた事まで、私は一々實證を引いて書いたのです。それに間違ひがあると仰有るなら、それは歴史編纂上の問題です。こゝで一々御答は出來ません私は生憎來客を庭に待たしてありますから、今日はこゝで失禮します。

（伯爵は靜にヴェランダより庭に去る。）

第六節

男爵は立ち上りたまゝ拳を振りて云ふ處を知らず。鶴田恐る〳〵進み寄りて、

鶴田　どうぞ御勘辨を……私から幾重にも御詫びを致します。

男爵　實に容易ならん事ツた。あのまゝにして置いたら、此の後も何をしだすか知れやせん。

鶴田　どうしたら宜しう御座いませう。

男爵　今の中戸主の權利をどうか爲せるより仕樣があるまい。

鶴田　大變な事になりました。

男爵　私も一應よく考へて見た上でまたお前とも相談をせんければならん。今夜か明日の晩にでも私の家へ來てくれんか。

鶴田　は。承知致しました。早速今夜參上致します。

男爵　それでは、其の時ゆつくり相談しやう。實に不埒千萬な事だ……。

（男爵を先きに、鶴田も共に左手扉より退入る。）

第七節

（伯爵と水山話しながらヴエランダより歩み入る。）

水山　大分激烈なやうだつたな。

伯爵　思つたより手弱なので、力抜けがした位だ。然しあのまゝで濟む筈はない。

水山　親族會議でも開いて、いよ／＼不信任問題を持ち出すつもりかね。

伯爵　大方そんな事だらう。僕は世襲の地位と財産から切り放されて、生活の荒波の中に投り出されて見たい。それが何よりの試驗ぢやないか。それが生活の眞味を嘗める唯一の方法ぢやないか。

水山　乞食は一番自由だ。昔から三日乞食をすれば忘られないと云つてゐる位だ。然しそんな悲壯な手段を取るほど、人間の生活といふものは價値のあるものぢや無い……少くとも僕はそれほど價値のあるものとは思はない。

伯爵　何故……

水山　別に理由と云つて說明する事は出來ないが、僕にはまア何だね、君のやうに眞面目に生きて見やう。充分に生活の力を味はうと云ふやうな好奇心がないからさ。

伯爵　好奇心とは驚いた……

水山　好奇心に違ひない。眞理に到達しやうとか。新しい生活の意義を見出さうとか云つて、理想家や先覺者の騒ぎ廻るのは、骨董家が掘出し物を搜し廻るのと少しも違ひはない。つまり手數のかゝつた道樂だ。

（此の時家扶の鶴田左手の扉を明けて出る。）

伯爵　また、何か用か。

鶴田　男爵さまの事につきまして、もう一度申上げなければ成りません。

伯爵　まだ、お歸りにならんのか。

鶴田　いえ、もうお歸りになりましたが、それにつきまして鳥渡御前にお話し申して置かなければなりません。

（水山は此の時テエブルの上に置いたウイスキーの盃を呑み干して、）

水山　大きにお邪魔をした。僕は此れから小石川まで行く用事があるから。

伯爵　さうか。一緒に晩餐でも食べやうと思つてゐたのに……

水山　いや、また其の中ゆつくり出直して來やう。

（握手して這入る。鶴田恭々しく禮をなし、扉を閉めて進み出る。伯爵は机に坐る。）

鶴田　御前。私はこれから鳥渡男爵樣のお屋敷へ伺ひまして、御相談申すので御座いますが……

伯爵　（机に坐り洋書を開きて讀み初めながら）もう其の

事なら、私に云ふ必要はない。男爵といふやうに勝手に相談するがいゝ。

鶴田　御前がさう仰有つても、私の身分として、さうは參りません。御前。男爵はどうあつても御前が御聞き遊ばさない時には、お家の名譽には、代られません故、治産權の禁止をするとか、どうかしやうと仰有つてゞ御座います。

伯爵　そんなら、構はずにさうしたら好いぢやないか。私は一向かまはん。

（依然として讀書す。鶴田は暫く考へてゐたる後、突然づか〳〵机の傍まで進み出でべたりと床の上に平伏し聲を顫はして、）

鶴田　御前。かうなりました上は、私は身命を抛つても御意見を申上げます。

（流石の伯爵も驚いて鶴田の顏を見詰める。鶴田は取りすがるばかりに伯爵の足下に進み寄り、）

鶴田　御先祖へ對して申譯が御座いません。私は身命を抛てゞも、御諫言申上げねば、この場は引き取りません。御前、どうぞお思ひ返しを願ひます。

伯爵　もう無駄だから止しなさい。私は聞く耳を持たん。

鶴田　私が身命を抛ちましても……

伯爵　身命を抛つ。それア何の事だ……

鶴田　私は切腹して御先祖へ申譯をいたす覺悟で御座います。

伯爵　切腹……？　はゝゝゝは。馬鹿な事を云ふにも程がある。そんな芝居見たやうな、子供だましを云つたつて誰が眞に受けるものか。お前は氣が狂つたんぢやないか。

鶴田　いや、決して取亂しては居りません。御前、恐入りますが私の今の身の上――叔父上の男爵樣と御前の間に立ちました私の身の上を御考へ下さい。いかにお家の爲めとは申しながら、臣下の身分として現在の御主人に對し、容易ならぬ法律上の手續いたすなぞと、どうして左樣な事が出來ませう。と申して、此の儘お家の御名譽にも係る事を、默つて見て居る譯にも參りませぬ。御前どうあつても、私共の意見をお聞き遊ばさないと云ふ時には、この際生命を捨てますより外には身の振方が御座いません。氣が狂つたなぞと、いかに耄碌いたしましても……それはあまりのお下げ賤みで御座います。

伯爵　（ぢつと鶴田の顏を眺めて）お前の心持はよくわかつた。お前は世の中がすつかり變つてしまつた今日百年も二百年も前の廢れた教義にならつて自殺をしやうといふのだな。

鶴田　御前恐れながら、人間の踏みまする人倫五常の道には、千年萬年たちましても變りはないと存じて居ります。

私は武士の教通り、立派に死んでお目にかけます、

伯爵　鶴田、そんな頑固な事を云はんで、よく考へて見るがいゝ。お前には子供もある。孫もある。お前は家族をどうするつもりだ。

鶴田（苦悶を忍んで）左様なものを顧る時では御座いません。私は唯た御先祖代々の御恩といふ事より外、何事も考へては居りません。

（兩人とも暫く言葉なし。伯爵はつく／＼鶴田の様子を目戍りながら、獨語のやうな調子にて、）

伯爵　あゝ、私はお前の生命と引替へに、私の著述を世に出すか、どうかと云ふ場合になつたのだ……

鶴田　私も覺悟をいたしましたからには、もう御意見は申上げません。いづれなりと御前の心まかせに遊ばして下さいまし。

（伯爵苦痛に堪へざるものゝ如く席より立つ。鶴田は遂に平然たる調子になり、）

鶴田　いづれなりと、どうぞ御返事を承はり度う御座います。

伯爵　うむ。よろしい。大なる事業の前には、大なる犠牲を要するのは知れたことだ。鶴田……私はもう一度考へて見やう。お前はそれだけの猶豫を與へてくれるか。

（鶴田は猶ほ平伏したまゝに領付く）一日かゝるか、二日かゝるか……、兎に角私から返事をするまで待つて居てくれ。

鶴田　失禮な事ばかり申上げました。それでは御返事をお待ち申して居ります。

（禮をして立上り、左手の扉に這入る。伯爵之を見送る。）

（此の時夫人千代子盛裝して右手の扉より出る。）

第八節

夫人　もう支度をいたしました。あなたは日本服を召していらつしやいますか。

伯爵（びつくりして我に返り）あ、千代子。もう芝居どころの騒ぎぢやない。（進み寄つて）私は人を殺さうか、どうしやうかと思つてゐる所だ。氣の毒だが……お前一人で、女中をつれて見に行つてくれ。私はもう家には居られん。二三日どこかへ行つて考へなければならない……

（千代子の手を取りたるまゝ長椅子に坐る幕。）

第三幕

待合の奥座敷。五月末の夜。正面、床の間ちがひ棚。右手寄りに二枚立の障子（此の外は中庭のつもり）

左右ともに襖。床の間のかざり、屏風、襖なぞ凡て數寄を凝らす。

川原伯爵。五ツ紋の着流し、宿醉さめざる體にて脇息によりかゝりゐる。その傍に藝者小富、好みの着付。半玉二人、女中一人侍る。伯爵の前には膳を据ゑ、日本酒の銚子二三本とウヰスキイ、葡萄酒、平野水などの壜を置く。

左手には清元の藝者、三味線二人、唄三人居並び、藝者二人踊り居る體にて幕開く。

第一節

踊の間に伯爵は絶えずコップにて日本酒をあふり、小富に酌をさせる。

小富を初め皆々、なりたけ伯爵に呑ませまいとするを、伯爵無理に波々とつがせる。

日本酒の銚子忽ちに空になる。伯爵は更にウヰスキイをつがしめる。

とかくする中に踊りの曲いよ〳〵酣になる。伯爵は脇息より肱をすべらし、其のまゝ横に倒れる。

小富膝枕をさせる。

踊の曲いよ〳〵進んで漸く終りに近く頃、伯爵は次第に疲れて眠る。

小富上より伯爵の顔を覗き込みて、

小富　御前、おやすみですか。お起き遊ばせよ。

半玉の一　(にじり寄つて)　御前、どうなすつたのよ。

半玉の二　(同じ樣に伯爵の顔をのぞき込み)　あら、ほんとにおよつちまつたのよ。

女中　大變に醉つてゐらつしやるやうだから、お起し申さない方がいゝのよ。

(小富は扇子にて靜かに伯爵の顔をあふぎ居る。此の時清元の曲終つて、藝者舞ひ收める。伯爵苦し氣に片手を動し。)

伯爵　水をくれ。

女中　はい。唯今。

(女中座を立つ。)

(踊りの藝者達一同伯爵のそばに歩み寄つて、)

藝者の一　ほんとにお苦しさうだね。

小富　何しろ、二日二晩呑みつゞけでゐらつしやるんだもの。

藝者の二　それぢや、何ぼお強くたつて、たまらないねえ。

藝者の三　それに、御前と來たら、いつでも、ウイスキーだのビイルだの日本酒だの、皆なちやんぽんなんでせう。私達だつたら死んじまふわ。

藝者の四　(一番年ふけたるつくり)　だけれど、私や此方

の御前はほんとに賴もしい方だと思ふわ。
藝者の五　どうして、姐さん。
藝者の四　御自分ばかりは、どんなに召上つてゐても、藝者衆には、一度だつて、無理にお酒を强ひたりなんぞ、なさらないから……
小富　あんまり、さうでもありませんよ。
藝者の四　それアねえさんはしやうが無いわ。
（女中銀瓶を盆に載せ出る。）
女中　御前。お水がまゐりました。
（伯爵横になりたるまゝにて、小富の手より水を一呑して、四邊を眺め。）
伯爵　踊りはどうした。もうよしたのか。
半玉の一　あら、ほゝゝ。もうとうにお仕舞ひになつちまつたわ。
半玉の二　御前はぐう／＼およつちまふんだもの。ねえ、姐さん。
伯爵　もう一曲。やれ。梅の春でも何でもいゝ。
半玉の一　いやよ。御前は人に踊らしといておよつちまふんだから……
伯爵　お前のならちやんと見てゐる。ちやんと眼をあいて見てゐる……
（云ひながら其の儘再び眼を閉ろ。）

半玉の二　御前、そら御覧なさい。ほゝゝゝほ。
藝者の四　（あたりを片付ながら）　何かおかけ申したら。お風邪を召すといけないわ。
（女中立つて次の間より縮緬の搔卷を持ち出づる。）
（藝者達は銚子其他を片付ながら、よき程に一人一人座を立つ。然らざるものは小富に目禮をして去る。）

第二節

小富と半玉二人だけ居殘る獨吟になる。
（粹な浮世も戀ゆゑに、野暮に暮すも心柄、梅ケ香そゆる春風に、二枚屛風をおしへだて
半玉の一　姐さん。もう何時でせうね。
小富　何だか、みんなが行つちまつたら、急に夜がふけて來たやうだねえ。
半玉の二　御前が時計を持つてゐらしツてよ。
（半玉は横になりたる伯爵の帶の間より滑り出したる懷中時計を見る。）
小富　何時？
半玉の二　もう十一時よ。
小富　それぢやもう頂いておいで。
半玉　ええ。
（此の時伯爵眼を閉ぢたるまゝにて、）

伯爵　おい。小富。

小富　お目覺めですか。

伯爵　（猶横になりたるまゝにて、靜かに）私の包をこゝへ持つて來てくれ。

小富　あの紫の袱紗にお包みになつた、あれで御座いますか。

（伯爵うなづく。小富立つて袴と共に床の間の廣蓋に載せありたる包みを持ち出す。伯爵半身を起して包をときかける。）

半玉の一　御前。なアに。

半玉の二　あら、汚い本だわねえ。

伯爵　（二番目の原稿を取出して投げやりながら）二人して滅茶滅茶に破いてくれ。

半玉の二　やぶくんですか。ほんとに。

伯爵　さうだ。早くやぶいてくれ。半年かゝつて書いた本だ。それがある中は氣がやすまない。早くやぶいてくれ。

半玉の一　ほんとに、よくつて。

伯爵　ほんとだよ。早く破くんだ。

（半玉二人、何のわけとも分らず云はるゝまゝに兩手に引張り破く。）

さうだ。さうだ。もつと破くんだ。もつと〳〵。

（云ひながら伯爵は次第ににじり出でゝ縋るやうに小富の膝によりかゝる。）

小富　御前、どうかなすつたんぢや……。

伯爵　いゝから、打つちやつておけ。お前も一緒に、庭に持つて行つて燃してしまつてくれ。マッチはあるか。マッチ……。

半玉の一　あります。（煙草盆の内にありしマッチを示す）

伯爵　早く燃してくれ。早く燃してしまへ。

（小富は呆氣に取られつゝ正面の障子をあける。）

すつかり燃すんだ。一枚殘らず燃してしまふんだ。

（半玉二人引裂きたる原稿を携へ中庭に下りる。半玉の姿は見えず其の聲ばかりにて。）

半玉の一　御前、ほんとに燃しますよ。

伯爵　早く燃せ。燃せ。

半玉の二　御前、ほら、燃えますよ。

半玉の一　燃える〳〵。

半玉の二　大變な烟だ。おゝ烟つたい。

（障子に赤き焔の色ぱつと映る。小富は障子のそばに座を占め、袖にて煙を拂ふ。獨吟。伯爵は半身を起して伸び上るやうに焔の色を見込む。）

伯爵　（力なき聲にて）もうみんな燃えてしまつたか。

小富　えゝ、もうみんな灰になつてしまひました。

伯爵　灰になつたか。半生の事業は灰になつた……（吐息

を漏らして俯向く。小富心配さうに伯爵のそばに摺寄る）

お富。その灰を拾つて、家扶の鶴田の家へ屆けてやつてくれ。（小富は伯爵の顏を覗込みたるまゝにて只領付く）私の用はこれで濟んだ。私はもう屋敷へは歸らん。お富。これからは一生お前と二人きり。

小富　エ。（とおどろき）私と二人……。

伯爵　身分もすて家もすて一生お前と暮さう。

小富　それではあなた、お屋敷の奥樣が……

伯爵　もう、そんな、人の身の上なぞ心配してゐる餘裕はない。打捨つて置け。

（焰の色再び障子に映る、伯爵半醉半醒の體にて小富の手を取り其膝を枕にして横になる。小富その肩の上に顏を押當て泣き入る幕。）

（明治四十四年十二月作）

三柏葉樹頭夜嵐　三幕

榮え壽く清元のいはれを爰に三柏三幕に仕組む狂言は雲州様お屋敷にて豊後三流の盃事波々つぎしお波の方あたりへ心奥庭にて榮壽太夫が濡事の罪をつぐなふ節付に富本豊前が日傳の實意そのお蔭にて縁組の日出度まとまる清元の盛を妬む弟子佐太夫破門をされて五郎助が意趣を含んで和國橋出刃庖丁に延壽齋命を落すその場にて娘お柳と吉之助榮壽を助ける譽れの仇討

序幕

松平出羽守邸内離座敷の場
同じく　奥庭の場
同じく　茶席の場

一松平出羽守
一清元榮壽太夫
一富本豊前掾
一常磐津小文字太夫
一近侍ノ士和泉源十郎
一近侍ノ士藤坂金之丞
一俳諧師一荷庵鯉十
一寵妾お波の方
一腰元四人
一小姓一人
一庭掃除の仕出し三人

一面の平舞臺正面上手へ寄せて床の間書院窓違棚總て立派にかざり後築山泉水の書割八ッ橋に菖蒲の花咲揃ひてあり上手下手共出入の襖日蔽より欄間を卸し舞臺花道ともに薄べりを敷く都て赤坂御門内松平出羽守屋敷内奥座敷の體。腰元楓、浪路、初瀬、花野の四人島田鬘振袖矢の字結の帶をしめ正面下手よりに居並びゐる。琴唄にて幕明く。

楓　けふは皆さん何といふ仕合な事わいな。いつも殿様が御側放さず御ひいきの、清元ばかりか富本に、常磐津節の家元まで、御召寄せになつたとやら。

浪路　名高い太夫衆の淨るりが、一度に殘らず聞かれやうとは、こんな嬉しい事は御座りませぬ。

初瀬　それといふのも、此の御屋敷であればこそ。たとへ芝居へ行つたとて、清元富本常磐津と、そのやうにいろいろな淨るりが、一度に聞けるものでは御座りませぬ。

花野　さぞ面白いことで御ざりませう。早く聞きたいもの

で御ざります。

（トこの時近習和泉源十郎藤坂金之丞の兩人大小裃にて下手より出で、）

源十郎　コレ〳〵御女中衆、何を申して居るのぢや。御召寄せの太夫達も打揃つた樣子。御座敷の仕度がよろしくば、その由御奧へ申上げよ。

初瀨
花野　かしこまりました。

（ト皆々上手襖を明けて入る。）

金之丞　然らば某は藝人衆へ御目通り申付けて參らう。

（ト源十郎に會釋して花道より向へ入る。跳の唄になり上手より松平出羽守葵の紋付好みの羽織着流し。愛妾お波の方好のこしらへ。俳諧師鯉十坊主甕十德。以前の腰元小姓附添ひ居並ぶ。）

源十郎　最前御召しの太夫達、早速御目通り致すやう申付けまして御座ります。

出羽守　フト思付いての催し故、いかゞと存せし處、皆々首尾よう參つたか。

源十郎　仰せの如く常磐津小文字太夫、富本豐前掾、淸元榮壽太夫、最前より一同御次へひかへて居りまする。

出羽守　日頃屋敷へ出入致す、淸元節の藝人どもは、改めて申聞かすに及ばねど、常磐津富本のものどもは、定めし餘所外の座敷も同樣、窮屈に存ずるかも知れぬ故、その方よりあらかじめ、無禮講の趣とくと申聞かせたがよいぞ。

源十郎　左樣なれば有難き御上意、とくと申聞かせるで御座りませう。

（ト源十郎一禮なして向へ入る。此の中腰元銚子盃等を運ぶ事よろしく。）

鯉十　見渡せば綠滴る若葉の景色、花にも增して又一しほの眺めで御座ります。

お波の方　殿樣にはまづ一獻わらはがお酌を。

（ト出羽守盃を取る合方になり。）

出羽守　今日屋敷へ豐後節三流の太夫を呼出せしは、チト仔細あつての事。そちもよう知つての通り、近頃富本節より分れたる、淸元淨るりの一流、日に日に流行致するより、この兩派の間兎角面白からず、折々贔屓のものなど喧嘩口論も致す由、それ故豐後節の本流常磐津の家元を中に立て、兩派和解の盃させたきものと存ずるが、何とお波、そちはいかゞに存ずるな。

お波の方　淸元に富本中直りの御盃、それは何より結構な事で御座りますが、あの頑固な淸元延壽齋、たやすく承知致すで御座りませうか。

鯉十　いかにも御波樣の仰有る通り、あの淸元の家元延壽齋と申す老人は、先代齋宮太夫の後をつぎ、淸元の一流

を作出せしほどの氣性者、以前は岡村屋吉五郎とて町人なれども大家の旦那衆、藝人には似合しからぬ頑固なたち故、折角殿樣の思召を無に致し、却て御機嫌を損じは致さぬかと、私もかげながら心配致しまする。

出羽守　いやその事なら案じるに及ばぬ。清元延壽齋の氣立は、余もとうから存じ居れば、今日この席へは悴の榮壽を呼寄せ、父の代理を致させるつもりであるぞ。

鯉十　これはよい處へ御氣がつかれました。流石御賢明なる殿樣の御計らひ、恐入つて御座ります。

お波の方　それではあの榮壽太夫が富本節の家元と、中直りの盃を。

出羽守　いかにも其方が心ひそかに……イヤサそちも大層贔屓に致す榮壽太夫、いまだ若年なれども藝道にかけては天晴の腕前、父の代理をつとめても大事はあるまい。

お波の方　ありがたい其の御言葉、榮壽太夫にきかせましたら、定めし嬉涙にくれる事でござりませう。

鯉十　イヤ藝ほどありがたいものは御座りませぬ。事は變れど拙者とて、かうして御前の御側を去らず、毎日々々好勝手な事を申して居るも、皆俳諧といふ藝の德、イヤ磨くべきは藝でござる。

（ト出の唄になり向より藤坂金之丞和泉源十郎先に立ち小文字太夫定紋付黒羽二重の羽織袴。富本豊前掾白髮頭同じ拵へ清元榮壽太夫小紋の羽織平袴にて花道へ居並び。）

金之丞　御召寄せの太夫、打そろひお目通り致して御座ります。

源十郎　いづれも方々、唯今申せし通り、今日は吾等始め無禮講との御上意。遠慮致さずおかおかに殿樣へ御挨拶なされい。

小文字　御上意のほど有難うは御座りまするが藝人風情の身柄にて。

豊前掾　雲州一國十八萬石の御領主樣へ、おかおかに御禮を申上げましては勿體なうムります。何卒あなた方より殿樣へ、よろしく御取次の程。

三人　御願申上升。

出羽守　イヤイヤ何を申しても苦しうない。其のやうに致して居つては誰が誰やら見分けがつかぬ。近う參つて顏を上げい。

金之丞　太夫衆、殿樣の御許でムる。もそつと近うお進みなされい。

（トこれにて太夫三人互に動作あつて舞臺下手へ進み。）

小文字　左樣なれば恐れ多い事ではござりますれどおかおかに御禮申上げ奉ります。私事は常磐津節の家元小文字太夫にムり升。

豐前掾　私事は富本節の家元豐前掾に厶り升。
榮壽　私事は淸元延壽齋伜榮壽太夫に厶ります。
小文字　いづれも御前間近く御目通相叶ひ御禮の申様も。
三人　ござりませぬ。
出羽守　誰ぞ此の盃、まづ豐後節も本流常磐津の家元へつかはせ。
（ト俳諧鯉十盃を受取り。）
鯉十　常磐津小文字太夫殿、殿様より御盃を下されます。
小文字　有難く頂戴致しまする。
（ト謠の鳴物になり小文字太夫盃を出羽守に返す謠元鯉十間に立つて酌をする事なぞ宜しく同じ鳴物にて。）
出羽守　今日其方達を召寄せたは餘の儀でない。兼てより噂に聞けば、それなる榮壽が父淸元延壽齋、始め富本を名乘りし處、文化の中頃より豐後路淸海太夫と改め、やがて淸元の一流を唄出せしより、富本淸元この兩派の確執、今以て絕えやらず、互に藝道の意氣地を張る由、一應は尤も至極なれど、すべて人の心を和げ樂しく致すが藝道の趣意、それをば互に角目を立てゝ爭へば、おのづと藝にも和ぎ失せて面白からず、既にその方共も知つての通り、唯今流行致す江戶諸流の淨るりは、いづれも其の昔京より下りし宮古路豐後掾が一節よりわかれしもの。春の花には桃櫻、秋の野邊にも七草あり、變りし色の多きほど、倦かぬ眺めと申すものぢや。
お波の方　ほんに殿様の仰有る通り、近き譬へはあれなるお池に、今を盛りの杜若、同じゆかりの紫も、誰が呼び成せし花菖蒲。名前はそれと違へども、掛けた縁の八橋に、仲よう咲いてあるでは御座りませぬか。
鯉十　成程々々、いづれが菖蒲杜若、こゝは鷗も都鳥、浪花の芦も伊勢の濱荻、名前はいろ／＼變れども、本木は同じ常磐津の、若葉をきそふ富本淸元。
お波の方　三筋の糸のまち／＼に、合はぬ調子を殿様が、粹なこの場のおとりなし。
鯉十　何と太夫衆、ありがたい思召では御座りませぬか。
小文字　取るにも足らぬ藝人の、爭ひ事を勿體なく、おかおかに仰せ遊ばす其の御言葉。
豐前　何と御返事を申さうやら。
榮壽　一同恐入つて。
三人　御座りまする。
出羽守　コレ／＼そのやうに恐入つては面白うない。早い話が、身も藝事は大好き。野暮な屋敷の能樂より、いきな音〱の三味線が、好きなあまりに横合から、權柄づくな入らざるせつかい、其れをば何にも云はず心よく、承知致してくれるとは、流石に意氣な江戶の藝人。取分け富本豐前掾、定めしそちが心底には、明けて言はれぬ思わ

くもあらうなれど、此の出羽守が言葉に免じ、日頃余がひいきに致す清元の、しかも若輩の榮壽太夫と並び、快く盃事を致す心底、出羽守感伏致したぞ。

豐前掾　ハ、有難き其の御言葉、日頃は唯遊藝をお好きとばかり存じましたに、下情に明き殿樣のお目がね。此の豐前が面目お立て下さるありがたさ。私富本午之助と申せし頃より、清元延壽齋とは二代に渡り、いろ／＼面白からぬいきさつも御座りましたなれど、今日此場にてさらりと水に流すで御座りませう。此の上は清元延壽齋、いかやうの考を持ちませうとも、私には最早やいささかの意趣も御座りませぬ。

出羽守　然らば早速和睦の盃。

お波の方　取持つ御役は、幾千代變らぬ老木の常磐津。

小文字　左樣なれば胡麻鹽頭の年役に、小文字太夫が仲に立ち。

豐前掾　盃いたすは富本の、色香やはらぐ櫻草。

榮壽　此は緣もまだ若き、芽生のまゝの三つ柏。

お波の方　三ッ揃つて三組の、盃かはす三筋の太夫衆。

錦十　いや目出度い事で御座りまする。

（ト琴唄模樣の合方にて三人和睦の盃事あり。）

出羽守　和睦の盃濟む上は、座敷を變へていづれもが、練へし藝の腕くらべ。

お波の方　左樣なれば殿樣には。

出羽守　ゆつくり所望◯致すであらう。

（ト立上るを木の頭琴唄にて拍子木幕すぐに引返す。）

（平舞臺正面注目繩を張りし銀杏の大樹目覆より若葉の釣枝を下げ、上手寄りに稻荷の祠切株の屋根をつけ前側木蓮格子本緣付奉納の額、下手屋根付の御手洗手拭をさげよき處に紫陽花。向泉水築山の遠見躑躅の花盛。上下とも見越の樹木練塀にて見切り、凡て松平出羽守邸内奥庭の體。風の音にて幕明くと仕出三人中間のこしらへ、いづれも竹箒を持ち△中央にしやがみ□上手に○下手に立ち。）

△　折角天氣になつたと思つたが此の空模樣ぢや又降つて來さうだ。

□　どうせ人の來ねえ此の奥庭、こんな處を掃除したつて仕樣がねえ。

○　いゝ加減にして午寢でもしやうぢやねえか。

（ト捨臺詞よろしく上手へ入る下手より榮壽太夫前の場のこしらへ、羽織を脫ぎ醉過したる體にて。）

榮壽　またしても御女中衆が、私にばかりお勸めなさる御盃、知らずにいつか頂き過し、大層醉つてしまつたが、今日はいつもとちがひ、他流の人も交つた御座敷、一倍身を入れて語らねばならぬが、困つた事になつたなア。

（トすこしよろめきながら舞臺へ來り、）
オヽよい處にお稲荷樣、早く醉のさめますやう勿體なけれど、しばしが中休ましていたゞきませう。
（ト鳥居に腰をかけ休む。誂の唄になり向ふよりお波の方腰元兩人付添ひ花道に立ち止り、）
お波の方　降續く五月雨に、心ならずお參りも其れなりにしてゐたが、漸く今日の薄曇り、頼みがたなき空なれど、掛けし願ひの叶ふやう、心を籠めてお願ひ申さうわいな。お前方も何ぞ思ふ事でもあるなれば、私と一緒にお願ひ申したがよいぞや。
初瀬　御屋敷のお稲荷樣は、縁結びには御利益があるといふ事ゆゑ、私はあの榮壽太夫さんのやうな好い男と、末始終夫婦になれます樣お願ひ申したうございます。
花野　それでは私も紀ノ國屋さんのやうないゝ男と一所になれますやうお願ひ申します。
お波の方　またしても大きな聲で何をいふぞいな。
兩人　さ。お出であそばしませ。
（ト矢はり右の唄にて皆々舞臺へ來り、お波の方手を洗ひ參詣しやうとして、）
お波の方　そこに居やるは榮壽どのかまアよい處で○誰かと思つてびつくりしたわいな。
榮壽　コレはまアお波樣、申譯がござりませぬ。先程お次へ下りまして、皆樣のおすゝめ上手に大變御酒を頂き過し、肝腎の藝どころか、坐つてゐるさへ六ヶ敷さう故、運ぶ歩みもふらふらと、若葉の風に送られて、深山のやうな此の奥庭、誰も來ぬのを幸と、醉をさまして居りますところ、無態なゝりをお目にかけ、御恥しうござります。
お波の方　外々の藝人衆なら知らぬ事、屋敷のものも同様に、日毎出入のお前故、誰になとさういうて勝手に休めばよいものを、見ればどうやら頭痛でもする樣子、コレお前方、何ぞよい藥を持合はせては居らぬかや。
初瀬　ハイ折好く持合せました此の丸藥、醉ざましには大層よくきくさうでございます。
榮壽　いえもう大した事はムりませぬ。先程から木陰の風の冷さに、もう大抵醒めたやうでムり升。
お波の方　折角私の心づかひ、遠慮せずと呑んだがよい。ドレこぼれぬやうに私が呑まして上げやうわいな。
榮壽　モシお波樣、それでは勿體なうムり升。どうぞ其儘になされて下さりませ。
（ト丸藥を受取りそつと口へ入れる。）
お波の方　いつに變らぬ改まつた物の云ひ樣、たまにはすこし打解けて、冗談の一ツも言つたがよいではないか。
（トぢれつたいといふ思入、）
初瀬　ほんに太夫さんは、御部屋樣が御贔屓になされても、

堅苦しい御辭儀ばかり。

花野　それではあんまり、御愛嬌がなさ過ぎるといふもので御座ります。

榮壽　それぢやと申して、生付口不調法の不束者、たゞ〳〵失禮のないやうに、其れのみ心にかけて居ります故、御辭儀の外には一言も、うまい事が申されませぬ。どうぞ惡く思召さぬ樣、お許しなされて下さりませ。唯今のお藥にて醉もすつかり醒めました。もう程なく御座敷の仕度も出來る時分、私は一足お先へ御免を蒙ります。

お波の方　アコレ榮壽どの、私がお參をする間暫く待つてゐやいのふ。お座敷で淨瑠璃の始まるのは灯がついてからの事、然しそなたも氣がゝりであらう。コレお前方、外の太夫衆は仕度をしたやら、急いで見て來やいのふ。

腰元兩人　かしこまりました。

榮壽　もし〳〵それには及びませぬ。唯今私が見て參じます。

お波の方　お前方早う見て來やいのふ。

兩人　はアい。

（ト腰元兩人下手へ入る。薄く風の音を聞かせお波の方あたりを見廻し、）

お波の方　コレで漸く邪魔者を。

榮壽　エ何と仰有ります。

お波の方　何もそのやうに驚く事はない。お前と二人ゆつくりと、お稻荷さまへ願掛をするのぢやわいな。

（ト榮壽太夫の手を取る。）

榮壽　ア左樣で御座りましたか。然しつひぞ人の參らぬこの奧庭、かうして御側に居ります處、若しひよつと意地のわるいものにでも見られましては、どのやうな御迷惑にならうも知れませぬ。早う御參りを致しませう。

お波の方　そなたの身には迷惑か知らねど、此の身に取つては願うてもない仕合、コレ榮壽殿、そなたが心の中をきくならば、もう御稻荷へ願掛もいらぬわいな。

榮壽　お波樣、それではどうやら此のわたくしを。

お波の方　恥しながら、とうから焦れてゐましたわいな。コレ榮壽殿、思ひ込まれたがそなたの因果、どうぞ此の身の願叶へてたもいな。

榮壽　數ならぬ身を其程に、思うて下さる御親切、嬉しうは御座りますが、此のまゝ御言葉に從へば、父延壽齋を始めとし、淸元一派の爲には、海山にも替へがたい、御屋敷の御恩を仇に致すわけ、義理と情の二道に、何と御返事申さうやら、途法に暮れた此の場の仕儀、御察しなされて下さりませ。

お波の方　常々義理堅いお前の事、大方さうと思つた故、覺悟はとうにきめてゐる。叶はぬ思にくよ〳〵と、どう

せ焦れて死ぬ身なら、いつそお前の見る前で。

（ト行きかける。榮壽太夫引留め、）

榮壽　アもしお波樣、どこへお出でなされます。

お波の方　とても生きては居られぬ身、どうぞ放してたもいな。

榮壽　私ゆゑに生命までお捨て遊ばす御心なら、もう是非が御座りませぬ。

お波の方　榮壽どの嬉しいわいな。

（ト男の膝にすがつて顏をかくす。風の音雨車になり）

榮壽　モシ雨が降つて參りました。此れではどうにもなりませぬ。あなたは暫く此なる御社にてお休みなされませ。私は急いで御傘を取つて參じませう。

お波の方　日頃の願の叶つた矢先、降だす雨に濡れるとは、ほんに嬉しい辻占ぢやな。

榮壽　ドレお傘を持つて參じませう。

（ト行きかける。雨の音ます〱烈しく出羽守上手より鯉十に傘をさしかけさせ、）

出羽守　イヤ待て兩人その傘出羽守ぢか〱に差遣はすぞ。

鯉十　殿樣には物かげにて、この場の樣子とくに御承知、お波の方、榮壽太夫殿、早う御傘を頂戴めされい。

（トこれにて榮壽太夫覺悟をきめし體、）

榮壽　此の場に及び何の申譯も御座りませぬ。此の上の御慈悲にはどうぞ此のまゝ御手打になされて下さりませ。

お波の方　イヱ〱そなたを殺しては私がすまぬ。榮壽太夫に罪科は御座りませぬ。いやと申すを無理やりに、皆この私がさせた事、どうぞ此の身を御成敗なされて下さりませ。

出羽守　いさぎよく兩人とも能く申した。出羽守手づから成敗いたし遣はすぞ。

榮壽　御慈悲の程、ありがたう。

兩人　ござります。

（ト榮壽太夫お波の方いづれも合掌する。出羽守懷中より唄を認めたる謎の懷紙を出し鯉十に渡すと鯉十受取り、心得て榮壽太夫の目の前に差しつける。）

出羽守　榮壽太夫、心しづかにそれを見やれ。

（榮壽太夫懷紙を手に取り、）

榮壽　コレヤいつぞや殿樣が、御國の名花を今樣に、お作りなされし「出雲梅」。これをあの世のしるべとは。

（ト合點の行かぬ體。）

出羽守　暫時の猶豫つかはせば、余がつくりし出雲の梅の今樣に、其の方節付いたして見よ。

お波の方　シテ又二人が罪科は。

出羽守　榮壽が節付聞きし上、余が心に叶ひなば。

鯉十　御前をおそれぬ不義の科。
出羽守　許しがたき奴なれど、末頼しき藝人。むざ〳〵切つて捨てるに忍びぬ故、元より幾人と抱へ置く側女の事、お波一人暇を遣はすも惜しからず、コレ榮壽、其の唄の節付、首尾よく致せば藝に免じ、褒美にお波を其の方に。
榮壽　スリヤ節付の出來榮にて、お波の方をわたくしに。
お波の方　エヽ、神か佛か、わが君様。
（ト手を合せて拜む。）
出羽守　佛になるか鬼になるかそれも榮壽が○（ト傘を持ち變へるを道具替りの知らせ）節付次第ぢや。
（ト雨の音にて道具廻る。）
（正面二間程本庇つき常足の二重、始め簾を下してあり）上手後へ下げて丸窓。二重下の方出入の瓦塔口よき處に雪洞をつけ下手淨瑠璃屋臺常磐津連中羽織袴にて居並びゐる。下手後より折廻して四目垣柴折戸上下網代垣にて見切りをつけ都て出羽守邸茶席の體風の音にて道具留ると知らせなしに直に淨るりになる。）
淨瑠璃　〽大江戸とならぬ昔の武藏野の、尾花やまねぎ寄せたりし、張と意氣地の深川や、縁も永き永代の、歸帆はいきな送船、その爪彈の糸による、情の身さへ入相の、きぬ〳〵ならぬ山鐘も、ごんと佃の辻占に、燃るほむらの篝火や。

（トこの淨瑠璃の中よき程に二重の伊豫簾を卷き上げると清元榮壽太夫二ッ折奉書の紙を前に置き三味線を持ち節付を考へてゐる體。）
榮壽　アもうお座敷では淨瑠璃が始つたさうな。日頃から粋な遊びにいろ〳〵と御趣向なさる御前の事、話に聞けば御女中の、雪の肌にはめい〳〵に、最屓の役者の似顔をば、入墨させるといふほどの、流石變つた御氣性とて、此の身は卽座の御手打と、思ひの外のおさばきは、藝を命の取替事　もし節付のできぬ其の時は、此の身はおろか末代まで、淸元一派の名折になる事、コレヤ何としたらよからうな。
上るり　〽せめて恨みて玉章を、薄墨にかく雁の文字、女子の念も通し矢の、届いて今は張よわく、いつか二人が仲町に、しつぽり濡るゝ夜の雨。
（ト榮壽色々苦心しても思ふやうに節付出來ぬ體。）
榮壽　あれは立川焉馬翁の巽八景、節付は先代の文字太夫さん。
（ト三味線を下に置き、）
一生の大事の大事と思へば氣ばかり急立ち、いつもは心に浮ぶ新手さへ、今日にかぎつてどうしたやら、トント思案がつかぬわい。
上るり　〽堅い石場の約束に、咄はつもる雪の肌、解けてう

れしき胸の雲、吹きはらしたる晴嵐は、しんきしん地ぢやないかいな。
あの唄の言葉に引替へ、此の胸は亂れる雲の七重八重、滿座の中にて恥かくよりコレヤいつその事今の中。
上るり〽洲崎の浦の浪こさじと、誓ひし事も有明の、月の桂の男氣は、さだめ兼ねたる秋の空。
人の見ぬ間に奧庭の、あれなる井戸か池へなり（トきつと覺悟をきめし體にて手を合せ）父上はじめ皆々樣、先立つ不孝は御許しなされて下さりませ。
（ト榮壽太夫平舞臺へ下りかけると富本豐前掾二重瓦塔口の襖をあけ）
豐前掾　榮壽殿、しばらく〳〵。
榮壽　そなたは富本豐前掾、どうしてこゝへ。
豐前　最前より仔細はかげにて聞きました。以前は兎も角、和睦の盃致した上は、助け合ふのが互のよしみ、こなたが節付の出來ぬ手は、白髮頭の年役に、この豐前掾が今の中ソツとお教へ申さう。
榮壽　スリヤ此の身の難儀をば。
豐前　コレ聲が高い。人に知られたらこなたの恥辱。耳をおかしなされ。
榮壽　豐前どの、御恩のほどは生々世々、お忘れ申しは致しませぬ。

上るり〽だまされたさの眞實に、見下されたる櫓下、うたがひ晴れし夕化粧、目もとに照す紅の花、幾代ちぎらん諸白髮、浮名辰巳の八景と、その一節を立川の、流を筆に殘しける。
（ト豐前掾節付を傳授する事よろしく淨瑠璃の三重にて幕。）

二幕目　淸元延壽齋內の場

一淸元延壽齋
一同　榮壽太夫
一弟子　志喜太夫
一弟子　三人
一仲間　一人
一延壽齋女房お梅
一遊び人　五郎助
一御家人　吉之助
一延壽齋娘お柳
一女弟子　お釜
一同　お仙

本舞臺一面の平舞臺薄べりを敷き、正面上手三尺緣起棚、其下地袋戸棚、腰張の壁鴨居の上に名取弟子の札

幾枚もかけてあり。其の下三味線掛に三味線三四挺かけ、一間出入の暖簾口、長火鉢桐の見臺煙草盆などよろしく、上手一間の屋臺出入の障子、前側竹格子の窓風鈴を下げ此の前小庭の心。植木鉢など置く。下手菱に三ツ柏の紋を書きし水口の障子、いつもの處門口。凡て本石町三丁目清元延壽齋内の體。長火鉢の前に弟子志喜太夫年寵の拵、小本を讀んでゐる弟子長助女弟子お仙その向に住ひ、少し離れて弟子三吉七藏の兩人見臺に向ひ女弟子お釜三味線を彈きゐる。その見得稽古の唄にて幕明くト お釜三味線を下に置き、

お釜　折角さらつてやらうと思つたけれどお前達はてんで人を馬鹿にしてちつとも稽古に身を入れぬから私はもう御免だよ。

弟子三吉　ぼんやり遊んでゐるのも退屈故忘れた節をさらつて貰はうと思つたらイヤたいそうな師匠振り、お前のやうなぼんぼこ三味線ぢや此方から願下げだ。

弟子七藏　おいらも願下げにしやうや。調子はづれの三味線でさらひつけると折角覺えた此方の節まで崩れてしまふわ。

お釜　默つてゐればいゝ氣になり、ぼんぼこ三味線だの調子外れだのと、それア一體誰に云ふのだえ。

三吉　誰でもねえお前の事さ。

七藏　調子外れだから調子外と云つたのがお氣にさはつたらもつと修業するがいゝや。

お釜　お前達に餘計な世話を燒かれる覺えはない。人のことを調子外れだの何だのと、どこを押せば、そんな音が出るんだ。お前達は清元なんぞ習ふより、でろりん左衛門でも習ふがいゝ。

三吉　おいら達がでろりんならお前は何だ。小意氣な清元の師匠にでもならうといふなら、襟はさて置き雁首から取替へて來なせえ。

七藏　狆がくしやみも宜しくといふ御面相ぢや清元が泣いて仕舞ふわ。

お釜　えゝもう、覺えてゐやがれ。

（トお釜撥にて三吉の頭を撲る。）

三吉　あいた／＼。こんな大きな瘤を拵へやがつた。口で云つたのに手出しをする奴があるか。この尼ツちよ。

（ト撲返す。お釜大聲に泣だす。女弟子お仙、弟子長助引留める。）

弟子長助　かう／＼どうしたもんだ。お前方は寄ると觸ると喧嘩ばかり、まア靜にしなせえ。

三吉　つい此尼ツちよが手出しをしやがるから鳥渡懲してやつたのさ。泣かねえでも濟む事だ。

お釜　それだと云つて、餘り人を馬鹿にするからさ。

（ト矢張大聲に泣く。）

志喜太夫　お互に冗談が過ぎるからだ。奥へ聞えたら皆が叱られねばならぬ。いゝからもう泣きなさんな。

お仙　女は女同志、皆な男が悪いにきまつてゐる。なにも泣く事アありやしないよ。

志喜太夫　お互に稽古場で物爭ひは見ッともない。お釜さん、お前はお仙さんと一緒にあつちへ行つたがよい。三吉や七藏には後で私が意見をしてやるわ。

お釜　ほんとに思出しても憎らしい野郎達だ。

三吉　泣面をしながら口のへらねえ尼ッちよだ。

お釜　エ、また憎まれ口を。

お仙　まア／＼勝手に云はして置けばいゝぢやないか。

（トお仙お釜を引立て暖簾口へ這入る。）

七藏　面白くもねえ。とんだ大騒をさせやがつた。ドレそろ／＼出掛けるとしやうぢやねえか。

三吉　家元が芝居で出語をしてゐると二丁町へ行つても此方とらまで肩身がひろいやうな氣がすらア。

長助　さうよ同じ藝人でも常磐津や富本見たやうな野暮なものをやる奴等の氣がしれねえ。

（ト格子戸を明けて出る。）

志喜太夫　かう／＼お前方また途中で喧嘩をしなさんな。此の間のやうな事があるとつまりは師匠の名の出る事、よく氣を附けなくッちやいけねえぜ。

三吉　へい／＼畏りました。何も私(わつし)だつて喧嘩したくは有りませんが此間はつい隣にゐた野郎が、いやに富本の事ばかり譽めやがつて、淸元の事を悪く云やアがるから、つい積にさはつたんでムいます。

志喜太夫　それもつい此頃赤坂のお屋敷で中直りのお盃があつたといふ事だから、お前達は何があつても決して口を出しなさんな。

長助　私が呑込んで居り升から大丈夫でムり升それぢや行つて參ります。

（ト皆々捨臺辭よろしく下手へ這入る。）

志喜太夫　やれ／＼世話のやけた野郎達だ。三味線は出しッ放し、そこいら中はよごし放題、若え者には困つたものだ。

（トその邊を片付ける。端唄になり向より弟子吉之助ムシリ髷、縞の着流し、大小、御家人の拵にて出て）

吉之助　藝に浮身をやつし形、好きな道とは云ひながら、かうして毎日本所から、稽古通ひの身の上は、やれ／＼御苦勞な事だなア。こゝは戸塚の石高道でもムるめえ。どれ急いで行きやせう。（ト門口を開け）　志喜太夫さん今日は大層靜だな。

志喜太夫　オヤ吉之助さん、さア／＼お上んなさいまし。

野郎達は唯今中村座の曾我祭を見に行つたんで、やつとせいせいした處でムい升。

吉之助　家元の出語があるせゐか、芝居は毎日大入だとの評判。私も稽古に身を入れて一度芝居へ出て語つて見たいものでムい升。

志喜太夫　好きこそ物の上手なれで、此の頃はめき〳〵と御上達。家元さんも大層ほめておゐでゝムいました。

吉之助　嘘にもさう云はれると又一倍身をいれなければ成りませぬ。だが何に限らず藝事は深入りをするほど六ヶ敷もの。時々はいやになつてしまひますよ。

志喜太夫　藝人になつても手前のやうに此の年まで師匠の厄介になつてゐる樣ぢや仕樣がねえが、お前さんなんぞは御身分と云ひ、咽喉と云ひ、若い盛りの男振り、鬼に金棒と云ふものさ。定めし方々の娘ッ子がうるさく騒ぐ事だらう。さう云へば家のお柳さんが何かお聞申したい事があると云つて捜してお居でゞ御座いました。

吉之助　それぢや大方昨日約束した新板の草双紙の事であらう。忘れずに持つて來たから後で渡してやりませう。時に家元さんはもう芝居へお出掛けで御座りますか。

志喜太夫　イエまだ奥におゐでゝ御座います。一寸お知らせ申して參りませう。

（ト暖簾口へ這入る。吉之助三味線を取上げ、）

吉之助　中年の稽古といふやつはどうも甘く行かぬものだからしてゐる中昨日習つた處を鳥渡さらつて置かう。

（ト絲をかけかへ調子を合せなぞしてゐる中、上手障子より娘お柳つぶし島田はでな布片をかけ、黒繻子の耳を見せたる襟付の衣裳。凡て意氣な好み。そつと後より吉之助の眼を押へる。）

吉之助　いたづらをするのは誰だ。お仙坊だな。お仙坊でなければム、肥ッちよのお釜に違えねえ。

（トおさへたる手先をさぐり、）

いやお釜にしてはコリヤ大分きやしやで弱か過ぎるわ。この弱かな手の樣子では、肌はさぞかし絹羽二重、どりや一寸觸つて見ませうか。

（ト袖口へ手を入れる。此の時、）

榮壽　エヘン〳〵。

（ト咳嗽拂ひをする。兩人驚き左右へのき、）

吉之助　今日はいゝ鹽梅に雨が降りませぬ。

お柳　ようお出でなされました。

（ト兩人そら〴〵しき挨拶の中榮壽太夫着流にて出で、）

榮壽　毎日御遠方からようお出でなされます。然し芝居の明いて居ります中は、いつもゆつくりお稽古もして上げられず、お氣の毒でなりませぬ。

吉之助　いやもう其の御心配には及びませぬ。からして日

に一度づゝ上りさへ致せば氣がすむので御座ります。芝居へ御出勤の刻限ならお構ひなくお出でなさりませ。

榮壽　いえ手前共は大切の所作事へ出ますだけ急ぐには及びませぬ。親父もまだ二階に居りますから出がけ前に久振り、今日は手前も御一緒に何かおさらひを致しませう。

吉之助　それは／＼願うてもない仕合。それでは北洲か梅の春でもさらつて頂きませう。

榮壽　さ、二階へお出でなされませ。

（ト吉之助立上りながらそつとお柳に目くばせして懐中の草双紙を下に置き榮壽太夫諸共暖簾口へ這入る。お柳草双紙を取上げ嬉しきこなし。）

お柳　こりや昨日お頼みした新板の草双紙。大方其の場かぎりのお世辭と思うたに、約束たがへず持つて來て下さるとはほんに親切なお人ぢやなア。（草双紙を見て）この美しいお侍は吉之助さんを生寫し。そしてこの娘御はうれしさうな顔をして唯つた二人ぎりで人もあらうに此の取亂した巫山戲樣。きつと吉之助樣にもこのやうな美しい何處ぞの娘御が惚れてゐるに違ひない。エ、腹の立つ事わいなア。

（ト草双紙の繪に見惚れて腹立しく投付ける。其間より手紙落る。）

草双紙の間から手紙が出たが、表書はどうやら男の手、戀しい方さまゐる、こがれるものよりとしてあるばかり。名前は誰れとも分らぬけれど、コリヤ大方吉之助さんが何處ぞの娘にやる手紙に違ひない。エ、モどうしたらよからうわいなア。後で知れたら知れたまで、構ふ事はない鳥渡內所で讀んでやらうわいな。

（トあたりへ思入あつてお柳手紙を開き讀む。此の處二階の稽古三味線を聞かせる心にて、上調子を入れし誂の合方。）

お柳　一筆しめしまゐらせ候。戀しいお顔は毎日見て居候得共、何分人目の多き稽古所の事、今だに一度もしみ／＼とお咄し致すいとまもなくたゞ／＼お柳さま戀しとばかりこがれ居り候○オヤオヤこりや少し當が違うて來た。たゞただお柳さま戀しとばかりこがれ居候。このお柳樣といふのは私の事か、それとも同じ名前の見知らぬ人か、まア氣を落付けて最少し讀んで行つたら分るであらう○この文とても人目をいとひ候間つもる心のたけも長々しくは認めかね候切なき心の中幾重にも御察し下され度候。今日といふ今日まではいろ／＼に我身をたしなめつゝしみ居候得共、この事ばかりは神佛の力にも及びがたき心の亂れ今は解く由も無之候儘今夜四ツの鐘を合圖にそつと裏木戸へ忍び居候間一生の首尾神かけて幾重にも念じ入候吉之助よりお柳さま。コリヤ矢張私への艶文だつたわい

な〇今夜四ツの鐘を合圖にそつと裏木戸へ〇それでは今夜いよ／＼日頃の願が叶ふのか、あゝもう嬉しいやら恥しいやら今から胸がどき／＼して來たわいな。（ト湯呑の茶を呑み胸を撫で）これといふも日頃信心するお不動樣のおかげであらう。實の處は私の方から今日云出さうか明日云出さうかと一人でくよ／＼思ひはすれど、女の口から恥しく云出しかねてゐた處渡りに船のこの手紙これがほんとの合槌ぢやわいなア。どれ不動樣へ鳥渡お禮を申上げませう。

（ト上手緣起棚の前に坐り念じる。上調子入二階の三味線又一くさり聞かせてよき程に向より遊人五郎助、頰冠着流三尺帶にて出で花道にて鳥渡三味線を聞くこなし。）

五郎助　曲る横町の端れから手に取るやうな遠音の三味線。外ぢやア聞かれぬ音〻だと、思へばそれも三年前。月日のたつのは早いものだ。

（ト舞臺へ來りあたりの樣子を窺ひ思入あつて、）

五郎助　御免下さいまし。御免下さいまし。

お柳　はい。どなた樣で居らつしやいます。

（ト娘お柳門口を明け五郎助の樣子を見て氣味惡きこなし。）

五郎助　もしお柳さんぢやムいませんか、大層きれいにおなんなさいましたねえ。こんな見すぼらしいなりをして居りますからお見忘れなすつたかも知れませぬが、どうぞ私の面を御覽なせえまし　三年前破門をされる其迄は、お家のものも同樣に御厄介になつて居りました五郎助でムります、

（ト頰冠を取る。）

お柳　どこやら見た樣なお人だと思つたら賭博の好きな。

五郎助　へえ、身上のわりい五郎助でムります。まア眞平御免なすつてお呉んなせえまし。（ト内へ這入り）お柳さん、お氣の毒だがどうかお湯なり水なり一杯呑ましてお呉んなせえまし。咽喉が渇いてたまらねえんでムいます。

お柳　それは安い事、今お茶を入れて上げやうけれど、斷りなしで家へ上つては私が後で叱られるから、お茶を呑んだら早く歸つておくれ。

五郎助　お柳さん實は折入つて師匠にお目にかゝりお詫をしたいと思つて上つたのでムります。お柳さん。どうぞお前さんから師匠へお願ひ申して下さいまし。

お柳　お前の咄はとうから父さんや兄さんから聞いてゐる故、そのやうな事は云はれませぬ。お茶を呑んだら早う歸つてお呉んなさい。

五郎助　身すぼらしい風體をして居りますが何も御無心に

參つたのぢやムりません。先非を悔いて改心なし、お詫を申しに來たの故、師匠のお目にかゝれずば、若旦那なり内儀さんなり、どうぞ御取次をなすつて下さいまし。

（ト此時奥よりお柳〳〵と呼びながら延壽齋女房お梅元服世話女房の拵へにて暖簾口より出る。）

五郎助　これは〳〵いゝ處へ内儀さん。お久振りに五郎助がお詫びを申しに上りました。

お梅　折角の事なれど、一たん弟子師匠の緣を斷つたお前さん。兼々師匠からの云付故御挨拶は出來ませぬ。お氣の毒だが早う歸つて下さい。

五郎助　それもこれも身から出た錆ゆゑに、誰を怨むわけにも行きませぬが、まア内儀さん、一通りお聞きなすつて下せえまし。（ト合方になり）子供の時からお世話になりどうやらかうやら藝人になれた御恩も上の空、一六四九の稽古日より一六勝負に三味線の四ツ乳の皮から身の皮まで剝いだ揚句は根性も一の絲より太くなり、惡事は段々二上りと身のほど知らぬ撥當り。たうとう諸方を喰詰めて漸く悟る本調子、心の駒を置きかへて、一言お詫が云ひたいばかり。かうしてのめ〳〵やつて參りました。お目にかゝれるか掛かれぬか、どうぞおかみさんから、師匠へ一言お咄しなすつて下さいまし。

お梅　それほどたつてのお賴みなら、無理に歸れとも云はれぬ故お柳や、私が云ふよりもお前からそつと父さんに申上げて見たがよい。

お柳　それでは私から父さんに。

（トこの時奥より清元延壽齋の聲にて）

延壽齋　いや申すに及ばぬ。延壽齋がたつた今追歸してやるわ。

（ト延壽齋坊主かつら好みの衣裳、大きな煙草入を下げ、暖簾口より出でよき處に住ふ。）

五郎助　三年見ぬ間に家元には、いつか頭髮も圓々と、お剃しなされた其の御樣子。それとは違ひ此の五郎助、胡散な風をお目にかけ、面目次第もムりませぬ。

延壽齋　一たん破門をしたからは、あかの他人のお前から、家元だの師匠だのと云はれては迷惑千萬コレア少しばかりだが以前のよしみ、コレを持つてさつさと歸んなさい。

（ト紙包を五郎助の前に投げてやる。）

五郎助　御親切有難うはムりますが、以前と違ひさもしい量見で、御無心を申しに參つたのではムりませぬ。先程からも内儀さんにお願ひ申して居ります通り、先非を悔いて五郎助が、魂入れ替へ改心なし、お詫びを申しに參つたのでムります。どうぞ師匠御勘辨なすつて下さいまし。

延壽齋　お氣の毒だが其の事なら、きつぱりお斷りを申します。

五郎助　いかやうにもお詫を申上げますれば御弟子入の詫事が、この場ですぐに叶はずば、權助なり、飯焚きなり、どんな事でもかまはぬ故、どうぞ師匠の軒下へ犬も同樣、お置きなされた其の上で、この身の改心、とくとお見屆けなすつて下さりませ。

延壽齋　エヽ、一言云へば分つた話だ。これ五郎助。お侍にはお侍の掟がある。藝道には藝人の作法があるのを承知の上、それをば破つた横着者誓言立てゝ清元の札下になりながら、そつと他流の富本へ、金の爲とは云ひながら、此方の祕傳を内々で知らせやうとした處、早くもそれと感づかれ、惡いたくみの破傘、杖のしもとを受けぬ間と、風を喰つてこの三年、ふッつり姿をかくしてゐたが、又もやひよつくり、新手の惡事を思立ち、恩をば仇でかへす計略。其の甘口にやア乘せられねえ。

五郎助　さ其のお腹立は御尤、酒と賭博に身を持崩し、金に困つた其の矢先、つい富本の連中にそゝのかされ惡い事とは知りながら、金が欲しさのさもしい量見、破門をされた其の後は諸處方々を喰詰めて、めぐる因果の街道筋盲目同樣門付に、旅から旅の渡鳥、ひよんな塒のおッこちに惡い病を引受けて、聲もたうとう枯尾花、招ぐ人なき武藏野へ憂き節しげき竹の杖、縋つてやう〳〵來ましたが思案筑波の北風に、案山子同然手足も出せぬ身の仕末どうぞ許さん。この通りお詫ひを致します。どうぞ師匠へお賴みなされて下さいまし。

お柳　父さんあの樣に後悔をしてゐる故。

お梅　もう勘辨しておやりなされませ私達もとも〴〵にお願申上げます。

（トお柳お梅氣の毒だといふ思入。）

延壽齋　いやお前達の口を出す處ぢやない。外の事なら兎も角も他流のものに一流の祕傳を賣らうとした人非人。何と云つても詫は叶はぬ。

五郎助　これほどまでに謝罪つても、矢張お詫は叶ひませぬか。

延壽齋　眞實改心して謝罪るなら、廻りッくどい云譯せずと、何故打明けて有體に其の身の恥を云つてしまはねえのだ。

五郎助　何この身の恥。

延壽齋　これまで云つても、まだ白ばッくれるつもりか。これ五郎助袖のとれかゝつたお主の二ノ腕ちつと見ていものがある。

五郎助　エ。

延壽齋　卷くり上げては見せられめえ、それと察した此の乃公の眼よりも黑い大きな入墨。賭博か盜みか知らねえが身體の汚れた惡人は名も清元の弟子には出來ぬ。足元

の明い中、その金持つてさつさと歸んなせえ。
五郎助　消しても消えぬ二の腕の罪科をそれと見られたからは、もうお詫びはしますめえ。これア其方へお返し申ます。
（ト横を向いて煙草を呑む。この時榮壽太夫志喜太夫暖簾口より出で）
榮壽　コレ五郎助折角父さんの御志、御禮をいつてお歸りなさい。
五郎助　若旦那、わッちや御無心に上つたのぢやムいませんo お詫びが叶はなければ叶ふまで幾日でもお待ち申して居ります皆さん御免なせえ。
（ト尻をまくつて胡坐をかく。）
延壽齋　歸れといふに歸らずば突出してしまふぞ。
五郎助　さア突出しておくんなせえ。出羽樣始め方々の御屋敷へ御出入の、其の淸元の弟子分にや立派な科人がついてゐると、觸れて歩けばそつちの名折だ。さア師匠突出しておくんなせえ。
延壽齋　エ、面倒な。
（ト立ち掛ける。榮壽太夫始め皆々留めるを宜しく）
榮壽　お怪我が有つてはなりませぬ。私がいゝやうに申しませうから、まアあなたは下にお出でなされませ。
（ト五郎助に向ひ）

コレ五郎助いつも短氣な師匠故、兎や角云つては事が荒立つ。後でゆつくり私がお詫びをして上げやうから今日は一先これを持つておとなしく歸つてお吳んなさい。
五郎助　錢を貰ひに來たんぢやねえ。
（ト紙包を手荒く投つける。）
志喜太夫　これさ五郎助、若旦那に向つて何を言ふのだ。高の知れた乞食野郎叩き出すぞ。
（ト立ちかゝるを五郎助向へ突飛ばす。志喜太夫又立ちかゝるを五郎助に頭を打たれ暖簾口へ逃げ入る。皆々總立ちとなる。此の時御家人吉之助出で五郎助をれぢ伏せ。）
吉之助　譯は知らねど武士たる此身が、中に這入つた上からは、どこまでも身が相手ぢや。
（ト手をねぢ上げ格子外へ突き出し）
五郎助とやら何と云分あるか。
（ト五郎助起き上り打掛らうとして吉之助の姿を見、都合のわるい奴だといふ思入。）
五郎助　藝人ばかりと思ひの外。
吉之助　何と、
五郎助　ナニまたお目にかゝりませう。どうもお八釜しうムりました。
（ト無念の思入。花道にてきつと見得。尻をまくつて

向へ這入る。）

お柳　吉之助さんがお出でなばかりに、さすがの惡黨も尻尾を捲いて逃げて行つたわいな。

榮壽　遊藝がお好きな方には似もつかず見事なお腕前、失禮ながらびつくりいたしました。

吉之助　日頃惰弱の身の上も腰にさしたる刀の手前、此の位の手練は致して置かねばなりませぬ。

延壽齋　何に致せ此の場の難儀お禮の申樣もムりませぬ。

（トこの時下手より三平仲間の拵、狀箱を持ち直ぐに門口を明け。）

三平　赤阪のお屋敷からお使でムります。これを家元へお上げなすつて下さいまし。

お梅　はいゝ。どうも御苦勞でムりました。

三平　御返事には及ばぬといふ事でムります。

お梅　どうも御苦勞でムりました。

（トお梅祝儀を渡す。仲間禮を云つて下手へ入る。）

延壽齋　お屋敷のお波の方が昨日一先宿へお下りなされ、して今日は內々にてお屋敷の和泉源十郎樣も御一緒に芝居の御見物。堺町のお茶屋にてお前に御相談があるとのこと。

榮壽　それではいよ〳〵緣組の御相談がまとまつたのでムりませう。まるで夢のやうで御座ります。

お柳　それでは兄さんの處へいよ〳〵お屋敷のお波の方がお嫁入なさるのか。エ、羨しい。私も早くそのやうに。

（ト吉之助と顏を見合せ）早くお目に懸りたうムります。

吉之助　何に致せ此の上もない譽れの御緣組、今よりお祝ひ申上げます。

（ト皆々思入よろしく時の鐘になる。）

お梅　もうそろ〳〵芝居の刻限、樂屋から人の來ぬ中、支度をなされたが宜しうムります。

延壽齋　もう八ツ時どれ出掛けるとしやう。

（トお梅延壽齋の後より道行振を着せかけお柳は兄榮壽へ羽織を着せる。志喜太夫ぱつち尻端折小包を背負ひ暖簾口より出で）

志喜太夫　お支度が出來ましたら參りやせう。

（ト雪駄をそろへて門口を出る。榮壽太夫を後に延壽齋門口を出やうとして輕くつまづき）

延壽齋　コレヤ雪駄の鼻緒が。

榮壽　雪駄の鼻緒が切れましたか。それでは私のとおはき替へなされませ。だが、まだ眞新しなその履物。

お梅　何となく氣にかゝるこのさい先。どうやら空も。

延壽齋　つまらぬ事を氣にかけるが女の癖。入梅だから曇つて居るのだ。

お梅　それでもどうやら途中にて。

延壽齋　降つたら傘を。

（ト言ふを木のかしら）

延壽齋　借りるばかりだ。

（ト下座にて清元喜撰の「傘を」といふ唄を聞かせ拍子木幕。）

三幕目　堺町芝居茶屋山本屋店先の場
和國橋殺しの場

一清元延壽齋
一松平出羽守（この二役一人にて勤る）
一清元榮壽太夫
一富本豐前掾
一御家人　吉之助
一遊び人　五郎助
一富本佐太夫
一出羽守家來源十郎
一同　金之丞
一番頭　忠藏
一子役　千吉
一お波の方後にお波
一延壽齋娘　お柳
一芝居茶屋女房お花
一芝居見物の客、茶屋女、茶屋男、駕籠舁、夜蕎麥賣、出羽守駕籠わきの侍

本舞臺上手三間常足の二重板ばめの蹴込。二重正面出入の大阪格子。下手三尺暖簾を下げ此の内土間。茶屋の名書きたる大提灯。いろ／＼の飾物を見せ軒先に暖簾提灯を下げ、平舞臺に床几。下手大柱の處出入の露地口、これより向一面繪こゝろにて茶屋つゞき中村座の櫓を描きし灯入の書割。凡て堺町芝居茶屋山本や店先の體。床几に仕出し四五人芝居見物田舍の客の拵。番頭忠藏案内者の拵へ。茶屋の女房、茶屋の女中二人。送りの男二人佇みゐる。芝居打出しの太鼓の音にて幕明くと舞臺奥より仕出し大勢思ひ／＼のこしらへいづれも芝居の歸りといふ體にて賑かに上下花道へとわかれて入る。

番頭忠藏　お内儀さん、どうもいろ／＼お世話でムりました。旦那方も大層面白かつたとお喜びでムります。

茶屋女房　お構ひも致しませんで申譯がムりませぬ。それでは又どうぞ替り目に旦那方をお連れ申して下さいまし。

番頭　それでは皆さん。そろ／＼出掛けると致しませう。

田舍客　出掛けべい／＼。

同じく　時に忠藏どん、見物ついでに今夜は吉原も見物し

たいものだな。
同じく　芝居から吉原とは有難い。
同じく　御苦勞だが、案内さつしやれ。
忠藏　はい／＼畏りました。それでは直に角出掛けると致しませう。お忘れ物のないやうにお願ひ申します。
茶屋女房　どうも有難うムります。お氣をつけてお出でなされませ。
（ト皆々捨臺詞よろしく右の鳴物にて茶屋の男二人提灯をつけ付添ひ向うへ這入る。合方にて正面奥より富本佐太夫荒い縞の紋付着流し藝人のこしらへにて出で）
佐太夫　もしお内儀さん、家の師匠をお見掛けなさりはしませぬか。
女房　誰かと思つたら富本の佐太夫さん、何か御用かい。
佐太夫　家元さんに逢ひたいと思つてさがしてゐるのでムいます。
女房　家元さんならさつき店の前をお通りなさいました。
佐太夫　左樣で御座いますか。葺屋町の方から心あたりを四五軒さがし歩いて來たんでくたぶれてしまひました。おかみさん鳥渡一服お火を拜借いたします。
女房　さア／＼ゆつくり休んでおゐでなさい。其の中にはお歸りがけに又店の前をお通りなさるかも知れませぬ。
佐太夫　左樣でムいますか。それぢやお內儀さん、暫くこゝでお邪魔を致します。
女房　私は何かと奥に用事もあるから、遠慮なく休んでおゐでなさい。
（ト女房内へ這入る。合方になり）
佐太夫　今夜葉屋で聞いた噂さでは、いよ／＼出羽樣のお妾が清元葉壽太夫の女房になるといふ評判だが、萬一それが眞實ならこれから先は清元が、いよ／＼大名方を傘に着て威張り散すに違えねえが、此方の家元はあの通りのお人好し。どう云ふ御量見でおゐでだか、今夜は是非にもお聞き申さにやアならぬ。
（ト佐太夫思入あつて煙草を呑みゐる。右の合方にて上手より序幕の富本豐前掾好みのこしらへ、子役一人提灯を持ち付添ひ出て店先へ來かゝる。）
佐太夫　もし師匠、佐太夫でムります。方々お搜し申して居りました。
豐前　今時分私をさがしてゐたとは、何ぞ急な用でもあつたか。
佐太夫　ちつとお噺し申したい事がムいます。暫くお掛けなすつて下さいまし。
豐前　大層改つた物の云樣。噺しといふはどんな事だ。
佐太夫　外の事でもムりませぬ。富本一流の大事にかゝは

る今夜の評判、もう御存じでムりませう。

豐前　またしても大業なお前の咄し。そりや大方出羽樣のお姿が近い中に木場の成田屋を親元に頼み、淸元榮壽太夫と緣組をするといふ噂であらうが。

佐太夫　いかにも左樣でござります。

豐前　其事なら何も此方の流派にかゝはつた話ではない。

佐太夫　モシ師匠、一體あなたはどういふ御考で被居います。今までとても淸元は藝人仲間に團十郎、お屋敷方には出羽樣を後楯、日に增し羽をのす折も折、いよ〳〵お波の方が淸元へ緣組といふ噂が立てば、人氣は一倍引立つて、三座の淨瑠璃を始めとし山王神田の御祭禮まで、淸元ならでは夜も日も明けず、富本節は追々に衰微するのは知れた事、何と師匠うつかりしちやア居られませぬ。

豐前　うつかりしては居られぬと云つた處で他家の緣組。傍から何とも申し樣がないではないか。

佐太夫　さう師匠のやうに何も彼も打捨つてお仕舞ひなされば、それまでの話で御座いますがお互に華美を競ふが藝人の意地。見す〳〵此方の流派の邪魔になる淸元の繁昌を、此の儘默つて見ちやア居られませぬ。モシ師匠、手前の胸にや所存が御座いますから、どうぞ何にも仰有らずおまかせなすつては下さりませぬか。

豐前　次第に寄つたら任せもしようがマア佐太夫どういふ事だか打明けて咄しなさい。

佐太夫　そんならお咄し申しますが、師匠。どうかお留めなすつて下さいますな。先刻噂に聞けば今夜お波の方がこの山本屋の二階にて、延壽齋や榮壽太夫に出逢ひ何かの相談をすると云ふ咄し。何かに事よせ喧嘩を吹かけ騷ぎを大きくして仕舞へば、相手方はお大名、世間の手前を憚り一先づ緣組は延びるが必定。流派の爲めには憚りながら命も惜しまぬ手前の覺悟、何卒師匠、手前にお任せなすつて下さいまし。

豐前　其れ程までに流派を思ふこなたの心、豐前掾家元の身として淚のこぼれる程嬉しくは思へども穩かならぬ其方のたくみ。諸事愛嬌を旨とする藝人には似合しからず。また淸元この度の緣組についてはこの豐前明けては云へぬ事ながら、情は人の爲めならず影ながら惠をかけた次第もあれば、仔細は追々分るであらう。この豐前がある中は老木ながらも富本の櫻にちなむ櫻草、花の色香に變りはあるまい。思過しをせずと見て見ぬふりで打捨つて置きなさい。

佐太夫　それぢやと云つて、見す〳〵此方の爲めにならぬあの緣組。默つて居られる仔細があらば、どうぞ師匠、一言手前にお聞かせなすつて下さいまし。誓文かけて他言はいたしませぬ。

豐前　イヤ今こゝで云はずとも自然と後で分る事。いゝから默つて見てゐなさい。

佐太夫　スリヤこれほど迄に申上げても、仔細も聞かせず賴みにならぬ氣安めばかり。(ト覺悟の思入あつて)もし師匠、どうあつても其の譯をお聞かせなくばもう宜しうムります。其の代唯今弟子師匠の緣をお切りなすつて下さいまし。

豐前　ナニ弟子師匠の緣を切れ。

佐太夫　はい弟子師匠の緣を切つて下さいまし。こなたのやうな意氣地のねえ師匠についてゐちやアうだつがつきません。現在中村座の晉我祭も今年は淸元に當りを取られ日々景氣のわるくなる流派の末も思はずに、相手は大立物の團十郎に十八萬石の御大名が後についてゐるので恐くなり、手足も出ずにおめ／＼と默つてゐるやうな家元なら、弟子の方から御免を蒙ります。一寸一筆御面倒ながら破門の證文をおかきなすつて下さいまし。こゝに矢立と紙がムい升。

豐前　お主がたつての所望なら是非もない。イカにも書いて進ぜませう。コレ三吉あかりを見せてくれ。

(ト三吉提灯をかざす豐前掾書終りて佐太夫に渡す。)

佐太夫　ヘエどうも御面倒で御座りました○ナニ／＼富本佐太夫事仔細有之當人も承知の上富本節一流破門の上名前取上候右後日の爲め一札如件文政八年五月二十六日富本節家元富本豐前掾○ありがたうムい升。コレさへあれア何をしやうが……イエ長年御厄介になりました。御緣があらば又お目にかゝります。

(ト下手路次口へ入る富本模樣の獨吟になり、豐前掾思入あつて)

豐前　何事も流行すたりは浮世の常。外記がすたれば土佐起り、土佐がすたれば半太夫。六十年の此の年月、思へば長き絲竹の、道の來し方見返れば、土手の春草櫻草、踏まれて今は初夏の、若葉時知る三ッ柏。血氣に早やる門弟に見限られるも時節柄、雨持つ皐月の空模樣、またもや變らぬその中に、どれ出掛けるとしよう。

千吉　お師匠樣、昨夜降つた雨上り、道が惡うムいますからお氣を付けなされませ。

豐前　子供の時から幾十年通ひなれた芝居町。いくら老いぼれても足元は大丈夫だ。

(ト右の獨吟にて向へ入る。以前の佐太夫下手露地口より出で見送り、思入あつて)

佐太夫　弟子の身分で師匠に向ひ、緣を切らうと亂暴な云立したのも流派の爲め。それとも知らず悄然とお歸りなされた師匠の御樣子、すまぬことではあつたれど赤の他人になつて了へばもう安心。師匠に難儀のかゝる氣遣は

ない。どれ此れからは死ぬも生るも此方の勝手、延壽齋の來るのを待ち受けて何とか喧嘩を吹かけてえものだ。

（ト獨吟の上げにて正面奥の方へ行きかける。前幕の五郎助出で突當る。）

佐太夫　えゝ吃驚した。氣をつけて行け。

五郎助　手前こそ氣をつけろい。オヽお前さんは富本の佐太夫さんぢやねえか。

佐太夫　さう云やアお前はいつぞや淸元の秘傳を賣りに內へ來た五郎助ぢやねえか。大層替つた身形だなア。

五郎助　かうなつちや仕樣がねえ。實は淸元の方はあれッきり破門になつたを幸ひに、諸所方々うろついて居たけれど、何處も彼處も喰ひつめて、せう事なしに元通り詫を入れやうと思つた處、今日も今日とてこッぴどく追出されてしまつたので、實はいま／＼しくつてならねえ處だ。佐太夫さん、流派の事で何か又御用があるなら禮は入らねえ。うんと働かしてお呉んなせえ。

佐太夫　いゝ處で出合つた。乃公も今ぢや富本にや緣を切つた身體だが、ちよつと賴みてい事がある。其の邊で一杯やりながら相談しよう。

五郎助　さうか。何しろ一杯やれるたア有難てい。どこへでも行きやせう。

（ト兩人下手露路口へ這入る。流行唄になり茶屋男一人提灯を持ち後より序幕の侍源十郎淸元延壽齋正面より噺しながら出る。）

源十郎　いつ來ても吉原と此處ばかりは別世界だな。

茶屋男　左樣で厶ります。兩側に竝んだお茶屋の飾物、見通しは仲の町よりも餘程綺麗で厶ります。

（ト茶屋の床几にかける。女房內より出で。）

女房　お歸りなさりませ。大層御ゆつくりで厶りました。

延壽齋　曾我祭の景氣を見にと葺屋町から樂屋新道の方までずつと御案內申しました。

源十郎　いや中々の賑ひ芝居の狂言よりも又格別で厶つた。

女房　それは／＼嘸おくたぶれで厶りませう。裏二階へお座敷を拵へて置きました、御ゆるりお休みなされませ。

源十郎　榮壽太夫にお波樣も其の中後からお出でゝあらう。どこで待つのも同じ故それでは一先づ二階にて休むと致さうか。

延壽齋　さお先へお上りなされませ。

（ト皆々這入る。右の流行唄にて榮壽太夫、お波の方頭巾を冠り正面奥より出で。）

お波の方　二人とも粹をきかし先へ行つて了つた故、後からかうして手を引合ひ、芝居のはねた堺町、夜風にふかれて歩くとは、ほんに嬉しい仲ぢやわいな。

榮壽　思へば不思議な二人が仲。生命まで無いものと思ひの外、そなたは妾も町方の女になつて日を選び、晴れて女房になれといふ有難い其の後の御沙汰。ほんにお波様、何から何まで夢のやうで厶ります。

お波　さつきもあれほど言つたのに又してもお波様々と人の事を様づけにいふわいな、まだ祝言の盃はせずとも世間晴れての女房も同様お波と呼捨にしやいなう。

榮壽　ハイ／＼畏りました。今度からキツト様を取りませう。然しお波様ついお屋敷で口癖になつてゐますので様をつけぬとどうも呼びにくゝつて成りませぬ。それではよろしう厶いますか。アノお波さま。

お波　アレ又。早うお波と云やいなう。

榮壽　それではお波。

お波　二階へ行つて何かの相談。

榮壽　サお上りなされませ。

（ト同じ唄にて兩人二重大阪格子を明けて入る下手露地口より佐太夫五郎助出で茶屋の二階を見上げ思入あつて領付くを道具替りの知らせ早めた合方にて道具廻る。本舞臺何一面河岸通り夜の遠見。正面眞向の橋。和國橋といふ札打ちてあり。上手戸を締めたる髪結床柳の立木下手番小屋この後駒寄。凡て和國橋夜の體。夜蕎麥賣荷を下し、仕出三人芝居者の拵へにて蕎麥を喰つてゐる。この模様時の鐘波の音にて道具留る。）

△　腹を拵へたらそろ／＼出掛けやうぢやねえか。

□　新地も石場も樋下も皆借りだらけだから今夜は一ッ方角を替へてえものだな。

○　この空模様ぢや吉原まではあぶねえぜ。

△　そんなら端折つて一ッ目邊で納まるとしようか。

□　いつそ柳原にしねえ。十六文で事が濟まア。

○　その代一月とたゝねえ中に鼻の御用心だ。

△　手前のやうな鼻なら有つても無くても同じ事だ。

□　はゝゝ。をぢさん。勘定はそこへ置いたよ。どれ降らねえ中に出掛けやう。

（ト皆々上手へ、夜蕎麥賣呼びながら下手へ這入る。波の音バタ／＼にて向より五郎助頬冠り尻端折にて出で一寸花道にてつまづき）

五郎助　雨持つ空の暗まぎれ、こゝらの河岸で待ち受けて一思ひにばらさにやアならぬ。

（ト舞臺へ來りあたりを見廻し上手髪結床のかげへ隱れる。波の音にて向より清元延壽齋四手駕籠に乘り直ぐに舞臺へ來る。五郎助出で駕籠の提灯を叩き落す。）

駕籠舁　何をしやがる。

五郎助　靜にしろい。

（ト出刃庖丁を振り上げる。一寸立廻つて駕籠舁、人

殺しだと逃げ入る。延壽齋駕籠の垂を上げ、）

延壽齋　何、人殺しだ。

（ト駕籠より出やうとするを五郎助いきなり肩先を切る。）

延壽齋　おのれ何奴なれば、名乘りもかけず卑怯な振舞、覺悟しろ。

五郎助　エヽ面倒な。じたばたせずにくたばつて仕舞へ。

延壽齋　さういふ聲は確に五郎助。

五郎助　さうと知れたら絢の事、手前の命ア貰つたぞ。

延壽齋　何を。

（ト謎の鳴物になり駕籠屋の竹杖を取り立廻りあつて、トド延壽齋横腹をつかれ駕籠の後へ倒れる。本釣鐘バタ〳〵にて本花道より榮壽太夫お波の兩人提灯を持ち假花道より前幕の御家人吉之助娘お柳駈け出で、）

榮壽　最前より俄の胸騷ぎ。一足先へとお歸りなされた父上に、

お波　若しや途中で間違ひでも、ありはせぬかと氣にかゝり、

吉之助　思ひは同じ闇の夜に丁度來合す和國橋。

お柳　心にかゝる。

四人　事ぢやなア。

（ト皆々舞臺へ來る。五郎助一寸本花道の方へ行かうとして引返し假花道の方へ行きかけトド思ひ切つて榮壽太夫の提灯を叩き落し花道へかけ行かうとすると向より出羽守先供の侍二人火事頭巾手丸提灯を持ち出で、五郎助に突當る。）

侍　曲者ッ。

（ト舞臺へ突返す。吉之助五郎助を押へる。松平出羽守の乘物近習の侍大勢凡て忍びの行列にて出で直ぐに舞臺に居並ぶ。灯入の半月を出し藤坂金之丞皆々を見て、）

金之丞　こなたは淸元榮壽太夫。お波の方も御一緒にどうして爰へ。

榮壽　父の安否を氣遣ひて來かゝる闇の橋だもと。

お波　怪しきものに出合ひし故。

吉之助　矢庭に組伏せたるこの曲者。

お柳　月に照せばお前は五郎助。

五郎助　もうかうなれば百年目。延壽齋を殺したついで手前達も生かしちや置かねえ。

（ト五郎助刎れ起きて出刄にて斬つてかゝるを吉之助一寸立廻つて拔打に肩先を斬る。五郎助どつと尻餅をついて倒れる。）

吉之助　師匠の敵。榮壽どのには父の仇。いざ存分にお打ちなされ。

（吉之助脇差を榮壽に渡し皆々用意する。）

榮壽　父の敵覺悟致せ。

五郎助　何を。

（ト兩人立合ふ、此時松平出羽守早替りにて乘物より出で）

出羽守　卽座の仇打。出羽守とくと檢分致すであらう。

（ト吉之助始終見張つて榮壽太夫手負の横腹をゑぐる。五郎助立身に苦しみ落ち入る。）

出羽守　敵討見屆けたれば仔細は出羽守が屋敷より奉行所へ申出でなば褒美は必定。

吉之助　不慮の刃に一流の老木の幹は倒れても、

お柳　若葉色濃き三ッ柏　又替紋の三ッ瓢、

榮壽　贔屓の蔓をたよりにて、悲嘆の雲は今は晴れ、

お波　空には月影淸元と、波風治まる和國橋。

出羽守　後ねんごろに弔はゞ聽て世繼の名弘に、人氣漲る青海波、藝の譽れを

（ト扇子を開くを木の頭）

世に揚げよ。

（ト榮壽五郎助の留を刺し、皆々引張の見得よろしく拍子幕。）

（大正三年四月作）

旅姿思掛稲　浄瑠璃所作事一幕

一旅僧傳心　實者　四世市村竹之丞
一旅の女　實者　大津稲荷の狐

置舞臺向一面六郷の川口より羽根田の海邊を見渡せし春の景上手下手ともに松林にて見切りところ〴〵に稲叢菜種の花。日覆より櫻の釣枝下手に浄瑠璃臺波の音にて幕明く

浄瑠璃〽玉くしげ箱根の山もいつしかに、旅の衣のひもふれば、花咲く春に大江戸も、やがてぞ近き鐘の聲。

（ト波の音合方になり旅僧傳心網代笠を冠り杖を持ち出で花道にて）

〽アレハ上野か淺草か。思へば悟る心さへさすが波打つ濱づたひ。

傳心　かなたに見える六郷の渡を渡れば鈴ケ森、海山晴れてうら〳〵と見渡す四方の春景色繪にもかゝれぬ眺めぢやなア。

〽捨てし浮世の氣さんじは、急がぬ旅の網代笠。杖を月雪花の友、見巡る諸國の名所は、面白妙と眺むれば、暮行く野邊にふる雪も、つもる思ひのなき身こそ、拂へば輕き法の袖。

（ト振事あつて舞臺へ來り切株に腰をかけ、）

傳心　いそがぬ旅も長途のつかれ暫くこゝにて休息なさん。

（ト薄ドロになり傳心俄に睡りを催す體。）

〽峰の嵐か松風か、波のつゞみの調さへ、長き日かげに陽炎の、燃る思ひは緋鹿子の、帶も目に立つ野邊の花。

（ト旅の女振袖塗笠にて花道へセリ出す）

〽踏みしく歩みちよこ〳〵〳〵ちよつと啣へた花すゝき、去年の落葉も手に取れば、松葉かんざし疊ざん、幾夜の夢を掛稲に沓の褥の露しげき妹瀬のなかの藁屛風たばねし髪も誰故に亂れそめにし蔦かづら。

（ト舞臺へ來り。）

〽袂からげて畦道の流れにうつす水鏡姿つくろひたゝずみて。

旅の女　モシそこなる御出家樣物をお尋ねいたしまする。

（ト傳心轉寐より覺めし體。）

傳心　旅のつかれか我知らず一睡いたせしが見ればいづこの御息女やら何ぞ愚僧に。

旅の女　わらはゝ御江戸へ下る者なれど道にて供にはぐれ途方に暮れて居りまする。御迷惑でも御ざりませうが次

の宿までお連れなされて下さりませ。

傳心　易い御用ではござれど出家の身にて女性の連れは憚りあり。その中お供の方も見えるであらう。暫く御休みなされませ。

旅の女　左樣なれば暫く御側にお置きなされて下さりませ。

〽それと思を夕日影花の色香に靑柳のなびく風情をこきまぜておそき日脚の旅の空沖の白帆に色添へて今宵を松の恨み言。

（ト旅の女寄添つて色模樣の振よろしく傳心迷惑のこなし）

傳心　合點の行かぬそなたの樣子よもや出家の某に。

旅の女　戀は思案の外とやら、お姿したうて都よりこゝまで迷うて來ましたわいな。

傳心　いよ／＼合點の行かぬそのお言葉。迷ひを晴らし悟りの道を敎へて進せるは出家の勤め。何をかくさう某はもと市村竹之丞と呼ばれし役者なりしが、色の世界にあき果てゝ名も傳心と改め出家得道致せしもの悟の道を敎へる手段。先づわが身の上を語り聞かさん。そもそもこの身はわざをぎの、

〽家も譽の香に高き、花橘の若衆形。位も極上上吉と、いつも春風吹屋町、なまめく色香われとわが姿見返る伊達小袖、聦白玉の顔容や男ながらの傾城は、高貴のお方のお相手に、何といらへも長襦袢の、底ともわかぬ通路や、露打掛の仇夢も、

傳心　思へば深き罪科と、俄にさとる二十五の、春の朝の鐘の聲、丁度舞臺で西行の役をつとめた其のなりで、

〽越路へ歸る雁金と、共につれ立つ旅の空、諸國行脚の行もつみ法の惠ぞ故里へ、歸るざんげの物語り。

（ト振事よろしくあつて、）

傳心　シテ又汝は何者なるぞ色に事よせ衣を邪道に落さんたくみならん。

旅の女　エ。

傳心　察する處われに仇なす變化の仕業イデ正體を現はしくれん。

〽いで正體をあらはせと珠數押揉んでつめ寄れば法の力に是非もなく娘は苦しき息をつき、

旅の女　妾はもとより人間ならず。

〽大津稲荷の召仕。

傳心　さては射干の化身よな。

旅の女　いかにもわらはが來し方は。

〽さびし宮居の奥ふかく、罠てふ人のたくみさへ、知らで月日を杉木立供物の餌のかず／＼も滿ればいつか秋の月。小野の篠原風戰ぐ、山家のむかし戀しさに、そこの森

かげこゝの藪。

旅の女　さすらひ出でし道すがら、そつと見そめしお姿に、

（八十氏人の數ならぬ畜生の身も打忘れ、心は晴と塗笠に、やつす姿の旅衣。お後したうて狐火の、われとわが身の胸こがす其のかひさへも情なや、明日はお江戸と聞くからに、放れがたなき妄執の、思ひも今はこれまでと法衣の袖に取りすがり、口説き嘆くぞあはれなる。

傳心　これも皆犯せし罪の報なるか。住倦きし世に淺間しや。畜類にまで懸想され法の衣もいまはしき涙に汚す身の因果。過世いかなる報ぞや、

（年月修行の法力に、もしや效のあるならば、奇特をこゝに目のあたり。

傳心　一切衆生、一佛淨土、如是畜生發菩提心、南無阿彌陀佛。

（なむあみだ。なむあみだぶつ。あみだぶつ。來世は汝も人間に、生れて佛果を得させんと、珠數押し揉み押しもみ一心に、念じ立つれば。

（ト大ドロ〳〵にて旅の女引拔きになり立ちかゝるを傳心杖にてあしらひ立廻りよろしくトヾ引据ゑる書割の空に夕日と假を出し）

（忽ち現す野獸の形相すさまじく、牙嚙鳴し爪さかだてゝ飛掛る。

（彼方に拂ひ此方に押へ、はつし〳〵と打据る、法の威德は氷なす刄にまさる珠數の玉。

（あら有りがたや紫雲たちまち西の空、惠の光もこれやこの、極樂淨土の樂の聲、松の調に入相の鐘打添へし夕嵐。射干の姿消失せて跡白妙の花吹雪。踏み分けてこそ。

（ト旅の女追廻はされて舞臺切穴へ消ゆるとすぐに花道より白狐一匹出でて向へ走り入る。傳心追掛けつまづいて乾となり向を見込む。送三重にて幕。）

（大正五年秋作）

開化一夜帥　二幕

上の幕　本所常盤町蘭邊芳國内の場

一金　　工　蘭邊芳國（五十四五歳）
一金　　工　蘭邊芳輔（二十七八歳）
一洋學者　足立大九郎（三十二三歳）
一下地師　金　兵衛（四十二三歳）
一書　　生　横田　功（二十二三歳）
一酒屋手代　六　　藏（三　十　歳）
一米屋手代　七　　助（五　十　歳）
一蘭邊の妻　おちか（三十二三歳）
一隣の娘　お　　葉（十七八歳）

本舞臺三間本緣付常足の二重長火鉢を置き正面一間障子此の内奥の間。障子の外二枚折小屏風。中央一間の壁地袋戸棚。三尺暖簾口壁の上に女物の半纏かけてある。下手一間の下屋下手口臺所道具を置き板塀の前井戸端。二重下手竹窓つゞいて四目垣いつもの處門口。上手二重よりつゞいて一間の屋體按摩鞴七輪銅壺鍋砥具なぞを置き壁には鞴心にてカナトコ大小の鎚鑿大小の木槌なぞ凡て業劍奇賞なぞいふ書物を參照して金工仕事場の體を見せ上手奥より見切まで卒塔婆の垣根。幕場の後方に寺の屋根を見たる書割。下手板塀にて見切り凡て本所常盤町邊金工蘭邊芳國侘住居の體。角兵衛獅子の大鼓にて幕明くと蘭邊の妻おちか丸髷半元服貧し氣なる中にもどこかいやらしき風にて長火鉢の側に坐り薬を煎じてゐると下手より酒屋手代六藏散髪尻端折通帳五六冊下げ勝手口に立止り

酒屋　今日は酒屋で御在ます。御勘定をいたゞきに參りました。今日は今日は。酒屋で御在ます。（トおちか掛取の聲を聞きつけ上手仕事場へかくれる）今日は。誰もゐないのか知ら。まさか留守をつかつて居るのでもあるまい。（ト門口へ來て内を覗き）今日は酒屋でムい升。

（ト呼んで居る中下手より米屋の手代七助ちよん髷尻端折通帳を持ち出）

米屋　おや酒屋さんか今日は勘定が下りさうかどんな樣子だね。

酒屋　先刻から大きな聲で呼んで居るんだが誰も出て來ないのだ。

米屋　さうか夜逃げでもしたのぢやあるまいな。

酒屋　世帯道具が置いてあるから逃げたのぢやあるまい。もう一度呼んで見やう。酒屋でムい升。

米屋　今日は米屋でござゐます。御留守でムい升か。今日は今日は。

酒屋　これぢやどうも仕様がない。どうせ出て來た處で大抵今月もどうか待つて下さいにきまつてゐらア。ねえ米屋さん。取れさうもない家で暇を潰すのも馬鹿々々しいから歸り掛に寄るとしやうぢやないか。

（トおちか屛風のかげにてコレは仕合せだといふ思入）

米屋　成程、見す／＼取れさうもない處で暇を潰すのも馬鹿々々しい。然し酒屋さん御維新この方いくら催促したくつてもてんで行衞の知れなくなつた家が何軒あるか知れない位だからな。それを思へば此處の家なんざ疊建具に世帯道具もあるんだからマア／＼安心な方だよ。

酒屋　此方のお家もツイ此の間までは蘭溪芳園さんと云へば大したものだつたがな。目貫や小柄も用のない世の中になつちや、もう名人も何もありやしない。

米屋　しかし商賣が商賣だから現金が取れなけれア、目貫や小柄か何か潰しになるものが有るにちがひないからまるまる倒れになる事もあるまいよ。それぢやあ河岸通りを廻つて行かう。

（ト角兵衞獅子の鳴物にて兩人下手へ入ると隣家の娘お葉貧しき武家娘の風俗にて手桶を下げ出で水を汲みながら物思ひの體。此の中薗邊の姿おちか上手下屋より二重へ來り。）

おちか　いゝあんばいに留守だと思つて歸つた樣子。然し明けても暮れても借金の申譯に病人の介抱。（ト云ひかけて奥の間に思入障子の間から一寸のぞいて）又誰ぞ掛取の來ない中水でも汲んで置きませう。（ト門口へ出て）お葉さん何をぼんやり考込んでおゐでだ。

お葉　おばさん昨夜は晩くまで御邪魔を致しました。

おちか　お邪魔どころかお前さんでも遊びに來てお呉れでなかつたらそれこそ氣がふさいで私まで病氣になつてしまふわね。お茶を入れるからお葉さんサ此方へお上りよ。

お葉　話に夢中になるとまた歸るのがいやになるから用をしてから來ませうよ。

おちか　水なら私が汲んで上るわね。御病人は今しがたスヤ／＼寢付いた處だから、さア此方へおいでよ。

（トおちかお葉の手を取つて門口へ入る。）

お葉　それぢや又お邪魔を致しませう。

（トお葉二重へ腰をかけるおちか長火鉢の茶をつぎ、）

おちか　ねえお葉さん時たまかうしてお饒舌でもしなかつたら氣の晴れやうが有りやアしない。（ト茶をすゝめ）お葉さん。お茶ばかりで何もなくつて濟まないねえ。

お葉　かまつて下さいますな。（ト茶を飲み）　わたしもつくづくいやになつて了ひ升よ。叔父さんがあの通の八釜しやだから滅多に外へも行かれず家にゐれば小言ばかり大抵な事ぢやありませんよ。

おちか　ほんとに女は何になつても割のわるいものだねえ。わたしなんぞもさう／＼丁度お前さん位の時分だつたよ。家にゐてお父さんや兄さんに叱られてゐるのが馬鹿らしく、いつそ奉公にでも行つた方が氣樂だと思つて山の手のさるお屋敷へ上つた事があつたよ。

お葉　わたしもいつまで叔父さんの處に厄介になつてゐるのもいやだから何處か御奉公に上りたいと思つてゐるのでムいます。

おちか　さうかい誰の考へも同じことだねえ。

お葉　家の人に叱られるより御奉公に云つて御主人に叱られた方がまだ／＼諦めがつくだらうと思ひますよ。

おちか　叱られるどころかお前さんのやうな容色なら御主人がすぐに目尻を下げてかわいがつてくれるわね。

お葉　アラそんな事があるものですか。

おちか　どうして／＼默つて打捨つて置くものかね。わたし見たやうな女でも始めて御奉公に上るとすぐに、殿様と御用人が一度に惚れてしまつてどうしていゝか困つてしまつた位だよ。

お葉　さぞお困りでしたらうねえ。をばさんそれからどうなさいました。

おちか　殿様の云ふ事はきかなければならないし又御用人の方も恰まれて意地のわるい事をされるところはいから兩手に花で其處の處は如才なくやつてしまつたのさ。ほゝゝゝ。然しわるい事は出來ないものさ。それからわたしもいろ／＼にぐれ出して彼方に半年こつちに一年諸處方々へ御妾奉公。だん／＼行末が心細くなつたから此方の家へ上つたのを幸一生御奉公をするつもりで居たけれど瓦解この方こちらのお家も餘のひつそく、お米やお味噌の勘定にも差支へるやうになつて來ちや御給金どころの事か惡くすると折角拵へて頂いた着物までなくなさないとも限らないから、薄情なやうだがお葉さん、私はその中お暇をいたゞかうかと實はさう思つてゐるんだよ。

お葉　お前さんが居なくなつたら斯うしておしやべりをする事も出來なくなるからそんな事を云はないでもう少し辛抱してお居でなさいよ。

おちか　何さ、まだ今日明日にお暇を取るといふわけぢやないから安心おしよ。お給金がよくて旦那が若くて好い男で、御用の少ない樂ウな御屋敷でも目付かつたらその時お暇を頂かうといふはなしさ。

お葉　お前さんがお暇を貰つて行つてしまつたら旦那はお

年寄で御病人後は一人でさぞおこまりなさるだらうね。

おちか　私もそれがお氣の毒なばつかりに斯うして辛抱してゐるんだよ。御維新この方女中も御弟子も皆居なくなつてしまつた處へ、あの御病氣、ツヒお暇を貰ひそこねてしまつたから私も一時はマア／＼何事も因縁づく女はどこへ行つたつてどうせ人樣の用をして働くのだから、斯ういふ時こそ根性の入替時、お妾ながらも感心と世間の人にもほめられたら、開化の御代の事だからきつとお上から御褒美が下るにちがひないと、一生懸命病人の介抱した上に御百度までも踏みに行つたけれど、近所の人は何ともいはず御褒美の下る樣子もなし、腹が立つやら口惜しいやら實はもうがつかりしてしまつたのさ。もうもうわたしの愚痴なんぞはお止めにしてお葉さん、今度はお前のおのろ氣でも聞かうぢやないか。

お葉　アラをばさんわたしには　そんなおのろ氣なんぞ有りやアしませんよ。

おちか　こんなに心安くしてゐるのに。何もかくさないだつていゝぢやないか。お葉さんつい昨日の夕方もお前コツソリ井戸端ではなしをしてお居でぢやないか。

お葉　それぢやをばさんは昨日のことを。

おちか　昨日ばかりぢやない。とうから知つて居ますよ。

お葉　まアどうしたらいゝだらう。それぢや何も彼も打明けてお話をしますからどうぞ後生ですから内所にして置いて下さいまし。

おちか　何で私がおしやべりをするものかね。外の事なら役に立たない愚圖かも知れないが然ういふ事なら生付如才のない此のおちか。うまく首尾をして上げるから人目の多い井戸端なんぞで逢はずとも私の家へおつれ申してゆつくり逢つた方がいゝぢやないか。

お葉　ゆつくり逢へたらどんなに嬉しいか知れないけれど若し御病人に知れでもしたら、私ばかりかお前さんまで叱られるぢやありませんか。

おちか　そこに如才があるものか。家は此の通りせまいけれど旦那は病氣なばかりかお若い時から耳の遠い人だから何をしたつてわかれアしないよ。よし又知れたにした處が久しく便りのなかつた私の弟だとか兄さんだとか、その邊のところはいゝやうに取つくろつてしまふわね。可愛い男があれアこそ、ねえお葉さんお互にかうして水仕事もして居られるんだアね。

お葉　それぢやをばさん　お前さんも誰か好きな人が…。

おちか　ほゝゝゝそんな事は內所々々。

（ト二人たわいもなく笑ふ。此の中横田功廿二三歳ざんぎり頭八丈の書生羽織着物の袖口と襟より赤いシヤツを見せ着流しにて靴をはきステツキを持ち下手より

忍び出で内の様子を窺ふ。寺鐘になりお葉立掛け。）

お葉　オヤ〳〵いつの間にかもう八ツ下り。それぢやをばさんまた後ほど。

おちか　私も水汲んで置きませう。

（トお葉先に立つて門口を明け横田の姿を見て、）

お葉　あら功さん。（ト馳寄る）

横田　アこれ。（ト制するをお葉かまはず寄添ひ）

お葉　今も二人であなたの噂。こちらの御新造さんが親切に仰有つて下さる故もう氣兼も何も入りませぬ。

おちか　わたしの家は耳の遠い病人一人、外には誰もゐませぬから遠慮なさらずお上りなさいまし。

（トお葉よろしくこなしあつて横田合點い行きし體。）

横田　さういふ事なら初てのお家へ失禮なれど暫時お邪魔を致したうムい升。

おちか　ドレ私は水を汲みながら張番をして上げませうか。

（ト合方になりおちか井戸端へ出て勝手口の手桶へ水を汲んでゐる。此の中お葉横田二人二重へ腰をかけ。）

横田　お葉何とか量見をきめなければならぬ。日頃から嚴しいお前さんの叔父さん、どうやら二人の事を感付いたらしい様子だぜ。

お葉　エ、あの叔父さんが私達のことを。

横田　實は今お前に逢はうと裏へ廻つて様子を窺つてゐたところ内では叔父さんと叔母さん二人。お葉をこゝの家へ置いてはよくないから明日の朝いやおう無しに駿府の親類へ預ける事にしやうと相談をしてお居でゞあつた。お葉かうしてお前の顔を見るのも今日がお名殘だ。

お葉　エあの私を駿府の親類へ。功さんどうしたらいゝだらうねえ。

横田　もうかうなつたら二人手を取り馳落でもするより外に道はない。

お葉　お前と一緒ならどんな辛い思をしてもかまはないから、功さん、さ此のまゝ逃げてしまはうぢやないか。

横田　お前がその覺悟ならナニ心配する事はない。明い中は人目につくから日が暮れるのを合圖にして、お前はそつと家を抜出しなさい。

お葉　はい、それでは暗くなるを合圖にして、

横田　僕はそれまでに何かの支度。

（ト兩人いそいで下手へ這入る。おちか勝手口にたゝずみ見送りながら。）

おちか　あら私がこゝにゐるのも知らずにお禮も云はずに行つてしまつたよ。あら手桶も井戸端へ置ッぱなし。何ぼ惚れてゐるからッて呆きれてしまふねえ。

（ト井戸端の手桶を勝手口へ片寄せてゐる。流行唄に

なり下地師金兵衞一ツベツつひの散切頭マントをまとひ脚絆わらぢばき蝙蝠傘を持ち下手より出で後を見送りながら井戸端へ來かゝる。おちかを見て。）

おちか　金兵衞さん。

金兵衞　おちかさん今向うへ行つたのは何處の娘さんだ。いゝ女だな。

おちか　アレはお向の三井さんといふ、書の先生のお家にゐる娘さんぢやないか。

金兵衞　さうか今までちつとも氣がつかなかつた。それアさうと一寸話したい事が有るんだが。（ト奥の方へ思入あつて）おちかさん大丈夫か。

おちか　先刻からよく寢てゐるから大丈夫だよ。（ト二重上手障子の間から樣子を窺ひ立戻つて）よく寢てゐるからさアお上りよ。

金兵衞　草鞋ばきだからこゝでいゝ。

（ト金兵衞椽側へ腰をかける。おちか寄添ひ。）

おちか　先刻から何だか顏ちがひがしたと思つたら金兵衞さんお前齒をきつておしまひだね。

金兵衞　唯た今こゝへ來る途中髯を當つたついで、舊弊な髷よりかこの方がせい／＼するだらうと思つて、切つてしまつたが馴れねえせゐか何だか落物でもしたやうな心持さ。

おちか　頭ばかりか身なりまでどうやら旅でもする樣子。金兵衞さん何か變つた事でもできたのかへ。

金兵衞　實は其のはなしをしやうと思つて逢ひに來たのだ（ト合方になり）現在此方のお家もその通り、瓦解この方目貫や小柄の彫刻師は後藤の家を始めとし菊岡柳川奈良横谷どこもかしこも上つたり。いよ／＼廢刀令といつて刀のいらぬお觸が出れば鍔や小柄の地金を打つ此の下地師もすたりもの。ぐづ／＼しちやゐられねえから横濱の屠港場にゐる知人をたより、地金の代りに弗相場生絲相場の寄合に刀にあらぬサヤを取り一ト身上彫り上げるつもりだから淋しいからうがおちかさんそれまで達者で待つてゐておくんなさい。

おちか　四五日顏を見せないからどうした事かと心配してゐたが、それぢや金兵衞さん、お前わたしを捨てゝ逃げるつもりだね。

金兵衞　何を云ふのだ。逃げるつもりならわざ／＼こゝまで來やアしない。全く濱へ稼ぎに行くのだから暫く辛抱して待つてゐなさい。

おちか　イエ／＼お前は私を捨てゝ逃る氣にちがひない。眞實横濱へ行くつもりなら此の前來た時私にも內々で相談をしてくれる筈。藪から棒にそんな事を云つたつて十九や二十の娘ッ子ぢやあるまいし誰がほんとうにするも

のか。モシ金兵衛さん。かうして働いてゐるのも誰の爲だとお思ひだえ。お前さんは以前から家へ出入の地金屋さん二人で話をしてゐても疑はれる氣遣はなし逢ふのに都合がいゝから病人の介抱もつらいと思はず今日まで辛抱してゐたのぢやないか。どうあつても横濱へ行くとお言ひなら金兵衛さん唯今私も一しよに連れて行つておくれ

金兵衛　物見遊山に行くのぢやあるまいし運だめしに商賣替をしやうといふ矢先女連は何かと不自由、あつちへ行つて少し目鼻があきさへすればきつと迎ひに來やうから暫くこのまゝ辛抱してゐなさい。その中には病人ももう長い事はあるまい。自然に片がついてしまへばお互に寢覺もよく天下晴れて一緒になれるのだから、無理な事を云はずと待つてゐるがいゝぢやないか。

おちか　イエ〳〵一緒につれて行かなければ私アこゝは放さない。何處までも後追つかけ一緒にクツついて行くからさう思つておくれ。（トおちか金兵衛に取りすがり金兵衛是非なき思入）

金兵衛　さう一圖に逆上(のぼせあが)つちやいか程言ひ宥めても聞入れまい。一人口は食へなくとも二人口は何とやら彼地へ行つたらどうにか成らう。それぢやおちかさん一緒につれて行かう。

おちか　エ一緒につれて行つておくれかへ。

金兵衛　日が暮れたら呼出しに來るからそれまでに支度をしておきな。

おちか　なに別に支度も何もいりやアしないよ。着物はあらまし頭のもの迄とうに叔母さんのところへ運んであるから、着換の一二枚も抱えて行きやアそれでいゝんだよ。金兵衛さん晩とは云はず今の中。

金兵衛　これさ何ぼ何でも眞晝間駈落が出來るものか。おらアまだ仕殘した用事もあるから今の中鳥渡行つて來るぜ。

おちか　いけないよ〳〵。また逃げ出さうたつてさうはさせないよ。（トまたすがり付く）

金兵衛　これさ仕樣のねえ女だな。さう疑ふならム、此の財布を預けて行かう。路用の金だから其のつもりでしつかり預かつてくんな。いゝか。（トふところより財布を出して渡すおちか漸く安堵の體にて）

おちか　それぢや金兵衛さん日が暮れたらきつとだねえ。

金兵衛　日が暮れたらおらア路次を出た向う河岸通りに人力車を二臺待たして置くから、おちかさんお前は幌のかゝつてゐる方の車へ何もいはずに乘つてしまひなせえ。いゝか。（ト立上り）おちかさんそれぢや鳥渡行つて來るぜ。

（ト此の時二重障子の彼方にて南邊芳國苦しさうに咳

嗽をする。金兵衛おどろき下手へ入る。おちか障子をあけ)

おちか　あなた好いあんばいに今日は大層よくお休みでムいましたねえ。

蘭邊　咳がからんで苦しいものだから目が覺めた。湯を一ぱいついでくれぬか。(ト蘭邊芳國病みほゝけたる老人のこしらへにて咳嗽をしながら夜具の上に起直る)

おちか　はい〳〵畏りました。

(トおちか長火鉢の鐵瓶より湯をついでゐると誂への唄になり向より蘭邊芳國の弟子蘭邊芳輔髷にゆひ羽織着流し雪駄にて)

芳輔　ツイ〳〵御無沙汰をしてしまつたが師匠の御病氣はどんな御樣子か知ら　(ト門口を明け)　御免下さいまし芳輔で御座います。

おちか　おや芳輔さん、さアお上んなさいまし。丁度お目覺めになつた處でムい升。

芳輔　左樣で御在ますか。(ト上へあがり蘭邊に向ひ)　御師匠樣御あんばいは如何でムい升。

蘭邊　芳輔かよく尋ねて來てくれた。おちか褞袍か何か掛けてくれぬか。寢てばかりゐるのも大儀故少し起きて芳輔と話をしませう。(ト長火鉢のそばへ坐る)

芳輔　暫く御機嫌伺にも上らず申譯がござりませぬ。御氣分はいかゞで御在ます。

蘭邊　別にわるくもならず、と云つてよくもならず。此の樣子ではまだなか〳〵婆婆の業がつきぬと見える。早く片がついてくれぬとそれこそ見じめといふのさ。

芳輔　ほんに長い間の御病氣故さぞ御焦れッたい事とお察し申しますが、然し此れまで別條なくさうやつて起きておゐでにさへなれるの故、何もう暫くの御辛抱。その中にはきつと御本腹になりませうからあまり氣をいら〳〵なさらずと、何卒氣長く御養生なすつて下さいまし。

(ト木魚の合方になり)

蘭邊　若いものには珍しいそなたの親切。蘭邊の苗字を許し芳の一字をさづけた弟子達はそなたを始め何十人と數へる程もあつたれど、生きてゐるやら死んだやら見舞ひに來てくれるのはそなたばかり。病人の愚痴と思はれては殘念故これまでだまつてゐたなれど、此の芳國はもう世の中には用なき者一日も早く極樂往生をとげたいとその日の來るのを待つて居ります。

芳輔　御師匠樣どうか其のやうな心細い事を仰有らずと、せい〳〵御養生遊ばしてもう一度元のやうにお成りなされて下さいまし。

蘭邊　いや何も無理に死なうと申すのではない。死たくば病氣を待たず割腹なりと致して相果てるが壽命のある間

は致方がない。この通り怠らず藥を煎じて養生致して居るから心配いたさぬがよい。わしが死にたいと申したは先祖代々御恩を受けた德川家も瓦解なし刀も無用となつた故若しこの儘病氣で死ねたなら願うてもない仕合、薩長の奴原が肩で風切る世の中を見ずにあの世へ行きたいと申すはなしさ。

芳輔　お師匠さまそれは手前も同じこと。上野に戰爭が始まつたと聞いた時刀の細工を致せば職人たりとて武士も同然、及ばずながら御奉公を致さうと存せし處、母の病に行きかねておめ／＼と生耻晒す今の身の上、全く生きてゐるのがいやになり升。

蘭邊　然しもう何をいうても始まらぬ。老先の知れたわしとは違ひそなたは血氣の男ざかりいかに世の中がいやだと申して何もせずには居られまい。芳輔これから先お前はどうして暮す考か差支なくば聞かしてくれ。

芳輔　御親切なそのお言葉ありがたう厶います。實は私もどうしたものかといろ／＼に考へては居りますがまだ何も考のつきやうが厶りませぬ。御大名や御旗下の御腰のものを細工致すのだと思へば精魂込めて仕事をする氣にもなりますが、いかに時世時節と申しながら女の簪や櫛笄、町人が煙草入の金具では心はいかほどあきらめたつもりでも此の腕が自然と承知を致しませぬ。

蘭邊　イヤそれは尤な話だ。末頼母しい弟子だと思ひわしも親身になつて仕込んだせゐか技藝ばかりか氣性までいつか似寄つたお主の事、器用でごまかす手先の仕事はコレヤお前には出來にくからうよ。

芳輔　全く御師匠樣の仰有る通り實はこの頃よんどない御方の御依賴で築地の異人館にゐる異人の仕事を引受け金ボタンの細工を致しました處、イヤハヤ自分ながらも呆れる程の不出來な細工、然し異人の事故かまふまいと實は昨日築地へ持つて參りました處異人ながらもなか／＼の目利にてこれはお前さんの弟子にでも彫らせたのではあるまいか、何に致せもう一度彫直して下さいと申されスゴスゴその場を逃出した始末でござりました。

蘭邊　イヤ聞けば聞くほど氣の毒なはなし。それを思へばこの芳國なぞはまづよい月日の下に生れた果報者先代芳繼殿に仕込まれて未熟ながらも早くより蘭邊芳國と人にも知られ恭くも將軍家の御用をつとめた事もあつた。その昔を思へば何よりの心やり。さる安政の疫病に妻子も失ひ今では何一ツ心殘りのない身體死にさへ致せばよいのだが、それとはちがひ多年の修行も變る世につれ水の泡となつたお前の身の上若いだけに氣の毒でなりませぬ

芳輔　さう仰有つて下さるのも今ではもうお師匠樣ばかりあなたは久しく御病氣故御存じも厶りますまいが、瓦解

この方日々變る世間の有樣九州四國の山猿が洋服ステッキ高シャッポ馬車に乘つて馳けまはる。見るもの聞くもの癪の種。どうせ無用の身體ならいつそ義賊か何かになり思ふさま荒ばれまはつたら、さぞいゝ心持だらうと時々はそんな事を考へる位でムいます。

（ト二人がはなしの間おちか長火鉢にて藥を煎じあたりを片付け壁にかけた半纏をたゝみ奥の間に入り頃合の包を持ち出で暖簾口より臺所へ持運ぶ。凡て駈落の支度をする體。）

おちか　モシあなた一寸八百屋まで買物に行つて參ります。芳輔さんわたしの歸つて來るまでどうぞゆつくり師匠のお話相手をなされて下さいまし。

芳輔　どうせ用のない身體で御座いますからいつまでもお邪魔をいたして居ります、ゆつくり行つてお出でなさいまし。

おちか　それではお頼み申ます。

（トおちか門口を明けると向より洋學者足立大九郎紋付羽織袴山高帽駒下駄ステッキにて立出で、）

足立　勝手に井戸のある家だと聞いてゐたがそれでは大方あの家であらう。（門口を出ようとするおちかに向ひ）蘭邊芳國殿の御住居はこちらで御座るか。

おちか　はい手前供でムりますが何ぞ御用でムいますか。

足立　此方に御門弟の蘭邊芳輔殿が參つて居られはしませぬか。

おちか　はいお居ででムります。シテあなた樣は。

足立　僕は開成校の教授足立大九郎と申すもの、一寸芳輔殿にお目にかゝりたく尋ねて參りました。

（ト芳輔この聲をきゝつけ緣側に立出で、）

芳輔　これは／＼足立樣何ぞ急な御用で御在ますか。

足立　イヤ何急な用ではないが又しても築地の異人館より再度の依頼、幸今日は一六の休暇故ぶら／＼貴公の家まで參つた處、留守居のものが此方へお出掛と申したので散歩がてらお尋ね申した。

蘭邊　芳輔何はともあれ此方へお通し申すがよい。

おちか　どうぞお上りなされませ。

足立　然らば御免ください。

（ト足立二重へ上る。おちか始終門口へ思入あつて座布團煙草盆なぞ持出しよき程にだまつて門口へ出て金兵衞の來るのを待つ體にて勝手口へ忍ぶ。）

蘭邊　病中御覽の通りの仕末故御挨拶申上げるも如何なれど手前は此の家の主人蘭邊芳國と申す彫刻師でムります。御無禮の程御免下さりませ。

足立　拙者は足立大九郎と申す舊幕の家臣、蕃書取調所にて洋學を勉强致し唯今は開成校の教授を拜命致す者、貴

殿のお名前は昔の宗珉崑寛にも劣るまじき名人と、わが父上を始め以前出入の芳輔よりも度々聞いて承知致して居ります。

蘭邊　老朽るまで未熟な業そのお言葉では痛入ります。

足立　芳國殿には御病中とあれば拙者にはおかまひなくお休みなされませ。拙者は早速芳輔殿へ用談を致して歸りませう。

蘭邊　左樣なればやがてもう日の暮れる時分、夕風にあたると咳嗽が出ます故それでは御免を蒙ります

芳輔　お師匠樣お氣をつけなされませ。

（ト芳輔蘭邊をいたはり夜具の上にねかして障子をしめ元の座へ戻り。）

芳輔　失禮を致ました。足立樣御用談と仰有るはどういふ事でござります。どうぞお話しなされて下さいまし。

（合方になり）

足立　改まつて申す程の事でもないが、昨日學校の用件にて築地の異人館まで參りし處一足ちがひで丁度そなたの歸つた後かねて依賴致した金釦の細工そなたの作には似もつかぬ不出來な彫りやうであつたと異人も大層落膽致した樣子日頃そなたの腕前ならばそんな事のあらう筈はないと不審でならぬ故實はそれを聞きに參つたのだ。

芳輔　何とも申譯が御座りませぬ。折角お口添下されましたあなた樣のお顏をつぶし申譯がござりませぬ。

足立　異人の申すには禮金を不足と思ひぞんざいに致したなら金に絲目はつけぬ、是非にも國への土產立派なものをこしらへて貰ひたいと再三僕への賴み、もう一度精を出してやり直してはくれまいか。

芳輔　折角のお言葉では御座りますがとても手前にはあの異人の氣に入るやうな細工は出來まいかと存じます。

足立　コレ芳輔左樣な事を申しては拙者が迷惑いたす。君の腕前は僕なぞよりあの異人の方が遙によく存じて居るのだぞ。あの異人は羅紗や小間物なんぞ商ひに參つた商賣人ではない。西洋にても佛蘭西國と申して昔より文武諸藝に秀いで文明開化の國々でも隨一の手本と云はれる大國の學者。ドルばかり有難がる亞米利加人とは段ちがひ。そなたばかりか芳國殿の目貫や小柄も買集めとくと腕前を見屆けた上わざ／＼名ざしを致して僕に依賴をされたの故、不出來とあれば金が欲しいかさうでなくば異人と思ひ馬鹿に致したとしか思はれぬ。

芳輔　イエ／＼決して左樣な事は。

足立　何は兎も角もあれ異國の人より日本人は横着なものだと思はれては、芳輔そなた一人の恥ではない日本全國の恥辱にもなる事、芳輔一ッ本氣になつて仕事をしてはくれまいか。

芳輔　足立樣それでは打明けてお話を致しますが、瓦解此の方目貫や小柄は無用のもの骨を折つても用ひ處はなし見る人もないと思へば唯もうがつかり致して本氣になつて仕事をする氣にはなれないので御在ます。

足立　ム、次第を聞けば尤至極。それでは芳輔そなたは師匠より菊湖の苗字までも許された多年の修業も水の泡となしその身の技を捨てるつもりか。

芳輔　生意氣な事を申すやうでムりますが私の思わくも一應お聞きなされて下さりませ。（ト合方變つて）十五の時から修業して御維新になるそれ迄は一日たりとも怠りなく、神佛への心願も一生涯に唯一度將軍樣の御用もつとめ師匠へ御恩返がしたいばかり、それも今では夢となり俗のえばる濁り江に取り殘された目くら蛇、物には怯おぬ仕柱でも首より大事な身の技を身過世過に致すのは何ぼ何でも口惜しくてなりませぬ。足立樣その日〳〵の口過ぎなら大事な技を賣らずとも車夫なり馬丁なり何なり致して世を送る所存でござります。

足立　節義を重んじ伯夷叔齊の昔にもならふ心掛、足立大九郎感服は致したがそれは聊か時と場合をわきまへぬ狹い量見であらうがな。

芳輔　何と仰有ります。

（ト此の間におちか勝手口より出たり入つたりして金兵衛を待ちあぐむ體。蟲笛あちらこちらと次第に增しオルゴル入變つた合方にて、）

足立　教場にて口馴れた講義を致すやうなれど君等は上野會津や箱館にて討死いたした方々ばかり忠義と存じて居るやうなれど同じ忠義にもいろ〳〵ある。生きながらへて恥を忍び人の爲め世の爲めに力を盡すも忠義の一ツ、同じ舊幕の家臣にても栗本鋤雲成島柳北福地櫻痴なぞ申さるゝ先生方はいづれも世にながらへそれ〳〵好む道に從つて新聞に筆を執る方もあれば學校の教授を致さるゝ方もあるが誰一人卑怯未練の腰拔武士とは申さぬぞよ。取りわけ成島柳北先生は忝なくも將軍家へ御書講申上げた學者なれど今は其の學問をば町人の子供にも授けて居らるる御心中。論語と目貫と品は變れどその道を修むる人の心は同じ筈。コレ芳輔そこらの事をとくと考へ折角鍛へたそなたの腕前、ます〳〵みがいて名をお揚なされ。

芳輔　御意見の程ありがたう御座ります。

足立　いつの間にやら暮れて參つた。申度き事はいろ〳〵あれど今夜は宴會の幹部を賴まれ據處なく兩國の料理屋まで參らねばならぬ故それでは芳輔。（ト座を立つ）

芳輔　手前の不調法より御足勞をかけまして申譯がムりませぬ。

足立　くはしい話は又その中。（ト足立下に降り紙入の金

な紙に包み）これは些少ながら芳國殿へ見舞のしるしそなたより宜きやうに申して下され。

芳輔　有難く頂戴いたして置きます。

（ト時の鐘蟲笛風の音にて足立大九郎向へ入る。芳輔門口に出で）

芳輔　秋の日は暮れやすいとは云ひながら鳥渡の間に眞暗になつてしまつた。おちかさんは大層おそいが。もう師匠に御粥でも差上る時分だらうに何をしてゐるんだらう。臺處に火打があるにちがひない。

（トやはり時の鐘誂への合方にて芳輔門口を明け勝手口へ行きかゝると最前より勝手へ忍び金兵衛の來るのを待つてゐたるおちか驚きソッと勝手の内へ逃げ入り二重暖簾口へ出る。）

（ト下手より金兵衛出で勝手口へ行きかけ芳輔の聲をきゝびつくりして井戸のかげへ隱れやうとする時横田功出で來る故逃げ場を失ひ明け放したる門口へ入る。）

（ト同時に娘お葉忍出で横田にぶつかつて門口へよろけ込むと内にてもおちか金兵衛の兩人同じくぶつかりおちかは門口の外へよろけ出る。）

（ト此の中障子の内にて芳國が咳嗽の聲。芳輔始終臺詞を言ひながら「アイタ、煙草盆を踏みつぶしてしまつた」と行燈をさがす。四人の男女いよ〳〵あわてトド横田懐中時計を落したまゝおちかと連立て向へ入り、金兵衛お葉の兩人下手へ入る。芳輔つまづいて横田の時計を拾ひ空のあかりにかざして見て）

芳輔　この家に見馴れぬ銀時計ハテ不思議な（チョン）事だなア。

（ト寺鉦風の音にて拍子幕。但し此の幕は大川端より一ツ目御船藏一帶を見渡したる新案の道具幕にて幕引終ると竹本長唄ツレ彈の三味線（何かよさゝうなもの）にてツナグ。）

下の幕　大川端の場 元柳橋の場　清元連中

一金工　蘭邊芳輔
一洋學者　足立大九郎
一書生　横田功
一下地師　金兵衛
一紳士　寺本某（三十四五歳）
一紳士　酒井某（三十四五歳）
一紳士　島田某（三十四五歳）
一汁粉屋　（五十歳位）
一按摩　（四十歳位）
一車夫　二人

一箱　屋　一　人
一藝　者　丁　吉（二十歳位）
一隣邊の婆　お　ち　か
一むすめ　お　葉
一藝　者　小　米（二十歳位）
一藝　者　才　藏（二十四五歳）
一藝　者　友　次（四十四五歳）
一半　玉　二　人
一女　中　お　花（二十二三歳）

舞臺下手より上手までズット高二重平舞臺へ波布を敷き處々に亂杭雨落の邊舊式の波板。二重一帶に練塀上手に店をしまひたる葭簀張の掛茶屋この前に床几下手寄に柳の立木。下手平舞臺に屋根舟一艘すだれを下しすべて大川端夜の體波の音佃にて幕あくと汁粉屋荷をおろし其の側に按摩たゝずみ着物の土をはたきながら

按摩　あゝ痛え〳〵乃公の方は目が見えねえからピイ〳〵笛を吹いて歩いてゐるんぢやねえか。それだのにお前さんの方は汁粉とも雜煮とも何ともいはねえからぶつかつて仕舞つたのだ。アヽいてえいてえ。

汁粉屋　汁粉といふ灯をつけて置けば呼んで歩かずとも大丈夫だと思つてゐたがコレヤ按摩さんの方が尤もだ。どこか怪我でもしはしなかつたか。

按摩　何鳥渡ころんだばかり別に怪我はしねえが、お前さんの方は茶碗でも壞しなすつたらう。

汁粉屋　イヤ大丈夫。高のしれた茶碗の一ツ二ツ壞れたら捨てゝしまふばかりだ。

按摩　たいさう氣前のいゝ汁粉屋さんだな。當るといやアお互に縁起がいゝや。中直りに一杯貰ひませうよ。贔屓目にアンモを澤山入れておくんなさい。

汁粉屋　よし〳〵唯今早速こしらへて進ぜるから暫時お待ちなされ。

按摩　オヤ〳〵お前さんそれア誰の聲色をつかつてゐるのだ。商賣物とは大違ひ一杯きこし召してゐるんだな。

汁粉屋　イヤ〳〵酩酊致しては居らぬ。さア汁粉が出來た。鹽梅はいかゞぢやな。

按摩　ウム〳〵馬鹿に甘いな。汁粉屋さんから濃くした日にや仕込がかゝつて商賣になれアしないぜ。

汁粉屋　然らばいかゞ致せばよろしいか御助言が願ひたいな。

按摩　もし〳〵汁粉屋さん目は見えぬがお前さんは根からの夜商人ぢや御在ますまい。大方以前は身分のある方で御在ませう。

汁粉屋　さう見抜かれてはどうも致方がない。いかにもそなたの言はれる通り汁粉屋は昨夜が始めてどうも夜蕎麥

賣の樣に調子よく呼んでは步けぬので、つい貴公に突き當り御無禮を致した次第イヤハヤ笑止千萬な事であつた

按摩　それぢや矢張御身分のある方で被居いましたか。さうと知つたら最前のやうな失禮な事を申上げるのぢや御在ませんでした。どうぞ御勘辨なすつて下さいまし。

汁粉屋　むかしは兎も角今は此の通り汁粉屋のおやぢ。士農工商の差別はもうなくなつた今の世の中、何もあやまるには及ばぬ侍も穢多も同じ事だわ。

按摩　どう云ふお方か存じませぬがお氣の毒な事でムい升手前なぞも以前はあちらこちらの御屋敷へ御出入致し唯の一度もこのやうに按摩上下十六文と外を呼んで步いた事なぞは御座りませぬ。時世時節とは申しながら情ない事でムります。

汁粉屋　イヤ何事も氣の持ちやう一ツぢや。三日乞食をすれば忘れられぬとやら、人間一度悟つてしまへば氣樂なもの。これからはお互に夜の商人。按摩さん御苦勞ぢやが一ツ汁粉の賣聲を敎へては下さらぬか。

按摩　汁粉の賣聲でムいますか。へエ〳〵よろしうムい升。まアあなたの方から一ツやつて御覽なさいまし。

汁粉屋　汁粉々々。どうもうまく行かんな。

按摩　（ブット吹出しながら）　それぢやまるで叱られてゐるやうで御在ます。

汁粉屋　左樣か。汁粉々々。これではどうぢや。

按摩　何だかお汁粉が生ぬるく冷めてゐるやうでそれぢや賣れません。こんな鹽梅にやつて御覽なさいまし。汁粉々々汁粉に雜煮餅――

汁粉屋　成程々々。さすがに貴公はうまいものだな。汁粉々々汁粉に雜煮餅。

按摩　それでよろしう御在ます。

汁粉屋　汁粉々々汁粉に雜煮餅。

（ト呼びかけ汁粉屋荷を擔いで行きかける。）

按摩　アもし〳〵汁粉屋さんお待ちなすつて下さい。只今の御勘定はいか程でムい升。

汁粉屋　イヤあれは賣聲を敎へてくれた御返禮。御心配には及びませぬ。汁粉々々。大分うまくなつて參つたぞ。汁粉に雜煮餅。

（ト下手に這入る按摩後を見送り。）

按摩　氣のさくい面白い方だがお氣の毒な事だ。イヤ人の事より此方も一生懸命に稼がなければならぬ。按摩上下十六文。

（ト笛を吹きながら上手へ這入る。知らせにつき屋根舟の簾を上げると淸元連中羽織袴にて居並び。）

上るり（雁金に結びし蚊帳もきのふけふに殘る暑さを忘れてし肌につめたき風たちて晝も音を鳴く蟋蟀に哀

れをそゆる秋の末。

（ト前幕の芳輔しを／＼と歩み出で）

芳輔　身の振方を考へながら知らず／＼に河岸づたひ、水の流と人の身も丁度夜露にしめる秋の末。思案に餘る事だなア。（ト床几に腰をかけて愁のこなし）

上るり〽わが身一つにあらねども憂にわけなき事にさへ露の涙のこぼれはぎ曇りがちなる空ぐせに夕日のかげの薄紅葉。

芳輔　アノ淨瑠璃をきくにつけ思出すのは辰巳屋の丁吉、久しくたよりもせず顔も見せねえから定めし乃公の事を恨んでゐるだらう。然しかうなつちやもう色戀どころの騷ぎぢやねえ。

（トよき程に下手より宴會歸りの紳士酒井島田の兩人洋服と紋付各折を下げ藝者小米才藏老妓友次半玉二人話しながら出で）

酒井　おいどんには分らんが何かいゝ聲で歌つて居るぢやナカ。コラ小米あれア何か。

小米　あれは淸元でござります。ほんとにいゝ聲で御在ますねえ。

島田　淸元とは何の事か。東京では門付の事を淸元といひ居るか。ドッチヤにしてもヱ丶聲だわい。

才藏　あら旦那門付ぢや御在ませんよ。何處ぞの意氣な旦那方が大方屋根舟か何かで語つておゐでなので御在ませう。

友次　あなた方も劍舞や詩吟はおやめになつて荻江か淸元でもおやり遊ばせよ。ついでの事に三味線もおけいこなすつて小唄の一つ二つも彈いて御覽遊ばせ。どこの藝者衆でも二つ返事で應來と申しますよ。

酒井　怪しからん事を云ふヤッチヤ。堂々たる男兒で三味引く奴があッか。

島田　三味ひかんチウと、わい等はおいどん等の云ふ事を應來とは云はんチウのか。

小米　そんなに應來がお好きなら柳橋よりか新橋へでも行つてお遊びなさいまし。

才藏　さア廣小路までお送り申ませう。

（ト捨臺詞よろしく流行唄にて皆々上手へ這入る。芳輔床几に腰をかけたるまゝ見送り）

芳輔　あんな鯰に荒されちやもう柳橋もおしまひだ。折角の淸元を大なしにしてしまやがつた。

上るり〽梅も櫻も色かへる中に常盤の松の色。

（ト芳輔立上ると下手より藝者丁吉左褄を取り箱屋長箱と提灯を持ち付添ひ出で行きちがひに芳輔の顔を見て）

丁吉　モシ芳さんぢやありませぬか。

芳輔　さういふお前は丁吉ぢやねえか。
丁吉　芳さんよくまアお達者で。（ト前後を忘れて寄添ふ）
芳輔　丁吉つい、たよりもしなかつたが、お前もよく達者でゐてくれたな。
丁吉　芳さんいろ／＼話をしたい事がありますから、此れから一緒に家まで來て下さいまし。小蝶さんも仇吉さんもみんなお前の事を心配して居りますよ。
芳輔　久振に逢つたのだから、いやとは言へぬ處だが、丁吉すまねえが今夜はちつと急ぎの用があるから、改めて明日の朝でも尋る事にしやうよ。
丁吉　その樣にお急ぎなら此處ではなしをしても分る事だから（ト箱屋に向ひ）淸どんお前さん一足先へ行つておくれ。私は芳さんと話をしながら歸るから。
淸吉　姐さんそれぢやお先へ參ります。
（ト箱丁その儘上手へ入る）
丁吉　芳さん何から話していゝのやら胸が一ぱいになつてしまひました。
芳輔　丁吉まアこゝへ掛けるがいゝ。シテ話といふのは、どういふ事だ。
丁吉　外の事でもありませぬ。お前さんの量見がきいて見たいのでムり升。
芳輔　その事なら改めてきかないでも何時ぞや委しく手紙に書いてやつたあの通り。お前がいやになつたのでも心變りがしたんでも何でもねえ。お前も藝者をしてゐれば世間の樣子もわかる筈。以前と今とはすつかり世の中が變つてしまひ、乃公は今だにかうしてぶら／＼と身の振方がつかねえのだから、末は夫婦と云ひかはした約束も、夢を見たとあきらめて、コレ丁吉、お前は乃公にかまはずと何うにともいゝやうに面白可笑しく暮してくれ。
丁吉　それぢや芳さんどうあつても切れてくれとお言ひなさるんだね。
芳輔　何と云はれても先に目當のない今の身の上、どうも別れるより仕樣がねえやな。
丁吉　それ程別れたいとお言ひなら、あんまり煩さく付きまとつてもお前さんの御迷惑になるばかり、死ぬより辛い思をしても、それぢやお前の事はふつつり思ひ切りませう。
（ト丁吉ぢつと芳輔の手を取つて思ひに沈む）
上るり　〽まだその時は卯の花の夏の始に白川の闇はたけれど人目をば。
丁吉　エ、折も折とてあの淨瑠璃。
上るり　〽いとふ隔ての旅の窓飛かふ蝶に燈火の消えて若葉の木下闇。
芳輔　定めし辛い事だらうが、コレ丁吉どうかまア惡く思

つてくれるな。これまで盡してくれたお前の實意仇やおろそかには思はねえ。その中にいゝ時節が廻つて來たらゝあつさり遊びにも來やうから、丁吉隨分身體を大切に、無理酒なんぞ飲まねえ樣にしなせえよ。

丁吉　あい。そんな優しい事をお言ひだと諦めにくゝなるから、もう何にも言つて下さいますな。（ト泣く／＼芳輔の手にすがつて立上り）それぢや芳さん。お前さんも氣をつけてわづらはぬやうにして下さいまし。

芳輔　氣をつけて行きなせえ。（ト互に別れにくき體）

上るり（思はぬ首尾にしつぽりと結びし夢も短夜にさめて恨の明の鐘。

（ト捨ぜりふよろしく丁吉上手へ、芳輔下手へ行き心配の體にてソツと柳の木蔭にかくれる。）

上るり（早や夏秋もいつしかに過ぎて時雨の冬近く散るや木の葉のばら／＼と風に亂るゝ荻すゝき。

（ト時の鐘、丁吉死なうといふ思入にてヅカ／＼と行きかける。芳輔かけ出で丁吉を引留める。）

芳輔　コレ丁吉血相かへて何處へ行くのだ。

丁吉　放して下さりませ。

芳輔　コレサ何をしやうといふのだ。まア靜に氣をおちつけなといふに。コレ丁吉。

（トやつと丁吉を引戻す。この中、）

上るり（草の主は誰ぞとも名を知ら菊の咲出でゝ匂ふ此の家ぞ。

（ト屋根舟を下手に引込み前幕の足立大九郎醉どれの紳士寺本何某を介抱しながら出で、）

足立　寺本君しつかりせんか。

寺本　あゝ醉つた／＼、大に醉つた。

足立　ヤそなたは芳輔　そしてお前は宴會に來てゐた丁吉ではないか。

（トびつくりして寺本の手を放すと寺本その場にへたばる。）

芳輔　足立樣とんだ處をお目にかけお恥かしうムります。

足立　何か仔細のある樣子、兎も角廣小路まで一緒に參らうではないか。僕も醉ぱらひの仕末に困つてゐるのだから御苦勞だが車を目つけて呼んで貰ひたい。

芳輔　はいかしこまりました。

寺本　おい足立君どこへ行つてしまつた。今夜の宴會は君が幹事。君が幹事なら君がのましたのも同然。飲むのは僕の義務介抱するのは足立君幹事の責任ぢや。おや、いつの間にか別賓がゐるな。コレはありがたい。

（ト丁吉を見て其の方へ匐つて行くを足立襟首を捕へて引起し。）

足立　この仕末で實に閉口してゐる。早く車をさがして貰

ひたい。
丁吉　米澤町の河岸に車宿が御在ますからさう申して參りませう。
足立　さうかそれは忝けない。さア寺本君歩きたまへ。
（ト皆々流行唄にて上手へ這入ると下手より前幕のお葉幌なかけた人力車に乗り下地師金兵衛同じく後より幌無しの車に乗りて出で、）
金兵衛　おい／＼車屋さん、鳥渡おろして貰ひませう。
車屋　旦那品川までお出でなさるんぢやねえんですか。
金兵衛　いや鳥渡忘れ物をしたからこゝでおろして貰はうよ。きめた賃錢は拂つて上るから心配しなさんな。
車屋○　さうでムいますか。（ト梶棒を下す）
金兵衛　いゝか通商司の金札貳分が二枚に一朱が一枚だ。
車屋△　へエ／＼これアどうも有難うムいます。おい八州お禮を申しな。お前の分も一緒に頂いたせ。
車屋□　旦那ありがたうムいます。
（ト車夫幌を上げると内より前幕のお葉小包をかゝへて出る。車夫兩人ありがたうム升と下手へ入る。金兵衛見送りながら、）
金兵衛　おちかさん斯うして途中で車を乘換へて行きやア足のつく氣遣はない。（ト近寄り）ヤお前は。
お葉　あれお前は。功さんだと思ひの外どこのお人でござります。
（ト兩人びつくりする。金兵衛コレは好い都合だと云ふ思入あつて、）
金兵衛　お孃さんあなたは常盤町の三井當應様のお宅にお居でなさるお葉さんぢや御在ませんか。マアそんなにびつくりなさらずとも能御在ます。手前はお宅の裏隣におゐでの薗邊芳國様へ御出入を致します金兵衛と云ふ地金屋で御在ます。お孃さま御安心なさいまし。へエ地金屋の金兵衛と云ふ女の大嫌ひな堅藏で御在ますよ。
お葉　功さんはどうしておしまひだらう。こんな寂しい川端にわたし一人、まアどうしたらいゝだらう。
（ト波の音にてお葉金兵衛の言ふ事は耳にも入らず、功を尋ねる體にてうろ／＼するを金兵衛つき從ひながら、）
金兵衛　お孃さま金兵衛がお孃さまのお好きな功さまの處へお連れ申しませう。御安心なさりませ。こんなまアお美しいお孃様お一人夜道をうろ／＼しておゐでだと何様（どんな）わる者が出て來やうも知れませぬ。もしお孃さまや／＼
（ト流行唄にてうろ／＼するお葉の後につきまとひながら上手へ入る。波の音バタ／＼になり下手より前幕の横田功つゞいておちか追掛けながら出で、）
横田　お葉。お葉はどこへ行つた。お葉／＼。

おちか　功さん待つておくれよ。もうかうなつたら死んでも放しやアしないよ。功さんまア待つておくれといふのに。（ト取りすがる）

横田　そんな事をしちや居られない。お葉はどこへ行つた。お葉〳〵。

おちか　いくら呼んだつて來やアしないよ。功さんもうかうなつたらお互に家へ歸れもしないから、間違つたのを幸に功さん、いやでもあらうが此のまゝ私を連れて逃げておくれよ。

横田　おかみさん。さつきからそんな馬鹿な事は出來ないと云つてるぢやないか。僕アぐづ〳〵しちや居られない。

おちか　功さん見込まれたのが因果だよ。あんな人相のわるい地金屋より見れば見るほど美しい役者のやうな功さん。わたしは牛を馬に乘りかへたのだからいやだと云つても一緒に逃げなきやア承知しないよ。

横田　おかみさん其様冗談を云つてる處ぢやない。放しておくれ。エ、モウ放しておくれ。

（ト突飛ばすおちか亂れ髪になり起直つて、）

おちか　惡女に見込まれたがお前の因果。もうかうなつたらかぢり付いても一緒に死ぬからさう思つておくれ。

横田　コレヤ大變だ。助けてくれ〳〵。

（ト變つた流行唄になり追ひつ追はれつおちかは横田を抱きしめ河の中へ飛込まうとするとト兩人別々にころんで平舞臺切穴へ飛入る。）

（ト水の音烈しく上手より金兵衛お葉を追掛けながら出て一寸立廻つて金兵衛お葉の帶をたぐり柳の立木をあしらつてキツト見得おつらへの合方になり。）

金兵衛　開化の世には似合はねえ時代な臺詞は云ひたくねえが、色繪模樣で口説いてもいやだと拔かしやア仕樣がねえ、彫つて嵌めるはお手の物毛彫肉彫ナメクリ彫思ふ存分にした上で、おちかに預けた路銀の代り細工は布目の象眼より、器用に宿場へはめ込むから素直に往生してしまへ。

お葉　年は行かねど士族のむすめ、まさかの時の用心に携へて來た此の懷劍、無禮しやると斬つてしまふぞよ。

金兵衛　エ面倒だ。

（ト立廻りよろしく金兵衛懷劍を奪取つて雙方左右へよろけ金兵衛捨石につまづいて平舞臺上手切穴へ落入り、お葉は下手柳の立木に脾腹を打ち二重の上に倒れると水の音けげしく横田功下手切穴より浮き上り。）

横田　すんでの事に無理心中をするところ泳ぎを習つたおかげにてやつとの事で命拾ひもう駈落はこり〳〵した。

（ト亂杭につかまつて二重へ匐ひ上りお葉の苦しむ躰を聞きつけ歩み寄り。）

横田　やお前はお葉どうしてこゝへ。
お葉　オヽあなたは功さま。
横田　よく／＼盡きぬ二人の仲お葉長居は無用。サ行かう。
お葉　あい。
（ト横田お葉をいたはつて居る中波の音にて知らせなしに道具廻るト同じくブツと高二重、上手絡心に元柳橋を見せ正面屋根をつける割烹古柳亭の門。船板塀忍返し見越の松などよろしく平舞臺一面波布を敷き、波の音にて道具留ると料理屋の門より足立大九郎南邊芳輔藝者丁吉女中お花つき添ひ出で、）
お花　御機嫌よう御氣をつけてお出なされませ。
足立　いろ／＼厄介であつた。（ト女中はいる）
芳輔　足立様かさね／＼の御意見にていかほど旋毛の曲つたわたしとて此度こそ骨身にしみて合點が參りました。明日とは云はず今夜から鍊へた腕に縒をかけ、きつと立派な彫金師になつて御恩返を致升。
足立　それで僕も滿足いたした。丁吉お前もさぞ安心したであらう。
丁吉　ハイもう安心いたすどころかスンデの事に悲しい思をします處、あなた様の御意見は結ぶの神も同じ事、御禮の申様もござりませぬ。
足立　芳輔が心を入替へ家業に精を出しさへ致せば、お前の前借位はこの足立が立替へても苦しうない。何は兎もあれ夜も大分ふけた様子。（ト大きな金時計を取出し）僕はこれにて失敬いたす。
芳輔　それでは改めてお屋敷へ御禮に伺ひます。
（ト足立下手へ行きかけると横田お葉の兩人下手より駈出で突當らうとして、）
横田　これは失禮。
足立　ヤ君は。
芳輔　あなたはお隣のお孃さんでは御在ませぬか。
足立　君は開成校にて僕が教授致す横田功ではないか。
横田　足立先生面目次第も御在ませぬ。何卒お見逃し下さいまし。
足立　仔細もたゞさぬ中その言譯、どうやら君はそれなる娘子と駈落でも致す様子。コレ横田。唯今の世の中を何と心得居るぞ。申迄もなく文明開化男女同權の世の中ではないか。見苦しき夜逃駈落をいたさずとも、誠を以てお互に意中を語り合つた仲なれば、何故公明正大に相方の御兩親へ御相談はなさらぬのだ。芝居でも清元をつかつて道行なぞは、まづ當節では永井荷風のやうに氣障な作者でなければ書きは致さぬぞ。
横田　いかにも心得ちがひを致しました。此の上は先生の御力にて晴れて結婚の出來ますやう御頼み申上げます。

足立　毎日學校にて教を授くる生徒の事あしきやうには致させぬから寸時も早くそれなる娘御を親元へお屆けなされ。拙者も丁度歸り道その邊まで御一緒に參ると致さう。

横田　はいそれではお伴を致します。

芳輔　いろ／＼ありがたう厶ります。

（トみな／＼捨臺詞よろしく足立大九郎横田お葉の兩人を急き立て下手へ入る。新内の流しになり芳輔丁吉兩人後を見送り。）

芳輔　丁吉お前にもいろ／＼心配をさせてすまなかつた。乃公もたうとう我を折つて、これからは家業に精を出すから安心してくれ。川の景色もさつきと違ひ鏡のやうなお月樣、心の雲も吹きはれてしまつた。

丁吉　ほんにこんな嬉しい事はありませぬ。足立樣が前借を立替へて下さればお前と私は女夫づれ。今夜は馴染の船宿でしんみり話がしたいねえ。

芳輔　ム、久振でお前にお酌をして貰ひ家業に精出す前祝、お前の簪か帶留の下圖でも考へるとしやう。

（ト行きかける）

丁吉　アラ芳さん手でも引いておくれなねえ。

芳輔　何だ手なんぞ引いて歩かずとも、一緒になれア乃公ア居職の職人毎日くツついて居られるぢやねえか。さア早く行かう。

丁吉　まる一年たよりをしなかつた其の仕返、うるさくつても我慢をおしなねえ。

芳輔　エ、好加減にしねえ。あんまりふざけると發賣禁止がおそろしいやな。

（ト兩人上手へ這入る。矢張新内の流しにて幕明の汁粉賣下手より出で荷をおろす。按摩の笛犬の遠吠夜舟の梶の響なぞこも／＼聞かせ、十分に夜の趣を見せて知らせなしにいつとなく幕。）

（大正九年七月作）

夜網誰白魚　二幕

此世の縁薄氷と見せて沈みし水鳥のつがひ離れし傳次郎行衛いづこと白瀧をさがす闇夜の向島父留藏の意見さへ馬の耳に吹く風もまだ春ならぬ川舟に隱居の新城重五郎出入の政吉供につれ自慢話の網打にかゝる得物は白魚ならで縺れし糸の白瀧をかくまふ月日も昨日今日廻い廓の若衆をおどして歸す雨やどりそつと忍びし傳次郎が巧みの程も破疊こぼれし酒に重五郎毒と感付く眼力は古き趣向に似たれども筆の葭蘆隅田川見飽きぬ風情をたよりにて

序幕　向島渡しの場／三圍堤の場

一新城重五郎　町方同心隱居(四十五六歲)
一手先の政吉　(三十歲位)
一遊人傳次郎　船頭留藏の悴(二十五六歲)
一船頭留藏　(五十四五歲)
一華魁白瀧　(二十一二歲)
一仕出　四人

上手へ寄せて斜に高二重。此より棧橋をつけ袢桁に渡船つないであり平舞臺一面の波布枯蘆をたくさんに置き向隅田川上流を見たる遠目の書割凡て白鬚邊渡場夜の體。佃のさわぎに波の音をかぶせ幕明くとバタバタにて遊人傳次郎若旦那のこしらへ但し川より這ひ上りたる體二重奥より驅出であたりを見廻し渡船の船板をめくつて船底にかくれる。ト上手より廓の者四五人玉近江と書いたる提灯を持ち臺詞を言ひながら出る。

○　これほど手分をして搜してゐるのだからもう大概わかりさうなものだ。

△　どつちの岸へも泳ぎついた樣子もねえが不思議な事もあるものだな。

□　それぢややつぱり本氣で心中をしたんだらう。

●　夏ならばいざしらず此の寒さぢや泳げる奴でも助かるめえよ。

○　念の爲めもう一度そこらをさがして引上るとしやう。

(ト皆々下手へ入る。佃の合方かすめて傳次郎船より半身を出し、)

傳次郎　話の樣子ぢや好塩梅に白瀧は追手のものにはつかまらなかつた樣子だが何を云ふにも水はつめたし汐は早し泳ぎも知つてゐたやら知らぬやら狂言でした心中から

可愛い女を殺したか、ふびんな事をしてしまつたな。
(ト途方にくれる體。下手より船頭留藏の扮にて、)
留藏　大汐だから上手へ行くのは骨が折れますヨ。
(ト傳次郎びつくりして棧橋より土手へ上り遊人らしく尻を端折つて上手へ入る。)
(ト下手より町方同心の隱居新城重五郎紺手拭を冠り網打の衣裳の上に褞袍をひつかけ手先政吉實體なる町人の風にて船頭留藏印半纏白髪頭網舟を漕ぎ出る。)
重五郎　留藏そこらでもやつて吳れ、今夜は陸の方がいゝやにさう〳〵しいせゐか、さつぱり捕れなかつたな。
留藏　夜逃げでなければおきまりの心中でムりませう。
政吉　提灯をつけてまだあつちこつちと大分さがしてゐる樣で御座ります。
重五郎　かう寒くなつて來ちや身投や心中の時候でもあるめえ。政吉一杯やつて暫く暖まるとしやうか。
政吉　旦那寒いもんだから一人で頂いてしまひました。德利はもうこの通り二三杯もむづかしさうで御座います。
重五郎　丁度いゝ處に渡場がある。留藏御苦勞だが一升買つて來て貰ひてえな。土手を下りたらまだ起きてゐる家があるだらう。
留藏　ナニ外の御用とはちがひます、寢てゐたら叩き起すから御安心なさいまし。

(ト留藏二重上手へ入る。)
重五郎　政吉もう夜網のお供はこり〳〵だらう。馬鹿に寒むさうな風をしてゐるぢやアねえか。
政吉　まともに筑波下しを食つちやカラもう意久地が御在ませんや。それにしちやア旦那はさすがに御馴れなすつたもんでム升ネエ。
重五郎　寒鮒と一口にもいふ位寒くなつてからがこつちの時節だ。殘つた酒があるなら一杯引かけてゆつくりおれの手並を見るがいゝ。
政吉　いつも御はなしを伺ふばかりだから今夜はゆつくり拜見をいたしませう。
重五郎　投網といふ奴は四ツ手や釣とはちがひ腰の調子からきめて行かなくつちやならねえものだ。
(ト重五郎腰蓑をつけ網打の支度をする。)
政吉　旦那どう見ても網舟屋の御亭主といふ風でム升ネ。盲目縞の腹掛に辨慶縞の鯉口半纏それに腰蓑をつけた御樣子どう見たつて八丁堀の旦那方とは思はれません。
重五郎　それもその筈だ、おれも町方の同心をやめ十手を持たねえやうになつてからもう彼れこれ一年あまり盆も彼岸もかまはずに毎日かうして無益な殺生をしてゐるがしかし以前の身分にくらべればよしんば親の命日に鳥や魚の殺生もこの重五郎にはこの上もない慈悲善根、政吉

お前はこの中貸本屋と見せかけて方々の内所向へ入り込み色々な事を聞出し大層御役に立つといふ話だがもう好加減に乃公を見習ひ早く堅氣になつた方がいゝぜ。

政吉　ヘエそれア旦那の仰有るまでもなく手前もその中に小金の少しもたまつたら女房を貰ひ何か小商ひでもしたいとは思つてゐるんでム升が旦那、人の厭がる家業といふものは何によらず止められねえもので御在升ネエ旦那わつちやいつもこんな事を考へて居り升ヨ、掏兒巾着切火つけ泥棒家尻切さういふ奴等の後をつけ悪事をさがして歩くこちと等は手先、おんみつ、岡つ引まづ取りも直さず鼠と猫といつたやうなもの鼠はコツソリ壁に穴をあけ尻尾で油もなめる奴猫の役目のこちと等は釜の下やら棚のすみ十手の爪をとぎすまし御用といつて飛びかゝる其時までの手立順取り面白くて止められさうもムません。

重五郎　手前がさういへば實は己も時折昔の事が思出されるので投棒や捕縄でも投げるつもりで夜網を打つて遊んでゐるのだ。夜ふけに舟を漕ぎ出して汐の加減を見はからひこゝぞと思ふ水の上ざんぶり一と網打込む呼吸魚と人間得物にちがひはあるなれど手分をなして網を張り科人を召捕るのも同じ事だ。

政吉　それぢや旦那もまだすつかり佛にお成りなすつたのぢやムませんネ。

重五郎　女房と子供に死なれた時は鬼の目にも涙とやら緋房のついた十手はもう二度とは持つめえ紺下へ一文字を白く染抜いた一重の羽織はもう着めえとまで思つたが生れついての慈悲知らずさう／＼念佛ばかり稱へちや居られねえや。政吉以前八丁堀にゐた頃は投棒の名人と奉行所からも御褒美を頂いた重五郎今夜は一つ投網で昔の手並を見せてやらう。政吉一杯おれにもついでくれ。

政吉　旦那もう一滴もムません。留蔵はどうしやがつた。

重五郎　氣のきかねえ親爺だから大川端の方へでも行つた日にやいつ歸つて來るか知れねえぜ。

政吉　そいつア大變だ旦那それぢやわつしが駈出して行つて參りませう。

重五郎　濁りでもかまはねえ早い方がいゝ。

政吉　かしこまりました。

（ト政吉二重上手へ入る。重五郎襦袢をぬぎ網の支度をしながら、）

重五郎　待つてゐる中一網入れて見やうか。

（トたち上つて網をさばきちつと水の上を見込むと水音はげしく枯蘆の間より玉近江やの抱へ白瀧崩れたるシャグマの毫胴抜の襠裃華魁のこしらへにて浮上り舟べりにつかまる。）

重五郎　や、お客様か。こいつアまだ呼吸があるやうだ。

（ト重五郎舟の上へ引上げ）

白瀧　コレ女中衆しつかりしなせえ。ム、もう氣が付いたか。

（ト重五郎介抱しながら）

白瀧　ありがたうムい升おかげ樣で氣がつきました。

重五郎　髮の形から樣子なりふり、それぢや最前橋場の渡で聞いた心中。

（ト白瀧びつくりして逃げやうとするのを重五郎そのまゝ押へて）

重五郎　コレサびつくりするにや及ばねえ。そのなりで陸へ上れア人目につく惡いやうにはしねえからマア靜にしておゐでなせえ。

白瀧　どうぞ御慈悲にこの場の難儀お助けなされて下さりませ。

重五郎　いづれ仔細のある事だらう。其のまゝぢや寒からうコレでも肩にかけてゐるがいゝ。

（ト重五郎襦袢を着せかけ）

もうぢき酒を買つて歸つて來るだらう、こつちへ寄つて篝の火にでも當るがいゝぜ。

白瀧　いろ〳〵御親切御禮の申樣もムませぬ。

（ト白瀧かゞり火のそばへ寄る重五郎ぢつと樣子を見詰めて）

重五郎　身投にしちやア水もさつぱり飮んぢやゐねえ樣子事によつたら白浪か。

白瀧　エ。

重五郎　ナニ白魚だと云つたのよ。

（ト竿にて舟をつき出すを道具替の知せ佃節にて廻る。）

平舞臺向島土手の上の心にて切出しの立木よろしく正面一帶隅田川より今戸邊の岸を見たる灯入遠見の書割水の音狸囃子にて道具留ると船頭留藏酒德利を下げ上手より出で、

留藏　晦日の大潮で月がねえから鼻をつまゝれても分らねえ。

（ト此の時下手より前の場の遊人傳次郎出で突き當る留藏よろけて德利を落す）

留藏　ヤ大變々々此の野郎途方もねえ奴だ。

傳次郎　眞暗なのでツイ麁相を致しました御勘辨なさつて下さいまし。

（ト其まゝ行かうとするを引留め）

留藏　突當つたばかりなら量見しやうが旦那が御待かねの大事な酒をこぼされちや勘辨ならねえ。

傳次郎　ツイ麁相をしてお氣の毒な事を致しました、どうぞ量見なさつて下さいまし。

（ト言ひながら傳次郎又々行きかける）

留藏　マア待ちねえお前さんも妙な人だな、そりやお互に麁相で突當つたばかりなら詫見もしやうが此方の返事も聞かねえ中に行かうとするはどうしたものだ、やお前は伜の傳次郎。
傳次郎　父さんかコリヤかうしちやゐられねえ。
留藏　コレ待て伜〻待てといつたら待たねえか。
（ト下に引張る合方になり）
家を飛び出してからもう三年手癖のわるい手前の事こんな處をうろ〳〵してゐるからは大方惡事を働いたにちげえはねえ。コレ傳次郎手前とはちがつて正直を寶物の留藏は手前達を御用にする旦那の御伴をして一升買つて來る途中手前をつかまへたのも親子の因縁。どうせ一度は御繩にかゝる野郎だからおれが自身でしよ引いて行きコレコレの譯合とお慈悲を旦那に願つたら少しは罪も輕くならう。サ傳次郎こゝで逢つたが百年目おれと一緒に來やアがれ。
傳次郎　とつさんまア待つてくれ、捕繩はすきでもまだ名乘つて出る程の惡事はしやアしねえから今夜のところは勘忍しねえ。とつさん時節が來りや家へ歸つて肩の一つも叩いてやるから。とつさん放してくれ。
留藏　イヽヤ放さねえ惡事がなけれア猶の事おれの意見はきくめえから旦那方にお願申しきびしく意見をして頂くからどつちにしても一緒に來い。
傳次郎　とつさんお前もそれぢやアあんまりわからねえといふものだ。
留藏　わからねえのは手前の事だ。
（ト兩人互にいどみ合ふトヽ傳次郎留藏を下手に突き放し上手へ行きかける）
（ト重五郎白濾手拭にて顏をかくし襦袢を引かけ出て傳次郎に突き當る本釣鐘を打込んでだんまりの見得〳〵下手より政吉一升樽を下げ來り白濾に突當つて一升樽を落す。五人さぐり合つてトヽ重五郎白濾の手を取つて花道へ行き傳次郎は假花道へ出る政吉留藏舞臺に居殘り德利をさぐる此の模樣よろしく拍子幕）

二幕目（大詰）

元柳原新城重五郎妾宅の場
神田川休茶やの場
元柳原重五郎妾宅の場

一新城重五郎　町方同心隱居、（四十五六歳）
一遊人傳次郎　（二十五六歳）
一貸本や政吉　實は手先　（三十歳位）
一船頭留藏　（五十四五歳）
一廓の若者喜助　（四十歳位）
一判人熊藏　（三十歳位）

一 開者お瀧　實は華魁白瀧（二十一二歳）

一 女髪結お辰　（三十歳位）

一 掛茶や女房お松　（二十五六歳）

本舞臺四間常足の二重本疊本緣つき正面出入の襖ハメ込み箪笥其の上戸棚次に床の間下手出入の障子床の間に犬張子を置き子供のあることを知らせ平舞臺いつもの處門口。下手黒板塀に見越の松上手船板塀にて見切り凡て元柳原新城重五郎妾宅の體。二重に開者のお瀧髪を結終り女髪結お辰あたりを片づけて居る體。節屋の唐八節流行唄にて幕明く。

お瀧　お辰さん掃除ならあとでわたしがするからまア一服してお休みよ。

お辰　ナニわけはございませんついでに掃いておきませうおひとりぢや大抵ぢやアございませんね。

お瀧　早く變りの女中が來てくれないとほんとに困つてしまふよ、旦那のお世話だけならいゝけれど、やつかいな子供まであるんだから。

お辰　その變りどんなにおたのしみだか知れやしません。

お瀧　樂しみどころか苦勞の種。

（トお瀧愁のこなし。同じ流行唄にて貸本や政吉雪駄股引尻端折にて貸本を高く積みたる荷を背負ひ向ふより直に門口へ來り。）

政吉　ごめん下さいまし。好い陽氣になりました。

お瀧　おや貸本やさん。お前さん昨日來る筈ぢやアなかつたのかい、旦那が大そう待つておゐでだつたよ。

政吉　左樣でムましたかどうも申しわけがございません。ツイ昨日は芝の方のお得意先で話しこんでしまつたので伺へなくなつてしまひました。日が長くなつたやうでもまだお彼岸前。ぢき暮れてしまひます。

（トせりふの中政吉荷をおろし貸本を出す。お辰身支度よろしく、）

お辰　どれ〳〵わたしもおしやべりをしてゐずといそいで廻つてしまひませう。

お瀧　御苦勞だつたねこれアお辰さん少しばかりだが坊やになにか買つておやんなさい。

おたつ　アラ御新さんいつも〳〵こんなに頂戴してお氣の毒樣ですね、貸本やさん御ゆつくりなさいまし。

（トおたつ下手へ入る、政吉貸本を取出し）

政吉　これが昨日もつて上る筈の甲越軍記のつゞき二篇に三篇とそれからこれが御新さんの分でございます。前のがおあきでございましたら、おあとでどうぞおとりかへを願ひます。

お瀧　今しがたお湯にお出なすつたのだからいそがしくなければ待つておゐで、もうお歸りになる時分だよ。

政吉　さやうでございますか手前はまた旦那のことだから釣にお出だとばつかり思つて居りました、このいゝ陽氣に、殺生の好きな旦那がお風呂とは珍らしう厶升ね。

お瀧　今日はお前さんだれかの御命日だといつてお出なすつたよ。私よりかお前さんの方が長年の御出入なら、知つてゐさうなものぢやないか。

政吉　御新さんつひ忘れるといふわけぢや厶ませんが商賣にかまけて氣がつかずに居りました。御新さん今日は先のおかみさんと坊ちやまの御命日で厶います。

お瀧　おかみさんと坊ちやまと御命日が同じ日なのかへ。それぢやお產か何かでおなくなりになつたのだね。

政吉　お產ならまだいゝんでございますがね、實は御新さんコレア内所のお話で厶升よ、手前がこんなお話しをしたなぞとおつしやられちや困りますが實はお二人さんともお參りのかへりがけ一ツ目で渡船がひつくり返り、たうとうおなくなりになつたんで御座いますよ。それから旦那も大分氣がよわくおなんなすつたものと見えまして間もなく弟御さんを御養子になすつて八丁堀のお役をつがせ御自分はかうして御隠居なすつたので厶升。

お瀧　さうかい。然しいくら御隠居をなすつたと言つても以前が以前だと思ふとお前さんだから遠慮なしにいふけれど、かうしてお世話になつてはゐるものゝ何となくこはいやうな氣がしてならないよ。

政吉　それア全く御尤もで厶升よ、手前なんぞもこんなに長らく御贔屓になつてゐながらさう申しちやすみませんが全くのところ御新さんでもおいでゞなけりやかうしておしやべりをする氣にはなりません。御新さん時に妙なことを伺ふやうでございますがねアノ御新さんはこちらにおいでになるまでは吉原にお居でだつたといふお話し實は御新さん手前も此の中ちつとのぼせてゐる處があるんで厶升よ。それでこんなことをおきゝ申すのでございますがアのおいらん衆には勤めの憂晴しとか言つてみんなてんでにいゝ人があるといふ話で御座いますがそりやほんとうでございますか。

お瀧　そりや大せいのお客の事だから中には一人や二人かはいと思ふ人も出來ないことはないだらうよ。本政さんお前どこぞのおいらんのいゝ人にとられておゐでなのかえおたのしみだねえ。

政吉　それがさうとはつきりわかつてゐりや何も心配する事アないんで御座いますよ、御新さんからいろ／＼御話をうかゞつておくとこんど奴にあつた時にもどの位こつちのためになるか知れませんからそれでこんな不躾なことをおきゝ申すんで御座いますがネエ御新さん仲におゐでの時分にや御新さんは一體どんな風のお客がすきで厶

いましたエ。

お瀧　わたしの好きなお客。

政吉　御新さんのいゝ人といふのはどんな方でございました。お侍で御座いますかそれとも問屋の若旦那で御座いますかどつちにしても定めしいゝ男でございましたらうね。御新さんもう過ぎさつたことだからいゝぢやございませんか、一つばなしにおきかせなすつて下さいまし。

（ト政吉それとなくお瀧の心をさぐらうとする。お瀧思入あつて）

お瀧　お前さんはほんとに調子がいゝからツイうか〳〵おじやべりをしてひよつと旦那の耳へでも入らうものならそれこそどんな目に會ふか知れないぢやないか。そんな話はもうよしにしやうよ。

（トお瀧横を向いて鏡臺を片づける政吉調子をかへて）

政吉　御新さん、つまらないことをおきゝ申して全く手前がわるう御座いました、どうぞ御新さん旦那の御留守に上つてつまらない御しやべりをしたなぞと仰有つて下さいますな。それぢや御新さんお歸りになりましたら御本を差上げて下さいまし今日はまだ二三軒下谷の方を廻らなければなりません。

（ト政吉臺詞を云ひながら荷をしばる。誂の唄になり向より新城重五郎坊主臺手拭を二つに折つて頭の上にのせ湯歸の體にてすぐに舞臺へ來る。政吉わざと驚いたやうに、）

政吉　オヤ旦那お歸りなさいまし。

重五郎　政吉大さう今日は背負込んだナ。何だもう歸るのか。

（トすぐに二重に上るお瀧着物を着せかける。）

政吉　ヘエ方々様からお小言ばかり頂戴いたしますから今日は朝から汗水たらして歩き廻つて居り升。旦那先日のつゞきは二篇から三篇まで都合六册差し上げて置きました。

重五郎　おれも今日はこれからお墓參に行くから又ゆつくり明日にでも出直して來な。

政吉　ヘエどうもおやかましう厶ました。

（ト兩人お瀧へ知れぬやうにそれとなく思入あつて政吉向へ入る。）

重五郎　坊主はおとなしく寢てゐるやうだな。

お瀧　今がた乳を呑ませてやりましたからスヤ〳〵寢て居り升。

（ト重五郎二重に置いてある貸本を取り上げ、）

重五郎　いやこんなものを見て居るとまた遲くなつてしまふお瀧羽織を出して呉れ。

お瀧　旦那御紋付で厶いますか。

重五郎　女房と子供の葬参り儀式ばるにも及ぶまい。お瀧實はお前と云ふ可愛い女が出來て見るともう死んだ女房の墓参りなんぞは御免を蒙りたいがこれも浮世の義理で仕方がねえ。

（トお瀧後から羽織を着せかける。）

お瀧　早く行つて早く歸つておゐでなさいまし。何か見つくろつて御酒の支度をして置きませう。

重五郎　親の命日ぢやねえから生臭くつてもかまはねえ。章魚の足でも取つて置け。

（ト重五郎向へ入る。お瀧ソツト舌を出して門口を閉める。ト手障子の内にて赤子の泣聲聞え。）

お瀧　エ、また餓鬼が泣き出した。風邪でも引いて死んでしまへばいゝのに。

（トお瀧立上つて上手の障子を明け枕屏風の中をのぞき。）

お瀧　子供の寢顔は佛の樣だといふけれどわが兒ながらいやになる。あのこはらしい且那そつくり因果の種とはよくいつたものだねえ。

（ト枕元の風車を投すて立上って愁に沈む體此間に風の音かすめて下手より遊人傳次郎藍みぢんの着つけ頬冠り半纒をたゝんで肩にかけそつと門口をのぞいて）

傳次郎　御免なせえまし一寸御たづね申升。

（トお瀧氣味のわるい體にて）

お瀧　何の御用か知りませんがあいにく留守でムい升よ。

傳次郎　留守なら丁度好鹽梅だ。まあ御免なせいまし。

（ト門口を明けて入る。）

お瀧　さういふ聲は傳さんぢやないか。

傳次郎　お瀧イヤさ白瀧久振りだな。

（ト頬冠を取つて緣側に腰をかける。）

お瀧　傳さんよくまあ達者で。

（ト驅け寄るを傳次郎つき退け。）

傳次郎　馬鹿にするのもいゝ加減にしろ。

（ト尻をまくる謎の合方になり。）

おいお瀧忘れもしめい去年の正月心中と見せかけて廐の年季を踏むつもり橋場の河岸からざんぶりと飛込んだまではよかつたがお前をしばつた帶がとけわかれ〳〵の水の中おれは夜つぴてあちこちとお前の行方をさがす中闇ではしきりに追手の聲どうする事もできねえ故まづ其の晩は姿をかくしあくる日そつと其の邊を一心不亂にさがしたなれど矢つ張り生死が知れねえから狂言でした心中がほんとの事になつたのかと旅をかせいでゐる中も心で回向をしてゐた處その白化か黒塀におあつらひの道具立切られ與三のせりふぢやねえがオイお瀧壹分や貳分ぢやすまされめえぜ。

お瀧　その腹立は尤もながら私の云ふ事も一通りお聞だから聞いてお呉れ。

傳次郎　廓の年季を數へたらまづ百兩にはなる仕事文句があるなら早く云つてしまへ。

お瀧　何から話をしやうやらお前さんも知つての通りもともとわたしは川育ち少しは泳ぎも知つてゐるから流されながらもどうぞしてお前にめぐり逢ひたいと浮きつ沈みつする中にこゝの旦那に助けられ家までつれて來られたが賴むお前の行方は知れず引戻されゝば親方の責折檻がこはい故暫く時節が來るまでといや／＼ながら世話になつてゐたんだから傳さん後生だからこのまゝ一緒に逃げておくれよ。

傳次郎　それぢや矢つ張りこのおれと。

お瀧　傳さんお前に逢ひたいばつかり一年あまりの辛いしんぼう察しておくんなさいよ。

（ト男の膝に泣伏す。）

傳次郎　さう聞く上は面目ねえ實は通りがかつた門口でお前を見かけた其の時は姉さんかぶりの手拭に襷をかけた世帶ぶり命とほつた二の腕の名前もとうに消したかと思へば無上に腹が立ち生かしちや置かねえつもりだつたが今になつちや面目ねえ。

お瀧　傳さん面目ないのは私の事いや氣がされると困るからいつそお前の見る前で。

（トお瀧赤子を殺す心にて立掛る。）

傳次郎　お瀧どうするのだ。

（ト此の時上手にて赤子の泣き聲。）

お瀧　傳さん勘忍しておくれ勤めした身のかひもなくとんだへマな事をしたんだからさ。

（トお瀧傳次郎の止めるのを振拂つて行かうとする。傳次郎押へて。）

傳次郎　何もお前の量見一つ罪な殺生するにや及ばねえ。お瀧そんな事より二人が行先お前どうするつもりだ。

お瀧　留守を幸唯た今お前と一緒に逃げるつもりだから傳さん早く支度をしておくれ。

傳次郎　お瀧相手はたゞの野郎ぢやねえぜ。近處で樣子を聞いて見れば定廻りの犬だといふ話ぢやねえか。此の場は難なく落ちのびても睨まれた日にやお江戸は勿論關所關所が越されやアしねえぜ。

お瀧　傳さんどうしたらいゝだらうねエ。

傳次郎　後腹のやめねえやうに一思にやつてしまふのヨ。

お瀧　傳さんしつかりしなくちやいけないヨ。柔術も劍術も免許だと云ふ話だから。

傳次郎　不意打をくはせれア免許もくそもあるものか。おいお瀧。

（ト引寄せて囁く。）

お瀧　それぢや今夜お酒の中へ。

傳次郎　コレ。

（ト押へるを道具變の知らせ合方早めて道具廻る。）

平舞臺上手葭簀張の茶屋九尺程の屋體この内床几を置き向一面神田川柳原の土手より内神田の町家の屋根を見たる書割上手寄竹を立掛けたる見切下手は籾倉の壁にて見切り凡て神田川向和泉橋邊休茶屋の體。こゝに廓の若者喜助判人熊藏床几に休んでゐる。見世物の鳴物に雨の音をかぶせて道具留る。

（ト上手より仕出し四五人猿廻中間丁稚兒守娘等思ひ思ひのこしらへにて雨だ〳〵と皆々捨臺詞よろしく下手へ駈入る。）

喜助　出掛けやうと思つたら何だ雨が降つて來たのか。ナニ大した事はあるめえ。

熊藏　明神さまの方は青い空が出てゐるから通り雨だらう。おい喜助どん馬鹿に大粒な雨だせ。

喜助　熊藏お前にやお誂への雨だなア。仕方ねえ小降になるまでもう一杯やるがいゝ。

熊藏　さうか。それぢやお神さんもう一本つけて貰はう。

（ト矢張り雨車にて新城重五郎上手より出で、）

重五郎　かう降つて來ちや仕様がねえ一休みして行かう。

（ト床几に腰をかけ手拭にて着物をふいてゐる。茶店女房茶を持ち出で。）

茶や女房　さぞ御困りで御在ませう。お茶を召上りませ。

重五郎　まるで夕立のやうだな雷の鳴らねえのがまだしもだ。

茶や女房　おひかりになつたらお客様なんぞは置去りに逃げ出してしまひます。

（ト此中喜助熊藏こなしあつて喜助揉手をしながら、）

喜助　へエもし旦那御機嫌よろしうム升。

重五郎　誰かと思つたら玉近江の喜助に熊藏ぢやねえか。

熊藏　へエ旦那手前の名まで御存じでゐらつしやいますかあり難うム升。

重五郎　お前方の方はもうぢき櫻時さぞ賑な事だらう。

喜助　旦那たまには御氣晴に手前共へも御出でなすつて下さいまし。上玉が揃つて居ります。

重五郎　はゝ喜助人を見て法を說けだ。おれなぞは今日の雨同然大ぶりにふられるばかりだらう。時に喜助お前方二人も揃つてこの邊まで出歩いてゐるのは上玉の買出しか、それとも駈落者でもさがしてゐるのか。

喜助　へエ流石は旦那の御目鏡通り駈落ち沙汰で手こずつて居り升。

重五郎シテ其の居處はもう突留めたか。
熊藏　ナニまだほんの當りがついたと云ふばかりはつきりした事はわからねえんで厶升。何しろ旦那もう一年越しチツト月日が立ち過ぎてゐますからなか／＼當りがつきません。
重五郎　一體そりやどこの華魁だ。
熊藏　玉近江やの白瀧さんといふおいらんで厶升。
喜助　ちよいと仇つぽい華魁で厶ましたがネその頃しげしげ通つて來た澤間のお客と橋場から身投をしたので御在ます。然し後で様子をさぐつて見ればその客といふのは四谷邊の遊人傳次郎といふ事がわかりそれぢや狂言の心中にちがひはないとその當座は隨分手分をして諸處方々さがし歩いたので御在升が何の手がゝりも無かつたので親方初め手前達もそれぢや矢つ張り鐵火な様でも女は女、年季の長いを苦に病んで全く死ぬ氣になつたのかとまあそれなりになつて居ました處ついこの頃になりましてアノ元柳原の近邊とかで白瀧おいらんによく似た女を見かけたと知らせるものが御在ましたので實は様子をさぐりに出掛けて來たので厶升。マア何とかして早くさがしてえもので厶升。
熊藏　喜助どんわるい奴等を御用にするのが旦那方の御役柄駈落者をさがす途中でかうして旦那にお目にかゝつたのは喜助どん何より縁起がいゝと云ふものだ今日はきつと知れるにちげえねえ。
喜助　雨もどうやら止んだ様子。
熊藏　御免を蒙つて出掛けるとしやう。
（ト喜助茶代を置く。茶屋女房禮を云ひ水を汲みに入る。兩人捨臺詞よろしく花道へ行きかける。重五郎最初よりぢつと思入あつて）
重五郎　オイ喜助ちよつと待つてくれ忘れてゐたがお前に一寸頼みたい事があつた。
喜助　ヘエ旦那何か御用で御在ますか。
重五郎　ちつと頼みてい事がある誰もその邊にゐやしめいな。
熊藏　お神さんは丁度水を汲みに行つたところ往來も雨が降つたので人通りが厶ません。
重五郎　熊藏御苦勞だがお前それぢやソコで一杯やりながら見張りをしてくれ。
熊藏　ヘイよろしう厶升。
重五郎　喜助頼みといふのは外でもねえ今お前方がさがしてゐるお瀧の事だ。
喜助　旦那それぢや白瀧さんの行衛を御存じで居らつしやいますか。
重五郎　存じてゐるどころか乃公の家にゐるのだ。

兩人　エあの旦那の處にへエさうで厶升か。

重五郎　何もそんなにひつくりする事はねえ。あの晩夜網で助けた時はすぐにも廓へ知らせてやらうと思つた處どうぞ後生と泣きすがられよんどころ無く家まで連れて歸つて見ると丁度おれも男一人で不自由なところからそのまま情をかける中子供が出來てしまつたのでイヤハヤどうする事も出來ねえから今日までそのまゝにして置いたのだ。

喜助　旦那の處にかくまはれて居ちやアコレアわからねえはずだ。旦那誠に申しにくい事で厶升がアノ旦那はこの先ともに白瀧さんをおそばにお置きなさるおつもりで厶升か。

重五郎　喜助御前も野暮な事を聞くぢやアねえか置きたくなけりや此方(こつち)からとうに返してやらア。

（ト重五郎煙草入を仕舞かける。喜助熊藏顏を見合せ思入あつて熊藏進出て、）

熊藏　へエもし旦那こんな事ア申上なくつてもとうに御承知で厶ませうがアノ白瀧さんの年季は五年で百兩それが旦那やつと一年かせぐか稼がねえ中にあの始末になつたので實は證文へ判まで押して世話をしたこの熊藏抱へた御主人はじめ方々へ顏出しが出來ないので困つてゐるので厶升。旦那の事だからその邊のところは手前が御願ひ申すまでもない御如才がないにはきまつて居りませうが今も申上るやうな譯で厶升からモシ旦那唯今すぐと申すわけぢや厶ませんがへエ旦那。

重五郎　おい熊藏何をぐづ〳〵言つてゐるんだ。くだ〳〵しい泣言を聞く位ならナニモおれの方から呼び留めて手をつくまでにして頼みアしねえ。

熊藏　旦那それぢや白瀧さんの前借はどう成るので厶升。

重五郎　たつてほしいと云ふなら返してやらう。五年で百兩證文通りそつくりそのまゝ返してやるが手前の方でもその代り大金のかゝつた勤の女、川へ飛び込み死ぬ處おれのおかげで助かつた其の禮から先に持つて來い。

熊藏　エアノ助けた御禮。

重五郎　命を助けた其の上に一年あまり三度(みたび)の食料(くひれう)から藥代積つて見たらいくらになるか、熊藏御前に話をしてもわかるめえからこれから乃公がぢか〳〵に玉近江やへ掛合に行くからサア熊藏案内しろ。

喜助　モシ旦那御待ちなすツて下さいまし全く手前共の量見違ひ飛んだ事を申上ました、御禮の處はあらためて喜助が御伺ひに出ますから今日のところは何分このまゝ手前におあづけなすつて下さいまし。

重五郎　お前の方からおとなしく出れア何も此方から難題をいふわけはねえ。百兩の年季證文命助けた返禮を差引

いておれがいゝやうに扱つてやらうからそれぢや喜助早く歸つて證文を持つて來い。

（ト祝儀をつゝんで投出し立ち上つて）

いゝ鹽梅にすつかり上つた。

（ト空を見ながら懐手するを道具替の知らせ喜助熊蔵の兩人あつけに取られて紙包みを開きながら重五郎の後姿を見送る。時の鐘にて道具廻る）

（前の場重五郎妾宅の場に戻り同じく時の鐘風の音にて道具留ると謎の獨吟になりお瀧上手より出で行燈に灯をともし手水鉢にて手を洗つてゐると傳次郎德利を持ち同じく上手より出で）

傳次郎　お瀧藥はこの通り調合して置いたぜ。

お瀧　傳さん今日はいゝ鹽梅お午の御飯もたべずに出掛けたからきつとお腹をすかして歸つて來るにちがひはない。すぐにお燗をつけて飲ましてしまはうよ。

傳次郎　空腹に一杯やりやア藥のきゝ目は見てゐる中だ。それぢやお瀧。

お瀧　傳さん。

（ト獨吟にて傳次郎は緣の下へ忍び入りお瀧は德利を持つて下手へ入るとよき程に貸本屋政吉羽織着流しにて下手より出で門口へ來り締りのしてあるのを見て花道へ行きかけると向より新城重五郎一寸着物の裾をまくり出で行き逢ふ。）

政吉　モシ旦那お瀧さんの一件が知れたやうでム升から一寸御知らせ申しに參りました。

重五郎　政お前もなか／＼素ばしこく役に立つやうになつたナ。然し其の事なら途中で一杯呑まして話をつけたからまあ安心してくれ、おい政今日はこれで我慢しろ。

政吉　旦那どうも相濟みません。

（ト政吉金を貰つて向へ入る。重五郎門へ手をかけ。）

重五郎　おいお瀧今歸つたぞ。

お瀧　ハイ／＼お歸りなさいまし。

（トお瀧上手より出で門口をあける。）

重五郎　雨に降られてひどい目にあつた。

お瀧　傘をとゞけて上げたいと思つても世間を忍ぶ身の上どんなに心配したか知れないよ。

重五郎　おれはまたハネを上げると後でお前に世話をやかすと思つて氣をつけて歩いて來た山越をしたよりもくたぶれた。

（ト緣側に腰をかけ足袋をぬいで二重へ上り羽織をぬぐお瀧重五郎の羽織と脇差を隅の方へ片づけ）

お瀧　お前さん嘸お腹がおすきだらうね。今日はお午も上らずお出掛だつたから急いで仕度をしませうよ。

重五郎　いやお瀧さういそぐには及ばねえ鳥渡話があるか

らこゝへ來な。

お瀧　また旦那手を握つたりなんかしてふざけるのは御免だよ。早く御燗をつけて來るからおとなしく待つておゐでなさいよ。

重五郎　途中で一杯やつて來たからまあ鳥渡こゝへ來な。

お瀧　旦那途中で上つておしまひなのかえ。

（トお瀧どうしやうかと云ふ思入。重五郎更に氣もつかず。）

重五郎　家でお前が仕度をしてゐるとは知つてゐたが雨に降られてよんどころなく一杯やつて晴れ間を待つてゐたのさ。

お瀧　それぢやお前さん今夜はもう御酒はよしにおしかえ。直に上げやうと思つて御膳拵へまでして置いたのにほんとに憎らしい雨ッちや有りやしない片付けてしまひませう。

重五郎　オイお瀧さういはれると酒肴は意地がきたねえものだ。最う飲まないかと念を押されると急に殘り惜しくなるのが癖だ。お瀧いつもの通りお前のお酌でやり直すとしやう。

お瀧　あんまり上ると毒だからたまにはよした方がいゝかも知れないよ。

重五郎　コレお瀧ぢらさずと早くつけて來ねえ丁度隣で隱居のけいこアレでも聞いて待つてゐやう。

（ト獨吟になりお瀧膳を運ぶ。）

お瀧　さア旦那いそいだからよく付いてゐないかも知れません。

（ト銚子を取る重五郎酌をさせながらぢつとお瀧の顏を見る。獨吟上げになりお瀧思はず顏をそむける。重五郎其の儘猪口を膳の上に置き、）

重五郎　お瀧改めてお前にきゝてえ事がある、實は今日廓の喜助と熊藏に逢ひはなしをきけばお前の在家が知れたからいや應云はさず連れて行くと云ふから飲ました上に金をやり一先づ歸つてはもらつたがそれについてお前の量見が聞いて置きていのだ。お瀧日ごろお前の云ふ通り眞實己の女房になり一生ともに暮す氣かそれともいやならいやと今の中にきれいさつぱり云つてしまへ。一年あまり女房同樣にした女、まん更惡いやうにはしねえつもりだ。

（トお瀧毒酒の事ではなかつたと知り始めて安心した體急になまめかしきこなしにて。）

お瀧　アラまあ何かと思つたら又お株がはじまつたよ一生共に暮らすも暮らさないもありアしないぢやないか。可愛い子までなした仲たとへ旦那の方からもう倦きたから出て行けとおいひでも私アお前さんの側を離れるのはい

やでム升。

重五郎　その云ふ事が眞實なら早速金の工面をなし年季の證文を取つてしまはう。

お瀧　それだと私も安心してえばつて外へも出られるから旦那早くお金をやつて下さいよ。

重五郎　あした喜助がこゝへ來る筈だから兎に角證文だけは取つて置かう。ダガお瀧しつこい樣だがお前おれをだましやアしめえな。

お瀧　アレ又だますの欺さないのと何うすれア得心が行くんだらうね。

（ト泣くよねなする。重五郎お瀧を抱き寄せ）

重五郎　迷へば誰しも疑ふもの増してやおれは名代の無男年さへ廿歳もちがつてゐるまだそれのみか以前の身分は町同心人のこはがる役柄にこれまで遊びに行つたとて唯の一度も女からやさしくされた事もなく腹立ちまぎれに役柄を無慈悲にわざと通して來たがお前を助けた其の夜から急にやさしくあつかはれ迷ふともなく迷つてしまつたこの重五郎お前には切つても切れねえ傳次郎といふ間夫のあるのを知るにつけかうしておれの自由になつてゐるのはコレアてつきりおれに油斷をさせ隙を覗つて逃る氣ぢやあるまいかと實は貸本屋の政吉に始終樣子をさぐらせてゐた位ゐだお瀧もうかうなつたらおれが得心の行くやうにはつきり傳次郎の居處を知らして置けナアお瀧お前が野郎の居處を言つたとて己がどうするといふ譯ぢやねえお前の眞實見る上はたとへ兇狀持であらうとも隨分おれがかばつてやらう。ナお瀧氣のすむやうに言つてしまへ。

お瀧　旦那そんな無理な事をお云ひでも今更私が知つてゐる道理がないぢやないか。

重五郎　お瀧眞實お前は知らねえのか。

（ト重五郎手荒く膳を片寄せ詰寄つてお瀧の本心をさぐらうとする。此の途端に膳の上なる盃の酒こぼれるつもり。）

お瀧　旦那これほど云つても得心が出來ないなら私アもう何も云はないから切るなり殺すなりサア旦那どうでも勝手にしておくんなさい。

（トお瀧ふて腐された體にて後を向く。重五郎コレにて得心したる體。）

重五郎　それ程立派に言切るならお前の云ふ事にうそは有るまい。疑ひ晴れゝば今夜からお前は改めておれの女房いろいろな事を言つたのはおれがわるかつた、あやまるから堪忍してくれナアお瀧サアこゝへ來て仲直りに一杯やらう。

（ト膳の上を見て。）

オヤお瀧今のさわぎで折角ついで吳れた酒はこぼれてしまつた。お瀧すまねえが烏渡付け直してくれ。

（トお瀧德利を受取り下手へ入る。重五郎膳を引寄せ箸を拭きながら）

重五郎　一口もつけねえ中猪口一杯すつかりこぼれてしまつた。オヤ此の章魚は妙な色をしてゐやアがる。

（ト何心なく眺めてうで章魚の色の變りゐるに不審を起しつまみ上げてさてはと氣がつきし體、下手襖を明けて出やうとするお瀧と顏を見合せるをキツカケに本釣鐘を打込んで凄味の見得。）

重五郎　お瀧太てい女だ。

（ト立ち掛ける　ト疊を上げて傳次郎合口にて突かうとする重五郎其手を捕へ）

重五郎　フ、、、。（トせゝら笑ひ）縛られもしねえその中から犬猫同然もぐり込んだ椽の下どれ細腕つかんで引摺り出さうか。

傳次郎　仕そこなつたからは百年目音に聞えた鬼蔦(おにつた)の相手になれア不足はねえ幸今日の顏合せからからまる蔓(つる)は持たずとも根元は強い片ばみの家名を立てる腕節捕れる者なら捕つて見ろ。

（ト傳次郎お瀧より脇差を受取り切つてかゝる。重五郎素手の立廻りよろしくお瀧この中逃げ出さうとするを重五郎引戾し傳次郎其のすきをねらつて切りかゝる。トゞ重五郎傳次郎を組み敷き下手へ行きかけるお瀧の裾をふまへると政吉向より走り出で）

政吉　旦那御手傳をいたしますから片つぱしからふんじばつておしまひなせえまし。

（ト捕繩を投げる。重五郎受取つて）

重五郎　見掛けに寄らぬ太てい奴。

（ト傳次郎を縛りかけると赤子の泣聲聞える。重五郎聞きつけお瀧と顏見合せ心おくれる體。）

今日はあいにく女房の命日綱さへ打たねえ位故放し鰻とがまんして門(かど)から外へ突出してしまへ。

（ト傳次郎を突放すとこの時序幕の船頭留藏下手より來合せ）

留藏　ム、われア傳次郎だな、

傳次郎　ヤとつさんか。

留藏　コノ野郎（ト引据ゑ）唯今御勝手口まで綱のなほしを持つて參りました處殘(のこ)らず樣子はきゝました大惡人の件傳次郎どうぞ此の親爺に御下げなされて下さいまし。

重五郎　親爺とあれば何より仕合御上へ御手數かけぬやう。

お瀧　アモシ傳さん。

（トお瀧行きかけるを重五郎押へて、）

重五郎　慈悲の折檻（木ノ頭）するがよからう。

（ト風の音新内の流しにてよろしく拍子幕。）

（大正十年三月作）

早春　一幕

人物

石橋青坡　文人畫家、年五十に近し

妻　きよ　四十位

娘　さだ　十九位

濱野義雄　女學校々長、年五十位

女中　よし　二十二三

文人畫家石橋青坡の居間。正面四枚立の障子。幕明く時この障子閉めてあり、前栽の樹木と緣側に置きたる盆栽の影繪模樣の如く映りゐる。二月の初十時頃の日かげなり。正面上手に床の間違棚つづいて次の間との境。上手横二枚立の襖。下手横は丸窓を穿ち壁には裾張あり。枠に張りたる青綠山水の圖を立て掛く。室の中央には紺地毛氈の上に描掛けの水墨山水の圖、その傍には筆硯繪具皿の類狼藉たり。次の間には古びたる本箱書棚及び紫水鋼小鉢等あり。座敷次の間ともに色彩面白き毛氈を敷く。家造りは云ふに及ばず建具家具筆硯机に至るまで凡て主人の趣味性格を示すに足るべきものを撰む。舞臺の裝置法は新式に依る。

畫家石橋青坡五十位、諸絲織か何かの綿入に八丈の下着を重ね唐棧の平袴に白足袋をはく。幕明く時青坡は獨り朝飯を喫し了りたる體にて膳を傍に丸窓を背にして坐り、煙管にて二三服煙草をのみ障子の樹影を見てゐる。青坡の妻きよ四十位（但しグッと若く見える顔立）質素にして品よき風俗。上手の襖を明けて出で、

きよ　もうお濟みになりましたか。

（青坡唯輕くうなづき膳を押しやる。妻きよ手を鳴らして女中を呼ぶ。女中よし庇髪に結ひ矢張上手より出でだまつて片付ける。）

（青坡妻きよの方を見て、）

青坡　よしはまた髪をハイカラに結つてゐるな。

きよ　およし。それ御覽なさい。言はない事ぢやありませんよ。晩くなつても昨夜の中に結つてしまはないと朝はとても間に合はないと、あんなにわたしが言つて置いたぢや有りませんか。

よし　はい。昨夜髪を洗つたもので御座いますから。申譯がございません。

きよ　臺所の事はわたしがして置くから、お前お膳を下げたらすぐ結つてお出でなさい。

よし　はい。それでは結つて參ります。

（よし膳を持ち上手に入る。）

きよ　ほんとに困つてしまひます。近處の女中がみんなハイカラに結つてゐるものですから眞似がしたくてたまらないので御座いますよ。銀杏返しに結つてゐると牛肉屋の姐さん見たやうで、いやだ／＼と言ふので御座います。

青坡　女中でありながら女中らしく見られるのがいやなのだな。大きにさうかも知れん。此頃は大工や左官も靴をはいて請負師然と電車に乗る。會社員は借金を質に置いても駱駝の外套に大きな鞄を抱へ込まなければ承知せんし、書生はべらしやらと大島紬の著物にお召の羽織だ。猫も杓子も身分不相應な身なりをしたがる世の中だからな、さういへばアノさだ子はどうした。まだ何かして居るのか。

きよ　あなた。ほんとに何とか仕様は御座いますまいか。あなたどうしてもさだ子を勘當なさるお積りですか。

青坡　その話なら昨夜の議論でもうどうにも手のつけやうがないぢやないか。それはお前にも分つてゐる筈だ。

きよ　はい。

青坡　さだ子は學校へ通つてゐる身で勝手に男をこしらへまだその上に何としても女優にならなければ承知しないと言つてゐる。そんな娘はわたしの娘ではない。わたしの家に置くことは出來ない。さだ子の方でも女の自由を束縛するやうな壓制な親の家には居たくない。生涯の目的の爲には飽くまで生活と奮鬪しますと二言目にはすぐ婦人雜誌に出てゐるやうな議論をする。あれでは親の方から勘當するのぢやない。娘の方から親子の緣を切らうと迫つて來るやうなものだ。

きよ　それでも、あなた今朝程は昨夜とちがつて何ですか大變心配さうな顏をして居ります。自分でも少しはわるかつたと後悔してゐるのぢや御座いますまいか。

青坡　いや、さだ子がどうしてそんな優しい心になるものか。然しまだ家にゐるのなら呼んで見るがいゝ。もう一應念の爲め言聞かせて見よう。

きよ　はい。（立上り）さだ子／＼鳥渡お出でなさい。お父樣が御用だと仰有つておいでゞす。

（妻きよ上手襖を明て呼びながら入る。娘さだ子年十九位七三に割り耳を隱したる束髪に結び當世流行の服裝なし手に新刊雜誌を持ち臺詞を云ひながら出る。）

さだ　御母さん。お父さんのお小言なら、わたしもう澤山なんですよ。

きよ　さだ子、何といふ物の言方です。まア立つてゐないでお坐りなさい。

（さだ子行儀惡く支那燒丸火鉢に凭りかゝりて坐り膝

の上に雜誌を弄ぶ。青坡此方を見やり、)

青坡　さだ子。お前、それではいよ〳〵家を出て行くつもりか。

さだ　だつて仕樣がないぢやありませんか。昨夜お父さんはわたし見たやうな者は家には置けないと仰有るんですから仕樣がありません。

青坡　さうか。それならわしももう言ふ事はない。お前のいゝやうにするがいゝ。

きよ　さだ子。いつまでも意地を張つてゐないで、御父樣にお詫をしたらいゝぢやありませんか。

青坡　おきよ。うつちやつて置きなさい。五つや六つの子供ではない。無理にあやまらせても何にもならん。さだ子。それぢやお前はどうあつても……親の家を捨てゝも女優にならうといふのだね。

さだ　お父樣にはいくら申上げてもわたし達の若いものゝ心持はおわかりにならないんだから仕樣がありません。お父さんには此れから先女優といふものは、日本の文化の爲めにはどうしてもなくてはならない、新しい時代の切實な要求によるものだといふ事が、どうしてもお分りにならないんだから。お父さんは畫はかいていらつしやるけれど、昔から有り來りの規則と形式を守つて其の範圍で滿足してゐる方なんだから、もつと廣い、もつと深い藝術の意義はお分りにはならないんです。

きよ　さだ子、何を言ふんです。

青坡　まあよい。言ひたいことは十分に言はしたはうがよい。

さだ　お父さんには芝居だつて畫だつて藝術の意義に變りはないといふ事はお分りにならないんです。もしそれがお分りになつてゐればわたしが女優になりたいといふ心持に對して少しは同情して下さる筈です。

青坡　同情があるからこそわたしはお前に意見をしてゐるのではないか。昨夜も言つて聞かせた事だが、さだ子、もう一度よく考へて見るがいゝ。舞臺の上の藝といふものは畫や文章とは違ふぞ。如何程自信があつたにしても觀客といふ目前の鑑賞家がなくては成り立たないものだ。不遇には到底安じてゐられべき筈のものではない。文章家とか畫工とかいふものなら縱へ今の世に持囃されなくとも失望するには及ばん。卿已を永く後世に俟つといふ事も出來るだらうが、役者や音樂家はさうは行かない。だから、わしは絶對に女優を惡いといふのではない。今日の時勢が惡いから止しなさいと止めてゐるのだ。舞臺の藝に限らず、畫であらうが文章であらうが何に限らず少し趣味の高いものは今日の社會には喜ばれよう筈がない。だから、わしは唯親の情としてお前に忠告するのだ。

さだ　お父さん、それはお父さんの口實です。眞實の同情ではありません。
青坂　何だ。口實だ………。
さだ　えゝ。口先の議論です。眞實の深い同情から忠告して下さるのぢやありません。えゝ。わたしにはよく見え透いてゐます。お父さんは御自分の狭い感情から何に限らず新しい時代の新しいものを呪つていらつしやるんです。お父さんは女優ばかりぢやない。乗合自動車の車掌も電話の交換手もみんな一緒にして、新しい時代の婦人運動に關しては全然同情を持つていらつしやらないんです。お父さんとわたしとは永久に敵同志ですわ。それですからわたしはお父さんが家に居ろと仰有つても、もう家なんぞに居たくは有りません。どんなに苦しんでもわたしは獨立して生活と戰ひます。
青坂　さうか。お前の言ふ事はよくわかつた。わしが現代の新しい婦人を好まないのは、或はお前のいふ通りかも知れん。お前が結つてゐるやうな髮の結方もわしは大嫌ひだ。幅の狭い半帶も嫌ひだ。飛模様の羽織も大嫌ひだ。お前の云ふ通りわしは自分一家の狭い趣味や感情に捉はれてゐるのかも知れないが、然しお前の言ふ事も決して眞實ではあるまい。さだ子。お前が飽まで女優にならうといつてゐるのは、つまり親の許さない男と一緒になつて遊び歩かうと云ふ爲だらう。それで一言目には獨立するの生活と戰ふのといろ〳〵な理窟を言ふのだらう。不屆きな女だ。
さだ　えゝ。どうせ不屆きで御座います。わたし達若いものには戀愛と藝術と生活とは一致したもので別々には考へられないんで御座います。
青坂　もうよい。わかつたから彼方へ行きなさい。
（青坂つと立つて障子を一枚あけ緣側に佇む。日當りの緣先に梅もどきの枝少しく見え鵯二三羽障子の音に驚き鋭き鳴き聲と羽音を聞かせて飛び去る。この中さだ子疊ざはり荒々しく上手襖を明けて入る。きよ茫然として見送り）
きよ　まあ何といふ强情な兒でせう。
青坂　時節の來るまで打捨つて置け。（と元の座に返り）時節が來ればきつとわしに感謝するにちがひない。よくあれまでに我儘を通さしてくれたと氣がついた時にはきつと親の心を有りがたいと思ふだらう。おきよ、お前の手からそれとなく金を持たしてやりなさい。百圓でも五十圓でも月々の生活費を出してやりなさい。
さよ　はい。畏りました。
青坂　わしからだと言つてはなりませんよ。
きよ　はい。よろしう御座います。

（妻きよ上手襖をあけて入る。青坡再び立つて障子を左右に開き床の間の蘭を日當りに持ち出す。障子の外一面冬の日を浴びたる庭うつくしく見ゆ。垣際に竹茂り縁先に柚の木と梅もどきあり。柚はきいろく梅もどきの實は染めたるが如く赤し。鶯鳴く。青坡筆洗と綿筆を持ち蘭の葉を拭ふ。女中よし縁側上手より出で。）

女中　お客様でございます。

青坡　どなただ。

女中　あの明治女學校の濱野さんだと仰有いました。

青坡　さうか。校長さんか。此方へお通し申してくれ。

女中　はい。

（女中縁側づたひに上手へ入る。青坡盆栽を片寄せなどす。校長濱野義雄フロツクコオトにて上手縁づたひに出で。）

校長　いや暫くお目にかかりません。

青坡　どうぞ。此方へ。この通りいつも取散らして居ります。

校長　（座布團の上にすわり）　お仕事のお邪魔をして相濟みません。

青坡　いえ今日はまだ…　實はその、娘の事でごた／＼して居ましたので何も致して居りません。

校長　左樣ですか。それでは早速ですが實はそのお孃さんの事についてお邪魔に上つたので御座います。あなたとは今日初めてお目にかゝるといふのではない。昔は同じ學校に勤めて居つた同僚といふ關係もあります。それ故わたくし自身直接にお話をした方がよいと思つてお邪魔に上つた譯ですが、あのさだ子さんですな。過日も度々受持の教師から御通知致した筈ですが、さだ子さんはどういふものか學課を御勉強にならない。それのみか時々無斷で缺席なさるのです。あれでは學校としては誠に取締がつかんので實は甚だその處置に困つてゐるやうな譯です。

青坡　いやそれはどうも。親の身として誠に面目次第もありません。然しあの娘には親のわたくしも實は手古摺つて居ます。その事については今日唯つた今やつと解決がつきましたから、私の方から御相談に出ようかと思つてゐました處です、濱野さん。學校ではもう氣がついておいでかどうか知りませんが、さだ子はわたしの見る處ではどうも女の道を破つたらしい形跡があります。

校長　さうですか。それは容易ならん事です。わたくしの經營してゐる明治女學校は御存じの通り創立此の方二十年近くになりますが、在學中貞操を破つたやうな生徒は一人もゐませんでした。校長としての後々の心得にもな

る事ですから伺つて置きたいですが、その相手の男といふのは何で御座います。何處かの學生ですか。どういふ譯からさういふ關係が生じたものか。それも伺ひたいもので御座います。

靑坡　わたくしにも委しい事は分りません。然し相手の男といふのは他分新しい芝居にでも關係してゐる文士か何かでせう。娘は女優になると言つて居ます。

校長　女優にお成りなさる。いやそれはいよ／＼容易ならん事です　女優は勿論藝者抔とは違ひますがどうも世間から誤解され易いものですからな。もし新聞にでもわたくしの學校の生徒から女優が出たやうな噂でも書立てられると甚迷惑します。只今も申上げた通りわたくしの學校からは創立以來今日までまだ一人もさういふ變つた職業の女を出した事がない。その爲先年も文部省から明治女學校は將來國家の完全なる基礎をつくり良妻賢母を養成する處だといふ讃辭を忝くした次第で、近頃は寄附金なぞも年々此方から勸誘しないでも殖えて行くやうなわけです。そこへ突然まだ在學中の生徒から女優の志願者が出たといふやうな噂が立つと學校としては非常に迷惑を致します。

（此の時きよ上手の襖を明けて出て、）

きよ　さだ子はとう／＼行つてしまひました。

靑坡　どこへ行つたか、行先の番地はきいておいたか。

きよ　はい書留めて置きました。

靑坡　濱野さんお聞きの通りの始末です。さだ子は女優になると言つて家を出て行きました。お互に意見の合はないものは分れるより仕樣はない。夫婦の間に離婚が行はれるなら親子の間にも同じ事が行はれないといふ筈はない。

校長　石橋さん、それではさだ子さんはいよ／＼どこかの芝居へお出になる譯ですな。

靑坡　勿論出ずには居ますまい。然しわたしはもう何とも思つては居ません。裸體でダンスをやらうがそれは娘の勝手です。

校長　然し石橋さん、何ぼ何でも……あなたはさだ子さんの親御さんぢや有りませんか。御自分の娘が一生を誤り墮落の淵に沈んで行かれるのを、まさか平氣で見ていらつしやる譯には行きますまい。

靑坡　いやわしは御存じの通り偏屈な人間です、畫はかいてゐますが弟子も取りません。文展の審査員なんぞは眞平御免と此方からお斷りをしてゐる樣な偏屈人です。人の親としても世間一般の親とは少し考が違つてゐるかも知れません。唯今も申上げた通りです。たとへ親であらうが子であらうが、互に其の時代を異にし思想を異にし

風俗までも異にしたものは別々に分れるより外に道はない。その方が雙方の爲だとわたしは考へてゐるのです。わたしは電車のない時代に生れた古い人間です。活版で印刷された教科書で字を覺えた人間ではない。ところが娘は今の世の中に生れ毎日學校へ通ふ電車の中で雜誌も讀めば新聞も讀む。吾々が墮落だと思ふ事も娘には墮落でも恥辱でも何でもない。娘は親の家を出て親の束縛から脱しさへすれば、自由勝手に人生を樂しむ事が出來るわたしはまた娘が居なくなつて呉れゝば先づ第一に騷々しいマンドリンや、歯の浮く樣なバイオリンの音も聞かずに濟む。頭痛する香水の匂もかゞずに濟む。三越や白木屋に並んでゐる毒々しい友禪染や更紗の模樣も見ずに濟みます。まだ其ればかりではない。疊ざはりの荒々しいさだ子が家にさへ居なければわたしは安心して大事な道具を床の間に飾つて置ける。藏書や粉本も緣側に干して置けるといふ譯です。濱野さん、あなたは教育家だ。人間を教育する方に向つてこんな事を言つては失禮かも知れないですが、わたしは一體人間のくだらない者よりお書畫骨董の方が餘程尊いと思つてゐるのです。人間は困るほど繁殖して行く者ですが、古人の名作天下の逸品といふ物は一つあつて二つはない。此の六兵衛の湯呑にしても是眞の蒔繪にしても一度瑕をつけられたら二度とは直らないものだ。然し家の娘見たやうな新しい女なら今の世の中には腐るほど澤山あります、濱野さん、今日はさだ子が居なくなつたので家の中がしんとしました。あの通り鶯の啼くのがよく聞えます。きよ。おいわたしが一番大事にしてゐる青磁の急須を出して來てくれんか。ゆつくり煎茶でも入れて差上げよう。

（妻きよ立ちかける。校長時計を見て、）

校長　いや折角ですがもうお暇をいたします。

青坡　まあいゝぢや有りませんか。

校長　いやその中又お邪魔に上がります。今日はこれから……あのさだ子さんが女優におなりになれば新聞に出ないとも限りませんから、これから直ぐ知己の新聞社を訪問するつもりです。

青坡　まだ何とも分らない中から、そんなに世間の評判が御心配になりますかな。いやお氣の毒です。

校長　幸ひ知つてゐる新聞記者がありますから、さだ子さんがわたしの學校の生徒であつた事だけは書かないやうに今から頼んで置くつもりなのです。いやそれでは又、その中お邪魔に上ります。もうどうぞお見送りには及びません。

青坡　それでは失禮します。

（校長青坡の立ちかけるを制しながら緣づたひに上手

に入る。妻きよ從つて共に上手に入る。鶯つゞいて又啼く。青坡暫く佇立み靜かに障子をしめ端坐して繪筆を把る。幕。）

（大正十一年正月作）

小山内　薫篇

亭主（一幕）

人物

源次　自由勞働者（三十四歲）
お絲　その妻（三十歲）
お君　その娘（十　歲）
三吉　自由勞働者（三十二歲）

場所

吉原附近

時代

現今

舞臺

震災後のバラツク建。
そこら中に乾し物がしてある。
手製の竈が家の外の土間に据ゑてあつて、それに鍋がかかつてゐる。鍋の蓋が少し明いてゐてそこから湯氣が立つてゐる。
精々三疊四疊ぐらゐしかないところへ、薄縁の汚いのが二枚敷いてある。

一枚の方には（下手）お絲が坐つて、せつせとマニラ麻をつないでゐる。もう一枚の方には（上手）お君が坐つて、ビイル箱を臺にして、小學校の學課の復習をしてゐる。
遠くに工場の汽笛だの、電車の音だの、物賣の聲だのが雜つて聞える。
初夏の夕暮。

お君　（聲を出して讀む）「アル家で9斗ノ米ヲ36日ノ間ニタベタ。スルト1日ニイクラヅツタベタデセウ。」（ちつとも考へずに、直ぐ顏を上げる）おつかあ、いくらだらう。
お絲　おいらにそんなことが分かるもんか。お前、學校で敎はつて來たんだらう。
お君　だけど、あたい分からないんだよ。敎はつたんだけれど、九斗の米つてのが、あたいにはよく分からないんだよ。
お絲　九斗の米つたら、お前大變だ。內なら一年ぐれえあらあ。
お君　だけど、それを三十六日に食べたんだとさ。
お絲　おつそろしく食やがつたな、よつぽど人數が多いんだらう。
お君　だから、一日にいくら食べたんだらう。

お絲　分からねえよ・おいらにや。自分で考へるが好いぢやねえか。人面白くもねえ。九斗の米をたつた一月で食つちまふなんて。

お君（讀めて又次ぎを讀む）「１圓デ２升５合ノ米ハ５圓デイクラ買ヘマスカ。」

（又直ぐ母親の方を見る）　おつかあ、いくら買へるだらう。

お絲　うるせえな。何だい。

お君　一圓で二升五合なんだとさ、そのお米が五圓でいくら買へるつて言ふのさ。

お絲　知らねえよ。おいらあ五圓なんてお米を買つたことはねえから。（絲をつなぎながら）　ふんとに厭なことばかり教へやがるんだな。學校つてところは。

お君　でも、これは算術のお稽古だから爲方がないよ。

お絲　何のお稽古だか知らねえが、もう少し役に立つことを教へやがりや好いぢやねえか。（獨言のやうに）　五圓でいくら買へるなんて。それよりやあ十錢でいくら來るか教へて貰ふ方が好いや。

お君（又次ぎを讀む）「30日間ニ42圓トル人ガ4日休ミマシタ。スルトイクラトリマスカ。」

お絲（どなる）　もうよさねえか。お君。ふんとに氣の惡いことばかり書いてある本だな。そんな本はうつちやつちまへよ。四十二圓だなんて聞いただけでも氣持が惡くならあ。四十二圓取れりや、四日や五日休んだつて何だい。

お君（本をふせて、母親の側へ來る）　おつかあ、何をそんなに怒つてるんだ。おいら勉強してるんぢやねえか。

お絲　勉強なんかしねえでも好いよ。それよりか早く辻占でも賣りに行きねえ。

お君　ああ。だけど、おまんま食べないと、おなかがすくもの。

お絲　おまんまなんか、歸つてから食べりやあ好いよ。

お君　でも、それぢやあおそくなるもの。それに、こなひだのやうにお巡りさんに捕まりでもすると、夜中までなんにも食べられないもの。

お絲　お巡りに捕まるのは、手前が間拔だからぢやねえか。（巾着から銅貨を一つ出す）　さあ、一錢やるから、腹がすいたら煎餅でも買つて食べるが好いや。

お君（銅貨を受けとつて）　これぢや一枚つきや買へないよ。

お絲　一枚で澤山だ。澤山賣つて歸つて來たら、おまんまをどつさり食べさせてやるよ。

お君　けふのお茶何だい。

お絲　まだ分からねえよ。

お君　あのお鍋ん中は何だい。

お絲　お湯だよ。なんにもへえつちやゐねえんだよ。

お君　（あたりを見廻す）　おつかあ、お鉢何處にあるんだい。

お絲　しまつてあるよ。心配するにやあ及ばねえよ。（少し聲を落す）　ふんとに可哀さうになあ。

お君　何だい、おつかあ。

お絲　ちやんさへゐりやあ、こんな目にやあ會はせねえんだ。ふんとに困つたもんよなあ、お前のちやんは。

お君　ちやん、いつ歸つて來るんだい

お絲　分かるもんか。

お君　だけど、あたい、をぢさんがゐるから、ちつとも寂しかあないや。

お絲　三ちやんだつて、いつまでゐてくれるか分かつたもんぢやありやしねえ。

お君　をぢさんはお金をくれるんだらう。

お絲　屋根代とおまんまの代を拂つてくれるんだ。それと、おいらの髷絲と、お前の辻占でやつと暮らしてゐるんだ。だけど、三ちやんだつて、定つた職があるわけぢやねえから、いつ何時出て行つてしまふか分からねえんだ。

お君　ぢやあ、おつかあ、困るねえ。

お絲　困るとも。

お君　あたい、學校よさうか。

お絲　いくら、苦しくても、尋常だけはやらしてえと思つてるんだが、どうもかう苦しくつちやしやうがねえ……（氣を變へて）　まあ、そんなことはどうでも好いや。早く辻占賣つて來ねえ。もうそろそろ素見(ひやかし)の出る時分だ。

（外はいつの間にか、日が暮れてゐる。）

お君　（辻占を持つて土間へ降りる）　ぢやあ、おつかあ、行つて來るよ。

お絲　たんと賣つといでよ。（と言ふ。電燈がつく）

お君　あの、お茶屋の若竹さんね。あすこの娘さんは、あたいが行くと、いつでも可哀さうだ可哀さうだつて、きつと五錢ぐらゐ買つてくれるんだよ。

お絲　ぢやあ、けふも忘れずにおいでよ。

お君　ああ。（退場）

（お絲、一しきり又絲をつなぐ。それから、土間へ降りて、鍋の蓋をあける。湯氣がぱつと上がる。中の湯が減つてゐるので、水を差す。三吉、表の戸口から歸つて來る。）

お絲　ばかにおそいぢやねえか。

三吉　（はひつて來ながら）　けふはの。區役所の爲事をしたんだが、會計の野郎なかなか金を拂つてくれやがらねえんだ。何しろ、かう兵隊見たいに並ばして置きやあがつて、一々名前を呼ぶんだ。ところが、中にやあ自分の

名字を知らねえ奴が居るんだ。知らねえこともねえんだらうが、ふだん名字なんかで呼ばれるやうなことがねえもんだから、それ、堀田とか、鈴木とか言はれても知らん顔をしてるんだ。すると、返事をしねえから當人ぢやあねえつてんで、なかなか金を渡さねえんだ。ところが、當人實際働いてるんだから、それぢやあ濟まねえ。そんなこんなで、日が暮れつちまつたんだ。三公とか繁公とか呼びやあ何でもねえのに、つまらねえ手數をかけたもんよ。

お絲　まあ、好いから、早くいつものものを貰はうよ。

三吉　おい來た。(汚い腹掛から錢を出す) これが屋根代で、これが賄(まかなひ)だ。手數のかかつた代り、けふは少し身入がよかつたから、賄の方は五錢だけはずむぜ。それから一合買つてくんねえか。(別に又金を出す)

お絲　大層な景氣だねえ。

三吉　まあ、二三日はこの爲事が續きさうだから。

お絲　へえ、たいしたもんだね。何だい。爲事(しごと)は。

三吉　あの、京屋横町の消火栓のとこが惡くなつたんだ。まるで洪水さ。好いあんばいにけふ一日ぢやあ、とても直らなかつた。

お絲　土ほじりかい。

三吉　ああ。外におれは能(のう)がねえんだから爲方がねえや。もぐらもちの三吉だ。

お絲　自慢にもならねえよ　(味噌こしを取る)

三吉　おい。早く酒を買つて來てくれよ。

お絲　今行くとこだよ。

三吉　おまんまはあるのか。

お絲　まだ一かたきぐらゐは焚いたのが殘つてるよ。

三吉　(見廻す)　お鉢が見えねえぢやねえか。

お絲　(金を見せる)　今これで取りに行くんだよ。

三吉　また近江屋か。

お絲　だつて、お君の奴が鉛筆がほしいほしいつてしやうがねえんだもの。

三吉　は、は、は。さうか。まあ、早く行つて來ねえ。

(お絲出て行く。)

(三吉、腹掛をとる。股引一つで土間へ降り、汚い手拭を水に浸して、身體を拭く。それから、上へ上がつて、單衣の皺くちやになつたのを着る。それから、隅つこに置いてある箱膳を出して來て、茶や箸を揃へる。)

○　郵便。

(といふ聲が表でする。)

三吉　郵便。

(と不思議さうな顔をして、表の戸を明ける。郵便配達夫が立つてゐる。)

郵便配達夫　鈴木お絲さんてのは、こちらですね。
三吉　あゝ、さうだ。
（郵便配達夫、默つて葉書を一枚渡して行つてしまふ。三吉表をしめる。）
三吉　（葉書を見る）　源公から來たんだな。熊谷にてか。あいつ、熊谷へ行つてやがるのか。何か爲事にありついたな。
（お絲、片手に味噌こしと徳利とを持ち、片手にお鉢を抱へて歸つて來る。）
三吉　源公から葉書が來たぜ。
お絲　へえ。（と言ひながら、それを見ようともせずに、味噌こしや徳利やお鉢の始末をする）
三吉　熊谷へ行つてるんだとよ。
お絲　誰が。（お菜ごしらへに夢中である）
三吉　源公よ。
お絲　源公のことなんかおいら忘れつちまつたよ。（鍋の中へ何か入れながら）お酒はお前自分で燗をしてくれるかい。
三吉　あゝ。（徳利を見て）　こいつあ氣が利いてたな。燗徳利を借りて來たのかい。
お絲　あゝ。さうさう、序におちよこも借りて來たよ。（懐から杯を出す）
三吉　ほう、そいつあ豪勢だな。（と言ひながら、土の火入れに火をとつて、それに土瓶をかけ、その中へ徳利をつける）お菜は何だい。
お絲　油揚さ。
三吉　しみつたれだな。なんだ、それだけか。なぜ乾物（ひもの）の一枚も買つて來ねえのだ。五錢張り込んだのに。
お絲　でも、お鉢が少し高くはひつてゐたんだもの。
三吉　いつでもあんなことを言つちやあ、ごまかしやがるんだ。
お絲　何もごまかしやしねえよ。いつだつて直段だけのものは食べさせてゐるぢやねえか。
三吉　どうだか分かるもんか。
お絲　なんだと。
三吉　まあ、まあ、好いやな。さう怒るもんぢやあねえよ。
お絲　ふんとに、人面白くもねえ。
三吉　（徳利を土瓶から出して）　さう怒んなさんなつてことよ。ちつとぐらゐ頭をはねたつて爲方がねえやな。全く麻絲と辻占ぢやあやり切れめえからなあ。
お絲　そのくらゐ分かつてりやあ。何も厭がらせを言はずとものことぢやねえか。
三吉　あやまつた。まあ、こつちへ來て一杯やんねえ。お前もいける口だ。（と言ひながら、自分が先づ一杯飲む）

お絲　（すつかり機嫌を直して、上へ上がる）　有難いねえ。三月ぶりだよ。
三吉　おれも、これで半月ぶりだ。（と言ひながら酌をしてやる）一つその油揚つて奴を頂かうか。
お絲　あいよ。（一杯飲んでから下へ降りる。それから鍋を持つて來て、薄縁の敷いてない床へぢかに置く。それから椀へよそふ）　少しからいかも知れねえよ。
三吉　（椀に一口口をつける）　なあに、丁度だ。
お絲　でも、お前さんは仕合せだねえ。四月からずつと休みなしだから。
三吉　でも、ことしやあ隨分雨にたたられたよ。
お絲　さうさ。隨分長雨で困つたことがあつたねえ。
三吉　さうよ。あの七日も續けて降られた時あ、もうお前んとこも出なけりやあならねえかと思つたよ。
お絲　何から何まで曲げてしまつたけね。
三吉　裸で蒲團にくるまつてゐたな。でも、お前よくおれを追ひ出さなかつたなあ。
お絲　よつ程追ひ出さうかと思つたけれど、天氣になりせえすりやあ稼ぐ人だと思つたから、それでおいらあ我慢してゐたのさ。お前に行かれつちまつちやあ、實際おいらあ困るんだからね。
三吉　それぢやあ、おれでもやつぱり足しになるんだな。

お絲　そりやあなるともさ。（間）　さう言ふと、何かするいことでもするやうだが、さういふわけぢやあねえ。二人食ふのも三人食ふのも、てえして違はねえものだからねえ。そこへお前がいくらか出してくれるだらう。だから助かるんだ。
三吉　可哀さうに。源の野郎せえゐりやあこんなことはねえんだ。あいつ、まるで金を送つて來ねえのか。
お絲　びた一文送つて來やあしねえよ。おいらあ、もうあんな奴は當てにしやしねえよ。
三吉　（葉書を見せる）　見ねえ。今度はそれでも、こんなものをよこしたんだ。きつとうめえ爲事にありついたんだらう。もう少しの辛抱だ。その內、きつと爲替が來らあ。
お絲　厭なことをお言ひでないよ。そんなことを言つたつて、おいらあ當てになんかしやしねえよ。何が出來るもんか、あんなぐうたらに。あんな奴はもう亭主だとも何とも思つてやしねえよ。
三吉　だとつて、折角今まで辛抱したんぢやねえか。
お絲　厭だよ。おいらあ、あいつの歸るのを待つて、辛抱してるんぢやねえよ。爲方がねえから、かうやつてゐるんだよ。誰でも世話をしてくれるつて人があれば、いつでもそこへ行くよ。

三吉　ぢやあ、おれとでも一緒になるか。
お絲　なるともさ。
三吉　は、は、は。だが、そいつあ、おれの方でお斷りだ。やつぱり屋根代に賄料の方が氣樂で好いや。おらあとても女房つ子を世話してく力はねえや。
お絲　そんなら、およしよ。誰もこつちから賴みやあしねえよ。
三吉　だが、源公はあれで好い亭主だぜ。世間になかなかあんな亭主はねえぜ　おらあちいつぽけな時分から知つてるが、あんな堅い男はねえや。女といつたらお前ひとりぐらゐなもんだらう。
お絲　だから、いくぢなしだつてんだよ。男は浮氣の一つもするやうにならなきやだめだよ。
三吉　その癖、浮氣をすりやあ燒くんだらう。
お絲　誰が燒くもんか。おいらあ喜ぶよ。
三吉　さういふ風だと、このおれなんかも、さぞいくぢなしに見えるだらうなあ。夜はちやんちやんと歸つて來るし、女なんか見向きもしねえんだからな。
お絲　お前さんはどうだつて好いよ。お前さんはおいらの亭主ぢやねえんだから。
三吉　なるけつ。これは大きに憚り樣だ。
お絲　だけど、お前さんも男ざかりだのに、よくさうやつてくすぶつてゐられるねえ。そんなに溜めてどうするんだい。
三吉　（笑ふ）　全くだ。そんなに溜めてどうするんだ。
お絲　けふは景氣が好いつてんぢやねえか。なかでも一廻りしといでよ。
三吉　いやだ。おいらあ、お前とかうやつてる方が好いんだ。
お絲　お前、おいらに惚れてるね。
三吉　うむ。惚れてる。
お絲　冗談ぢやねえよ、おいらあ子持だよ。
三吉　子持だつて構はねえ。
お絲　お前、さつきおいらと一緒になるなあいやだつて言つたぢやねえか。
三吉　當り前よ。
お絲　ぢやあ、惚れてるつてのは噓かい。
三吉　噓だ。
お絲　何を言つてるんだか、ちつとも分かりやしねえ。
三吉　まあさ。怒りつこなしだ。怒りつこなしだ。
（突然、表の戸が明いて、腹掛に半纏一枚の源次が、ぬつと現れる。）
三吉　おう、源公、歸つて來たか。
源次　何をふざけた眞似をしやがるんでえ。

（源次、いきなり三吉とお絲の間に置いてある箱膳を蹴返す。三吉もお絲もびつくりして立ち上がる。）

お絲　何をしやがるんでえ。源公。

源次　そりやあ、こつちで言ふこつた。お取り膳で飯なぞ食やがつて。

お絲　（大聲に笑ふ）ばか野郎。膳は一つつきやねえんだよ。

源次　亭主のゐねえのを好いことにしやあがつて、一緒になるの、惚れたのつて、畜生、外にやあ聞いてる人間がゐるんだぞ。

お絲　誰が聞いたつて構ふもんか。うしろ暗えことはこれつばかりもねえんだ。

三吉　おい、源公、あわてちやいけねえ。まあ、氣を落ちつけなよ。お前が留守の間、おれが間借りをすることあ、お前も承知だつたぢやねえか。

源次　さうよ。それがどうした。

三吉　だから、間借りをしてるだけぢやあねえか。

源次　間借りだけぢやあるめえ。

三吉　何だと。

源次　この不景氣に、好い氣になりやあがつて、ふたりで酒なんか飲んでやがるんだ。

三吉　酒はおれが買つて、おれが飲んでゐるんだ。餘計な世話を燒くねえ。

源次　餘計な世話だと。

三吉　ああ、餘計な世話だ。

源次　何を。こん畜生。（いきなり三吉の横つ面をぶつ）

三吉　野郎、ぶちやがつたな。（源次にかぶりつく）

（暫く爭鬪が續く。お絲も三吉と一緒になつて、源次をなぐる。その内、みんなへとへとになつて、薄緣の上にへたばる。）

お絲　（息を切らしながら）そんなに亭主風が吹かしたきやあ、亭主らしくするが好いや。三月も四月も家を明けつ放しにして、びた一文送つてよこさねえぢやねえか。

源次　（息を切らしながら）爲事がなけりやあ爲方がねえぢやねえか。

お絲　へ、爲事がねえもよく出來た。手前は好いことをして歩いてゐやがるくせに。

源次　何が好いことをするもんか。

お絲　ぢやあ。こんだも文なしで歸つて來たのか。

源次　當りめえよ。

お絲　（叫ぶ）やい、出て行け。このぐうたらべえ。

源次　何、ぐうたらべえだと。（いきなり立つが、もう掴みかかる氣力がない）

お絲　よくも、それでづうづうしく歸つて來られたもんだ。

（立ち上つて、源次の襟がみをとる）さあ、出て行け。ここはおいらの家だ。この不景氣に居候は置けねえよ。

源次　（弱くなる）ぢやあ、三公は錢を出してゐるのか。

三吉　當りめえよ。屋根代だつて、賄だつて、ちやんと拂つてらあ。

源次　（物が言へない）

お絲　さあ、出て行け。出て行かねえか。（源次を表へ引ずり出す）家へ歸りたきやあ錢を持つて來い。

（源次、口の内で何かごとごと言ひながら、それでも、おとなしく表へ出る。やがて、何處かへ行つてしまふ。お絲、表の戸を締める。）

お絲　三ちやん。

三吉　（うなだれて、考へ込んでゐたが、呼ばれて顏を上げる）何だい。

お絲　もう、かうなつちやあ爲方がねえ。お前、おいらの亭主になつておくれよ。

三吉　（少しも躊躇せずに）いやだ。

お絲　いやだ。

三吉　ああ、いやだ。おらあ、つくづく厭になつた。夫婦つてものが。

お絲　だけど、お前とおいらなら大丈夫だよ。

三吉　だめだ。おれだつて、いつ何時爲事がなくなるか分かりやあしねえ。

お絲　さうすりやあ、おいらが立て引くよ。

三吉　當てになるもんか。（立ち上がつて、腹掛や股引を汚い風呂敷に包む）

お絲　お前、どうするんだ。

三吉　もう、お前んとこは出て行くよ。

お絲　なぜ。

三吉　つくづく厭になつた。

お絲　だつて、何もお前さんが惡いわけぢやあねえ。

三吉　だから、おらあ厭になつたんだ。

お絲　でも、もう源公たあ縁を切つちまつたんだから好いぢやねえか。

三吉　それが、おらあ氣に入らねえんだ。おらあ、これから源公を追つかけて行つて、あした區役所へ一緒に連れてつてやらあ。

お絲　分からねえなあ。

三吉　分かるめえ。（下駄をはく）

お絲　男つて變なものだねえ。

三吉　變なものよ。（表から行つてしまふ）

（お絲、ぢつと坐つた儘、ぼんやり考へて居る。）

（お君、土間の方から歸つて來る。）

お君　おつかあ、けふは五十錢まうけて來たよ。

お絲　（默つてゐる）

お君　おつかあ、けふは竹若のお客がねえ。可哀さうだつて、澤山買つてくれたんだよ。（金を出す）さあ。だから、おまんま直ぐ食べさしておくんな。

お絲　（默つてゐる）

お君　ねえ、おつかあ、おまんま食べても好いかい。

お絲　（低い聲で）勝手にお食べよ。

お君　（あたりを見廻し、ひつくり返つて蓋の明いてゐるお鉢を持つて來る）お菜あるかい。

お絲　ないよ。

（お君、鍋のひつくり返つてゐるのを見て、不思議さうな顔をしたが、默つて、土瓶をとつて來て、飯に湯をかけて食べる。）

お君　このお湯、お酒くさいねえ。

お絲　（お君の顔をぢつと見て、默つてゐる）

（お君、我慢して、飯をかつ込む。）

（お絲、暫くその樣子をぢつと見てゐたが、やがてしくしく泣き出す。お君、何か訊かうとするが、訊いては惡いと思ふ樣子で、又飯をさくさくかつ込む。お絲わつと泣き出す。）

奈落（一幕）

人物

富さん　五十歳位
八さん　四十歳
芳さん　三十六歳
矢田　四十六歳　─穴番
奥役の野村　三十四歳
大道具の吉公　二十五歳
刑事數名。他の穴番數名
　物を言はぬ役
太夫元の村島　四十二歳
澤村田四郎
市川だん六　─年をとつた下廻り
おかるに扮した役者
一文字屋女房に扮した役者
女衒に扮した役者
猟師に扮した役者三人
男衆數名

場所

どこでも構はない――だが、現在こんな劇場はどこにもあるまい。

時代

いつでも構はない――だが、こんな劇場は現在はあるまい。

舞臺は廻り舞臺を持つた或舊式な劇場の奈落の一部。になひ棒の出てゐるぶん廻しの中心の柱が向うに黒く大きく見えてゐる。左手から右手へ、土間の上にぢかに置いた歩み板が走つてゐる――右手へ行けば花道の揚幕、左手へ行けば樂屋の階段がある心である。歩み板に沿うて、一段高くなつた三疊敷ぐらゐの場所がある。そこには爐が切つてあつて、廻りに疊莚が敷いてある。上に小さい神棚があつて、それに燈明が上げてある。大入袋が列べてはつてある。大道具の一部だの、小道具の大物などが、雜然とそこらに置いてある。燈が必要だけしか點いてゐないので、場所に依つて明暗の度がはげしい。奥の方は一體に薄暗くて、唯、舞臺の下部の骨組が氣味惡く見えてゐるだけである。奥の上一體は舞臺の床の裏が見えてゐるわけだが、これは暗くて、よく分からない。

爐の廻りで、穴番が三人、采を使ふ賭博をやつてゐる。

白毛頭で赤い顏をした富さんが胴をとつてゐて、壺で采を伏せたり明けたりしてゐる。若いのに頭のすつかり拔け上がつてゐる芳さんと、不思議に色の白い八さんが、その左右に胡坐をかいて、しきりに采の目を見詰めてゐる。時々、金のちやらちやらいふ音がする。だが、これはこの一群から聞えて來るのではない。爐のこつち側に一人離れて坐つてゐる、髮の毛と不精髭をぼうぼう生やした、他の三人に比べると著しく薄汚ない矢田といふ穴番が、銅貨や白銅を杜のやうに積んで、その勘定をしてゐるのである——上の舞臺では、丁度今假名手本忠臣藏の六段目を演じてゐる最中である。併し、上の物音は餘程高い場合でないと、ここまでは聞えて來ない。

暫く、富さんが采を振る音と、矢田が金を勘定する音で、舞臺が支配される。賭博をしてゐる連中は、時々小聲で何か言ふ樣子であるが、それは聞えない。八さんが一二度、矢田から金を借りる。そのたんびに、矢田は懷から小さい手帳を出して、それに何か書き入れる……歩み板を左手から右手へ、太夫元の村島が默つて通る。大島づくめに節絲の袴を穿いて、鼻の下にちよぼつと髭を生やしてゐる。幅の廣い金の指輪が目につく。村島は穴番達の坐つてゐる前を通りながら、ふとその方に目をつける。輕い困惑を眉の間に見せるが、すぐ默つて行つてしまふ——富さん達は氣がつかない。相變らず勝負を續けてゐる……

暫くすると、おかるに扮した役者と、一文字屋の女房に扮した役者と、女衒に扮した役者とが、そそくさと右手からはひつて來て、左手へ消える。男衆が三人、そのあとを追ふ。やがて、そのあとから、駕籠舁のこしらへをした老優澤村田四郎と市川だん六が、汚れたやうに空の四つ手駕籠を擔いで來る。そして、駕籠を左手の歩み板の向うに置くと、田四郎の方はよぼよぼと行つてしまふ。だん六は駕籠の中の蒲團へ腰をおろすと、小さくなつて眠りにかゝる——彼はこの戲曲の進行中、ずつと薄暗がりで眠つてゐるのである……

右手から奧役の野村が出て來る。まつすぐに富さん達の前へ來て、立ち留る。唐棧の著流しで、一本獨鈷を金の鎖が搦んでゐる。金縁の眼鏡、頭をまん中から綺麗に分けてゐる。今湯から出て來たばかりのやうに、額がてらてら光つてゐる。

野村　（哀願するやうに）富さん、困るぢやあないか。

富さん　（首を上げる。默つて、野村の顏を見てゐる）

野村　ねえ、富さん、お前さんが先に立つて、そんなことをしてくれちやあ困るぢやないか。

富さん　なにが。
野村　なにがつて、それがさ。（壺を持つやうな手つきをする）これさ。困るぢやないか。
富さん　誰が困るんだ。
野村　あつしがさ。あつしが困るぢやないか――今ここを太夫元が通つたらう。不取締だつて、すつかりカスを食つちまつたんだ。
富さん　さうか、太夫元が通つたのか。
野村　知らなかつたのか。夢中になつてたんだね。どうも困つたよ。なんしろ内の太夫元と來たら大嫌ひなんだからね。
芳さん　（突然口を出す）好き嫌ひでやつてるんぢやねえよ。爲方がねえからやつてるんだ。
八さん　さうよ。お前さんはさつきから困る困るつて言つてるが、困るといふなあこつちのこつた。困るからこんなこともするんだ。
野村　そりやあ、困りもするだらうが、何もこんなことをしなくたつて。
富さん　そりやあいけねえ、野村さん。「困りもするだらうが」たあ何て言ひ草だ。それが分かつてるなら、困らねえやうにしてくれたら好いぢやあねえか。さうすりやあ、おれだつて、何もこの年をして、こんなことはしやあしねえ。
野村　だが、それはあつしにやあ分からないこつた。太夫元さんの腹にあるこつたから。
芳さん　返事に詰まりやあ、なんでも、そりやああつしにやあ分からねえと來るんだ。それが奧の手よ。
富さん　だが、ねえ、野村さん。お前さんは今太夫元がやかましいからつて言つたやうだつたね。
野村　ああ、さうだ。
富さん　ぢやあ、お前さんは太夫元の使で來たわけだらう。
野村　まあ、そりやあ、さうさ。
富さん　太夫元さんはなんて言ふんだ。唯やめろつて言ふのかい。それとも、こんなことをしねえでも濟むやうにしてやるからやめろつて言ふのかい。
野村　（困つて）そりやあ、その……唯やめて貰ひたいつて言ふんだ。
芳さん　そんな取次をする奴があるかい。ばか野郎。
野村　（少しも怒らない）でも、どうもしやうがないんだ。まあ理窟はよしにして、どつちにしても、あんまり好いことぢやないんだから。
芳さん　ぢやあ、太夫元は好いことをしてるのかい。太夫元のしてることだつて博奕ぢやあねえか――あんまり好いことでもござんすまいよ。

八さん　さうださうだ。おれ達のはこんなちつぽけなんだが、太夫元のはずつと大きいんだ。何萬てんだからな。こんだの忠臣藏だつて、さうだつて言ふぢやあねえか。みんながもう時代が時代だからだめだつて言つたのに、太夫元がひとりでがん張つたんだつて言ふぢやねえか。一六勝負が當つたんだ。

芳さん　（野村に）差しづめ寺錢はお前が取るんだらう。ヨナイと言つてね。

野村　（やはり怒らない）ヨナイは何もこんだに限つたことぢやない。その代り、僕はお給金といふものを貰つてやしない。

（左手から右手へ、獵師に扮した役者が三人、人形で出來てゐる與一兵衛の死骸を戸板にのせて、默つて通つて行く。）

富さん　（話をついで）さあ、そのお給金といふ奴だ。野村さん、まあ、落ちついてよくお聞きよ。凡そこの世の中で何が癪に障るつて、その「お給金」て奴ほど癪に障るものはねえんだ。成程、おれ達は「お給金」を戴いてらあ。お前さんは「お給金」を貰つちやあゐねえ。だが、その「お給金」を貰つてゐねえお前さんと、「お給金」を貰つてゐるおれ達とを比べて見ねえ。お前の體はその通りぴかぴか光つてゐるのにおれ達は食ふものもろくに食つちやあゐねえんだ。でも、おれなんざあまだ好いんだ。年もとつてるし、内にやあ婆あが一人ゐるつ切りだが、八さんや芳さんは女房つ子を抱へてゐるんだ。四十錢や五十錢のニチでどうしてやつてけると思ふんだ。だからよ。おれ達だつて「お給金」て奴を貰ひせえしなけりやあ、もつとよくなるかも知れねえんだ。どうだい、野村さん、太夫元さんに一つそ言つて貰はうか。これから「お給金」は願ひ下げにいたしますからつてね。

野村　（まじめな顔で）さうして、これからどうするんだ

富さん　會社で言やあ株主だ――まあ、お前さんのやうな扱ひにして貰ふんだね。「お給金」なしで、ひとりでにぽつぽが暖まつて來るといふやうな工合式にね。

野村　（笑つて）そりやあ、だめだよ。富さんにも似合はない無理なことを言ふぢやないか。これでもあつしはこの小屋の幹部なんだからね。

芳さん　ぢやあ、何かい、野村さん。おれ達のしてる爲事が詰まらねえことだから、そんな待遇は出來ねえと言ふのかい。

野村　なに、さういふわけぢやあないけれど……

芳さん　なあに、さうに違えねえ。さうならさうとはつきり言ひねえ。

野村　なに、決してさういふわけぢやあないよ。太夫元さ

んだつて、始終氣の毒だ氣の毒だつて言つてゐんだけれど、なにしろ大道具小道具の諸式は高くなるし、役者の仕込だつて、この頃は容易なこつちやあないし、つまり腹ぢやあ思つてゐても、そこまでは手が屆かないんだよ。

八さん　つまりおれ達は一番後廻しだつてわけか。成程――おれ達は地の底にゐるんだからな。

野村　（そろそろ逃足になつて）まあ、さう皮肉は言ひつこなしさ。その方のことは又將來共に骨を折るから、それはそれとして、けふのところは僕の顏に免じて、一つそいつはやめてくれないか。

芳さん　（ぶつきらぼうに）やめねえ。

野村　こんなに賴んでもかい。

芳さん　ああ、困らなくなるまでは、やめねえ。

（獵師に扮した役者が三人、右手から左手へはひつて行く。）

野村　（顏に或變つた感情が現れる。だが、それはまだ怒でもなければ反抗でもない）僕は理窟を言ひに來たんぢやないから、唯賴んでやめて貰はうと思つたんだが、そんなに分からないことを言ふなら爲方がない。僕も一理窟言はなきやならないね。

八さん　ああ、なんでも言ふが好いや。

野村　君達は食へないから、こいつをやると言ふんだね。

芳さん　さうだ。

野村　ぢやあ、これをやれば、きつと食へるんだね。（ほんの一寸間を置くが、相手が返事をするまでは待たないで）負けたら、どうするんだ。

富さん　（突然笑ひ出す）は、は、は、それが分からねえのか。惡黨に見えても、やつぱりお前はまだ若えや。（一寸間を置いて）そりやあ、負けりやあ尙困るにきまつてらあ。だが、これをやつてる內は、若し勝てばといふ當てがあらあ。なんにもしねえで、まるで當てなしでゐるよりやあ、どんなに增しだか知れやしねえ。その氣持だけでも、生きてるやうな氣がすらあ。

野村　成程、そりやあそんなものかも知れないけれど、何もこんなことをしないだつて……

芳さん　ぢやあ、どんなことをすりやあ好いんだ。

野村　さう言はれると、あつしも困るけれど、たとへば今ここにゐた矢田だ。（矢田は、いつの間にかゐなくなつてしまつてゐる。勿論、銅貨や白銅の柱もない。唯、さつきまでは見えなかつたが、その坐つてゐたところに、辨當の空箱が三つ四つ積まれてゐる）

八さん　矢田がどうしたい。

野村　感心ぢやあないか。內で貰ふお給金だけで、もう五百圓も溜めてゐるといふぢやないか。酒は飮まず、煙草

はやらず、女買もしなけりやあ、博奕一つしやしない。人間は心がけ一つだ。

芳さん　お、お、お、ちよつと待つてくんねえ。おれ達は江戸つ子だ。客の辨當の殘りなんぞ食つちやあゐられねえや。何も贅澤を言ふんぢやねえ。香辨でも好いから、手つかずのものが食ひてえや。

八さん　それに、矢田はひとりものだ。おつかあもなきやあ、餓鬼もねえんだ。おまけに住ひはこの奈落だ。矢田とおれ達が一緒になるもんか。

富さん　野村さん。お前は矢田が烏金を貸してるのを知らねえのか。高が高だから氣がつかねえが、たいした利だせ。目の玉が飛び出るやうだ。それでも、裏の者はみんな苦しいから借りるんだ。その又催促のしやうが一種特別なんだ。あいつのこつたから、何一つ口を利くんぢやねえ。日切りが來ると、相手のそばを離れねえんだ。金を拂はねえ内は、だにのやうにくつついてゐやがるんだ。湯へも床屋へも行つたことのねえ人間だから、汚ねえつたらありやしねえ。それでまあ、大抵な奴は降參して、否でも應でも取られつちまふんだ。あんな奴はねえ。

芳さん　あんな奴とおれ達が、一緒になるかい。なんでえ。一理窟だなんて言やがるから、どんな尤もなことを言ひ出すかと思やあ、そんなばかなことを言ひ出しやあがつて、そんなことでおれ達が負けるかい。

八さん　好いから、もう行きねえ。爲事の邪魔だ。

野村　（笑つて）いや、行かないね。太夫元の言ひつけ通りにするまでは行かないね。

芳さん　（大きな聲をする）行かねえと。なんだ、この野郎。

野村　（宥めるやうに）まあ、さう大きな聲をしちやあいけない。（上を指さす）上では芝居をやつてゐるんだ。

芝さん　上よりやあ下の方が、よつぽど芝居だ。上の芝居は金のある奴が閑にあかして見る芝居だ。こちとらの芝居はもつと眞劍だ。

八さん　おい、芳公。（地面を指さす）まだこの下にも芝居があるかも知れねえぞ。

芳さん　大きによ。お蔭でおれ達が苦しんでるのかも知れねえや。

八さん　一體、この下にゐる（地面を指さす）穴番はどんな面をしてやがるだらう。

富さん　大方、金縁の眼鏡をかけたり、八字髭を生やしたりしてゐやがるだらう。

野村　（はじめて少許りの憤りを顏に現す）おやあ、君達はどうしてもやめないと言ふんだね。

芳さん　當りめえよ。（富さんに）さあ、富さん、始めよ

うぜ。

野村　よし。こんなに言つても聞かなけりやあ為方がねえ。太夫元にそ言つて、首にして貰ふばかりだ。

富さん　首に。そいつあ面白えや。するなら、して見ねえ。あしたから舞臺は廻らねえぞ。

芳さん　ぐるぐる廻りの忠臣藏が、ゐびつたれの忠臣藏にならあ。

野村　なあに、代りはいくらでもあらあ。（捨臺詞を殘して行きかける）

富さん　ばか野郎、こんなどぢな爲事をする奴が、どこ探したつてあるものか。

（野村は富さんの聲を浴びながら、ぷりぷりして、右手へ消えてしまふ。三人は痛快さうに聲を合せて笑つたが、それは直ぐ、寂しい、聲のない苦笑に變つてしまふ——或不吉な豫感が同時に三人を襲つたのである。）

（上の舞臺から篠入の合方が微に聞えて來る。）

芳さん　（沈んだ聲で）富さん、もう一番やらうよ。

富さん　（これも沈んで）氣がねえなあ。

八さん　（自分で自分を欺くやうに）なあに、野村の野郎に何が出來るもんか。

（富さん、渋々壺をとる。芳さんと八さんが賭ける。三人はまるで口を利かないで、暫く勝負を續ける。）

（突然、左手から大道具の吉公が駈け込んで來る。）

吉公　（小聲で、併し力強く）大變だ。大變だ。

富さん　どうしたんだ。（と言ひながら、覺えずそこらの道具をしまふ。芳さんも八さんも顔色が變る。みんな、出してあつた金をしまふ）

吉公　矢田の野郎、ぬすつとなんだとよ。こなひだ中、この近所がやられたのは、みんなあいつなんだとよ。盗つた金はみんな細に崩して、自分がけちけち溜めたやうに見せかけてゐたんだとよ。

芳さん　それ見ろ。そんなこつた。

富さん　あいつは、おれ達より度胸があつたんだ。

八さん　あいつだつて、やつぱり食へねえんだ。

吉公　（急いで）兎に角、今逃げて來るから、どうかしてやつてくんねえ。部屋へ隠したんだが、あすこはどうもあぶねえ。すぐこつちへよこすから。

富さん　もう手がへえつたのか。

吉公　あいつが囃子部屋で誰かに金の催促をしてゐるところへ、樂屋口から、いきなり四五人飛び込んで來たんだ。

富さん　よし。ぢやあ、早く逃がしてよこしねえ。

（吉公左手へ駈けてはひる。三人、立ち上がる、途端に、上でチョンと拍子木が鳴る。）

八さん　いけねえ　切つかけだ。

富さん　爲方がねえ。

（三人、急いで擔ひ棒へ飛んで行く。外からも二三人黑い影が出て來て、擔ひ棒に取りつく。二度目の拍子木がチョンと鳴る。穴番達は舞臺を廻し始める。）

（途端に、左手から眞つ蒼な顏をして、矢田が飛び込んで來る。右の手に何だか光るものを持つてゐる。みんなが舞臺を廻してゐる奧の暗い方へ逃げる。）

（暗闇で舞臺の廻る音と、上の舞臺の賑かな合方とが交叉する。）

（刑事が四五人、ばらばらと左手から飛び込んで來る。矢田の姿を見つけると、その方へ飛んで行く。矢田は穴番達が棒を押しながら、ぐるぐる廻つてゐる中を巧みに逃げ廻る。刑事達も、その中を右往左往する。）

（留め木が鳴る。穴番達は知らん顏をして、ますます舞臺を廻す。上から舞臺の床を突く音がする。それでも構はず廻してゐる。立て續けに狼狽したやうな合圖がある。それでも、まだ舞臺を廻してゐる。）

（突然、合方がやむ。「幕だ、幕だ。」と叫ぶ聲がする見物のどつと叫ぶ聲がする。）

（太夫元の村島と奧役の野村が右手から飛んで來る。）

（矢田と刑事達の格闘が始る。）

（舞臺はますます激しく廻る。）

（市川だん六は死んだやうに、駕籠の中で眠つてゐる……）

——幕——

捨兒（一幕）

人物

龜井留吉　酒店の主人
およし　その妻
松吉　その弟
二郎　小僧
新吉　小僧
近藤寛　大學生
白井數馬　巡査
酒を立飲に來る男　二人
町を通る人

場所
東京の或學生町

時代
現代

舞臺。食料品荒物などを兼業する或酒屋の店先。及びその前の道路。
十二月の或晩、十時頃から十一時頃までの出來事。

主人留吉、小僧二人（二郎と新吉）を相手に帳合をしてゐる。

二郎　……十九日が十錢でたわし。二十日が一圓十錢で牛罐。廿一日が五十錢でシロップ。廿二日が十一錢で上酒。廿三日が五錢で酢。同じく十五錢で草箒。廿四日が二圓十錢で味の素。廿五日が三十三錢で日本橋漬――それで山口さんはおしまひです。
主人　よし。間違ひなしだ。〳〵は。
二郎　二十三圓と三十八錢。
主人　よし。よし。
（時計、十時を打つ。）
主人　十時か。もう一息だ。やつてしまはう。あと二軒だらう。今度は高山さんか。
新吉　へい、高山さんです。高山さんはお酒ばかりだから、わけなしだ。
二郎　隣り合つてゐても妙なもんだね。山口さんは一切お酒の御用なし、高山さんは年中お酒の御用ばかりといふのだからな。
主人　（取り合はずに）さあ、讀んだ、讀んだ。あすこは新吉だらう。
新吉　へい。では願ひまして、お朔日が三圓五十錢で一升。二日が一圓八十錢で五合。三日が一圓八十錢で同じく。

四日が一圓八十錢で同じく……（讀み續ける）

（電話の鈴鳴る。）

（小僧、二郎出る。）

二郎　はあ、はあ……上州屋でございます……はあ。どなた様で。ああ、荒木さんで入らつしやいますか……へいへい……富久娘を一升……へい、へい……荒木さんでございますね……明朝八時までに……へい、へい、畏りました。どうも有難うございます。さやうなら。（電話を離れる。主人に）旦那、荒木さんで、あしたの朝八時に富久娘を一升ですつて。

主　（帳面から目を放さずに）よし、お前覺えて置け。忘れるな。

二郎　へい。

新吉　（讀むのをやめて、二郎に）なんだつて朝つぱらから酒が入るんだらう。

二郎　きつと子供が生れるんだよ。奧さん、隨分大きなお腹をしてゐたからな。

新吉　子供が生れたつて、朝つぱらから酒を飲む奴があるものか。

二郎　ぢや、産湯にでも使ふんだらう。

主人　（帳面から顏を上げて）ばか。新吉、あとを讀まないか。

新吉　へえ、ええと、十四日まで濟みましたね。ええと、十五日が三圓五十錢で一升。十六日が一圓八十錢で五合。十七日が一圓八十錢で同じく。十八日が一圓八十錢で同じく。も一つ、十九日が一圓八十錢で同じく……（讀み續ける）

（勞働者風の男、立飲に來る。）

（小僧二郎、直ぐ一ぱいコツプについで出す。鹽を少し皿にのせて持つて來る。）

（勞働者、默つて一杯一息に飲み干す。コツプを出す。二郎、又樽の栓を拔いて、注ぐ。）

（勞働者、今度は間を置いて飲む。初め鹽を摘む。やがて、腹掛から、小さな竹の皮包を出しその中から何か摘んで食ふ。）

主人　（新吉に）〆はいくらになつてる。

新吉　丁度五十六圓になつてゐます。

（勞働者、一寸主人の方を見る。併し、直ぐ又酒の方にかかる。）

主人　（二郎に）二郎、今度は大井さんだぞ。

二郎　へえ。（主人の側へ行く）

（勞働者、二杯目を飲み終り、又コツプを出す。今度は新吉が酒をついで出す。）

（勞働者、ちびりちびりと飲む。）

二郎 （この間に、もう讀んでゐる） 朔日が二十錢で味噌。二日が十錢で味噌。三日が十五錢で味噌。四日が十錢でマッチ。五日が六錢で磨き粉。六日が二十一錢で味醂。七日が五錢で鹽……（讀み續ける）

（紋附の羽織を着た男が、店へはひつて來る。）

新吉 入らつしやい。

紋附 酒を。

新吉 お酒は何を差し上げます。

紋附 ここで飮むのだ。

新吉 （驚かずに） へえ。（直ぐコップへ一杯ついで出す）

（紋附の男、ちびりちびり飮み始める。そこに出てゐる鹽を甞める。）

（勞働者、竹の皮包を紋附の男の方へ出す。）

紋附 （相手の顏を見て） いや、これは。僕にですか。それは恐縮。頂きやす。

勞働者 寒いね。

紋附 東京の寒さぢやごわせん。滿洲の寒さでやす。

勞働者 お前、滿洲へ行つてた事があるのか。

紋附 然樣。三年をりやした。

勞働者 どこにゐた。

紋附 大連にもゐやした。旅順にもゐやした。奉天にもゐやした。

勞働者 商賣は何だね。

紋附 興行をしてゐやした。

勞働者 鑛山か。

紋附 いや興行物で。

勞働者 ああ、芝居の興行師か。

紋附 芝居もやりやしたし、手品もやりやしたし、オペラもやりやした。

勞働者 儲けたな。

紋附 一時はあなた、馬車を乘り廻すやうな景氣でやしたが、明智光秀三日天下で、忽ち沒落でやさあ。

勞働者 今は何をしてゐる。

紋附 どつかに何か働くとこはないでやせうか。

勞働者 ねえな。

紋附 旦那は何をしてゐなさるので。

勞働者 おれか。おれは勞働運動よ。

紋附 儲かりやすか。

勞働者 儲からねえな。その代り、どう轉んでも食ひはぐれはねえ。

紋附 成程な。

勞働者 だが、この頃はどこでも酒を禁じちまつたんで、そいつだけが不自由だ。その代り、運動はしつかりして來た。容易に資本家に負けやしねえ。

紋附　全く資本家といふ奴は績に障りやすな。
勞働者　お前だつて、興行師なら、資本家だ。
紋附　もうそれは廢業でやす。
勞働者　資本家の自由廢業か。笑はせやがる。
紋附　（怒りもせずに、笑つてゐる）へ、えへえ。
（主人の弟、出て來る。）
（店に客のゐるのを見て、また元來た方へはひる。）
主人　（二郎に）〆高は。
二郎　十一圓と二十三錢五厘。かどの多い割に少ねえなあ。
新吉　あすこは婆さんがしつかりしてゐるから、經濟がうまいや。
主人　むだを言はずに、帳面を片づけろ。
（二人、帳面を片づける。）
（主人も帳場を片づけにかかる。）
勞働者　何か。君は演說が出來るか。
紋附　演說て程の事は出來やせんが、口上なら巧いもんでやす。
勞働者　どうでえ。一つおれの方の事務所へ來て働いちやあ。
紋附　結構でやすな。事務所はどちらにあるんで。
勞働者　小名木川だ。愛勞會つてんだ。お前、ひとりものか。

紋附　女房も子もありやしたが——滿洲へ置いてきぼりにして來やした。
勞働者　當り前だ。どうも食へなきやあ、しやうがねえからな。おれなんぞは、人間が利口だから、初めつから女房なんぞ持ちやしねえ。
紋附　全くだ。人間至るところ青山ありでやすからなあ。
勞働者　なんでえ、そりやあ。
紋附　女が欲しけりや、コッへ行けでやす。
勞働者　お前、割に話せるな。そのイキで一つ遣つてくれ。
紋附　やりやせう。
勞働者　ぢやあ、これから直ぐ來るか。
紋附　參りやすとも。
勞働者　お前、家はどこなんだ。
紋附　家なんぞありやしません。
勞働者　ぢやあ、合宿へ泊りねえ。ところで、お前もう一杯やらねえか。
紋附　御馳走になるんでやすか。
勞働者　しみつたれた事を言ふねえ。（紋附の男のコップをとつて、二郎のゐる方へ差し出す）
（二郎、そのコップに酒を注いで來る。）
紋附　いや、濟みやせん。有難う。
勞働者　よせやい。一つ健康を祝して、今夜は板橋とする

かな。あしたは又命がけだからな。
紋附　そんな危險な事があるんでやすか。
勞働者　なあに。お前は口の方だから大丈夫だ。おれは腕で行く方だからな。さあ行かうぜ。（二郎に）小僧さん。いくらだ。
二郎　一緒ですか。
勞働者　さうだ。
二郎　（新吉と相談してから）ええ、一圓と十五錢。
勞働者　（腹掛から錢を一摑み出して、その中から要求されただけの額を置くと、殘りを又腹掛の中へ入れて、どんどん出かける）
紋附　どうも、濟みやせんな。（あとを追ふ）
主人　暢氣な人達だ。さあ、早く戸をしめろ。
二郎と新吉　へえ、へえ。
主人　あしたの朝、荒木さんの富久娘を忘れるなよ。
二郎　へえ。大丈夫です。
（丁度そこへ、主人の弟、はひつて來る。ふところに赤子を入れてゐる）
弟　今晩は。
二郎　入らつしやい。（主人に）旦那、本所の旦那が來ましたよ。
主人　（默つて何か片づけてゐる）
新吉　本所の旦那が入らつしやいましたよ。
主人　（一寸弟の方を振り向くが、又よそを向いて、片づけものをする）
弟　兄さん。今晩は。
主人　（突然、弟の方を向く）何か用か。
弟　ええ。少しお願ひがあつて。
主人　お前のお願ひは聞かないでも分つてる。もう店をしまふのだ。出直して來い。
弟　でも……折角遠いとこを來たんですから。
主人　それはお前の勝手だ。
弟　どうも、兄さんのやうに言はれてしまつては。
（二郎と新吉、奥へはひる。）
主人　（赤子に目をつける）お前、赤んぼを抱いてるな。
弟　ええ。一週間ほど前に生れたんです。それで、實は…
主人　祝へと言ふのか。
弟　どう致しまして。今の身分で、決してそんな大それた事は願やしませんが、唯かかあが產後の肥立が惡くて…
主人　（默つてゐる）
弟主　全く、どうも、十月にあんな事があつたんだし、二度と來られた義理ぢやないんですが、ほかに賴るところはないし、この頃ぢや職の方もからつきし……
主人　當り前だ。はやらないのが當り前だ。第一、おれは

お前の職が氣に入らないのだ。そこの（指さす）活版所へ行つて見ろ。大きな機械が夜も寢ずに廻つてゐて、日に何萬といふ本が刷れるんだ。製本も、器械でどんどん出來るといふぢやないか。選りに選つて、今どき、日本紙のかがり綴などを職にする奴があるものか。

弟　でも、この頃の本は直ぐ毀れてしまひます。

主人　讀んでしまへば毀れたつてほごれたつて構ふものか。

弟　ところが、さうでないんです。後世へ傳へるやうな立派な著述は、成るべく日本紙に刷つて、しつかり綴ぢて置きたいんです。

主人　ふむ。また受賣だな。あの「探古」とかいふ先生の。おれは第一、お前があゝいふ時代おくれな人間を貴んでるのが氣に入らないんだ。やれ「酒樽の由來」だの、「吉原の沿革」だのつて、役にも立たない穿鑿をして喜んでるんぢやないか。今どき、そんな物を讀む閑人があるものか。先生がそれだもの、弟子のお前が貧乏するのは當り前だ。

弟　ええ。あたしはどうせかういふ意氣地なしですから、何と言はれても構ひませんが、どうか先生の事だけは惡く言はないで下さい。先生は日本の學問の爲に金も名も忘れて、食べる物もろくろく食べずに、一所懸命に働いて入らつしやるんですから。

主人　入らつしやる。何が入らつしやるだ。よく聞けよ、松吉。好いか。働くといふのはな。おれ達のやうに、朝は五時に起きて、夜寢るのは大抵十二時。その間微もおちおち食はずに、動き通しに動いてゐる――これが「働く」といふのだ。

弟　兄さんの事を働かないとは言ひません。唯、先生は兄さんなどのしてゐる事より、もつと高尚な爲事をして入らつしやるんです。日本に何人といふ人にしきや出來ない爲事をして入らつしやるんです。

主人　ふん。そんなに偉い人なら、おれのところへなんか賴つて來ないで、その人のとこへ行つたら好いぢやないか。

弟　でも、かういふ事で、先生に御迷惑をかける事は出來ません。

主人　賴る事の出來ない人間なら、いくら偉くたつて、しやうがないぢやないか。人間は人に賴られるやうにならなきやだめです。

弟　兄さんはお金の事ばかり考へてるんです。

主人　さうだ。金の事ばかり考へてる。だから、お前のやうな怠け者には錢一文だつて惠む事は出來ない。

弟　ああ、さうですか。分かりました。ぢやあ、もうなん

にも言はずに歸ります。ええ、さやうなら。

主人　おい、おい、二郎。早く戸をしめてしまへ。

二郎　(出て來る)　へい。(そこらを片づける)

(新吉と一緒に主人の妻およしが出て來る。)

妻　どうしたんです。

主人　なあに、又松吉の奴がやつて來やがつたんだ。

妻　で、もう歸つたんですか。

主人　追ひ返してやつた。あいつも今度といふ今度は目が覺めるだらう。なあに、ここで働かしてくれと言ひさへすりやあ、何でもないんだ。それがあいつには言へないんだ。やつぱり、あいつは親父の血が勝つてるんだ。

妻　でも、あなたにはたつた一人の弟さんですからねえ。暮れで困るんでせう。なんとかしてお遣りなされば好かつたのに。

主人　子供が生れたんだとよ。

妻　まあ。ぢやあ、尙更の事ですわ。可愛い子でせうねえ。お峰さんは美人だから。

主人　怠け者の子だ。どうせ碌な者になりやしないよ。

(弟、又出て來る。)

弟　兄さん。

主人　(知らん顏をしてゐる)

弟　兄さん。

妻　あなた、松さんですよ。

弟　姉さん、どうも、こんなにおそく上がつて、濟みません。

妻　どう致しまして。

弟　兄さん。今のはあたしが惡うございました。今言つた事はみんな取り消します。あたしは、やつぱり兄さんを賴るより外に爲方はありません。子供が可哀さうです。嬶が可哀さうです。

主人　(默つて戸を締めにかかる)

弟　ねえ、兄さん。

妻　(主人に)　ねえ、あなた。松さんがあんなに言つてるんですから。

主人　だめだ。歸れ。歸れ。

妻　(赤子に目をつける)　まあ、赤ちやんを連れて來たんですね。どれ、どれ、一寸見せて下さい。(側へ寄る)　まあ、まあ、おとなしく寢ん寢だこと。

弟　へえ。仕合せと、世話のちつとも燒けない子でして。

妻　男。女。

弟　男で。

妻　それはまあ、お峰さん、大喜びでせうね。

弟　それが……まだ、子供の顏もろくろく見ないんで。

妻　あとでも惡いんですか。

弟　ええ。へえ。

主人　さあ。さあ。いつまで同じ事を言つてるんだ。早く歸れ。早く歸れ。

弟　でも、兄さん。あたしは、どうしても、今夜は、この儘は歸れません。

主人　ぢやあ、どうしようと言ふのだ。

弟　もう、一圓でも、二圓でもよござんすから、貸して下さい。

主人　いけない。

妻　あなた、それ位なら、どうかして。

主人　お前は默つてゐなさい。（弟に）さあ、歸らないか。

弟　ぢやあ、せめて、子供だけでも引きとつて。

妻　あなた、さうして上げようぢやありませんか。

主人　だめだ、だめだ。歸れ。歸れ。

弟　ぢやあ、子供をここへ捨てて行きますよ。

主人　まだ歸らないな。どうしても歸らなけりや、手荒な事をするぞ。

弟　ええ、どうされても、あたしはどきません。

主人　歸らないか。（突く。赤子、泣き出す）

妻　まあ、あなた、そんな亂暴な事を。

主人　お前は默つてゐろ。（弟を外へ突き出す）さあ歸れ。歸らないか。

弟　いいえ。歸りません。

（主人と弟、揉み合ふ。）

（弟、終に締め出される。戸を締める時は、小僧達も手傳ふ。）

（弟、暫く締め切られた雨戸を睨んで立つ。やがて、泣く子をすかしながら、行きかける。が、直ぐ戻つて來て、赤子を軒先へ捨てる。一度行きかけて、又戻り、自分の羽織を脱いで着せたり、自分の襟卷をとつて、子供の頭を包んでやつたりする。やがて、顏を押さへて、足早に去る。）

（一度默つた赤子が、又泣き出す。）

（雨戸の中で十一時が鳴る。）

（主人の妻、雨戸の小窓をそつと明けて、顏を出す。）

妻　まあ、ほんとに捨てて行つてしまひましたよ。

主人　（妻の後から少し顏を出して）うつちやつとけ。うつちやつとけ。あいつは氣の小さい奴だから、近所にゐて樣子を見てゐるに違ひない。今に歸つて來るにきまつてる。（小窓を締める）

（人の往來、絶える。）

（赤子、泣く。）

（雪が少し降つて來る。）

（稍長き間。）

（口笛で、ファウストの行進曲を吹いて來るのが聞える。）
（やがて、マントを着た大學生が一人出て來る。店の前を勢よく通つて行つてしまふ。）
（赤子、烈しく泣く。）
（學生、うろうろしながら、歸つて來る。子供を見つける。あたりを見廻す。赤子、泣く。學生、思はず抱き上げる。が、下へおろす。又抱き上げる。又考へて、下へおろして、行きかける。又赤子、泣く。又抱き上げて、少し行きかけるが、又立ち止つて、考へて、元のところへ置きに歸る。赤子を下へおろして、襟卷の崩れたのを直してやつたりなどする。）
（丁度、その少し前から密行の巡査が出て來て、ぢつと立つて見てゐる。）
（學生、行きかける。）
巡査　君。君。
學生　は。
巡査　（赤子を指さす）それは。
學生　子供です。
巡査　君の子供ですか。
學生　僕の。（笑つて）僕は學生です。
巡査　學生だつて、子供がないにきまつてはゐません。
學生　それは、僕の同級生にだつて、持つてる奴はあります。
巡査　だから訊くのです。それは君の子ですか。
學生　僕の子ではありません。
巡査　では、なぜ今抱いてゐたのです。
學生　自分の子でなければ、抱いては惡いのですか。
巡査　理窟を言つちやいけません。では、率直に訊きませう。あなたは自分の子を捨てたのではありませんか。
學生　いいえ、さうぢやありません。
巡査　さうでないといふ證據がありますか。
學生　證據。
巡査　證據と言つては無理かも知れませんが、私に承認の出來るやうな事が何がありますか。
學生　では、順序だけ申し上げませう。僕は親類の家へ遊びに行つた歸りに、唯ここを通りかかつたのです。僕はそこの下宿にゐるもんですから。ところが、子供の泣き聲がするから、戻つて見るとどうも捨兒らしいんです。あんまり泣くから、可哀さうになつて、抱き上げては見たんですが、下宿へ連れて歸つても、僕にはどうする事も出來ません。で、また、元のところへ置いたのです。唯、それだけです。
巡査　併し、近頃は、大分學生間に戀愛問題がありますか

らな。
學生　それは、あるかも知れません。また僕自身にも、あるかも知れません。併し、これとそれとは別問題です。
巡査　（手帳を出す）　君の名は。
學生　僕は悪い事をしたのでせうか。
巡査　それは分かりません。私は唯自分の職責として、君の名を訊くのです。
學生　では、あなたの名をお言ひなさい。
巡査　私の名ここで言ふ必要はないのです。併し私は自分一個の主義として、訊かれれば言ふ事にしてゐます。私はそこの派出所にゐる白井數馬といふ者です。
學生　僕は、近藤寛。
巡査　ユタカは。
學生　寛です。寛大の寛です。
巡査　帝大ですね。
學生　文科の三年です。
巡査　下宿は。
學生　元町二丁目廿三番地。長生館。
巡査　ちやうせい。
學生　長く生きるです。
巡査　國は。
學生　京都市七條下ル西洞院。
巡査　年は。
學生　そんなに何もかも訊くのですか。
巡査　一應訊いて置きます。
學生　二十三です。
巡査　（子供を抱き上げる。子供、泣きやんでゐる）　ではお氣の毒ですが、一寸署まで御同行を願ひます。
學生　警察へ行くのですか。
巡査　さうです。
學生　それは迷惑ですな。
巡査　迷惑かも知れませんが、やむを得ません。
學生　警察へ行くのは餘り愉快ではありませんな。
巡査　爲方がありません。この子が君の子だか、さうでないか、確めなければなりませんから。
學生　それは、さつきからさうでないと言つてるではありませんか。
巡査　それだけでは、私として承認が出來ないのです。
學生　なぜ承認が出來ないのですか。
巡査　それは署へ行つて言ひませう。
學生　なぜ、ここでは言へないのですか。
巡査　また理窟ですね。それでは言ひませう。先づ第一に斷つて置きたいのは、私が巡査であるといふ事です。
學生　それは分かつてゐます。

巡査　私は巡査です。それをしつかり頭に置いといて下さい。その巡査の私が、この目で見たものは何でしたか。この子を抱いてゐた君が、この子をこゝへ捨てた事です。私の見たのは、唯それだけです。私は巡査として、君を疑はなければなりません。疑はなければ、私の職務が立ちません。想像や推測で、人を罰したり許したりする事は、吾々に許されてゐません。

學生　あなたの職務は人民を保護する事です。

巡査　さうです。人民の保護です。私はこの子が可哀さうだから、君を疑ふのです。若し、これが君の子であるとして、君がこの子を捨てなければならないとしたらその事情も訊きたいのです。それは君を保護する事になるのです。

學生　僕は自分の子を捨てるやうな事はしません。

巡査　さうかも知れませんが、私の見たのは、君が捨てるところを見たのです。

學生　拾兒が泣いてゐれば、可哀さうになるのが當り前ではありませんか。誰だつて拾つてやるのが本當です。それが人間といふものです。あなただつて拾ふでせう。

巡査　勿論、拾ひます。

學生　それで、あなたに嫌疑がかかつたらどうします。

巡査　警察へでも何處へでも行つて、明かりを立てます。

學生　若し、僕が拾つた儘、どんどん行つてしまつたら、どうですか。

巡査　それなら、咎めなかつたかも知れません。

學生　それは不合理ぢやありませんか。

巡査　精神的に言へば不合理かも知れません。併し、吾々は目で見た事のみに根據を置きます。

學生　では、僕が一旦拾つたものを、又捨てたのが惡いのですね。

巡査　拾つたところは、私は見ないのです。

（長き間。）

學生　さうだ。確にそれは惡い事だ。僕は愛が足りなかつたのだ。僕の躊躇は愛の缺如から來たのだ。どんな事があつても、拾つて行くべきだつたのだ。さうだ。やつぱり、あなたはえらいところを見つけた。僕は惡かつた。僕は罰せられても爲方がない。ああ、恐ろしい。僕は恐ろしい罪を犯したのだ。

巡査　同行しますか。

學生　致します。

巡査　では。

（二人去る。）

（雪、ますます降る。）

（寐卷姿の主人の妻、小窓を明ける。）

妻　あなた、あなた、子供がゐませんよ。
主人　（後から）松吉が又來て、連れて歸つたんだらう。
妻　何だかごとごと人聲がしましたね。
主人　お巡りにでも咎められてゐたんだらう。
妻　さうですかねえ。可哀さうに。
主人　あした、どうにかしてやらうよ。
妻　どうかねえ。
主人　子供の始末さへつきやあ安心だ。さあ、寢よう。寢よう。
（二人、顏を引つ込める。小窓の戸が締まる。）
（雪がますます烈しく降る。）
（松吉、ふるへながら、出て來る。軒下を見ると、子供がゐないので、一寸驚くが、直ぐ又何か考へついたやうに、酒屋の店の雨戸の側へ身を寄せて、耳を傾ける。）
弟　坊や、よく寢てると見えるな。
（安心したやうに、行つてしまふ。雪が無關心に降りしきる。）

――幕――

圓タクの悲哀（一幕）

人物

圓タクの運轉手
客A
客B
客C
自家用自動車の運轉手
毀れた自轉車を持つた小僧
浴衣がけで赤ん坊を抱いた男
警部
交通巡査
他の巡査

場所

東京

時代

現代

（一）

或往來。

圓タクが一臺とまつてゐる。

車の中には男の客が二人乘つてゐる。

圓タクの運轉手が、車を降りて、ジヤツキイでごつとんごつとんと前の車輪の一つを上げてゐる。

タイアのスペエアが地面の上に丸く、太く横になつてゐる。いろいろな修繕用具がそこらに散らかつてゐる。

客A　（八字髭を生やしてゐる。麥藁の均一帽を冠つてゐる車の上から首を外へ出す）おい、君、まだか、隨分待たせるなあ。

運轉手　濟みません。もうぢきです。（ジヤツキイをごつとんごつとんとやる）

客B　（禿頭。赤い鼻。片手に鳥打帽子を、片手に大きな懷中時計を持つてゐる。Aの向うから顏を突き出す）おいおい、君、五分といふ約束だぜ。もう七分たつてしまつた。

運轉手　もうぢきです。もうぢきです。（ジヤツキイをごつとんごつとんとやる）

客A　（Bに向ひ、わざと大聲に）パンクの修繕は五分と相場がきまつたもんだ。そのくせ五分で直つたためしはない。先づ十五分は大丈夫かかるね。

客B　おい、君、それぢやあ間に合はないぜ。なんしろ先

方は忙しい人なんだからね。けふの約束におくれたら、もう何年先きに會へるか分からないんだ。

客A　（心配さうに）　そりやあ、さうだ。若し會へないとなると、死活問題だ。そこで二萬か三萬出して貰はなければ、折角の計畫も烟になつてしまふんだからな。

客B　さうとも。さうとも。三年苦心の結晶たる自動斷髪機も特許權讓り渡し位が落ちで、儲けはみんな人の懷にはひつてしまふのだ。（時計を見る）　降りよう、降りよう。降りて他の圓タクを探さう。もうとても間に合やしない。

客A　うん、降りよう、降りよう。正直に待つてゐただけ、こつちが莫迦だつた。

（二人、車を降りかける。）

（運轉手、車輪を上げたり、タイアを代へに掛つてゐる。）

運轉手　旦那、旦那、そんなことを言はないで、乘つてて下さいな。もうこれをはめ替へすれば濟むんですから。

客A　だめだ、だめだ。（車を降りてしまふ）

客B　（車を降りて、時計を運轉手の鼻先へ突きつける）　五分の約束ぢやないか。見給へ。もう十分たつてゐる。

運轉手　（手をやめないで）　濟みません。でも、もうほんとにぢきなんですから。車が出來たら、スピイドを出して、丸の內まで十分で行きますから。

客A　だめだ、だめだ。こんな車でそんなに早く走れるものか。

客B　そんなことをして、交通巡査にでもつかまつたら、餘計時間がかかるばかりだ。（五十錢銀貨を出す）　まだ一哩も走つてゐないんだから、唯でも好いんだが、それもあんまり氣の毒だ。こつちの損とあきらめて、これだけ上げるから。

運轉手　（銀貨を受けとる）　そりやあ、旦那、殺生だ。けさからあぶれ通しで、やつとこれが口明けなんですから。どうか丸の內まで乘つて下さいな。ほんとにもう直ぐなんですから。

客A　（Bに）　おい、行かう、行かう。それで結構だ。（上手を見る）　お、向うに一臺來た。（手を上げる）　おい、待つた。（走り去る。Bもあとを追ふ）

（運轉手一人取り殘される。）

運轉手　（呆れたやうに二人の行方を見る。それから、手の內の銀貨を見詰める）　おや、おや、たつた二分か。（銀貨を衣兜へ入れる）　爲方がねえ。こつちが悪いんだ。

（默つて、タイアをはめ替へる。ジヤッキイを外す。そこらに散らかつたものを、それぞれ車の中へしまふ。それから、スタアチング、ハンドルを廻して、運轉臺

に登り、「市内全部一圓と書いた札を前の硝子板にかけハンドルに手をかける。爆音がしない。）

運轉手　おや。

（車を降りる。ガソリンキャップをあけて見る。）

運轉手　なあんだ。ガソリンが切れてゐやがらあ。

（衣兜を探る。さつきの五十錢銀貨を出す。）

運轉手　おや、おや、この二分もふいか。

（車の中からガソリンの空鑵を取り出して、あたりを見廻し、やがて上手へはひる。）

（途端に、下手で物騷がしい人聲がする。）

（浴衣がけで、帽子は冠らず、八字髭を生やした、色の黒い男が、片手に當歳ぐらゐの赤ん坊を抱いて、片手で自動車の運轉手らしい男を引きずつて來る。この運轉手は前の闇タクの運轉手とは違つて、身なりも立派で金モオルで出來た紋のついた帽子を冠つてゐる。そのあとから、毀れた自轉車を引きずつて、シャツ一枚に半ズボンの小僧が、ひどく丈の細長い板を三四枚擔いで來る。）

運轉手　何をするんだ、何をするんだ。

浴衣の男　まあ、好いから、こつちへ來い。そこは往來の邪魔だ。

運轉手　話はもう分かつてるんだ。何も君が口を出すことはないんだ。

浴衣の男　ばかを言へ。相手が子供だと思つて、ごまかさうとしたつてだめだぞ。おれはちやんと見てゐたんだ。第一手前は後から來ながら、ラッパを鳴らさねえんだ。だけどこの小僧さんの方ぢやあ、自動車の來たのを知つて、左へよけたんだそれだのに、手前はわき見をして來やがつたもんだから、その板に突つかかつたんだ。さうして、慌てやがつて、小僧さんの飛び降りた自轉車の上へ車をのし上げやがつたんだ。小僧さんは怪我一つしてやしねえ。それだけでも小僧さんの不注意でなかつたことは分からあ。

運轉手　だつて、あんな長い板を擔いで、自轉車へ乘るなんて……

浴衣の男　長い板だつて、短え板だつて、主人に言ひつけられりやあ、爲方がねえや。なあ、小僧さん。兎に角、自轉車をあんなにめちやめちやにしてしまつて、挨拶一つしねえで行くつて法はねえ。

運轉手　だから、挨拶はしたぢやないか。町所番地をちやんと聞いといた。

浴衣の男　相手の町所を聞いたつて、自分の方の町所を言はなきやあなんにもなりやあしねえ。全體手前はどこの運轉手だ。

運轉手　そんなことを言ふ必要はない。おれの主人は立派な方だ。

浴衣の男　立派な方だつて、名前はあるんだらう。名なしの權兵衞ぢやあるめえ。

運轉手　そりやあ名前はあるさ。

浴衣の男　それぢやあ、その名を言ひねえ。

運轉手　そりやあ言はれない。主人の名を出すことは出來ない。主人に罪はないんだから。

浴衣の男　罪はねえかも知れねえが、手前のやうな運轉手を使つてる以上は、主人にも責任がねえとは言はせねえ。さあ、主人の名を言へ。

運轉手　聞いて驚くな。

浴衣の男　誰が驚くものか。

運轉手　財政大臣の鳥山さんだ。

浴衣の男　なんだ、あのモラ鳥山か。滿韓銀行の救濟に政府から金を出させようとした鳥山か。人民が膏血を絞つた金を賣藥家の事業の失敗の穴埋にしようと企らんだ鳥山か。

運轉手　失敬なことを言ふな。

浴衣の男　何が失敬だ。おれはちやんと新聞で讀んで知つてるんだ。おれの言ふことが失敬なら、天下の新聞はみんな失敬だ。成程、さういふ奴の運轉手だから、かういふ狡いことをしやがるんだな。

運轉手　（相手が悪いと見て、少し折れる）まあ、兎に角けふは主人の迎ひに行くんだから、やつてくれ給へ。相手の小僧さんも承知してくれたんだ。主人の名前まで出したんだ。今夜にも小僧さんの主人のところへ、挨拶に行くから……

浴衣の男　いけねえ、いけねえ。だめだ、だめた。（小僧に）第一、お前がいくぢがなくていけねえ。言ふことは飽くまでも言ふが好いんだ。金モオルの紋などに驚くねえ。

運轉手　おい、おい、君。何もそんなにけしかけないだつて好いぢやないか。二人の間に話はついてるんだ。第三者の君が何も口を出すところはないんだ。

浴衣の男　第三者だと。何が第三者だ。見てゐたのはおれ一人だ。おれが手前のわき見をしてる、ところを見てゐたんだ。何が第三者だ。

運轉手　もう好いから引つ込んでくれ給へ。話は當事者の間でするから。

浴衣の男　引つ込めとは何だ。おれが見てなくて、誰が見てゐたんだおれが證人だ。證人がゐなくて話が出來るか。

運轉手　だから、僕は挨拶に行くと言つてるぢやないか。挨拶に行つて、自轉車の修繕費を出しやあ、それで好いんだらう。

浴衣の男　ばか。それだから手前つちは人間ぢやあねえつて言ふんだ。金せえ出しやあ、なんでも濟むと思つてやがる。人一人轢き殺したつて、金さへ出しやあ好いと思つてやがるんだ。

運轉手　ぢやあ、どうすりやあ好いつて言ふんだ。

浴衣の男　分かり切つてらあ。手前と手前の主人と二人で、この小僧さんの家へあやまりに行つて、さうして自轉車の新しいのを一臺買つて返すんだ。

運轉手　そ、そ、そんなばかなことが出來るもんか。

浴衣の男　何がばかなことだ。手前んとこの主人は、どうせ今に國民全體にあやまらなきやあならねえ時が來るんだ。小僧さんの一人にあやまるぐらゐなんでもありやしねえ。

運轉手　なんといふ不禮なことを言ふんだ。かりにも一國の大臣のことを……

浴衣の男　大臣だらうが、宰相だらうが、資本家の鼻毛を讀んで、國民の膏血を……

運轉手　默らないか。

浴衣の男　默らねえ。

運轉手　ぢやあ、勝手にしやべつてゐろ。おれはもう行くから。（行きかける）

浴衣の男　待て。（運轉手の腕を抑へる）

運轉手　何をするんだ。（腕を振り切る）

浴衣の男　何がなんだ。（摑みかからうとする赤ん坊が泣き出す）ええ、畜生（あたりを見廻す。圓タクの空車に目をつける駈け寄つて、その中へ赤ん坊を置く。直ぐ戻つて來る）やい、どうしても逃げる氣か。

運轉手　逃げやしない。用が濟んだから行くんだ。（又行きかける）

浴衣の男　待てと言つたら待たねえか。

運轉手　まだ何か用があるのか。

浴衣の男　うむ、用がある。

運轉手　どういふ用があるんだ。

浴衣の男　かういふ用があるんだ。（と言ひながら、いきなり運轉手の横つ面をはる）

運轉手　何をしやがるんだ。（浴衣の男に組みつく）

（格鬪。）

（自轉車の小僧、毀れた自轉車を引きずつて、逃げる。）

（交通巡査が一人、飛んで來る。二人の間へ割つてはひる。）

巡査　待て、待て、待たんか。往來で一體、どうしたといふことだ。

運轉手　僕は鳥山財政大臣の運轉手ですが、こいつが大臣

に對して、あんまり亂暴なことを言ひますんで……

浴衣の男　さうぢやねえ。さうぢやねえこいつが小僧の自轉車をめちやめちやにしやがつて、挨拶一つしやあがらねえから……

運轉手　失敬な奴だ。

浴衣の男　狡猾な奴だ。

運轉手　官吏侮辱だ。

浴衣の男　人權蹂躙だ。

巡査　さう兩方で一度に言つては分からん。一體喧嘩は何から始まつたんだ。

運轉手　こいつが大臣の悪口を……

浴衣の男　こいつが小僧の自轉車を……

巡査　分からん、分からん。さう一緒に言つては分からん。まあ、兎に角、二人一緒に署まで來い。

浴衣の男　ええ、行きますとも、行きますとも。警察へ行つて黑白をつけて貰ひます。

運轉手　（巡査に）わたしは大臣を迎ひに上野の精養軒まで行かなければなりませんから、お許しを願ひます。

巡査　そんなわけにはいかん。君も一緒に來なければならん。

浴衣の男　さうだ、さうだ。

巡査　（浴衣の男に）お前は默つとれ。

（巡査、二人を連れて下手へ行きかける。）

浴衣の男　待て、小僧さんはどうした。（あたりを見廻す）

巡査　小僧とはなんだ。

浴衣の男　この運轉手が車をぶつけたんです。

巡査　怪我でもしたのか。

運轉手　怪我なんかしやしません。

浴衣の男　その代り、自轉車を一臺めちやめちやにしてしまつたんです。（あたりを見廻す）ほんとに、しやうがねえなあいつどつかへ行つちまやがつて。

巡査　どうも事件が餘程複雜してるやうだ。兎に角、萬事署で調べることにしよう。さあ歩いた、歩いた。

（二人、まだ言ひ爭ひながら下手へはひる。巡査、そのあとから二人を押すやうにしてはひる。）

（圓タクの空車だけが殘る。車の中へ置かれた赤ん坊、いつか泣きやんでゐる。）

（圓タクの運轉手、汗を拭きながら、ガソリンの罐をぶらさげて、喘ぎ喘ぎ歸つて來る。）

運轉手　ほんとに、こんな不便なところつてありやあしねえ、ひどい目に會はせやがつた。

（ガソリンキヤツプを明けて、ガソリンを入れる。それから、運轉手臺へ乘つて、ハンドルに手をかける。爆音が聞えて來る。車が上手に走り出す。）

（二）

他の往來。

前場の圓タクが、下手から上手へ走つて來る。

上手から太いズボンをはいたモダンボオイ（客C）が出て來て、ステツキを上げる。

圓タク、とまる。

運轉手、腰かけた儘、手を伸ばして、車の戸をあける。手早く均一札を外す。

客C、車の中へはひらうとして、中の赤ん坊に氣がつく。

客C　おい、君、君。

運轉手　え。

客C　こりやあ君の赤ん坊かい。

運轉手　赤ん坊。（後を振り返る）おや。

客C　君の赤ん坊ぢやないのか。

運轉手　（車を飛び降りる。赤ん坊を見て、首を傾げる）を、か、し、い、なあ。

客C　僕は急ぐんだ。ぢやあ、他の車にしやう。（行きかける）

運轉手　まあ、待つて下さい。（考へる）をかしいなあ。（氣がつく）ああ、さうだ。さつき留守の間に誰か棄てて行きやあがつたんだ。（客Cに）濟みません。歸りに警察署へ屆けますから、御迷惑でも、この儘お乘りなすつて。

客C　そりやあ、いかんよ僕は掛かり合ひになるなあ厭だ。

運轉手　ですから、旦那の行先まで行つて、それから歸りに屆けますから。掛かり合ひになりつこはありませんよ。

客C　でも、途中で泣かれたりなんぞすると、僕は赤ん坊の取扱に馴れてゐないから困るよ。

運轉手　ぢやあ、一圓のところを八十錢に割引しますから、我慢して行つて下さいな。

客C　金はどうでも好いんだが、赤ん坊と合乘は困るよ。僕は急ぐんだから。

運轉手　赤ん坊が乘つてたつて、早さに變りはありませんよ。どちらへ行らつしやるんです。

客C　なに、日比谷公園の入口まで行つて貰へば好いんだが、約束の時間があるんでね。

運轉手　ですから、八十錢で、大急ぎで參りますよ。

客C　（考へて）やつぱりよさう。どうも掛かり合ひになりさうだ。（行きかける）

運轉手　待つて下さい。けさからまるであぶれつちまつてるんです。助けると思つて、乘つて下さい。

客C　そりやあ、氣の毒だが、僕の方も大事な用件がある

んだ若し途中で事件でも起ると困るから、失敬するよ。

（どんどん行つてしまふ）

（運轉手、ぼんやり青年の行方を見詰めてゐる。やがて溜息を一つ吐いて、車の中へはひり、赤ん坊を抱いて出て來る。）

運轉手　弱つたなあ。（間）けふはまあ、何といふ惡日だ（間）どこの奴が棄てて行きやあがつたんだらう。（あたりを見廻す）この儘、ここいらへ棄てて行つても好いわけだが、それも可哀さうだしと……（赤ん坊をぢつと見る）にこにこ笑つてやがる。（間）いづれ、あの近所の奴に違えねえが、ひどい親もあつたもんだ。（間）ほんとにまあ、けふは何て間が惡いんだ。（間）兎に角、あの近所の警察へ屆けることにしよう。さうしねえことにやあ、商賣も何も出來やしねえ。情ねえことになつたものだ。

（赤ん坊を車の中に置き、ドアを締め、自分は運轉臺に登り、ハンドルに手をかけ、梶を曲げて一廻りし下手へ走り去る。）

（二）

或警察署の内部。

卓が一つ。

卓の向うに警部が一人坐つてゐる。

それと向ひ合つて、前の場の浴衣がけの男と自家用自動車の運轉手とが坐つてゐる。

前の場の交通巡査が、わきに立つてゐる。

警部　（運轉手に）では、あなたは歸つて宜しい。いづれ、あしたも通知をするから、その節は又出頭して貰ひたい

運轉手　（立つ）どうもお手數をかけて濟みませんでした。では。（警部と交通巡査とに禮をして、去る）

浴衣の男　（立つ）あつしももう歸つて宜しうございますか。

警部　お前はもう少し、そこに待つてをれ。今指物師の小僧を呼びにやつたから。

浴衣の男　ぢやあ、あの運轉手もここにゐなきやならねえわけでせう。

警部　さうだ。併し。あれはけふ大臣の御用があるのだから……決して逃亡の恐れはない……又あしたにも呼び出せば好い。

浴衣の男　へえ……大臣の用があれば、どんな惡いことをしても、直ぐにかへして貰へるんですか。

警部　さう言ふわけではないが、もう事件は分かつてるんだし、大臣もさぞ待つてをられるだらうと思ふから。

浴衣の男　へえ。ぢやあ、大臣の御用は大切で、吾々平民

の用事はどうでも好いんですか、大臣は國家の……

警部　さういふわけではないが、大臣は國家の……

浴衣の男　(遮つて) 今日は公休で休みですが、これでも一家のあるじだ。一家のあるじたる以上は……(と言ひかけて、急に何か思ひ出した様子で、突然大聲を出す) あ、大變だ。

警部　(驚いて) どうしたのだ。なんだつてそんな大きな聲を出すのだ。

浴衣の男　(泣き聲を出す) 大變だ、大變だ、大變だ、大變だ。

警部　(交通巡査に) この男は氣違ひか。

巡査　氣違ひではないやうです。相當理窟も分かるやうですから。

浴衣の男　ああ、大變だ、大變だ、大變だ。大變だ。

巡査　(浴衣の男の肩を叩く) おい、どうしたんだ。しつかりしろ。

浴衣の男　(叫ぶ) 正坊、正坊、正坊を忘れちまつた。

巡査　どうしたんだ、どうしたんだ。

浴衣の男　(巡査に) おまはりさん。お願ひですから、正坊を探して下さい。

巡査　正坊といふのはお前の子か。

浴衣の男　へえ、さやうで。掛替のねえ一人つ子で。

巡査　それをどうしたんだ。

浴衣の男　自動車んなかへ忘れて來たんで。

巡査　今の大臣の自動車の中へか。

浴衣の男　(手を振る) さうぢやねえ、さうぢやねえ、圓タクん中へ置いて來ちまつたんで。

警部　なんだかちつともわけが分からんな。どうも少し異狀があるやうだ。松田巡査、少しあつちへ連れて行つて落ちつかせてやれ。警察醫にも見せ給へ。

巡査　はい。(浴衣の男に) さあ、あつちでわけを聞くから。まあ、さう興奮しちやいかん。(浴衣の男の腕をとる)

浴衣の男　(叫ぶ) ああ、正坊、正坊。大事な正坊。可愛い正坊。(巡査に腕をとられて去る)

(入れ違ひに他の巡査、登場。)

他の巡査　(警部に) 棄兒を屆けに來たものがありますが。

警部　棄兒。

他の巡査　はい。

警部　こつちへ連れて來い。

他の巡査　はい。(去る)

(直ぐ、その巡査、前の場の圓タクの運轉手を連れて來る。運轉手、赤ん坊を抱いてゐる。)

警部　どうしたのだ。

運轉手　棄兒をお屆けに參りました。

警部　どこに棄ててあつた。

運轉手　へえ、あつしの自動車の中に棄ててあつたんです。

警部　自動車の中へ。自分の自動車の中へ子供を棄てられて氣がつかなかつたのか。

運轉手　へえ。ちつとガソリンを買ひに行つた間に棄てられたらしいんで、ちつとも知らなかつたんです。

警部　ガソリンを買ひに行つたのはどこだ。

運轉手　ついあすこの交叉點のところで。

警部　氣がついたのは。

運轉手　稻荷町の通りで。

警部　そこから、ここまで引返して來たのか。

運轉手　へえ、こつちの近くの署の方が好いと思ひまして。

警部　鑑札を持つてるか。

運轉手　へえ。（直ぐ衣兜から鑑札を出す）

警部　（鑑札を見て）圓タクだな。

運轉手　へえ。

警部　（巡査に）松田巡査に今連れて行つた男をここへ連れて來るやうに言つてくれ給へ。

巡査　はい。（去る）

運轉手　（警部に）旦那、どうか、この赤ん坊を受けとりなすつて、直ぐかへして頂きたいんですが……けふはいろんなことで、まるであぶれちまつてるもんですから。

警部　まあ、待て。ちと心當りがあるから。子供の親が分かれば直ぐにかへして遣るが、さもないと、一應はお前の身元も調べなければならんから。この頃はなかなか巧妙な棄兒があるからな。

運轉手　それは困りますね。この上警察に留められた日にやあ、あつしは干上つてしまひます。

警部　まあ、好いから、待つてをれ。

（「ああ、正坊、正坊。」と叫ぶ聲がする。やがて浴衣の男と交通巡査が現れる。）

（浴衣の男、圓タクの運轉手の抱いてゐる赤ん坊に目をつける。いきなり飛びついて、赤ん坊を奪ひとる。）

浴衣の男　ああ、無事でゐてくれたか。正坊や、正坊や。ああ、有難い。有難い。

警部　それはお前の子か。

浴衣の男　有難うございます。確にわたくしの子でございます。この通りなついてをります。

警部　それなら、その運轉手さんに禮を言はなけりやあいかんぞ。

浴衣の男　え、この運轉手さんが連れて來て下すつたんですか。どうも有難う。（懷からガマ口を出して中にある

だけの金をすつかり出す。そして、それを、運轉手の手に握らせる）なんともお禮の言ひやうがねえ。ほんの志だ。とつといてくれ給へ。有難う、有難う。

警部　（浴衣の男に）　おい、おい。

浴衣の男　（夢中で）　ああ、有難い、有難い、正坊は運の好い子だ。ああ、有難い。

警部　（浴衣の男に）　おい、おい。

交通巡査　（浴衣の男に）　おい。

浴衣の男　（警部の方を振向く）　へ。

警部　おい人のことに世話を燒くのも好いが、自分の子供を置き忘れるやうな間拔なことをするな。

浴衣の男　どうも濟みません。

警部　若し、この運轉手が氣がつかずにゐて、車からでも振り落されたら、どうするんだ。

浴衣の男　（すつかりしよげて）　どうも濟みません。

警部　人の世話を燒くなら燒くやうに、先づ自分の始末からしてかかれ。

浴衣の男　どうも相濟みません。

警部　指物屋の小僧が來るまで、あつちへ行つて待つとれ。

浴衣の男　へい。

警部　もう大臣の惡口などを言ふ資格はないぞ。

浴衣の男　へい。

警部　松田巡査、あつちへ連れてつて、暫く待たして置け。

交通巡査　はい。

（浴衣の男、悄然と行きかける。）

運轉手　（警部に）　わたくしはもう歸りまして宜しうございませうか。

警部　（鑑札を返して）　宜しい。

運動手　（手の内の金を示して）　これは如何いたしませう。

警部　構はん。貰つとけ、貰つとけ。けふはあぶれてゐるんだらう。

運轉手　（浴衣の男に）　どうも有難うございます。やつとこれで、けふの立前になりました。

（浴衣の男、すつかりしよげて、罪を謝すやうに赤ん坊の顏を見る。）

（警部、聲を上げて笑ふ。）

（運轉手、にこにこしてゐる。）

——終——

新緑（一幕）

人物

主人　二十八歳、文學者、實業家の子

客　三十一歳、文學者

女中

（客は主人に對して、比較的ぞんざいな詞を使ふが、それは決して主人を眼下に見てゐるからではない、親しみ一つからさうした詞使ひをするのである。主人は客に對して比較的丁寧な詞使ひをするが、これも媚びようとしてゐるのではない、先輩に對する以前からの純な敬意がかういふ習慣を作つてしまつたのである。だから、丁寧な物の言ひやうの内にも、十分遠慮のない親しい調子が纏つてゐなければならぬ。）

場所

主人の父の家

時代

明治四十…年

日本風の座敷に西洋風の室内裝飾をした主人の書齋。ライチング、テエブルの置いてある前の硝子窓から中庭の新緑が輝いて見える。縁側續きの土藏の白壁が、青葉を通して來る朝の日の光に、薄青く染まつてゐる。何處かで目白の鳴く聲が時々する。初めは誰も座敷にゐない。暫くすると、部屋の外に女の聲と男の聲がする。

女中　（部屋の外にて）どうぞこちらへ。

客　（部屋の外にて）有難う

（正面の襖明く。客、登場。微醺を帶びてゐる。女中その後に添ふ。）

女中　どうぞお掛け遊ばして。

客　（椅子の一つへ疲れたやうに腰をおろす）まだおやすみなんだらう。

女中　（笑つて）只今お目覺めになりましたところでございます。どうぞ暫く。

客　（笑つて）どうぞ御ゆつくり。

（女中退場。間。）

客　（小さな欠を一つする。自分の眼の前をぢつと見詰める。稍芝居掛かつた憂欝な表情。）

（女中、紅茶のタツセと新聞を持つて登場。）

女中　只今、御飯をあがつて入らつしやいますから、暫く

どうぞ。

客　（女中がはひつて來ると同時に、直ぐ前の快活な顏に戻る）ええ、ええ、どうぞ御ゆつくり。

（女中退場。）

客　（右の袂から卷煙草の袋を三つ出して、それを卓の上に列べる。一つ一つ種類が違ふ。いづれも袋が破けて呑みかけてある。女中の持つて來た新聞は一目見ただけで手を觸れずに。自分の袂から幾つにも折つた新聞を一枚取り出して、丁寧にそれを擴げる。その時、電車の乘換切符が一枚袂から一緒に出て、床の上に落ちる。氣が附かない。新聞を讀みながら、三種の煙草を代りばんこに呑む）

（主人登場。）

主人　入らつしやい。

客　（新聞を置いて立つ）お早う。

（二人一緒に腰を掛ける。女中、紅茶のタッセを二つ持つて登場。前に客に出した一つを手にして直ぐ退場。）

客　折角寢てるところを起して濟まなかつたね。

主人　いえ、もう起きる時分なんです。

客　こんなに早く。

主人　（白々しく）ええ、この頃は夜遊びをしませんから。

客　あやしいもんだね。（自分は餘程皮肉なつもりで）宜しく言つてましたぜ、クロコダイルが。

主人　（平氣で）昨晩はどちらでした。

客　（狼狽して）ゆうべは何處へも行きやしない。

主人　（平氣で笑ひながら客の手にしてゐる新聞を遠くから指さす）

客　（主人のする事が分からないで）なに。

主人　その「呼賣」といふ赤い丸い判が承知しません。あなたは今朝往來で初めて新聞を見たんでせう。

客　（言ひ當てられて、人の好ささうな苦笑をする）

主人　（疊みかけて）大分この頃は御盛んださうですね。

客　どう致しまして。とても君にやあ敵はないさ。（辯解的に）君は「好き」で行くんだが、僕は「嫌ひ」で行くんだから。

主人　（落ちついて）さう簡單にも言へませんよ。私だつて好きになつたり嫌ひになつたりします。

客　（羨ましさうに）でも、まあ、君は好きな時の方が多いんだらう。君があゝいふ處へ行つてる時の樣子を見ると、如何にもよく調子が合つてるもの。「おれの家はここだ。」といふ風な、如何にも落ちついたゆつたりした氣持が見えてるもの。

主人　（好い加減に笑つて聞いてゐる）

客　（段々誇張的になる）ところが僕と來ちやあ全然嫌ひ

なんだからねえ、厭で厭で堪らなんだ。もうあの門を一目見ると、ぐつと癇積が起つて來るんだ。あの門を一歩はひると、僕はそこいらにうろうろしてる車屋でも、地廻りでも、誰でも相手にして喧嘩がしたくなるんだ。竹村へはひればはひるであのクロコダイルさ。僕は天下にあいつ程厭な婆あはないと思つてゐる。あの眞黒な低い鼻をいやにぴこつかして、「今夜はどちら。花里さんが心配してましたよ。」などとやられると、總身の毛がよだつて來るね。

主人　（茶かすやうに）でも、それから先きは萬更でもないでせう。

客　（益眞面目に）ところが大違ひさ。一體ああいふ處にゐる女ぐらゐ積に障るものはない。醜女の販元はここでございといふやうなのが、自分では天下一の美人だ位に思つてやがるんだからね。でれでれぐにやぐにやした男ばかり相手にしてるものだから、僕のやうなごつごつしたのが行くと、「あら、花林糖さんが又來たよ。」なんて言やがる。

主人　（又茶かすやうに）大層惡く言ひますね。ゆうべ何かあつたですか。

客　（やはり眞面目に）いいえ、何もありやしない。例の通り行つて例の通り歸つて來たばかりさ。うんと不愉快な空氣に漬つて、女々しい感情を荒して來たんで、けさは餘程頭の工合が好いんだ。

主人　（やはり冷やかすやうに）熱いお湯うへ顔をしかめながらはひる型ですね。（と言つたが、何か思ひ出して、少し眞面目になる）さう言へば、全くあなたはあすこへ行くと別人のやうになりますね。私はこなひだ初めてお供をして、實際驚きました。

客　（得意らしく）お守の一件かい。

主人　（病人の容態を心配するやうな顔つきで）ええ。あ あいふ處にゐる人間はみんな迷信家なんですから、あんな物でもああやつてお宮へ入れて大事にして毎日拜んでゐるんです。それをあなたは引き摺り出して、紙屑でも燃やすやうに火鉢の火へ燻べてしまふんですもの。

客　（益々得意で）は、は、は。五六枚あつたね。成田山だの、水天宮だの、金神様だの。僕は罰が當つてくれれば好いと思つてやつたんだが、別に罰も當らないね。つまらない。

主人　どうしてあんな亂暴が出來るんでせう。（探るやうに）から、醉ふと、芝居氣が出て來るんぢやないんですか。

客　（少しも感情を傷つけられずに）芝居氣。無論、芝居氣も幾らか混つてゐるね。併し、八分は本氣なんだ。又

段々諦觀的になる）僕は何かで再び起てないやうなひどい目に會ひたいと、始終さう思つてゐるんだ。ちよいちよい人には虐められるが、やつぱりまだ僕の生きてるやうな虐められ方だから物足りない。滅茶滅茶にやつつけられて、とても起てないやうにして貰ひたいんだ。どうせ世間はさういふもんなんだから、早くさうして貰ひたいと思つてるんだ。ところが世間といふ奴は中々さう早く片を附けない。ちびり、ちびりとお出でなさる。丁度、年といふ奴が僕等の髮の毛を一本一本白くして行くやうに、世間といふ奴は人間の手や足を一本宛、ゆつくりゆつくりもいで行くのだ。それが僕のやうな癇癪持には迚も待つてゐられないから、何か一度に惡い事をして、一度に滅ぼされてしまひたいんだ。（間）ゆうべ僕はこんな事をやりかけたんだ。電燈の線をナイフで切つて吉原中を闇にしてしまふんだね、同時に自分はナイフから感電して消えてなくなつちまふのさ。

主人　（びつくりして）ほんとにそんな事をしかけたんですか。

客　（得意で）ほんととも。三階の欄干の直ぐ前に丁度太い線が一本來てるんだ。あいつを切つてやらうと思つたんだが、たうとう留められてしまつた。

主人　（安心して）また大分醉ひましたね。

（女中登場、日本茶の盆と菓子鉢を卓の上に置き、手紙端書などと一緒に帶封をした雜誌を一つ主人に渡し、前の紅茶のタツセを片附けて行かうとする。）

主人　菓子はだめだ。ビイルがあるだらう。きのふ貰つた林檎と一緒に持つておいで。

女中　はい。（行かうとする）

主人　おい、おい、この菓子を持つてかないか。このお客樣は見るのも嫌ひだとおつしやるんだ。

（女中笑ひながら、菓子鉢を持つて退場。）

客　（穩やかな調子に歸る）何だね、雜誌は。

主人　（冷かに雜誌の帶封を切る）「東京文林」です。

客　（心配さうに、又得意さうに）ははあ。又何か吾々の事が出てゐるね。

主人　（雜誌を好い加減に繰りながら）今度は出てないやうですよ。

客　（嘲るやうに）珍しいこつた。

主人　（少しも憤慨せずに）先月でしたかねえ、寫眞入りで「耽溺文士列傳」とかいふのが出てゐたのは。

客　（腹立たしげに）さう、さう。

主人　（面白さうに）あれを親父に見られて、すつかり怒られつちまひました。けれども内の親父の言ひ草は、面白いんです。「こんな物を書くやうな下等な奴に知れる

やうな場所で遊ぶからいかんのだ。もつとうんと上等な處で遊べ。かういふ下等な記者が窺ひ知る事の出來ないやうな場所で遊べ。」とかう言ふんです。なあにどこで遊んだつて書くにやあやつぱり書くんですが、それでもあれから親父が餘計に小遣を呉れるやうになりましたから、好い鹽梅だと思つてゐます。

客（眞面目に）好いお父さんだ。お父さんからしてさうだから、君はどこへ行つても、ああ落ちついてゐられるんだね。實に羨ましい。（間）僕などは資金をみついでくれる親父はなしさ。自分の稼いで取るものを、お袋に內證で側から蕩盡してしまふんだ。それも面白くてするならまだ好いさ。僕のは面白くも何ともなくてやるんだからね。

主人（疑ふやうに）ほんとにそんなに面白くないんですか。

客（初めは本當の感情が出るが、中途からやはり誇張的になる）さつきも言ふ通りさ。一體僕は「眞實」といふものを眞面に見る事が出來ない人間なんだね。眞面に「眞實」にぶつかつて行くだけの力が僕にはないんだね。（女中登場　ビイルと林檎を置いて退場。主人ビイルを二つのコップに注ぐ。この間も客、構はず話し續ける）丁度視力の弱い人間が太陽をまぼしがるやうに、僕のやうな弱い人間はとても「眞實」を正視してゐることが出來ないんだ。そこで、どうかして「眞實」を見まいとするんだ。「眞實」を逃げようとするんだ。自分に何か好きで好きで堪らないものがあれば、それに沒頭して始終醉つてゐる事も出來るといふものだが、悲しいかな、僕には一つもさういふものがない。そこで成るべく厭なもの不愉快なものを選んで、その中へ飛び込まうとするんだ。さうして始終腹を立てて感情を荒してゐれば、どうにか「眞實」が忘れてゐられるやうに思ふんだ。「生活が單調でつまらないから強い刺戟を求めるんだ。」などといふやうな、そんな無邪氣な人生觀から遊ぶんぢやない。腫物で痛む腿へ錐を突き通して、腫物の痛みを忘れようといふやうなヤケな遣り方なんだ。（誇張が濟むと又辯解の調子になる）失敬だけど、勿論君の耽溺だつて、唯、「遊びたいから」といふだけのものぢやあるまい。けれども、君は生れつきそれが好きで、それに醉へる方だから羨ましい。醉つて忘れられる方だから羨ましい。（ビイルを一息に飲む）

主人（すぐ又客のコップにビイルを注ぎ、話をそらすやうに）でも、あなたの方が私より酒は強い。

客（主人の詞を少しも皮肉に取らないで）酒には醉へるが、「遊び」には醉へない。女にも醉へない。三味線に

も醉へない。（又一杯飲む。主人、又注ぐ）それをさういふ雜誌などを見ると、「歡樂を追ふ」とか「歡樂を求めてる」とか、さういふ事が書いてある。僕等が遊ぶのも、銀座あたりの若旦那が藝者の尻を追つかけるのも同じに書いてある。

主人　（冷靜に）でも、形に現れたところは、やつぱり同じですからね。吾々のだつて、あんまり體裁は好くないでせう。

客　（やはり主人の詞を少しも惡く取らないで）それは外面ばかりを見るからさ。彼等は内部を見ることを知らないんだからだめだ。

主人　（やはり冷やかに）外面のと内部のと、そんな事は考へてもゐないのでせう。私は唯燒けるから書くんだと思つてゐます。羨ましいから書くんだと思つてゐます。こなひだの「耽溺文士列傳」を書いた男なども、天下國家の爲に大層憤慨してたやうですが、あの男は大層「六區」の通だと言ひますぜ。吾々の遊びが少くとも六區以上なのが、あの男には氣に入らなかつたのでせう。

客　（どこまでも正直に）君はさういふ風に悟つてしまへるから、實に羨ましい。僕は憤慨してる男をどうしても憤慨してる男として考へなければ、外に考へやうがないんだ。僕は世間で輕蔑する新聞の三面記者だとか雜誌の六號記者だとかいふ者をも、一種の道學者として考へずにはゐられないんだ。即ち自分の正面の敵として考へずにはゐられないんだ。

主人　（客に對する或理解を得て）だから、あなたはいつでも小說の中に、ああいふ手合に當たるやうな文句を、きつと何處かに書いて置くんですね。私なんぞは小說を書くのに、初めつから「傾城買四十八手」か「娼妓絹麗」でも書くやうなつもりで書いてゐますね。さうして、あれだけの物が書ければ大したもんだと思つてゐます。「梅兒譽美」も好うございますが、「卷中艷語多しといへども、男女の志清然と濁りなきを竝べて」なんてアポロジイが時々出て來るので厭になりますね。

客　（主人の詞に反對しようと思ふが、元來腹の底までデカダンスの氣分に漬かつてゐる人ではないから、もう反抗的な誇張した修辭に盡きてしまつて、爲方がなしに默つてゐる）

主人　（その隙を利用して、巧みに話題を變へる）さう言へば、近頃暫くお作が出ないやうですが、何か長い物でもやつてるんですか。

客　（又穩かな調子に歸る）いいえ、なんにもやつちやゐない。

主人　（ほんとに心配して）また頭の工合でも惡いんです

か。

客　ああ。

主人　毎年、今時分になるといけないんですね。

客　どうもこの、新緑といふ時分になると、頭の奥の方が蜘蛛の巣でも掛かつたやうに、もやもやして來て困るんだ。

主人　もう隨分古い話ですね。

客　さう。もう隨分古い話だ。

主人　（憫むやうに）私は原因を知つてゐますよ。

客　原因。（間。自分で自分を欺く）原因なんかありやしない。

主人　でも、みんなの知つてる事ぢやありませんか。

客　（辯解的に）初めは原因といふやうなものがあつたか知らないが、もう今ぢやあ、なんにも覺えてやしない。唯毎年今頃になると、ひとりでに頭がむしやくしやして來るんだ。生理的に唯頭が痛んで來るんだ。慢性なんだね。慢性の――「新緑病」とでも言ふんだらう。

主人　私は丁度、あの時分、あの人の弟と同級だつたんです。

客　（直ぐ釣り込まれる）さう。成程。さうだつたね。

主人　勿論、その時分はなんにも知らずにゐたんですが、あとで色々弟から聞きました。

客　今でも、あの弟と交際してゐるのかね。

主人　思ひ出したやうに、時々訪ねて來たり、手紙をくれたりするんです。

客　（わざと他の事を言ふ）あいつは少し拔けてるやうだつたね。

主人　ええ、ですから、何もかも私にしやべつちまふんです。隨分あの當時は色々ごたごたしたんださうですね。

客　（厭みとは知らずに）なあに、ごたごたしたのは僕の頭ばかりさ。向うは極めて平和に嫁に行つてしまつたのさ。

主人　（追窮するやうに）さうでもないやうですぜ。

客　（無理に諦めた調子で）なあに、僕は青二才だし、先方は立派な紳士だから、問題にも何もなる筈がないんだ。人間の魂などに値打があると思つたのが、こつちの間違ひさ。

主人　（わざと客の知つてる事を言ふ）でも嫁に行つてから、家庭がうまく行かないので、親達もあとで大分後悔したらしいやうですぜ。

客　（自分の既に知つてる事を人の口から聞いて、少しは復讐的の愉快を感じながら、無理にそれを押し隱して）なあに、何處へ行つたつて、家なんてものは餘りうまく行くものぢやないさ。

主人　（皮肉に）　あなたの所へ來てもですか。

客　（やはり眞實の感情を隱して）　ああ、さうとも。

主人　（客の心を探るやうに）　けれども、若し向うの主人が死ぬとか、或は離縁になるとかして、あの人が一人になるとしますね。そして、あの人があなたに會ふとしますね。

客　（少し眞實の感情を出す）　そりや問題さ。僕の言つてるのは昔の話さ。もう決して二度と來つこない十年前の話さ。

主人　ところが、この頃噂に聞くと、あの人は家へ歸つてるといふ話ですぜ。

客　（悉く眞面目になる）　ほんとかい、それは。弟から聞いた事かい。

主人　弟から聞いたんぢやありませんけど、弟の友達から又聞きに聞いたんです。

客　（狼狽して）　へえ、面白いね。（今まで忘れてゐたビイルを思ひ出したやうに又一杯飲む）

主人　なんでも亭主が死んだとか言ふんですがね。

客　え。（心中非常に驚いたが、直ぐ又强ひて冷淡な調子になる）大分酒飲みだといふ話は前から聞いてゐたがね。おやあ、やつぱりそれで躰でも毀したんだらう。

主人　それで、家へ歸つてるといふ話なんです。（眞實客の爲に或レメヂイを與へようとして）　どうです、一度會つて見ちやあ。

客　さあ。會つても好いね。（と思はず言つたが、ふと氣が附いて、釣り出された「自分」を又心の奥の方へ納つてしまふ）　よさう、よさう。今會つて見たところで、しやうがない。

主人　（眞面目に）　でも、或は又新しい世界が開けて來るかも知れませんぜ。

客　（疑ふやうに）　新しい世界。僕はそんなものがあるとは思はないね。人間の運命は先の先までもうちやんと極つてゐるものさ。僕の運命などにはもう黴が生えてゐる。

主人　（やはり眞面目に）　その黴も人間の力で拭き落せる事があるといふぢやありませんか。

客　（起つて來る空想を努めて斥けようとする）　いや、だめだ、だめだ。もうそんな話はよさう。歸つたら歸つたで好いぢやないか。僕はもうこんな人間になつちやつたんだ。今の僕とあの先生との間にはもう毛筋程の關係もなくなつてるんだ。

主人　（追窮する）　でも、やつぱり、今時分になると、頭が痛むんでせう。

客　（逃げるやうに）　もう廢し給へと言つたら。頭の痛むのは時候のせゐだよ。

主人 （どこまでも眞實を知らうとする） でも、こんな事を聞けばやつぱり變な氣がしませう。

客 （敗北して） だから、もう廢す事にしようぢやないか。（間。ふと或事實を思ひ出し、それに諦めの力を得ようとする） こなひだも君、こんな話があるんだ。何處の歸りだつたかな。（間） さう、さう。向島の歸りだつた。

主人 （餘り責めるのも氣の毒だと思つてゐるところへ、ふと客が何か他の話をし出したので、直ぐそれに調子を合はす） 村越君と一緒に行つた時ですか。

客 いや、さうぢやない。それより二三日前だ。ばかに朝早く出ちまつたんで、家へ歸るのは少し工合が悪いから、本所の栗田ね。あいつの家へ寄つたんだ。すると奴、こんな話を始めるぢやないか。あの、吉川先生ね。

主人 ええ、去年亡くなつた。

客 さう。君はたうとうあの先生に會はなかつたつけね。（間） あの先生の奥さんが僕のところへ嫁に來たいと言つてると、かう言ふんだ。

主人 へええ。そいつあ面白い。

客 僕もあんまり話が不思議なんでびつくりしちまつたさ。そりや成程、先生の奥さんはまだ若いし、どつかへもう一遍嫁に行くといふ話は僕も聞いてゐたさ。

主人 金持を探してるといふ噂がありましたね。

客 さう、なんでも金持で、女房に踊も習はせれば三味線の稽古もさせるといふやうな家へ行きたいといふ話だつたのさ。それが君、僕のやうな貧乏書生の所へ來るといふんだからをかしいぢやないか。それに、吉川先生は、まあ言つて見れば僕の師匠筋だ。僕は弟子として、後進として先生の家へ出はひりもしたんだし、奥さんにも先生の奥さんとして、始終ひくびくしながら挨拶をしてゐたもんだ。年も無論僕より二つか三つ上だ。それも、先生の生きてゐる時分に、始終親しく口でも利いてゐたなら又格別だ。そんな事は唯の一度もありやしない。あんまり嘘らしいから、栗田め、又變な事を言ひ出して、おれを試すなと思つたから、尚よく確めて見ると、どうも本當らしいんだ。お里のお母さんにも先生のお父さんにも相談をしてゐたのを現に栗田が聞いたと言ふんだ。

主人 へええ、それからどうしました。

客 そこで僕も少し妙な氣になつた。かう何だか新しい不思議な運命が自分を待つてゐるやうな氣がしてちよいと胸がどきどきして來た。けれども、まだ栗田の言ふ事が信じられないから、好い加減にあしらつて歸つて來たのさ。

主人 成程。

客 併し、僕の胸ん中にはもう何か變なものが殘つてしまつた。どうしても嘘か本當か、それを確めなければ、氣

が濟まないやうな氣がして來た。そこで、いろんな方面から當つて見ると、どうも栗田の言つたのが本當らしい。僕はそれでもまだ妙だと思つてゐたが、何となくかう興奮して來て、誰か友達にその話がしたくて堪らなくなつて來た。

主人　あなたはあの奧さんが好きなんですか。

客　別に好きぢやないんだ。好きになる程附き合つて見ないんだからね。まあ、どつちかと言へば、嫌ひな方さ。向うでも僕はあんまり好きぢやないらしいんだ。あの奧さんは、なんでも好きな人嫌ひな人を始終ちやんと二つに分けてゐる人ださうだが、僕の聞いたところぢやあ、たしかに僕は嫌ひの部にはひつてゐた筈なんだ。（間）それでもやつぱり人間は妙なものさね。そんな話を聞くと、ちよいと妙な氣が起つて來るもんだ。

主人　（又いつもの突つ込む癖が出る）奧さんが綺麗だからでせう。

客　（眞面目に）さう。そりやさうかも知れない。

主人　（笑つて）それからどうしました。

客　それからね。直ぐその話を人にしようかと思つたんだが、でも若しさうでもなかつたら好い恥さらしだと思つて、言ひたいのを我慢して誰にも言はずにゐたんだ。（間）言はなくつてよかつたよ。なあに、それつきり別になんにも話はなかつたんだ。その內、君、村田子爵の所へ嫁に行くといふ事が新聞に出て、間もなくお輿入れさ。

主人　へええ。ちつとも知らなかつた。もう行つちまつたんですか。

客　（殘念さうに）行つちまつたとも。

主人　それぢや栗田の話はやつぱり嘘だつたんですか。

客　（眞面目に）いや、嘘ぢやなかつたらしいね。

主人　それぢや分からないぢやありませんか。

客　（段々落ちついた諦めの調子になつて來る）僕にも分からないんだ。まあ、なんだらう。思ふやうな所がないんで、氣紛れにそんな事で考へたんだらうが、決行するだけの勇氣もなくてゐる內に華族の口があつたんで、その方へ極めつちまつたんだらう。一言も僕の方へ直接に話があつたわけぢやないから、どうもしやうがないさ。

主人　（少し冗談らしく）へえ、そいつあ殘念でしたね。

客　殘念まで來てるなら、まだ好いさ。そこまで來てやしない。或はまるでなんにもならない話なのかも分からないんだからね。まあ世間の事は大抵さうしたもんさ。何かかう新しい事が始まりさうになるから、好い氣でその氣になつてると、やつぱりなんにも始まりやしないのさ。希望なんてものも、その欺されてゐる間の話さ。人間は

いつまで立つたつて、どうにもなるものぢやない。いつになつたつて同じさ。生活が變るなんて、よく人が言ふが、それは上邊だけの事さ。人生はいつまで立つても同じ事さ。

主人　（少し勇氣が挫けたが、それでもまだ希望があるやうな氣がして）だけど、吉川先生の奥さんの話と今の私の話とでは大分場合が違ひませう。

客　いや、どうだか分かつたもんぢやない。やつぱり氣を揉むだけ損をするのが落だらうぜ。

主人　でも、たしかに亭主が死んだとして、家へ歸つてるとしたら、一寸面白いぢやありませんか。（間。或地歩を得さうな詞を思ひつく）なにも一緒になるのどうのと言ふんぢやありません。久しぶりで會つて見たら、話だけでも面白からうと思ひます。

客　（直ぐこの一句に動かされる）そりや、まあ、さうさね。

主人　（第二の地歩を作る）向うももう隨分年を取つたでせう。あなたとは幾らも違はないんださうですね。

客　（直ぐにそれに乘る）一つ下だと思つた。

主人　さうでせう。して見りや、女の三十ですから、もう隨分おばあさんです。それに色々家庭の苦勞もしたらしい話ですから、隨分やつれてもゐませう。その家庭に疲れた女と、今でもやつぱり昔のやうに若いあなたとが差し向ひになつて、向うは昔通り眞面目な口の利きやうをする、あなたはあなたで、世の中をすねたやうなソフイストらしい口の利きやうをする。長い間離れてゐた二つの心が突然又ぶつかつて、一度は驚いて、それから段々互に昔の面影を探し始める――側で聞いてゐても隨分面白さうに思はれますがね。

客　（强ひて冷やかに）さう藝術的に行けば好いがね。併し、なんだね、唯會つて見るだけなら、ちよいと面白いかも知れないね。（間。迷つて）いや、よさう。やつぱり廢した方が好い。（又段々落ちついた本當の諦めになる）僕といふ人間はやつぱりかうして今まで通りにやつてる方が好いんだ。親しみのない世間を放浪して、始終「假の宿」にゐるやうな落ちつかない氣持でゐる方が好いんだ。少しでも親しみのありさうな世界へ足を突つ込むと、直ぐその氣になつちまふ質なんだからね。どうしたつて結局世間は人間に親しいもんぢやないんだから、やつぱりそんな危險なシチユエエションには近づかない方が得策だと思ふ。僕は今の僕で澤山だ。この儘一生ぐづぐづ言ひながら、死ぬまで生きてればそれで好いんだ。どう引つくり返へして見たつて、どうせ人生はさういふもんなんだから。

主人　（一旦得た地歩を又失つて、氣の毒さうに寂しく笑ふ）

（女中登場。ビイルの新しい瓶と、手紙を一通手にしてゐる。）

女中　若旦那様。どうも相濟みません。先程この手紙が御一緒に參つてゐたのを、私のゐない間に寺田さんが新聞の下に入れてしまつたのを、只今までちよつとも氣が附かずにゐたのでございます。どうも遲なはりまして。

主人　（快活に）女の手紙ぢやないか。また寺田の奴檢閱しようとしやがつたな。しやうのない爺いだ。

女中　いいえ、さうぢやございません。全く知らずに新聞の下に入れてしまつたんださうでございます。よくお詫びをしてくれつて、寺田さんもさうおつしやいました。

主人　好いさ、好いさ。（手紙を受け取る）

（女中退場。）

主人　（手紙をその儘机の上へ置かうとして、ふと差出人の名を見る）おや。

客　どうした。

主人　（或希望を得て）こりや面白い。あの人の弟から來たんですぜ。

客　（恐れるやうに、手紙の封筒を覗いて見る）成程。さうだね。

主人　（得意で）ぢやあ、愈ほんたうですぜ。きつとその事を言つて來たんです。前から私が色々あなたの事を聞いてゐましたし、それにあいつもあなたの事を始終心配してましたから。

客　（心の内に或戰ひが起る）

主人　どうです、若しさうだつたら會つて見ますか。

客　（强ひて自分を抑へる）いや、會ふまい。

主人　（皮肉に）ぢやあ、この手紙はこの儘明けずに置きませう。（手紙を机の上に置く）

客　（縋るやうに）明けたつて好いぢやないか。

主人　（一層皮肉に）あなたに會ふ氣がないのに、明けて見たつてつまりませんもの。元々私には關係のない事なんですから。

客　（憫みを乞ふやうに）さう言つちまやあ、それつきりの話だが、でも、折角來た手紙だから――どうせ一度は明けて見るんだらう。

主人　けれども、あなたに關係のない手紙なら今見る必要はないんです。かうやつて他の手紙も（前に女中の持つて來た手紙や端書を指す）見ずにあるんですから。

客　（段々自分が出さうになる）そんな事を言はずに、まあ明けて見給へな。事實を知るだけでも好いぢやないか。

主人　（飽くまでも皮肉に）でも、あなたは眞實を知るの

お厭な筈でせう。
客　（終に自分の感情を欺く事が出來ないで）　ぢやあ、會ふ。會ふよ。ほんとに言へば、僕だつて會ひたいんだ。
主人　（喜んで）　それ御覽なさい。
客　會ひたいには會ひたいんだが、恐くもあるんだ。
主人　（迫るやうに）　ぢや、會ひますね。會つて見ますね。
客　會ふ。きつと會ふ。（獨語のやうに）　なあに、自分さへしつかりしてれば好いんだ。
主人　（力をつけるやうに）　さうですとも。（間）　ぢやあ明けますよ。
客　（決心して）　明け給へ。
（主人、封筒の口を裂いて、手紙を引き出し、直ぐ讀み始める。或期待の沈默、暫くして、主人手紙を讀んでしまふ。失望の表情。沈默。）
客　（主人の詞を待つてゐたが、堪へ切れなくなつて）　どうしたね。
主人　（極めてつまらなさうに）　姉さんが子供を生んだんださうです。産後の肥立が悪いので、暫く鎌倉の別莊へ行つてるので、自分もそこへ遊びに行つてるといふんです。
客　（がつかりして）　それつきりかい。
主人　それつきりです。
客　ぢやあ、さつきの話は嘘だね。
主人　これの間違ひだつたんですね。
客　なんだ。つまらない。（少し怒つて）　だから、僕の言はない事ぢやない。
主人　（ほんとに詫まる）　どうも濟みません。
客　（叱るやうに）　なにも君があやまる事はない。
主人　（負けて、默つてしまふ）
客　やつぱり僕は元の僕なのさ。けさ君の所へ訪ねて來た時の僕なのさ。「新綠病」にかかつて弱つてる僕なのさ（投げるやうに）　それだけの話さ。
主人　（始めて今まで自分の知らなかつた或物に觸れたやうな氣がして來る）
客　何か有りさうになつて來たつて。やつぱり結局なんにも有りやしないのさ。
（稍長き間。）
主人　（今まで一度も手を附けなかつたビイルを、急に一杯、目をつぶつて、ぐつと飮むと、センチメンタルな態へ度で）どうです。何處かへこれから飮みに行きませうか。
客　（つまらなさうに）　さうさね。行つても好いが、やつぱり同じ事だらうぜ。まあ、やつぱりかうやつて話してゐようよ。
主人　（客の氣持に壓されて、立ちかけた腰を又おろす）

さうですねえ。ぢやあ、やつぱりかうやつて話してゐませうか。

（沈默。遠くの部屋で鈍い時計の音が、だるさうに十一時を打つ。）

——幕——

賊（一幕）

人物

男

女

隣

場所　築地附近

時代　今

幕があく。

暗黒。

どこかで戸をこぢ明けるやうな音がする。

やがて、懐中電燈らしいものが、障子の向うでぴかりと光る。

障子をそつと明ける音がする。

懐中電燈がさかんに明滅する。

長火鉢、帳場格子、神棚、金庫などが、順々に一瞬間づつ見える。

やがて、光が金庫の或部分に集注される。

金庫をこぢ明けるやうな音がする。

「おや。」といふ女の聲がどこかでする。

襖が明く。

電燈の光が、大きな幅で、さつと差し込む。

金庫の前にうづくまつてゐる、二重廻しを着て、鳥打帽子を冠つた、男の姿が見える。

寢卷姿の美しい女が出て來る。

男　（振向く）起きたか。（がつかりしたやうに言ふ。八字髭を生やした品のある顔が、隣から差し込んで來る光で、まともに照らされる）

女　（立つた儘）寢ちやゐられないわ。（と言ひながら男の顔をぢつと見る）一體、あなた、どなた。

男　どなたは恐れ入つた。僕は泥坊さ。

女　ほんとに。

男　うむ。

女　この頃の泥坊は見つかると大抵居直りになるつて言ふぢやないの。あなたも居直りになるの。

男　そんなものにはならない。第一、居直りになるにやあ、こんなにぐづぐづしてゐちやあだめだ。顔を見たら、すぐにあひくちを出すとか、ピストルを出すとかしなけり

女　やあ……
女　あなたはなんにも持つてゐないの。
男　この通りだ。（素早く外套を脱いで、遠くへ投げ出す）なんにも持つてない。（兩手を廣げて見せる相當に好い着物を着てゐる）
女　（安心したやうに坐る）ぢやあ、あなたは見つかつたらどうするの。
男　逃げるか、あやまる。
女　いくぢのない泥坊ね。
男　ああ、いくぢのない泥坊さ。
女　今はなぜ逃げないの。
男　あんまり君が綺麗だからさ。
女　口說くんぢやないの。
男　冗談ぢやない。僕は女は大嫌ひだ。
女　（少し間を置いて）よくその金庫が明けられてね。
男　そりや明けられるさ。
女　符帳を知つてるの。
男　符帳なんか知らなくつたつて明けられるさ。どんな金庫だつて明けられるよ。
女　ぢやあ、金庫だつてあんまり安心出來ないわね。
男　出來ないとも。
女　（又少し間を置いて）あなた、どこでそんなことを覺えたの。
男　活動寫眞や探偵小說で覺えたのさ。
女　あら、あたしも探偵小說は好きだけれど、そんなことの委しく書いてあつたのはないわ。
男　飜譯はだめだ。原書で讀むと、いくらでも書いてある。尤も、頭がよくないと、分からないが……
女　原書つて言ふと、ぺらぺらね。
男　（笑つて）うむ、ぺらぺらだ。
女　あら、あなた、ぺらぺらが出來るの。
男　ああ。（間）活動寫眞だつて、日本ぢやあ無暗と切られるからだめだが、向うぢやあ、さう切られないから、金庫破りの方法なんか、すぐ覺えられるよ。
女　あら、あなた、外國へも行つたことがあるの。
男　ああ、二度ばかり行つた。
女　（驚いたやうに）まあ、それ程の方が、どうして泥坊なんかにおなりなすつたの。
男　そんな丁寧な口を利いちやあいけない。泥坊に「おなりなさる」奴がどこにあるもんか。
女　（まじめに）ほんとに、どうして、こんなことをなさるの。
男　きまり文句だが、食へないからさ。
女　學校の先生でもなされば好いのに。

男　（笑つて）　うまいことを言つた。實はもうそれもやつて來たのだ。
女　どうして、おやめなすつたの。
男　免職されたんだ。
女　どうして。
男　弱い者を助けたからさ。今の世の中は、強い者を助けなけりや出世は出來ないよ。强きを挫いて弱きを助ける――それが褒められたのは昔のことだ。學校に奉職したら、是が非でも校長の味方をするんだ。會社へ勤めたら、正邪に關らず社長の味方になるんだ。それでなけりやあ、すぐに首だよ。
女　會社へも勤めたことがおありなさるの。
男　ああ。學校をよされてから、或會社の工場を預かつた。やつぱり弱い者の味方をしたので追出されてしまつた。もう爲方がないと思つて、今度は弱い者の仲間入をして見た。自分で勞働者の一人になつたのだ。
女　それもだめだつたの。
男　ああ、それもだめだつた。勞働者の仲間内でも、やつぱり強い者に卷かれて居なきやあ生きて行かれないんだ。僕は弱い者の味方をした爲に、さんざんにぶんなぐられた。あぶなく殺されるところだつた。
女　それから、どうして。
男　それから……だから、それからは、もうなんにもしないことにしてしまつた。
女　唯遊んでゐたの。
男　さうぢやない……どこへ行つても、弱い者を助ける爲にゐられなくなるんだ。だが、それが悪いことだとはどうしても思はれない。そこで、もうなんにも商賣はしないで、唯この「弱い者を助ける」といふことだけを自分の商賣にしようと思つたんだ。
女　ああ、分かつた。それで、あなた、泥坊になつたのね。分かつたわ。義賊なのよ、あなたは。鼠小僧見たいな人なのね。お金持のお金をとつて、貧乏人に施すんでせう。
男　待つた、待つた。さう早合點をしてくれちやあ困る。（少し間を置いて）　成程、昔なら單純にさうなるところだらう。ところが、今の人間はもう少し目が明いてゐる。單に金持の金を奪つて、それを貧乏人に振り撒いたところで、世の中はちつともよくなりやしない。
女　そりやさうね。あたしもさう思ふわ。
男　それが分るのは感心だ。好いかい。そこで、先づ改めなけりやあならないのは、今の社會の組織だ。
女　組織つて。
男　成程、君には分かるまい。（考へて）　まあ、言つて見れば、この世の中の組立だ。早い話が、或金持が金を出

して或事業を始めるとするね。その金も先づ大抵は自分の金ぢやない。銀行の金だ。銀行も慾張りだから、儲かる爲事となれば、いくらでも金を貸すんだ。

女　ええ、さうよ。そりやあ、あたしも知つてるわ。よくそんな相談を內でするわ。

男　さうだらう。ところで、事業が始まる。ね、その一番下で働くのは勞働者だ。職工だ。好いかい。實際の爲事をするのは職工なんだよ。ところが、その職工といふ奴は安い賃銀で、體のへとへとになるまで働かされて、その拵へた代物は商品となつて世の中へ出る。さあ、その儲けは誰が取ると思ふ。みんな資本をおろした人間が取つてしまふんだ。それも、出した金の金利といふ程度なら好いが、なかなかどうしてそんなこつちやないんだ。

女　でも、お金を出す人は損をする時があるでせう。その損を見越してるぢやないの。

男　それだ。大抵な人はさう言ふ。資本家の言ふ文句も、大抵はそれだ。ところが、事實は大變な違ひだ。損をした時も儲けた時と同じやうに——たとひ薄給でもだね——同じやうに職工達を取扱つてゐてくれれば文句はないわけだが、少し不景氣だとなると、平氣でどんどん首を切つてしまふのだ。ひどいつになると、一度に二千も三千も首を切るんだからな。

女　ええ、あれは全く可哀さうねえ。

男　さうだらう。儲かる時だけこき使つて置いて、儲からなくなると、ぱいにしてしまふといふ法はないだらう。

女　そりやあ、ほんとにさうだわ。

男　ところが、政治家でも、軍人でも、銀行でも、みんなその勝手なことをしてゐる奴の味方をしてるんだからひどいよ。

女　それで、あなたはその弱い方の味方をしようつて言ふの。

男　さうさ。

女　強い奴を倒さうつて言ふの。

男　さうさ。だが、倒しただけではなんにもならない。新しい組立を作り上げなくちやあ……

女　それはどうして拵へるの。

男　さあ、それはちよつと說明がむづかしい。なかなか大きな爲事だからね。（時計を見る）時間がない。（短い間）まあ、さういつた趣意で、僕は働いてるんだ。ところが、運動費がない。

女　そこで、泥坊をはじめたといふわけですね。

男　さうだ。

女　何か他に遣り方がありさうなものね。

男　寄附を求めるのかい。そりやあだめだ。寄附を求める

となると、やつぱりその強い奴等のところへ行かなきやならない。僕等の仲間にも、そんなことをする奴があるが、あれくらゐ間違つたことはないと思ふね。僕は斷じて厭だ。敵のところへのめのめ金を貰ひに行くなんて。

女　だつて、泥坊をすると思へば……

男　いや、君はさつきから泥坊泥坊つて言ふが、泥坊はそんなに悪いものぢやないよ。

女　なぜ、どうして泥坊が悪くないの。

男　泥坊だつて、他の商賣とそんなに違ふものぢやないよ。今の世の中で、人のやつてる事はみんな泥坊ぢやないか。商賣だつて、工業だつて、文學だつて、醫學だつて、法律だつて、みんな一皮めくれば泥坊ぢやないか。みんな飾りがしてあるから、泥坊に見えないだけで、飾りをとつてしまへば、一列一體、みんな泥坊だよ。僕はそれを唯赤裸々に何の飾りもなしにやつてるだけのことさ。泥坊だつて、趣味があり教育がある人間がやれば、決して他の商賣より下等なものぢやないよ。泥坊が下等なものになつたのは、やる人間の人格が下劣になつて來たからだよ。昔は泥坊だつて、そんな卑しい商賣ぢやなかつたんだよ。

女　さう聞けば、成程さうかも知れないわねえ。

男　（笑つて）實を言ふと、その理窟も盗みものさ。フランスの或芝居に書いてあつたんだ。僕は飽くまでも泥坊に出來てるんだね。

女　さう言へば、あたしの商賣だつて泥坊みたいなものだわね。

男　さうとも、さうとも。泥坊も泥坊、大泥坊だ。

女　まあ、ひどい。でも、おんなじ泥坊にも景氣の好いのと悪いのがあるわ。

男　君のところは景氣が悪いのか。

女　悪いつてのはこんなもんぢやないわ。（金庫を指さして）まあ、好いから、中を御覽なさい。

男　そんな筈はあるまい。松田屋にも、堀川にも相當にあつたぜ。

女　あら、松田屋のも、堀川のも、あなただつたの。

男　ああ、僕だ。この界隈の待合へは門並はひつた。

女　ひどい人ねえ。

男　ひどいつたつて爲方がない。（短き間）金庫になけりやあ、どこか外にあるんだらう。早く出してくれ。

女　内はだめよ。松田屋さんや堀川さんとは違ふわ。

男　どう違ふんだ。

女　松田屋さんや堀川さんのお客は、社長さんだの重役さんだのばかりよ。内のお客は丁度その下にゐる連中ばかりだわ。だから、だめよ。

男　なぜ。

女　この頃てんで顔を見せやしないわ。毎晩お茶ばかり引いてるのよ。

男　どうして。どうしてやつて來ないんだ。

女　みんな留守なのよ。

男　留守。どこへ行つてるんだ。

女　もうぢきあなたの行くところへ行つてるのよ。

男　もうぢき僕の行くところと。（ちよつと考へて笑ふ）成程、分かつた。どうして、そんなところへ行つてるんだ。何か悪いことをしたのか。

女　少しはしたかも知れないけれど、まあ、身代りよ。

男　社長さんの身代りか。そいつは感心だな。

女　ちつとも感心ぢやないわ。みんなお金よ。

男　そんな立派な紳士連でもか。だらう。だから、僕達がこのくらゐなことをしたつて、なんでもないと言ふんだ。

女　だけど、待合なんかいぢめるのは可哀さうだわ。

男　さうか。僕は又待合へはひるのが一番好いと思つたんだ。（笑つて）同商賣だからな。

女　そりやあ年が年中お客が詰めかけてりやあ、さうかも知れないわ。だけど、この頃のやうぢや、やり切れやしないわ。お勘定はちつとも下がらないし、さうかつて、玉祝儀を拂はなけりや箱止でせう。仕出し屋だつて自動車だつて、みんなこつちで立替へるのよ。その上に、税だの連中の切符だのつて、取り立てられるばかりだわ。それでも、いつか取れるといふ當てがありやあ、まだ樂しみだけれど、この頃のやうにお客がどん／＼暗いところへ引つぱられて行くんぢやあ、先の見込もありやしないわ。

男　でも、君なんかは綺麗だから、保護者があるだらう。

女　その保護者だつて……

男　やつぱり、やられたのか。

女　ほんとに間尺にも何も合つたものぢやないわ。こつちはなんにも知りもしないのに、やれ檢事局へ來いの、裁判所へ來いのつて呼び出されてさ、帳面を見せろの何のつて……

男　もうやめるんだね、こんな商賣は。おんなじ泥坊の中でも一番悪いよ。

女　あたしもさう思つてるのよ。つくづく厭になつちまつたわ。

男　どうせ、今にこんな商賣はなくなつてしまふよ。松山屋の客だつて、堀川の客だつてさういつまで安穩でゐられるもんか。

女　あたしもさう思つてよ。悪いことをして榮えられるわけがないわ。

男　君はそれを承知で、こんな商賣をしてゐるのか。
女　初めは知らなかつたわ。その内、だんだん分かつて來たけれど、どうせそんなことをして儲ける金だから、こつちでも側からそいつを絞つてやらうつて氣になつたの。だけど、やつぱりだめだわ。だめだつてことが、この頃やつと分かつて來たわ。結局向うが倒れりあ、こつちも倒れるんだから。
男　さうだとも。もうぢき倒れるとも。倒れずにゐるもんか。
女　默つてゐたつて倒れるのに、あなたのやうな人がゐちやあ、餘計早く倒れるわ。
男　さうとも。
女　でも、中には改心する人があるでせう。
男　そりやあ、あるかも知れない。
女　改心すると、どんなことになるの。
男　もう待合なんぞへは來なくなるだらう。
女　どつちにしても、こつちはだめね。結局あなたは待合のお金を元手にして、待合を滅ぼさうとしてゐるやうなものね。
男　一番恨みつこがなくて好いだらう。
女　（考へて）今に、ほんとにそんなことになるかしら。
男　なるとも。きつとなる。僕が失敗すれば、僕の子分がやる。僕の子分が失敗すれば、その又子分がやる……
女　さうね。なんだか、さうなりさうだわねえ。
男　こんな商賣をしてると、それがよく分かるだらう。
女　ほんとによく分かるわ。みんなで惡いことばかりを企らんでるんですもの。
男　さう思つたら、金を出すか。
女　ええ、出すわ。（長火鉢の抽出から金を出す）四十五圓しきやなくつてよ。あした取りに來るんで借りといたお金なんだけれど。好いわ、どうにかなるわ。
男　それは氣の毒だ。實を言ふと、けふは神戸まで行く旅費さへありやあ好いんだ。神戸には同志が金を拵へて待つてゐる筈だから。（金の一部を返す）三十圓だけ借りて行かう。それも神戸へ著いたら直ぐ電報で返すよ。
女　そんなことをしないでも好いわ。
男　いや、話を聞いて見ると、君も亦弱い者の一人だ。商賣換をするにしても又金が入るだらう。
女　まあ、思ひやりがあるのねえ。
男　その思ひやりが、たうとう僕を泥坊にまでしたのだ
（突然、裏口で聲がする。）
聲　もし、もし。誰か起きてゐますか。
女　（ちよつと顏色を變へたが、男の立たうとするのを抑へつけるやうにして、直ぐと出て行く）はい。はい。

（裏の方で二人の聲がする。）

聲　裏口が明いてゐますが、別に變つたことはありませんか。

女の聲　どうも恐れ入ります。いいえ、別に。まだふせらないのでございます。

聲　近頃、この近所は用心が悪いのですから、締りだけはよくしといて下さいよ。

女の聲　どうも濟みません。

聲　今、話し聲がしたやうですが、今頃客でもあるのですか。

女の聲　いいえ、お馴染のお客様が大層醉つぱらつて入らつしやいまして、どうしても泊めろと仰しやるんですが、唯今お返ししようと思つて、車を申しつけにやつたところなのでございます。

聲　ぢやあ、なりたけ早く返して、あとの締りをよくしといて下さい。

女の聲　畏りました。御苦勞様。

（靴の音、サアベルの音。）

（女、戻つて來る。）

（男、直ぐ立たうとする。）

だ　だめよ。今出ちやあ、直ぐ捕まつちまふわ。

男　成程。さうか。

女　今、車を言はせますから、都合の好いところまで乘つてらつしやい。咎められたら、内の名を出せば好いわ。

（ベルを押す。一度、二度、三度。遠くで寢ぼけた聲が返事をする。）

——幕——

公園裏

人物

お松　寡婦
お君　お松の先夫の妹
岡山文吉　職工、同居人
太郎　お松の子
近所の人
巡査など

場所

淺草の裏町

時代

大震火災後

バラック建の長屋。
唯一部屋の内に、雜然と物が置いてある。子供の太郎が寢かしてある、直ぐそのわきに汚い長火鉢。それを挾んで、お松とお君が話してゐる。
公園のどよめきが遠く聞える。
晩秋の或夜。

お松　（嘆願するやうに）ねえ、君ちやん。
お君　……
お松　さうしておくれな。
お君　……
お松　いやかい。
お君　……
お松　助けると思つて、さうしておくれな。さうすれば、何も彼も都合よく行くんだから。
お君　……
お松　どうしても、いけないかい。
お君　……
お松　（むつとして）ぢやあ、勝手におし。（長煙管で莨を吸ふ）
（稍長き間。）
お君　でも、ねえさん、それは無理だと思ひますわ。
お松　無理なことははじめから分かつてるよ。だから、こんなに事を分けて頼んでるんぢやないか。
お君　頼むも頼まれるまでもありませんわ。どうせさうなるつもりだつたんだから、當り前なら、あたし、喜んでさうして貰ひますわ……でも、文さんといふ人が、あんまり……
お松　だから、それはあたしが悪いんだつて言つてるぢや

ないか。
お君　いいえ、あたし、どうしてもねえさんが悪いとは思へませんわ。ねえさんは女ですもの……
お松　（寂しく笑って）女だつて、お前、あたしにも罪がないとは言へないよ。だから、文さんはなんにも言ふなつて言つたんだけれど、あたしはもうこなひだ中から苦しくつて苦しくつて、どうしてもお前に打明けずにはゐられなかつたんだよ。
お君　ほんとによく打明けて下すつたと思ひますわ。それだけでも……それだけでも、ねえさんに罪のないことは分かりますわ。あの人はあたしを欺さうとしたんです。
お松　欺さうとしたわけでもないんだらうけれど、そんなことを言つたら、とてもお前が承知してくれまいと思つたからだよ。
お君　ほんとに濟んだことになりましたわねえ。
お松　何しろ近所がうるさいしねえ。それに、内の人が被服廠で死んでから、まだ半年にもならないんだらう。子供が小さければまだしもだけれど、太郎だつてもう十二だからねえ。若し、あたしが赤んぼでも生んだら……
お君　でも、そんなことはないんでせう。
お松　……
お君　ええ、ねえさん、そんなことはないんでせう。
お松　……
お君　ええ、ねえさん。
お松　まだはつきり分からないけれど……
お君　……
お松　どうも、さうらしいんだよ。
お君　まあ……
お松　だから……だから……かうして頼むんだよ。
お君　（きつぱり）あたし、愈文さんが厭になりましたわ。
お松　……
お君　あんな人でなしつたら、ありやあしない。死んだ兄さんにあんなに世話になりながら、ねえさんやあたしの面倒を見てやるなんて言ひながら……
お松　でも、そりやあ、ほんとに見てくれたんだけれどねえ……お前だつて鶴屋バアへ行けるやうになつたのは、あの人のお蔭だし、あたしだつて、震災後ひとりぼつちになつてから、かうやつて食べて行けるのは、あの人がせつせと工場で働いてくれるからなんだし……
お君　だつて、その工場だつて、この頃やめられたつて話ぢやありませんか。
お松　さあ、それも實は、あたしとのことからなんだよ。
お君　まあ……
お松　あの人の出てるところの課長さんが、しよつちう忠

義だの孝行だのつて、やかましいことばかり言つてる人なんだとさ。文さんの噂が耳へはひると、岡山は實に感心な男だと思つてゐたのに、それではおれが欺されてゐたんだ。おれを欺すやうな恐しい奴は一刻も工場に置くことは出來ないつて、いきなり首になつちまつたのさ。だから、手當もなんにもないんだよ。でも、ちようどその時ストライキが始まつたもんだから、組合の方で心配して、文さんの復職のことも條件の一つに出してあるさうだけれど、どうなるかねえ。

お君　……

お松　その儘ぢやあ、とてもだめだらうけれど、お前が一緒にでもなつてやつてくれれば、自然あたしの方の噂もなくなるだらうし、さうすれば、課長さんも元々文さんの腕は見込んで入らつしやるんだから、きつと工場へも歸れると思ふんだよ。

お君　まあ、四方八方、がんじ搦みねえ……

お松　さういふわけぢやないけれど、あたしも困つてるし、あの人も困つてるもんだから……

お君　だけど、若しさうなつたとして、ねえさんのお腹のものはどうするつもりなの。

お松　だから……だから……それは……內證で始末をして……お前が生んだことにして貰ふのさ。

お君　あたしが生んだことにして……

お松　ああ……いやかも知れないけれど……

お君　……

お松　ねえ、君ちやん、お願だから、さうしておくれな。

お君　……

お松　いけないかい。

お君　……

お松　え、君ちやん。

お君　（立ち上がる）あたし、もう歸ります。

お松　歸りますつて、お前……バアの方はもう暇を貰つて來たんだらう。

お君　もう一遍歸つて頼んで見ます。使つてくれなければ、ほかのカフエへ行きます。もうここへは參りません。

お松　（お君の袖を摑んで）まあ、そんなことを言はないで……ねえさんが、かうやつて、折角頼むんだから……

お君　ねえさんは可哀さうだけれど……でも、あたし……あたし、なんだか世の中が分からなくなつてしまつたわ。

お松　だから、何も、あたし達が言ふ通りにしなくつたつて……なんとか又相談もあらうから……

お君　いいえ、やつぱり、あたし、歸ります。

お松　まあ、そんなことを言はないで……

お君　いいえ、もう、あたしなんかゐないと思つて下さい。

（無理にお松の手を拂ひ、兩手で顏を掩うて走り去る。）
（反對の方角から、文吉驅けて出て來る。）
文吉　（直ぐ、お松に聲をかける）どうしたんだ。今逃げて行つたのはお君ぢやねえか。
お松　ええ。
文吉　畜生、逃げやがつたな。
お松　だつて、お前さん、そりやあ、こつちの言ふことが無理だわ。
文吉　無理も糞もあるものか。おれとは昔から言ひなづけだ。あいつの兄貴も承知してたことだ。
お松　だつて、お前さん……
文吉　おめえ、なんにも言やしめえな。
お松　言つたわ。言はずにはゐられなかつたんですもの。何も彼もみんな言つたわ。
文吉　ばか。（いきなりお松を蹴飛ばす）
お松　まあ、なんてことをするの。
文吉　ばか野郎。それを言つちまつて、どうなるんだ。よしおれが行つて連れて來る。是が非でも承知させずにやあ置かねえから。（飛び出しさうにする）
お松　（文吉に縋りつく）それより、工場の方はどうなつたんですよ。
文吉　どうもかうもあるもんか。ストライキ破りが出て來て、もうめちやめちやだ。（さう言ひながら、お松を突き飛ばして走り去る）
（寢てゐた子供が目を覺ます。）
太郎　おつかちやん。おつかちやん。
お松　夢だよ、夢だよ。なんでもないんだよ。早くお寐。おとなしくお寐。
太郎　なんだか、大きな音がしたね。をぢさんが歸つたのかい。
お松　なんでもないよ。お前が夢を見たんだよ。おやすみ。早くおやすみ。（蒲團を叩いてやる。子供、間もなく寢入る）
（文吉、お君の手を引つぱつて歸つて來る。お君、泣いてゐる。）
文吉　さあ、はひれ。（お君を家の内へ押し入れる）
お君　……
お松　……
文吉　なぜ、ねえさんの言ふことを聞かねえんだ。
お君　……
文吉　おめえ、おれが厭になつたのか。
お君　……
文吉　ええ、おめえ、おれが厭になつたのか。

お君　……

文吉　おめえ、ねえさんから何も彼も聞いたさうだな。

お君　……

文吉　（急に疊の上へ兩手を突く）あやまる。あやまる。おれが悪かつた。少しもそんな氣はなかつたんだが、ついその、一つつきりの部屋なんかにゐるもんだから……いや、もうなんにも言はねえ……おれが悪かつたんだ。ねえさんに罪はねえんだ。おれは何も、おめえが厭になつたんで、そんなことをしたんぢやねえ。おめえのことは一日だつて忘れやしねえ。あんなとこに置くのは心配なんで、毎晩一度は樣子を見に行つてるんだ。硝子戸の外からそつとおめえの樣子を覗いて見て、おめえがいつもちやんとしてゐるのを見て、安心して歸るんだ。

お君　……

文吉　なあ、君ちやん、ねえさんの言ふ通りにしてくれねえか。今度はおれが頼むんだ。きのふ、ああ言つて、おれがおめえのひまを取つて來たんだ。今更お前に鶴屋バアへ歸られたら、おれの顏が立たねえ。ねえさんも、世間から責められ通しだ。おれだつて、この儘ぢやあ、とても工場の首はつながりつこねえ。組合の方のストライキも、もう今夜は總崩れだ。なあ、みんなを助けると思つて、さうしてくれ。

お君　……

文吉　いや、さう言ふと、おれ達が勝手になる、今までのことはあやまるから、どうかおれの心にもなつて、おれと一緒になつてくれ。おれはおめえが可愛くつてしやうがねえんだ。おれはおめえと一緒になれなけりやあ生きてるかひがねえんだ。（さう言ひながら、だんだんお君を抱へるやうにする）

お松　（いきなり二人を突きのける）およしなさいよ。見つともない。

文吉　（啉とする）何をするんだ。

お松　なんにもしやしませんよ。見つともないからおよしなさいと言つたんですよ。

文吉　何が見つともねえ。

お松　見つともないぢやありませんか。人の前で……

文吉　何が人の前だ……君ちやんとおれは言ひなづけだ……おめえの亭主がきめた言ひなづけだ……

お松　ぢやあ、その言ひなづけが、なんだつて、あたしに……

文吉　おや。おめえ、今になつて、そんなことを言ひ出すのか。

お松　だつて、相手がそんなに厭がつてるものを……もう好いから、返しておしまひなさいよ。

文吉　なんだと。
お松　返しておしまひなさいつたら……ほんとに生意氣だつたら、ありやしない。
文吉　おい、おい、なんで君ちやんの悪口をつくんだ。
お松　だつて、あんまり分からないんだもの……もうよござんす。世間で何と言はれたつて、どんなに暮らしが苦しくなつたつて、あたしはお前さんと添ひ遂げます。
文吉　おい、おい、冗談を言つちやあいけねえ。そんなことが出來るもんかな。おれはそんな氣でおめえと……おれは世間が恐くて君ちやんと一緒になるんぢやねえ。おれは君ちやんが可愛いんだ。なあ、君ちやん、おめえにやあ、おれの心持は分かつてるな。（さう言つて、もう一度お君を抱くやうにする。お君その儘になる）
お松　（また二人を突きのける）　何をするんだよ。
文吉　（立ち上がる）　何をしやがるんだ
お松　もう、もう、あたしはいやだ。お前さんと君ちやんを一緒にすることは、あたしが不承知だ。
文吉　何を言やがるんでえ。（お君の手をとる）　さあ、君ちやん、二人で出て行かう。もうこんな内に誰がゐるもんか。
お松　（文吉をつかまへる）　いんえ、いけない。お前さんはどうしてもこの内にゐなけりやいけない。
文吉　今になつて、何を言やあがるんだ。（お松を蹴飛ばす）
お松　（起き上がつて、文吉にしがみつく）　出ていつちやいやだ。出ていつちやいやだ。
文吉　何を、こん畜生。（もう一度蹴飛ばす）
（お松、悶絶する。）
お君　まあ、文さん……（お松の側へ駈け寄る）
文吉　さあ、君ちやん、早く行かう。
お君　文さん、文さん……ねえさんが大變よ。
文吉　さあ、行かう。早く行つて、どつかで世帯を持たう……なあに、どうにかして食つていけねえことはあるめえ。
お君　文さん、文さん……ねえさんが冷たくなつちまつたわよ。
文吉　なに。
お君　ねえさんが死んぢまつたわよ。
文吉　（はじめて氣がつく）　なに。（お松の死骸に手を觸れる）　いけねえ。飛んだことをしちまつた。おう、君ちやん。どうしたら好いだらら。
お君　（冷靜に）　死にませうよ。二人で。あたし、もう、どつちにしても、さつきから死ぬつもりでゐたわ。
文吉　え。

お君　だつて、あたし、世の中が分からなくなつたんですもの。もう、さつきここを飛び出した時から死ぬつもりでゐたのよ。だつて、あたし、誰も悪いと思ふことが出來ないんですもの。

文吉　……

お君　ねえさんだつて悪い人ぢやあなし、文さんだつて、一時は恨んでも見たけれど、會つて見れば、やつぱり昔からの文さんだし……さうかつて、あたし、ねえさんの生むものを、自分の子にするなんて……

文吉　もう、なんにも言ふな。

お君　だから、なんにも言はないで、默つて死にませうよ。あの世なら、ことに依ると、一緒になれるかも知れないから……もう、この世ぢやあとてもだめよ。

文吉　さうだ。この世ぢやあ、とてもだめだ。

お君　ぢやあ、死んでくれて。

文吉　ああ、死ぬとも。どつちにしたつて、おれの命はもうねえんだ。

お君　ぢやあ、早く。

文吉　うむ。（あたりを見廻す。臺所から庖丁を持つて來る）これでやつても好いか。

お君　ええ、早くして頂戴。太郎ちやんの起きない内に。

文吉　好いな。

お君　ええ。文さん直ぐ來てね。

文吉　ああ、直ぐ行くとも。（お君の脇腹を刺す。お君、斃れる。返す刀で、直ぐ自分の咽喉を切る）

（二人の息が絶える。）

（お松も、もう蘇らない。）

（前から目を覺まして、蒲團をかぶつてゐた少年太郎、そつと夜具から首を出す。）

（三人の死骸を見て驚く。）

太郎　（外へ駈け出す）大變だ。大變だ。お隣のをぢさん、大變ですよう。

（近所の人々、方々から駈けて出て來る。）

（家を取卷く。その中の一人が巡査を呼びに行く。やがて、巡査が來る。太郎が聲を上げて泣く。）

（公園の樂隊が聞える。）

——幕——

シネマトグラフ（十二場）

（一）　或大きなビルヂングの外壁

高い窓からするすると綱が下がつて來る。洋服を著た若い男が、するすると綱をつたはつて降りて來る。會社員の三輪である。

左手から刑事Aが姿を現す。

三輪、右手へ逃げる。A、あとを追ふ。

入れ違ひに、右手から掏摸の仙吉が逃げて來る。刑事Bが追つて來る。「掏摸だ。掏摸だ。」といふ聲が聞える。二人、左手へ消える。群集、現れる。

左手から或キネマ會社の撮影隊が現れる。撮影監督、撮影技師、助手數名、盜賊に扮した男優一名、刑事に扮した男優二名、妖婦に扮した女優一名などである。群集、足を留めて、見る。

撮影が始まる。盜賊がビルヂングの壁に沿うて逃げるのを、刑事があとからつけて來て、格鬪になる場面である。女優には用がない。

格鬪になると、群集が喝采する。

左手から、また掏摸の仙吉が逃げて來る。刑事Bがそのあとを追つて來る。二人、右手へ消える。

群集、「掏摸だ。掏摸だ。」と叫んで、そのあとを追ふ。

撮影隊、あつけに取られる。

（二）　地下室のカフエ

三輪と三輪の情婦カチウシヤお時が、小さい卓を圍んで話してゐる。お時は或ダンスホオルのダンサアである。

刑事Aがボオイに扮して、二人の行動に注意してゐる。

三輪　恐い。（戰慄する）

お時　（默つて笑つてゐる）

三輪　恐い。（戰慄する）

お時　（默つて笑つてゐる）
三輪　恐い。（戰慄する）
お時　何がそんなに恐いの。
三輪　エレエエタア……
お時　エレエエタアが恐いの。毎日乘つてるくせに。（笑ふ）
三輪　もう乘らない。
お時　いくぢなしねえ。
三輪　エレエエタアに掏摸がゐるんだ。
お時　掏摸が……
三輪　おれは大金を持つてゐたんだ。
お時　もう捕まつたでせう。
三輪　まだ捕まらない。
お時　直ぐ捕まるわ。
三輪　一人捕まると、また一人出て來る。
お時　濱の眞砂。（笑ふ）
三輪　おれはエレエエタアに乘らないで、窓から綱で外へおりた。
お時　泥坊みたいね。
三輪　すると、外には掏摸がゐて、おれを追つかけた。
お時　でも、無事に銀行まで行つたんでせう。
三輪　けふの用は濟んだ。でも、まだあしたがある。
お時　あしたのことはあしたのことよ。
三輪　恐ろしい。（戰慄する）
お時　掏摸にとられたつもりで、あした、その金をあたしにくれない。
三輪　飛んでもない。（立ちあがる）
お時　あたし、カフエエが始めたいの。もう家もきめたの、資金が入るの。
三輪　だめだ。（行きかける）
お時　ぢやあ、男爵に賴んでよくつて。
三輪　それは困る。
お時　ぢやあ、あなた、お金をくれる。
三輪　困る。困る。困る。（出て行く）
お時　待つて。待つて。（あとを追ふ）
（掏摸の仙吉が洋服ではひつて來る。第二の卓につく。）
ボオイ　（默つてワインリストを見せる）
（ボオイ「刑事Ａ」が近づく。）
仙吉　今、もう一人來る。
ボオイ　お連れ樣はもうお出かけになりました。
仙吉　出かけた。（立つ）
ボオイ　はい。
仙吉　さうか。（出て行く）

（撮影監督、撮影技師、男優一二名入り來り、第三の卓を圍む。夜間撮影の歸りである。）
（お時がぼんやり歸つて來てもとの卓につく。）
（ボオイが近づく。）
ボオイ　どうしました。
お時　逃げちまつたわ。
ボオイ　どうせ。捕まります。
お時　男爵は當てにならないし……
ボオイ　人の金ですからね。
お時　キスキイを頂戴。
（ボオイ、酒をとりに行く。）
（キネマの連中、カチウシヤお時を見て囁き合ふ。）
（掏摸の辰、はひつて來る。第二の卓につく。）
（ボオイ、お時のところへキスキイを持つて來る。それから、第二の卓に近づいて、辰にワインリストを見せる。）
辰　もう一人來るのだ。
ボオイ　（目でお時をさす）あの御婦人でせう。
辰　（狼狽して）いや、違ふ。洋服を著た男だ。
ボオイ　そんなら、もうお出かけになりました。
辰　出かけた。
ボオイ　はい。

辰　さうか。（出て行く）
（お時、キスキイをあふる。）
（キネマの連中、卓を叩いて、ボオイを呼ぶ。）

（三）　撮　影　所

グラスステエジの内部。撮影の最中。
セットは（二）のカフエエをその儘に摸したもの。
お時が活動女優になつて、ワンプに扮してゐる。
（一）のロケエシヨンで盜賊に扮してゐた男優が、お時のワンプに金をねだられて、それを拒絶する爲に、捨てられるといふ場面。
監督が動きをつける。
刑事Aが監督助手になつてゐる。
撮影が始まる。
お時　（臺詞を言ふ）ぢやあ、どうしてもくれないの。
盜賊に扮した男優　（臺詞を言ふ）だつて、そんな大金は……
お時　どうせ、人のものぢやないの。
男優　でも……
お時　たかが二萬圓ぢやないの。
男優　困るなあ。
お時　そんなに厭なら、もう頼まないわ。その代り、みん

なにお前さんの素性を吹聴してやるから。（立ち上がる）

男優　（立つ）まあ、待つてくれ、待つてくれ。

（途端に、會社員の三輪が飛び込んで來る。いきなりお時の前に跪いて、紙幣の束を捧げる。）

三輪　勘辨してくれ。勘辨してくれ。おれが惡かつた。おれが惡かつた

（お時、紙幣の束をとつて振り廻しながら、聲を上げて笑ふ。）

（撮影中止。）

（四）ダンスホオル

蓄音器が鳴つてゐる。

數組の男女が踊つてゐる。

その中に、掏摸の仙吉と辰とが混つてゐる。

三輪がカチウシヤお時を連れて來る。直ぐに踊の中へはひる。

刑事Aがはひつて來る。いきなり三輪を捕縛する。

仙吉と辰、逃げる。

お時そつと紙幣の束を三輪の足元に置いて逃げる。

三輪　なぜ、こんなことをするんです。

刑事　一緒に來れば分かる。

三輪　間違ひです。

（刑事、紙幣に目をつける。拾ひ上げる。）

刑事　（紙幣で三輪の頰を打つ）これは何だ。

三輪　（驚いて、あたりを見廻す）お時、お時、お時——

（悲しげに叫んで、崩れる）

刑事、三輪を引つ立てる。）

（五）繩のれんの　1

内部。

掏摸の仙吉と辰が、二人とも勞働者のやうな裝をして、飲んでゐる。もう大分醉つてゐる。

仙吉　銀まんか。

辰　金まんよ。

仙吉　げんの前か。

辰　ダンスに限るよ。

仙吉　エレヱエタはもうやばいぜ。

辰　でかが一人づつ乘つてるさうだ。

仙吉　ゆうべのは何だ。

辰　會社員だ。

仙吉　かいたいか。

辰　當分は河岸を變へるこつた。

仙吉　長函か。

辰　得意のばんか買よ。

仙吉　おいそれはもう懲り懲りだ。
辰　さあ、もう一杯飲んだら行かうぜ。
仙吉　うむ。
（兩人、蹣跚する。）

（六八）　縄のれんの　2

外部。
撮影隊がカチウシヤお時を連れて、やつて來る。お時の扮したワンプが、男に金を拒絶されて、自棄になつて、縄のれんを潜るといふ短いシインの撮影に來たのである。
刑事Aは、もう撮影隊の内にゐない。撮影が始まる。勞働者に扮した刑事Bが、出て來る。縄のれんを潜つてはひる。直ぐ入れ違ひに、仙吉と辰が逃げるやうに出て來て、左手へ消える。
撮影監督　（手をあげる）ストップ。
撮影技師　取り直しですか。
撮影監督　今のがはひつたのかい。
撮影技師　ええ。
撮影監督　すつかりはひつたかい。
撮影技師　ええ。
撮影監督　面白いぢやないか。背景になつて。
撮影技師　さうですねえ。
（刑事Bが縄のれんを潜つて出て來る。）
（撮影隊、行きかける。）
刑事　もし、もし。
撮影監督　（立ち留る）何です。
刑事　（笑つて）撮影ですか。
撮影監督　ええ、さうです。
刑事　今、あつしがここへはひると、直ぐ二人出て行きましたね。
撮影監督　ええ。
刑事　あれはカメラへはひつたでせうか。
撮影監督　（困つて）さあ。
刑事　（威壓するやうに）分からないんですか。
撮影監督　それは分かつてゐます。
刑事　はひつたんでせう。
撮影監督　取り直しをするかも知れないんです。
刑事　兎に角はひつたんでせう。
撮影監督　ええ。
刑事　いやどうも有難う。
（刑事B、どんどん行つてしまふ。）
（撮影隊、あつけに取られる。）

(七)　監　房

高いところに窓が一つある。
二三人の男が、暗い中でうごめいてゐる。
三輪が突き飛ばされたやうに、はひつて來る。

一人の聲　どうしたんだ。
三輪　ダンスだ。
もう一人の聲　どうしたんだ。
三輪　女だ。
更にもう一人の聲　どうしたんだ。
三輪　金だ。
一人の聲　拐帶か。
三輪　無罪だ。
もう一人の聲　ばか。
三輪　恐ろしい。
更にもう一人の聲　いくぢなし。
三輪　おれはなんにも罪を犯してやしない。
一人の聲　おれだつて、なんにも罪を犯してやしない。
もう一人の聲　おれだつて、なんにも罪を犯してやしない。
更にもう一人の聲　おれだつて、なんにも罪を犯してやしない。
三輪　(叫ぶ)　女だ。
他の三人　(一緒に)　女だ。
三輪　(叫ぶ)　金だ。
他の三人　(一緒に)　金だ。
三輪　(叫ぶ)　ダンスだ。
(他の三人、踊り出す。(四)で聞えた蓄音機の舞踏曲、どこからともなく聞えて來る。三輪も踊へ加はる。)

(八)　汽車の中

二等室。
カチウシヤお時と掏摸の辰が並んで腰をかけてゐる。
二人の間に鞄が一つ置いてある。

辰　どちらへ。
お時　おめにかかりましたわねえ。
辰　(驚いて)　どこで。
お時　カフエ・マノリで。
辰　いつ。
お時　五月二十七日の晩。
辰　五月二十七日の晩と。
お時　いやなボオイがゐたわ。
辰　ああ。
お時　あなた、直ぐお歸りになつたわ。
辰　(度胸を据ゑて)　分かりました。失禮。

お時　どちらへ。
辰　あなたは。
お時　サツエイ。
辰　（びつくりする）サツエイ。
お時　（笑つて）活動の撮影。
辰　ああ、キネマの……
お時　ネマキの方かも知れなくつてよ。
辰　（立つ）
お時　どうなすつて。
辰　次の驛で降ります……

（九）試　寫　室

（六）でとつたフイルムがスクリインへ映される。
仙吉と辰が繩暖簾を潜つて出る場面になる。
誰かの聲（暗闇で）待つた。
（フイルム、留る）
撮影監督の聲　誰だ。どうしたんだ。
（刑事AとB、スクリインの側へ寄る。）
撮影監督　どこの方です。あなた方は。
刑事A　警察の者です。ちよつと調べることがあります。
刑事B　このフイルムを暫く貸して下さい。
撮影監督　それは困ります。
刑事A　今のは役者ではないでせう。
撮影監督　いいえ、役者です。
（刑事B、スキツチを捻る。）
（試寫室、明かるくなる。）
刑事B　今繩暖簾を潜つてはひつたのは僕です。
撮影監督　（首を垂れる）濟みません。

（十）或　海　岸

お時と男爵が、海水着で、砂原に腹ん匍ひになつてゐる。
日がかんかん當つてゐる。
お時　燒けたわねえ。
男爵　お前も燒けた。
お時　もう構はないわ。役者は廢業だから。
男爵　秋からどうするんだ。
お時　カフエエよ。もう家もきめてあるわ。
男爵　資金は。
お時　あなたが出すのよ。
男爵　僕は君がそんな商賣をするのは反對だ。
お時　なぜ。
男爵　大勢に顔を見られるんだらう。
お時　今までだつて見られてるわ。

男爵　今までは今までさ。これからはいかんよ。
お時　これからつて。
男爵　もう僕のものになつたんだから。
お時　冗談でせう。
男爵　何が。
お時　ふざけちやいけなくつてよ……お金はどうなのよ。
男爵　金よりは先づ今の問題だ。
お時　そんなことよりお金よ。
男爵　金よりは……
お時　いいえ、お金、お金、お金、お金……

（十一）　ステエシヨン

群集。
仙吉と辰、汽車から降りて、出て來る。
刑事AとB、群集の中から出て來て、いきなり二人を捕まへようとする。
格鬪。
撮影隊がカメラを擔いで、やつて來る。
群集の一部　芝居だ。芝居だ。
群集の他の一部　芝居ぢやない。芝居ぢやない。
（撮影隊、カメラを立てて、格鬪を見る。）
或聲　芝居だ。芝居だ。
他の聲　芝居ぢやない。芝居ぢやない。
（仙吉と辰、つひに捕縛せられ、刑事達に引つ立てられて去る。）
（群集の一部、そのあとを追ふ。）
（他の一部の群集、カメラを取り卷いて立つ。）
（お時がしよびれた浴衣一枚で、次ぎの汽車を降りて來る。）
（撮影監督が目をつける。お時、驚く。）
撮影監督　困るぢやありませんか。撮影の途中でゐなくなつちまつて。
お時　濟みません。
撮影監督　あの繪は中止しました。
お時　もう使つちやあ頂けないでせうか。
撮影監督　所長に訊いて見ます。
お時　お願ひですわ。お願ひですわ。お願ひですわ。（撮影監督の手に縋つて泣く）
撮影監督　（困つて）分りました。分りました。
お時　（泣く）……
（群集、笑ふ。）
（撮影技師、カメラを覗く。）
撮影監督　ばか。
（群集、笑ふ。）

（十二）　或ビルヂングの外壁

（一）と同じ舞臺。
刑事Aが立つてゐる。
高い窓からするすると綱が下がつて來る。
三輪がするすると綱をつたはつて降りて來る。

刑事A　（帽子を脱ぐ）　やあ。
三輪　（帽子を脱ぐ）　やあ。
刑事　（笑つて）　もうエレヱエタアでも大丈夫ですよ。
三輪　（苦笑して）　いえ、まだ安心は出來ません。
刑事　銀行ですか。
三輪　ええ。
刑事　御苦勞ですな。
三輪　あなたも。
（三輪、右手へ去る。）
（撮影隊、再び女優になつたお時を連れて來る。）
（刑事A、近づく。）
刑事　撮影ですか。
影撮監督　（氣がつく）　やあ。こなひだは失禮。
刑事　行方不明の女優は。
撮影監督　無事に歸りました。（お時を指さす）
刑事　（お時を見る）　お前さんか。
お時　（刑事を見る　まあ、マノリのボオイさん。
刑事　違ふ、違ふ。（行つてしまふ）
（お時、笑ふ。）
（撮影監督、窓から下がつてゐる綱を調べる。）
撮影監督　これが好い。これを登つて御覽。
お時　ええ、なんでもやるわ。
（撮影技師、カメラを据ゑる。）
（お時、綱を登る。登りかけては落ち、登りかけては落ちる。）
（カメラ、頻に移動する。）

——映畫俳優の爲の舞臺劇として——

許嫁（一幕）

人物

第一の教師
第二の教師
學生A
學生B
その他の學生
小使

某大學の文科の教室。
正面奧に教壇――机、椅子、黑板。その左右に硝子窓。窓の外に新緑。初夏の日光。
右手に大きな戸口。
教壇に並行して、學生用の机とベンチ、三列にならぶ。第一の教師、教壇に立つて講義をしてゐる。二十人程の學生、不規律に、ベンチのそこここに腰かけてゐる――まるで明いてゐるベンチがある。さうかと思ふと、一つベンチに目白押しに大勢腰かけてゐる。學生の多數は筆記してゐるが、中には筆記をせずに、唯ぼんやり教師の顔を見てゐるのがある。また、講義とは關係のなささうな書物を讀んでゐるのがある。居眠りをしてゐるのがある。講義を聞かずに隣同志で話してゐるのがある。
學生Aと學生Bは、一番うしろのベンチ――見物席に一番近いベンチ――に列んで腰をかけてゐる。Bは筆記してゐる。Aは机の上に兩肱をついて、手の上に顎をのせてゐる。

第一の教師　（鐵縁のロイド眼鏡をかけ、頭を一分刈にした、肩幅の廣い、丈の低い、三十一二の男である。極めて早口に、全く感情なしにしやべる）……ええ、次ぎは變態恐怖の話でありますが、一體この變態恐怖なるものは、その強度なること、抑制の不可能なること、不合理なることなどが、その特色であります。ポリス・サイチスに依ると、一體恐怖なるものは、あらゆる精神病理的疾患の基礎をなすものであります。そこで、先づ分類から先きにいたすことにしますが、先づ第一が一般恐怖で――これを Panophobia と申します。（黑板へ白墨で術語を書く）即ち、何等特別なる事物について恐れるのではありません。無意味に狐疑憂慮する狀態です。フロイドに依ると、あらゆるフオビア――これは後で言ふ特殊恐怖のことですが――あらゆるフオビアは、先づパノフオ

ビアとして始まるので、それが特別なる事物に關係して來るのは、第二階梯であるのです。フロイドは更にかう説いてゐます このパノフオビアなるものは、恐怖の表現ではなくて、實は性的禁遏即ち Sexual Prohibition の表現だと言ふのです さて、第二が特殊恐怖、即ち今申した Phobia でありまして、（黒板に書く） これは或特別な事物に依つて起される誇張せられた恐怖を言ふのであります。元來、恐怖は行爲の偉大な抑止者でありますから、フオビアは特殊な抑止者だと言ふことが出來ます。ここで、プリンスの説を一寸述べたいのでありますが、それはあとにいたします。そこで、この特殊恐怖なるものは、凡そ十八種に分かれてをります A が Acrophobia で、（黒板に書く） これは高いところを恐れるのであります B が Agoraphobia で、（黒板に書く） これは廣いところを恐れるのであります。C が Algophobia で、（黒板に書く） これは苦痛を恐れるのであります。D が Anthrophobia で、（黒板に書く） これは男或は或特別な男を恐れるのであります。E が Astraphobia で、（黒板に書く） これは雷、或は他の氣象的現象を恐れるのであります。F が Claustrophobia で、（黒板に書く） これは狹い場所を恐れるのです。B のアゴラフオビアの丁度反對なのです。G が Gynophobia で、（黒板に書く） これは女或は特別な女を恐れるのであります。H が Hematophobia で、（黒板に書く） これは血を恐れるのであります。I が Misophobia で、（黒板に書く） これは汚れを恐れるのであります。J が Phobophobia で、（黒板に書く） これは恐怖の恐怖であります。即ち、恐怖を恐怖するのであります……（終業の鐘鳴る） ええと、まだ大分あるのですが、食事時間ですから、これでやめます。（ハンケチで手を拭きながら） プリンスの説も來週紹介します。（參考書籍とノオトを風呂敷にくるんで、教壇を降り、右手の戸口から出て行く）

（學生達、ばらばらに立つ。煙草に火をつけながら出て行くのがある。欠伸をしながら出て行くのがある。ノオトで机を一つ一つ叩きながら出て行くのがある。がやがやざわざわしながら、やがて、みんな出て行つてしまふ。）

（學生Aと學生Bだけ殘る。）

（B、立ち上がる。A、ぢつと腰をかけた儘で、黒板の方を向いてゐる。）

B　飯を食ひに行かうぢやないか。

A　（向うを向いた儘） うむ。

B　集會所はまづいから、けふは外へ出て、ミネルワで食

はうよ。變態恐怖で頭が變てこになつてしまつた……

A　うむ。

B　午からは市岡だらう。あの先生、掛持だから、どうせ遲いよ。ゆつくり食つて來られるよ。

A　（默つてゐる）

B　どうしたんだ。氣持でも惡いのか。

A　（半分見物席の方を向く。突然）おれは煩悶してるんだ。

B　煩悶。冗談ぢやない。（間）何を煩悶してるんだ。

A　（默つてゐる）

B　（Aと向ひ合つて、他のベンチの端に腰をかける。二人が机と机の間の道を挾む）君も今の講義で頭が變になつたんぢやないか。

A　違ふ。さうぢやない。

B　ぢや、どうしたんだ。

A　もう、こなひだから煩悶してるんだ。

B　どうしたんだ。金の問題か。

A　ううむ。さうぢやない。

B　女か。

A　（默つてゐる）

B　（笑つて）女だな。

A　（突然）君の妹は今國へ歸つてゐるんだね。

B　ああ、歸つてるよ。少し頭が惡いもんだから　それが　どうかしたのかい。

A　僕の煩悶はね。

B　うむ。

A　僕の煩悶は君から起つてることなんだ。

B　僕から。

A　ああ。だから、どうしても君に話さなけりやならないんだ。

B　ぢやあ、話したら好いぢやないか。

A　他の人に話したつて、なんにもならない煩悶なんだ。

B　だから、聞かうと言つてるぢやないか。

（間）

A　君の妹な。

B　うむ。

A　あれはほんとに君の妹なのか。

B　變なことを訊くな。當り前ぢやないか。

A　ほんとに君の妹なんだね。

B　さうだよ。

A　ぢやあ、訊くがね。若し君の妹に或リイベスハンデル（戀愛事件）が起つたとしたら、君は兄貴としてどういふ處置をとるね。

B　リイベスハンデル。（笑ふ）そんなものは起る筈がな

い。

A なぜ起る筈がないのだ。

B それは……(間) 僕は妹の人格を信じてゐるからだ。

(長き間)

B (不安らしく) だが、若しそんなことでもあるのか…

A (默つてゐる)

B 確實な證據でもあるのか。

A ある

B 相手は何者だ。

A (直ぐ) 僕だ

B 君だ

A ああ。

B (怒る) そ、それは怪しからん。かりにも人の妹を……君はどうして……君はどうして償ひをつけるつもりだ。

A 償ひ。(冷笑する) 君は妹を束縛するのか。(間) 戀愛は自由ぢやないか。

B 束縛するんぢやない……併し、そんな不眞面目な……

A 眞面目か不眞面目か研究して見たか。

B 研究はして見ないが、大抵分かつてゐる。この頃の戀愛は大抵さうだ。

A (いきなり) 嘘つき。

B 何が嘘つきだ。

A 富子さんは君の妹ぢやない。あれは君の言ひなづけだ。

B (驚いて) 誰がそんなことを言つた。

A 富子さんが自分で言つた。

B 富子が自分で……

A (遮るやうに) 君も嘘つきなら、富子さんも嘘つきだ。

B 富子は自分で告白したと言つてるぢやないか。

A 初めに告白すりやあ好いんだ。あとで告白したんだ。

B あとで (間) あとでとは何のあとでだ。

A それを今言ふ必要はない。富子さんはどこまでも君の妹として僕に近づいて來たんだ。僕だつて、それを初めに知つてりやあ、別に執るべき態度があつたんだ。それを……それを……あとになつて言ふなんて。(間) あいつは淫婦だ。

B それは誰に向つて言ふ詞だ

A 誰にでも向つて言ふ詞だ ほんとに君を愛してるなら、初めに總てを告白しなけりやならない筈だ。

B 僕等の愛について、君の干渉を受ける必要はない。

A 干渉はしないさ。唯事實を述べてるんだ。富子さんは君に對しても愛がなければ――僕に對しても愛がないんだ。

B 君に對しても愛がないと言ふのか。

A ない。確にない。あの嘘つきが何よりの證據だ。初め

に言へば好いことを、あとで言つて僕を苦しめる——それだけでも、あの人には愛がないのだ。

B　（一寸考へて）さうすると、君のシチュエエションは餘程悪くなつて來るぞ。（間）愛が君へ移つたのなら、まだ考へやうもあるだらうが、愛がなくて、唯肉だけの問題だとなると、いよいよ僕は許せなくなる

A　それは富子さんに向つて言はるべき詞だ。僕は少しも欺いてはゐなかつた。僕には愛があつた。實は二年も前から思ひ詰めてゐたのだ。

B　今はどうだ。

A　もうない。あの嘘が分かつてから、一度に厭になつてしまつた。

B　過去は問題の外へ置かう——問題の解決は現在の状態から出發しなけりやだめだ。（間）すると、今君はもう愛はないのだね。

A　ない。

B　富子の方にも愛はないと言ふのだね

A　確にない。

B　そして、富子は僕に對しても愛を持つてゐないと主張するのだね。

A　ああ、主張する。

B　實は、僕も君の話を聞いて、あいつに愛が持てなくなつた。

A　さうなるのが當り前だ。

B　すると、君と僕の間に横はつてゐる富子は、唯肉としての富子なんだね。

A　さうだ。

B　さうすると、氣の毒だが、僕の勝利だ。

A　（冷笑して）なぜ。

B　僕に優先權があるからだ

A　どんな優先權があるのだ。

B　僕の方が先きだと言ふのだ。

A　何が先きだと言ふのだ。

B　僕は兩親に對する約束を破つて、とうから富子と夫婦になつてゐた。

A　（冷笑して）それだけか。

B　それだけかとは。

A　それだけなら、僕はもう君を追ひ越してゐる。

B　追ひ越してゐるとは。

A　富子さんは姙娠してゐるのだ。

B　姙娠。

A　うむ。

B　（笑ふ）そんなばかなことがあるものか。

A　ところが、あるんだ。頭が悪いと言つて、國へ歸つた

のは、その言ひわけに過ぎないのだ。

（長き間。）

B　だが……若しさうだとしても、それがどつちの結果だか分かるものか。

A　ところが、それがはつきり分かつてゐるのだ。（內衣兜から手紙を一通出す）これを見給へ。

B　（手紙を讀む。讀んでゐる內に、顏色が變つて來る。無言）

A　僕と富子さんとの關係は三月五日から始まつた。醫者の證言もある。その手紙に書いてあることは本當だ。（間）さすがの嘘つきも、困る時は本當のことを言ふのだ。

B　（頭を抱へる。無言）

A　僕がさつき煩悶と言つたのは、富子さんの言ひなづけである君に對して、罪や責任を感じたからではない。僕はだまされたんだ。だました者に罪はあつても、だまされた者に罪はない。（間）僕は唯さうした間違つた「愛」の結果を負擔するのが厭なのだ。

B　（顏を上げる）厭だと言つても、爲方がない。僕はもう何も彼もこれつきりにする。君が引き起したことは、君が始末すべきだ。

A　（冷靜に）ところが、さうは行かないのだ。（間）君はどうしても富子さんと一緒にならなければならない運命を持つてゐるんだ。

B　そんなことはない。親父にさう言つて、婚約を破つて貰ふばかりだ。

A　それはだめだ、君が若し今日まで、綺麗に富子さんと生活して來たのなら、それも出來るかも知れない。（間）併し、君にはもうその權利は奪はれてゐる。

B　それはそれで償ひの方法があらう。

A　その方法は君が富子さんを細君にするより外はないのだ。

B　（沈默する）

A　僕は君を氣の毒だと思ふ。實際、氣の毒だと思ふ。だから、けふまでそれが君に言へなかつたんだ。（間）愛のない者を愛のない者として一生の伴侶にする。こんな厭なことが又と外にあらうか。君はさうした運命にぶつかつてゐるのだ。（間）僕はそれが言ひにくいばかりに、この幾週間煩悶してゐたのだ。（衣兜から又一通手紙を出す）これを見給へ――君のお父さんの手紙だ。

B　（手紙をひつたくるやうにして讀む。見る見る顏色が變る。無言）

A　分かつたか。君のお父さんは富子さんのお父さんにさういふ約束をしてゐたんだ。（間）東京へ一緒に出し

て、結婚前に、萬一伜がそちらの娘さんと關係するやうなことがあつたら、その後如何なる問題が起らうとも、お孃さんはきつと伜の妻にするといふ約束だ……

B　（沈默）

A　君のお父さんは涙をもつて書いてゐる――總ては聞いた。出來たことは爲方がない。唯殘念なのは伜が淸淨でなかつたといふことだ。（間）幸に向うの親はまだなんにも氣がつかないでゐる。伜と富子が一緒にさへなつてくれれば總ては無事に解決する。（間）この上はどうしても二人を一緒にしなければ、自分の一分が立たない。どうか、あなたは諦めて、息子に是非とも一緒になるやうに勸めてくれと書いてある。一生御恩は忘れないから、どうかその一事に力を盡してくれと書いてある……

B　（掌で机をどしんと打つ）　ああ、ばかだ。おれはもうだめだ。

A　（諭すやうに）　爲方がない。男らしく運命に忍從するのだ。さもないと、一徹な君のお父さんの生命に關するやうなことになるぞ。（間）　僕は君の親父に、死を賭してもこの事はきつと無事に解決して見せると誓つてやつたんだ。同時に、富子さんには一切の關係を絕つといふ手紙を出したんだ。（笑つて）　……、僕は偉大な人道主義者になることが出來たよ。

B　（嗟嘆する）　ああ……

A　（敎へるやうに）　一體、親と親とが、言ひなづけなどといふものを、勝手にきめるのが悪いのだ。それを又子供達が、何等の反省なしに喜んで引受けるから間違ひが起るのだ。しかも、學生の間は兄妹のつもりでゐろとか何とかいふ親の命令を遵奉して、世間や友人を欺くに至つては言語道斷だ。富子さんに想を寄せてゐるものは、おれの外にも澤山ゐるんだ。唯、みんな僞善家だから――利害觀念が強いから――おれの進んだところまでは進めないでゐるんだ。君はそれを不愉快だとは思はないか。總てが噓だ。みんな噓だ。噓から始まつたことは噓に終るにきまつてゐるんだ。

B　（頭を上げる）　さうだ……ほんとにさうだ。おれの今までの生活は全部噓だつた。おれはけふからほんとの生活にはひるのだ。見す見す愛のない女だと承知で、おれは富子と一緒にならう。そしておれの強い愛の熱で、あいつのほんとの愛を突き覺ましてやらう。（間）　だが、それがおれに出來るだらうか。

A　悲觀するな――おれがついてゐる。

B　うむ、賴む――絕えずおれを激勵してくれ。

A　その代り、もう噓はやめだぞ。眞實で行くんだぞ。富子さんの、あの噓で固まつた魂を眞實の斧でぶち毀すん

だぞ。

B　うむ分かつた——分かつた。

（小使がはひつて來る。小倉の盲縞の立襟の服を着てゐる。六十歳位。電報を持つてゐる。）

小使　（Aに）あの、あなたは文科の方ですか。

A　さうだ。

小使　二年の方はどこにゐるでせう。

A　僕、二年だ。

小使　（電報を見る）ヒサカタといふ學生さんがゐますか——ヒサカタケンジです。

B　（側から）久方謙二なら僕だ。

小使　ああ、さうですか。（電報を渡す）至急電報だからつて、あなたの下宿から屆けて來たんです。

B　有難う。（電報の封を切る）

（小使、とぼとぼと出て行く。）

A　どこからだ。

B　國かららしい。（讀む。非常に驚く）

A　どうした。

B　富子が死んだんだ。

A　死んだ。

B　しかも自殺らしい。キシヤデシスとある。

A　なに、自殺。（Bの手から電報を奪ふ。讀む。顏色變る。無言）

（始業の鐘鳴る。）

B　（考へる）さあ、分からなくなつた。ことに依ると、富子はほんとに君を愛してゐたんぢやないか。

A　（考へる）うむ——僕にも分からなくなつて來た。

（稍長き間。）

B　僕も大事なものをなくしたやうな氣がして來た。（涙がひとりでに頰を流れる）

A　（電報を胸に押し當てる）僕も……僕も……何か奪はれたやうな氣がして來た。（涙がぼろぼろ床へ落ちる）

B　おい。（Aの顏を見る）

A　うむ。（Bの顏を見る）

（二人、知らずに泣いてゐる。）

（學生達、がやがやはひつて來る。二人、顏を隱すやうにして、教壇の方へ向き直る。第二の教師がはひつて來て、教壇に登る。）

第二の教師　（丈の高い、瘦せた、目の小さい、頭の毛の烏の巢のやうにもじやもじやした四十恰好の男である。ノオトを見ながら、ゆつくり、ゆつくりしやべり出す）第三章。絶對的本原に關する意識の發達。ええ、人生が絶對的性質を持つてゐるといふこと、ええ、自我が絶對的内容を領有してゐるといふことに對する非難は、ええ、

概ね甚だ幼稚なもののみである。ええ、隨つて、幼稚なる說明を以て、これを排除する事が出來る。（間）ええ、生命は自然の必要的過程であつて、全然依存的相關的のものではないか、ええ、どうして絶對的內容がその內にあり得るかと、詰問するのが普通である。然り生命が物理的必然法に支配せられ物質的に依存する自然的過程であることは疑はない。けれども、これからどんな論理上の結論が……

（學生、AとB、机の上に突つ伏して泣いてゐる。敎師、知らずに講義を續けてゐる。他の生徒も氣がつかないでゐる。）

――幕――

第一の世界（一幕）

人

山中　愼一　學者
山中　敏子　その娘
島村　國雄　孤兒
谷村龍太郞　實業家
谷村　糸子　その妻
新聞記者A
新聞記者B
新聞記者C
新聞記者D

時
現　代

所
東京の郊外

舞臺。或室內。
敏子、鷄を追つてゐる。

敏子　しやうがないねえ。又はひつて來て。しつ、しつ、しつ。

（人の音なふ聲。）
（やがて、島村、名刺を持つて、はひつて來る。）
島村　お孃さん、太陽新聞の記者といふのが來ましたが。
敏子　お父さんに會ひたいと言ふんだらう。
島村　さうです。
敏子　お留守だと言つたかい。
島村　言ひました。でも、お留守は承知だと言ふのです。お歸りを待つて、お話が承りたいのだと言ふのです。
敏子　いつお歸りになるか分からないと言へば好いぢやないか。
島村　さうも言つたのです。でも、大使館へ入らつしやるのが二時だから、もう追つつけお歸りになる筈だと言ふのです。
敏子　（やつと鷄を追ひ出す。）よく知つてるんだねえ。
島村　そりやあ知つてますとも。東京では大評判です。新聞などでも盛に書き立ててゐますから。
敏子　おや。お前、新聞を讀むのかい。
島村。ええ。毎朝、卵の荷を出しに行く時、ステエションの前の萬松軒で讀むんです。
敏子　お父さんに叱られるよ。
島村　いいえ、先生は決して他人のする事に干渉をなさる

方ではありません。人間はひとりひとりで自分自分の道を歩くべきものだと、始終さう仰しやるのです。新聞を讀まないのは、先生の主義です。新聞を讀んでも構はないといふのが、僕の主義です。

敏子　お前の主義なんかどうでも好いよ。それより、お歸りになつたつて、とてもお會ひになりやしないんだから、早く斷つて返しておしまひよ。

島村　斷るんですか。

敏子　返しておしまひよ。

島村　はあ。

（島村、退場。）

（敏子、小さい紙片に鉛筆で何か書き始める。）

（島村、登場。）

島村　歸りました。

敏子　（紙片を隱す。）歸つたかい。

島村　何を書いてゐたのです。

敏子　學校の作文よ。

島村　噓をお言ひなさい。手紙でせう。

敏子　手紙だつて好いぢやないか。

島村　いけません。又あの谷村といふ大學生のところへ出すんでせう。先生が一寸でも留守だと、直ぐそれだ。

敏子　他人の事に干渉するものぢやないよ。お前は先生の弟子ぢやないか。

島村　僕はあなたを他人だとは思ひません。

敏子　又はじめた。それはお前がひとりできめた事ぢやないか。あたしの知つた事ぢやないよ。づうづうしい。

島村　いくらあなたが息張つても、これは人間以上の者のきめた事です。動かす事は出來ません。

敏子　お前なんかに神樣のお心が分かつて堪るものか。

島村　僕は他の人の持つてゐない力を持つてゐるのです。他界との交通が出來るのです。

敏子　透視や念寫ぐらゐが出來たつて、それが何だい。あたしから見れば、一種の不具だよ。お父さんも物好きねえ。お前のやうな者をわざわざ孤兒院から拾つて來て、まるで自分の子かなんぞのやうに可愛がつて入らつしやるんだ。

島村　まあ何とでも仰しやい。今に分かりますから。

（人の音なふ聲。）

島村　また誰か來たな。

敏子　早くお出でよ。

（島村、退場。）

（敏子、手紙を書き續ける。）

（島村、登場。）

島村　また新聞記者です。

敏子　他のかい。
島村　今度は毎朝新聞です。
敏子　斷つたのかい。
島村　いいえ。
敏子　なぜ斷らないの。
島村　でも、折角遠くから來たんですから。
敏子　それは爲方がないぢやないか。こつちで呼んだわけぢやないんだから。
島村　でも、けふは先生の生涯にとつては或偉大な日なのですからね　先生の名が世界的に知れるといふ日ですからね。新聞記者として、會つて話が聞きたいのは當り前だと思ひます。
敏子　大層新聞記者に同情があるんだねえ。
島村　先生だつて少しは世間的になるのが好いのです。
敏子　でも、とてもお會ひになりやしないよ。
島村　さうでせうか。
敏子　さうだとも。早く斷つて歸つてお貰ひよ。
島村　はあ。
（島村、退場。）
（敏子、手紙を書き終り、封筒へ入れて、宛名を書く。）
（島村、登場。）
島村　歸りました。
敏子　ぢやあ、好いから、鳥小屋を見ておくれ。
島村　少しゐても好いでせう。こんな機會はめつたにないんです。それに、けふはおめでたい日なんです。
敏子　でも、あたしは少し考へ事があるんだから。
島村　それも、あの谷村の事でせう。あなたが東京の學校へ行く電車の中で、毎日どんな事をしてゐるか、僕はちやんと透視してゐるのです。
敏子　嘘お言ひよ。
島村　好い男だ。生つ白いが、ああいふのが女の好い男と言ふのでせう。だが、目が近いと見えて大分强度の近眼鏡をかけてゐますね。
敏子　誰かに聞いたんだね。
島村　知らないと思つてるから氣の毒です。先生に言ひませうか。
敏子　言つたつて好い。あたしは感情を僞つてはゐないのだから。
島村　いいえ、僞つてゐます。あなたは僕を愛してゐながら、自分でそれに氣がつかずにゐるのです。そして、愛してもゐない他の男を、愛してゐると思つてゐるのです。
（人の音なふ聲。）
敏子　また誰か來たよ。
島村　うるさいな。

（島村、退場。）
（敏子、手紙を帶の間に入れる。）
（島村、登場。）
島村　また來ました。帝都日報の記者で、今度は二人です。一人は寫眞機を持つてゐます。
敏子　斷つたんだらうね。
島村　斷りましたが、歸りません。お孃さんにでも好いから會ひたいと言ふのです。
敏子　あたしに會つたつて、しやうがないぢやないか。
島村　僕もさう思ひますが、先生のふだんの事でも聞きたいんでせう。
敏子　そんな事なら、お前が話してやれば好いぢやないか。
島村　さう言つたんですが、僕ではだめだと言ふんです。先生の子だといふだけで、世間に對してはお孃さんの方が權威があるんですね。
敏子　くだらない事を言つてゐないで、早く斷つて返しておしまひよ。
島村　あなた會ひませんか。
敏子　厭だよ。新聞記者なんか。
（島村、退場。）
（敏子、懷から或寫眞を出して眺める。）
（島村、登場。）
（敏子、寫眞を隱す。）
島村　だめです。歸りません。
敏子　しやうがないね。
島村　お歸りまで玄關で待つてゐると言ふのです。
敏子　ぢやあ、うつちやつてお置きよ。あの玄關は內の人口ぢやないんだから。
（間。）
島村　ですから、その儘にして置きました。
島村　併し、お孃さん、一體、世間と隔絕するなんて事が實際に出來るでせうか。ほんとに世間と隔絕するなら、山ん中へでも隱れるか、離れ島へでも逃げて行かなければだめだと思ひます。世間といふものの中に住んでゐて、世間と隔絕するなんて、到底不可能な事だと思ひます
敏子　それはあたしもさう思ふのさ。でも、お父さんは「心」の孤獨といふ事を仰しやるのだよ。
島村　でも、本を讀むといふ事が、既に「心」の孤獨を裏切つてるぢやありませんか。本を讀む事は、大勢の人の思想に接する事です。
敏子　さうだとも。あたしはそれでなくても、お父さんが何處の大學から迎ひに來ても、決してお出にならないのが歯痒くてならないんだよ。さうすりやあ、何もこんな、鷄なぞを飼つて、苦しい生活をなさらなくたつて濟むん

ぢやないか。本だつて心配なしに買へるし。

島村　博士號だつて、もう二度も斷つて入らつしやるんです。先生が博士になつて帝大の講壇にでも立つてくれると、僕だつてその研究材料になつて、天下に名を廣める事が出來るんだけれど

敏子　一體お父さんの研究して入らつしやる事が、まるであたし達には用のないものに思へるよ。夢だとか、幻影だとか、精靈硯だとか、有機磁氣の豫言だとか、それがあたし達の現在の生活に何の關係があるんだらう

島村　いや、それは違ひます。先生の研究して入らつしやる事は立派な事です。人間の生活にとつて極めて重要な事です「第二の世界」の存在を確立する事は、この苦しい「第一の世界」に住む人類にとつて、どんなに深い慰めになるか分かりません。

敏子　でも、お父さんは、それを人の爲にやつて入らつしやるやうには見えないぢやないか。

島村　それです　僕の言ふのもそこです。それ程人生的に意義のある研究をも、たかだか年に一度か二度、外國の文章で書いて外國の雜誌へ送る位な事で、自分の周圍の人には少しも頒けてやらうとなさらないのです。僕には先生のそのお心が分かりかねるのです。

敏子　お父さんは若い時に、何か苦い經驗をお嘗めなすつたに違ひないよ。

島村　僕は亡くなられたあなたのお母さんとの間に、何か不幸な事があつたのだと思つてゐます。

敏子　それは分からない。あたしが物心がついた時には、もうお母さんは入らつしやらなかつたのだし、お父さんは何一つお母さんの事は仰しやらないのだから。でも、合はなかつたといふ噂はあたしが預けられてゐた家で聞いたよ

島村　さうです。きつとさうに違ひありません。でも、それ程な深傷を負つて、世間といふものからまるで離れてゐた先生が、けふ急に世間へ出て行く氣になつたのは不思議ですね。伊太利大使館から手紙が來ると、直ぐ行つて見ようと仰しやつたぢやありませんか。嬉しかつたのでせうか。

敏子　分からないわ、あんまり嬉しさうな顏もなさらなかつた　唯、相手が外國人だからね、と仰しやつただけだよ。

島村　どうも先生の心持は、僕には分かりません。

敏子　あたしにも分からないよ。

（間。）

島村　僕は先生の側にゐるのが少し不安になつて來ました。僕は先生の實驗で、自分が他の人の持つてゐない力を持つてゐる事が分かつたんです。ですから、早く獨立

して、これを元に何か爲事がしたいと思ひます。あなただつて、この不自然な寂しい生活には飽き飽きしてるのでせう。二人で逃げませうか。

敏子　またそんな突飛な事を。何といふづうづうしい人だらう。

島村　づうづうしいんではありません。信ずる所があるから、さう言ふんです。谷村なんて、あんななんにも分からない大學生と一緒になつたつて、あなたの將來に幸福は來ません。それは僕の未來の透視で、ちやんと分かるのです。

敏子　失敬な事をお言ひでない。いつまで大學生で入らつしやるものか。谷村さんはきつとあたしを幸福にして下さる方だ。

島村　さつきの手紙はどうしました。

敏子　どうしたつて好いよ。

島村　お出しなさい。その帶の間に挾まつてゐます。

敏子　お前に渡すわけはないよ。

島村　いいえ。僕はあなたの心の主人です。お出しなさい。

敏子　厭だ。

島村　よし。そんなら透視で、手紙の内容を讀んでしまふから。

（島村、或姿勢をする。）

（敏子、逃げてはひる。）

（主人、山中愼一、新聞記者四人を連れて登場。）

主人。さあ、諸君どうぞかけてくれ給へ。裏口などから通して失敬だつたが、あの玄關は使つた事がないものだから。椅子が足りないな。宜しい。僕はこの箱にかけるから。どうか遠慮しないでかけてくれ給へ。（島村を見る。）何をぼんやりしてるのだ。諸君には俺があやまつて置いたから好い。お前のした事に罪はないのだ。俺がけふは流儀を變へたのだ。

記者B。やあ、君。さつきは失敬した。太陽丁とステエシヨンで落ち合つて、待つてゐたら、先生が歸つて來られて、直ぐ一緒に案内して下すつたのだ。吾々も意外だつた。君も意外だらう。

記者C　僕も玄關で待伏してゐたんだが、何の交渉もなしに内へ入れて下すつたんで、ちと力負けの形だ。

記者A　先生はもつと圭角のある方かと思つてゐたら、意外に溫情のある方なので、恐縮した。

主人　いや、自分の事は自分にも分かるものではありません。いつもはどんな人にでも顏を合せるといふ事が億劫なのに、けふは不思議と誰の顏を見ても話がしたいやうな氣がするのです。

記者B　いや。これ程の名譽を得られれば、どんな偉い方

でも、さういふ心持になるのが當り前です。さうならなければ人間ではありません。
主人　君の言ふ通りかも知れません。併し或は君の言ふ通りでないかも知れません。世間で言ふ學問上の名譽といふやうな事なら、決してこれが始めではありません。だが、今までさういふものは大抵こつちから逃げて受けませんでした。ところが、どうしたのか、けふはこつちから出て行く氣になつたのです。（島村を見る）おい、まだぼんやりしてるな。お客様に番茶でも持つて來い。倣子はどうした。
島村　あちらに入らつしやいます。
主人　倣子にもあとで來いと言つてくれ。
（島村、退場。）
主人　客といふものに接した事のない男ですから、どうして好いか分からないのです。
（新聞記者A、B、C、各衣兜から手帳を取り出す。）
記者A　ところで、先生、今回の御名譽に就いて、少しお話が承りたいのですが。
記者C　私からもお願ひします。
記者B　私からも。
主人　どういふ話をすれば好いのです。
記者A　世間では色々に傳へてゐますが、どうも本當の事が分かりません。一體、先生は何の御研究で、今度のやうな名譽を得られたのです。
記者B　さうだ。僕も先づそれから伺ひたいと思つてゐたのだ。
主人　それは極めて簡單です。發表したのはダンテの研究です。
記者A　詩聖ダンテですな。
記者C　（Aに）何だい。シセイダンテと言ふのは。
記者A　（Cに）伊太利の有名な詩人だよ。詩の聖人だよ。
記者C　ああ、さうか。
記者B　ダンテと言ふと、やはり「神曲」の御研究ですか。
主人　さうです。併し、その極一小部分の研究です。
記者A　それが、あちらで認められたわけですね。
主人　さうです。ほんの小さな論文を伊太利の或大學の雜誌へ寄稿したのです。それが向うの學士院といつたやうなものの目について、今後の研究の足しにもしろと言ふので、日本の金で三千圓程くれたのです。實はけふ先方へ行つて、私はダンテを專門に研究する者ではないからと斷つたのですが、それはどうでも好いからといふ事なので、兎に角貰つて來ました。名譽といふ程の事でもないのです。
記者B　別に儀式があつたわけでもないのですか。

主人　郵便局へ爲替を受け取りに行つたやうなものです。大使にも會ひましたが、ほんのふだん著で私を自分の居間へ通してくれました。禮儀だと思つて、二十年も著ずにゐた、こんな古ぼけたフロックを著て行つた自分が恥づかしくなりました。

記者C　その論文といふのは、やつぱり伊太利語でお書きになつたのですか。

記者A　（Cに）當り前さ。

主人　いや、誠に恥づかしいが、伊太利語は讀めるのと、少し話せるだけで、文章は書けないのです。論文は佛蘭西で書きました。

記者A　「神曲」の一小部分だと仰しやいましたが、いづれ何か特殊の御研究をなすつたのでせう。今まで外國にもないやうな。

主人　さあ、それは分かりません。書いたのは、ブルガトリオの最後の六曲の研究です。第二十八曲から第三十三曲までですね。一部の批評家には、寧ろダンテの失敗だと言はれてゐる部分です。ダンテが地上樂園へはひると、不思議な行列を見ますね。普通、寺院の勝利を象徴するものだと言はれてゐるあの美しい行列です。行列が留まると、天の使が花を散らします。その花の中からダンテの昔の戀人のベアトリイチエが現れて來ます。私の研究が、若し今までの學者のそれと違つてゐるとすれば、ダンテの見たこの幻影を、單に詩人の空想として取り扱はなかつた點でせう。私はダンテの優れた感覺を論じて、これを實際に見たヰジョンとして取り扱つたのです。中世紀のコルプス・クリスチ。基督の死骸を祭る行列です。これとの關係を論じた人は澤山あります。寺院の勝利のアレゴリイとして論じた人も澤山あります。併し、私はさういつた考古的な研究には一切はひらずに唯ダンテといふ優れて心の淸い詩人と心靈界との密接な交通を說いたのです。ダンテが人間の目で實際に見た幻影として論じたのです。

記者C　どうか一寸お待ち下さい。少しむづかしくて、私にはよく分かりません。（Aに）君には分かるか。一番初めのプルガ何とかいふのは何の事だ。

記者A　（Cに）「神曲」は地獄と煉獄と天國とに分かれてゐるんだ。プルガトリオといふのは、その煉獄だ。つまり罪の淨められる處だ。（主人に）さうですねえ。先生。

主人　さうです。さうです。

記者C　（Aに）君は文藝記者だけあつて、なかなか通だねえ。大使館といふので、よし來たとばかり引き受けて來たんだが、政治記者にはこいつは無理だよ。まあ、よく書いといてくれ給へ。あとで摘要させて貰ふから。

記者B　（主人に）　一體、先生のふだん研究して入らつしやる事は何なんです。

主人　普通の人の目に見えない世界、この世を離れた世界、この世を第一の世界とすれば、第二の世界の研究をしてゐるのです。

記者C　ああ、「死後は如何」といつたやうな事ですな。

（Aに）　少し分かつて來たぞ。

記者B　すると、心靈學といふやうなものですか。

主人　それもその一部分です。併し、私のはもつと廣いのです。實を言ふと、研究してゐると言ふよりは、さういつた世界に生きてゐると言つた方が好いのです。

（島村、客に茶を持つて來る。）

主人　そこへ參つた青年ですが、これなども、諸君には唯の書生に見えませうが、普通人の持つてゐない感覺を持つてゐる人間です。吾々の見ないものを見るのです。吾吾の聞かないものを聞くのです。

記者C　幽靈などを見るのですか。

主人　幽靈も見ます。生靈も見ます。神も見れば、惡魔も見るのです。そして、さういふ者と話をします。（島村に）　敏子はどうした。

島村　入らつしやいません。

主人　島小屋か。

島村　分かりません。

主人　何處かにゐたら、ここへ來いと言つてくれ。

（島村、去る。）

記者C　お子さんはお孃さんお一人ですか。

主人　さうです。

記者B　お名前は。

主人　敏子です。ビンの字を書きます。

記者A　失禮ですが、奥樣は。

主人　あれを生むと、間もなく亡くなりました。

記者A　先生が今日のやうな生活をなさるやうになつたのには、或深い動機があつたやうに承つてをりますが、それを伺ふわけには參りますまいか。

主人　それはもう過ぎ去つた事です。二十年も前の事です。今日では唯これが習慣になつてゐるだけです。習慣を變へるといふ事が恐ろしいので、唯かうやつて同じ生活を續けてゐるのです。

記者A　さうお逃げになれば、もと立ち入つて伺ひますが、失戀が動機だといふのは事實ですか。二十年前の先生は熱烈な戀愛詩人でした。その詩は今でも青年の間に愛誦されてゐます。その燃えるやうな戀愛詩人が急に隔絶した枯淡な學究になられたのには、蔭に女性があるのだといふ事を聞きましたが。

主人　（笑ふ）　さうかも知れません。
記者C　これは面白い。
主人　だが、若し失戀だとすれば、餘程不思議な失戀です。
記者A　ダンテとベアトリイチエのやうなのですか。
主人　どうして、どうして。ダンテの場合では、戀人が神です。戀人に挨拶をされるのは、神に挨拶をされる事です。私のはもつと低い、ずつと低い地上の戀でした。
記者B　古い事なら好いでせう。この際、その方面の事を續き物にして書かして頂くと、うちの社長は喜びますがな。
主人　それはだめです。それは私自身にもいまだに分からないでゐる事ですから、話したところでとても人に分かる事ではありません。決して私は逃げるのでも、ごまかすのでもない。
記者A　では、それが動機だつた事は事實ですね。
主人　兎に角、その事から、私は戰ふといふ事の出來ない人間になつたのです。退いて守るといふ人間になりました。何か他の事を聞いて下さい。
記者B　どうも、併し、惜しい種だなあ。
記者C　その女性といふのは、お亡くなりになつた奥さんですか。
記者B　（Cに）　ばか。奥さんに失戀する奴があるか。
記者C　あるとも、あるともさ。ねえ、先生、ありますね。
主人　意味によつては、ないとも言へますまい。併し、私の場合はそれではありません。妻は無情ではありませんでした。
記者A　その不思議な戀愛問題といふのは、奥さんをお貰ひになる前の事でせう。
主人　さうです。さうです。だが、もうその話はよさうではありませんか。聞く事があるなら、他の事を聞いて下さい。
（間。）
記者C　ところでと。では、伺ひますが、先生は何で生活して入らつしやるのです。失禮ですが。
主人　さつき御覽になつたでせう。鷄を飼つて生活してゐます。
記者B　御自分でおやりになるのですか。
主人　自分でもやります。娘にも手傳はせます。書生にも手傳はせます。
記者C　學問の上での御收入は全くないのですか。
主人　時々外國から原稿料を貰ひます。でも、それは一年に一度か二度です。私は學問で金を取らうとは思ひません。私は卵屋としての外、社會との接觸を避けてゐるのです。避けてゐるのではない。私には世間で言ふ現實の

世界が幻影で、世間で言ふ幻影の世界が現實なのです。私は自分にとつての現實の世界に生きてゐるのです。唯それだけです。

記者C　又むづかしくなつて來ましたね。(他の記者達に)どうだい、諸君。あんまりお邪魔をしても何だから。

記者B　(Cに)一寸待つてくれ給へ。(主人に)お宅は大層變つた建築ですが、これは先生が御考案になつたのですか。

記者A　さう、さう。僕もそれを伺ひたいと思つてゐたのだ。

主人　私が考へて建てたのです。

記者A　ノアの箱舟といつたわけですか。舟か何かのやうでせう。

主人　さういふ寓意があるわけでもないのです。唯必要だけのものを必要な位置に置いたのです。

記者B　あの玄關の上に塔のやうに突き出してゐる處は何ですか。

主人　私の書齋です。そこの階子段から行けるやうになつてゐます。二階を自分の必要なだけの廣さにしたので、ひとりでに塔のやうになつたのです。

記者C　あすこから世間を見てゐるのですね。

主人　いや、あの部屋には息拔きの穴があるだけで、窓はありません。世間に對しては全く盲目な書齋です。

記者C　明かりを入れる窓もないのですか。

主人　ありません。晝でも蠟燭をつけるのです。

記者C　(Dに)君、フラッシを持つて來たか。

記者D　持つて來なかつた。

記者C　殘念だなあ。そこで寫眞がとらして貰へると好かつたんだが。

主人　寫眞をとるのですか。

記者C　どうか一つ。お孃さんも一緒に願ひたいのですが。

主人　(呼ぶ)島村、島村。

(島村、登場。)

主人　敏子はどうした。

島村　お歸りになりました。

主人　お歸りに。何處へ行つてゐたのだ。

島村　知りません。

主人　好いから、呼んで來い。

(島村、退場。)

(記者D、寫眞機を持つて、好い位置を探す。)

(敏子、島村、登場。)

敏子　お父さん、お歸りなさいまし。

(敏子、記者達に禮をする。)

(記者達も禮を返す。)

主人　(記者Dに)この儘で宜しいか。

記者D　宜しうございます。（敏子に）お孃さん、どうぞお父樣の側にお立ち遊ばして。

（敏子、父の側へ行く。）

主人　（島村に）お前もはひれ。

島村　僕は。

主人　はひれ、はひれ、（記者Cに）入れても好いのでせう。

記者C　どうぞ。

主人　（島村に）さあ、お出で。

（島村も主人の側に立つ。）

記者D　少し暗うございますからタイムでやります。はい。一、二、三。は、宜しうございます。

記者A　では、これで失禮いたします。

記者B　有難うございました。

記者C　失禮。お孃さん、さやうなら。

主人　寫眞が出來たら、一枚送つて下さい。

記者D　畏りました。直ぐお送りします。

（四人、退場。）

主人　（島村に）爲事着を持つて來てくれ。

島村　はい。

（島村、二階へ上がる。）

主人　敏子、何處へ行つてゐた。

敏子　お父さん、けふはおめでたうございます。

主人　有難う。お前どこへ行つてゐたのだ。

敏子　萬松軒まで夜のパンを取りに行つたのです。

主人　ああ、さうか。

（島村、階段の上に姿を現す。）

島村　ズボンもですか。

主人　上着だけで好い。

（島村、上着だけ持つて、降りて來る。）

（主人、上着を著換へる。）

（敏子、フロックコオトを始末する。）

敏子　お父さん。

敏子　うむ。

主人　どうして新聞記者などにお會ひになつたの。

主人　どうしてだか分からない。けふは誰にでも會ひたいやうな氣がするのだ。

島村　僕は何だか恐ろしくなりました。

主人　なぜ。

島村　先生が急に變つた事をなさるのが恐ろしいのです。

敏子　大使館で何か好い事でもあつたのですか。

主人　本國から來た金をくれたのだ。俺の研究を奬勵する意味で。たいした額ではない。島の世話を怠る事の出來る程の金ではない。

島村　先生、僕は今まで餘り極端に世間と隔絶した先生の生活を否定してゐました。少しは世間へお出になる方が好いと思つてゐました。併し、あの新聞記者がぞろぞろはひつて來たのを見た瞬間急に何だか恐ろしくなつて來ました。先生の急にそんな事をなさるのが、或破滅を前觸するやうに思はれました。

主人　大丈夫だ。大丈夫だ。俺は決してこの小さな世界を捨てはしない。世間に俺を誘惑し得るものは何もない。

島村　みんなが、ばらばらになるのではないでせうか。僕は恐ろしくてなりません。

主人　お前の感覺は鋭敏過ぎるのだ。大丈夫だ。大丈夫だ。

島村　先生、お願ひですから、けふはもう誰が訪ねて來ても、會はないで下さい。

主人　成程、俺はけふ、この二十年間、一度も觸れなかつた世間といふものに觸れた。併し、それはさつき四人の新聞記者に會つた事で、もう帳消になつてゐる。あれが何萬枚かの新聞になつて日本中の人に觸れるのだ。それでもう貸借なしだ。一度に義務を果したのだ。俺は一瞬間第一の世界に觸れただけで、又第二の世界へ歸るのだ。お前は鷄に餌をやれ。敏子は語學の復習をしろ。俺は書齋へ歸る。

（主人、二階へ上がりかける。）

（人の音なふ聲。）

（三人凝立する。）

（間。）

主人　（島村に）行つて見ろ。

（島村、退場。）

（間。）

（島村、登場。）

島村　（敏子を見て、それから主人に）谷村といふ方が見えました。

主人　谷村。男か、女か。

島村　男の方と女の方です。御夫婦でせう。

（間。）

島村　斷りませうか。

主人　（階段を降りる）いや、通せ。

島村　玄關からですか。

主人　さうだ。玄關から。

（島村、玄關の方へ行く。）

主人　敏子、暫くあつちへ行つてゐてくれ。

敏子　お父さん。

主人　何だ。

敏子　いゝえ。

（敏子、退場。）

（島村に案内されて、谷村夫婦登場。）

主人　島村、あつちへ行つてくれ。

（島村、退場。）

（間。）

谷村　お祝ひに來た。

主人　何の。

谷村　けふの名譽の。

主人　さうか。それは有難う。

（三人腰をかける。）

（間。）

谷村　暫くだつた。

主人　暫くだつた。

糸子　（口だけ動かす。）

谷村　よく會つてくれた。とても會つてはくれまいと思つて來たのだ。

主人　ほんとに會ふまいと思へば、來る筈がなかつたのだ。ことに依ると會ふだらうといふ豫想を持つて來たのだらう。

谷村　如何にもさうだ。けふを外してはだめだと思つたのだ。君はけふ世界的の名譽を得たさうだ。おめでたう。

主人　たいした事ではない。唯、外國から金を貰つたのだ。

谷村　實は僕も金を少し持つて來たのだが、受けてくれるか。

主人　何の爲に。

谷村　君の研究の爲に。不遠慮に、君の生活の爲にと言つても好い。

主人　受けても好い。だが、二十年も音信不通だつた君がどうして急にそんな氣になつたのだ。

谷村　改めて友達になつて貰ひに來たのだ。

主人　君は昔から友達だ。そして、ずつと今まで友達だ。

谷村　ほんとにさうか。

主人　ほんとにさうだ。僕は君に對して少しでも惡意を持つた事はない。

谷村　ほんとにさうか。

主人　ほんとにさうだ。

谷村　それを聞いて安心した。君の性質を知つてる僕が、それ以上の事を言ふのは、君の感情を傷つける事になるかも知れないが、實はけふは、（糸子を見る）妻に代つてあやまりに來たのだ。

主人　あやまりに。（糸子を見る）何をあやまりに。

谷村　二十年前の誤解を、妻は全く君を誤解してゐたのだ。

主人　それは分からない。人間が誤解だと思つても、屢それが正しい解釋である場合がある。人間の事は分からない。僕はそんな事を詫びられる覺えはない。

谷村　妻だけの事なら好い。僕と妻との關係だ。

主人　それは聞いたつて爲方がない。僕には永遠の謎だ。君自身にだつて、分かる筈はないのだ。

谷村　さう言はれると辛いよ。その辛さが僕を鞭うつて、僕を鐵面皮にして、ここへよこしたのだ。僕はこの二十年間、誰にも理解されない心苦しい生活をして來たのだ。どうかして、一度君の諒解を得なければ、死ぬにも死に切れないのだ。

主人　君は忙しい世間の渦の中に生きてゐるのだ。そんな事を考へてゐる暇はあるまい。僕でさへもう忘れてゐる事だ。

谷村　いや、それは違ふ。如何にも僕は忙しい生活をしてゐる。金錢の渦の中に巻き込まれてゐる。併し、青春時代に感じた事は魂の底にこびりついてゐて、容易に消えるものではない。僕と妻と顔を合す度に、一日だつて、あの當時の事を思ひ出さない日はない。

主人　それは氣の毒な事をした。僕は今が今まで、自分といふものが、君達二人の幸福の上にさす暗い影になつてゐようとは夢にも思はなかつた。これは僕の方が、あやまらなければならなさうだ。

谷村　さう言はれると、僕は愈辛い。君と君の細君との間のうまく行かなかつた事もその當時聞いて知つてゐた。細君の亡くなつたのを聞いた時、僕はもう堪らなくなつて家を飛び出したのだが、君の家の門口まで來て、たうとうはひれずに歸つてしまつたのだ。

主人　妻の問題は僕に罪がある。少しの愛の基礎もなしに結婚したのが悪かつたのだ。意志で愛さうとしたのだが、相手が意志だけでは滿足しなかつたのだ。無理のない事だ。僕は唯君達二人に一刻も早く安心がさせたいばかりに結婚したのだ。餘りに機械的な結婚だつた。手段に走り過ぎた結婚だつた。

谷村　それも聞いて知つてゐる。そして、今でも二人で感謝してゐる。

主人　僕のした事は失敗に終つたが、君達二人に對する僕の心持はそこにある。今でも依然としてそこにある。併し、當時の僕の心持には、不純なところがあつた。虚榮があつた。犠牲といふ假面をかぶつた反抗があつた。ほんとの、ほんとの愛ではなかつた。だから、自分の妻をも心から愛す事が出來なかつたのだ。神は妬み深い。神は僕のその不純な愛を責めてやまなかつた。神が妻を通して、僕を責め拔いたのだ。愚な僕はそれに氣がつかなかつた。僕は自分を犠牲にしないで、妻を犠牲にしてしまつたのだ。僕はたうとう神を殺してしまつたのだ。この罪は永遠に許されまい。僕は地獄の第七獄に堕ちるの

だ。

谷村　それもこれも、僕等二人の爲だ。何より苦しい事は、（糸子を見る）この人と君との關係を忠告したのが僕だ。君にこの人を思ひ切らせたのが僕なのだ。

主人　だが、それは君が僕の親友として、忠告してくれたのだ。實際僕の爲によくない事だと思つたから、忠告してくれたのだ。僕は少しも自分を愛してゐない女の爲に、命をかけてまで悶えてゐたのだ。それを君がはつきり僕に見せてくれたのだ。戀愛の鞭は痛い。眞實をまともに見せられれば目が眩む。併し君の愛に滿ちたメスは、終に醜惡な僕の腫物を切り捨ててくれた。僕は涙を流して「諦める」と言つた。あの涙に一點不純な分子はなかつた。あの涙は恐らく僕の一生の内にもう二度と見る事の出來ない淸い涙だつた。

谷村　それもさうだ。僕もあの時は、君を思ふ以外に何もなかつたのだ。唯どうかして君が救ひたかつたのだ。君を亡びに會はせたくなかつたのだ。第一僕は、（糸子を見る）この人をまだ知らなかつたのだ。

主人　深祕はそれからだ。

谷村　この人を知つたのは、君が僕の忠告を入れてくれてから、その跡始末をする時だつた。僕は幾度かこの人と會つてゐる内に、どつちから近づくともなく近づいてしまつたのだ。僕にもそれは分からなかつた。たつた今自分の親友を諦めさせた女に、今度は自分が近づいて行く。そんな事が、僕の性格として、唯普通に出來るわけがないのだ。

主人　人間の事は人間の力ではどうもならないのだ。

谷村　全く天意だ。少なくと天意だと僕は思つた。君に對して愛のない女、それは君にとつて他人だとも思つた。そして、たうとう一緒になつた。この氣持は、きつと君には分かる。いつか分からずには置くまいと思つた。

主人　深祕だ。深祕だ。

谷村　ところが、結婚後三ヶ月程立つた時、この人は始めて眞實を打ち明けた。（間）この人はやつぱり君を愛してゐたのだ。（間）そして、あの當時の君の狂態にあやまられて、君が自分を愛してゐないと思つたのだ。（間）まるで反對だつた。

主人　（沈默）

谷村　しかし、この人は僕にその事を告白して、僕に自分の代りにあやまつて來てくれと言ふのだ。妻にも罪はない。勿論、君にも罪はない。恐らく僕にも罪はあるまい。總てが間違ひだ。みんな、みんな間違へてゐたのだ。だが、僕は苦しんだ。この二十年間苦しみ通しに苦しんだ。どうしても君の所へ來る事が出來なかつた。

主人　それは氣の毒だつた。ほんとに氣の毒だつた。君は

「狂態」といふ詞を使つたが、あの當時の僕は全く氣違ひだつた。あの氣違ひが、總てを混亂に陷れたのだ。併し、もう總ては過ぎ去つた。僕は案外今落ちついてゐる。平和だ。寂しいとも思はない。娘も僕を愛してくれてゐる。今ゐた青年も、僕を父のやうに慕つてくれてゐる。僕には世界がある。鳥小屋がある。書齋がある。君は餘り過去を重んじ過ぎた。

谷村　有難う。僕はやつと重荷をおろしたやうな氣持がする。僕は君に面罵されるつもりで來たのだ。命を賭けても好いと思つて來たのだ。ああ、やつと落ちついた。（糸子を見る）おれ一人でしやべつてしまつた。お前もう言ふ事はないか。

（糸子、頭を振る。）

谷村　（主人に）では、これにも一言許すと言つてやつてくれ給へ。

主人　（糸子に）許すも許さんもありません。總ては神の意志です。

谷村　有難う。有難う。ところで、お孃さんに會はせてくれないか。

主人　會はせよう（呼ぶ）島村、島村。

（島村、登場。）

主人　お孃さんを呼んで來い。

（島村、默つて立つてゐる。）

主人　何をぼんやりしてゐるのだ。直ぐ呼んで來い。

島村　はい。

（島村、退場。）

谷村　あれだね。あれはどういふ人の子だ。

主人　孤兒だ。父親が死んでから生れた子だ。生れると直ぐ母親が自殺したのだ。

谷村　どうして。

主人　再婚を强ひられたからだ。

谷村　可哀さうに。

（敏子、登場。）

谷村　ああ、お孃さんですか。敏子さんですね。私は父さんの古い友達、谷村です。（糸子を紹介して）これは妻です。

（敏子、默禮する。）

（谷村、糸子を見る。）

（糸子、頷く。）

谷村　（主人に）ところで、山中君。甚だ突然だが、再び昔の友誼を取戻すしるしに、このお孃さんを僕の家へ貰ひたいと思ふが、どうだ。

主人　（間）これを。

谷村　（間）實は理由なしではないのだ。僕等夫婦の間に

一人息子がある。大學へ行つてゐるのだ。それの嫁として貰ひたいのだ。

主人　だが、これはまだ。

谷村　天意は測るべからずだ。實を言ふと、僕の息子と君のお嬢さんとの間に、戀が成り立つてゐるのだ。二人は親と親との關係を全く知らずに愛し合つたのだ。

主人　いつ。どこで。

谷村　學校へ通ふ道で。

主人　え。敏子。それはほんとか。

敏子　ほんとです。

主人　ほんとか。

敏子　ええ。

主人　さうか。

谷村　（主人に）どうだ、君。二人を幸福にしてやらうぢやないか。僕等のやうな間違ひの起らない内に。君が僕等に惡感を持つてゐない證據にもなるのだから。

主人　（間）娘に聞いてくれ給へ。

谷村　敏子さん、來てくれますか。

敏子　ええ。

谷村　厭なら厭と言ふのですよ。

敏子　參ります。參ります。

谷村　どうだい、山中君。

主人　總ては娘の意志だ。（間）僕に異存はない。

谷村　ああ、それでやつと安心した。君の温い心も、これで本當に分かつた。感謝する。

主人　いつから連れて行くのだ。

谷村　今からでも好い。だが、したくもあらう。いづれ僕が又迎ひに來る。

（主人、默つてゐる。）

谷村　では、けふはこれで歸る。

（糸子、谷村の顏を見る。）

谷村　おう、さうだ。これを。

（谷村、懷から金包を出す。）

（主人、その方を見ない。）

敏子　（主人に）お父さん、ステエションまでお送りしてもよくつて。

（主人、默つて頷く。）

敏子　では、一寸お待ち遊ばして。

（敏子、退場。）

主人　（谷村に）過去の事は決して娘に言つてくれ給ふなよ。

谷村　勿論の事だ。

主人　世の中の事はどうなるか分からないものだ。僕の第六感も餘程怪しいものだ。（低く笑ふ）

（倣子、登場。）

倣子　では。

谷村　では、山中君。

主人　さやうなら。

（糸子、主人に默禮する。）

（三人、去る。）

（島村、ぼんやりとはひつて來る。）

主人　倣子は今の人のところへ行くことになつた。

島村　聞きました。

主人　だが、お前はやつぱりここにゐてくれるだらうな。

島村　僕ももう暇を頂かうと思ひます。

主人　どうして。

島村　お孃さんがお出でにならないでは。

主人　お前は倣子を愛してゐたのだらう。

島村　はい。

主人　だが、倣子はお前を愛してゐなかつたのだ。

島村　それは分かりません。

主人　成程、それは分からない。併し、今はどうする事も出來ないのだ。

島村　ですから、僕はここを離れたいのです。

主人　ここを出て、何處へ行くのだ。

島村　それも分りません。僕は唯世間へ出て行かうと思ひます。先生の世界は餘りに脆いものでした。世間に一寸觸れると、直ぐに毀れてしまひました。先生はこれでもまだ、先生の世界を幸福だと思つてゐるのですか。この卵の殼のやうに脆い世界を。先生の世界も、もう絶望ですね。

主人　いや、俺はやつと俺の行きつく處へ來たのだ。（側にある書物を取り上げる）（譯しながら讀む）ここに露西亞の人の書いた詞がある。「絶望の人生に於ける崇高な瞬間だ。そこへ來るまでは、吾々はまだ何かに助けられてゐるのだ。吾々は今始めて吾々自身になつた。前には、吾々は人間や人間の律と關係があつた。今、吾々と關係のあるのは、もう永遠だけだ。吾々は律といふものと完全に手を切る事が出來たのだ。」

島村　それは負け惜しみです。（行きかける）

主人　これからだ。俺の本當の生活はこれからだ。

（主人、燭臺に火をともす。）

（島村、默つて、行つてしまふ。）

（主人、二階へ上がる。）

（舞臺暫く空虛。）

（鷄二三羽、こつこつと音をさせてはひつて來る。）

――幕――

吉田御殿（一幕）

人物

千姫
若い美しい町人
阿部伊勢守成重と稱する若い大名
武士二人
宮島
花岡
沖津
松阪　（以上四人）美しい侍女
踊り子の一群
他に美しい侍女數名

時代

不明

場所

或城内の物見のある華美豪奢な部屋

音樂。

物見の窓の前に、脇息にもたれ、膝を崩して、年三十を過ぎた千姫が、後向に坐つてゐる。

若い美しい侍女、花岡、宮島、沖津、松阪などが、姫の側に侍つてゐる。

姫も侍女達も、物見の窓から、ぢつと城下を見詰めてゐる。部屋の中央に大きな卓が置いてあつて、その上に洋風のコップと酒の瓶が乘つてゐる。その周圍にも、四五人の若く美しい侍女が控へてゐる。

下手の襖の前には、筋骨逞しい武士が二人、端坐してゐる。

舞臺暫く靜寂。總ての人物、化石したやうに動かない。

突然、侍女花岡が動く。宮島に囁く。宮島、沖津に囁く。沖津、松阪に囁く。

千姫はまだ眠つてゐるやうにぢつとしてゐる。

松阪、千姫に囁く。千姫、急に身を起して、ぢつと城下を見る。と、素早く脇息の下から薄絹を出して、三度それを高く振る。それから、正面へ向き直り、襖の前に端坐せる武士二人に目まぜにて或命令を傳へる。

武士達、直ぐ襖を排して、出て行く。

千姫、裲を着換へ、手輕く化粧をし直す。

やがて、町人風の若い美しい男、黒い布で目を縛られ拔刀の武士二人に護られて登場。音樂、やむ。

千姫、ぢつとそれに目をつける。と、躍りかかつて、

目隠しをとる。

千姫、男の美しさに打たれる。男も千姫の美しさに恍惚とする。

踊り子の一群が現はれて、嬌めかしい踊を踊る。音樂。

その間に、千姫、若い男を別室へ拉し去る。

踊り子、踊りながら去る。

武士二人、卓の側に坐つてゐた侍女達も去る。

宮島、花岡、沖津、松阪、殘る。

宮島　けふも好い獲物がかかりましたな。

沖津　ほんに、この頃は、いつも美しいのが參りますな。

花岡　はじめは恐れて人の近寄らなかつた城下も、この頃は美男の市を見るやうでございます。

松阪　われから望んで參るやうになつたのでございます。命をとられるのを承知で參るやうになつたのでございます。

宮島　ほんに、命にも換へ難いしあはせでございますものな。

沖津　妾も來世は美しい男に生れて、こんな目に會ひたいものだと思ひます。（笑ふ）

松阪　冗談は置いて、あの、この頃、毎日のやうに、ちらりと姿を見せては、直ぐと逃げて行つてしまふ若い侍は、何者でございませうな。

宮島　ほんに氣味の惡い侍でございます。探りの者かとも思ひますが、何を探らうと、何を見窮めようと、お姫様をどうすることも出來はいたしませぬ。

沖津　でも、美しい男のやうではございませんか。

花岡　美しい段か。今まであのやうに美しい男を見たことはございません。

沖津　お姫様も何度布をお振りになつたか分かりませんが、いつも捕まへに參る間に姿を隱してしまふのでございます。

花岡　來たさは來たし、恐さは恐しといふところでもございませうか。

松阪　まあ、そんなところでございませう。

宮島　なんにしても、氣味の惡い侍、早く捕へてお姫様の犠牲（いけにへ）にしてやりたいものでございます。

（隣の部屋に衣摺れの音がする。）

松阪　しつ。

沖津　しつ。

（若き男、青白い額をして、魔につかれたやうに、ふらふらとはひつて來る。）

（追ふやうにして、千姫、他の侍女達、武士二人もはひつて來る。）

姫　坐りや。（卓の前を指す）

（若い男、卓の前に坐る。）

（姬、自分でコップへ酒をつぎ、それを男の前へ出す。）

姬　飲みや。

男　（姬の顏をぢつと見る）

姬　（平氣で）毒ぢや。毒酒ぢや。

男　（悩ましげに笑ひながら、コップを手にとる。）

姬　飲むか。

男　（頷く）

姬　毒酒ぢやぞ。

男　（大きく頷く）

姬　嬉しいか。

男　（頷く）

姬　飲みや。

男　（コップを仰ぐ）

（侍女達、ぢつと若い男を見詰める。）

（男、直ぐに苦しみ出す。やがて、死に斃れる。）

（侍女達も武士達も、少しも動かされない。）

姬　それ。（武士二人に合圖する）

（武士二人、直ぐ立つて來て、若き男の死骸を下手奥へ運ぶ。）

（侍女の一人。隱し戸を明ける。死骸、隱し戸から下へ投げ込まれる——遠く水の音。）

（姬はぢつと立つて、それを見てゐたが、やがて又元の物見の窓へ歸る。）

（總て幕明きの舞臺と同じになる。）

（千姬と四人の侍女は物見の窓に、他の侍女は卓の側に、二人の武士は襖の前に。總て化石したやうに動かない。）

（舞臺暫く靜寂。幕明きと同じ音樂。）

（やがて、侍女花岡が身を動かす。宮島に囁く。宮島、沖津に囁く。沖津、松阪に囁く。）

（千姬はまだぢつとしてゐる。）

（松阪、千姬に囁く。千姬、急に身を起して、ぢつと城下を見る。直ぐ合圖の布を三度振る。それから、正面へ向き直る。）

姬　（二人の武士に）急いで。

（武士二人、走り去る。）

姬　松阪、いつもの侍ぢや。また逃げようも知れぬ。目を放すな。

松阪　はつ。（一人、物見の窓よりぢつと外を見る。）

（姬、補を着換へ、化粧をし直す間に、時々松阪に聲をかける。）

姬　松阪、どうぢや。逃げたか。

松阪　（向うを見た儘）いえ、逃げはいたしませぬ。

姫　捕手の者はもう參つたか。

松阪　はい、もう參りました。

姫　それでも逃げぬか。

松阪　それでも逃げませぬ。けふはいつもと違つて、ぢつと立つた儘、捕手を待つ樣子でござりまする……あ、捕へられました……素直にお城の方へ參りまする。

姫　參るか。

（と、言つたきり、あとは物を言はず。默つて化粧を續ける。）

（化粧終る。）

（或若い美しい侍、目隱しをされ、拔刀の武士に護られて、はひつて來る。）

（姫、ぢつと侍を見る。）

（と、駈け寄つて、目隱しをとつて捨てる。）

（姫、嬌めかしく、ぢつと男の顏を見る。）

（男は腹立たしげに、姫を睨みつける。）

（踊り子の一群が現れて、舞ふ。音樂。）

（千姫、若き侍の手をとらうとする。）

（侍、姫の手を振り拂ひ、姫を下へ引き据ゑる。）

（踊り子、驚いて逃げ去る。）

（二人の武士、拔刀の儘、若き侍を引つ立てようとする。）

武士の一人　おのれ、狼藉者。

若い侍　狼藉者とはその方達のことだ。おれは阿部伊勢守成重だ。すさりをらう。

（二人の武士、恐れてすさる。）

姫　伊勢守であらうが、何の守であらうが、恐れはせぬ。なんで身を引き据ゑた。

成重　申し上げたいことがある。家の爲、國の爲、人の爲に申し上げたいことがある。

姫　一旦この城へはひつたら命はないぞ。

成重　それも承知ぢや。命を捨てても申し上げたいことがある。

姫　諫言なら、聞かぬ。

成重　諫言ではない。諫言などをしたところで、聞く姫とは思はぬ——併し、人拂ひが願ひたい。

姫　（一同に）皆、遠慮せい。

（一同、危ぶみながら去る。）

（姫と成重と唯二人殘る。）

姫　もう聞く者はない。言ひたいことは何ぢや。

成重　お命が申し受けたい。

姫　妾の命か。

成重　さうぢや。

姫　誰が妾の命を望むのぢや。そちか。それとも他の者か。

成重　頼まれて參つたのではない。拙者自身が望むのぢや。
姫　何の爲に。
成重　家の爲、國の爲、人の爲に。
姫　（笑ふ）ほ、ほ、ほ。もうその詞は聞き飽きた。妾は八つの時から、その詞一つで、この身を道具のやうに扱はれた。
成重　それとこれとは心が違ふ。成程、大御所はあなたを政略の道具に使はれたかも知れぬ。だが、それはやむを得ぬことぢや。あなたが若し道具なら、大阪二度の陣に命を捨てた武士達も道具ぢや。一同が優れた武將の道具となつてこそ、天下は統一せられるのぢや。あなたの場合は、それとは違ふ。あなたは唯自分の欲の爲に、罪もないものを犧牲にするのぢや。それは國の爲にもならなければ、天下の爲にもなりはせぬ。唯淫蕩極まるあなたの肉慾を滿足させるだけのことぢや。
姫　いや、それは違ふ。如何に優れた武將でも、人間を道具に使ふことは出來ぬ。如何に國の爲天下の爲でも、人間を道具に使ふことは出來ぬ。人間は飽くまでも人間ぢや。おのれの意志を殺して命のない道具となることは出來ぬ。人間を道具扱ひにして得た天下などは三代と續くものではない。
成重　それでは、我欲の爲に罪のない者を犧牲にするあなたはどうぢや。
姫　勿論、妾は自滅を覺悟してゐる。けふまで生きられたのを不思議に思つてゐる位ぢや。妾は生れるから命ある人間としては取扱はれてゐない。豐臣家へ嫁にやられたのが八つぢや。夫の秀頼が十歳ぢや。大阪の城の落ちた時、夫の年は十六で、妾の年は十四ぢや。嫁も夫婦もあつたものではない。しかも、その僅十四の妾が、あの激戰の最中に、母と夫との命乞の道具として、德川の陣へ送られる。それを途中で會つた坂崎といふ男が、背に負うて無事に茶臼山へ送り屆けたといふばかりで、妾を見も知らぬ公卿へ嫁にやらうとする。妾ももうその時は十八で、戀しい男も出來てゐた。それへ嫁がうとすると、坂崎が邪魔をする。揚句の果はお爺様にまで楯を突いて、たう〳〵自滅してしまふ。妾はやつと自分の好んだ本多家へ嫁いで、はじめて人間らしくなつたかと思ふと、今度はころりと夫が死んでしまふ。無理強ひに佛門へ入れられ、名も天樹院とつけられて、この城へ押籠同然の身の上となつてしまつた。だが妾は髮も切らぬ。經も讀まぬ。妾ははじめから命のない人間だつた。僅二三年は命を得たが、もうその命も永遠に奪はれてしまつた。妾は世間に奪はれた命を、この城の中で、自分の世界だけで生かして行かうと言ふのぢや。

成重　（多少動かされて）　あなたの境遇には同情する。自分だけで自分を生かして行かうといふ心持も理解出來る。併し、その爲に、なぜ罪のない者を犧牲にしなければならないのぢや。をととひも許嫁のある美しい男が、この城へはひつたきり歸て來ぬ爲に、その許嫁は自害して死んでしまつた。きのふこの城で命を終へた若侍の母は氣が違つてしまつた。けふも、ついさつき町人風の若者が、この城へ誘ひ入れられたきり消息がない。わたしはこの七日程、毎日城下へ來て、何もかもよく見て置いた。なぜ、そんな殘酷なことをなさるのぢや。自分の命が得られれば、人の命は失つても好いのか。道具になるのを嫌ふあなたが、なぜ人を道具扱ひになさるのぢや。

姫　（笑ふ）　そちはまだ若い。大家に生れて、大勢の上に立つても、そちはまだ人間といふものを知らぬと見える。妾は誰も道具扱ひにしたことはない。妾は誰も犧牲にはしない。この城へはひつて來る若い男達は、みんな喜んで命を捨てるのぢや。われから進んで死んで行くのぢや。

成重　（驚く）　なに。

姫　（卓上の酒の瓶を指さす）　これが命をとる毒酒ぢや。この城へ來る若い男は、みんな喜んでこれを飲むのぢや。妾は一度も強ひたことはない。

成重　毒と知つて飲むのか。

姫　さうぢや。妾ははつきり毒だと言ふのぢや。

成重　それは分からぬ。

姫　それだから、そちは人間といふものを知らぬと言ふのぢや。ようく聞きや。妾は將軍の娘ぢや。姿かたちも美しい。一旦この城へはひつた男は、幸福の絶頂を窮めるのぢや。もう一生涯にこれ程の幸福はないと思ふのぢや。これからの生涯をみじめに貧しく送るよりは、いつそたつた今死んだ方がしあはせだと思ふのぢや。

成重　（聲を上げて笑ふ）　ばかな。そ、そんなことがあつて堪るものか。

姫　いや、さうぢや。

成重　いや、そんなことはない。

姫　そちも、一旦この城へはひつた以上は、どうせ命のないものぢや――試して見たらどうぢや。

成重　（平氣で）　うむ、試して見よう。したが、あなたの言ふことが若し嘘だつたら、お命は必ず申し受くるぞ。

姫　言ふまでもないことぢや。（立つ）　さあ、來や。

（成重、立つ。）

（姫、先きへ立つてはひる。成重續いてはひる。）

（宮島、沖津、花岡、松阪、部屋の方々から現れる。）

松阪　たうとう負けをつた。

沖津　いえ、いえ、油斷はなりませぬ。

花岡　でも、もうあのお部屋へはひつたからは、こちらのものでございます。

宮島　でも、餘程思ひ詰めてゐるやうでございますから、何をいたすか知れませぬ。

沖津　警護の者を呼びませうか。

花岡　それが宜しうございます。

沖津　（手を打つ）

（武士二人、現れる。）

（花岡、その側へ寄りて囁く。）

（武士達、緊張して、大刀を側へ引き寄せる。）

（侍女達も、小刀の柄へ手をかける。）

（一同、身構へして、きつと下手へ目を注ぐ。）

（やがて、下手の襖から、成重が顏色蒼白、魔につかれたやうになつて出て來る。）

（千姫、無表情に、そのあとから附いて來る。）

（二人、卓の前に坐る。）

姫　（默つて酒をコップに注ぐ）飲むか。

成重　（頷く）

姫　毒ぢやぞ。毒酒ぢやぞ。

成重　（大きく頷く）

姫　飲みや。

成重　（コップに手をかけ、なかば酒を仰ぐ）

姫　待て。（成重の手を抑へ、コップを奪ひとつて、あとの半分を一息に飲み干す）

（武士、侍女達、驚愕す。）

成重　や、あなたも飲むのか。

姫　そなたのやうな美しい男、そなたのやうな大膽な男、そなたのやうな頑な男は、この世に二人とあるまい……けふは妾が幸福の絶頂を窮めた……妾の命は完全に取返された……二人で永遠に幸福の道を歩かう。

成重　かたじけない。

（成重、姫の手をとる。）

（姫、がつくりとなる。成重、その上へ斃れ伏す。）

（武士、侍女達、目を伏せる。）

（音樂）

――幕――

吉利支丹信長（一幕）

人物
織田信長
朝山日乘
柴田勝家
丹羽五郎左衞門
木下藤吉郎
和田伊賀守惟政
ルイス・フロイス
ロレンソ了西
黒人
近侍數名
土工石工木匠大勢

時代
永祿十二年の春

舞臺
造營中の室町御所。土の山。石の堆積。
土工石工木匠などの頻繁に往來する中へ小さい陣所を構へて、信長自身で工事を監督してゐる。造營顧問の僧朝山日乘、折疊みの机の上に繪圖をひろげてゐる。近侍數名。中に一人、體軀の偉大な黒人、半裸體で、腕を組み、直立してゐる。
信長は赤い裝束に虎の皮の行縢を著け、拔身の刀を提げて、人夫を急き立ててゐる。

信長　早く、早く。怠けると斬つてしまふぞ。（白刃をひらめかす）
（人夫達、目まぐるしいやうに往つたり來たりする。あまり急ぐので、時々轉ぶ者がある。）
信長　ばか。その位のものを擔いで轉ぶ奴があるものか。早くせんか、早く。ぐづぐづしてると斬つてしまふぞ。
（又白刃がひらめく。轉んだ人夫、慌てて起き上がつて、逃げるやうに、土を運び去る。）
信長　早く、早く。急いで、急いで。
（車に石の佛像や墓石らしいものを澤山に積み載せて引いて來る者がある。車の後押しをして來るのは柴田勝家である。）
信長　おう勝家か。御苦勞、御苦勞。その石はどこから取つて來た。
勝家（汗を拭きながら）洛外の小さな寺で見つけて參りました。寺の名は忘れましたが、叡山の末寺です。

信長　構はん、構はん。日蓮宗以外の寺なら、どこでも構はん。日蓮宗の寺だつて構はんのだが、今のところでは、將軍も本國寺の厄介になつてゐるし、おれも妙覺寺の居候だから、當分は遠慮してやらう。

日乘　（立つて來る）當分ですか。

信長　うむ、當分だ。

日乘　わたしの宗旨の寺だけは、どうか、いつまでも手をつけずに置いて下さい。

信長　石が足りれば手はつけんが、足りなければやむを得ん。或は妙覺寺にも本國寺にも手を下すかも知れん。

日乘　それは亂暴です。日蓮宗の僧侶たるわたくしがお側にをります限りは――

信長　貴樣、それでも坊主のつもりか。法華經一つ滿足に講義の出來ぬ貴樣に、坊主だと言ふ資格はない。どこでいつ覺えたか知れんが、お前の得意なのは有職故實だ。お前はこの造營の顧問としておれの側にゐるのだ。坊主としてゐるのではない。默つて繪圖でも見てをれ。

（日乘、言ひ破られて、元の席に著く。柴田、笑ふ。）

信長　（車の方を見て）大分佛像があるな。

勝家　小さな寺でしたが、不思議と石の大きいのがありましたから取つて參りました。墓はどうかと思ひましたが、これも大きいのだけ掘りおこして參りました。

信長　墓でも何んでも構はん。倒つてしまへば唯の石だ。――（笑つて）併し、坊主が怒つたらうな。

勝家　怒りはしませんが、泣き出しました。造營の爲なら金を差し出しても、墓石だけは助けて貰ひたいのだが、その金がないと言つて泣くのです。

信長　（笑ふ）お前の面だましひを見たら、とても反抗は出來まい。好い氣味だ。本山がさんざん京都を荒した天罰だ。（ふと氣がついて）さうだ。早くそれをあちらへ持つて行つて石屋に渡してくれ。大分工事が遲れてゐるので、急がなければならん――何にしても御苦勞だつた。又あとをどんどん賴むぞ。

勝家　畏りました。（車を押してはひる）

信長　（白刃を振る）さあ、早く、早く。何をぼんやり見てるんだ。早くせんか、早く。

（暫く又、人夫達が頻繁に往來する。日乘、繪圖を持つて、信長に近づく。）

日乘　この廣間の襖ですがな。

信長　うむ。

日乘　とても作らしてゐる暇はありませんし、どうしてもここは繪襖で行きたいので、相當に金もかかると思ひますが。

信長　どこかの寺に手頃のものはないか。

日乘　奈良にあると思ひます。
信長　寺を知つてゐるか。
日乘　知つて居ります。
信長　では、直ぐに誰か遣つて、奪つて來させるが好い。
日乘　どなたに頼みませう。
信長　強い奴でなければいかん。佐久間がちやうど手明きだ。佐久間に頼むが好い。
日乘　宜しうございます。
（日乘、近侍一人に耳語する。その近侍、去る。日乘又もとの席に戻る。）
（木下藤吉郎、悠暢な裝をして、出て來る。）
信長　おい、おい。藤吉郎。
藤吉郎　（わざと驚いたやうに信長の顏を見る）
信長　なんだ、その裝は。手傳はんのか。勝家などは車の後押しまでしてゐるぞ。
藤吉郎　わたしは力業はだめです。柴田は外に能のない男ですから爲方がありません。
信長　では、お前は手傳はんのか。
藤吉郎　どういたしまして。この通りです。（日乘の前の机の上に小判を山のやうに積む）
信長　（顏を崩して）それはどうしたのだ。
藤吉郎　寄附金です。
信長　お前が寄附するのか。
藤吉郎　どういたしまして。みんな人の金です。（自分の脣を指して）みんな、この辯舌一つで召し上げて來たのです。
信長　また堺の商人を嚇したのか。
藤吉郎　もう堺は絞り盡してしまひました。今度は洛中です。商人ばかりではありません。金のありさうな寺を大分いぢめてやりました。柴田のやうに貧乏寺を嚇かして、ごろた石を擔いで來るよりは、この方が餘つ程役に立つだらうと思ひます。
信長　まあ自慢はあとで聞かう。兎に角御苦勞だつた。又あとを頼むぞ。
藤吉郎　まだ入るのですか。
信長　金はいくらでも入る。
藤吉郎　では、ぶらぶら參りませう。
信長　ぶらぶらなどと言はずに、早く行つて來てくれ。
藤吉郎　かういふことはさう性急に行くものではありません。（わざとゆつくりゆつくりと出て行く）
信長　（後を見送つて）皮肉な奴だ。だが、兎に角、金の來たのは有難い。
（信長、日乘の側に寄つて、金の使途について小聲に相談する。）

（丹羽五郎左衛門、人夫二三人と土を運んで來る。信長、それに目をつけ、日乘の側を離れる。）

信長　五郎左、五郎左。

丹羽　はい。（立留る）

信長　造營中に喧嘩をしては困るな。

丹羽　面目次第もございません。併し、もうきのふ木下の仲裁で仲直りをいたしました。

信長　淺井はおれの親類だ。何事も一刀兩斷がおれの主義だが、相手が親戚だけに、おれも手を下しやうがなかつた。あんなことで工事が遲れたら、おれの計畫も悉く崩れてしまふではないか。

丹羽　それはよく存じてゐますが、備前樣のなされ方があんまりひどいと思つたからです。佐々木征伐の時でも援兵一つお遣はしにならないで、謂はば日和見をなすつて入らしたのです。それが、閣下の御威光で佐々木も三好も退散して、將軍の御入洛となると、のめのめと味方面をして御造營のお手傳ひをなさるばかりか、平氣で閣下の贈物をお受けになるのです。わたしは、あの江州者のきたない根性が氣に入らないのです。

信長　分かつた。分かつた。理窟は如何にもさうだ。併し、今はそんなことに拘泥してゐる場合ではない。將軍も本國寺のやうなところに置いたら、いつ何時またあの三好の殘黨に襲はれないとも限らない。一刻も早くこの造營を濟まして、將軍をここへ移さなければならん。そのあとには、また皇居の修理といふことも控へてゐる。その次が又安土の築城だ。今の場合に、そんな過去の問題を論議したところで、それが何になる。江州者でも犬侍でも、利用出來るだけ利用するのが目下の急務だ。濟んだことは濟んだことだ。大事なのは目前のことだ。

丹羽　分かりました。閣下の度量の大きいのには敬服の外はございません。

信長　度量の問題ではない。おれは唯益もないことに苦勞をして、眼前の爲事を怠るのが嫌ひなのだ。

丹羽　分かりました、分かりました。もうわたくしもあのことは忘れませう。

信長　さうだ。目前のことだけに勉めてくれればよいのだ。

丹羽　分かりました、分かりました。（と言ひながら、人夫達と一緒に土を擔がうとする。倒れる）

信長　（笑ふ）五郎左、貴樣は感情家だな。口ではさう言つても、まだなかなか忘れられまい。（黑人に向つて）おい。

（黑人、近づく、信長、手眞似で土を運べと命ずる。黑人、一人で輕々と土を擔ひ去る。丹羽と人夫達、呆れながら後を追ふ。）

信長　（日乘に近づく）　どうだ、日乘。お前は始終惡く言ふが、あの黑んぼでも、なかなか役に立つではないか。

日乘　役に立つと言つたところで、力業だけのことではありませんか。そんなら人夫もおんなじです。わたしは、あんな素性の分からない、バテレンの贈物などは大嫌ひです。

信長　いや、おれはバテレンのくれたもので、あれが一番氣に入つた。實に可愛い奴だ。それに、あの皮膚の色のどこからどこまでも黑いのが面白い。おれは初め何か黑いものを塗つてゐるのだと思つたが、裸にして湯に入れて見ても落ちないので感服した――實際不思議だ。

（黑人、歸つて來て、元のところに立つ。）

信長　見ろ。あの目を。皮膚の色が黑いせゐか、あの目の色の澄んでゐることはどうだ。まるで空か海を見るやうだ――それに、あの脣の赤いこと。まるで花のやうだ、火のやうだ。

日乘　いくらお褒めになつても、わたしは嫌ひです。一體わたしはキリシタンといふものが嫌ひなのです。あれは大山師です。さもなければ、日本を窺ふ國賊です。

信長　いや、國賊は寧ろ叡山の坊主だ。王城鎭護などと稱しながら、あの破戒無慚な行はどうだ。

日乘　叡山の惡僧は論外です。併し、それにも增して危險なのはキリシタンです。

（前に去つた近侍の一人が、急いで出て來る。）

近侍　和田伊賀守樣がフロイスと申すバテレンを連れて、お寺の方へお目にかかりに參つたさうですが、如何いたしませう。

信長　さうか。禮に來たのだらう。宜しい。ここで會ふから、ここへ來るやうに言つてくれ。

近侍　實はもうこちらへ參る時分ださうでございます――兎に角伺つて見ると言ふことで。

信長　さうか。それは氣が利いてゐる――來たら、直ぐここへ通すやうに言へ。

近侍　はい。（去る）

日乘　（暫く默つてゐたが、不愉快さうに）又あんな奴にお會ひになるのですか。

信長　會ふ。折角來たものだから會つてやる。きつとおれが布教を許した禮にやつて來たのだ。

日乘　一體、なぜ閣下があんなものの布教をお許しになつたのだか、それがわたしには分かりません。

信長　おれは又どうしてお前がそんなにキリシタンを憎むのだか、その理由が分からん。

日乘　理由などはありません。わたしは嫌ひなのです。異國人といふものが嫌ひなのです。日本には日本の宗教が

あります。異國の宗教を信ずることは、異國に負けることです。

信長　ばか。そんな小さい量見で世界が征服出來るか。おれはこの小さな島國だけを目的にしてゐるのではない。唐にも天竺にも葡萄牙にも國威を輝かさうとしてるのだ。異國人に布教を許すことは異國人を威服させることだ。負けるのではない。勝つのだ。お前はバテレンがどんなにおれに對して恭順であるか、見たことがないだらう。まあ、今にフロイスが來るから、その時よく見るが好い。

日乘　いや、それは上邊だけの恭順です。腹の中では何を考へてゐるか分かりません。あいつらは何か外に目的があつて、日本へやつて來たのです。

信長　そんなならそれで、その時の處置がある。あんな力のない痩法師を恐れる必要はどこにもない――それに、品行なども山法師などとは比較にならん。第一、說教の爲方が大きくて面白い。彼等は先づ天地創造の神を說くのだ。その神がデウスだ。デウスはインビニイトと言つて初もなく終もない。スピリツアルスタンシヤと言つて、色も形もない實體だ。ヲムニボテンと言つて、如何なることにも適合する。サゼエンチイシモと言つて、最上の智慧の泉だ。ジエスイモと言つて、大慈法の根源だ。ミゼリカウルデイシモと言つて、大慈大悲の源だ。然るに日本で言ふ神や佛はみんな人間だから、到底これだけの德は持つてゐない。第一生きたり死んだりするものに天地が作れる道理はない。と、かう言ふのだ。如何にも規模が大きいではないか。

日乘　（笑ふ）　よくもそんな寢言のやうなことをお覺えになつたものですな。（蔑むやうに）　では、閣下はそんなことをお信じになるのですか。信仰があつて布教をお許しになつたのですか。

信長　ばか。誰が信ずるものか。おれは唯キリシタンの說教が、小さいところにこせこせしてゐないで、規模の大きなところが愉快なのだ――おれは第一、キリシタンの坊主でも、ほんとにそんなことを信じて言つてるのかどうか疑つてゐるのだ。

日乘　では、一體閣下は、この人生のことをどう考へて入らつしやるのですか。閣下の信仰は何なのです。

信長　度々言つたではないか。おれの信仰は小唄の「死なうは一定」だ。幸若の「一度生を得て滅せぬ者のあるべきか」だ。この天地を誰が造らうと誰が毀さうと構つたことではない。人間に罪があらうと罪がなからうと構つたことではない。要するに、人間は生きてゐる間だけのことだ。前もなければ後もない、生れるのが初で死ぬのが終だ。さうして、生れたものはきつと死ぬるのだ。

だから生きてゐる間に出來るだけのことをすることだ――あばれられるだけあばれることだ。前もない。後もない。在るのは生きてゐる「今」だけだ――おれはいつ死んでも決して愚痴は言はん。

日乘　そのあなたが、後の世の賞罰ばかり言ふキリシタンをお許しになるのはをかしいと思ひます、第一、御自分が信じても入らつしやらない宗教をお廣めになるといふのが分りません。

信長　ばかな。お前はどうしてさう頭が悪いのだ。目的の爲には手段を選ばないといふことを、お前は知らんのか。

日乘　キリシタンの布教が閣下の目的に適ふのですか。

信長　愈以て頭の悪い男だ。おれは今も言ふ通り、生きてゐる内に出來るだけ大きな爲事がしたいのだ。キリシタンの布教認可は第一に國威の發揚になる。少くともおれの名が海外にまで響く。第二には、これで叡山や本願寺や根來を壓へつけることが出來る。第三には學問の爲だ。何と言つても學問は異國の方が進んでゐる。それはあの鐵砲を見ても分ることだ。あれだけの武器が日本にまだなかつたといふことは確に日本の恥辱だ。異國人に接し異國の學問を學ぶことは、現在何よりの急務だ。おれは異國人を教師とする學問所を建てたいとさへ思つてゐるくらゐだ。レトリカ、ヒイロソヒヤ、ロジカ、テヨロヂヤ――お前には何のことか分かるまいが、みんな役に立つ學問だ。

日乘　（冷笑して）ははあ。では、閣下は唯さういつた目的の爲のみに信教の自由をお許しになるのですか。信仰も何もなしに。

信長　勿論だ。政治家の宗教に對する態度は、これでなければならんのだ。一體、支配するといふことは、人民を殺してしまふか、眠らせてしまふことだ。併し、殺してしまつたら、人民といふものがなくなつてしまふ。そこで、眠らせて夢を見させて置くのが一番安全なのだ。それには宗教が一番好い――宗教は一種の麻酔劑だ。

日乘　閣下がそんな考へでをられることを、キリシタンの教師達は知らないのですか。

信長　勿論、知つてゐるだらう――あいつらは、お前などから見ると、ずつと頭が好いからな。

日乘　すると、閣下に信仰も何もないことを承知でゐながら、甘んじて閣下の恩恵を受けてゐるのですね。

信長　勿論さうだ。それで好いのだ。おれはおれで向うを利用するし、向うは向うでおれを利用するのだ。世の中はみんなそれだ。おれと將軍との關係だつてさうだ。將軍は心からおれに從つてゐるのでも何でもない。唯、目下のところおれに頼らなければ危險だから、それでおれ

を利用してるだけのことだ。又おれが自分の城より先にこの室町の造營をするのも、天下の人望が收めたいからだ。おれは將軍を利用してるのだ。

日乘　果してさうなら、若しキリシタンが閣下の目的を妨げるものであつたら、閣下はそれをお禁じになりますか。

信長　勿論のことだ。禁ずるどころか、滅ぼしてしまふ。

日乘　そして、若し日蓮宗がより以上閣下の目的に適ふといふことが分かつたら、閣下は日蓮宗の爲に力をお貸し下さいますか。

信長　勿論だ。（笑つて）　だが、そいつはちとむづかしいことだらうな。

日乘　いや、決してそんなことはありません。きつとその實證を擧げて御覽に入れます。

信長　高言は勝つてからのことだ――ちやうど好い。今ここへフロイスが來ると言ふから、それと問答して見たらどうだ。

日乘　ええ、やりますとも。

信長　負けるな。

日乘　誰が負けるものですか。

信長　（笑つて）　これは面白い。飯時の好い慰みだ。（近侍達の方を向いて）　おい。誰か行つて、急いでおれの辨當を持つて來い。（近侍の一人、去る）　一つ飯を食ひながら宗論を聞くとしよう。日乘、負けるなよ。

日乘　誰が負けるものですか

信長　勝たしてやりたいが、お前はロジカを知らないからな。

日乘　そんなものは知らなくても大丈夫です――それより伺ひたいのは、あの和田といふ侍のことです。あの人はキリシタンの教師を閣下に紹介したのですか。

信長　さうだ。

日乘　すると、あの人の紹介がなければ、キリシタンの教師などにお會ひにはならなかつたわけですね。

信長　それはどうだか分からん。お前は相變らず頭の惡いことを言ふな。

日乘　伊賀守はキリシタンの信者なのですか。

信長　熱心な信者だ。全體、あれの弟の高山飛騨守が非常な信者だ、惟政はそれに感化されたのだ。飛騨守はダリヨといふ名を持つてゐるくらゐだ。

日乘　伊賀守といふ人は勳功のあつた人ですか。

信長　知らんのか。呆れた奴だ。三好三黨をやつつける時、攝津で奮戰してくれた男だ。おれの恩人だ。

日乘　さういふ方の紹介だから、閣下もキリシタンの教師にお會ひになつたのでせう。

信長　さうだ。勿論、その義理はある。併し布教の自由を

許したのは、おれの意志から出たことだ。

日乘　いや、わたしは伊賀守が……

（前に去つた近侍と後に去つた近侍とが同時に駈けて來る。）

近侍の一人　お辨當を持つて參りました。

他の近侍　（殆ど同時に）伊賀守樣がお出でになりました。

（日乘、默る。）

（信長、辨當を机の上に置くやうに手つきで命ずる。）

（やがて、和田惟政、ロレンソ了西、ルイス・フロイスの三人が、しづかにはひつて來る。）

（信長は今までずつと提げてゐた白刃を、鞘にも收めず、その儘机の上に置いて、忙しく出迎へる。）

（フロイス、帽をとつて挨拶する。）

信長　帽を取らいでも好い。かぶつてお出でなさい。日が當る。

（フロイス、躊躇する。惟政、目顏で信長の言ふ通りにする方が好いと知らせる。フロイス、帽を冠る。）

（日乘、憎さげに、その方を見る。）

惟政　師父の用を足してをりますので、一向、御造營のお手傳ひをいたしません。今も閣下が御自身御出張のことを妙覺寺で承つて恐縮いたしたことです。師父も閣下がかくまで身を輕うして將軍の爲に盡されるのを知つて、悉く敬服してをります。

信長　（得意の色を隱して、フロイスに）いや、こんなことは何でもありません――それより、師父は寺を建てる場所をお見つけになりましたか。

了西　師父はまだ日本語に十分熟達してをられませんから、わたくしから、御挨拶を申し上げます。實は五條の堀川に無住の佛寺が一軒あるのを見つけて參りました。ちと狹くはありますが、あれを修理すれば、當分の用には立たうと思はれます。それで、實は先達からの御厚意に對するお禮の御挨拶旁そのお許しを受けに參つたのでございます。

惟政　如何でございませう、閣下。

信長　一向差支はないと思ふが、その寺の持主は何者だ。それとの交渉はどうだ。

惟政　元は根來の末寺だつたさうですが、長い間無住だつたので、今は近所の商人が持つてゐるのです。その方の交渉は豫め濟ませて置きました。金子も一部分渡して置きました。

信長　キリシタンの寺にするのだと言つたか。

惟政　言ひました。

信長　それで承知したか。

惟政　寧ろ喜んでをりました。公方樣や織田の殿樣がお許

しになる教だから、きつと結構な教に違ひない。お蔭で近所が繁華になるだらうなどと言つてゐました。

信長（思はず）人間の心はみんな一つだな。

惟政（信長の意味を取り違へて）今に洛中悉くデウス様のお恵みに浴すことになりませう。

フロイス（はじめて口を開く）ありがたう。ありがたう。

（信長、ふと氣がついて、日乘の方を見る。日乘、怒りの目を輝かして、フロイスの方を見てゐる。）

信長　ああ、忘れてゐた――師父、わたしがこの造營の顧問に使つてゐるものに、僧侶が一人をります。それが、何かあなたに宗教上の質問がしたいと言つてゐますが、會つてやつてくれますか。

フロイス　喜んで會ひます。

信長（日乘に向つて）日乘、ここへ來い。（日乘、傲然と前へ出る）朝山日乘といふ日蓮宗の僧です――さあ、日乘、なんでも訊くが好い。（惟政に）おれはその間に辨當を食ふぞ。時間がないから。師父に宜しく言つてくれ。

惟政　どうぞ、どうぞ。（フロイスに囁く。フロイス微笑して頷く）

（信長、机の前に坐つて、辨當を食ひ始める。日乘、フロイスを睨みつけて、默つて立つてゐる。）

信長（箸を動かしながら）日乘、早く訊け。早く。師父が待つてをられるではないか。

日乘（暫く口をもごもごさせてゐたが、やがて相手を威嚇するやうに、大聲で）お前達はおれ達が信仰する神や佛を輕んずるが、一體お前達の禮拜する神は何者で、どんな形をしてゐるのだ。それをおれに見せてくれ。

（信長、始まつたなといふ思入で、笑ひながら、辨當を食つてゐる。）

フロイス（しづかに）わたし達の禮拜する神は人の目では見えません。人の智慧では分かりません。

了西（師の詞を繼いで）不朽不滅の靈神です。萬物の創造者です。宇宙の主宰者です。永遠から永遠に存在するものです。その永久、完全、無限無量の正義と仁愛は、太陽のやうに全世界を照らしてゐます。

日乘（叫ぶ）嘘だ。大法螺だ。小説だ。そんなことで、この神國が騙せるものか。こんな大山師に布教を許すなどといふことがあるものか。言語道斷だ。

信長（後から、冷かすやうに）日乘、さう興奮してはいかん。落ちついて訊くが好い。それでは議論にならん。

日乘（後を見ないで）議論にならなくても構ひません。あんまり言ふことが無稽過ぎます。

信長　まあ、さう怒つてしまつてはいかん。もつと何か訊

いたらどうだ。

（日乘、いつまでも默つてゐる。）

（そこで、ロレンソ了西が口を出す。）

了西　それでは、わたくしの方から日乘師に伺ひますが、人間の生命及び萬物の創造者は誰でありますか。

日乘　（答に窮す。やがて投げつけるやうに）知らん。

（信長、箸を投じて、聲高に笑ふ。近侍達も誘はれて笑ふ。）

（日乘、愈興奮する。）

信長　（坐つた儘）それでは問答にはならん。では、わしが日乘に代つて、フロイス師に訊かう。キリシタンの神は善を賞し惡を罰するものでありますか。

フロイス　さうです。神は正しい道を愛します。德を見れば喜びます。不德を見れば罰します。そして、その罰には現在未來の二つがあります。一つは生きてゐる間に受けるので、一つは死んだ後に受けるものです。

日乘　（突然笑ひ出す）な、なんといふばかな話だ。人間は死んでからも賞罰を受けると言ふのか。

了西　さうです。なぜと言へば、靈魂は不朽不滅のものでありますから。

日乘　果してさうなら、それを見せて貰ひたいものだ。その靈魂といふものの形を。

フロイス　靈魂は色もなければ形もないものですから、人間の目で見ることは出來ません。

日乘　人間は死んでも靈魂は殘ると主張するのだな。よし、そんなら、その證據を見せて貰はう。待つてゐろ。（いきなり信長が辨當を食つてゐる机に駈け寄り、白刃を摑んで駈け戻る）さあ、貴樣達の首を斬つて、その實證を見せて貰はう。

（日乘、フロイスに斬つてかかる。信長、驚いて駈け寄り、その利腕をとつて押さへ、刀を奪ひ取る。）

信長　（日乘に）ばか。大ばか。無學文盲の破戒坊主め。（後を向いて、黑人に）こいつをつかまへて、あつちへ連れて行け。（黑人、つかつかと進んで、日乘を羽搔締にする）誰か二三人附いて行つて、暫くあつちへ控へさせて置け。

（近侍兩三名、黑人と共に、日乘を連れ去る。）

信長　は、は、は、は。佛敎の坊主はあれだから困ります。何一つ分からないで、唯自分の小さい量見から、むやみと異國のものを嫌ふのです――それにしても、師父の今の態度は實に立派なものでした。白刃が目の前でひらめいても、びくともしないのですね。

フロイス　それはわたしの勇氣ではありません。神樣が勇氣をお授け下さるのです。神樣には何も恐いものはあり

ません――そこで、閣下は今の靈魂の話をどうお思ひですか。

信長　さあ。さういふ高遠な問題は、武骨一遍なわたしには分かりません。

フロイス　（惟政を顧みて）和田さん。閣下に靈魂の話をもつと詳しくいたしませうか。今の坊さんは餘り氣が短かつたですから。

信長　いや、わたしも氣は短いのです。それに、けふはまだ工事の監督をしなければなりませんから、いづれゆつくり承りませう。

惟政　（フロイスに）それでは、けふはこれでお暇をなさい――お寺の出來たお禮を述べなさい。

フロイス　ありがたう。閣下、ありがたう。

惟政　（フロイスに）わたくしは閣下にまだ申し上げることがありますから、一足先へお歸り下さい。いづれあとでお宿に伺ひますから。ロレンソさん、宜しく頼みます。

フロイス。了西　（一緒に）きりゑれいそん。きりしてれいそん。きりゑれいそん。きりしてれいそん。（と稱へながら去る）

惟政　閣下、どうして日乘のやうな惡僧をお側にお置きになるのです。

信長　いや、あいつにも取柄はあるのだ。あいつはどこで覺えたか有職故實に詳しいのだ。ここの造營などには、どうしても必要な人間なのだ。無學で亂暴な奴だが、おれはあいつの持つてゐるものを利用してゐるのだ。

惟政　利用なさる內は宜しうございますが、乘せられないやうになさらなければいけません。

信長　大丈夫だ。あんな奴に乘せられてたまるものか。

惟政　あいつはキリシタンを目の敵にしてゐます。それでゐて、閣下や將軍の親近者ですから、どんなことを企らまないとも限りません。

信長　どんなことを企らまうと、あいつに何が出來るものか。キリシタンもあんなものに崩される程基礎の薄弱なものではあるまい。

惟政　大きにさうでした。キリシタンの信者が、あべこべに閣下に敎へられました。

信長　は、は、は、は。

（途端に、小蔭から日乘が躍り出る。手に小刀を携へてゐる。いきなり惟政を突かうとする。惟政、日乘の手首を打つ。刀落ちる。腕を捩ぢ上げて、膝の下に敷く。）

信長　（大聲に笑ふ）惟政にお前のその首を斬らせて、靈魂が殘るかどうか試して見ようか。

日乘　（苦しげに）わたしをお殺しになつたら、造營が支

障を來しませう。

信長　（まじめに）大きにさうだつた。惟政、赦してやれ。

（惟政、日乘を放す。日乘、隅の方へ逃げて、痛さうに手をさする。）

信長　どうだ、日乘。分かつたか。お前は議論でも力でもキリシタンには敵はないのだ。神妙に諦めて大工の棟梁を勤めてをれ。

日乘　はい。

信長　分かつたか。

日乘　はい。（机の側へ行つて、繪圖に沒頭する）

信長　さあ、大分むだな時間を費した。惟政、お前のところの人夫も來てゐるのだらう。

惟政　來てをります。

信長　では、陣所へ行つて、爲事を急いでくれ。今の間の取り返しをしなければならん。

惟政　畏りました。（急ぎ去る）

信長　（又白刃を振り廻して、大聲に）さあ、爲事だ、爲事だ。急げ、急げ。早くせぬと斬つてしまふぞ。

（土工石工など、又頻繁に往來を始める。その中に、疲れて足をさすつてゐる土運びの人夫を見つける。）

信長　（その人夫に）なぜ、休むのだ。

人夫　朝からこれで四十六遍目です。もうとても立てません。

信長　ばか。（いきなり斬つて捨てる）

（他の人夫達、恐れて駈けるやうに往つたり來たりする。その内に、又倒れて立てないのが一人出來る。信長、物をも言はずに、それを斬つて捨てる。）

信長　さあ、早く、早く。早くせんと、斬つて捨てるぞ。

（さう言ひながら、日乘の側に寄る。日乘の肩を叩く。日乘、びつくりして首を上げる。）

信長　（斬り捨てた人夫達の方を指して、笑ひながら）さあ、そこにも、あすこにも、おれの今斬り捨てた人間が倒れてゐる――靈魂が殘つてゐるかどうか、調べて來たらどうだ。

日乘　もうそれには及びません。（頭を抱へて、机の上に突つ伏す）

（信長、哄笑する。）

（土工石工など、絶間なく往來する。二つの死骸に目をかけるものもない。）

――幕――

俊寛（一幕）

人物

俊寛
有王
九州の商人
第一の島人
第二の島人
第三の島人
第四の島人
第五の島人
新大納言成親
丹波少將成經
平判官康頼
多田藏人行綱
西光
松浦太郎高俊
難波次郎經遠
妹尾太郎兼康
丹左衛門尉基康
松の前
鶴の前
紅の袴著たる女房二三十人
水主一人
雜色一人

場所

硫黄が島

時代

治承三年の夏

硫黄が島の一角、岩白く、砂白し。左に大なる岩山、頂上に祠めきたる凹み、裾に人の自由に出入りし得る程の洞二つ三つ。右に稍小なる岩山。岩蔭に俊寛の庵。外竹の柱、蘆の枯葉の屋根、古き萎えたる錦繍の帳。外の柱に白鷺の首しめたるを一羽吊す。

左の岩山との間は、平なる砂地。その向うは渺茫たる大海。海の向うに火山、黄いろき火を垂直に噴く。

星あかり。深夜。静なる濤の音。

流人俊寛、痩せ勞れたる體を横たへて庵に眠る。色黒き島人五人、砂地に丸くゐて、酒飲む。貝の盃、瓶子。火山の火の光、明暗交する毎に、島人等の顔、明暗交す。

島人、盃を廻らしつつ、一人一人に間を置きて、靜に物語る。沈みたる調子。沈みたる顔。

第一の島人　廻せ、廻せ、廻せ。
第二の島人　廻せ、廻せ。
第三の島人　盃が毀れた。
第四の島人　臭い盃ぢや。
第五の島人　酒を飲まいで、盃を嚙み碎いたものがある。
第二の島人　毀れたら、また掘り出すまでぢや。（貝を掘り出す）
第一の島人　酒はあるか。
第二の島人　何ぼでもある。
第五の島人　（海を指して）あれは皆酒ぢや。
第四の島人　（盃の中を覗くやうにして）鹽辛い酒ぢや。
第三の島人　咽喉が引つつるわ。
第五の島人　聲の潰れるまで飲まうぞ。
第二の島人　息の塞がるまで飲まう。
第四の島人　命が絶えれば、極樂ぢや。
第一の島人　なりや、ここは地獄か。
第二の島人　おれらは地獄へ生れて來たのか。
第三の島人　極樂へ死んで行くのぢや。
第五の島人　死んで極樂へ行くのぢや。
（稍長き間。盃めぐる。）

第一の島人　暗い晩ぢや。
第二の島人　夜が更けたのぢや。
第四の島人　嘘を言へ。まだ宵ぢや。
第五の島人　でも、小屋の親爺はよう寢てをる。
第二の島人　あの蜻蛉のやうに痩せた親爺か。
第一の島人　あの親爺なら、晝でも寢てをる。
第三の島人　晝でも夢を見るやうな眼つきをしてをる。
第二の島人　毎晩うなさるるといふではないか。
第三の島人　恐ろしい聲を出すぢやて。
第五の島人　恐ろしい夢を見るのぢやらう。
第一の島人　晝間は少しも物を言はぬ親爺ぢや。
第四の島人　啞ぢやらう。
第三の島人　でも、はつきりと寢言を言ふぞよ。
第二の島人　何の事やら分かるか。
第三の島人　一向に分からぬ。おれらの知らぬこつちや。
第五の島人　坊主のやうぢやな。
第四の島人　でも、生魚を食ふぞよ。
第三の島人　手を合せたを見た事がない。
第四の島人　何處の者ぢやらう。
第一の島人　ここの者ぢやない。
第二の島人　地獄へ生れて來た者ぢやない。
第三の島人　死んで地獄へ來た者でもない。

第五の島人　生きながら地獄へ流れて來た者ぢや。
第四の島人　何處の者ぢやらう。
第一の島人　知らぬ。
第二の島人　おれも知らぬ。
第三の島人　おれも知らぬ。
（稍長き間。盃めぐる。）
第四の島人　あの白鷺は何ぢや。
第五の島人　毎日一羽づゝ吊してある。
第一の島人　首が絞めてあるぢやないか。
第二の島人　さうぢや。首が絞めてある。
第三の島人　食ふのか。
第五の島人　いんや、夜さり懸けては、朝海へ捨ててしまふのぢや。
第一の島人　毎日か。
第二の島人　毎晩ぢや。
第五の島人　おれが見ただけでも、五十羽は懸けた。
第三の島人　懸ける時、何か言ふぢやらう。
第五の島人　言はぬ。ただ氣味惡う笑ふばかりぢや。
第四の島人　氣違ひぢやらう。
第一の島人　さうかも知れぬ。
第二の島人　さうかも知れぬ。
（稍長き間。盃めぐる。）

第一の島人　月はまだ出ぬか。
第五の島人　もう沈んでしまつたのぢや。
第四の島人　赤黑い月ぢやつた。
第三の島人　波の上に出たかと思うたりや、すぐ隱れてしまうた。
第二の島人　は、は、は。月も地獄は嫌ひと見える。
第四の島人　（火山を指して）地獄に絶えぬはあの光ばかりぢや。
第三の島人　あの光でも時々消ゆる時がある。
第一の島人　したら、闇ぢや。救ひがたい闇ぢや。
第二の島人　さういふ闇に會うた事があるか。
第五の島人　おれは一度ある。
第四の島人　おれは二度ある。
第三の島人　おれは三度ある。
第一の島人　おれは今宵のやうによう燃えるを見た事がない。
第三の島人　消ゆる前には、いつもよう燃えるぢや。
第二の島人　今宵も消ゆるな。
第四の島人　なんとも知れぬ。
第四の島人　なんとも知れぬ。
（稍長き間。盃めぐる。）
第二の島人　寂しい。

第三の島人　火を吹く音がはつきりと聞える。

第五の島人　寂しい音ぢや。

第二の島人　聞きたうもない音ぢや。

第四の島人　歌でも唄はうて。

第一の島人　誰ぞ舞はぬか。

第二の島人　おぬし舞へ。

第四の島人　おぬし舞へ。

第三の島人　舞はうか。（立つて舞ふ）

他の島人等　（舞に合せて唄ふ）

　波にただよふ
　櫂のなきがら
　ゆらりゆらりと
　ゆらりゆらりと
　月の光を
　はこぶなきがら
　ゆらりゆらりと
　ゆらりゆらりと

（この舞のなかばに、火山の火急に消ゆ。同時に星も光を失ふ。少時闇黒。人の立ち騒ぐ氣はひ。浪の音。）

第一の島人の聲　消えた。

第五の島人の聲　消えた。

第四の島人の聲　消えた。

俊寛の聲　只今あかしをもて參るぢや。

（あたり急に明るくなる。星の光にもあらず、火山の火の光にもあらず、大海の青白く光り出だせるなり。第一の島人に代りて成親坐す。第二の島人に代りて成經坐す。第三の島人に代りて康頼坐す。第四の島人に代りて行綱坐す。第五の島人に代りて西光坐す。各の顏、元ゐたる島人の顏に似たり。衣服も、島人の著たる物の上に、袈裟狩衣など慌てて重ねたるやうに見ゆ。一同無言。時々口を開けども、聲聞えず。酒に醉ひたる態。瓶子地上に倒れたり。俊寛、庵の内より起き出で、貝殻に臺つけたるものを持ち來る。火とぼりゐるつもりなれど火とぼりならず。同じく醉ひたる態。少しも弱弱しげなる樣子なし。）

俊寛　山おろしに火をとられたさうな……平家の命もやがてこれぢや。

康頼　（瓶子を指して、口を動かす）

俊寛　なに……なんと言はるる……瓶子が倒れたと申さるるか……むむ……いかさま……事のはじめに先づ平氏の倒れたるは心地よし。

西光　（瓶子をとり、その首をもぎて俊寛に見せ、口を動か

す）

俊寛　ははは……倒れたる平氏……首をとるに若かずと言はるるか……愈面白し。

成親　（俊寛に向ひて口を動かす）

俊寛　なに……愚僧に賞翫つかまつれとな……そは判官の殿の役目ぢや……なう判官殿……なに……たつて愚僧のが見たしと仰せらるるか……然らば仕らう。

（俊寛、首の無き瓶子を差し上げ、醉ひたる足を踏みしめて舞ふ。一同手拍子をとる、但し音はせず。次の歌、何處よりともなく、微に聞え來る……）

あまりへいしの多ければ、
あまりへいしの多ければ、
醉ひて候、倒るるまで醉ひふとりて候。
そのへいし、すでに倒れ亡びぬれば、
首とりて候、首丁とはなちて候。
とりたる首は、先づ大路を渡さむ、
さて獄門の樗の木にかけむ。

（この間行綱默して立ち、左手の洞の中へ消ゆ。一同氣づかず。舞まさに終らむとする時、行綱の入りたる洞より松浦太郎高俊、太刀を佩き、繩と鞭とを持ちて出で來り、物をも言はず西光を捕し、鞭うち、刀を擬す。一同知らず。俊寛ひとり氣づきて舞をやむ。）

俊寛　こりや高俊どの、西光をなんと召さるる……なに、謀叛ぢや……謀叛のかたらひしたと言はるるか……はて……不思議……天下の安きを計るが何で謀叛ぢや……

（高俊、俊寛には目もくれず、西光を引立てて、右の岩蔭に消ゆ。直ぐ又、左の岩山の他の洞より難波次郎經遠出で來り、同じく無言にて成親を引つ立つる。）

俊寛　經遠どの……大納言の殿をいづれへおん供申すぞ……なに……これも謀叛ぢや……はて何が謀叛か……左大將を望まれたが謀叛か……德大寺の卿も望まれた……花山の院の中納言も望まれた……愚僧ぢやとて望まぬには限らぬ……

（經遠、構はず成親を洞の内へ連れ去る。直ぐ又、他の洞より妹尾太郎兼康出で來り、成經と康賴との衣を剝ぎて去る。俊寛、呆れてこれを凝視す。成經、康賴、もとの島人の姿となる。一同酒の醒めたる態。暫く沈默。）

俊寛　（あたりを見廻し、わが姿をも顧みて）や……ここは何處ぢや……なに硫黃が島ぢや……なぜかやうな所へ流された……謀叛の咎によりてとな……謀叛とは院にさからふ事ぢや……人臣の傲れるものを亡ぼすが何で謀叛

ぢや……
（成經、康賴、默して立ち、岩蔭より細長き木切れやうのもの數多持ち來り、その一つ一つに小さき木切れにて何をか彫りつけ、拜みては海に流し、拜みては海に流す。）

俊寛　何をなさるる……なに……都の戀しきままに……千本の卒塔婆を作りて……海へ流す……なに……一本なりとも……都へ屆かば……願足るとか（卒塔婆の一つをとりて讀む）さつま潟……沖の小島に我有りと……親には……告げよ八重の……汐風……はははは……（他の一つをとりて讀む）……思ひやれ……しばしと思ふ……旅だにも……なほふるさとは戀しき……ものを……ははは は……かかる願が何になる……佛に何の力があらう……神に何の力があらう……歸らば、泳ぎ歸るぢやまで……人の力ぢや……人の力ぢや……

（成經、康賴、濱木綿にて幣を作り、左の岩山の頂上へ幾度となく登り降りす。）

俊寛　これは又何ぢや……なに……熊野詣ぢや……なに、かの岡の上を熊野權現と思ひて……三十三度の參詣をなさるる……それも亦歸洛の願か……はははは……神かくれ天魔はびこるこの國に……さやうの祈り如何のかひあらむ……はははは……

（康賴、成經に何か耳うちし、頂上の祠めきたる凹みを拜みたる後、立つて靜に舞ふ。次の歌、何處よりともなく、微に聞え來る。）

さまも心もかはるかな。
落つる涙は瀧の水、
妙法蓮華の池となり、
弘誓の舟に竿さして、
沈むわれらをのせ給へ。

（この舞の內に、大なる木の葉二つ、空より落ち來る。俊寛、それを拾ふ。舞終ると、葉の面を讀む。）

俊寛　なに……かたかたには「歸雁」とある……歸雁……歸雁……むむ、歸る雁か……見よ、祈らでもこれぢや……

（成經、康賴、喜び合ふ樣子。）

俊寛　かたかたには……なに……「二つ」とある……二つ…………二つ……なぜ三つとはなきぞ……（稍悲しげなる表情）

（康賴、又立つて舞ふ。次の歌、又何處よりともなく、微に聞え來る。）

よろづの佛の願よりも、
千手のちかひぞたのもしき。

枯れたる草木も忽に、
花咲き實のるとこそ聞け。

（この舞の中ばに、紅の袴著て、鼓をわきばさみたる女房二三十人、朦朧と砂の上にあらはれ、康頼と共に舞ふ。康頼、驚きて舞をやむ。女房達、構はず舞ひ續く。次の歌、又遠くより聞え來る。）

人々の、人々の、
都歸りも近ければ、
名殘を慕ひて來れり、
來れり、名殘を慕ひて。

俊寛　（面持晴れやかになりて）あれ見よ……多くの女房が名殘を惜しみに參つた……二人のみかは……三人も……四人も……十人も……二十人も……それ、それ……愚僧をみてほほゑみをる……招きをる……愚僧もやがて歸るぢやて……

（俊寛、女房達へ近寄る。と、女房二人のみ殘りて、他は悉く消ゆ。）

俊寛　や……鶴の前に松の前な……さがれ……さがれ……身共は知らぬ……なに、わが謀叛はそち達ぢや……おろかな事を申せ……天下の爲ぢや……萬人の爲ぢや……なに……成親の卿よりそち達を貰ひたさ故に……かたうどしたと申すか……たはけめ……嘘ぢや……なに、松の前に子が出來た……子とは何ぢや……僧に子はない……知らぬ……知らぬ……知らぬ……知らぬ……知らぬ……

（二人の女房、俊寛に身近く寄るよと見れば、つと消ゆ。俊寛、呆然たり。直ぐ、舟一艘、海に見ゆ。男三人乘る。）

俊寛　（俄に活潑なる表情）おう……おう……それ、それ……參つた……使が參つた……都より使が參つた……

（俊寛、走りて岸へ近づく。舟著く。丹左衛門尉基康、雜色一人連れて降りる。水主舟に殘る。基康、雜色が首にかけたる布袋より書狀のやうのものを出して、何やら頷きつつ俊寛に渡す。成經、康頼もその側へ寄る。俊寛、書狀をひろげて讀む。）

俊寛　中宮御産の御祈禱に依り……非常の大赦行はるるの内……薩摩潟硫黄が島の流人丹波の少將成經幷に平判官康頼法師歸洛すべきの由……丹波の少將成經幷に平判官康頼……丹波の少將成經……平判官康頼……俊寛の名のなきはいかに……むむ、禮紙にこそ……（禮紙を見る）禮紙にもなし……

（俊寛、康頼心亂るる樣にて、赦免狀を奥より端へ讀

み、端より奥へ讀む。やがて、手より取落す。成經、康賴、これを拾ひとりて讀み、氣の毒げに俊寛を見る。）

俊寛（基康に向ひて）吾等三人は同じ罪ぢや……配所も同じ所ぢや……如何なれば同じ赦免に我一人とり殘さるるぞ……平家の思ひ忘れか……執筆のあやまりか……

（基康、俊寛に目もかけず、成經、康賴をさし招く。）

俊寛（成經の袖に縋りて）俊寛がかやうになるといふも、御邊の父、大納言殿のよしなき謀叛ぢや。かまへて、よそ事と思ひ給ふべからず……もし赦されずば、都までとは申すまじ……せめては同じ舟にのせて、九州の地まで連れ給へ……（成經の袖を抑へたるまま、又康賴の袖をひかへて）日頃の嘆きは物の數にあらず……故郷の戀しきも、この島の悲しきも、三人語つて泣きつ笑ひつすればこそ慰む便ともなつたのぢや……それさへ忍びかねて……しばしばうき音を泣いたに……われ捨ててのぼり給ふあとの寂しさはどうぢや……思うても……恐ろしい……ああ三年の契も絶えはつるか……ひとり留めて歸り給ふか……名殘惜し……名殘惜し……（泣く）

（基康、成經、康賴、構はず舟へ乘る。俊寛、物狂はしく、舟に乘りては降りつ、降りては乘りつする。水主、纜を解く。俊寛、綱にとりつき、舟の腰になり、脇になり、丈の立つまで海の中へ引かれて出づ。水、頸に迫る。俊寛やうやく綱を放し、岸へ轉び上がる。）

俊寛　方々、俊寛をばつひに見捨て給ふか……おうい……おうい……（延び上がり、足摺りして）おうい……おうい……

（舟隱る。）

俊寛　おうい……おうい……おうい……（倒れ伏す）

（稍長き間。左の洞より有王と九州の商人出で來り、倒れ伏したる俊寛の前に立つ。）

俊寛（顏をあぐ。稍反抗的なる表情）や……そちは有王か……それなるは誰ぢや……なに……九州の商人を案內に連れて參つたと申すか……何しに來た……なに……迎へに來た……迎へに來る用はない……歸れ……歸れ……歸れ……俊寛はいつまでも一人でをるのぢや……平家が迎へぬとあらばよい……天下が捨てたとあらばよい……もう誰が來ても歸らぬ……歸らぬ……いつまでも一人でをるのぢや……いつまでも……いつまでも……生きながら鬼になるまで、この地獄の火に燒かれてゐるのぢや……（兩手に顏を掩ひ、走りて庵に入る。）

（つと大海の光消ゆ。暫く闇黑。やがて曙光。あたり仄明くなる。火山、勢よく靑き烟を噴く。俊寛、庵の內に、幕の明きたる時と同じ形して眠る。有王と九州の

商人、闇黒前と同じ形して立つ。闇黒前の二人より、顏容少しくやつる。）

有王　もう今日で十日ぢや。

九州の商人　十日十夜でござりまする。

有王　すでに世を終へさせられたか。

九州の商人　左程短いお命でもござりますまい。

有王　でも……山にも谷にもお姿に似たものは見えぬ。

九州の商人　匂さへもござりませぬか。

有王　匂とは。

九州の商人　人の匂でござりまする。

有王　それも血肉の枯れ果てては。

九州の商人　血肉は枯れても、人のたましひは匂ひまする。

（稍長き間。）

有王　三人の內二人は歸つた。一人は行くへも知らずさまようて行つたと島人が申してゐた。

九州の商人　この世の亡びるまで、さまようてでござりませう。

有王　この島中をか。

九州の商人　いいや……島をも……海をも……空をも。

有王　むむ……さまようてをられようて……主人は不信にをはした。

（稍長き間。）

有王　（元結に手をやり）姫君の御文も潮になえて、御心こもりし水茎の跡もさぞにじんだ事であらう……（ふところへ手をやり）京より持ち參りし草子も、早ほろほろに……

九州の商人　（進つて）もはやお歸りなされては如何と存じまする。

有王　さまを變へて菩提を弔へか。

九州の商人　忘れておしまひなさりませ。

有王　忘るる事が出來ようか。

九州の商人　御主人は神佛をもお忘れなされました。

（短き間。）

有王　（俊寛の庵に目をつけ）あれ見よ、あれも島人ぢや……京童が築地の腹などに造りたる犬の家にも劣れるものかな……あはれ・わが主人若しいまさば・あのやうになりてもをはさう……なぜといへ……かりにも法勝寺領を知行し給ひながら、修理造營をもし給はず、恣に三寶の布施を受け・あくまで伽藍の寺用を貪り給ひし罪のむくいに……生きながら餓鬼道に落ち……

（俊寛、起き出づ。いたく衰へたる樣なり。默して拾の白鷺をとり、海へ捨てに行かむとす。有王、物語いつつ、ぢつとこれに見入り、直ぐそれと氣づく。）

有王　やや……君ぢや……君ぢや……商人……君ぢや……

（俊寛、逃ぐるやうにするを、二人してやうやうに捕ふ。）

有王　（獨語のやうに）あさましいお姿……あさましい。

（俊寛、更に物言はず。甚しき激動を强ひて隱す樣子。）

有王　（俊寛の顏を覗くやうにして）なぜ物を仰しやりませぬ……夢とでも思し召してか……これは現でござりまするぞ……現でござりまするぞ……君、君、なぜ物を仰しやりませぬ。

（俊寛、眼を見張りて一方を凝視するのみ。物言はず。）

有王　さらば、こなたより申し上げう……君の西八條へ出でさせ給ひし後、官人參つて資財雜具を破りとり……お內の者ども搦めとり……みな失ひ果てましてござりまする……北の方はをさなき君をつれ給ひて、鞍馬の奥へお忍びなされました……悲しき事の多かる內にも、をさなき君はこの童の顏を見給ふ度に、「如何に有王よ、われ硫黄が島とやらへ具して參れ。」とのおむづかり……その悲しく愛らしき聲も……過ぎし二月、瘡と申すいたつきに絕えさせられ……北の方のおん嘆き……それよこれよと思し召し沈ませ給ひしが、さんぬる三月二日の日、つひにはかなくおなりなされました。

（俊寛、尻居にどうと倒る。）

有王　今は……今は姬御前ただ一人、奈良の姨御前の御許に忍びてをはしまする……それよりのおん文……（もとどりより文を出して、俊寛に渡す）

（俊寛、これを手に取りて、紙の面をみれども、字義通ぜぬ面持。）

有王　あまりみ心つかはれて、文字さへ讀めずなり給ひしか。讀んで參らすべし。（文を讀む）その後たよりなき孤子となり果てて、お行くへをも承る便もなし。身の有樣をも知らせ參らせず。いぶせさのみ積れども、世の中かきくらして晴るる心地なく侍り。あはれ尊きも卑しきも女の身程いひかひなきことは候はず、男の身にて候はば、渡らせ給ふ島へも、など尋ね參らで候ふべき。この童をお伴にて急ぎ上らせ給へ。戀しとも戀し。ゆかしともゆかし。三年の嘆き、水莖に盡し難く侍れば……

（俊寛、この文の言を聞く內、やうやく氣の遠くなる樣子。つひに絕え入る。）

九州の商人　（靜に俊寛をささへ、冷かに）有王樣……有王樣。

有王　（それと見ると、文を捨てて俊寛に抱きつき）や……君……何となされまする……何となされまする。

（俊寛、有王と九州の商人とに抱かれて永き眠に入る。夜、全く明く。浪の音。遠く近く鷺の聲。極めて靜かに幕。）

ベテスダの池（一幕）

人物

跛者
盲人
皮膚病者
三十八年病みゐる老人
その他、病人、不具者、大勢
基督

時代

或年の三月十四日

場所

エルサレムの羊門附近

ベテスダの池（鑛泉）の縱斷面。

池を圍む五つの柱廊の内、三つだけが舞臺に見られる。池は舞臺端の直線で、半圓形に仕切られる。池の上には低い屋根がある。

晝の光が、三つの柱廊から僅に洩れてはひつて來る。池の面は、その反射で稍明かるいが、他は總て洞窟の中のやうに薄暗い。

池の廻りを、大勢の病人や不具者が、殆ど透間もない程密に取り卷いてゐる。或者は蓐（東洋風の簡素な敷物）を敷いて、その上に腹ん這ひになつてゐる。或者は撞木杖を抱へて、蹲まつてゐる。頭を繃帶してゐる者がある。胸を抑へて、唸つてゐる者がある。時々狂人のやうに、高い聲で、何か譯の分からぬ事を叫ぶ者がある。併し、みんな一樣に、池の面を見詰めてゐる。盲人までが誰も彼も、ぢつと池の面を見詰めてゐる。目に力を籠つて池の面を見ようとしてゐる。

遠くに、祭らしい人聲や歌や音樂が聞える。

群集、切れ切れに、間を置いて、話をする。

――まだ動かないか。

――動かない。

――隨分待たせるな。

――そんな事を言ふのは物體ない。

――おれはけさ夜の明けない内から來て、少しも油斷をせずに、かうやつて水を見てゐるのだが、どうしても動かない。

――早く來たつて、遲く來たつて同じ事だ。動く時が來れば、きつと動く。

――でも、飛び込む時は、一番初めでなければだめだ。

——一番初めでなければだめなのか。
——水が動いた時に、直ぐ飛び込むのだ。さうすればどんな病氣でも癒るのだ。
——おれは盲だ。水の動くのは見えない。音を聞いて飛び込むのだ。
——おれも盲だ。天の使の水を動かしに來るところが見られれば、誰よりも先に飛び込むのだが。ああ、目の見えないといふ事は、何につけても不自由だ。
——天の使はおれ達の目にも見えはしない。水が動くので、天の使の來た事が分かるのだ。
——ハマンに呪あれ。ハルボナに惠あれ。
——誰だ。厭な聲を出すのは。
——けふの祭の歌を唱つてゐるのだ。
——おれ達には祭などはない。祭のあるのは丈夫な奴等ばかりだ。
——祭の歌などを唱ふ奴は、出て行け。唯さへ狹い所だ。
——けふはみんな祭へ行つてしまつて、ここは靜だらうと思つて、やつて來たのだ。だが、やつぱりだめだ。やつぱり、こんなに大勢集まつて來てゐる。
——動かないか。
——動かない。
——もう動いても好ささうなものだ。

——辛抱が肝心だ。辛抱する奴が勝つのだ。
——一體、天の使といふのは、大きな者か、小さな者か。
——小さな者だといふ事だ。人間の肩へ乘れる位小さいといふ話だ。小鳥ぐらゐなものだらう。
——いや、もつと小さいさうだ。人間の指の先にでも留まれるさうだ。蜻蛉ぐらゐなものだらう。
——いや、大きなものださうだ。廣げた羽根へ日が當ると十里四方明かるくなるさうだ。
——ハマンの首を絞めたるハルボナに惠あれ。
——まだ、さつきの奴がゐるな。
——出て行け。出て行け。
——出て行け。出て行け。
（群集の一人が左の柱廊から押し出される。）
——大丈夫か。
——大丈夫だ。まだ動かない。
——長いな。
——ほんとに長いな。
——ほんとに天の使が動かしに來るのか。溫泉が湧くのだといふ人もあるぞ。
——お前は他國者だからそんな事を言ふのだ。今までに澤山癒つた者があるのだから爲方がない。
——でも、目に見えないのに、天の使が來るのだといふ事

が、どうして分かるのだ

――それは、昔からの言ひ傳へだ。言ひ傳へほど確なものはない。

（三十八年間昏睡病にかかりをる老人、褥を引きずつて、中央の柱廊からはひつて來る。）

老人　御免下さい。御免下さい。

一人の病人　だめだ。だめだ。

他の病人　もう一杯だ。前へは出られない。

老人　年寄でございます。そんな事を仰しやらずに、どうか前へ出して下さい。

一人の跛者　誰だ。誰だ。騒ぐのは。

その隣の皮膚病者　又いつもの爺さんがやつて來たのだ。

老人　三十八年もわづらつてゐる者でございます。どうか前の方へ出して下さい。

跛者　うるさいな。

一人の病人　けふはもう遲い。あした來い。

他の病人　歸れ、歸れ。

老人　可哀さうだと思つて、何處へでも入れて下さい。お願ひでございます。お願ひでございます。

跛者　やかましい。

一人の盲人　歸れ。歸れ。

（群集、暫く老人と爭ふ。老人、頑固に動かない。終に、左の方の端に割り込む。みんなと同じやうに池の面を見詰める。あたり靜になる。）

――今の間に動きはしなかつたか。

――動いたかも知れないぞ。

――大丈夫だ。おれはそつちに構はずに水を見てゐた。

――狡い奴だな。

――早く癒りたいのは誰しも同じ事だ。

――もうぢき動くぞ。

――どうして分かる。

――どうもそんな氣がするのだ。

――やかましい。默つてゐろ。

――さうだ。默れ、默れ。

――天使樣　どうぞお早くお降り下さいまし。

――靜にしろ。

――しつ。

――しつ。

（靜になる。白衣の基督、中央の柱廊に現れる。直ぐと、三十八年病みゐる病人に目をつけ、その方へ歩み寄る。）

基督　（唐突に）お前は病氣が癒したいか。

老人　（直ぐと後を振り向く）はい。癒したうございます。けれども、水が動いても、わたしを池へ入れてくれる者

がありません　いつでも、先きへ誰かにはひられてしまひます。

跛者　やかましい。また誰が何か言ひ出したな。

一人の病人　靜にしろ。

他の病人　靜にしろ。

基督（聲を低くして）　病氣を癒して後悔するやうな事はあるまいな。

老人　ありません。お願ひですから、水が動いたら、直ぐわたしを池へ入れて下さい。

基督　池へなどはひらないでも好い。わしの言ひつける通りにすれば、病氣は癒る。

老人　どうすれば好いのでございます。

基督　わしの言ひつける通りにするか。

老人　いたします。

基督　褥を上げて、歩くのだ。

老人　かうでございますか。

（老人、褥を上げて、立つ。）

基督　さうだ。それで、もう病氣は癒つたのだ。

（基督、靜に左の柱廊から去る。）

（老人、暫く呆然としてゐる。やがて、手を振つたり、足を踏んだりして見る。急に大聲に笑ひ出す。）

老人　は、は、は、は。癒つたぞ、癒つたぞ。

跛者　やかましい。どうしたのだ。

老人　病氣が癒つたんだ。病氣が癒つたんだ。

一人の病人　氣が違つたな、爺さん。

他の病人　可哀さうに、あんまりいぢめるからだ。

老人　は、は、は、は。ほんとに癒つた。ほんとに癒つた。

盲人　聲の調子が違つて來たぞ、ほんとに癒つたのぢやないか。

皮膚病者　平氣で歩いてゐるぞ。本當に癒つたらしいぞ

跛者　なあに、氣が違つたのだ。

老人　は、は、は、は。癒つた。癒つた。

一人の病人　爺さん、どうしたんだ。どうして癒つたんだ。

老人　今ここへ白い着物を着た人が來たんだ。さうして、褥を上げて歩けと言つたから、その通りにしたんだ。さうしたら癒つてしまつたんだ

跛者　莫迦々々しい。

一人の病人　いつそんな人が來たんだ。その人は何處にゐるんだ。

老人　（左の柱廊を指さす。）　今そこから出て行つてしまつた。わたしを癒すと、直ぐに出て行つてしまつたんだ。

跛者　夢を見てゐるのだ。

皮膚病者　ほんとか、爺さん。

老人　ほんととも。この通り丈夫になつてしまつた。は、

は、は、違つた、違つた。

一人の病人　白い着物を着てゐたのか。

老人　さうだ。白い着物を着てゐた。

病人　お前、顔を覺えてゐるか。

老人　覺えてゐるとも。

病人　では、おれをその人のところへ連れて行つてくれ。

老人　宜しい。連れて行つてやらう。だが、お前駈けられるか。

病人　とても駈けられない。

老人　よし、それぢやあ、わたしが駈けて行つて、追ひつくから、お前あとから來い。

病人　よし、一所懸命に急いで行く。

（老人、元氣よく左の柱廊から去る。病人、杖をついて、その後を追ふ。二三人、又その後を追つて去る。靜になる。）

跛者　氣違ひが移つたな。

皮膚病者　さうだ。氣違ひだ。さうでなくて、あんなに急に元氣のつく筈がない。

一人の病人　莫迦な奴等だ。

盲人　ほんとに、白い着物を着た人が來たのか。

他の病人　どうだか分からない。誰かと話はしてゐたやうだが。

跛者　誰が來たつて、人間におれ達の病氣や不具が癒せるものか。

一人の病人　さうだとも。だから、おれ達は天の使の來るのを待つてゐるのだ。

他の病人　やつて來たのは氣違ひに違ひない。氣違ひがあの爺さんに氣違ひを移したのだ。

更に他の病人　氣違ひは莫迦力が出るといふからな。

盲人　大笑ひだ。

一人の病人　ほんとに大笑ひだ。

跛者　お蔭で人數が少くなつた。何がしあはせになるか分からない。

その隣りの病人　やつと邪魔がなくなつた。靜にして水の動くのを待たうよ。

一人の病人　さうだ。靜にしよう。

（靜になる。稍長き間。）

盲人　（聲を低くして）動くか。

跛者　（同じく）まだ動かない。

皮膚病者　（同じく）もうぢきだ。

一人の病人　（同じく）もう少しの辛抱だ。

（一同、又ぢつと水の面を見詰める。暫く沈默。）

（遠くに、祭の歌や音樂が聞える。）

――幕――

珍客

――ラヂオ・コメデイ――

登場者

犬

男

犬の主人

主人の妻

巡査

場所

主人の家の門前及び内部（劇の進行に連れて、戸外より戸内へ――戸内を玄關より二階へ、二階より玄關及び茶の間へ移る。）

、アナウンサの口上が濟むと、いきなり犬が烈しく吠え出す。

犬　わ、わ、わ、わ、わん。

男　（聲を潜めて）しつ、し、しつ。

犬　（前より烈しく）わん、わ、わ、わ、わ、わん。

男　しつ、しつ。しづかにしねえか。

犬　（一層烈しく）うう、わ、わ、わ、わ、わん。

男　さうだ。すつかり忘れてゐた。（紙包の音）お前の大好きなものだ。牛肉だぞ。

犬　（益烈しく）うう、わ、わ、わ、わん。

男　ほしくねえか。

犬　わ、わ、わ、わん。

男　腹がはつてるな。

犬　わ、わ、わ、わん。

男　主人は工面が好いな。

犬　わん、わ、わん。

男　分からねえ犬だな。もう好い加減に黙らねえか。

犬　わん、わん。わ、わ、わ、わん。

男　（強く）商賣の邪魔をするな。

犬　（烈しく）わ、わ、わ、わん。

男　おれは强盗ぢやあねえ。起きられると面倒だ。賴むから靜にしてくれ。

犬　うう、わ、わ、わん。

男　恐ろしく忠義な奴だな――當世でもねえ。

犬　うう、わ、わ、わん。

男　困つたなあ。

犬　わ、わ、わん……わん、わ、わ、わ、わん。

男　（困つたやうに）しやうがねえなあ……

途端に、どこか近所で自動車のとまる音――直ぐ靴の

の音がこつこつと聞える——それが近づく。

男　（口早に）いけねえ——人がやつて來た。誰か歸つて來やがつた。

（男、逃げようとする。犬、男を追ひ廻す。）

犬　わ、わ、わ、わ、わん。うう、わ、わ、わ、わ、わん。

男　（急に悲しさうな聲を出す）助けてくれ——助けてくれ——誰か來て下さい。犬が——犬が……

犬の主人　ベス、ベス。こら、ベス。こつちへ來い。

犬、急に默る。

主人　（少し醉つてゐる）どうも濟みません。

男　（わざと震へ聲で）ああ、恐かつた。

主人　どうも濟みません。なんにもする犬ぢやないんですが、どうもひどく臆病なんで。

男　いえ……どうも……犬が嫌ひなもんですから。

主人　濟みませんでした。（極短い間）あなた、どちらから宅へお見えになつたのですか。

男　いえ……ちよいと、その……失禮ですが……表札を見せて戴かうと存じまして。

主人　ああ、さうでしたか。で、何といふ家をお尋ねで。

男　へえ……あの……その……川……川島といふ家で。

主人　内は川村ですよ。

男　へえ……それで、その……川の字が見えましたもんで失禮とは存じましたが、つい、その……

主人　やつぱり、この、寺町なんですか。

男　へえ。寺町の十八番地なんで。

主人　十八番地はここ五六軒ですが、川島といふ家は聞きませんなあ。

男　では、ことによると番地違ひかも知れません。外を探して見ませう。どうも有難うございました。

（行かうとする。）

主人　ちよつと……ちよつと……（少し口調が變つて來る）大分時間がおそいが、何か急用で來たんですか、その……川……川島さんとかいふ家へ。

男　いえ、その、いえ、別に急用といふこともないんですが、その、自分の、その一身上のことにつきまして……

主人　失禮だが、御様子で見ると、あまり御有福でもなささうだ… 今夜は、その、川島さんとかへお泊りになるのかね。

男　へえ。まあ、そのつもりなんで。どうも、その、會社の方を首になつちまつたり何かしたもんで……

主人　それはお氣の毒だ。（極短い間）どうだね、君、僕の家へちよつと寄らないか。飯ぐらゐはあるぜ。

男　でも、それは……

主人　川島なんて家は、この近所にやあないぜ。

男　さやうでせうか……困つたなあ。
主人　兎に角、ちよつと寄り給へ。なんとか又相談のしやうもあらうから。
男　でも、それは……兎に角、もう一遍探して見ます。
主人　探したつてありやあしないよ。
男　なければないで、又なんとか考へます。
主人　そんなことを言つてゐるひまに、ちよつと寄つたら好いぢやないか。
男　でも、見ず知らずの方のところへ……
主人　遠慮深い人だね。（間）ぢやあ、ほんとのことを言はう。實は僕、ちよつと、その、一人では內へはひりにくい事情があるんだ。
男　へえ。
主人　門限が過ぎちまつたんだ。（短い間）そら、見給へ。僕の時計は少しおくれてゐるが、もう十五分で一時だ。
男　成程……
主人　（聲を潛めて）女房がやかましいんだ。助けると思つて、僕と一緒にはひつてくれ給へ。そばに人がゐりやあ、さすがに女房だつて、なんにも言やあしまいから……
男　（少し笑つて）へえ……成程……さういふわけで……
主人　うむ、さういふわけなんだ……つまり一擧兩得といふ奴で、それで僕も助かれば、君も……と言つたところで、まだその方は相談の上でなけりやあ分からないが……
男　へえ。ぢやあ、なんですね。あなたを助けると思つて、一緒にはひつてくれと仰しやるんですね。
主人　そ、そ、さうだ。
男　賴むからはひつてくれと、かう仰しやるんですね。
主人　そ、そ、さうだ。
男　（非常な決心でもしたやうに）宜しい。はひりませう。はひつて上げませう。武士は相見たがひだ。一つ俠氣を出して、はひりませう。
主人　はひつてくれるか。それはありがたい。
男　その代り、御主人、あつしは息張りますぜ。さうへいへいはしてゐませんぜ。
主人　好いとも。構はないとも。君は僕の友達のつもりでゐれば好い……さうだ。昔の友達で、久しぶりで會つたことにしようぢやないか。
男　でも、この風ぢやあ……
主人　事業に失敗したんだとか何とか言つときやあ好いよ――そこは女は單純だからな。
男　成程、分かりました。
主人　ぢやあ、明けるよ。
男　ようがす。

主人　もう友達のつもりだよ。
男　心得てゐます
　主人、勢よく玄關の硝子戸を明ける。
主人　（大聲に）　おい、千代子、千代子。今歸つたぞ。
　ばたばたとスリッパで人の驅けて出る音。
主人の妻　（いきなり泣聲を出す）　まあ、あなた、もう何時だと思つてらつしやるの。もう一時半ですよ。
主人　しつ、しつ。靜にしてくれ。お、お客を連れて來たんだから。
妻　（ヒステリックに）　お客。女のお客ですか。（わざと大きな聲で）　また藝者が送つて來たんですか。いつか見たいに。
主人　さうぢやない、さうぢやない……なんだつて、そんな大きな聲をするんだ……友達だよ……友達を連れて來たんだよ。
妻　へえ、お友達。お友達がこんな時間に入らつしやるんですね。へえ。變ですわねえ。きつと女のお友達でせう。（聲が又大きくなる）　藝者でせう。藝者よ。きつと藝者だわ。いや、いや、いや。そんなものを内へ入れるのは。ここは神聖な家庭よ。料理屋や待合ぢやあないことよ。
主人　さうぢやないと言へば。（短い間）　昔の友達に偶然そこで會つたんだ。ひどく零落してるんだ。その身の上話やなんかを聞いてゐたんで、遲くなつたんだ。濟まない。
妻　え。宴會は何時にお濟みになつたの。
主人　宴會か。宴會は、その、十一時過ぎに濟んだ。
妻　それから、今までどこに入らしたの。
主人　だから、その、友達に會つて
妻　それから。
主人　それからつて……それから直ぐずつと内へ歸つて來たのさ
妻　それにしちやあ遲過ぎるぢやありませんか
主人　だつて、身の上話や何かを……
妻　身の上話を往來でお聞き遊ばしたの……
主人　うむ……そりやあさうさ……往來で聞いたのさ……
妻　なぜ、直ぐ内へお連れしなかつたの。
主人　それが、その、なんだよ。あんまりひどい裝をしてるんでね……
妻　お友達なら、どんな裝だつて構はないぢやありませんか。
主人　大きにさうだ。だが、その、あんまり……
妻　（少し柔らいで）　なんだか、信じられないわねえ。あなたは嘘つきだから。

主人　まあ、なんとでも言ふさ。人を見りやあ直ぐに分かることとなんだから（間）おい。おい、君、構はないからはひり給へ。待たせて濟まなかつた。

男　もう失敬しよう。時間が遲いから。

主人　遲いつたつて、もう今夜どこへ行けるもんか。まあ今夜は僕のところでゆつくりするさ。昔話で夜を明かさうよ。

男　え……うむ。

妻　〔すつかり心の柔らいだ樣子で〕まあ、あなた、お上りなさいまし。

主人　妻も折角ああ言ふんだ。上がつてくれ給へ。どつちにしたつて、今夜はもうしやうがないよ。

男　さうか。ぢやあ、まあ、ちよつと上がらして貰ふかな。

主人　勿論だ。さあ。上がり給へ。上がり給へ。〔妻に〕千代子、ヰスキがまだあつた筈だ。あれを二階へ持つて來てくれ。

妻　ええ、直ぐ持つて參りますわ。でも、お肴がなんにもありませんけれど。

主人　きのふ貰つた千枚漬はどうだ。

妻　さう、さう、すつかり忘れてゐましたわ。〔男に〕あなた、ちよいと御免遊ばせ。〔妻、去る〕

主人　さあ、こつちへ來給へ。女中が寢ちまつたんで、なんにも御馳走が出來んよ。〔急に聲を低くする〕おい。君はなかなか好い役者だ。うまくばつを合してくれたんで、忽ち奥方の御機嫌が直つてしまつた。

男　旦那、隨分とつちめられてゐましたね。

主人　いや、毎度のことさ。

男　旦那、よつ程景氣が好いんですね。羨ましいなあ。

主人　冗談ぢやあない――唯、會社などに關係してると、やつぱり宴會なぞに引つぱり出されるんでね。

男　自分が引つぱり出す方ぢやありませんか。さうして、酒で株主を盛りつぶして……

主人　おい、おい。飛んでもないことを言ふぢやないか。

男　何を言つたつて、今夜はあつしがあなたの救ひの神ですからね。

主人　〔笑ふ〕そりやあ、さうだ……どうも君にやあ敵はんよ。

〔妻、來る。〕

妻　あなた、これで宜しいのでございますか。

主人　うむ、それ、それ。〔男に〕どうだ、君、相變らずやるんだらう。ヰスキはどうだ。

男　ヰスキ。ありがたいな。この頃は電氣ブランばかり飲んでるんでな。

主人　おい、おい。女房の前でそんなことを言ふな。

男　いや、これは大しくじり。
妻　あの、電氣ブランといふのはどんなお酒なんでございますの。
主人　まあ、そんなことはどうでも好いから、早くついでお上げ。
男　や、どうも、ありがたう。もう澤山です。おつと、こぼれた。勿體ねえ。
主人　肴がなんにもなくて氣の毒だ。京都から送つて來た千枚漬で我慢してくれ給へ。
男　千枚漬。おれはそんなものを食つたことはねえ。
主人　まあ、一つやつて見ろ。
男　〔食べる〕うむ、こいつあうまい。こりやあ素敵だ。
主人　なあ、千代子。小學校時分からの友達なんだが、もう十四五年も會はなかつたんだ。昔馴染に會ふのは嬉しいもんだよ。
妻　それはねえ、ほんとに。まあ、どんなにか。
主人　長く臺灣の方へ行つてゐたんだが、不幸續きでね。どうも氣の毒な男さ。
男　もうその話はよせよ。おれは臺灣なんか知らねえよ。
主人　分かつた、分かつた。まあ、もう一杯飲め。（間）だが、不思議さなあ。おれがあの時間にあすこを通らなけりやあ、或はもう一生會はずにしまつたのかも知れなかつたんだからなあ。
男　全くだ。そりやあ全くだ。
妻　ほんとに不思議な御縁でしたわねえ。
主人　こいつなんかは、よくおれの歸りが遲い遲いつてぶつぶつ言ふが、歸りが遲けりやあこそ君にも會へたんだ。なあ、君。
妻　あら、なにもそんな皮肉をおつしやらなくつたつて好いわ。
男　いや、おむつまじくて結構だよ。僕などは女房緣も子供緣も薄くて、いまだに家らしい家も持つてゐないんだからなあ。
主人　いや、それはてんでの運命だよ……おう、大分いけるな。どうだ、もう一杯。
男　ありがてえ。
主人　ところで、例の求職の一件だがな。
男　求職……ああ、さう、さう。求職、求職。それが大事なこつた。
主人　僕の方の會社でよけりやあ、いつでも世話をするぜ。
男　さうか。そいつはありがたいな。役目はどんなところだ。
主人　工場の監督だ。
男　そいつは好い。その方なら多少經驗があるから。あし

たからでも好いか。
主人　あした、兎に角。一遍會社の方へ來て見ないか。
男　ああ、行くとも。だが、一體、君の會社はどこだ。
妻　あら、まだ御存じぢやなかつたんですか。
主人　（笑ふ）さう、さう、まだ言はなかつたんだ。あんまり話がいちどきになつちまつたもんだから。（男に）なんだよ、君。丸ビルの八階にある極東紡績だ。工場は中野だ。
男　ああ、極東紡績か。さうか。君はあすこの重役か。
主人　重役つて程のものぢやない。やつぱり一個のサラリイマンさ。
男　嘘を言へ。（妻に）奥さん、はばかりはどちらです。
主人　玄關の直ぐ右だ。
男　さうか。
妻　御案内いたしませう。
男　（もう少し醉つてゐる）いや、勿體ない、勿體ない。分かります、分かります。
主人　分かるか。
男　分かる、分かる。
（男、去る）
妻　（醉を淋めて）あなた。あれ、ほんとにあなたのお友達。
主人　まだそんなことを言つてるのか。話を聞いたつて分かるぢやないか。疑深い奴だな。
妻　だつて、隨分ひどい裝ね。まるで勞働者見たいよ。
主人　現在の境遇が勞働者なんだから爲方がない。それに勞働者だつて現代では決して莫迦には出來んよ。
妻　そりやあ、さうですけれど、なんだか人相の惡い人だわ。人の顏ばかりじろじろ見てゐるのね。
主人　いや、顏で人は分からないよ。あんな正直な奴はないんだ。つまり正直過ぎて失敗したんだね。
妻　まあ、そんな方なんですの。
主人　どうして、昔はなかなか鳴らした男なんだ。
妻　まあ、さうなんですの。
（男、來る。）
男　やあ、失敬、失敬。
主人　分かつたか。
男　分かつた、分かつた。
主人　どうだ。腹はすいちやゐないか。
男　腹よりやあ酒だ。どうも實にうまいヰスキだな、これは一體、こいつはなんてヰスキだ。
主人　ヰクトリア・バットさ。氣に入つたら、もう一杯、どうだ。
男　いや、ありがたう。大分もう醉つたよ。

主人　いや、まだ大丈夫だ。ちつとも顏に出てゐやしない。

男　高いんだらうな。

主人　なにが。

男　このヰスキさ。

主人　たいして高くもないが、まあ僕の身分にしては少し贅澤なんだ。

男　會社ではいくら貰つてる。

主人　誰が。

男　君さ。

主人　おれ。

男　うむ。

主人　おれの貰ふものは知れたもんだよ。

男　重役の君が知れたもんだとすると、工場の監督なんかひどいもんだらうな。

主人　そりやあさういつたもんでもないよ。僕の會社では工場の方を優遇するのが昔からの方針だからな。

男　當てにはならないな。

主人　いや、當になるよ。

男　ボオナスはどうだ。

主人　ボオナスだつて、僕等の方は知れたもんさ。

男　嘘つけ。

主人　嘘ぢやないよ。

男　銀行の通帳を見せろ。

主人　そんなものはないよ。いつも一杯一杯で暮らしてるんだ。なあ、千代子。

男　でも、時々藝者が家まで送つて來るさうぢやないか

主人　よせよ……おい、千代子。お前が餘計なことを言ふもんだから……

男　は、は、は、は。隱すより現るはなしか。（間）おい。あすこにある、あの立派な物はなんだ。

主人　あれか。あれは蓄音器だ。

男　蓄音器か。たいしたもんだな。百圓もするか。

主人　あれはその、月賦で買つたんで、ちと高い――五百圓だ。

男　五百圓……贅澤なもんだな。

主人　贅澤だと言はれりやあ、それまでだが、家内は始終一人で留守居をしてるんでな。

男　成程、奧さんのおもちやか。愈以て贅澤だぞ。

主人　まあ、さう堅いことを言ふな。

男　ぢやあ、もうなんにも言はないから、一つその蓄音器といふ奴を聞かしてくれ。

主人　だけど、君、もう二時だ。おそいよ。

男　二時だつて、何時だつて構ふもんか。

妻　でも、御近所が、ねえ、あなた。

男　構やしませんよ。奥さん。ぐづぐづ言つて來たら、僕が出て上げます。

主人　ねえ、君、あしたの朝にし給へ。あしたの朝に。

男　いやだ、いやだ。どうしても聞く。おれは言ひ出したことは後へは引かないんだ。

主人　だつて、君、この夜半に……

男　〔脅すやうに〕よし。聞かせないんだね。愈聞かせないんだな。

主人　まあ、さう怒つちやいかんよ。しやうがないなあ。ぢやあ、聞かせるよ。聞かせるから、まあ坐つてくれ給へ。

男　よし。ぢやあ、浪花節を一つやつてくれ。

主人　浪花節。君、そんなものは僕んとこにありやしないよ。

男　ぢやあ、安來節でも好い。

主人　それもないよ。

男　なんにもねえんだな。

主人　僕んとこのは西洋のものばかりだよ。

男　西洋のものばかりだと。樂隊か。好いや。我慢してやらあ。樂隊でも好いから。一つ景氣の好い奴をやつてくれ。

主人　ぢやあ、ジャズをかけよう。ジャズを。

男　なんでえ、ジャズてえのは。

主人　ダンスだ。賑かなもんだ。

男　ダンスか。そいつあ面白えだらう。やつてくれ。なんでも好いから景氣をつけてくれ。すつかり好い氣持になつちまつた。

主人　好いか。始めるぞ……

蓄音器が鳴り出す。

男　（笑ふ）面白え、面白え……こりや、こりや、こりやとおいでなすつたな……あら、こりや、こりやと……（手を拍く）

主人　おい、君、さう踊つちやあ、あぶないよ。

男　大丈夫……大丈夫……ああ、こりやこりやと……

圓盤が四分の三ぐらゐ進んだかと思ふ頃、突然消防自動車のサイレンとベルの音がする。

〔三人とも氣がつかない〕

またサイレンの音、ベルの音。

主人　おや、火事だな。（蓄音器を途中で止める）

消防自動車がサイレンとベルを鳴らしながら、二三臺續いて、近所の大通りを通る音。

妻　火事ですわ。

男　うむ、火事だ。

妻　近いわ。

主人　なあに、大丈夫だ。（窓をあける音）見えやしない。

まつ晴だ。
またサイレン。車の響。

妻　でも、大變消防が來ますわ。
遠くで太鼓の音。火事の起つた場所を知らせる聲。

男　なんとか言つてるぢやねえか。
太鼓。町の名を呼ぶ聲。

主人　分からない。

妻　寺町通りつて言つてるやうぢやないの。
太鼓、少し近くなる。併し、町の名を呼ぶ聲ははつきりしない。

男　寺町通りぢやねえ。だが、はつきり分からねえ。
サイレン。ベル。

主人　今に近くへ來ると分かるよ。
太鼓、遠くなる。

妻　あら、行つてしまひましたわ。
サイレン。ベル。

男　ちよいと、おれが行つて見て來よう。

主人　君は地理が分かるまい。僕が行つて來る……大抵、大丈夫だとは思ふんだが。
遠くで太鼓。

妻　太鼓さへ來てくれりやあ分かるのに。

男　いや、僕が行つて來よう。角に交番があつたやうだ。
あすこへ行きやあ分かるだらう。

主人　僕が行くよ。

男　いや、僕が行くよ。

主人　君はまあ家に居給へ。

男　いや、おれが行くつたら。

主人　君はお客だ。

男　お客も糞もあるもんか。
〔男、二階を駈け降りる。〕
サイレン。ベル。遠く太鼓の音。

主人　たうとう行つちまつた。をかしな男よ。

妻　ほんとに面白い方ですわね。

主人　正直で可愛いところがあるよ。

妻　ほんとにねえ。
〔玄關の方で人の聲がする。〕

聲　もし、もし。表があいてますが、誰か起きてますか。
注意して下さいよ。

主人　〔妻に〕おい、巡査だ。

妻　〔聲をかけながら下へ降りる〕はい、はい。ありがたう存じます。起きてをります。今ちよつと火事を見に出かけたもんですから。

巡査　さうですか。注意して下さいよ。この頃この邊は物騷ですから。

妻　ありがたう存じます。
　玄關の戸をしめる音。巡査の去る靴の音。
　稍長き間。
妻　おや。おや。（だんだん大きな聲になる）あら。あら。あら、あら。あなた。あなた。早く來て下さい。あなた、あなた。
主人　〔二階から駈け降りる〕なんだ、なんだ。大きな聲で。
妻　た、た、大變よ。今のは泥坊よ。
主人　今の巡査か。
妻　さうぢやなくつてよ。あなたのお友達がよ。
主人　おれの友達。
妻　そら、今の、そら、火事を見に行つた。
主人　え……あれが泥坊だと。
妻　ほら、あなたの靴も外套も鞄も、ここへ置いたのがみんななくなつてるわ。
主人　しまつたあ……奥はどうだ　〔茶の間へ駈けてはひる〕わあ、大變だ。簞笥がみんな空つぽだ……
妻　あら、あら、あら。
主人　〔悲痛に〕しまつたあ……しまつたあ……
　遠く消防のサイレン。犬の吠える聲。
註　「ト」書の括弧に（　）〔　〕の二種を用ひたり。

（　）は直接放送に關係あるもの。〔　〕は參考上のものに過ぎず。

息子（一幕）

人物

火の番の老爺　七十歳
金次郎　二十七歳　無頼漢
「手先」と呼ばるる捕吏　三十歳位

時代

徳川末期

場所

江戸の入口

舞臺にはつきり見えるものは、唯粗末な火の番小屋だけである。雪がさかんに降つてゐるので、右も左も奥も前も、ただ一面に白いだけである。火の番小屋には明かりがついてゐる。障子が一枚明けてあつて、襟巻頭巾に顔を埋めた火の番の老爺が、土間で焚火をして、あたつてゐるのが見える。十二月の或晩の夜半過ぎである。

幕が明くと、「手先」と呼ばるる捕吏が、あたりに目を配りながら出て來る。二三度、火の番小屋の前を行つたり來たりする。やがて、小屋の前に立ち留り、火の番の老爺に呼びかける

捕吏　とつつあん、まだ生きてるな。
火の番　（顔を上げる）生きてるとも。誰だ。をかした事を言ふのは。
捕吏　誰でもねえ。おれだよ。
火の番　おれはまだ死にやあしねえよ。誰が死ぬものか。
捕吏　向きになる奴があるものか。冗談だな。
火の番　冗談だ。何が冗談だ。
捕吏　生きてるなと言つたのがよ
火の番　生きてるともさ。當り前だ。死んでたまるものか。
捕吏　分からねえな。お前、冗談が分からねえのか。ふう寒くつちやあ、冗談の一つも言はなけりやあ、とても遣り切れたもんぢやねえんだ
火の番　そんな事を言つてると、罰でもあつたまるのか。
捕吏　話にならねえ。（行きかける）
火の番　まあ、あたつて行けよ。
捕吏　（火の番小屋へはひつて、手を暖めながら）寒いな。
火の番　誰がよ。
捕吏　誰がつて。みんながよ。天氣がよ。
火の番　おれは寒かねえ
捕吏　寒いから寒いと言ふのに、何もさう怒ることたあねえ。

（火の番答へず）寒いと言つたつて、おれが首になる氣遣えはねえんだ。（火の番答へず）だが、ここいらは吹きつつあらしのせゐか、格別また寒いな。

火の番　なあに、もつと寒い所があらあ。

捕吏　そりやあ、あるだらう。

火の番　ぢやあ、なせそんなむだを言ふんだ。

捕吏　とつつあん。お前今夜どうかしてるせ。おれはお前が寂しからうと思つて、元氣づけに話をしてやつてるんだ。揚足ばかり取つてやがる。かりにもお客だ。もうちつとやんはり口を利くもんだ。（火の番、鼾をかく）え。とつつあん。（火の番、鼾をかく）好い火の番だ。居眠り火の番か。

火の番　（目を明かないで）あんまりくだらねえ事ばかり言ふから、眠くなるんだ。

捕吏　とてもかなはねえ。（小屋を出る）ぢやあ、あばよ。

火の番　（冷淡に）あばよ。

捕吏　（小屋を離れながら）あばよ。頑固ぢぢい。（行つてしまふ）

火の番　（立ち上がる）頑固ぢぢいたあなんだ。おれにやあ名があるぞ。（また坐つて、火をいぢる）あんなおつちよこちよいが、手先の何のと言つて、いばつてゐやがるんだ。やま犬一疋でも、捕まつたらお慰みだ。

（金次郎、出て來る。頬冠り、ふところ手で、尻をはしよつてゐる。火の番小屋の前まで來ると、立ち留る。火の番は圍爐裏の火をいぢりながら、金次郎に背を向けてゐる。）

金次郎　ぢいさん。あたらして貰つても好いか。

火の番　（肩越しにぢろりと相手を見て）あたるが好いやな。

金次郎　ぢやあ、あたらして貰ふぜ。（小屋へはひつて、手を暖める。火の番の半身、障子の蔭に隱れる）寒いなあ。

火の番　おれは寒かあねえ。

金次郎　そいつあしあはせだ。おいらは寒いよ。この一月、暖まつたことがねえんだ。

火の番　お前、どこにゐるんだ。

金次郎　片門前の盲長屋にゐたんだ。あすこが又寒い所よ。

火の番　もう、そこにゐねえのか。

金次郎　家賃が高過ぎらあ。（懐を明けて見せる）おいらあ、もう一文なしだ。

火の番　酒か。ばくちか。

金次郎　冗談言ひつこなしだ。おいらあ堅氣の商人だ。商賣ですつたのだ。

火の番　商賣はだめだ。この頃のお上の遣り口ぢやあ商人

は上つたりだ。お前、煙草をやるか。

金次郎　御馳走か。有難え

火の番　おれは遣らねえが、貰つたのがある。（棚から紙に包んだ煙草と煙管をとる）煙管は詰まつてるかも知れねえぜ。

金次郎　なに、構はねえ。（烟管の火皿を焚火にかざして、それから細い木の枝で煙管を通す。それから煙草を詰める。）

火の番　ひどく手が震へるな。

金次郎　（煙草をすつぱすつぱやりながら）體が悪いんだ。頭がふらふらしてしやうがねえ。

火の番　お前、腹がすいてゐんぢやねえか。

金次郎　きにようの朝食つたきりだ。

火の番　早くさう言やあ好いに。（辨當箱を持つて來る）まだ一かたぎぐらゐは殘つてる筈だ。

金次郎　有難え。有難え。（かぶりつくやうにして食ふ）

火の番　味が分かるか。

金次郎　（頬ばりながら）うま。

火の番　腹のへつてる時、さう急いで食つちやあ毒だ。

金次郎　毒でも好い。（食ひ續けながら）だが、お前、見かけに寄らねえ親切者だな。おらあ歸つてから、こんなにされるなあ始めてだ。

火の番　歸つて來たと。何處から歸つて來たんだ。

金次郎　上方からよ。

火の番　大阪か。

金次郎　（口を一杯にして）うむ。

火の番　何處にゐた。

（金次郎、聞えない振りをする。）

火の番　大阪は何處にゐたよ。

金次郎　川つぷちだ。

火の番　それぢやあ分からねえ。大阪は何處でも川つぷちだ

金次郎　（慌てて）北――北だ――北の新地だ。南にも少しゐたよ。東にもゐたな。だが、北だな――おもにゐたなあ北だな。

火の番　何の商賣をしてゐたんだ

金次郎　商賣。おれが商人に見えるか

火の番　だつて、お前いま商人だと言つたぢやあねえか。

金次郎　おいらあ職人だ。

火の番　ぢやあ、職は何だ。

金次郎　鍛冶屋だ。

火の番　嘘をつけ。（相手の手を指さす）それが火を摑んだ手か。

金次郎　當てられた。おいらあ、實は釣るのが商賣だ。

火の番　魚をか。
金次郎　分からねえ。人を釣るんだ。（賽をふせるやうな眞似をする）これだ。
火の番　ばくちか。いかさまをやるんだな。
金次郎　うぶな人間に、世の中の歩きやうを教へてやるんだ。錢の使ひやうを傳授してやるんだ。
火の番　（間を置いて）おれにも一人上方へ行つてる息子があるが、有難え事に、お前のやうな奴ぢやあねえ。律氣者だ……お前、なぜまともな事をしねえのだ。
金次郎　見たつて分からう。おいらにやあ出來ねえ。おいらあ生れつき、（又、賽をふせるやうな科をする）レコに出來てるんだ。世の中にやあ錢のなくしてえ人間が澤山ゐるんだ。おいらあ、その手合をたんのうさせてやるんだ。
火の番　ばくちはいけねえ。地獄へ落ちるぞ。
金次郎　落ちたら落ちた時よ。地獄にも大きなのが出來てるかも知れねえ。
火の番　恐ろしい事を言ふ奴だ。（目をつむつて）南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。
金次郎　よせやい、縁喜でもねえ。（辨當箱を返す）でも、お蔭で助かつた。有難うよ。
火の番　こなひだも、ここへ狼の辰といふ奴が來た。霰の降る晩だつた。「あたらして貰へるかい。」なんて言やがるんだ。「あたつたら好いぢやねえか。」おれはかう言つた。やつぐしよ濡れだ。火へあたると、湯氣が立つのよ。恐ろしい顔をした奴だつた……お前、いける口だらう。一杯やるか。（貧乏德利を出す）
金次郎　（驚いて）いけねえ。そいつあ一つたらしもいけねえんだ。
火の番　お前、こなひだお仕置になつた赤羽橋の人殺しを知つてるか。
金次郎　うむ。あいつあ、おれの幼馴染だ。
火の番　あいつがお仕置になつたのは、おれのせゐだ。あいつもここへあたりに來やがつた。
金次郎　（平氣で）ふむ。緣があつたんだな。
火の番　殿様傳次は、捕まらねえ内に咽喉を突きやあがつた。あいつも名高え奴だつた。
金次郎　傳次たあ四つ目で一緒にゐた事がある。
火の番　あいつもここへあたりに來たんだ。咽喉を突く前に、おれに小判を一枚くれて行つた。まだ持つてらあ。
金次郎　お前、それを使はねえのか。
火の番　使はうと使ふまいと、おれの勝手ぢやねえか。
金次郎　堪忍してくれ。いつもの癖だ……だが、咽喉が渇いた、一杯やつて見るかな。（貧乏德利をとつて、口か

ら飲む――直ぐ、いやな顔をして、口の中の物をほき出す）ぺつ。ぺつ。こりやあ何だ。
火の番　茶だ。茶だよ。
金次郎　おつそろしく冷てえ茶だ。こんなものを夜中に飲ませるどぢがあるか。おいらあ、茶なんてものは、もう何年にも飲んだ事がねえ。
火の番　酒ばかりくらつてゐるんだらう。
金次郎　酒ぢやあねえ。泡盛だ。
火の番　泡盛は毒だ。
金次郎　へ。「ぼくちはいけねえ。」……「泡盛は毒だ。」……さうだ。今に「煙草は命とりだ。」と來るだらう。
火の番　さうだとも。煙草だつて、好い事はねえ。
金次郎　分かつた。分かつた。もう、よしねえ。もう、なんにも飲まうたあ言はねえから。
火の番　一體お前、何しにこんな所へ來たんだ。
金次郎　え。それはその、いろいろ用があるからだ。
火の番　かう、何かきまつた用はねえのか。
金次郎　そりやあ、ねえ……いや、ある。（調子を變へて）ちやんとお袋を探しに來たんだ。
火の番　めつかつたか。
金次郎　分からねえ。
火の番　分からねえ。
金次郎　會つてくれるかどうだか分からねえんだ。
火の番　ぢやあ、ゐどこは分かつてゐるんだな。
金次郎　う。うむ。大抵ゐどこは分かつてゐるが、おいらが行つたつて、會つてくれるかどうだか、それが分からねえんだ。
火の番　そりやあ會つてくれるとも。やつぱり、お前のやうな事をしてゐるんだらう。
金次郎　なぜよ。
火の番　蛙の子は蛙よ。昔からきまつてゐらあな。
金次郎　（變な氣持で）さうかね。（居ずまひを直す）
火の番　お前、くたびれたらう。そんなに堅くなつてゐるからだ。もつと樂々とあたりねえ。
金次郎　これで澤山だ。
（間、金次郎何か言ひさうにする。）
火の番　なんだ。
金次郎　お前の息子の事を考へたんだ。上方へ行つてると言つたな。して見ると、どつかでおいらが會つてゐねえものでもねえ。名は何と言ふ。
火の番　會ふ氣遣えはねえ。おれの息子はまつたうな人間だ。
金次郎　それは分かつた。名を言つたつて好いぢやあねえか。

火の番　金公よ。金次郎つてんだ。
金次郎（靜にひとり頷く）うむ。それぢやあ、會つた事はねえ。
火の番　當り前だ。九年前に江戸を出て行つた——十九だつたよ、その時な。商賣は金物よ。今ぢやあ立派にやつてらあ。
金次郎　飛んでもねえ。
火の番　何が「飛んでもねえ。」だ。
金次郎　どうして、立派にやつてる事が分かるんだ。
火の番　さうに違えねえもの。
金次郎　たよりはねえのか。
火の番　まだ、ねえ。
金次郎　まだだと。九年も立つてるのにか。
火の番　忙しいんだ。せつせと稼いでるんだ。もうたいしたものになつたに違えねえ。
金次郎　さうありてえものだ。だが、若し、おいさん。若しさうでなかつたらどうする。
火の番　そんな事がありやう筈がねえ。あいつはまつたうな人間だ。
金次郎　又まつたうだ。まつたうだつて、思わく違えといふものがあらあ。
火の番　ばかあ言へ。あいつは子供の時から、近所の褒め者だつた。酒も飲まねえ。ばくちは元よりだ。どうしたつて出世をする男に出來てるんだ。
金次郎　いつもさうとはきまらねえ。
火の番　だが、あいつはさうだ。
金次郎　だが、どうして……（言ひ淀む）
火の番　どうしてだと。何がどうしてだ。
金次郎　だからよ……その……だからよ。（問ふべき事を考へる）誰かにたよりがあつたのかよ。
火の番　うむ……一度あつた。
金次郎　誰によ。
火の番　（にがい顔をして）お前の知つた事ぢやねえ。
金次郎　ふむ。ぢやあ、お前の嫌ひな人間にでもたよりがあつたのか。
火の番　（少し熱して）近所の娘のところへ手紙をよこしやあがつたんだ。向うへ著くと直ぐに書きやあがつたんだ。いやらしい手紙よ。「故郷が戀しい」なんて書きやあがつて。
金次郎　そりやあ戀しいだらう。
火の番　（怒つて）稼ぎに行く奴が、故郷が戀しいもねえもんだ。その娘め、倅と夫婦約束がしてあるなんて言やあがつた。ばかばかしい。だから、おれはさう言つてやつた。もうみんな忘れちまつてらあつてよ。

金次郎　う。うむ、娘の方でももうお前の息子の事は忘れつちまつてるだらう。もうずつと前によ。

火の番　ところが忘れねえんだ。まだ、それを言つてやがるんだ。

金次郎　なんだと。それぢやあ、まだ嫁に行かねえのか。

火の番　かう諸式が高くつちやあ、うつかり嫁にも行けねえのさ。おまけに、好い時分を逃がしてしまつちやあな。

金次郎　(熱心に)　ところで、おいらお前に一つ聞きてえ事がある。こりやあ、唯、その、お前の考へが聞きてえんだ。よしか。若し、お前の息子がしくじつたとするな。そいつが困つて、歸つて來たとするんだ……運が惡くてよ……以前とは違つてよ。牢にでもへえつて來たとするんだ……

火の番　(怒つて)　お前、うちの金次郎の事を言つてるのか。

金次郎　さう怒つちやいけねえ。おいらあ、唯お前の考へが聞きてえんだ。

(捕吏が出て來て、火の番小屋の横に身を寄せ、そつと二人の會話を聞いてゐる。)

火の番　よせ。さつきから言つてるぢやねえか。息子はそんな奴ぢやねえよ。

金次郎　だが、人間には運不運といふものがあらあ。

火の番　稼ぐ人間に運も不運もあるものか。

金次郎　でも、病氣をするとか怪我をするとかしたらどうする。

火の番　そんなら手紙をよこす筈だ。

金次郎　若し手紙をよこさなかつたら――

捕吏　(前へ出る)　若いの。そのぢいさんにからかつたつてむだだ。しやれも冗談も分かる親爺ぢやねえんだ。

火の番　又來たな。また何か冗談を言ひに來たのか。

捕吏　さうだ。寒くつてたまらねえ。

火の番　この若いのは冗談を言つてるんぢやねえんだ。

金次郎　さうだとも、おいらあ、唯、ぢいさんの考へを聞いてるんだ。聞いたつてしやうのねえのは分かつてるんだが。

捕吏　お前、この頑固ぢぢいを知つてるのか。

金次郎　どうして。知るわけがねえや。

捕吏　知つてねえとも限らねえ。だが、ぢいさんの言ふ事を聞いてりやあ間違ひはねえよ。

火の番　それも冗談か。

捕吏　やつと分かつたか。

金次郎　(立ち上がる)　ぢやあ、もう行くぜ。大きにお世話だつた。

火の番　まあ、坐れ。さう急ぐこたあねえ。

金次郎　うむ……だが……
捕吏　おれの顏を見て、直ぐ出かけると、お前うろんに思はれても爲方がねえぞ。
金次郎　お前さん、何の商賣だ。針でも賣るか。
捕吏　なぜよ。
金次郎　ちくうり刺すからよ。
捕吏　(笑つて) こいつあ好い。
火の番　若いの。とても上方にやあゐめえな。こんなお手輕なお手先樣は。
捕吏　(金次郎に) お前、上方から來たのか。上方は何處にゐた。
金次郎　堺だ。
火の番　お前、さつき大阪だと言つたぢやねえか。
金次郎　堺に一番長くゐたんだ。
火の番　ぢやあ、さつき、なぜ大阪にゐたなぞと言つたんだ。
金次郎　大阪の話が出たから、大阪にゐたと言つたんだ。さう揚足がとりたけりやあ、相撲とりにでもなるが好いや。
捕吏　(金次郎に) お前、上方で何をしてゐた。
金次郎　町奉行をしてたかも知れねえ。だが、生憎さうぢやあなかつた。
捕吏　おやあ、何をしてゐたんだ

金次郎　川口で荷揚をしてゐた。
火の番　(驚いて) お前、さつきは……
金次郎　(烈しく火の番を睨みつけて) 默つてろ。ぢぢい。
火の番　(呟くやうに) さうか。それで分かつた。そんならさうと早く言やあ好いに。
捕吏　とつつあん、どうした。目を白つ黑してるぢやねえか。
火の番　(捕吏の方へ向き直つて、烈しく) お前の知つた事ぢやあねえ。どうして、さうお前は疑り深えんだらう。さう人の事に一々口を出すもんぢやあねえ。
捕吏　(驚いて) どうした。どうした。おれは唯當り前に聞いてるんだ。(金次郎に) 役目だけで聞くんだ。返答をしてくれるか。
金次郎　(不安心に) するとも。
捕吏　よし。
金次郎　お前さんの來た時、おいらあぢいさんの考へを聞いてゐたんだ。
火の番　さうだ。ばかな事を聞いてやがつたんだ。うちの金次郎がどうだのかうだのと。
金次郎　やつぱり、おいらあもう行くぜ。大きに世話だつた。御免ねえ。旦那。
捕吏　まあ、待て。ちよつと氣になる事があるんだ。

金次郎　冗談ぢやねえ。（行きかける）

捕吏　まあ、待て。行くな。どうも、お前はおれの尋ねてる代物らしいぞ。（捕吏も動かない。金次郎も動かない）お前、おれのとこへ來て、一晩暖まつたらどうだ。夜だう雪ん中をうろつくよりやあ好いぜ。どうだ。

金次郎　それにやあ及ばねえ。

捕吏　大方さう言ふだらうと思つた。

（捕吏、いきなり小屋へ飛び込む。金次郎、すりぬけるやうにして、小屋を躍り出る。直ぐ姿が見えなくなる。捕吏、帯の間に呼笛を探りながら、あとを追ひかける。）

火の番　やつぱり、さうか……（小屋を出て、遠くを透かして見る。呼笛鳴る。火の番、雪に手をかざす。呼笛また遠くで鳴る）あいつ一人ぢやだめだらう。（間）見えねえ。（間）角を曲つたな。（ずつと遠くで呼笛が鳴る）いくら吹いたつて聞えるものかな。（呼笛の音が少し近くなる）や、又こつちへやつて來たな……（延び上つて見る）さうだ。（ずつと近くで呼笛が鳴る）また角をこつちへ曲がつたな……（小屋へはひる）人の事だ。引つ込んでゐよう。（障子を少し引く）

（呼笛、直ぐ近くで鳴る。金次郎、息を切らして、駈けて來る。小屋の前で轉ぶ。捕吏、あとを追つかけて來て、金次郎の起き上がらうとするところを捕まへる）

金次郎　（喘ぎながら）よし　捕まつた以上は神妙にする

捕吏　神妙にすると。感心な奴だ。まあ面を見せろ。（金次郎の顔を火の方へ向ける）

金次郎　（反抗して）神妙にするから……そんな事はするな。

捕吏　火の側へ來い。

金次郎　（烈しく抵抗する）お前、おいらの面に見知りはねえ筈だ

捕吏　おゝいに見せるのだ

金次郎　いけねえ。そりやあいけねえ。（烈しく抵抗する）

捕吏　見せねえか。ぬすつと。見せねえか。

金次郎　（急に抵抗するのを止める）

捕吏　見せるか

金次郎　爲方がねえ。どうともしろ

（二人、火の側へ歩み寄る。不意に、金次郎、身を屈めて、捕吏の兩足に抱きつき、捕吏を仰向けに倒す。金次郎、逃げる。）

捕吏　（はね起きて）畜生。（あとを追ふ）

（金次郎、直ぐ又小屋のうしろから出て來る。）

金次郎　見當違ひへ行きやあがつた。（呼笛鳴る。金次郎、小屋を覗く）ぢいさん、あばよ。

火の番　（少し顔を出して）　あばよ。達者でゐねえ。
金次郎　何か。お前んとこの婆さんは達者か。
火の番　ばあさんは死んぢまつた。
金次郎　死んだ。息子の歸るのを待たねえでか。
火の番　何を言つてるんだ。早く行け。達者でゐろよ。
金次郎　（酢を飲むやうにして）　ちやん。

（金次郎、逃げ去る。呼笛遠くで鳴る。火の番、嘲笑ふ。）

——幕——

（Harold Chapin : Augustus in Search of a Father に據る。）

綠の朝（一幕）

人物

一條少將義纏
左衞門光綱
竹　　姬
醫師玄齋
老臣小笠原淸長
侍女浮舟
庭作り仁作

時代

不　明

場所

不　明

年古りたる寺の廻廊。廊に續きて本堂の一端。廻廊のかなたに初夏の綠輝き、木の間より靑き空隱見す。廻廊のこなたは一面の植込。所々に立木。その內の一本、一際目立ちて靑葉繁る。

植込の中に罌粟の花の眞紅なるが七八輪見ゆる外、舞臺にも人物の衣裳にも、一切赤き色を嫌ふ。

庭作りの翁仁作、廻廊のこなたに蹲り、大なる利鎌もて、罌粟の花を刈りゐる。

美しく年若き侍女浮舟、廊の柱に倚りゐて、物思はしげに、仁作の鎌の心地好げに動くを見る。

仁作　（歌ふ）

　思ひそめたよこき紫の
　色に出でじと包むに餘る
　そでに淚はのんさてまことに
　こぼれぞかかる
　知らぬ昔はよそなるものを
　今は身に知る哀別離苦の
　うさを思へばのんさてまことに
　なさけもつらや

（やれ、やれ。やつとこれだけは刈つてのけたが、あすになると、又どこぞに咲く事であらう。誰がいつ播いた種か知らぬが、なんぼ刈つても又生える。不思議と罌粟の多い寺ぢや。その又花がどれもこれも、血を見るやうに眞赤なのも因果ぢや。（浮舟を見る）浮舟殿。何を思うてゐる。男の事か。）

浮舟　「日の蝕めたやうに」男とは。

仁作　可愛い男の事ぢや。

浮舟　氣樂な事を。わしやゆうべから寢はせぬぞよ。

仁作　また殿樣のお伽か。ゆうべもまんじりなされいでか。

浮舟　一睡もなされはせぬ。戸も閉さぬ方丈の緣で、夜一夜月の光を浴びてぢや。時々わしの方を振り向いては、「どうぢや、浮舟。わしの髮の毛は白うなつたか。」と仰しやる聲が、夜露の中から響いて來るやうに濡れてゐた……夏は來ても、夜中は寒い…… 殿樣は齒の根も合はぬ程がたがたと慄へてぢや。餘りの痛はしさに、もう御寢所へ、おはひりなされませと申し上げたりや、素直にお立ちなされて、敷居の側まで二足三足お步きなされたが、ふと物の怪にでも襲はれたやうに、立ち竦うで、「いや、いや……あれに姬がをる。あれに姬がをる……あれ、あの戸の後に」と帛を裂くやうな叫び聲ぢや…… その聲の恐ろしさ。わしでさへ戸の後に誰ぞゐはせぬかと疑うた程ぢや……その儘、夜の明けるまでお休みはなされなんだ……月の光の氣味の惡さ……梟も鳴いてゐた……やんがて、光綱樣も御寢所からお伽に見えたが、兄の殿がその有樣ぢや。男泣きに泣き明かされたよ。

仁作　はれ、やれ、哀れな。おりや氣違ひの殿樣よりは弟君の光綱樣の方が可哀さうでならぬわ……あの若い美しい侍が……夜の目も寢ずに兄の殿の御介抱ぢや……戀一つする間もあるまいに。

浮舟　またしても戀か。そなたは戀の事ばかり言うてゐる。

仁作　そんならおぬしは戀知らずか。

浮舟　戀の果はどうなるぞ。

仁作　ふしあはせなりや、殿樣のやうになる。

浮舟　しあはせでも、賴りない。光綱樣はどうぢやと思ふ。

仁作　なに。光綱樣か。うむ。さては、あの日毎に輿で通うて來る美しい姬が、弟の殿の……

浮舟　わしや知らぬわいの。

仁作　あれは何處の姬樣ぢや。おぬし知つてであらう。

浮舟　お妹ぢや。

仁作　お妹ぢやと。誰の、どなたの。

浮舟　殺されたお姬樣の。

仁作　殺されたお姬樣の。

浮舟　殿樣の御寢所で、奧方のお手にかかつた、あの春姬樣の妹御ぢや。

仁作　ふむ。それで讀めた。この間から、この寺の近所へ何の用があつて來るのかと思うたが、さては弟の殿に會はう爲ぢやな。

浮舟　わしや知らぬわいな。

仁作　したが、あの春姬とやらは、殿樣と樂しい戀の語ら

ひさかたに、姉姫の夜に刺し貫かれたと言ふは誠か。夜一夜物も言はれいで、血まみれな姫のなきがらを抱きしめてござつた殿樣が、夜の明けると共に、氣ちがひにならしやれたと言ふは誠か。

浮舟　それは御家老の小笠原樣に伺ふがよい。あのお方が何も彼も御存じぢや。

仁作　そこで、その妹御が……はて、光綱樣はその妹御を慕うてか。ゆうべも泣いてぢやとおぬしは言うたな。

浮舟　（聽耳を立てる）あれ。醫師が見ゆるやうな。それ、御家老と御一緒ぢや……わしやもう行くわいの。

仁作　どこへ行く。わしの部屋へ來て、もちつと詳しい話をしてくれぬか。なう、浮舟殿。浮舟殿。

浮舟　わしや何も知らぬわいの。わしや何も知らぬわいの。

（浮舟、庭の奥へ入る。仁作その後を追ふ。）

（本堂の方より醫師玄齋、老臣清長と話しながら出で來る。）

清長　早いものぢや。もう夏が參つた。この絲のすがすがしさ。吾等の胸も透くやうな。

玄齋　したが、この寺には罌粟の花が多い。あの血汐のやうな赤い色が、殿には何より禁物ぢや。かまへて病人に見せてはならぬ。

清長　そこに拔かりはない。庭作りの仁作に申しつけて、一輪咲けば一輪もぎ取らせ、二輪咲けば二輪摘み取らせてゐるがの、仁作の目にもこぼれがあつて、ついをとつひも裏庭の叢みから、眞赤のが一輪顔を出してゐたものぢや。殿は一目それを見らるると、顔色を變へて、ぶるぶると慄へてぢや。あの夜の恐ろしさがまざまざと見えたのであらうよ。やんがて、殿はつかつかとその花の側へ寄らしやれて、その赤い花をもぎり取らるるとの。ひしとそれを胸に抱かしやれた。さて、それからの物恐ろしい獨り言。吾等、腸を掻きむしらるるやうであつたわい。やがて、水を持て來いとの仰せぢや。浮舟が閼伽桶に清水を汲んで參るとの。それでお手を洗はしやるのぢや……又あの朝の事が思ひ出されたのぢや……ほんに、あの朝は殿の手も足も血まみれぢやつたわい。吾等それを洗うたがの。どこにもここにも血がこびりついて、一通りでは落ちなんだ……殿は吾等の洗ふ間、笑はしやれた……止度もなう笑はしやれた……吾等はあの笑ひ聲を一生忘るる事は出來まい。

玄齋　おぬしはその場に居合せたのぢや。おぬしは何も彼も知つてをる……そこで、おぬしはあの殺された春姫の妹御を知つてか。

清長　（優しく）うむ。あの竹姫樣か。

玄齋　おう。あのお方の名は竹姫か。實はその竹姫殿が手

前方へ參られた。

清長　それは吾等も知つてをる。

玄齋　おぬしにも話されたか。

清長　うむ。吾等にも話された。

玄齋　何の故やらいまだに分らぬ。不意に來て、義繼様に會ひたいと仰せらるるのぢや。

清長　さもあらう。さもあらう。

玄齋　したが、あれは殺された姫の妹ではないか……怨みを言ひに來たのかとも思うたが、どうも様子がさうでない。

清長　なんで怨みなどを言ひに來ようぞ。

玄齋　したら、何しに參つたのぢや。

清長　哀れな事ぢや。

玄齋　話してくれぬか。

清長　因果な事ぢや。

玄齋　うむ。さては……あの竹姫も殿に心を寄せてゐたのか。

清長　竹姫様の戀は弟の殿ぢや。光綱様ぢや。それを知るは吾等一人、いつぞやも殿のお供で、この裏庭を歩いてゐると、ふと孃に行き會うた。殿は姫の顏を一目見らるると、名を呼ばしやれた。姫が逃げうとすると、その袖を捉へて「光綱に會はさう。」と仰せらるるぢや。そこまでは、正氣よりも確であつたが、姉君に瓜二つの竹姫様ぢや。ふと亡き姫が面影に立つたかして、殿は俄に顏色を變へて、「許してくれ。わしも死ぬ。」と悲しさうに仰せらるるぢや。姫は驚いて逃げてしまはれたがの。吾等は又新しう泣かされた事ぢや。

玄齋　さても哀れな。殿はまだ姫の血に浸つてをらるるのぢやな。生きもせず死にもせずに。

清長　いや。それを誰が知らう。殿は吾等の命より、もそつと深い、もそつと廣い命を生きてをらるるのぢや。殿の命を操る絲は吾等思ひも及ばぬ。それを知る者は神の心のみぢや。

玄齋　誠に殿の片言隻語は、吾等の眠れる心を覺ますぢや。

清長　（本堂の方へ耳を傾ける）殿はまだ眠つてをらるるかの。（間）

（仁作の歌ふ聲、裏庭より聞ゆ。）

めせめせ草花何々ぞ
妻待つ夕顏白菊の花
美人草に戀草
ずんど秋風の立たぬ間に
なびかさんせをみなへし
おさしあひはござんせぬかいの

　　　　ちよつとかるかや

清閒　うむ。眠つてをらるゝ。なう、醫師殿。殿の寢顏を見て、殿の暗い命を思ふ者があらうか。吾等は殿の熟睡してをらるゝを見ると、まだ元服もなされなんだ頃の、清い幼な顏を又見るやうな心地がする。

玄齋　誠にさうぢや。昔の心が眠りの上を浮んで來るのぢや。根のない花が靜な水の上を浮んで來るやうにの。

清長　眠りが覺めたら、正氣になるといふ事はあるまいか。

玄齋　ないとは言はれぬ。殿の心はどこもそこなはれてはをらぬ。

清長　どうぞ、さうあつて欲しいものぢや。竹姬樣とゆるゆる話でもなされたら、癒らうも知れぬが、それも心の儘にはならぬ。

玄齋　竹姬樣はここへお出での筈ぢや。

清長　それはいつの事ぢや。

玄齋　けふぢや。今朝ぢや。

清長　したが、姬が分からうかの。何を姬に仰せられうかの。姬はあの朝の恐ろしさを思ひ出されて一言もよう口は利けまい。

玄齋　姬はその朝參られたのか。

清長　知らせを受けると、飛んで參られた。布に包まれた死骸が渡された。姬は布を上げて、姉君の顏を見ると、頰ずりをして泣かしやれた。やがて供の侍にそれを擔はせて、朝霧の中を母君の許へ急がれた。

玄齋　それでも、姬は殿を怨みはなされなんだか。

清長　何を怨まう。奧方にも罪はない。二人の孃にも罪はない。

玄齋　それに。なんで氣が狂はれた。

清長　それが悲しい天道ぢや。

玄齋　なによりもけふの出會が大切ぢや。不意と逢られうも知れぬ。

清長　したが、死なれうも知れぬ。

（仁作の歌、又聞え來る。）

知らぬ昔はよそなるものを
今は身に知る哀別離苦の
うさを思へばのんさてまことに
なさけもつらや

玄齋　や。お目覺めになつたやうぢやぞ。

清長　（本堂の方へ歩きながら、小聲に）もうそこへわせられた。

（仁作の鼻唄、なほ繁みの内に聞ゆる。）

（往へゐ少將義繼、綠色の狩衣着て、本堂の階に顯れ、怪しげに微笑みつつ、足音を竊むやうにして階を降りる。）

義繼　うさを思へばのんさてまことに、なさけも辛や。（兩手を前へ延ばし、尙笑ひつつ、そつと醫師の方へ進む。清長は身を退き、やがて本堂へ姿を隱す）どうぢや、玄齋。聞いたか。仁作の歌を聞いたか。

知らぬ昔はよそなるものを
今は身に知る哀別離苦の
うさを思へばのんさてまことに
なさけもつらや

聞いたか。好い歌ではないか。したが、玄齋……。

玄齋　（義繼の手を取る）今までお休みでござりましたか。手前參りました時、本堂の窓の側で、ようお休みでござりました。

義繼　ほう、見たか。あの白い蝶がわしの目の前を行つたり來たりするのを。わしが目を開くと、蝶は窓に留まつてゐた。捕へようとしたら、逃げた。日光の中へ消えてしまうた。（惱ましげに額に手を遣る）どうも、あの蝶はここから逃げたやうな氣がする……ここから逃げたのぢや。こゝから逃げたのぢや。あの蝶の目の前を飛んでゐる間は、よう眠られた。靜に寢てゐたとそちも申したな……わしは水の上に浮ぶ花のやうな心地でゐた。

玄齋　又お目をお閉ぢなされたら、そのやうなお心地におなりでござりませう。

義繼　いや。その目を閉づるといふ事が、容易な事ではない。わしは時々眼瞼がなくなつたのではないかと思ふ事がある。そちはあの泣き姫の話を知つてをるか。あまり泣き過ぎたので、下眼瞼が柳の葉のやうに土の上まで垂れ下がつて、晝も夜も目が明き通しに明いてゐたといふ。あの哀れな姫の話を。さう言へば、ゆうべわしも……（突然、恐怖の色、顏に現る。）

玄齋　（義繼の詞を遮り、その手を引いて、日向へ出る）さあ、さあ。この明るい所へお出でなされませ。まあ、よくお顏をお見せ下さりませ。けさは何といふ御機嫌のよいお顏をして入らつしやるのでござります……や……お召物も御新調でござりまするな。とんと若葉のやうなお色でござりまするな。

義繼　（自分の姿を見る）この狩衣が氣に入つたか。これはわしが光綱に申しつけて作らせたのぢや。「綠の狩衣を作つてくれい。わしが森の中にはひつても、木の葉が驚かぬやうにな。」とかう申したのぢや。すると、光綱がこ

の狩衣を持つて參つた。けさ著るのが始めてぢや。そちにも氣に入つたか。もうこれさへ著れば木の下に寢る事も出來る。草の中にころがつても好い。そつと木の葉の側に寄つて、木の葉の密語(みそかごと)を聞く事も出來る……(子供のやうに笑ふ) そこで、わしは光綱に申した。「この禮には好い夢をやらう。」とな。そこで、けさわしはこの狩衣を著て、夢を見る爲に窓の側で寢た。すると、光綱の待つてゐた戀人の來る夢を見た。したが、弟はまだそれを知らぬのぢや……あいつ、ゆうべ泣きをつた。まだその夢を知らぬからぢや……

　　うさを思へばのんさてまことに
　　なさけもつらや

(裏庭の繁みを見て笑ふ) そちは弟に會うたか。弟と話したか。弟は月の話をしたか。

玄齋　月の話とは。

義經　わしが月と仲よう遊んだ話ぢや。わしは少しも泣きはせなんだ。月がやさしう守をしてくれたでな……(突然、詞を切りて、食指を脣に當てる) そちにはあの鈴の音が聞えるか。(音樂でも聞くやうに暫く耳を傾けてゐる) 好い音色ぢや。聞えるか。

玄齋　あれは蜂の唸りでござります。

義經　いや、いや……そちには聞えぬのぢや。

玄齋　手前は年をとつてをりまするで……耳が遠いのでござります。

義經　そちの髮の毛は白いな。わしの髮の毛は……白うない。(又恐怖の色、顏に現る) わしはどうぞして髮の毛を白うしたい。ゆうべも月の光に夜一夜さらして見たが、つひに白うはならなんだ。「どうぢや。白うなつたか。」と浮舟に尋ねても、あいつまるで違うた返事をしをつた。浮舟はいつもわしの言ふ事を聞かぬ。いつも他の事ばかり思うてゐる……そこで、わしは浮舟に訊いて見た。「そちにはあの高殿の白い孔雀が見えぬのか。」と。ああ、さうぢや。わしは月の話をする筈であつた。わしはその白い孔雀を幾度も見たのぢや。見るといつも泣き出すのぢや。

玄齋　お泣きになつてはなりませぬ。男が泣いてはなりませぬ。

義經　悲しうて泣くのではない。悲しうて泣くのではない……羨ましうて泣くのぢや。そちはその白い孔雀の話を知つてをるか。

玄齋　一向に存じませぬ。

義經　百合姫といふ姫があつての。それが淸彥といふ若者と戀に落ちたのぢや。姫は高殿から繩梯子をおろして、毎

晩庭で男に會うた。或晩百合姫の夫がそれを見つけての、その縄梯子に綱を作つて置いた。姫は直ぐとその綱に落ちて、首を絞められた儘、夜一夜中空に釣り下がつてゐた。すると夜明けに美しい白い孔雀が高殿から東の方へ飛んで行つた。縄梯子にはもう姫の姿がなかつたと言ふのぢや。その白い孔雀は時々ここへも飛んで來る。あれは慥かに百合姫の魂ぢや。わしは、あの白い孔雀が羨ましうてならぬ。ゆうべもわしは、あの白い孔雀に言うた。「孔雀、孔雀、百合姫の孔雀。そち程しあはせな者はない。そちはそちの手の内に戀人の死ぬのを見ずに濟んだ。そちは戀人の血で息の詰まるのを覺えずに濟んだ。そちはそちが戀人の許へ通ふその縄梯子で急に咽喉を締められた。そちが泣く事はない。泣いて好いのは義經だけぢや。泣いて好いのは義經だけぢや。」かう言ふと、白い孔雀がわしの側へ飛んで來て、わしの手を涙で洗うた。そして、かう言ふのぢや。「わしはそなたの弟ぢや。光綱ぢや。そなたも決して泣く事はない。わしはそなたに好い夢を持つて來た。」（急に手を太陽の方へ延ばす。やがて、眩暈するやうに、よろよろとして、廊の柱の一つを抱き、それに頬を摺り寄せる。目を閉ぢた儘、息を弾ませながら暫くその儘にしてゐる）

玄齋　（優しく）　さやうに御興奮なされてはなりませぬ……たつた今殿様は木の下で靜に横になりたいと仰しやつたではござりませぬか。青葉のやうなお召物につけても靜になさらにやなりませぬ。木の葉はそのやうに喚き立てはいたしませぬ。

義經　（怪しきばかり靜なる聲にて）　そちにはあの鈴の音が聞えぬか。あれは姫百合が微風に鳴る音ぢや。聞えるか。（身を屈めて耳を傾ける）　人の死ぬ時鳴らすやうな鈴の音ぢや。……聞、突然、身を起す）や、輿のきしむ音がする。……誰ぞ來たな……おう、戀人ぢや。……光綱。光綱

玄齋　（狼狽して、それを押し留める）　さやうにお呼びなされますな。

義經　なぜ、呼んではならぬ。光綱はどこにをるのぢや。

玄齋　（躊躇して）　誰ぞ參つたのでござりまする……もう光綱様がお出で遊ばしたのでござりませう。

義經　（喜んで）　光綱は會ひに行つたか。もう戀人と一緒にゐるか。ああ、わしの夢は嘘ではなかつた。光綱はしあはせ者ぢや、わしはあれを呼ぶまい。あれを呼ぶ用はない。瞬きする間も振り向いたら、あれは樂しい時を失ふのぢや。わしは呼ぶまい……だが、わしはあれに會ひたい。あれの新しい顏が見たい。あれの新しい聲が聞きたい。あれの可愛い顏は皮を剝いだ巴旦杏のやうぢや……

今頃はさぞ赤くなつてゐる事であらう。（笑ふ）　どうしたらわしの姿を見せずに、向うの姿を見る事が出來よう。（裏庭の繁みを覗き込むやうにする）　そつと繁みの中へはひつて行かう。木の葉の面をかぶらう。兩手に草を結ひつけう。したら、わしは體中青うなる。そこで、草の中を潜つて行くのぢや、わしは竹姫があれに會ふ場所を知つてゐる　あすこへは百合姫も通うた……

玄齋　（王者の幻想を遮るやうに）　お聞きなされませ。又輿のきしむ音が聞えまする。

義經　（再び身を起す）　聞える……段々近う來る……見ろ、見ろ、玄齋。義經と木が一つになるぞ。（突と檣の木の側に驅け寄り、その木の葉の中に首を突き入れる。兩手に二つの枝の先を持ち、それを折り曲げて、首を卷く。そして暫く木の葉に顏の隱れた儘にしてゐる。狩衣の袖まくれて、兩の腕肱まで現る。）

玄齋　まるで木と一つでござりまする。

義經　木の葉が青う透き通つて見えるぞ。わしの目が青うなつたやうぢや。おう。小さな木の葉が、わしの唇の上に乘つてをる。柔かな木の葉ぢや。わしの息で溶けてしまひさうぢや。おう、溶けて來たぞ。うまい。蜂蜜の雫を啜るやうぢや。

玄齋　それは何よりでござりまする。いつまでもさうしてお出でなされませ。

義經　かうしてゐれば、木と一つぢや。光綱が側へ來ても氣がつくまい。わしはあれが竹姫と言ひ交す戀の囁きを、聞き洩らすまい。光綱は何んと言ふであらうな。分かつてゐる、分かつてゐる、それはそれは優しい詞ぢや。泣いてゐる者は笑ひ出すわ。死にかかつてゐる者は生き返るわ。光綱が默れば、この世は雲のやうに消えてしまふわ……あつ。（叫びを上げる）　血汐ぢや……（再び恐ろしき叫びを上げて、木を飛び離れる。枝が一本折れる）　血汐ぢや。血汐ぢや……（恐ろしげにおのれの腕に赤き血の小さくにじめるを見つめる。總身がたがたと慄へ出す）

玄齋　（義經の手を取つて慰める）　大丈夫でござります。大丈夫でござります。これは血ではござりませぬ……これは小さな蟲が殿樣のお腕に留まつてゐるのでござります……御覽なさりませ。これは臙脂蟲でござります。御運の好い兆でござります。そのやうに慄へる事はござりませぬ。御覽なされませ。もう何もをりはいたしませぬ。

義經　（何惱ましげに慄へつつ）　いや。そこにも見える。ここにも見える……わしの體中血だらけぢや……玄齋、早うこの血を取つてくれ……木の葉の中は淸淨ぢやと思うたが、やはりここも汚れてゐた……きのふも、わしは森の中で、傷のついてゐる木を何本か見た。

玄齋　あれは木樵が印をして置くのでござります。

義經　草の中にも赤い滴りがあつた。

玄齋　あれは山櫨の花でござりまする。

義經　いや。いや……(慄へながら、おのれの額や手に觸れ、その手をぢつと見る)

玄齋　殿樣のお手は白百合よりも白うござります。

義經　(櫨の木から折れ下がつてゐる枝に目をつける) わしは枝を折つたのぢやな。(その側へ近寄り、悲しげにその折れた枝を見る) 何んといふ酷い傷ぢや。折口が木の汁で濡れてゐる。木の命は悉くここから流れ出るのぢや……わしはむごい事をした。むごい事をした。

玄齋　御憂慮には及ひませぬ。その傷は自然と癒りまする。木は又新しい枝を出しまする。

義經　したが、この枝はどうなるのぢや。

玄齋　輪なりとお作りなされませ。

義經　(急に子供らしき微笑を浮べる。折れたる枝をもぎとりて、笑ひながらそれを輪にする)

知らぬ昔はよそなるものを
今は身に知る哀別離苦の
うさを思へばのんさてまことに
なさけもつらや

わしはこれで光綱に冠を作つてやる。見ろ、この枝には葉もある、花もある……まだ開かぬ花がある。これを弟が冠ると、花が咲くのぢや。糸はないか、金糸はないか。浮舟、浮舟。

玄齋　浮舟はあれに參りまする。手前は暫くおひまを頂きまする……誰ぞ待つてをるやうでござります故……御機嫌ようお出でなされませ……冠をおこしらへなさりませ。

義經　(笑ひながら、機嫌よく、腰を屈めて挨拶する) では、玄齋。又會はうぞ。(醫師の本堂の方へ行くを目もて追ふ)

思ひそめたよこき紫の
色に出でじと包むに餘る
そでに涙はのんさてまことに
こぼれぞかかる

(歌の詞を繰り返しつつ、靜に裏庭の繁みへ進んで行く。浮舟に會ふ。やがて、二人繁みに隱れる。)

(光綱、廊の下手より足音をぬすみて出で來る。兄の行方を見定めて、さて合圖をする。竹姫、本堂の後より恐る恐る出で來る。二人は恐ろしげに暫く無言にて

寄り添ひ、なほ義綱の姿を隱したる森の繁みを見入る。仁作の歌、裏庭より聞え來る。）

めせめせ草花何々ぞ
妻待つ夕顔白菊の花
美人草に戀草
ずんど秋風の立たぬ間に
なびかさんせをみなへし
おさしあひはござんせぬかいの
ちよつとかるかや　……

光綱　（傍へ靡にて）　兄は今森の方へ參りました……あなたの輿を見つけるに違ひありませぬ……したら、歸つて參りませう。（竹姫、驚く）　歸つて參つたら……歸つて參つても、ここにお出でなされまするか……兄にお會ひなされまするか。

竹姫　（氣遣はしげに）　お目にかかりたうござります。

（光綱、二三歩裏庭の方へ進みて、あたりを見廻す）

光綱　歸つて參る樣子はござりませぬ。森の中には大好きな場所がござりまする故、そこへでも參つたのでござりませう。（倒れ木を指さす）　先づ、これへお掛けなされませ。（二人ならんで腰を卸す。竹姫は何か思ひ迫りて、口の利けぬ樣子（顔色青ざむ）　この庭には躑躅の花がたんと咲きまする。したが、[illegible]が兄に見せてはならぬと申すので、庭作りが毎朝刈つてしまひまする。あなたのお庭にも花がたんとござりませうな。

竹姫　容木がたんと咲きまする。

光綱　母君は大層花がお好きであつた。今でもお好きでござりまするか。

竹姫　この頃は何を見ても悲しさうな顔をしてでござりまする。

光綱　（躊躇して）　まだ悲しんでをられまするな。

竹姫　（相手の顔をちつと見て）　あの日の朝と少しも變りませぬ。

光綱　あなたのお詞も慰めにはなりませぬか。

竹姫　道ならぬ戀ではあるが、誠の戀に捨てた命ぢや。惜しうはないと申してをりまする

光綱　それでは何も彼も御存じか

竹姫　奥方にも罪はないと申してをりまする

光綱　して、あなたのここへ參らるるをも御存じか

竹姫　よう知つてぢや。母も一度義綱樣に會ひたいものぢやと始終申してをりまする。それ程姫を思うてくれたお方ぢや。會うたら嬉しさに死なうも知れぬが、それでも會ひたいと申してをりまする。光綱樣、あなたのお噂も

申さぬ日はござりませぬ。

光綱　なに、わしの事までも。

竹姫　母はあなたがこのやうな寺にゐて、夜の目も寝ずに兄君の御介抱遊ばすをどんなにか褒めてをりませう。母はあなたをまるで自分の子か何ぞのやうに思うてをりまする。なう光綱様。一度妾が屋敷へお越し遊ばして、母にお會ひなされませぬか。

光綱　參る段ではござりませぬ。（熱情面に現る）　參る段ではござりませぬ。

竹姫　妾と一緒にお出でなされませ。母はまあどのやうに喜ぶ事でござりませう。きつと久しぶりで笑ひまする。

光綱　二つの悲しみが出會ふのでござりまする。心を知り合つた悲しみと悲しみが、顔を合せて笑ふ事でござりませう。

竹姫　したが、あなたと妾はどうなるのでござりませう。

（二人顔を見合はして、同じ感動に打たれる。光綱不意に立ち上がり、つかつかと裏庭の方へ進む。竹姫もその後を追ふ。間。）

光綱　（叉もとの所へ戻りて坐る）　兄は歸つて參りませぬ……兄はけさあの綠の狩衣を著たのでござりまする。あれを著ると何も彼も忘れた樣子でござりまする。きつと機嫌よう遊んでゐるのでござりませう。

竹姫　妾も一時はあの血汐に胸を潰しましたが、もう今ではそれも忘れました。流された血汐は叉妾の身内へ戻つて參りました。そして前よりも清い心で一際あなたをお慕ひ申すやうになりました。

（裏庭の奥に義繼の姿現る。その顔は木の葉の冠り物に蔽はれ、兩手には草の葉結びつけらる。狂人は怪しきばかり物靜に、廻廊の方へ進み來る。）

光綱　竹姫に向ひ、深へ聲にて）　したが、そのわしは、かやうな寺の住人でござりまするぞ。狂氣と悲嘆の外には何もない寺の住人でござりまするぞ。

竹姫　あなたには妾の心が分かりませぬ。

光綱　それが若し分かりましたら……（突然、兄の足音を聞きつけて、詞を切る）　兄が來ました。それへ來ました。

（二人、顔色を失ひて、物言はぬ綠色の幽靈にぢつと目を注ぐ。長き沈默。）

（狂人、廻廊の下に立ち留る。なほ折れたる木の枝にて作れる輪を持つ。眼笑ふ。白く美くしき齒、木の葉を通して光る。竹姫はそれに目を注ぎて魅せられたるが如く凝立す。光綱、狂人に近寄る。）

光綱　兄上。

義繼　わしは兄上ではない。（一歩前へ進む）　わしは兄上ではない。わしは草木の仲間にはひつた。草木はもうわ

しを恐れはせぬ……わしは仲間と一緒に森の中で、そち達の來るのを待つてゐた。そち達は樂しい話をしながら、わし達の仲間の側を通るであらうと思うてゐた。わしの仲間の草や木は喜んでそち達を迎へようと思うてゐたに……なぜそち達は嘘をついた。（竹姬と光綱、顏を見合はす。狂人は二人の方へもう一歩進む。裏庭に浮舟の姿現る。やがて、仁作も繁みから顏を出す。仁作、浮舟の側へ行く。暫くして、二人又繁みの中へ姿を隱す）義繼は綠の狩衣を貰うた禮に、光綱に、好い夢をやる約束をした。仁作が歌を歌うてゐる時、窓の側で見た夢ぢや。その夢には戀人がゐた。戀人は靑葉の中を輿で來た。したが、義繼がまだその話をせぬ內に、光綱はゆうべ泣いた方丈の緣から、戀人の來る姿を見て、物をも言はずに飛んで行つてしまうた。哀れな鳩ぢや。哀れな鳩ぢや。（弟の側へ近寄り、草の葉を縛りつけし兩手を、その額に觸れる。）

光綱　（氣遣はしげに）兄上。それは何を仰しやりまする。

義繼　（竹姬に向ひて）この男を御覽なされ……美しい男ではござらぬか。この男は透き通る程美しうござる。なんぞ大事なものがあつたら、この男の中に入れて御覽なされ。透き通つて見えまするぞ。何處の國にもこの男ほど澄み切つた川はござらぬ。山奧から湧き出る淸水のやうな男ぢや。わしはこの男をそなたに進ぜよう。どうぢや。連れて行つてたもるか。直ぐとここから連れて行つてたもるか。

光綱　（宥めるやうに）兄上。兄上。もうそのやうな事は仰しやりますな。兄上は何も御存じないのぢや。

義繼　いや。義繼の事を憂ふるには及ばぬ。あれは一人殘されても、一向構はぬ。あれはそちがくれた綠の狩衣を持つてをる。草木が友達になつてくれる……そちのやうに優しい草木が仲よしになつてくれる。さらばぢや……（ふと左の手にした木の枝の輪に氣がついて、詞を切る）見ろ。わしが窓の側で夢を見てゐた時、仁作が歌を歌うた……そちはあの歌を知つてをるか。

　　思ひそめたよこき紫の
　色に出でじと包むに餘る……

これがその紫の冠ぢや。わしはそちの爲にこの冠を作つて置いた。折れた枝で作つたのぢや。悲しや、枝を折らねば冠も出來ぬ。見ろ。傷はまだ新しい。（前に枝を折りし橙を指さす。木の枝の輪を光綱の頭にのせる。輕い足取りで後へ下がる。聲が低くなる）さらばぢや。さらばぢや……わしはもう義繼ではない……あとで森を通る

か。そんなら、待つてをる。待つてをる……(光綱、絶望したやうに竹姫の額を見る。冠を頭から取る。冠、地の上に落ちる。直ぐ兄の後を追ひ、その袖を掴む)

光綱　兄上。兄上。先づ。お聞きなされ。あなたは何も御存じないのぢや……まあ、これへお出でなされ。これへお出でなされ……(狂人の手を引きて、竹姫の前に立たせる。竹姫、石のやうになりゐる) なう、兄上。このお方が分かりませぬか。よう顔を御覧なされ。とつくと顔を御覧なされ……分かりませぬか。分かりませぬか……(狂人、突然、木の葉を額より拐り捨てる。目を据ゑて、竹姫の顔をぢつと見る) 分かりませぬか。竹姫殿でござりまするぞ……妹御の竹姫殿でござりまするぞ……(狂人、いきなり両手の間に、竹姫の頭を挟む。竹姫顔を仰向けて、死人のやうに目を瞑りゐる。狂人恐ろしきまでぢつと姫の顔を見る内、突然叫びを上げて、重き物にても捨つるやうに、姫を放す)

義經　あ。姫が死ぬる。姫が死ぬる。

光綱　いや、いや……よう顔を御覧なさりませ。

義經　わしは又重い死骸を抱いたやうな心地がした。

光綱　いや、いや……よう顔を御覧なさりませ。分かりませぬか。姫はあなたの前に立つてをられまする。分かりませぬか。

義經　(恐怖の餘り、眼眩む) 誰が立つてをると。誰が。誰が。

光綱　妹御でござりまする……竹姫殿でござりまする……まだお分かりにはなりませぬか。よう顔を御覧なされ。とつくと心を落ちつけて御覧なされ。とつくと心を落ちつけて御覧なされ。

義經　妹ぢやと。どうして妹が來たのぢや。どうして來たのぢや。(再び恐ろるやうに、竹姫の額に目を据ゑる。両手から草の葉をもぎ取り、我が手をぢつと見る。やがて、體中に手を觸れて見る。狂氣やうやう激しくなる。) どうして來たのぢや。春姫を取りに來たのか。母の所へ姫の死骸を運びに來たのか……姫には一滴の血の汚れもない……姫の血汐は悉くわしが浴びてしまうた……見ろ。この手を、腕を、胸を、髪の毛を……わしは姫の血汐で息が詰つた……ああ。怨んでくれるな。怨んでくれるなと言うてくれ。わしは姫を捨てたのではない。わしはもう生きてはをらぬのぢや……姫は死んだのではない。わしの手に抱かれて眠つたのぢや……姫はわしの胸に抱かれて、喜んで目を閉ぢたのぢや。そして、その目をもう明かなんだのぢや。わしは姫の暖い血汐に包まれて、たとへやうもない喜びを味うてゐた。すると、わしの抱いてゐる體が段々冷たうなつた。氷のやうになつた。

石のやうに重うなつた。鐵のやうになつた。たうとう死骸になつた。もう二度と、二度と、二度と生き返らぬ不思議なものになつてしまうた……（がたがたと膝を慄はせて、地面の上に倒れる。兩手に顏を蔽ひゐたる光綱、その物音を聞きつけ、兄の側へ走り寄りて、兄を扶け起さうとする。老臣清長も駈けつけて來て、狂人を抱へ起す。狂人は何兩手を竹姬の方へ延ばして、何事をか哀願する態）どうぞ、母上に怨んで下さるなと言うて下され。わしはもう生きてはをらぬのぢや。どうぞ姬と同じ棺へ入れて下され。姬と一緒に埋めて下され。わしを一緒に埋めねば、姬を埋める事は出來ませぬぞ……なぜなら、姬の血汐は悉くわしに附いてをるからぢや。姬の命は悉くわしの體にあるからぢや……（烈しく身を悶えて、二人の手を振り放す）放してくれ。放してくれ。わしに觸るな。わしを洗ひに連れて行くつもりぢやな……わしは行かぬぞ。わしは行かぬぞ……わしはこの儘かうしてここにゐたい。この儘かうして母君に見られたい……（急に氣を失ひさうにする。地面の上へ横に倒れる）かうして埋められて。

（少し前より姿を見せたる醫師玄齋、竹姬を倒れ木の方へ連れ行く。竹姬兩手に顏を掩ひつつそれに腰を卸す。光綱その方へ靜に歩む。醫師は狂人の上に身を屈め、手を觸れる。狂人、意識を回復する。額や頰や唇を撫で廻す。）

玄齋 （身を屈めたる儘）お休みでござりまするか。なぜかやうな所にお休みになりまする。白い蝶が飛んで行つてしまひましたぞ。森の方へ……殿樣は先程木の下で靜に寢たいと仰しやりましたな。そこへ御案内いたしませう。その狩衣で青葉の下にお休みなされたら、どんなに靜に眠れませう。殿樣は草や木と一つにおなりでございませう。どうでござります。そこへ御案内いたしませうか。

義綱 （あたりを見廻す）さうぢや……そこへ行て、そこへ行て……木の葉と一緒に眠らう……（老臣清長、悲しげに頭を垂れて去る。光綱なほ倒れ木の側に立つ、竹姬、立ち上がる。二人して、裏庭の方へ進む。竹姬も一度振り向いて、狂人をぢつと見る。やがて二人、姿を隱す。稍暫く沈默）

玄齋 さあ、參りませう……お手を取りませう。（義綱を抱き起さうとする）

義綱 わしはもう力がない……どうかもうちつと待つてくれ。たつた今、わしは森にゐたやうな氣がする……わしは草のやうに横になつてゐた……誰かがわしの上を踏んだ……確に誰かがわしの上を踏んだ……待つてくれ……

わしは今起きる程に……（やはりあたりを見廻して居る。やがて椿の木に目をつける） 見ろ。 玄齋。あの木にあんなに蜂が集まつてゐる。 蜂は蜜を吸はうとして、花の咲くのを待つてゐる……（あたりを見廻し、自分の捨てた木の葉の面と木の枝の冠とに目をつける） それから、その木の葉は。その冠は。（一道の光明、朦朧とした心を照し始める） 光綱は何處にゐる。光綱は何處にゐる。（額や頬や唇に手を觸れる。何も彼も忘れたやうな樣子になる。足を引き摺るやうにして、木の枝の冠の方へ行く。拾ひ上げる。それをぢつと見ながら、子供のやうに笑ふ）

思ひそめたよこき紫の……

――幕――

（Gabriele D'Annuncio : Sogno d'un Mattino di Primavera に據る。）

塵境（三幕）

人物

野村仙吉　富める大地主
權爺　その地方の最年長者。八十歳
友爺　水車小屋の雇人
お松
おさだ
お富
お淺
おりえ
　　　　野村の雇人
六造　牧羊者
仁作　牧羊者
村長

場所

東北の或深山地方

序の幕

或岩山の頂上近き所。雪ところどころに殘りゐる。前も後も右も左も山。後の高き山には白雪皚々たり。細き山道、上手より下手へ降るやうになりゐる。下手高き所に粗末なる羊飼の小屋。

朝の四時頃。星なほ天にあり。後景悉く霧に包まる。前景にには曙光既に迫り來りをり、小屋の周圍仄明かるし。

　舞臺暫く空虛。沈默。やがて、羊の鈴の音がする。

仁作　（姿見えず。下より）おうい。
六造　（姿見えず。下手より）おうい。
（やがて、仁作、山道の上手より頭を現す。六造、下手、小屋の後より姿を現す。）
六造　誰だ。仁作か。えら早えでねえかの。
仁作　われも早えでねえか。
六造　どけえさ行くだ。羊連れて。東か。
仁作　あによ。雉子平さ行ぐだ。
六造　狼に氣いつけろよ。
仁作　大丈夫だ。おら短刀持つてるだ。それに、犬さ連れて來ただから。
六造　あにしても、氣いつけねえぢやなんねえだ。
（この間に、兩人近寄る。上手下に羊の首につけたる鈴の音す。）
六造　けふは好い天氣になるぞ。
仁作　霧が晴れたらなあ。

六造　上さ行ぎたら、みんなに宜しく言つてくらつせえよ。
仁作　誰にも會はねえだか。
六造　三月この方人つ子一人見ねえだ。又こんで、われが上さ登つてしめえば、おら幾月立つたら口動かすか分かんねえだ。
仁作　寂しくねえだか。
六造　寂しいにやあ寂しいが、おら一人が好きだ。夜も晝も勝手に夢さ見られるだからな。こんねえなしあはせな事は外にねえだ。おら寐る前に、この山の神樣にきつと二つ願かけるだ。一つはお袋や親父の爲に願かけるだ。おら二人とも、ちつとも覺えちやゐねえけんどな。今あ神樣の右と左にぶつ坐つてゐべえと思つての。おらが事何もかも見てゐて貰ふだ。もう一つの願はよ。こりやあ神樣へ毎晩内しよで賴むだ。六造に嫁さ貰ひてえとな。
仁作　（笑ふ）あんだ、嫁だ。われ、女ち者知つてるか。一度でも女ち者見た事あるか。口利いた事あるか。
六造　そりやあ、これえなとけえ女の來る筈あねえ。だがの、年に一度、山ん下の村の祭に行ぐでな。そん時、遠くから見た事あるだ。だが、おらきつと今に嫁持つべえと思つてるだ。
仁作　（笑ふ）
六造　笑ふ事ねえだ。おら眞劍だぞ。ゆんべもおら小屋ん中に寐てゐての。いつもの願を一つかけてな。二度目の願を半分言ひかけると、ぐつすり寐込んでしまつただ。それで夢見ただがな。その夢だよ。おらの羊が一度にみんな山下の方へ逃げ出しただ。おらその跡を追つかけての、石い一つぽんと投げただ。獸ら驚いて留まるだらうと思つてな。ところが、その石があの蛇沼ん中へ落ちただ。すると、あの沼の水がの。鍋かなんぞのやうに、ぶくぶく泡吹いて來ての。そん中から雲のやうなものが湧いて來ただ。それが段々はつきりして來たで、目を据ゑて見るとの。それが、われ、女でねえか。手の眞つ白ななあ。漆のやうな黑い髮の毛えした別嬪でねえか。おら、たまげたぞ。ところが、その女、水の上渡つて、おらがの方へ寄つて來るでねえか。さうして、につこり笑ふでねえか。おら、思はず膝あ折つて、手え合はしたぞ。おらあさう思つただ。これが今におらがの嫁になる女だとな。山の神樣あおらがに嫁としあはせくれべえ思つて、そんで、夢で知らしてくれただ。
仁作　嫁としあはせを一緒くたにして考へてゐるな。ところが、嫁としあはせぢやあ、てえした相違だぞ。今に、そりやあ、われにも分かるこんだけど。
六造　おらが嫁はどつちから來るかな。（石を一つ拾ひ上げる）この石一つ天へ投げて見るだ。石の落ちたところ

から、きつとおらの嫁が還つて來るだ。（石を投げる）

野村仙吉の聲（上手の下から）誰だ、石投げんのは。あぶねえぢやねえか。人がゐるぞ。

仁作　あれ。誰か登つて來たぞ。

六造　構ふもんか。誰もおらがんとけえ來る筈あねえだ。

仁作　（透かして見て）旦那だぞ。野村の旦那だぞ。われ、旦那樣を知らねえだか。こけえら一圓、牧場も、畑も、森も、川もみんな、旦那樣のものだ。おら達みんな、上の羊飼も下の羊飼も、みんな旦那樣のけらいだぞ――見せえ。あの一緒に來るなあ、村一番の年寄りだ。權爺と言つてな。もう九十にもならうよ。

六造　（冷淡に立上がりながら）おらあ小屋へへえるだ。おらに用あるなら、おら呼ばるに違えねえだ。

（のろのろと後の方へ行く。）

仁作　（ちつと下の方を見る）あれ、二人の外にもう一人來るなあ、女だぞ。（笑ふ）たうとう山の神樣、六造に嫁さくれるだか。

（仙吉、お松、權爺、登場。）

仙吉　六造はゐねえか。

仁作　小屋にゐますだ

仙吉　權爺、行つて呼んで來い。（仁作に）貴樣は山羊の乳でも持つて來い。腹がへつた。

（權爺と仁作、小屋の方へ登り行く。權爺は小屋へ入る。仁作は小屋の外で乳など運ぶ用意をする。）

お松　旦那樣。なんで、おらこれえなとけえ引つぱつて來ただ。

仙吉　心配することたあねえだ。ちと考へる事あつて、連れて來ただ。

お松　なんだか、早く話して聞かしてくらつせえよ

仙吉　心配しねえでも好いだ。お前はいつもよくおれの言ふ事を聞いてくれたな。その代り、おれもお前を可愛がつて遣つた。お前が乞食の娘で、お前と親父と一緒にこの山下の村へお貰ひに來た時分の見じめさはどうだつた。おれはお前が氣に入つたから、お前の親父を水車小屋の番人にした。それはお前の器量に惚れ込んだからだ。ところで、今ぢやあ、お前があの水車小屋の主人だ。そんでおれに拂ふものと言つたら……（にやりと笑つて）安いものよなう。

お松　でも、そりやあ爲方ねえだ。お前樣あおらの御主人樣だもんな。

仙吉　さうだ。御主人樣だ。だから主人としてお前に言ひつけるだ

（六造、上の方に現れる。）

仙吉　あの男を見ろ。どうだ。可愛い奴でねえか。年も若

い・強さうな男だ。おらあれをお前の亭主にする事にきめた。

お松　(驚いて逃げ歸らうとする。)　おら厭だ。あんな者の女房になる位なら、蛇沼へ身い投げるだ。

仙吉　まあ、待て、ばか。おら言ふ事を聞くだ。もうかうなつたら爲方がねえだ。

お松　勘辨してくらつせえ。

仙吉　お前の爲にも好いと思つたから、きめた事だ。六造を亭主に持て。

お松　(仙吉に取られた手を振り拂つて)　放してくらつせえ。旦那樣。おら厭だ。おら厭だ。

仙吉　まあ、よくあの男を見ろちや。

お松　やだ。やだ。おら厭だ。(振り拂つて、下の方へ逃げて行く)

(六造、お松の直ぐ側まで來て、口を明けて女の樣子を見てゐる。)

(仁作、乳を運んで來る。それから、小屋の方へ歸つて行つて、無關心に何か外の爲事をする。)

六造　(まだ驚いたやうに、ぼんやり女の行くへを見詰めてゐる)　好え女だなあ。

仙吉　おい、六造。われこねえな所にゐて面白いか。

六造　面白い事もねえけんど、別にはあ不足はねえだ。旦那樣。

仙吉　もつと好い暮らしがしてえとは思はないか。

六造　でも、どうしたら好えだか、分かんねえもの。

仙吉　そりやあ、羊飼も惡くはない。だが、もつと好い爲事あつたらどうしるだ。おらこの山下に水車小屋一つ持つてるだ。われあの水車小屋の番人にならうとは思はねえか。

六造　はて、飯せえ食へりやあ、あんでもしるだ

仙吉　水車小屋の上に、しかも女房一人附けて遣るだぞ。

六造　女せえおらがの氣に入りやあ、おら厭とは言はねえだ。

仙吉　今見たらうで　あの女だ

六造　(驚いて)　あに、今見た女だと　旦那樣、おらがをからかふ氣だな。それとも、おらあまだ夢見てゐるだか。

仙吉　まあ、おらがの側へ來て、よく聞くが好えだ。水車小屋には今番人ゐねえだ。あれの親父死んだでな。ところで、おらお前の事を考へついた。よけりやあ、山を降りて來い。そして、さつきの女を女房に持て。お前を水車の番人にして遣るだから。

六造　それ、ほんの事かね。旦那樣。

仙吉　ほんの事だにも。

六造　はれまあ。あんちうしあはせなこんだ。おらがの夢

はたうとう本物になつたぞ。

權爺　旦那樣からわしに御相談があつたでの、わしお前の名をさう申しただ。わしはもう長い間、この山へは來た事がねえが、お前の事あよく知つてるだ。お前は元氣の好い若え者だ。さあ、早く承知をして、神樣にも旦那樣にも禮を言ふが好いだ。

仙吉　どうだ。承知いしたか。

六造　だが、女の方はどうだ。おらがを氣に入らねえと言つたらどうしるだ。厭だと言つたらどうしるだ。

仙吉　大丈夫だ。それおらに任しとくが好いだ。

六造　でも、今あの女、おらがを見ると、逃出したでねえか。

仙吉　女といふものはさうしたもんだ。好いから、早く支度をして、山の下へ降りて來い。あした直ぐ婚禮しるだ。その支度もおらがみんなして置いただ。

六造　あに、あすだ。もうあす直ぐ婚禮しるだか。

權爺　早過ぎる事はねえだ。しあはせが來ただ。しつかり摑まへて放すでねえだ。

（仙吉、權爺、歸る用意をする。）

仙吉　では、水車で待つてるぞ。

六造　きつと參りますだ。

權爺　待つてるぞ。

（仙吉、權爺、山を降る。）

六造　仁作、聞いたか。今ん話を。神樣、たうとうおらがに女房くれたぞ。おら、谷へ降りるだぞ。

仁作　（上から降りて來る）あんだ。われ谷へ降りると。あの狹つこましい所へか。小さな家のごちやごちや立つてる所へか。あすこは空氣い惡いぞ。第一、埃だらけだぞ。とても、この山のやうな氣持の好い事にやあ行かねえぞ。每日人が喧嘩したり口論したりばかりしてる所だぞ。それでも、われこの靜な山あ捨てて行く氣か。どうでも谷へ降りる氣か。

六造　しあはせになりに行ぐだ。おらがの羊はわれに賴んだぞ。旦那樣がおらがの代りよこすまでな。

（霧、段々霽れて來る。太陽の光、白雪に輝きて、目映ゆし。）

六造　さあ、もうこの山にも別れだぞ。峯でも谷でも草場でも、おらがの知らねえ所はねえ。この山にも別れだぞ。

（六造、靜に山を降る。）

六造　好いか、仁作。羊は賴んだぞ。狼い氣いつけてくんろ。われも達者で暮らせ。下へ降りても、われが事あ忘れねえぞ。（犬を呼ぶ）黑よ。われも達者で暮らせ。おらがの事を忘れるな。

（段々姿が見えなくなつて、聲だけが聞える。）

六造　仁作よ。達者で暮らせよ。おてんと樣おらがの道を

照らしてゐるぞ。おらあ仕合せになりに行ぐだぞ。……

（聲、なに聞える）

——幕——

前の幕

或水車小屋の内部。上手に大なる水車。但し、静止す。その上に木の樋。但し、その中に水なし。下手に小さき戸口。戸口の下に一段ほどの階段。上手に別の戸口。正面奥に大なる入口の扉あり。両開きにて、開けば、この地方の景色見ゆ。遙なる地平の上に、雪を持ちたる前の幕の山の遠景。下手前に大なる竈。そこここに穀類の入りたる袋。粉ひきの石臼、その他。日没少し前。

（友爺、穀物を篩にかけてゐる。野村の雇女、おさだ、お富、お淺、一緒にはひつて来る。）

おさだ　友爺、ほんの事かね。

お富　それとも、嘘かね

お淺　話してくんろよ。

おさだ　早く聞かしてくんろよ。お松つ子、ほんまに婚禮しるだかね。

友爺（知らん顔をして、篩を空にし、やがて又新しくそれに穀物を入れる）

　　裏の水口明ければほんに
　　待つてゐるだよ花嫁様が……

おさだ　聞えねえだか。友爺や。あんとか返事いしてくれちや。

お淺　ほんまにお松つ子は……

お富　婚禮しるだか。

おさだ　ほんの事か。

お淺　それとも、こしれえた話か。

お富　跡形もねえ事か。

三人　聞かしてくれちや。返事してくれちや。話してくれちば。

友爺（前のやうに）

　　裏の水口明ければほんに
　　待つてゐるだよ花嫁様が……

おさだ　はゝ、爺や腹あ立つてるな。お松つ子に嫌はれたで怒つてるな。お松つ子の父さんが死ぬと、われ喜んで、小屋の番人さなつたつけが、一年立つても、お松つ子はわれ亭主にしべえたあ言はねえだ。

お富　誰言ふ者あんべえ。
おさだ　爺過ぎるだからのう　男わる過ぎるだからのう。
お富　意地惡だからのう。
お淺　まあ、そねえた事どうでも好いから、お松つ子の事話して聞かしてくらつせえよ。お願えだあから。
友爺（前のやうに）
　　裏の水口明ければほんに
　　待つてゐるだよ花嫁樣が……
お富　その待つてるなあ、爺や、われかね。
おさだ　一てえ、お松つ子どこにゐるだね。
お淺　そだ。お松つ子、どこにゐるだね。
お富　水車にゐるだかね。
友爺（態と横を向く）
おさだ　呆れた頑固ぢぢいだ。
（正面の戸口より、年の若いおりえ、何か縫ひながらはひつて來る。閾の上に立ち留る。）
おりえ　おら鷄みんな小屋さ入れただ。ちつとへえつても好いだかね。
お富　好いとも。好いとも。
おりえ　おらお松姉えとけえ來ると、いつもみんなして叱るでねえか。けふは叱られねえか。お松姉え、えらくおら可愛がつてくれるだから、そんで、おら遊びに來るだよ。
おさだ　おりえつ子。何か聞いた事ねえか。
お富　なにか噂聞かねえか。
お淺　聞いたら、話せちや。
おりえ（當惑して）あに話したら好いだ。
おさだ　われ權爺に會はねえだか。
おりえ　會つただ。權爺ならいろいろ話してくれただ
三人　ふむ。どねえな話しただ。どねえな事言つただ。
おりえ　權爺が言ふにやの。こけえらにあるもなあ、みんな旦那樣のものだとよ。野村の旦那樣の。おら達の家でもよ。水車でもよ。旦那樣住んでござらつしやる、あの立派な屋敷でもよ。山の上のものも、山の下のものも、みんな旦那樣のものだとよ。
お富　そねえな事あ誰でも知つてるこんだ。
おさだ　珍しくもねえ。
おりえ　まあ待てよ。おらもつと知つてる事あるだ。權爺が言ふにやの。これから歩き出して、あすの朝まで休まずに歩くとしるな。その途中の森でも畑でも牧場でも川でも瀧でも、みんな旦那樣のものだとよ。花でも鳥でも魚でも蝶々でもみんな旦那樣のものだとよ。野村の旦那樣の。
おさだ　そねえな事あ、誰でも知つてるこんだ。

おりえ　だが、おら知らなかつただ。おら山から來た權爺に聞いて、始めて知つただ。
おさだ　して、權爺は今どこにゐるだ。
おりえ　權爺は旦那様と一緒に、あの雪のある笠子山登つて行つてな。羊飼一人連れておりて來ただ。その羊飼が
の、姉え達、今夜、お松姉えと婚禮しるだとよ。
三人　さうれ見ろ、だあから、言はねえ事か。
友爺　（出たりはひつたりしながら、總てを聞いて）　たうとう知つてしまやがつただ。
お富　（おりえに）　今夜か、誰がさう極めただ。
おりえ　誰がきめたと。旦那様がきめたにきまつてるだ。
お松姉えと羊飼と一緒にしる事も旦那様きめただ。姉えが旦那様のものだとは、前から知つてゐたつけが、その時分にやあ、はあ、何のわけだか分からなかつただ。
お富　あんだと。
おりえ　おら聞いた事あるだ。
おさだ　そんだら、なぜ今まで默つてゐただ。
おりえ　だとつて、何のわけだか分かりもしねえ事を、人に話すなあ、おら厭だもんな。
三人　好いから話せちや。聞かしてくれちや。
おりえ　いつの晩げだつけの。お月様牧場あ照らしてゐた時な、おら草つ原へ横になつてるとの。川つぷちを姉えと旦那様連らつて歩いて來るでねえか。姉えは泣いてるだ。そして、これえな事しても離れるこんぢやあねえ。「おら、お前のものだ。どれえな事しても離れるこんぢやあねえ。」つてな。そして、又泣き出しただ。すると、旦那様が言ふにやの。「われがどんな男舁に持つても、おれがどんな女房に持つても、おれはお前のものだ。いつまでもお前のものだ。」と、かうだ。おら、おらの耳で確にかう聞いただ。さあ分からねえだ。姉えが旦那様のものだと言ふに、不思議はねえだ。おらだつて、誰だつて、みんな旦那様のものだあからな。だが旦那様が姉えのものだ言ふなあ分からねえだ。
おさだ　ふむ。ふむ。そんで。そんで。
友爺　默らねえか。阿魔。お松つ子來たぞ。
（女達、お松がその部屋より出て來る事とのみ思ひて、下手の小さき戸口の方を見詰める。ところが、お松は上手なる水車場の戸口から出て來る。お松は首うなだれて女達の方は見向きもせずに、舞臺中央まで來る。女達のそこにゐるのに氣がつくと、急いで自分の部屋へ驅け込んでしまふ。）
おりえ　はれ、行つてしまつた。
おさだ　お松ちや、お松ちや、お前本まに婚禮しるだあか。
お富　どうも、さうらしいぞ。婚禮しるらしいぞ。

（友爺、正面の戸口から外へ出る。）

お富　あの驢馬、あんにも知らねえだ。馬鹿おやぢめ。あんにも知らねえだ。あんにも知らねえで。はは、お松つ子と……はははは。

（三人して笑ふ。）

おりえ　あに笑ふだ。

おさだ　婚禮はめでてえものな。

お淺　この婚禮は、はあ、別してめでてえものな。

お富　この話いしたら、誰でもはあ笑ふぞ。お松つ子が、ははは、羊飼と、ははは、友爺の馬鹿おやぢが、ははは。

おさだ　今夜は、はあ、みんなで祝ひに來べえぜ。

お淺　みんなして、みんなして、祝ふべえよ。

（お松、怒り泣きに泣きながら、下手の戸口から姿を現す。）

お松　みんな歸れちや。おら、誰の顔見るも厭だ。

おさだ　はれ、ま、お松ちや、どねえしただ。

お富　わしらあ、もうみんな知つてるだ。

お松　歸れちや。出て行げちや。

お淺　お松ちや。わしらあお前に……

お松　歸れちや。歸れちや。歸らねえか。

（女達が歸らうとしないと、お松はそこに置いてあつた女達の手籠などを、正面の戸口の外へはふり出す。）

お松　出て行げ。みんな出て行げ。

（女達叫びながら逃げ去る。）

おりえ　（戸口のところに唯一人殘りゐる）あんねえ。おらも出て行くだか。あんねえ、おら、おりえつ子だに。

お松　（優しく）はれ。おりえつ子か。われなら好いだ。こけえ來い。こけえ來い。

おりえ　あんねえの頰ぺた濡れてるだに。

お松　構はねえだ。

おりえ　なぜ、泣いたりなどするだ。

お松　おら、もう笑ふ事あ出來ねえだ。

おりえ　でも、あんねえは婚禮しるのでねえか。

お松　婚禮しると……さうだ。おら、なぜしめえまで厭だ厭だ言はなかつただ。こんねえな間違つた婚禮、世の中にあるべえか。まるで、はあ、氣違えの婚禮だ。おら悲しいだ。誰も、はあ、おらの味方あねえだ。誰も、おらの力になつてくれる者ねえだ。

おりえ　あんねえ、おらがゐるでねえか。

お松　（相手の詞を聞かずに）誰も、はあ、おらの困つてる時、助けてくれるもなあねえだ。あんだ、あの六造見てえな男。あれがおらの亭主か。おら顔見るも厭だ。おら一人でゐてえ。おら一人でゐる方が餘つ程好いだ

（表に人聲が聞える。）

お松　おりえつ子。行つて見ろちや。野村の旦那でねえかな。おら泣いてるとこ見られると、旦那様にぶたれるだ。

おりえ　そねえな事しる法はねえ

お松　いや。そでねえだ　おら泣いてると、えらくぶたれるだ……

おりえ　分かんねえな。悪い事しもしねえものが、なんでぶたれるだ。

お松　まあ、好いから、なんにも言はずと、行つて見ろちや。

（無理に、おりえを外へ押し出す。）

お松　おらあ旦那のもんだ。旦那の自由になんねえぢやならねえだ。だが、おら何悪い事しただ　なんで、これえな苦しみしねばならねえだ。おら死にてえだ。

（表に人聲聞える。）

お松　おら連れに來ただな。あの莫迦も來たに違えねえだ。おら顔見るも厭だ。

（自分の部屋へ驅け込む。）

百姓達　（正面の戸口の外にて）　來たぞ。來たぞ。

おりえ　何處に。何處に。

おさだ　山降りて來たぞ。お前まだ見ねえだか。

お淺　今直ぐこけえ來るだよ。

お富　花聟様がよ

（一同笑ひながら、下手へ去る。）

友爺　（權爺を連れてはひつて來る）　ぬしに、ちと聞きてえ事あるだ。

權爺　あんだ。

友爺　ぬしやあ、始めてこけえ來たか。

權爺　始めて來た。わしや山に住んでるでな。この村へはまだ來た事ねえだ。

友爺　そんでも、俺の旦那、野村の旦那様あ知つてるだか。

權爺　立派な旦那衆だ。有難え旦那様だ。

友爺　だら、他の事はあんにも知らねえか。

權爺　どねえな事だ。言つて見せえ。

友爺　六造たらいふ奴あ莫迦者か。そんでねえなら悪者か。

權爺　なぜ、そねえな事聞くだ。はあ、讀めたぞ。われ、お松つ子に惚れてゐるだな。そんで……

友爺　ふざけるでねえだ。

權爺　だら、なぜそねえな事言ふだ。

友爺　まあ聞け。直ぐ分かるだ。一體、あの娘は親父と一緒にこの村へ乞食して來ただ。ほんまの親父だかどうだか。そりや誰にも分からねえがな。あにしても、可愛い娘つ子だつたあよ。そんで、野村の旦那様あ、娘可哀さうだちて、この水車小屋その親父にくれてやつただ。それから、旦那とお松つ子は……もう、あとは言はねえでも分かつてるだ。

権爺　嘘だ。そら嘘だ。
友爺　まあ、しめえまで聞けよ。そんだら、あんで、あの娘つ子に亭主なんど探して來ただ。旦那はの、近頃ちつとんべえ工合悪い事あつてな。借金澤山こしれえただ。愚圖愚圖してると差押へたらいふ事されるちうだ。さうすりやあ、あのでつけえ身上みんな飛んで行つちまふだ。ところへ、丁度好い緣談持ち上がつただ――大金持のお孃さんがの、旦那と一緒になりてえ言ひ出しただ。さてさうなると、悪い噂あつちやなんねえ。お松つ子との事も、さつぱりと片づけにやあなんねえだ。そりや世間の當り前でねえか。そんで分かつたろ。お松つ子が、あの莫迦もんの女房さならなけりやならねえわけがよ。
権爺　そりや嘘だ。（立ち上がる）
友爺　誰にでも聞いて見るが好いだ。誰一人知らねえものあねえ事だに。
権爺　だとつて……
友爺　好い年して、おらがのやうに笑はれるが好いだ。
権爺　莫迦こくな。
友爺　莫迦とはなんだ。
（二人が棒切れを持つて、猛り立たうとするところへ、外から大勢の人聲が聞える。二人、手を引く。）
（六造、おりえ、お富、お淺、おさだ、その他男女大勢、物騒がしくはひつて來る。夕映やうやく夜の薄暗になる。）
おさだ　（正面の戸口の外で）來たぞ。來たぞ。
お淺　六造が來たぞ。
お富　花聟様が來たぞ。
六造　（戸口の所に立ちて）さうだ。おら來ただ。山から谷へ駈け降りて來ただ。おら來ただ。だがのし、あの人は何處にゐるだ。おらがの花嫁様は。
おさだ　（呼ぶ）お松ちやや。お松ちやや。
お富　出て來せえ。われが花聟。山から來たぞ。
六造　（一同の、笑ひながら自分の廻りへ押し寄せ來るを見て）はれ、みんな嬉しさうな顔してるだな。おら婚禮しるで、みんな喜んでくれるだな。われ、お松つ子知つてるだか。好え女でねえか。
おさだ　お松つ子はほんとに器量よしだあよ。
お富　村一番の娘だあよ。
お淺　われ、仕合せ者だな。
六造　禮言ふだ。おら、みんなに禮言ふだ。これえな仕合せ來ようたあ。おらも知んなかつただ。まあ、考へて見ろさ。お松つ子がおらがの女房になるだ。おら、目え廻りさうだ。お松つ子が、おらものになるだ。今夜からおら女房になるだ。

權爺　（友爺に）野村の旦那樣に限つて、われの言ふやうな事ねえだ……

友爺　自身で聞いて見るが好いだ。野村の旦那樣によ。見ろ、旦那樣來ただから。

（野村仙吉、入り來る。）

おりえ　旦那樣、入らつせえまし。

仙吉　六造はまだ來ねえか。

六造　來てるだ、旦那樣。もうちやんと來てるだ。おら、旦那に禮言ふだ。

仙吉　お松は何處にゐる。

おさだ　部屋にゐるだ。

仙吉　行つて、呼んで來い。

（おさだ去る。）

仙吉　（六造に）もう支度はみんな出來てるぞ。仲人には村長賴んだだ。もう一時すると、お前ら夫婦になるだぞ。盃取り交すだ。それでもう何も彼も濟むだ。

六造　なんと禮言つたらよかつぺえ。なあ、旦那樣。

おさだ　（お松の部屋から出て來る）直んぐ來るとよ、お松ちや。

仙吉　直ぐ來るとは何だ。おらが來たら、呼ばねえでも出て來るが好いだ。

（お松の部屋に近づく。）

仙吉　お松。

權爺　（仙吉の後を追ひながら）旦那樣、わしちつと話あるだ。ちつとんべえ心配な事だで。

仙吉　お前の心配がおれに何の關りあるだ。あとにしろ。

權爺　さうでねえだ。みんなの爲だ。直ぐでなけりやなんにもならねえだ。

（この途端に、お松、自分の部屋の戶口に現れる。）

仙吉　やつと出て來やがつただ。（つき纏ふ權爺に）うるせえ。あとにしろちや。あとにしろちや。

お松　（階段を降りて來る）さあ、旦那樣、めえりましただ。（さう言ひながら、仙吉の直ぐ側へ寄り小聲に）旦那樣。お願だから、勘辨してくらつせえ。

仙吉　（大聲に）どうしただ。なせ、そんなに塞いでるだ。まあ聟の六造を見ろ。お前は仕合せもんだぞ。

おりえ　はれ、あんねえは泣いてるだに。

おさだ　子供見てえだの。

お松　（急いで淚を拭く）誰だ。おらが泣いてるなんて誰が言つただ。旦那樣の言ひつけだ。おら嬉しいだ。見ろつちや。おら笑つてるだ。

六造　さうだともよ。婚禮ほどめでてえ事外にねえだもの。なあ、みんな。（一同笑ふ、お松に）みんな、あねえに喜んでくれてるだ。なぜぬしやあおらがに一言も詞かけ

てくれねえだ。一言もよ。なせだ

お松　もう行かうでねえかよ。

仙吉　（六造の著てゐる物を指さして）　こねえな汚ねえ裝で盃の取り交せは出來ねえ。著物の支度もしてあるだ。お舅樣はめかさなくちやいけねえだ。好い男にならねえと花嫁に嫌はれるだからな。

男達　あれがめかすのだとよ。

女達　好い男になるだとよ。

（一同、聲を上げて笑ふ。）

六造　あに、笑ふだ。あに、をかしい事あるだ。をかしくもねえ事笑ふと、頸けたはり曲げるぞ。

（拳を固めて、一人の男に近づく。女達叫び散る。大喧嘩が始まりさうになる。）

お松　みんな逃げろよ。この莫迦あ、なにしるだ。

仙吉　六造。

六造　（直ぐと氣を靜める。混雜止む）　おら、腹立つちつぽくていけねえだ。

仙吉　まあ、好いから、早く著物著て、婚禮の支度しろちや。村長が待つてるだ。

六造　さあ、みんな來て、おらがのめかす手傳ひしてくれちや。おら惡かつただ。さあ、みんな笑つてくれちや。おらが祝え日だ。おらがの婚禮だ。みんな喜んでくれちや。

（男達、六造と共に上手へ去る。）

おさだ　（女達に）　窓から覗いて見べえよ。

女達　そだ。覗いて見べえ。覗いて見べえ。

（女達、中央の戸口から外へ出る。丁度その時、村長が來る。女達ぴよこぴよこお辭儀をする。）

權爺　（仙吉に）　旦那樣。わしほんとに話あるだがな。大事な話だに

仙吉　（煩さげに）　そんなに急ぐ用なら、外で待つてゐろ。直ぐ行くだから。

權爺　では、待つてをりますだ。旦那樣。（去る。）

（この間に、村長入り來り、仙吉の側に立つ。）

仙吉　村長。待遠だらうが。まだ花嫁にちつと言ひ聞かして置く事あるだに、一足先きへ行つて貰えてえだ。だが、おら行くまで式は待つてるだぞ。式はみんな一緒の所でなけりやなんねえぞ

（村長去る。）

（お松は總てこの間、無關心にて、後の方にある石臼に腰をかけてゐる。舞臺が空になると、彼女は默つてぢつと仙吉の姿を見詰める。）

仙吉　お松よ。

お松　旦那樣。おら旦那樣にどねえな事しられても構はね

えだ。だが、あの男と一緒にする事だけはどうかよして貰えてえだ。

仙吉 （嘲るやうに） お前にやあ、もつと可愛い男があるだからな。さうだな。（お松を引き寄せようとする。お松逃げる）お前、おら怨んでゐるだな。何も怨むこたあねえだ。お前はおらがもんだ。やつぱりおらがもんだ。お前はいつまでもおらがもんだと思つてるが好いだ。さあ、ここへ來い。まだ話あつから。（荒々しく女の手を掴む。女の從順なのを見ると、安心して笑ふ。） お前、あの六造が怖えか。

お松 怖えといふ事もねえけんど。

仙吉 なら、おらの言ふ通りするが好いだ。おらだとつて、この婚禮平氣で見ちやゐられねえだ。お前にあの男氣に入られちやなんねえんだ。

お松 でも、何もかも承知で亭主になんなら、まだ好いだ。旦那様、あの男だましてるだもんな。そりやあ、の男莫迦にしろと言ふもんだ。（表に聲高な笑ひ聲聞える。お松仙吉を離れる。）おら莫迦にしろと言ふもんだ。

仙吉 お前とおらとの仲に變りはねえだ。おらやつぱりお前に惚れてるだ。分かつたか。

お松 なんだか、おら心配でなんねえだ。

仙吉 おら、この世にお前より可愛い女、外にねえだ。おら一度でもお前捨てた事あるか。おら今お前を外の男に遣るだが、どうも、そりや、さうしねばならねえ事になつたからだ。おらも婚禮するだが、おら相手の女を何とも思つてるぢやねえ。持參金貰えてえばかりだ。そりや、お前もよく知つてるな。何せえ、相手は町長の娘だで、世間の惡口防がにやならねえだ。おら、世間の爲に、お前を六造にやるだ。おら、ちつともお前遣りてえ事はねえだ。おら、お前に惚れてるだかんな。おら、お前がなけにや生きちやゐられねえだ。おら、どうしてもお前放す事ぢやねえぞ。

お松 おら、あんだか恐ろしいな。

仙吉 なに、恐ろしい事あんべえ。おら、お前が可愛くてなんねえだ。

お松 旦那様。

仙吉 まだお前にやおらが心分かんねえか。おらお前を遣るなあ厭なんだ。分かつたか。厭で厭でたまらねえんだ。

（表に又笑ひ聲聞える。）

仙吉 どうだ。婚禮しに行くか。

お松 參りますだ。

仙吉 だら、愈六造の女房になるか。

お松 なりますだ。

仙吉 そんでも、やつぱりおらのもんでゐるか。

お松　（逃げろ）　だめだ。だめだ。
（また表で笑ひ聲が聞える。）
お松　（思はず仙吉の側へ飛んで行く）　さあ、もうみんな迎ひに來ただ。
仙吉　（勝ち誇つたやうに笑ふ）　よし。よし。今に又お前はおらん所へ歸つて來るだ。
（六造、お淺、お富、おさだ、おりえ、その他の男女入り來る。）
男達　六造はどうしてもめかすなあ厭だちうだ。
女達　好い著物著るなあ、どうしても厭だ言ふだ。
六造　おら、あんねえな莫迦くせえもな著られねえだ。著てえ者あ著るが好えだ。おら厭だ。おら、この古い著物の方が餘つ程好えだ。
仙吉　お前がそれで好いなら、おら構はねえだ。さあ、お松、支度は好いか。
お松　おら、いつでも好いだ。（仙吉に小聲で）　さあ、もうこれで、二人の事あ、おしめえだ。
仙吉　（小聲で）　おら、さうは思はねえだ。今夜もおら、お前へんとこへ行くつもりだ。お前の部屋に明かりがついたら、おらが來ただと、さう思へ。
おりえ　あんねえ、羽織だ。
（權爺、正面の戸口からはひつて來る。）
お松　禮言ふだ。お前ふんとに可愛い子だな。
おりえ　あんねえが可愛がつてくれるから、おらがもあんねえを好くだ。なあ、あんねえ、いつまでも可愛がつてくれちや。
お松　おいよ。（仙吉に）　旦那様、これ見せえ。おらがも昔はおりえつ子のやうに罪がなかつただ。まだ、この水車へ來た時分はよ。
仙吉　（脇を向く）　さあ、みんな、出かけるだ。
（廣く開かれたる正面の戸口より、人々行列を作つて出て行く。五六の男は炬火を手にする。お松はおりえの肩に手をかけて、戸口へ向ふ。六造、そこに待ちゐる。男女押し合ふ。）
權爺　（仙吉に）　旦那様。わしどうしても旦那様に言ひてえ事あるだ。その返事聞くまでは、この婚禮させる事ならねえだ。
仙吉　（權爺に）　なんだと。（躊躇してゐる男女に）　さあお前ら先きへ行け。おら直ぐ行くから。
六造　（門の外で）　さあ、出かけろ。さう押しちやなんねえだ。おら、お松つ子と列んで歩くだ。さあ、出かけろ。
（一同笑ひ戯れながら、無秩序に去る。權爺、友爺殘る。）
仙吉　（友爺に）　何の用あるだ。友爺。貴様婚禮へは行か

ねえのか。

友爺　行かねえだ。おら、こねえな婚禮へは行かねえだ。

仙吉　なせ行かねえだ。わけえ言へ。

友爺　言はねえだ。言はねえ方好いだ。

仙吉　では、言ふな。その代り、荷物ひつちよつて、ここ出て行け。

友爺　はあ、出て行くだあとも。

（後の方へ行つて、自分の荷物を纏める。）

仙吉　（權爺に）さて、お前は何言ふ事あるだ。

權爺　わし旦那樣とお松つ子との事聞いてたまげただ。わし、ほんとにしやしねえだ。ほんとにしやしねえけんど、もし、そんねえな事あつたら、六造が可哀さうだ。あいつなんにも知んねえだからな。わしにも罪があるといふもんだ。萬一、そんねえ事あんなら、この婚禮させちやなんねえだ。

仙吉　何處で何聞いて來ただ。言ひてえ奴にやあ言はしとくが好いだ。あと方もねえ事だに。

權爺　（友爺に向ひて拳を振る）ほうれ見ろ。こん噓つきめが。

仙吉　ふむ、さうか。（友爺に）やい。出て行け。出て行かねえと、ぶちのめすぞ。さあ、出て行け。犬め。

友爺　（既に支度を整へ終り、主人の姿を足の先から天邊まで見上げ見おろして）犬だと。どつちが犬だ。

權爺　旦那樣に向つて、そねえな口の利きやうする奴あるか。

友爺　もう旦那でもあんでもねえだ。おら、こんな人一日でも旦那に持つたが怨めしいだ。

仙吉　出て行け。

友爺　出て行くだ。だが、出て行く前に、權爺の前で何も彼もしやべるだ。さあ、それでどつちが噓つきか極めて貰えてえだ。旦那。お前がお松つ子の部屋へ忍び込むのを、おら見た事ねえと思つてるだか。お前が無理にあの莫迦者お松つ子に押つつけたわけ、おら知らねえと思つてるだか。おらの言ふ事に噓はねえ。おら手巻山の明神樣の前でも、さう言つて見せるぞ。さあ一言でも返事が出來るか。

仙吉　何を言つても、聞く事あねえだ。

權爺　さうか、やつとそれで分かつただ。さあ、えれえ事になつたぞ。こりや村長樣のとけえ行つて、この婚禮やめにしにやならねえぞ。

（遠くに手拍子を打つ音聞える。）

權爺　はれ、手拍子打つてるだ。もうだめか。（仙吉に）旦那樣、飛んでもねえ事してしまつただね。えれえ事してしまつただね。

仙吉　濟んだ事あ濟んだ事だ。心配するにあ及ばねえだ……早く休むが好いだ。(去る)

權爺　はれまあ、頼んでもねえ事し出かしたぞ。手卷山の明神樣、どうぞ許してくらつしやい。

友爺　(權爺の肩を叩いて)　おら行くだ。どうだ。一緒に來ねえか。おら山へ行くだ。又あの高え山へ歸つて行くだ。青い空と緑の草があるだけで、人間のゐねえ所へ、歸つて行くだ。どうだ。行かねえか。

權爺　六造も山をおりて來なけりや好かつただ。

友爺　(戶口にて)　どうだ。一緒に行かねえか。

(遠く人の笑ひさざめく聲聞える。)

權爺　まあ、あんちう罪なこんだ。おらとても二人の顏見る事あ出來ねえだ。とても出來ねえだ。さあ、行け。わしも行くだ。

(兩人去る。)

(舞臺暫く空虛。やがて、人聲やうやう近づく。お松舞臺へ入り來る。六造、門の敷居の所に立ち、表を過ぎ行く人々に挨拶する。)

六造　婚禮はめでたく濟んだぞ。さあ、みんな、歸つて寢るが好いだ。機嫌よく寢るだぞ。好いか。は、は、は、は。

外の聲　門しめて、早く寢ろちや。あやかりもんめ。

(聲高なる笑ひ聲聞える。)

六造　(なほ外に向ひて呼ぶ)　機嫌よく寢るだぞ。仲よく寢るだぞ。

(門をしめて、前へ來る。お松、爐の前に、首うなだれて坐る。)

六造　さあ、門を締めただ。もう二人ぎりになつただ。そこで、お松つ子、何か一言言つてくれちや。そだ。もうお松つ子ぢやねえ。これ、嬶よ。

お松　何用あるだ。構はねえでくらつし。

六造　はれ、どうしただ。こけえ來て坐れちや。(地面の上に坐つて、笑ふ)　さ、こけえこ。こけえこ。(羊でも呼ぶやうに呼ぶ。やがて無邪氣に笑ふ)　來い。來い。

お松　(元の所に坐つた儘)　構はないでくらつし。

六造　おらまだお前馴らす事出來ねえだ。待てよ。(懷から小さい布に包んだ銀貨を出す。獨語)　さあ、これ餌に馴らして見べえちや。(そつとお松に近づき、小聲に笑ひながら、お松の頭や肩を指で突く)　來う。來う。

お松　(身を竦めて)　あにしるだ。あに惡さしるだ。

六造　(笑ふ)　怒るでねえだ。(布から銀貨を取り出して不器用にお松の目の前に捧げる)　さ、手えくれちや。(間お松、振り向きもせず)　これ、松や、手え出せちや。

お松　(六造の手をまるで見ずに、立ち上がつて、行つてしまふ)　惡さしるでねえだ。おら冗談しる氣ねえだ。もう

遅いだ。早く寝たらどうだ。

六造　まあ待て。强情者……（地面の上に態と音をさせて銀貨を置く）見ろちや。こりや一圓の銀貨だ。おらが始めて儲けた金だ。おらこの金儲ける爲に、考へても恐ろしい事したぞ。（笑ふ）旦那様が、野村の旦那様が、この金くれただ。だあから、この金取つてくれ。あんにも心配ねえだ。おら自分で儲けた金だ。

お松　（六造の手を突きのける。併し、前のやうに邪慳ではない）厭だ。厭だ。おら入らねえだ。

六造　まあ、聞け。おら、並大抵の事でこの金儲けたでねえぞ。おら命がけで遣つた事だぞ。そだ。ふんとに命がけだつたぞ。毎晩、おらがの羊小屋へ狼遣つて來ちやあ、小羊一匹宛取つて行くだ。おらがの一番好え犬も食ひ殺しただ。おら氣違えのやうになつて怒つただ。ようし、おら、命捨てても、あの狼取つちめねえぢや置かねえだとな。そこで、或晩げに、おら岩ん蔭に隱れて待つてゐただ。あの狼のぬすつとめ、逃がすこつちやねえぞとばかりでな……（お松、段々興味を持つて來る）おら目えおつ開いて、耳い立つて、隱れてゐただ。頭の上にや星光つてるだ。もう夜中も大分過ぎたで、そけえらあしいんとしてるだ。唯、唯々風がの、ひゆうひゆうつて歌あ唄つてるだけだ。すると、不意に草の中でがさがさいふ音がしての。なま暖けえ息がおらがの首に當るだ。それが狼よ。犬が吠え出した。羊が鳴き出した。おらあ立ち上がつて、短刀拔いて、待つてゐただ。すると、狼が血だらけな子羊くはへて遣つて來ただ。おら、いきなり飛びかかつて、力一ぺえ短刀突き立てただ。それから先きの事あ、よくは知らねえだ。あんでも、おらが狼に抱きつくと、狼もおらにむしやぶりついただ。狼が吠えるとおらもおらんだだ。おらも向うへ嚙みついて遣つたが、狼の齒もおらの體へ突き通つただ。さうして、山あころころ轉がり落ちて、一緒に谷底へ落ち込んだだ。（お松益興味を以て聽く）おらが息を吹つ返すとな。おらの廻りに大勢仲間が立つてるだ。そして、おらと列んで、死んだ狼が横になつてるだ。谷川の水は、狼の血で眞つ赤よ。それから、みんながおらがを小屋へ運んで、傷う縛つてくれただ……それから、あんでも、十日ぐれえ藁の上に轉がつてゐただな。やつと表へ出られるやうになつたで、日向ぼつこりしてると、そけえ旦那様遣つて來てな。おらがにこの銀貨くれただ。おら、禮言ふべえと思つて、手え突くとな、まだ傷よく直らねえもんで、血い流れて、銀貨あ赤くしただ。だあから、これ容易な事で儲けた金ぢやねえだ。

お松　（感動して）もうおそいだ。休まうでねえか。

六造　だら、この金取つてくれ。おら、お前に遣るだから。
お松　厭だ。そりや貰はねえだ。まあ、好いから、寝るが好いだ。われの部屋あしこにあるだから。（上手の戸口を指さす）
六造　あに、おらがの部屋だ。冗談言ふもんでねえ。二人の部屋がそこにあるでねえか。（下手の部屋を指さす）
お松　冗談ぢやねえだ。おら一人で置いて貰えてえだ。
六造　あんだと……一人でだと……われ本氣で、そねえな事言ふだか。
お松　（困惑して）　さう責めるもんでねえだ。おら言ふめえと思ふ事言はなけりやならねえやうになるだから、お前のした事怨まなけりやならねえやうになるだから。お前は何も彼も知つてるだに。お前は惡い人だ。恥知らずだ。
六造　（驚いて）　あんだと。おらがわれに何しただ。あんで、そねえな惡態こくだ。何おらが知つてるだ。
お松　（顔を染めて）　みんなのわれに言つた事をよ。
六造　言つた事だ。誰もなんにも言やしねえぞ。
お松　うんにや。知らねえ道理ねえだ。知らねえで、それえな事承知しる者あるか。おら女房にしる以上、お前はお前のした事知つてる筈だ。
六造　あにをおらがしたと言ふだ。うむ。おらのした事は分かつてるだ。仕合せ來たから、それ掴めえただ。おら、いつまでもそれ放すめえと思つてるだ。一生掴めえて放すこつちやねえだ。おら、お前より外に可愛い者ねえだからな。たんだ心配なあ、おらお前を仕合せにしる事出來れば好いと思つてるだ。
お松　（益困惑して）　そねえな事ぢやねえだ。そねえな事ぢやねえだ。
六造　だら、言つて見ろ。言つて見ろちや。
お松　（獨語）　ぢや、ふんとに知らねえのかな。欺されてゐるだかな。だら、慈惡いこんだ。
六造　話してくれちや。あにがそねえ氣になるだ。おら心配でなんねえだ。どうしただ。何おらお前にしただ。
お松　（六造の知らぬ事を打ち明けようとして悶える）　ああ、なんにも言はねばよかつたに。惡く取らねえでくらつし。おら頭割れさうだ……ふんとに、まあ、あの人ああんたら事しるつもりだ。
六造　誰か。誰がお前に何しただ。聞かしてくれちや。
（この途端に、お松の部屋からぱつと明かりが差す。）
お松　（びつくりして）　はれ、もう來ただな。
六造　（驚いて）　や。明かりだな。われの部屋に明かりがついただな。誰かゐるだな。
お松　（恐怖を隠して）　誰もゐる筈あねえだ。

六造　うんにや。ゐるに違えねえだ。
　（懐の短刀を探りながら、下手の戸口へ近づく。）
お松　（引き留めて）誰もゐやあしねえだ。おらが部屋の明かりは、ありや、おらがつけただ。
六造　それえな事あねえだ。おら達が歸つて來た時、明かりはあしこについてなかつただ。（明かり消えろ）は。消えたぞ。
お松　われ夢見てるだ。目えどうかしただ。
六造　でも、今われさう言つたでねえか……
お松　われ夢見ただ。おらにはなんにも見えやしねえだ。
六造　あに、明かりが見えなかつたと。
お松　ああ、見えなかつたとも。お前夢見ただ。おらがの部屋に明かりなんどあるわけねえだ。
六造　（不安げに女を見る）おら夢見たのか。
お松　（獨語）まあ、今夜來るなんて。
六造　（思ひ惑うて、獨語）おら明かり見たのぢやねえかな。おら夢見たのかな。
お松　（竈の前に蹲りて）おら夜ぢうここにかうしてゐるだ。（六造に上手の戸口を指さす）お前は行つて寐るが好いだ。
六造　いや、おら行がねえだ。（土間の上に身を横たへる）
お松　（獨語）ああ、頭あ割れさうだ。（苦しき表情）ひでえ事しる人だ。ふんとにひでえ事しる人だ。（憫むやうに）可哀さうに、あの男あ、なんにも知らねえだ。
六造　（悲しげに、殆ど泣き出しさうに、併し、諦めて、）おらどうしたら好えだ。分からねえ。堪へるだ。堪へるだ。堪へて、岩の蔭で寐るだ。おら、お前の側にゐてえだ。（段々にお松の側へ匍つて行く）さあ、おら、山の神樣にお袋の事や親父の事願かけるだ。も一つの願はもうかけねえでも好えだ。神樣はおらがに好い嫁樣くれただからな。
お松　ああ、恐ろしい罰だ。
六造　（半分眠りながら）ほれ、靜かだなあ。今夜は狼來ねえぞ。今夜は狼………

——幕　靜に降りる

後の幕

前の幕と同じ舞臺。お松と六造、前の幕の終と同じ形でゐる。夜明け。

おりえ　（舞臺の後で）
　山の羊は夜でも鳴くが
　泣くに泣かれぬ螢草

やつさ、えつさ、ええ。

（お松、目を覺ます。まだ眠つてゐる六造の方を、ちらりと一目見て、拜臺奥の方へ行き、朝の支度に掛かる。おりえの次ぎの唄の間に、自分の部屋へ消える。）

おりえ　（續けて）

朝は悲しやあの水車
暗い内から思ひ泣き
やつさ、えつさ、ええ。

山にやお日様夜つぴて泣いた
星はすがれて消えて行く
やつさ、えつさ、ええ。

（歌ひながら、おりえ、中央の戸口より入り來る。胴着のやうなものを縫つてゐる。）

おりえ　お早う。

六造　（目を覺まして）お松つ子。

おりえ　（笑ひながら）あんねえぢやねえだ。おらだに。

六造　だら、お松つ子どこにゐるだに。

おりえ　それ、お前おらがに聞くだか。よんべから、お前あんねえの御亭主でねえかよ。

六造　よんべから。

おりえ　おら、お前にこれ拵えてやるだ。お前の著り物あんまり汚ねえからな。

六造　よしにしろちや。それ出來る時分にや、おらもうここにゐねえだ。

おりえ　ここにゐねえ。

六造　そだ、おらもうここにゐねえだ。今にこの家ぶつ壊れて、おらが頭ん上へ落つこちて來るやうな氣いしるだ。おらもうお松つ子んとこ出て行くだ。おらもう氣い違えさうだ。あんで、あの部屋に明かりついただ。誰が明かりつけただ。おら、その野郎ぶつ殺してえだ。おら、その野郎の咽喉へ短刀突き通さねえぢや、腹癒えねえだ。

おりえ　どうしただに。いやおらがにや、ちつともわけ分かんねえだ。

六造　（自ら省みて）そだ。われの知んねえ事だ。勘辨してくれちや。

おりえ　一體、まあ、どうしただ。（六造、頭を振る）はあ分かつた。お松あんねえ、われ可愛がられねえだか。みんながわれの事笑ふだか。

六造　みんなが笑ふと。

おりえ　そだ。みんな言つてるだ。「六造は可哀さうに」

と。そ言つて笑つてるだ。なせ笑ふだか、おらにや分かんねえだ。
六造　なせ笑ふだ。あにか、おらがに悪い事あるに違えねえだ……よんべのあれが誰だか分かりせえすりや……
おりえ　なんとでも言はして置くが好いだ。笑ふなら、笑ふが好いだ。お前仕合せなら、それで構はねえでねえか。
六造　仕合だと。おらがか。仕合せなんちもんが、この山下にあるか。この大勢の人住んでる所に仕合せなんちもんがあるか。おら山さ降りて來ねばよかつたと思つてるだ。山は靜かだ。山にゐりやあ、おら、なんにも心配はねえだ。
おりえ　一體、まあどうしただ。話してくれねえだか。おらお前大好きだで。なぜ、そねえな陰氣な事ばかり言ふだ。
六造　（おりえの頭を撫でて）お前や可愛い子だのう。
（お松、出て來る。）
おりえ　それ、あんねえが來ただ。おら行ぐだ。
六造　行ぐでねえだ。ここにゐろちや。
お松　（ちらりとその方を見て、妬ましさうな表情をする。やがて竈の側へ行き、火を掻き立てて鍋をかける）ばかな火だ。ちつとも燃える事ぢやねえ……
おりえ　（お松の方へ近づく）あんねえ。どうしただ。
お松　おら、もうわれの顔見たくねえだ。出て行ぐが好いだ。
おりえ　はれ、まあ、出しぬけに、どうしただ。
お松　おら、お前に用はねえだ。出て行がねえと、ぶちのめすぞ。
おりえ　おら何しただ。
お松　おら、われの顔見たくねえだ。
おりえ　六造にいやが出て行け言ふなら、おら出て行ぐだ。あの人がここの主人だかんな。
お松　だら、六造にさう言はせるだ。
六造　お松つ子の言ふ通りしるが好えだ。おら、あんにも言はねえだ。好い子だから、出て行げちや。
お松　うんにや。もう出て行つちやなんねえ。いつまでもここにゐるだ。
おりえ　（泣きながら）おら。どうしたら好いだ。どねえしたら好いだ。
六造　行げちや、おりえつ子。おら送つてやるだに。
お松　そねえな事しちやなんねえだ。お前はおらがの側にゐるだ。お前は……
（言ひかけて、はたと默る。）
六造　（立ち留つて、ぢつとお松を見詰める）おらは……
お松　（困惑して）おらは知らねえだ。おら知らねえだ。
（泣き伏す）

六造　（嘲るやうに）　お松つ子は、なんで泣く事あるだ。お前は笑ふが好いだ。よんべから笑え通しに笑つてる筈だに。（おりえを抱へるやうにして、戸口へ向ふ）　さあ、おりえつ子、一緒に來せえ。もうこの家へ歸つて來るぢやねえぞ。この家に何あるだ。この家にやあ、不仕合せの外なんにもねえだ。（二人で出て行く）

お松　（やがて、急に二人の後を追ふ）　あの人連れて行ぐ事あならねえだ。おら、誰にもあの人遣るこつちやねえだ。

（戸口へ突き進む。出會ひ頭に、權爺がはひつて來る）

權爺　どけえ行ぐだ。

お松　おら知んねえだ。おら知んねえだ。

權爺　六造、しよげ返つて、出て行つただな。

お松　あに。しよげ返つて。

權爺　そだ。可哀さうに、あの野郎、人に笑はれながら、なぜ笑はれるか、そのわけ知らねえだ。あいつの恥い知らねえもなあ誰もねえだに、あいつ一人それを知らねえだ。おら、お前が憎くてならねえだ。おら、お前ぶちのめしてえだ。

お松　だら、ぶつが好いだ。

權爺　おら、お前といふ者が分かつただ。お前は……

お松　ぶつとも叩くともしるが好いだ。だが、おら惡く言はれるこたあねえだ。權爺や、お前子を持つたこたあねえか。

權爺　一人持つたが、もう極樂へ行つてしまつただ。

お松　おれ惡く言ふ前に、お前に娘一人あつたと思つて見ろ。そして、お前が先きに死んだと考へて見ろ。お前の娘がこの惡い世の中にたつた一人ゐると思つて見ろ。誰がその娘の味方しるだ。おら死ぬ方餘つ程好いだ。死ぬより外におら助かる道ねえだ。

權爺　あに泣くだ。空涙でねえか。

お松　お前までがそれえな事言ふのか。おらお前の事ちつとも惡かあ思つてゐねえだに、お前までがおらいぢめるだか。

權爺　あにもいぢめやしねえだ。

お松　だとつて、おらの言ふ事聞きもしずに、おらの事惡く言ふでねえか。

權爺　だら、話すが好いでねえか。おら聞くだに。

お松　一體、お前この事の起り知つてるだか。おら嘘あこかねえだ。おらひでえ目に會つてるだ。

權爺　だら、話すが好いだ。

お松　まあ、聞いてくれちや。おら、おらが父さん誰だか知らねえだ。おら一度も顔見た事ねえだ。たんにも知らねえだ。お母あ南の方で乞食してゐただ。お母あ盲だつた。おら、お母あと一緒に寺の門や往來の端に立つた

事覺えてるだ。お母あなんにも言つた事ねえだ。唯、手前えの方へ突ん出して、突つ立つてゐただ。おら、お母にかぢりついて、著り物の裾ん中で泣いてゐただ。ところが或日、一人の男遣つて來て、おら達と一緒になつただ。跛の爺さんだつたよ。それから、おら、三人して乞食して歩いただ。時々、お母あとその爺さんと、夜つぴて喧嘩してゐただがな。或晩、ばかに靜かだと思つたら、お母は地面の上に橫になつて、その側に爺さん默つて坐つてゐただ。朝になると、爺さん立ち上がつて、おらがに、お母あ死んぢまつた言ふだ。だが、おらがにやなんの事だか分からなかつただ。おらお母あの事を泣いたなあ、それから餘つ程あとの事だつた。

權爺　ふむ、それから。

お松　それから、その爺さんと二人で、村から村歩き廻つただ。その內、おら段々大きくなつただ。おら何かして働きてえと思つただが、爺さんどうしても放してくれねえだ。爺さん、おら踊らしたもんだ。すると、人がおらがに錢い投げてくれただ。おらそれが厭で、毎晩夜つぴて泣いてゐただ。

權爺　ふむ。可哀さうに。

お松　或日、この村へ二人で來ただ。おら、百姓等の前で踊り踊つただ。爺さん、錢い集めてるとの、そけえ旦那樣たらいふ人遣つて來ただ。それが野村の旦那樣だ。旦那樣あ、おらがの頭撫でてな。なんで、われそねえに器量よしだ。何處で踊り習つただ。いろいろ親切に聞いてくれるだ。おら、そねえな詞かけられたなあ、生れて始めだ。やがて、おらがの主人の方向くとの。どうだ。水車小屋の番人になつて、この土地にゐつかねえか言ふだ。おら、どうかさうして貰えてえ思つただ。もう乞食して步かねえでも好いだし、道つ端で踊り踊らねえでも濟むだからな。爺さんは暫く小さな聲で、野村の旦那樣と何か相談してゐたつけが、やがて何か約束出來たと見えて——その儘、この土地にゐつく事になつただ。それから、毎日のやうに野村の旦那樣が遣つて來て、おらがに物くれて、賴んだり嚇したりしるだ。爺さんは、おらぶつたり、髮の毛ひつぱつたりしるだ。旦那樣の言ふ事聞かなけりやあ、又乞食したり踊つたりしなけりやならねえだ……それで、たうとうおらこんな身になつてしまつただ。

權爺　可哀さうに。

お松　さうだ、おら可哀さうな人間だで。おら決して惡い人間ぢやねえだ。

權爺　そりや、野村の旦那が惡いだ。

お松　おら、牢屋ん中にでもゐる心で暮らして來ただ。六

造との婚禮だとつて、旦那が無理にした事だ。おら泣いて厭だ言つただ。だけんど、おら旦那の言ひつけに背中向けることたあ出來ねえだ。

權爺　その事にやあ。おれも、相槌打つただ。

お松　ところが、不思議な事あるだ。よんべ村長樣とこで婚禮してるとな。明神樣のお告げあつたやうな氣いしただ。これがわれの亭主だ。われが今の苦しみ拔けるなあこの人の力だ。こりやあ、われが守り神だ。われが杖柱だとな……それに、六造は……六造はおら好いてるだ。心からおら好いてるだ。おら、それえな女ぢやねえによ。

權爺　六造はなんにも知らねえだ。今に知つたら、きつとわれさげすむに違えねえだ。

お松　はれ、やつぱりだめかな。情ねえ。おら確に好かれてゐるだがな。おらも六造好いてるだがな。おら、ふんとにあの男可愛くなつて來ただ。おら、ぶたれても好いだ。殺されても好いだ。どねえに怒られても好いだ。おら、あの人可愛がるだ。おら、あの人放す事でねえだ。

權爺　ほんにお前があの男可愛がるなら、お前何も彼も話さなけりやならねえだ。

お松　おらが話すのか。おらがおらの恥いあの人に話すのか。若し話してあの男行つてしまつたら、どうしるだ。あの男に行つてしまはれたら、おらどうなるだ。

權爺　どうしても話さなけりやならねえだ。お前が話さなけりやならねえだ。もう嘘こいてる時でねえだ。ほんの事言ふ時が來ただ。

お松　言へりや好いがな。おら覺束ねえだ。

權爺　神樣の力借りても、言はなけりやならねえだ。

（戸外に笑ひ聲聞える。）

お松　女子達が來ただ。おりえつ子も一緒に來るだ。おらあの女の顏見たくねえだ。（去る）

（お淺、お富、おさだ、おりえ、入り來る。）

おさだ　權爺がゐるだ。爺に聞くが好いだ。

お富　お松つ子何處にゐるだ。六造何處にゐるだ。

お淺　一體、どうしただ。話してくらつし。

權爺　おら、なんにも知らねえだ。

おさだ　（出て行かうとする權爺を引き留めて）まあ、待つてくらつし。ちつと待つてくらつし。

權爺　おら、用あるだ。（出て行つてしまふ）

お富　頑固爺めが、なんにも言やがらねえだ。

おりえ　爺はなんにも知らねえだ。おら知つてるだけんど。

おさだ　だら、話して見せえ。

おりえ　おら言はねえだ。

お富　なぜ言はねえだ。

おりえ　なぜでも言はねえだ。

三人　話せちや。おりえつ子。話せちや。
おりえ　(笑つて)それねえに騷ぐでねえだ。見ろちや。六造が遣つて來ただ。あの人にぢかに聞いて見るが好いだ。
(六造、はひつて來る。一同身を退く。)
おさだ　えら、むづかしい顏してるでねえか。
お淺　婚禮した明けの朝だと言ふによ。
お富　挨拶もしねえだな。
六造　お前ら、何用あるだ。
おさだ　穀物持つて來ただ。けふ水車廻すかな。
六造　持つて來たら置いて行ぐが好えだ。水車は廻らねえだ。
おさだ　厭な顏してるだな。
お富　どうかしたか。
お淺　あんべえでも惡いか。
六造　うるせえ。お前らの知つた事ぢやねえだ。
お富　お松つ子は何處にゐるだ。
六造　何處にゐようと、お前らの構ふこつちやねえだ。
お淺　だとつて、婚禮濟した朝げぢやねえか。樣子ぐれえ聞いたつて、あに惡かんべえ。
(三人の女、聲を揃へて笑ふ。)
六造　あに笑ふだ。あに可笑しくて笑ふだ。
おさだ　笑やしねえだ。

お富　(笑ひながら)誰も笑やしねえだ。(いきなりおさだの肩を掴む)
六造　おらもう我慢出來ねえだ。お前らきのふも笑つた。さ、なに可笑しくて笑ふだか言つてしまへ。おらお前らに何しただ。お松つ子お前らに何しただ。(兩手をもておさだの體を搖ぶる。女悲鳴をあげる。おさだ、六造の手をすり拔ける。六造お淺をつかまへる)さ、言はねえか。このあま。
お淺　お前は莫迦だ。
(六造、お淺の咽喉を掴む。)
六造　なに、おらが莫迦だと。さうだ。おらあ莫迦だ。だが、お前らおらを氣ちげえにしろだ。命ほしけりや言つてしまへ。なぜ、お前ら笑つただ。
お富　お松つ子に聞くが好えだ。
他の女達　お松つ子に聞くが好えだ。
六造　(呆然とする)お松つ子に。おらそれをお松つ子に聞かなけりやならねえか……
女三人　(外へ出ながら)さうだ。お松つ子に聞くが好えだ。
おりえ　(この時まで、恐れて後に立ちゐたるが、前へ出て六造の肩に手を置く)あんねえに聞くが好えだよ。
女三人　それ、そけえ遣つて來ただ。

（三人走り去る。）

お松　（部屋から出て來て、鍋を火からおろし、臺の上に置く）さあ、飯出來ただ。（小皿に盛りたる菜を出す。庖丁にて何かを刻みにかかる）

六造　おら食へねえだ。おらお前と話がしてえだ。

お松　（六造の側へ來ながら）はて、どねえな話してえだ。

六造　（急に手を振る）もう好えだ。もう好えだ。行つてくれ。行つてくれ。おらもう山へ歸るだ。おら出て來たとけえ又歸るだ。機嫌よう暮らすが好えだ。

お松　ぬし行つちやなんねえだ。おら、あやまるだあから。

六造　なに、あやまると。そんぢや、お前おら欺しただな。おら欺しただら、おらお前生しちや置かれねえだ。

お松　そんだ。おら殺してくれちや。お願えだから、殺してくれちや。

六造　うんにや、殺すめえ。おら出て行ぐだ。もう二度とお前にや會はねえだ。

お松　（失望する。六造を留めようとする）おつかねえだな。おら殺す元氣ねえだな。卑怯者。臆病者。

六造　なんだと。

お松　怒るが好えだ。怒つておらぶつ叩くが好えだ。おら足で踏んづけるが好えだ。短刀おらが胸へ突き通すが好えだ。おらお前歸すこんぢやねえだ。

（六造の膝へ縋りつく。）

六造　おらこねえなところにゐたら死んじまふだ。おら山へ歸（けえ）してくれちや。お前はいつまでも泥ん中にゐるが好えだ——あの男と二人してな。

（お松を突き放して、戸口の方へ行く。お松、床の上に倒る。やがて片手を突き、半（なかば）身を起す。）

お松　（絶望の餘り、氣もそぞろに、或は笑ひ或は泣く）おらがおつ惚れてる男と二人でか。さうだ。そん通りだ。おらお前欺しただ。分かつたか。おらお前欺しただぞ、お前は臆病もんだ。その讐い取る事が出來ねえだ。おらお前のもんぢやねえんだ。あの人のもんだ。分かつたか。あの人のものだぞ。お前もんぢやねえぞ。

六造　（激怒して戻り來る。拳もてお松を脅す）默れ。

お松　（六造の立ち去らぬを見定め、落ちついて、立ち上がる）お前は莫迦だ。お前にやあ分からねえだか。おらお前を欺しただ。おらそれが可笑しくてならねえだ。（氣違ひのやうに笑ふ）おらみんなと同じに笑ふだ。可笑しな婚禮だつたよ。みんなも笑つただ。あの人もよう。

六造　（俎のある方へ突き進み、庖丁を掴む）おら讐い取らなけりやあ、神樣が讐い取るだ……

お松　（六造の左の手に縋りつく）あの人が笑つただよ。あの人が。は、は、は、は。

六造　（庖丁を振り廻す）　うぬ……

お松　さ、元氣い出して、突くが好えだ。おらお前の卑怯もんでねえところが見てえだ。

六造　（再びお松を離れる）　だめだ。おらお前どうする事も出來ねえだ。

お松　（それを見ると、又新しく相手を怒らせようとする）はれ、ま、あんたら卑怯もんだ。お前や金つかまされて、われが身賣つただな。

（挑戰するやうに、相手の顏をぢつと見る。）

六造　（我を忘れて、お松の方へ突き進む）　なに、おらが身を賣つたと。こん賊。

（思はずお松の片腕に傷を負はす。）

お松　たうとう遣つただな。

六造　（驚いて刄物を投げ出す）　おら何しただ。

お松　おらがの血い流しただ。おらやつと望みが叶つただ。

六造　なんといふ事だ。おら氣い違つただ。

（床の上に崩をれて、兩手で頭を抱へる。）

お松　（その側へ近寄り、跪いて、男を抱くやうにする）お前やつとお前のしなけりやならねえ事をしただ。おらお前に殺されたかつただ。さ、お願えだから殺してくれちや。こん胸の眞ん中さ突き通してくれちや。

六造　（驚いて逃げようとする）　飛んでもねえ。おらそねえな事出來ねえだ。

お松　（泣きながら六造の腕にしがみつく）　情ねえ。まだ分からねえだか。おらもう生きちやゐられねえだ。おら死なねけりやならねえだ。おらお前の手で死なれりやあ本望なんだ。おらがの罪は、おら死ななけりや綺麗にやあならねえだ。おらあ、おらあ惡い人間ぢやあねえだ。おらあ唯運惡かつただ。世間の奴がおらいぢめるだ。おらがの運めちやめちやにしてしまつただ。六造どん。ちつとの間でもおらがを仕合せにしてくれる事出來るなあお前だけだ。おらお前に殺して貰えてえだ。そして、何もかもおしめえにして貰えてえだ。

六造　（女を抱きしめて）　おらお前殺さなけりやならねえだか。こねえに可愛いお前を。山で始めてお前を見た時から、氣違えのやうに、おらお前におつ惚れただ。お前が何であらうと、おら構はねえだ。お前が何をしたとつて、おらそねな事構はねだ。おら一目見た時から、お前たあ離れられねえと思つただ。おらもうすつかりお前につかめえられてしまつただ。おらどうしてもお前を山へ連れて行ぐだ。あの嵐ん中で、吹雪ん中で、廣々したおらがの山で、おら婚禮しるだ。あすこなら、誰もお前盗むものはねえだ。あすこへせえ行ぎやあ、お前はいつま

でもおらのもんだ。おらのもんだ。おらのもんだ。
（お松、男の手の内に半ば氣を失ふ。六造、女を戸口へ引きずつて行く。）

六造　さあ誰でも來せえ。もう誰が來ようと、おらお前放す事でねえぞ。

お松　（氣がつく）　はれ、ま。

六造　（女を抱き起す）　さあ、もうお前はおらがもんだぞ。

お松　（逃げる）　だめだ。だめだ。

六造　なぜ、だめだ。

お松　その前に、その前に話しなけりやならねえだ。何もかも話しなけりやならねえだ。それからなら、何處へでも連れて行ぐが好えだ。

六造　だら、直ぐ話すが好えだ。うんにや。だが、ここぢやあいけねえだ。山へ行ぎてから、話してくんろ。山へ行ぎたら、なに話しても好えだ。聞く者はおら達二人と神樣ばかりだから。

お松　だら、おら勘辨してくれるだな。

六造　しねえでどうしるもんだ。さ、行ぐべえ。
（二人、戸口へ向ふ。野村、入り來る。）

仙吉　（二人に立ち向ふ）　どうした、どうした、花聟。

六造　好えとけえ來ただ。おら水車小屋お前へ返すだ。おら出て來たとけえ又歸るだ。

仙吉　（六造の詞には耳も貸さず、お松に向ひて）　今夜おらがの嫁の親父連つて來るだ。それまでは、まだおらの世界だ。おら久しくお前の踊るのを見ねえ。さあ踊れ。おら月琴彈くだから。
（この間に、後より男女の百姓大勢入り來る。野村、その中の一人の手より月琴を奪ひ取る。）

仙吉　さあ踊れちや。
（月琴を彈きながら歌ふ。）

踊れちや。踊れちや。
祭ぢや。踊れちや。
おいど振り振り。
踊れちや。祭ぢや。

六造　よせ。お松つ子、行ぐべえ。

仙吉　（構はず彈き續け歌ひ續ける）

屆く思に屆かぬ思。
山の羊の氣が焦れる。
踊れちや。踊れちや。
祭ぢや。踊れちや。

六造　お松つ子。行ぐべえ。
仙吉　（怒る）何だと。何と言つた。
六造　行ぐべ言つただ。
お松　二人で行ぐべ言つただ。
仙吉　（我を忘れて、お松の腕を摑む）お前氣でも違つたか。そねえな事してはなんねえだ。
六造　だら、どうしるだ。
仙吉　（六造に）おら放すこつちやねえだ。おら自分のもの放すこつちやねえだ。
六造　お松つ子はおらがの女房ぢやねえか。
（野村笑ふ。）
お松　おら六造どんと一緒に行ぐだ。旦那あもうおらがどうしる事も出來ねえだ。
仙吉　何だと。（人々に）やい、みんな、この野郎を引きずり出せ。（お松に）お松、お前はこけえ殘るだ。
六造　（お松の手を摑む）おらがの女房はおらがのもんだ。おら二人して出て行ぐだ。
仙吉　づぶとい野郎だ。出て行がねえか。この乞食野郎。
（六造の頰をぴしりと打つ。）
六造　（激怒して叫ぶ）あつ。
お松　お前ぶたれたぞ。早く讐い取らねえか。

六造　（怒の前に泣きながら）だめだ。あれはおらがの旦那だあに。
お松　旦那だと。なにが旦那だ。お前の女房盜んだ奴だ。恥知らずの業つくばりだ。あいつはよんべおらがの部屋へ忍び込んだだ。
六造　なんだと……旦那が……あいつが（氣違ひのやうに野村に飛びかからうとする。百姓達が留める）やい、ぬすつと。泥坊。
仙吉　叩き出しちまへ。
六造　うぬ、叩つ殺すぞ。
仙吉　何ぐづぐづしてるだ。早く引きずり出さねえか。
六造　放せ。放せ。放さねえか。やい、われが命は貰つたぞ。
仙吉　（お松を捕へて）こいつはやつぱりおらがのもんだぞ。
お松　六造どん。助けてくれちや。
六造　うむ。助けねえでどうしるだ。畜生、畜生。
（人々荒れ狂ふ六造を外へ連れ出す。野村、力を失ひて床の上に倒れたるお松を眺めて、得意げに笑ふ。）
（權爺、戸口に現る。）
仙吉　やい。何用あるだ。
權爺　お前さんの嫁様の親父どんに言づかつて來ただ。

仙吉　なに言づかつて來ただ。

權爺　もう婚禮はやめだとよ。諦めてくんろとよ。

仙吉　なんだと。誰かお松んことをしやべりやあがつただな。誰がしやべりやあがつただ。

權爺　おらが話しただ。おらが何もかも話しただ。

仙吉　糞ぢぢいめ。よし、おらが自分で行つて、話いつけて來るだから。馬だ。馬だ。

（急ぎ去る。）

權爺　爲方ねえだ。世の中の事さううまく行がねえだ。（去る。）

（お松、漸く力を得て來る。同時に、漸く興奮して來る。）

お松　だめだ。だめだ。また旦那歸つて來るだ。六造どんは行つてしまつただ。（耳を澄す）みんな默つてゐるだな。誰もなんとも言はねえだな。おらもう我慢出來ねえだ。六造どんや。六造どんや。聞えねえだか。お松が呼ばつてるだぞ。お前の女房が呼ばつてるだぞ。

（お松、戸口へ向ふ。野村、入り來る。）

仙吉　おら迎ひに來ただな。可愛い女だ。おらやつぱりお前が好いだ。

お松　はれ、飛んでもねえ。

仙吉　おらがの嫁はだめになつちまつただ。もうお前より外に女はねえだ。もうおらお前放す事でねえぞ。

お松　だら、おら殺すが好えだ。おらどうしてももうここにやあゐられねえだ。

仙吉　强情言はねえもんだ。この水車小屋おらがもんだ。お前もおらがもんだ。逃げられるなら逃げて見るが好えだ。

お松　ああ、おらどうしたら好えだ。

仙吉　お前も强情張るなら、おらも强情張るだ。おらこの水車小屋にお前と二人で住むだ。世間の奴らあ何と言つても構はねえだ。

お松　おら可哀さうだと思はねえだか。

仙吉　可愛いとは思ふが、可哀さうだとは思はねえ。おらもうお前がゐねえぢや生きてゐられねえだ。お前がゐねえぢや息出來ねえだ。

お松　おらまた六造どんが可愛くてならねえだ。おらあの人におつ惚れただ。

仙吉　もうあねえな奴の名あ呼ばらねえ事だ。おら名あ聞いてせえ蟲づ走るだ。

お松　うんにや。おらあの人の名呼ばるだ。ありつたけの聲して呼ばるだ。六造どんや。早く來て助けてくれちや。

仙吉　默れ。お松。われおらが腹立たせる氣か。

お松　おら。もう昔のお松ぢやねえだ。むかしの弱えお松

ぢやねえだ。おらもうなんにも恐くねえだ。おら喧嘩しても自分の可愛いもの取るだ。自分のしあはせつかめえるだ。六造どんをおらがもんにするだ。お前の知つてるお松つ子は、はあもうゐねえ者になつちまつただ。ここに立つてるなあ、自分の好いた男の爲には命ぐれえいつでも捨てる女子だ。

仙吉　お前怒ると倚好い女になるだな。おらもうお前を…

お松　放してくんろ。おら厭だ。（呼ぶ）六造どんよ。

仙吉　おらどうしてもお前を自分の者にするだ。おさへつけても、おらがの女房にするだ

（野村、お松を追ひ廻す。お松、逃げ廻る）

お松　はれ、まだ來てくれねえだか。（叫ぶ）六造どんや。

仙吉　來つこねえだ。お前はおらがの者だ。おらがの。

（お松の首に抱きつかうとする）

お松　六造どんや。六造どんや　早や助けに來てくれちや。

仙吉　なんぼ呼ばつてもむだなこんだ。もうお前放すこつちやねえだ。來るなら來るが好えだ。取るなら取つて見ろだ。

（六造、お松の部屋から躍り出る。）

六造　さあ來ただ。その女取りに來ただ。

お松　（六造に縋りつく）はれ、ま、六造どん。

仙吉　（飛びのいて）われ何處から來ただ。

六造　そこから來ただ。よんべお前が女を盜みに來たあの部屋から出て來ただ。さあ、もうかうなつたら、男と男だ。勝負すべえ。

仙吉　出て行け。この野郎。

六造　出て行かねえだ。おらもうお前が山から連れて來たぼんやりぢやねえだ。おらもうお前の家來ぢやねえだ。お前とおらとは對等だ。男と男の勝負しろちや。

仙吉　よし、生意氣な。待て。（戸口へ行かうとする）

六造　（野村と戸口との間に飛んではひる）逃げるだな。卑怯者。だめだ。だめだ。勝負つけねえぢやあ、ここ出すこつちやねえだ。さあ、そこにおらがの女房立つてるだ。あれはおらがのもんだ。さあ取るなら取つて見ろ。唯は渡さねえだから。（懐にした短刀を拔く）女は勝つた方のもんになるだ。生き殘つた方のもんになるだ。

仙吉　刄物持つてやがるだな。

六造　お前持つてねえのか。だら、これえなもの使はねえでも好えだ。お前殺す刄物は、おらこの腕の中に持つてるだ。（短刀を投げ捨てる）さあ、來い。

お松　（六造の手に縋る）飛んでもねえ。お前何しるだ。

六造　（女を押しのける）お前はぢつとしてるが好えだ。構ふでねえだ。（野村に）さあ、何ぐづぐづしてるだ。

仙吉　見ろ。（六造の捨てた短刀の方へ駈け寄る）

お松　（聲を立てゝ）はれ。
六造　（野村の擧動を一目見ると、短刀を足で踏みつける）ゐすつと。おら眠つちやゐねえぞ。さ、刄物欲しけりや取るが好えだ。（短刀を足蹴にする）
仙吉　畜生。そんなまくら何になるだ。
六造　何だと。（いきなり野村の首を締める）
仙吉　助けてくれ。助けてくれ。
六造　吠えろ。吠えろ。この犬め。
仙吉　人殺し。人殺し。
お松　はれ。はれ。
六造　だめか。手向えは出來ねえだか。だら、お前の命は貰つたぞ。（お松に）見ろちや。もう死んでしまつただ。
（縡切れた野村を床へ投げ捨てる。）
お松　はれ、ま。飛んでもねえ事しちまつただな。
六造　（死骸に一瞥を與へ、さて戸口へ行き、戸を大きく開く）みんな來い。女も來い。みんなこつちへ來い。
（男達、女達、おさだ、お淺、お富、おりえ、權爺など入り來る。）
お松　（氣を失つたやうになつてゐる）
人々　どうしただ。どうしただ。
六造　旦那がお前ら呼ばつてるだ。
おさだ　（死骸を見て）死んでるだな。
お淺　はれ、ま。
權爺　神樣ん罰だ。
六造　さあ笑へ。みんなして笑へ。今が笑ふ時だ。やつと笑ふ時が來ただ。笑へ。笑へ。笑はねえか。（おのれ一人物狂ほしく笑ふ）さ、お松つ子、おら達は山へ行くだ。
お松　さうだ。山へ。
六造　（手を振つて）山へ。山へ。あの高え山へ。人間のゐねえ山へ。うるせえ事のねえ山へ。さ、どけ、どけ、みんな、どけ、どけ。おら狼い殺しただ。狼い、狼い絞め殺しただ。（笑ふ）
（六造、お松、出て行く。一同、恐るゝ者のやうに見送る。或者は死骸の前に跪く。）

―― 靜に幕 ――

（Eugen d' Albert; Tiefland に據る）

三人と三人（三幕）

人物

村田仁兵衛　請負師　（四十二歳）
お絹　仁兵衛の妹　（二十四歳）
おしん　お絹の妹　（二十一歳）
仁太郎　仁兵衛の子　（六　歳）
木崎正治　洋畫の學生　（二十三歳）
駒澤卓爾　法學士　（二十八歳）
小冬　藝者（二十一歳）（登場せず）
櫻川平孝　幇間　（三十四歳）
延吉　芝居茶屋の男　（四十歳）
安藤要次郎　村田組の支配人（三十五歳）
新造　村田家の小僧　（十六歳）
お花　村田家の女中　（十八歳）

場所

東京の下町

時代

明治の末

第一幕

村田家の店先。帳場。金庫。電話。
正面奥、古風な千本格子の障子。奥及び臺所への通路。
二階へ上がる階子段。大きな掛時計。
下手に小さき土間。土間の奥に建前の化粧柱など。
格子戸。戸外への通路。
朝の十時頃。

幕が明くと、お絹が電話口に立つてゐる（低い踏臺に乘つて）和服で袴をはいた木崎が、胡坐をかいて、新聞を讀んでゐる。白い皮の紐のついた繪の具箱が、その側に投げ出されてゐる。小僧の新造が土間で何か片づけものをしてゐる。

お絹（電話口で）はあ、はあ……では、赤羽の方は指名入札になりますのでございますね。はあ、分かりました……今月の二十日過ぎでございますね。はあ。はあ……どうも有難うございます……それから、もう一つ伺ひますが、あの三聯隊の厩舍でございますね。あれはお拂ひ下げになりませうか……はあ。なりますか……はあ、來月のなかば頃……はあ、分かりました。どうも有難う存じます。

毎度勝手な事ばかり伺ひまして、どうも相濟みません。では、いづれ安藤を遣しますから。はあ……兄でございますか。有難う存じます。相變らず、體が惡いものでございますから。はあ。どうも恐れ入ります。では、御免下さいまし。どうも有難うございました。然樣なら。(電話を切る。木崎の方へは見向きもせず、帳場へ來て坐る。小さな手帳へ鉛筆で覺え書をする。金庫を明けて、契約書やうなものを二三種取り出して調べる。簿記帳を廣げて、算盤をはじきながら、彼是見比べる。それから、小僧に聲をかける) 新造、安藤さんはまだ見えないかい。

新造　へい。けさはまだお見えになりません。

お絹　(時計を見上げて) 大層おそいぢやないか。

新造　お上さんが少し惡いんださうです。お花さんがゆうべそんな事を言つてました。

お絹　どうしたんだらう。

新造　なあに、又いつもの胃痙攣でせう。たいした事ぢやありませんよ。

お絹　(手早く白紙に紙幣を包む) これを持つてつてね。あたしが伺ふんだけれどもつてね。

新造　(上へ上がつて、金包を受けとつて) へい。

お絹　それで、安藤さんに、少し急ぎの用があるから、急いで來て貰ふやうにね。

新造　へい、畏りました。行つて參ります。(直ぐ格子戸から出て行く)

木崎　(顏を上げて、お絹に聲をかける) いそがしいんですね。

お絹　(木崎の方は見ずに、帳場を見ながら) ええ、いそがしいわ。あたしが稼がなけりや、誰も稼ぐ人がないんだからね。

(途端に電話が掛かつて來る。木崎立ちさうにする。)

お絹　お前さんが出たつて分かりやしないよ。(と言ひながら、立つて行つて、受話器をとる) はい。はい。こちらは村田でございますが……どなた樣で……え。あら、いやだ。棟梁かい……分かつたよ。分かりましたよ。え。え。ああ、その事ならね。あたしが惡かつたんだよ。ゆうべ電話をかけようと思つて、すつかり忘れちまつたんだよ……なに。莫迦におしでないよ。いくら何だつて、そんな事の爲に商賣を忘れやしないよ……冗談は措いてね。さつきも、それで、木場へ人を見せにやつたんだがね。なんでも、船がシケに會つたとか何とか言ふのさ。嘘だか本當だか知らないけどもね。でも、けふの夕方にはきつとはひるさうだからね。それまでのところ、他の方に掛かつてゐてくれないか……え。大丈夫。急の爲に、安藤さんにも廻つて見て貰ふ事にするから……ああ。好

いとも。それは大丈夫だよ。ぢやあ、然様なら。（電話を切る。又、帳場へ戻る。そして又帳簿を調べにかかる）

木崎　（顔を上げて）お絹さん。

お絹　（帳簿を調べながら）何だよ。

木崎　今度の明治座、面白さうですね。

お絹　（帳簿を見詰めた儘、頭の前で手を振つて）だめ。だめ。今そんな話をしちやあ。

木崎　だつて、その位の話をしたつて。頭の亂れるお絹さんぢやないぢやありませんか。

お絹　いけない。いけない。いけない。商賣をしてる時に、そんな話をしちやあ。（木崎を冗談らしく一寸睨んで）おとなしくして、默つてゐるの。用が濟むまで。

木崎　はい、はい、はい。（笑ひながら、又新聞をひれくろ）

（小僧の新造と支配人の安藤が、格子戸からはひつて來る。）

小僧　只今。（と言ひながら、上へ上がつて、正面の障子を明けて、奥へはひる）

安藤　（土間に立つた儘、お絹に挨拶する）お早うございます。どうも遲くなつて相濟みません。只今は又お見舞を頂きまして、いつもいつも恐れ入ります。

お絹　どうなの。お仲さんの樣子は。

安藤　なあに、又いつもの胃腸なんでございますがね。女中に歸られちまつて、手がないもんでございますからね。

（上り框へ腰をかける）

お絹　おや。お金がゐないのかい。それはお困りだねえ。

安藤　國のお袋が惡いとか何とかいふ電報が來たんで、をとゝひ出かけて行つたんでございますがね。どこへ歸つたんだか分かつたものぢやございませんよ。あいつこの頃色氣がつきやあがつたんでね。

お絹　まあ、あの山出しがねえ。油斷がならないねえ。

安藤　この頃は女中も使ひ難くなりましたよ。あれで、歸さなけりやあ、人權がどうしたの何のと言ふんですからね。そこへ來ると、お宅のお花さんなぞは、模範女中だ。よく坊ちやんの世話を見ますねえ。

お絹　ほんとに、そこだけは感心さ。兄さんはあゝやつて、外へ出てる方が多いし、あたしはなかなか構つてゐられないし、あの子もお母さんに死なれてからは可哀さうさ。それを、お花がまるで親身のきやうだいのやうに見てくれるんだからね。

安藤　ほんとに感心ですよ。（と、もうその方の話には餘り氣乘がしないやうに言ひながら、折鞄の中から小さい手帳を出して）時に、けふは先づ木場へ行つて、それから陸軍省の方へ廻らうと思ひますが……

お絹　（これも直ぐ事務的になつて）さう。忙しくて氣の

毒だけれども、今も棟梁から催促の電話さ　無理もないよ。もう三日も手を明けてるんだからね。一つカネ徳へ行つて嚴重に談判をしておくれよ。それから、あの、赤羽の工兵の方ね。あれはやつぱり指名入札ださうだから、大森さんのとこへ行つて、よくお願ひしておくれよ。それから、あの、三聯隊の厩舎ね。あれは拂ひ下げになるさうだからね。序に廻つて、入札の日取をよく聞いて來ておくれよ。

安藤　（一々手帳へ記入しながら）へい。畏りました。赤羽の一件と、三聯隊の厩舎ですね。畏りました。あの厩舎は隨分古物ですが、何か思わくがおあんなさるのですか。

お絹　田舍から一寸言ひ込みがあるから。その方へ向けようかと思つてね。なあに、いくらにもなりやしないと思ふんだけれど、何しろ今月は又物入りだからね。

安藤　大きにね。（一寸考へて）宜しうございます。精々運動いたしませう。さう、さう、さう言へばきのふ一寸、東京製鐵へ寄りましたら、近い内に増築があるさうですよ。

お絹　さうかい。で、やつぱり内の方へ廻りさうかい。

安藤　それがね。旦那が近頃あんまり顔を出さないもんだから、近藤組が大分手を廻してるらしいんですね。

お絹　だからさ。あたしの言はないこつちやないんだよ。一軒でも二軒でも好いから、古いお得意だけへは顔を出して下さいつて言ふんだけれども、もう今ぢやあ、まるで商賣をほつたらかしてゐるんだからね。（一寸沈んで）でも、兄さんのお腹になつて見ると、氣の毒だらけだしね。さう、つけつけも言へないのさ。

安藤　（同情して）そりやあ、全くさうですよ。今、旦那を責めるのは全く可哀さうですよ。なんしろあんなに大事にしてゐた人に、急に逝かれちまつたんですからね。それに、柳橋のにやあ手ひどい目に會ふしさ。酒でも飲まなきやあ生きちやあゐられませんよ。

お絹　だから、商賣の方はあたしが引き受けました——兄さんは當分どうでも自分の思ふ通りになさいつて言つたのさ。それが、ああいふ好い人だからね。直ぐに悪いのに引つかかつてしまつたのさ。

安藤　小多さんですか。たいした「新しい女」ださうですね。

お絹　とてもお話になりやしないんだよ。

安藤　（急に自分の用を思ひ出して、立ち上がる）これは大變。木場の用が急ぐのだつた。ぢやあ、行つて參ります。

お絹　御苦勞だね。ぢやあ、東京製鐵の方もなんとか專務

さんに話して、近藤組に取られないやうにしておくれよ。

安藤　へい。それはもうその手筈にはしてあるんです。木村を毎日やる事にしてありますから。

お絹　どうか、さうしておくれよ。家の暖簾にかかはるからね。

安藤　大丈夫です。精々うまくやります。ぢやあ御免。（格子戸から出て行く。間）

木崎　（顔を上げて）もう用は濟みましたか。

お絹　（金庫へ物をしまつて、帳場を出て來ると、笑ひながら木崎の側に坐る）ああ。やつと濟んだ。

木崎　あの安藤つて奴は厭な奴ですねえ。

お絹　なぜ。

木崎　だつて、僕に挨拶一つしやしない。いつでも、なんだ、書生つぽがつて顔をしてやがる。

お絹　あれはああいふ人なんだよ。

木崎　でも、お絹さんにやあ、ぴよこぴよこしてるぢやありませんか。

お絹　それは主人だもの、爲方がないやね。

木崎　お絹さんだつて、あいつにや厭に丁寧ぢやありませんか。

お絹　それは、ああいふ人にあああしとかなけりやあ、動かないもの。それに、あれでもお父さんの時代から出はひりをしてた人間だからね。

木崎　妥協だ。妥協だ。僕、お絹さんは好きなんだけれども、ああいふところを見るのは嫌ひだな。

お絹　また藝術家のやんちやが始まつたのね。

木崎　だつて、あいつ、いやに僕を邪魔者扱ひにしやあがるんだもの。

お絹　邪魔者扱ひなんかにしてやしないぢやないか。お前さんなんかとは話の出來ない人間だから、それで知らん顏をしてるんだよ。

木崎　それが癪に障るんですよ。僕を何かこの家へ惡い事でもしに來てる人間だと思つてやがるんだ。

お絹　もうおよしつたら。男がそんなにいつまでも一つ事をしつつこく言つてるもんぢやないよ。お前さんはあたしのお友達さ。それで好いぢやないか。

木崎　それは好いけれども。

お絹　もう。おやめ、おやめ。それよりか、お前さん今明治座がどうとか言つてたぢやないの。

木崎　明治座なんかどうだつて好い。僕は、高松君だつて、もう嫌ひになつた。

お絹　そんな事を言ふもんぢやないよ。お前さんとあたしがかうして知り合ひになつたのも高松さんのお蔭ぢやないか。

木崎　そりやあさうだけども、高松君もやつぱり役者だつてことが、この頃分かつて來たんです。あいつはお絹さんを口說いた事があるんですつてね。厭な奴だ。
お絹　口說いたつて、こつちで聞かなけりやあ好いぢやあないか。
木崎　そりあさうだけれど、僕はお絹さんの神聖が瀆されたやうな氣がして不愉快なんだ。藝はうまい人だけど、獸のやうな人間だ。
お絹　（木崎の顏を冗談らしく覗き込んで）どうして、けふはさう御機嫌が惡いの。機嫌、直さない。
木崎　（目の前へ來たお絹の顏をぢつと見て、顏色を和らげる）直しませうねえ。詰まらないや。人の事なんぞ議論したつて。
お絹　さうともさ。
木崎　人の事なんかどうだつてよござんすねえ。お前さんさへしつかりしてゐてくれりやあ。
お絹　そりやあ、あたしは大丈夫よ。
木崎　僕は莫迦ですねえ。
お絹　なぜ。
木崎　僕は蔭ぢやあお絹さんを隨分信じてゐるんですよ。それでゐて、あなたの顏を見るとついいろんな事が言ひたくなるんです。どうしたんでせう。
お絹　それはあなたの星のせゐよ。
木崎　僕の星はそんな星なんですか。
お絹　あなたの星はね、おとなしい癖に、廻り氣なのよ。
木崎　さうですか。
お絹　それに、もう一つ いけない事があるの。
木崎　何です。何です。
お絹　氣が多いの。浮氣星よ。
木崎　そんな事はありませんよ。
お絹　お前さん、お花に何か言やしない。
木崎　なんにも言ふもんですか。
お絹　でも、お花の樣子がこの頃少し變よ。
木崎　そ、そ、そんなばかな事があるもんですか。かりにも、女中などに。
お絹　大丈夫。
木崎　大丈夫ですとも。
お絹　怪しいもんねえ。
木崎　大丈夫ですつたら。
お絹　あたしは、こんなお婆さんだし、男見たいな人間だからねえ。
木崎　おや、おや、變な事を云ひ出しましたねえ。
お絹　（一寸考へて）それに、もう一つ心配な事があるのよ。

木崎　何です。何です。
お絹　名古屋の妹が歸つて來るの。
木崎　名古屋の妹つて。おしんさんの事ですか。
お絹　おしんがけふ急に歸つて來る事になつたの。
木崎　けふ。
お絹　それも、唯歸つて來るなら、好いんだけれど。
木崎　どうかしたんですか。
お絹　亭主を嫌つて歸つて來るの。
木崎　へえ。そいつあをかしいなあ。おしんさんは自分で見初めてお嫁に行つたんでせう。あの駒澤とかいふ人のところへ。
お絹　さうよ。それが、行つて見ると、まるで思つたやうな人ぢやないんだとさ。
木崎　だつて、もう行つてから何年にかなるんでせう。
お絹　丁度二年になるのよ。
木崎　變だなあ。
お絹　行くと直ぐその事は分かつたんだけど、あの子も我慢強い子だから、堪へるだけは堪へたらしいのよ。だけど、もう、どうにも辛抱がし切れなくなつたらしいわ。
木崎　道樂でもするんですか。
お絹　それが並大抵ぢやないんだとさ。
木崎　でも、おしんさんを虐待するんぢやないんでせう。
お絹　虐待どころか、そりやあ可愛がつてゐるのよ。
木崎　分からないなあ。
お絹　それだから、ちつとも意見が分からないのよ。そりやあ好い人なんだけど、まあ言つて見れば、だらしがないのねえ。
木崎　その位の事なら、別れるの何のといふ問題が起りさうにもないがなあ。おしんさん、東京が戀しくなつたんぢやありませんか。
お絹　あたしも、まあそんな事だらうと思つてゐるのさ。
木崎　きつと東京で一月も遊んだら、又歸る氣になるでせう。
お絹　あたしも、そんな事で濟んでくれれば有難いと思つてるのさ。
木崎　一體、あなたのきやうだいは、みんな遊び好きなんだから。おしんさんも隨分家にゐる時は、はでにやつたさうですねえ。よく高松君がさう言つてゐましたよ。まるで、男の遊びなんですつてねえ。
お絹　なんしろなかなかの負けず嫌ひなんだからね。一時は小林の奧さんなどと張り合つて、高松さんに車までこしらへてやつた事があつたつけ。
木崎　小林の奧さんを敵にするなどは痛快だなあ。僕は高松君を取り卷いてる婦人連の中で一番あいつが嫌ひだ。

亭主だつて、金はあるか知らないが、下等な奴でさあ。高松君の一座などでは、奥さん奥さんて、みんな大騒ぎですが、何がそんなに有難いのかと思ひますねえ。あれで、金だつて、世間が思ふ程使はないんだつて言ふぢやありませんか。

お絹　使ふどころか。名は言へないけど、或役者なんか、あべこべに指環を買はせられたとさ。

木崎　そんなこつてせうよ。役者といふ役者で、あいつに關係のないのは一人もないつて言ふんだから、厭になつてしまふなあ。だけど、おしんさんは痛快な人だなあ。むかし、高松君に口說かれた時なども、隨分こつぴどくやつつけたさうですねえ。

お絹　高松さんは、誰でも口說くんだからねえ。

木崎　女が役者を贔屓にするのは、大抵野心があるものにきまつてゐるのに、舞臺は好いが人間は厭だとはつきり言つたんですつてねえ。豪い人だなあ。おしんさんは。

お絹　いやに褒めるのねえ。あたしだつて、高松さんの舞臺は好きだけど、人間は嫌ひだわ。

木崎　でも、おしんさんの方が徹底してゐますよ。あなたは、まだ弱いとこがあつてだめだ。高松君に會ふと、おろおろして、まるで口が利けないぢやありませんか。

お絹　お前さん、おしんが來ても、惚れちやあだめよ。

木崎　(笑つて) 變な事を言ふなあ。大丈夫ですよ。第一向うで相手にしやしませんよ。

お絹　でも、あの人はお前さんのやうな人が好きなんだからね。

木崎　どうだか分かるもんですか。で、けふ、いつ著くんです。

お絹　もうぢき著くのよ。でも、お前さんは、けふは會はない方が好いわ。

木崎　なぜです。

お絹　けふは、いろいろ向うの話や何か聞かなきやならないから。

木崎　さうですか。

(格子戸口から、主人村川仁兵衞、幇間櫻川平孝を連れて歸つて來る。二人とも醉つてゐる。直ぐ上へ上がる。)

お絹　お歸りなさいまし。(平孝に) 平さん、御苦勞樣。

(仁兵衞は寂しく笑ひながら、お絹と木崎の前を、きまり惡げに通つて、直ぐ二階へ上がつてしまふ。)

平孝　(お絹に) あの、恐れ入りますが、お冷を一杯上げて下さいませんか。

お絹　ああ、今直ぐ持たしてやるよ。

平孝　では、一寸御免下さいまし。(と、直ぐ主人の後を

追つて、二階へ上がる）

お絹　（後を向いて）お花や。

（奥で「はい」といふ聲がする。直ぐ後の障子が少し明く。お花が坐つて顔を出す。）

お絹　坊やはどうしてて。

お花　おとなしく遊んで入らつしやいます。

お絹　旦那がお歸りだから、お冷を一杯、二階へ持つてつて上げておくれ。

お花　はい。（奥へはひる）

木崎　兄さん相變らず醉つてゐるんですね。

お絹　ああ。

木崎　毒だなあ。ああ飲んぢやあ。

お絹　でも、爲方がないわ。寂しいんだもの。

（お花、奥の障子を明ける。コツプに水を入れたのを盆にのせて持つて出る。直ぐ二階へ上がる。）

木崎　（考へて）だけど、寂しいからつて、酒を飲んで紛らしちまつちやあ詰まらないなあ。僕の先生ねえ。廣田先生なんか始終かう言ふんですよ。人間にとつて――

（お花、二階から降りて來る。直ぐ障子を明けて、奥へはひつてしまふ。）

お絹　人間にとつて――どうしたのよ。

木崎　人間にとつて「寂しい」といふ事ほど貴いものはない。だから、寂しい時は決してその寂しさを紛らしてしまふやうな事をしないで、その「寂しさ」を大事に抱きしめて、その寂しいといふ心持を繪にしろと言ふんです。兄さんなども、唯の請負師ぢやないんだから、あの寂しい氣持を爲事に集注すると、きつと好いものが出來るんだがなあ。

お絹　そんな事言つたつて無理よ。繪かきと大工が一緒になるもんですか。

木崎　だから、お絹さんは分からないつて言ふんだ。建築家は立派な藝術家ですよ。

お絹　また藝術家かい。厭になつてしまふねえ。

（平孝、二階から降りて來る。）

平孝　（小聲で）お休みになりました。（改めてお絹の前に平伏する）へい。先づ今日は。いつもながら御健勝の態を拜し、恐悦至極に存じ奉ります。（木崎に向つても、丁寧に禮をする）先生。今日は。

お絹　いやだよ。平さん。いやに改まつてさ。

平孝　改たまつてと仰しやいますが、これでも禮儀は心得てゐるんです。鄕に入つては鄕に從へさ。さうぢやございませんか。（木崎に）ねえ、先生。

（木崎、唯笑つてゐる。）

お絹　やつぱり酉の家なのかい。

平孝　へい。この頃はもう、ずつとあすこばかりで。却つて、その方がようござんす。

お絹　「新しい女」はどうして。

平孝　小多さんでげせう。嬉しいね。あなたまでが「新しい女」などと仰しやるのは。

お絹　まだ脈はあるのかい。大分いけないやうな話を聞いてるんだけど。

平孝　脈は正に百度。

お絹　そりやあ熱だらう。

平孝　さう、さう、熱、熱。

お絹　そりやあ兄さんの方だけなんだらう。

平孝　いえ。なに、さういふわけでもないんですがね。

お絹　あたしぢやないか。ほんとの事を言つておしまひよ。この頃に、一つ恥を掻かしてやるつもりなんだから。

平孝　へえ。あなたが。賛成、異議なし。實はあつしも積に障つてたまらないんです。

お絹　とても脈はないんだらう。

平孝　ないといふのはあんなんぢやありません。なさ過ぎるといふ奴でげす。何しろ附き者が悪うがさあ。

お絹　小説家だらう。それだつて、あたしはちやんと知つてるんだ。

平孝　それまで御存じとは、どうも、はや、實に恐れ入りやしたな。小多さんも、飛んだ悪物食ひさね。あんな、駈け出しの文士なぞを。

お絹　でも、あれで、なかなか今賣れつ子なんだとさ。

平孝　賣れつ子にもいろいろありますね。あれなぞは、先づ干物の賣れつ子だ。菊屋へ行くと、ああいふのが澤山店に列んでゐますよ。いやに、こちこちしてゐて、まるで石を叩くやうだ。

木崎　（急に口を出す）お絹さん、一體誰の事なんです

お絹　え。村岡翠（みどり）さんよ。

木崎　へえ。村岡さんが、小多さんの好い人なんですか。

お絹　さうよ。知らなかつたの。

木崎　ぢやあ、いづれ村岡さんの作物に惚れたとか何とか言ふのが始まりなんでせう。

お絹　さうよ。いつか新派でもやつた「象牙の塔」ね。あれが氣に入つたのが始まりなんだとさ

平孝　さう、さう。その「蟻の塔」だか「象牙の塔」だか知らないが、なんでも、その塔ですつかり登り詰めてしまつたんですね。

木崎　（暫く考へてゐたが）さうですか。そりやあ無理はないな。あいつは全く巧いからな「日本の若きドストエフスキイ」つて評がある位ですからね。あれが分からんなら、たいした女だ。

平孝　褒めちやあいけないね、先生。
木崎　だつて、あれはたいしたものだよ。先づ明治大正を通じての傑作だらうね。
平孝　困つたね。
お絹　（木崎に）ほんとに、そんなに好いものなの。
木崎　誰にでも聞いて御覧なさい。あれを褒めない者はありません。（一寸考へて）こりやあ何ですね。氣の毒だけども、ここの兄さん、諦めなけりやだめですね。つまり、あれですよ。時代の相違ですよ。藝者だつて、若い奴は時代の影響は受けずにゐますまいからね。
平孝　（お絹に氣兼をしながら）どうもひどい事になつて來ましたな。
木崎　ここの兄さんだつて、意氣な人だけれど、もう何しろ四十代でせう。相手はまだ三十にならないんですからねえ。それに、あの小說が分かるやうな女ぢやあ先づ絕望ですね。
平孝　（もぢもぢしてゐたが、急に掛時計を見上げて）やあ。これは大變。師匠のところに寄合があるのをすつかり忘れてゐた。（お絹に）ぢやあ、どうも。旦那がお目覺めになりましたらどうぞ宜しく。いづれ又。
お絹　もう歸るの。まあ好いぢやないか。
平孝　うちの師匠は、ばかに時間のやかましい人ですから。

お絹　（その間に、手早く、白紙へ金を包み、平孝の膝の横へ置く）さう。ぢやあ又來て頂戴。
平孝　（白紙に目をつけ）どうもいけませんねえ。（と言ひながら、直ぐ金包を押し戴く）でも、折角だから頂戴して參ります。ぢやあ、旦那へ宜しう。先生、御免。
（と、逃げるやうに出て行く）
お絹　（笑つて）平孝の奴、びつくりして歸つて行つてしまつた。（木崎に）お前さんがあんまり遠慮なしに物を言ふもんだから、どうして好いか分からなくなつちまつたんだよ。
木崎　太鼓持なんて、やつぱり時代おくれですよ。兄さんも、あんなものを相手にしてゐちやとてもだめですね。
お絹　でも、兄さんは弱い人だから、お供がなけりや、どこへも行けないんだよ。
木崎　だから、時代おくれだつて云ふんだ。とても村岡さんの敵ぢやありませんね。
お絹　でも、兄さんは一度思ひ詰めたら、中々諦める人ぢやないんだよ。それに、藝者なんてものは、やつぱりお金次第だからね。まあ、やるだけやつて見る事さ。
木崎　（默つてゐる）
お絹　（掛時計を見上げて）どれ、あたしもステエションまで行つて來ようか。木崎さん、あなたも研究所へ行く

んでせう。

木崎　けふは何だか行きたくないから、やめます。

お絹　さう怠けちやだめよ。この頃はちつとも勉強しないぢやないの。好いから行らつしやい。

木崎　けふはどうしても厭です。

お絹　でも、けふは家もごたごたするだらうと思ふし——

木崎　ですから、あなたの歸らない内に歸れば好いでせう。

お絹　きつと、さうして頂戴よ。妹の手前もあるしするからね。

木崎　大丈夫ですよ。

お絹　ぢやあ、出かけるわ。（奧へ向いて呼ぶ）新造、新造。

（「へえい」といふ返事が聞える。直ぐ奧の障子を明けて、小僧が出て來る。）

お絹　お前、氣の毒だけれど、あたしと一緒にステエションまで行つておくれな。

新造　へい。

お絹　それから！お花に肩掛を持つて來させておくれ。

新造　へい。（奧へはひる）

木崎　車は入らないんですか。

お絹　電車で澤山。歸りはタキシがあるし。近いんだもの。

木崎　東京驛ですか。

お絹　ええ。

（お花、スカアフを持つて來る。）

お絹　坊やを頼んだよ。お土産を買つて來てやるから。

お花　はい。

お絹　旦那がお起きになつたら、唯ちよつと出かけたと言つとけば好いよ。（木崎に）お前さんもなんにも言はずに置いといて下さいよ。

木崎　ええ。

（小僧、鳥打帽子を冠つて出て來る。）

お絹　（立ち上りながら、お花に）ぢやあ、あとを頼むよ。坊やを離れちやいけないよ。

お花　畏りました。

お絹　（木崎に）濟まないけど、ほんとにけふは早く歸つて頂戴よ。

木崎　大丈夫。歸りますよ。安心して入らつしやいよ。

お絹　（小僧に）ぢやあ、新造、お出で。

（お絹、新造を連れて、格子戸から出て行く。お花、直ぐ立つて、奧へ行かうとする。）

木崎　お花さん、お花さん。

お花　（畏つて）何でございます。

木崎　君、僕の手紙見てくれた。

お花　存じません。（と言ひながら、どんどん奧へはひつ

てしまふ）

木崎　（苦笑して）　おや、おや。

（仁兵衛、二階から降りて來る。醉が少しさめてゐる。）

仁兵衛　やあ。木崎君さつきは失敬しました。お絹はどこかへ行きましたか。

木崎　（躊躇して）　なんだか、用があるとか言つて、新造君を連れて出て行きましたよ。

仁兵衛　ああ、さうですか。ぢやあ、商賣用で出かけたんでせう。（苦笑して）　どうも僕は家の事はちつとも分からないもんだから。

木崎　でも、お絹さんが、しつかりしてるからよござんすよ。

仁兵衛　何もかも任せつ切りで濟まないとは思つてるんですがね。僕はもうこんな體になつてしまつたんだし、却つてなまじつか手を出さない方が好いと思つてるんですよ。木崎君まあ精々お絹を慰めてやつてくれ給へ。

木崎　（躊躇しながら）　ええ。慰めるなんて事は出來ないかも知れないけれど、まあ暢氣な事を言つて笑はす位なことはね。

仁兵衛　いや、どうして。お絹は眞面目に君を賴りにしてるんですから。どうか、まあ、末長くつきあつて下さいよ。

木崎　それは僕の方から望むことです。

仁兵衛　（立ち上がつて）　ぢやあ、失敬だが、僕又ちよいと出かけますから。まあ、ゆつくり遊んでゐて下さい。

木崎　（或意味をもつて）　又出かけるんですか。

仁兵衛　人間も、もう、かうなつちやあ、おしまひですよ。

木崎　そんな事があるもんですか。

仁兵衛　男のある女の尻を追ひ廻すなんて、男子の恥辱ですね。

木崎　そんな事があるもんですか。男があつたつて構はないぢやありませんか。戰かつて勝つんですね。

仁兵衛　（又坐る）　でも、相手が若いんですからね。

木崎　若いから、必ずしも勝つとは限らないでせう。勝負は眞情のあるなしですよ。

仁兵衛　ほんとに、さう思ひますか。

木崎　ほんとにさう思ひます。

仁兵衛　有難う。それを聞いて勇氣が出て來ました。ぢやあ、失敬して、行つて來ます。（奥の方を向いて）　お花、お花。

（「はい」といふ聲がする、お花、奥から出て來る。）

仁兵衛　仁太郎はどうした。

お花　あちらで遊んで入らつしやいます。

仁兵衛　ちよいと連れといで。

お花　はい。（奥へはひる）
木崎　仁太郎さんは、ほんとにおとなしい子ですねえ。いつも、ゐるんだかゐないんだか分かりませんねえ。
仁兵衛　あの子も可哀さうですよ。母親がゐなくなつてから、なんだか急に沈んだ子になつてしまひましてねえ。
（お花、仁太郎を連れて、出て來る。）
仁兵衛　（仁太郎を自分の側へ引き寄せて）どうした、坊主。何をしてゐた。
仁太郎　お花と繪をかいてゐた。
仁兵衛　何かほしいものはないか。
仁太郎　鉛筆と帳面ほしいの。
仁兵衛　さうか。それはお安い御用だ。（財布を出して、金をお花に渡す）お花、これで買つてやつてくれ。なりたけ紙の好い奴を買つてやれよ。
お花　はい。
仁太郎　お花、買ひに行かうよ。
お花　はい。お父樣がお出かけになつたら、直ぐ買ひに參ります。
仁太郎　お父ちやん、お出かけするの。
仁兵衛　ああ、直ぐ歸つて來るからね。おとなしくお花と遊んでゐるんだよ。
仁太郎　ああ。

仁兵衛　（思ひ出したやうに、木崎に向つて）ああ、さう言へば、君、こなひだ何とかの本が欲しいと言つてゐましたね。
木崎　ドガでせう。あれは高いから諦めちまひました。
仁兵衛　五十圓だとか言つてゐましたね。
木崎　ええ。
仁兵衛　（財布から金を出して、木崎の前へ出す）ぢやあ、失敬だけど、僕が買つて上げませう。
木崎　だけど、それは。
仁兵衛　まあ、僕の志だから、取つて置いて下さい。
木崎　さうですか。ぢやあ、まあ、一時拜借して置きます。（金を懷へ入れる）どうも有難うございました。
仁兵衛　（お花に）ぢやあ、行つて來るからね。仁太郎を頼むよ。
お花　はい。行つてらつしやいまし。
仁太郎　行つてらつちやい。
木崎　行つてらつしやい。
（仁兵衛、出て行く。木崎、ぢつとお花の顏を見る。お花、顏をそむける。）
お花　さあ、坊ちやん、帳面買ひに行つて參りませう。
仁太郎　ああ。
（お花、急いで仁太郎に下駄をはかせ、その手を引い

て、外へ出て行つてしまふ。木崎、笑ひながら、元ゐたところへ戻り、胡坐をかく。懐から寫生帳を出して、空想で何か繪をかく。稍長き間。）

（女の笑ひ聲が聞える。お絹とおしんが、小僧に荷物を持たせて、歸つて來る。二人は夢中で話しながらはひつて來るので、はじめ木崎のゐるのに氣がつかない。上へ上がつて、はじめてそれに氣がつく。）

お絹（立つた儘、稍鋭く）まあ、木崎さん。あなた、まだゐたの。

（木崎、平氣な顔をして、二人を見上げる。お絹、木崎を睨む。おしんの顔をぢつと見る。おしん、姉の後に立つた儘、ぢつと木崎の顔を見る。）

――幕――

第二幕

第一幕に同じ舞臺。第一幕より五日を經たる朝の十一時頃。

おしんと木崎が、部屋の掃除をしてゐる。おしんは手拭を姉様冠りにして、赤い襷をかけてゐる。木崎は鳥打帽を冠つて、袴の股立をとつてゐる。おしんがはたきをかけて歩くあとを木崎が箒ではいて廻る。

おしん　だめねえ、木崎さん。そんなにごみをあつちへ集めたり、こつちへ集めたりしちやあ。ごみは一つところへ集めるものよ。

木崎　さうですか。（不器用に掃く）

しん　だめ。だめ。それぢやあ折角掃いたごみが又散らかつちまふわ。ちよいと貸して御覧なさい。（はたきを持つた儘、木崎の箒をとつて掃く）どう、うまいでせう。

木崎　成程ね。

おしん　感心してゐちやだめよ。さあ、やつて御覧なさい。男だつて掃除ぐらゐ稽古しとくものよ。（箒を出す）

木崎　いや、よしませう。とてもだめです。僕は今度ははたきの係りになりませう。

（と、おしんの手からはたきを取る。その時、一寸おしんの手を握る。）

おしん　おや。どこでそんな事習つたの。

木崎（態ともぢもぢして）別に習つたといふわけぢやないけど……その位の事は。

おしん　ひとりで考へつくと言ふの。嘘、嘘、馴れてるわ。可愛らしい顔をしてゐても、なかなか隅へ置けないのね。

木崎（頭を抱へて）困るなあ、僕、そんなに言はれちやあ。

おしん　姉さんも、きつとその手でやられたんだよ。
木崎　僕、僕、姉さんと何でもありやしませんよ。
おしん　だめ、だめ、ちやんと知つてるわ。おう恐い。
木崎　何も恐い事なんかありやしません。僕は何の束縛も受けてやしません。あなたの方がよつぽど束縛のある體だ。
おしん　（むきになる）なに。なんの束縛があつて。
木崎　御亭主があるぢやありませんか。
おしん　亭主があつたつて、別れてしまへば、自由な體だわ。
木崎　別れよつたつて、別れられないぢやありませんか。
おしん　別れてよ。きつと別れるわ。もう別れてるんだわ。
木崎　でも、籍が向うにある間は、まだあなたの體ぢやありませんよ。
おしん　籍だつて、今に拔いて貰ふわ。いやなこつた。あんな遊冶郎なんか。
木崎　なんて、いばつたつて、縛られてゐるんですよ。好い氣味だ。
おしん　まあ、憎らしい。
木崎　憎らしけりやあ、どうでもして御覽なさい。
おしん　きつと、どうしてもよくつて。
木崎　ええ、よござんすとも。

（おしん、いきなり木崎の頰に手を廻す。木崎、わざと知らん顔をして、ぢつと立つてゐる。おしん、力任せに、木崎の頰をしめる。）
木崎　（頓狂に）あ、痛い、痛い。
（途端に、奥から、お絹が出て來る。お絹は病人らしく、髮をぐるぐる卷にして、兩方のこめかみに膏藥を張つてゐる。三人、暫く無言。おしん、木崎を離れる。）
お絹　（稍暫して）おしんちやん。
おしん　（平氣で）え。
お絹　何をしてゐたの。
おしん　（平氣で）木崎さんが、あんまり憎らしい事を言ふから、ひどい目に會はしてやつたの。
お絹　（間を置いて）ばかに仲が好いのね。
おしん　（直ぐ）仲が惡いのよ。
お絹　（嘲笑する）ふん。
おしん　おや。姉さんでもないのね。
お絹　まあ、好いわ。（木崎に）木崎さん　濟まないけど、暫く家へ來ないで下さいな。
木崎　なぜです。
お絹　あなたはあんまり人づきが好過ぎるわ。もう少し人づきが惡くなつたら、又入らつしやい。
木崎　（哀願するやうに）お絹さん。お願ひだから、そん

な變な事を言はないで。

お絹　まあ、なんでも好いから歸つて下さい。

木崎　（素直に）ぢやあ、けふは歸りますけど。

お絹　もう來ちやいけなくつてよ。おしんちやんのゐる間に、又來たら承知しないから。

おしん　まあ、姉さん、そんな言はなくつたつて。木崎さんに惡いとこはないんだわ。

お絹　まあ、あなたは默つて入らつしやい。仲が惡い筈だつたわね。

おしん　（ぶつけるやうに）はい、はい。

お絹　（木崎の前へ進む）さあ、歸つて頂戴。直ぐ歸つて頂戴。

木崎　今歸りますよ。

お絹　（木崎の肩を押す）さあ、お歸り。お歸りつたら。

（木崎、もう何も言はずに、逃げるやうに外へ出てしまふ。）

おしん　（暫くして）姉さん、隨分邪慳にするのねえ。

お絹　（いつの間にか顏が和らいでゐる）あれで丁度好いのよ。お坊ちやんでしやうがありやしない。

おしん　でも、可愛らしい人だわ。今に豪い人になりさうだわ。前の小島さんなぞとは比べものにならなくてよ。もつと大事にしておやりなさいよ。

お絹　だけど、おしんちやん、あんまり若い者にからかつちやあだめだよ。直ぐ本氣にするから。

おしん　大丈夫よ。あたしぢやありませんか。

お絹　お前さんの方は大丈夫でも、向うがああいふ坊ちやんだからね。

おしん　安心してらつしやいよ。あたしだつて、まだ自分の體になり切つたといふわけぢやなしね。

お絹　だからさ。あたしもそれを心配してるのさ。ほんとに、お前さん、しつかりしてゐておくれよ。

おしん　姉さんも年をとつたわね。大丈夫よ。

（格子戸を明けて、芝居茶屋の男の延吉がはひつて來る。）

延吉　へい、こんちは。（おしんを見て）おや。どうも、これはお珍しい。（上がり框に頭をすりつけて）暫くでございます。どうもすつかりお變りになりましたな。

おしん　延さん。達者で結構だね。

延吉　へい。お蔭樣で。相變らず、こちらの御厄介にばかしなつてをります。（お絹を見て）お加減が惡いさうで。どうも、ちつとも存じませんでしてね。あんまりお見えにならないから、どうなすつたかと思つてゐましたが、電話で伺ふのもなんだと存じましてね。

お絹　誰に聞いて。

延吉　御病氣の事ですか。いえ、高松先生のとこの男衆が、きのふ電車ん中で安藤さんにお目にかかつたんださうでして。
お絹　ああ、さう。
延吉　先生も、ふだん丈夫な方だけに心配なんだなんてね。それで、あつしにけふ是非樣子を伺つて來てくれつてね。
お絹　なあに、なんでもないんだよ。少し頭痛がするだけさ。かうやつて起きてる位だもの。
延吉　へえ。それで、實は今あつしも安心したわけですが、その位なら、お芝居へ入らつしやいな。却つて、お氣が晴れますよ。
お絹　あたしもさう思つてるんだけど、おしんちやんが歸つて來たりして、何だかごたごたしてるものだからね。
延吉　ですから、お二人で入らつしやいましな。
お絹　それが、まださう行かないんだよ。
延吉　（分からないで）然樣ですか。
（間。）
おしん　延さん、先生は相變らず。
延吉　もう、いつも、あなたのお噂ばかり。あんな方を田舍で埋もらせるのは惜しいなんてね。始終さう言つて入らつしやいますよ。
おしん　うまく言つてるよ。相變らず、小林の奧さんなんだらう。
延吉　（態と目を丸くして）ど、ど、どう致しまして。もう、この頃は、奧さんなんぞ相手になさりやあしません。奧さんの方でも、もうこの頃はぷつつりです。ねえ、お絹さん。
お絹　（おしんに）そりやあ、さうよ。
おしん　へえ、さう。やつと分かつたのねえ。先生も人が好いからねえ。
延吉　ですから、どうぞお二人で入らして下さいまし。どんなに先生がお喜びになるか分かりません。
おしん　さう。
延吉　（懷から手帳を出して）如何です。明後日は。明後日なら、東のうづらの好いとこがございますが。
お絹　まあ、あとで相談して、電話をかけるから。
延吉　相談なぞなさるにや及ばないぢやありませんか。（帳面へ何か書く）明後日一間とつて置きますよ。
お絹　この人に會つちやあ、とてもかなはないわ。（手早く金を紙に包む）
延吉　（立ち上がる）では、御免を。これですつかり安心いたしました。では、明後日。序幕が好いんですから、どうぞお早く。お待ち申してをります。（お絹、默つて金包を出す）どうも、恐れ入りますねえ。ちよいと上が

つたばかりなのに。（金包を戴いて直ぐ懐中する）御遠慮なしに頂いて置きます。では、御免を。

（延吉が格子戸を明けると、格子戸の外に、おしんの夫駒澤卓爾が洋服姿で立つてゐる。延吉少しあとへ下がる。駒澤、はひる。延吉、お絹達の方を見る。お絹もおしんも默つてゐる。延吉、そこそこに出て行く。）

駒澤（お絹に挨拶する）姉さん。暫くでした。

（おしん、直ぐ立つて、奥へ行かうとする。お絹、引き留める。おしん、又坐る。平氣で顔を上げてゐる。）

お絹（駒澤に）まあ、お上がんなさい。

（駒澤、默つて靴をぬぎ、上へ上がると、おしんの顔は見ないで、お絹の前に、いきなりひれ伏す。）

駒澤　姉さん、全く僕の不徳の致すところです。どうか許して下さい。

お絹　いつ、こつちへ入らしたの。

駒澤　濟みません。けさ參りました。（少し顔を上げる）

お絹　そんなにして入らしちやあ、お話が出來ませんわ。

駒澤（普通の姿勢になる）おしんに、なんにも惡いところはありません。みんな僕が惡いんです。

お絹　いや、いや。膝を崩さなくちや。洋服がたまりませんわ。

駒澤（素直に、直ぐ膝を崩す）崩しました。

お絹　お詫なら、あたしの方でしなくちやあなりませんわ。無斷で家を飛びだしたりなどして、たとひ何であらうと、それはおしんが惡うございます。

駒澤　いいえ。それも僕が惡いんです。僕は何一言（なにひとこと）も申すところはありません。

お絹　お父さんはなんて言つてらしやるの。

駒澤　めちやめちやに叱られました。

お絹　お母さんは。

駒澤　お袋にも怒られました。

お絹　ぢやあ、おしんの罪は勘辨して下さるんですか。

駒澤　勘辨するも、しないも、僕はもう一遍どうしても歸つて貰ひたいと思つてやつて來たんです。

お絹　でも、あなたは大層お氣に入りの方があるんだつて言ふぢやありませんか。

駒澤　それはありました。併し、僕はそれが爲におしんを捨てようと思つた事は唯の一度もありません。

お絹　でも、そりやあ、あなた勝手過ぎますわ。

駒澤（狼狽して）ですから、ですから、それも親父に散散叱られました。ですから、もうそれとも絶縁しました。もう、これから、全く新しい生活にはひります。僕は始めて目が覺めました。

お絹（おしんに）おしんちやん、どう。

おしん　（默つて笑つてゐる）

お絹　お前さんの考へ一つよ。

おしん　だめよ。うちの人は。口がうまいんだから。

駒澤　（狼狽して）そ、そ、そんな　今度は本當に悔悟したんだ。

お絹　男がそんなに安つぽく悔悟するもんぢやなくつてよ。

駒澤　（いきなり、おしんの前にひれ伏す）あやまる。あやまる。本當にあやまる。もう大丈夫だから安心してくれ給へ、もうどんな事があつても大丈夫だ。親父もお袋もどんなに君の歸るのを待つてゐるか分かりやしない。どうか兩親に免じて、許してくれ給へ。

おしん　ほんとにお父さんやお母さんには濟まないんだけれど、あんまりあなたがひどいもんだから。

駒澤　（又ひれ伏して）だから、もうその事は言はないでくれ給へ。僕が惡いんだから。

お絹　（おしんに）おしんちやん、どう。男の方がこんなにあやまつてゐるんだから。それにお父さんやお母さんに對してもね。

おしん　（急に）だめ、だめ。いつもそれで遣られて來たんだから。もう、お父さんやお母さんに濟まない位は構はないわ。あたし、どうしても歸るのは厭。

駒澤　（おしんの顔をぢつと見る）こんなにあやまつても許してくれないの。

おしん　厭です。厭です。

駒澤　（少し强くなる）ぢやあ、僕もここは動かない。君が歸つてくれるまでは死んでも動かないから。

おしん　（立ち上がる）ぢやあ、あたしも出て行くばかりです。あなたは自分の家からあたしを追ひ出しただけでは滿足しないで、あたしの家にもゐられないやうにしようと言ふんですね。

駒澤　（又弱くなつて）ね、君、お願ひだから歸つてくれ給へ。これからは、一擧一動君の言ふ通りにするから。

お絹　（おしんに）おしんちやん、歸つて上げたら、どう。

おしん　（立つた儘）厭、厭。

駒澤　これぢやあ、君は僕が厭になつたんだね。

おしん　ええ、厭になりました。

お絹　（おしんに）まあ、お前、そんな。

おしん　だつて、さうなんですもの。爲方がないわ。

駒澤　いや、そんな筈はない。それは自分で自分を欺いてゐるんだ。愛はあるんだ。確に愛はあるんだ。唯、僕の人格を信用しないんだ。誤解さへとけば、何でもないんだ。

（おしん、默つて、外へ出て行かうとする。）

お絹 （少し驚いて）おしんちやん、何處へ行くのよ。
おしん だつて、あたし、こんな所にはゐられないわ。
お絹 ゐられないたつて、ここはお前さんの家ぢやないか。
おしん いいえ。もう、あたしの家ぢやないわ。一度お嫁に行つた以上は、もうあたしの家ぢやないんだわ。
お絹 そんなら、名古屋へ歸れば好いぢやないか。
おしん いいえ。あすこも、あたしの出て來た家だから、もうあたしの家ぢやないわ。
お絹 ぢやあ、どうしようつて言ふの。
おしん もう、あたしは何處にも家はないんだわ。（下へ降りて下駄をはく）
お絹 どうしたつて言ふのよ。
おしん 然樣なら。（どんどん出て行つてしまふ）
（お絹、暫く呆然と後を見送る。駒澤は、その方を見ないで、ぢつとしてゐる。やがて、お絹、駒澤の方を向く。）
お絹 駒澤さん。
駒澤 はい。
お絹 あなたも意氣地なしねえ。
駒澤 （驚いて）え。
お絹 自分の女房に逃げられるなんて。少し、しつかりなさいよ。
駒澤 でも、僕は弱いんですから。
お絹 弱いつたつて、女房の外に二人も三人も女をこしらへてゐるんでせう。それだのに、女房一人つかまへてゐる事が出來ないなんて、隨分な意氣地なしだわ。
駒澤 でも、それは。
お絹 もう、あたしもこの事には口は利きませんから、あなたに腕があるなら、首根つこへ繩をつけてでも、おしんを連れてお歸りなさい。あなたの責任だわ。
駒澤 そりやあ、僕の責任です。
お絹 その責任のある人が、今の態たらくは何。男の癖に、ぴよこぴよこあやまつたりなんかしてさ。その揚句に、たうとう逃げられちまつたぢやないの。
駒澤 心當りがあるなら敎へて下さい。僕、どこへでも探しに行きますから。
お絹 心當りなんかありやしなくつてよ。
駒澤 あの、高松とかいふ新派の役者のとこへ行つたんぢやないでせうか。
お絹 そんな事が分かるものですか。どこへでも自分で探しに行つて、自分で捕まへて入らつしやいよ。その位の事が出來なきやあ、人の亭主になる資格はないわ。あたしや、もう知らなくつてよ。莫迦莫迦しい。（どんどん奥へはひつてしまふ）

（駒澤、泣き出しさうな顏になる。途端に格子戸が明いて、主人の仁兵衞が歸つて來る。仁兵衞は暗い顏をしてゐる。駒澤を見て、何か言ひさうにしたが、又默つてしまつて、逃げるやうに二階へ上がらうとする。）

駒澤　（泣き聲を出して）　兄さん。

仁兵衞　（これも聲を絞つて）　僕には分からない。僕には分からない。（と言ひながら、二階へ上がつてしまふ）

（お花　仁太郎を連れて、外から歸つて來る。仁太郎、飴屋の賣る旗を持つてゐる。）

――幕――

第三幕

第二幕に同じ舞臺。第二幕より五日を經たる夜の七時頃。

主人仁兵衞とその子仁太郎が、寂しく食卓を圍んでゐる。仁兵衞は手酌で酒を飲んでゐる。仁太郎は飯を食べてゐる。お花が給仕をしてゐる。

仁兵衞　お花、この頃、木崎さんがちつとも來ないやうだな。

お花　ええ、ちつともお見えになりません。

仁兵衞　どうしたんだらう。體でも惡いのかしら。

お花　さあ、どうでございませうか。

（間。仁兵衞、酒を飲む。仁太郎、飯を代へる。）

仁兵衞　（仁太郎に）　好い子だ。よく喰べるな。

仁太郎　お父ちやん。

仁兵衞　なんだ。

仁太郎　これから、毎晩一緒に御飯をたべる。

仁兵衞　ああ、これから、毎晩一緒に喰べてやる。

仁太郎　一緒に寢てくれる。

仁兵衞　ああ。寢てやるとも。

仁太郎　もう、よそへお泊りしない。

仁兵衞　ああ、しないとも、しないとも。

仁太郎　名古屋の伯母ちやん、もう歸つたの。

仁兵衞　ああ、もう駒澤の伯父さんとこへ歸つてしまつたんだ。

仁太郎　うちの伯母ちやんは。

仁兵衞　（一寸詰まつて）　うちの伯母ちやんは、お父ちやんの御用で、田舍へ行つたんだ。

仁太郎　いつ歸るの。

仁兵衞　あさつて。ああ、あさつて歸つて來る。

仁太郎　僕、寂しいんだよ。お父ちやん、きつとあしたから、お出かけしないでね。

仁兵衞　大丈夫だ、大丈夫だ。

仁太郎　（お花の方へ茶碗を出して）　お茶。
お花　はい。（茶を汲んでやる）
仁兵衞　（仁太郎に）　お茶を飲んだら、お花と奥へ行つて、三十分ばかり遊んで、それから、寝るんだぞ。お父ちやん、直ぐあとから行つてやるから。
仁太郎　ああ、きつとだよ。
仁兵衞　御飯をたべて直ぐ寝ると毒だからな。少し遊んでから寝るんだよ。
仁太郎　ああ。お父ちやん。僕、繪うまいんだよ。今に木崎さん見たいな繪かきになるんだ。
仁兵衞　さうか。それは豪いな。（お花に）　さあ。ここは好いから早く連れてつてやれ。
お花　はい。（仁太郎に）　さあ、坊ちやん、參りませう。
仁太郎　（立つて）　お父ちやん、きつと來てね。
仁兵衞　（仁太郎の手をとつて）　ああ。きつと行くよ。
（お花、仁太郎を連れて奥へはひる。）
（稍長き間。仁兵衞、酒を飲む。格子戸、靜に明く。幇間平孝、はひつて來る。）
平孝　おさな子がひとり飯食ふ秋の暮か。これは、どうも、何事でげす。
仁兵衞　（知らん顔で、手酌で酒を飲んでゐる）
平孝　（どんどん上へ上がつて來る）　旦那。（仁兵衞默つてゐる。聲を高くして）　旦那。
仁兵衞　（煩ささうに）　何だな。
平孝　御立腹でげすか。これは恐れ入りましたな。（態と勢よく）　さ、出かけませう。いけませんな。そんなにくすぶつちまつちやあ。
仁兵衞　（盃をやる）　まあ、一杯やれ。
平孝　（盃を戴いて）　へ、恐れ入ります。何は。お絹さんは。
仁兵衞　誰もゐない。
平孝　おやあ、なほのこつた。出かけませう。出かけませう。
仁兵衞　もう遊びはやめだ。
平孝　御冗談もんですぜ。飛んでもない。
仁兵衞　時勢にやあかなはねえ。もうおれなどの出る幕ぢやねえよ。
平孝　旦那、そんな事は言ひつこなしだ。高があんな文學藝者の一人や二人、まだまだ、旦那の意氣の分かるやうなのがゐますよ。
仁兵衞　だめだ。だめだ。もうおれなどの遊ぶ世界はねえ。
平孝　旦那、どうしたんです。あんな鼻つたらしの事が、そんなに氣になるんですか。
仁兵衞　あいつの事ばかりぢやねえ。おれはもうこの頃の

藝者といふ藝者に呆れ返つたんだ。

平孝　旦那、そりやあ、ちと御量見が狹いといふもんでげすぜ。何も今日の藝者衆たつて、みんながみんな、さうだといふわけぢやありませんぜ。

仁兵衛　藝者も婦人雜誌を讀んで、西洋の活動寫眞役者に夢中になるやうぢやおしまひだ。

平孝　モンロオ・サルスベリかね。小冬さんは、ありやあ別ですよ。あんななあ珍物だ。さう澤山ゐやしませんよ。

仁兵衛　なあに、秋香だつて、小糸だつてさうだ。昔はお客の話が藝者に分からなかつたもんだが、今ぢやあ藝者の話が客に分からなくなつたんだ。ひでえ世の中よ。今に洋服を著て、オオトバイでお座敷へ來るやうになるだらう。恐ろしい。恐ろしい。

平孝　まあ、なんでも好いから參りませう。旦那は一體、惚れつぽいからいかねえのだ。小冬さん位の女なら、籍で描く程ありますぜ。まあ、默つて、萬事あつしの方寸に任せて、來て御覽なさい。まん直しに、素敵滅法といふのをお目にかけますから。

仁兵衛　だめだ。だめだ。大體、もう手前などが時代おくれなんだ。よしにしねえ、よしにしねえ。

平孝　よしませんねえ。會稽の恥辱。君の馬前に討死をしても、お連れ申しますねえ。

仁兵衛　うるせえな。どうしたつて、行きやあしねえんだから、物を言ふだけ損だ。早く歸りねえ。

平孝　歸りません。死んでも歸りません。

仁兵衛　（本當に怒つて）歸らねえか。

平孝　（直ぐ縮み上がつて）ほんとに、旦那、いけねえんですか。

仁兵衛　だめだと言つたら、歸らねえか。（立ち上がりさうにする）

平孝　御免、御免。歸ります。（聲色まがひに）殿には殊の外のお怒り。御機嫌直るそれまでは、ぢつと蟄してゐるでござらう。やあ、テン、テン。（と、きまりの惡いのを隱して、出て行く。）

（間。仁兵衛、立て續けに又二三杯飮む。お花、奧から銚子の新しいのを持つて來る。）

仁兵衛　寢たか。

お花　もうおやすみになりました。

仁兵衛　ぢやあ、こつちはもう好いから、坊の側についてゐてやつてくれ。

お花　はい。（奧へはひる）

（間。仁兵衛。飮み續ける）

（支配人の安藤、格子戸からはひつて來る。）

仁兵衞 （直ぐ聲をかける） どうした。分かつたか。
安藤 （上がり框に腰をかけて） やつと分かりました。上野の鹽原に入らつしやいます。
仁兵衞 一人か。
安藤 お一人でございます。延公の話ぢやあ、高松さんと連絡があるやうな事を言つてますが、どうもあたしの見たところぢやあ、そんな風は見えません。
仁兵衞 で、お前會つたのか。
安藤 おしんさんにですか。ええ、お目にかかりました。
仁兵衞 おしんは、自分ぢやあどう言つてるんだ。
安藤 もう名古屋へも歸らなけりやあ、お家へも歸らないと仰しやるんです。
仁兵衞 で、どうしようつてんだ。
安藤 茶屋奉公をしてでも、自分の身は自分で立てると仰しやるんです。
仁兵衞 莫迦な。そんな事が出來るもんか。
安藤 あたしもそれを申して見たんですが、何しろ一徹な方ですから、どうしてもあたしの言ふ事などはお聞き入れにならないんです。
仁兵衞 困つたなあ。で、お絹の方の行方は分かつたか。
安藤 これは直ぐ分かりました。高松さんのとこに入らつしやいました。
仁兵衞 こりやあ、別に變な事はないんだらう。
安藤 へえ。お絹さんの方は、別にどうつて事はないやうです。おしんさんの事も大層心配して入らつしやいましてね。どうか在りかを探してくれつてさう言つて入らつしやいました。
仁兵衞 お絹が高松さんのとこにゐるやうなら、おしんと高松さんの間になんにもない事は確だな。
安藤 それは確でございます。
仁兵衞 （一寸考へて） おれには何が何だかちつとも分からないんだ。駒澤君が出て來たんで、おしんが家を出たなあ、まあ分るとして、お絹までが家を出るなんて。
安藤 然樣です。そのわけもお絹さんに伺つて見たんですが、唯笑つて入らつしやるばかりで、なんとも仰しやらないんです。
仁兵衞 木崎君とどうかしたんぢやないか。
安藤 あたしも、先づそこいらだと思ふんですが、何しろあんな氣丈な方ですから、その位な事で、まさか家出もなさろまいと思ふんですが。
仁兵衞 どうも分からないなあ。
安藤 全く分かりませんなあ。
仁兵衞 （沈んで） いや、何もかもおれが惡いんだ。一家の主人が、家を外にしてゐるからこんな事になるんだ。

安藤　でも、旦那の事は、お絹さんだつて、よく承知をして入らつしやるんですから。

仁兵衛　おれが意氣地がないんだ。女房に死なれて、酒を飲み歩く。飲み歩いちやあ、又女に嫌はれる。（捨てるやうに）へ、よく出來てやがらあ。

安藤　（立ち上がり）では、もう今夜は別に御用はございませんか。

仁兵衛　さう。何を言ふにも、今夜の事にやあ、しやうがあるまい。どうも御苦勞だつた。

安藤　では、また明日。明朝は早く伺ひます。

仁兵衛　ぢやあ、さうしてくれ。もう上さんはすつかり好いか。

安藤　お蔭樣ですつかり好くなりました。ぢやあ、おやすみなさいまし。

仁兵衛　おやすみ。

（安藤、出て行く。間。仁兵衛、又酒を飲む。）

仁兵衛　（暫くして）お花。お花。

（「はい」といふ聲がして、お花が出て來る。）

仁兵衛　今夜は早く戸をおしめ。もう誰も來ないから。さうして、早くおやすみ。

お花　はい。（土間へ降りて、格子戸をしめに行く。）

（お花が表の戸を締め終つて、上へ上がらうとすると、戸を輕く叩く音がする。）

仁兵衛　また誰か來たのか。明けずに聞いて御覽。

お花　（戸の側へ寄つて）どなたでございます。（表で男の何か言ふ聲がする）駒澤の旦那樣でございますか。

仁兵衛　さうか。ぢやあ、明けてお上げ。

（お花、戸を明ける。駒澤、はひつて來る。お花、上へ上がつて、座蒲團を一つ前へ出して、奥へはひる。）

仁兵衛　さあ、上がり給へ。

駒澤　失禮します。（上へ上がる）

仁兵衛　（直ぐ杯を出す）さあ、一杯どうです。

駒澤　有難う。（杯を受けて、直ぐ飲む）

仁兵衛　（駒澤の顔を見て）どうしました。

駒澤　分かりません。

仁兵衛　おしんのゐどこですか。分かりましたよ。

駒澤　分かりましたか。

仁兵衛　分かりました。併し、もう、とても名古屋へは歸りさうもありません。

駒澤　歸りませんか。

仁兵衛　歸りませんね。

（稍長き間。）

仁兵衛　君ばかりぢやない。僕もたうとう捨てられましたよ。

駒澤　あなたが。誰に。

仁兵衛　（或意味を含めて）　きやうだい二人に。

駒澤　さう言へば、姉さんも歸らないさうですね。

仁兵衛　爲方がない。捨てられた男二人で飲みませうよ。

駒澤　男はだめですね。

仁兵衛　女にやあ敵ひませんよ。

駒澤　爲方がありません。飲みませう。（自分の前にある一杯へ、自分で酒を注いで飲む）

仁兵衛　（立つて、湯呑を一つ持つて來る）　酒のこつてす。酒のこつてす。（湯呑へ自分で酒を注ぎ、一息に一杯飲んで、それを駒澤にさす）

駒澤　これですか。

仁兵衛　驚く事はないでせう。

駒澤　飲みます。（仁兵衛に酌をして貰ふ）

仁兵衛　煙草一服といふ事があります。まあ、酒を飲んで、世の中を考へ直すんですね。

駒澤　もう、どうしても諦めなきやならないでせうか。

仁兵衛　お諦めなさい。お諦めなさい。あつしもう女の事は諦めました。

駒澤　飲みませう、大に飲みませう。

仁兵衛　さうだ、さうだ。さう來なくちや、男ぢやない。

（二人で湯呑をやりとりして飲む。間。木崎がぼんやり、はひつて來る。）

仁兵衛　（それに目をつけて）　ええ、びつくりした。木崎君ぢやないか。

木崎　ええ。（と言ひながら、上へ上がる）

仁兵衛　木崎君。（駒澤を指して）　これはおしんの亭主の駒澤さんだ。ぢやあない。おしんの元の亭主の駒澤さん。

木崎　（駒澤に）　お名前は承つてゐます、僕は木崎です。

駒澤　僕もお名前はお絹さんから承つてゐます。

仁兵衛　どうした。木崎君。珍しいぢやないか。

木崎　御不沙汰をして濟みません。

仁兵衛　（湯呑を出す）　まあ、一杯やり給へ。

木崎　僕は、酒は。

仁兵衛　まあ、おつきあひにやるさ。君も男の一人だ。

木崎　男は男ですが、極めて意氣地のない男です。

仁兵衛　そりやあ僕達だつて同じ事だ。今も二人でそれを言つてゐたのだ。女に捨てられた男二人だ。

木崎　僕も捨てられました。

仁兵衛　誰に。誰に捨てられた。

木崎　それは言へません。

仁兵衛　お絹にかい。（高く笑ふ）

木崎　さうぢやありません。

仁兵衛　何しろ、それは面白い。捨てられた男が三人集ま

つたんだ。飲み給へ、飲み給へ

木崎　飲みませうか。（湯呑に手をかける）

駒澤　（笑つて）お飲みなさい。

仁兵衛　は、は、面白い、面白い。

駒澤　（木崎に）あなたなどは、いづれ木崎の婦人に捨てられたんだらうが、僕などは自分の女房に捨てられたんだからひどいや。

仁兵衛　僕はきやうだいに捨てられたんだ。きやうだい二人によ。

木崎　僕だつて。（と言ひかけて、湯呑からぐつと酒を飲む）

仁兵衛　いよう、その意氣、その意氣。

駒澤　これから、みんなで仲よくして、男の國を作りませうよ。

仁兵衛　さうだ。さうだ。男の國。男の國。男ならでは夜の明けぬ國さ。（唄ふやうに）男なら——では、と來たね。

木崎　贊成ですね。さうして、世界の女を、みんな征服してやりませう。

駒澤　さうだ。さうだ。征服だ。勝利だ。

仁兵衛　男の國ばんざあい、か。

木崎　は、痛快。痛快。

（突然、明けつ放しになつてゐる格子戸から、お絹がはひつて來る。これも酒に醉つてゐる。）

お絹　（木崎に目をつけると、いきなり上へ上がつて、木崎の肩を掴む）やい。又やつて來やがつたな。お前さんだらう。おしんちやんをおびき出したなあ。

木崎　知りませんよ。僕は知りませんよ。

お絹　だめだ。ちやんと、けふ鹽原へ行つて、調べて來たんだ。

木崎　そりやあ、行つた事は行きましたけれど、直ぐ追ひ出されつちまつたんです。

お絹　何を言つてるんだい。さあ、歸れ。ひとの家をめちやめちやにしやあがつて。（手を掴んで、土間へ引きずりおろす）さあ、歸れ歸らないか。（木崎の頬を平手でめちやめちやに打つ）

木崎　御免なさい。御免なさい。

（お絹、木崎を踏んだり蹴つたりする。仁兵衛と駒澤、一度に酒がさめた樣子で、呆然としてゐる。奥で仁太郎が泣き出す。お絹、なほ烈しく木崎を打つ。）

——幕——

西山物語（三幕六場）

人物

渡邊源太
妹かへ
弟惣治
母
渡邊團次
息右内
西岡の使者
仲人
その他

場所

山城國松の尾

時代

德川中期

第一幕

源太の家。

源太の母、ひとりで機を織つてゐる。家のうしろで、木劍の試合の音がする。時々掛け聲も聞える。

暫くして、源太が出て來る。木劍を手にしてゐる。

源太　お母さん。おひとりですか。

母　あゝ。

源太　かへはどうしました。

母　右内とふたりで紅葉を見に出かけたよ――あたしが勸めたものだから。

源太　惣治はどうしたのです。

母　あれも裏山の方へ遊びに行つたよ。

源太　しやうがないな。年寄をひとり置きつ放しにして行つてしまつて。

母　時候が好いから、若い者は內にぢつとしてはゐられないよ。爲方がないさ。

源太　でも、病後のあなたをひとり置き去りにして行くなんて。

母　なあに、あたしはもう大丈夫だよ。お前のお蔭で、もうすつかり達者になつたのだから。

源太　併し、まだ機などにおかかりになるのは早いでせう。

母　だが、お前がさうやつて働いてゐるのに、あたしばか

りが遊んでもゐられないからね。

源太　さう仰しやられると一言もありません。相變らず弟子と言つたら、近所の若いのが五七人來るきりで、一向うだつが上がりませんからね。

母　困るねえ。さういふ風にとられては。あたしはこの暮らしを決して不足に思つてゐるのではないのだよ。今は泰平の世の中だから、劍道の廢るのは當り前だよ。それでも、お前や團次が苦しい思ひをしながら、父祖の道を捨てないでゐるのを、あたしはどんなに喜んでゐるか分からないのだよ。

源太　御免下さい。世の中をひがんでゐるので、つい愚痴が出たのです。お母さんのそのお心持は、わたしにもよく分かつてゐるのです。分かつてゐながら厭みを言つて濟みませんでした。

母　そんなに謝らないでも好いよ。わたしはお前を責めるつもりで言つたのではないのだよ。お前があんまり氣の毒だから、勵ますつもりで言つたのだよ。

源太　それもよく分かつてゐます。有難いと思つてゐます。併し、わたしもせめて團次ほどの弟子を持つて、團次ぐらゐの暮らしが出來れば、これ程ひねくれはしなかつたらうと思ひます。

母　なあに、團次だつて大して好い暮らしをしてはゐはしないよ。これが戰國だつたら、なかなかあんなものではないと思ふよ。團次だつて、決して今の暮らしに滿足してゐるのではないのだよ。不平な點はお前と同じだよ。

源太　そりやあさうでせう。その點はわたしも同情してゐます。わたしは決して團次を羨んでゐるのでも妬んでゐるのでもないのです。それどころか、この春からのお母さんの病氣に就いて、あれのしてくれた深切に對してはこちらが恥づかしくなるくらゐ感謝してゐるのです。高い金を出して人蔘は買つてくれる。やもめ暮らしの不自由な中から、ああやつて息子の有内を毎日のやうに看護によこしてくれる。實際、あれは義理だの人情だのだけで出來ることではないと思つてゐます。

母　それ程に思つてゐるなら、なにも團次に弟子が多いからと言つて、そんなにいらいらしなくても好いではないか。

源太　そこです。わたしは團次に弟子が多いからと言つて、唯それだけでいらいらしてゐるのではないのです。團次は人づきが好いから、弟子の寄りも好いのです。從つて道場の一つも持てれば、ああした暮らしも出來るのです。わたしは生れつき人づきが惡い。それが爲に弟子も少い。從つて道場一つ建てることが出來ないで、稽古と言へば、裏の竹藪でしなければならない。それはまあ好いとして、

お母さんにまで始終暮らしのことで御心配をかけるのです。わたしはそれが堪へられないのです。わたしは自分で自分の性質を憎むのです。

母　成程、團次とお前とは從兄弟同志で、顔までが兄弟のやうに似てゐながら、性質は小さい時からまるで違つてゐた——併し、それは生れつきだから、しやうがないではないか。それは世渡りをする上から言つたら、團次の方が德で、お前の方が損だといふやうなとこがあるかも知れないが、大きな目で見たら、どつちが好い、どつちが悪いといふことは言へないと思ふよ。團次の性質には團次の性質で好いところがあるし、お前の性質には又お前の性質で好いところがあると、わたしは思ふよ。劍道でも二人とも負け劣りはないのだから、ひがむところもなければ、すねるところもないではないか。唯お前達の不幸は、今の世の中が泰平だといふだけだよ。それだつて、目はしの利いた武士なら、決して武術をおろそかにする筈はないのだから、今にきつと認められる時があると思ふよ。侍は商人ではないのだから、そんなに眼前のことに心を亂す必要はないと思ふよ。

源太　分かりました。分かりました。全くお母さんの仰しやる通りです。わたしはこれから心を海のやうに廣く持つて、おもむろに時の來るのを待ちます。

母　どうかさうしておくれ。さうしてくれるのが何よりの孝行だよ。

源太　分かりました。もう二度とこんなことは申し上げません。折角、お爲事をしていらつしやるお邪魔をして濟みませんでした。暫く休ませて頂きます。

母　それが好い。それが好い。けふは朝から休みなしだつたから、さぞ疲れたことだらう。

源太　有難うございます。

（源太、奥へ入る。母、直ぐ心を取り直した態で、また機にかかる。稍暫くして、かへと右内出て來る。）

母　おう、歸つてお出でだね。どこへ行つてお出でだつた。

右内　松の尾神社から妙本寺の方へ行つて參りました。

母　紅葉がさぞ綺麗だつたらうね。

かへ　木の葉とは見えませんでした。まるで花のやうでした。

右内　あの、妙本寺といふお寺は實に靜なお寺ですね。小半時、ふたりであすこの紅葉の下に立つてゐましたが、物音一つしないのです。唯、鹿おどしの竹の樋が、時々かたり、かたりといふだけでした。

母　また、それで歌が出來たのではないか。

かへ　ええ、二つも三つも出來たのよ。

右内　いいえ、ろくなものは出來はしません。申し上げられるやうなものは、一つもないのです。併し、あのお寺は氣に入りました。物を考へるのに、あんな好い場所はありません。

母　お前はほんとに不思議な子だねえ。あんな武骨な父親のもとで、小さい時から女手なしに育てられながら、どうしてそんなに優しい心を持つやうになつたのだらう。お前は武人の血を承けながら文人に生れついたのだね。お前の父親は、始終その事を言つて、意氣地なしだとか弱蟲だとか言つて嘆いてゐるが、わたしはそれも人間の一面だと思つてゐるよ。父祖の道といふことだけを思へば、渡邊の跡とりがそれでは困るが、廣い世の中から考へれば、さういふ人も一人や二人はなければならないと思ふよ。世の中が劍や楯ばかりになつては、あんまりあぢきないからね。

右内　全く、それは不思議です。自分では、これでも親父の業を繼ぎたいと思つて、隨分武術の修行もしてゐるのですが、どういふわけだか心持だけは、一向武人らしくならないのです。物の哀れといつたやうなものにばかり氣を取られて困つてゐるのです。

かへ　ほんとに、右内さんほど優しい方はありません。けふも松の尾神社で　名も知れぬ小さな地蟲を、知らずに踏みつけたと言つて、泣かぬばかりに心を痛めてゐるのです。

母　優しいも好い。物の哀れを知るも好いが、さうした生れつきの人は、兎角うつろひ易いものに心を動かされやすいから、それは氣をつけないといけないよ。あたしが病氣になつて、右内が毎日のやうに内へ來てくれるやうになつてから、かへも大層右内と仲がよくなつたやうだが、どうかお互に、雪霜にも變らぬといふ誠の心を持つて貰ひたいと思ふよ。御覽、向うの山の紅葉を。あれは顔に化粧をして、著物を著飾つてゐる人間のやうなものだよ。一時の盛りはあるかも知れないが、ぢきに色を變へてしまふのだよ。あたしの目から見れば、あの紅葉の中に立ち並んでゐる松や柏こそ眞心の男女だよ。

右内　分かりました。雪にも嵐にも負けますまい。

かへ　あたしの名は雪霜にも負けぬ木の名ださうでございますね。それは度々お母様に伺ひました。

母　さうだよ。亡くなつたお父樣が、お前の老先を思つておつけ遊ばした名なのだよ。だから、お前はその名を忘れずにゐてくれさへすれば好いのだよ。

（惣治、驅けて出て來る。）

惣治　お母さん。お母さん。

母　なんだい。慌ただしい

惣治　お母さん、大變ですよ。九州のお大名から內へお使が來ましたよ。

母　なんだい。出し拔けに。

惣治　圓次伯父さんのところへも行つたんですつて。僕、今そこで聞かれたんで、案內して來たんです。

母　なんだかお前の言ふことはちつとも分からないが、九州のお大名からこの內へお使が見えたと言ふのかい。

惣治　ええ、さうです。立派な人ですよ。兄さんは內にゐないんですか。兄さんが內にゐないと困るなあ。お出迎ひをしなけりやならないのに。

右內　惣治君、僕の內へも來たのかい。

惣治　ああ、さうだつて。その歸りだと言つてゐたよ。

かへ　一體、何のお使なのでせう。

惣治　分からないのかなあ。姉さんはばかだなあ。劍術の師範を賴みに來たにきまつてるぢやないか。

母　さう仰しやつたのかい。

惣治　僕にはなんにも言ひませんが、それにきまつてゐますよ。やつとお父さんや伯父さんが世間に認められる時が來たんですよ。

右內　それにしても、兩方へ一度に來ると言ふのは訝しいなあ。ふたり一緒に抱へるつもりかしら。

惣治　ああ、見えた。

（西國の使者、現る。）

母　源太を呼んで來よう。（奥へ入る）

使者　（惣治に）兄さんはお出でですか。

惣治　ゐるやうです。今、母が呼びに參りました。

使者　それは有難い――この邊は紅葉が綺麗ですね。

惣治　九州にはかういふところはありませんか。

使者　ありません。九州には熾烈な日光があるだけです。雪や霜はありません。從つて萎れるの色を變へるのといふ生活はありません。青いものは益青く、赤いものは益赤くなるばかりです。

惣治　氣持が好いですねえ。

使者　九州は男の國です。

惣治　歌詠みなんて柔弱な人間はゐないでせうねえ。

使者　武骨者ばかりです。

惣治　僕はさういふところへ行きたいなあ。

使者　もうぢき行かれますよ。

惣治　行かれますか。

使者　多分。

（源太、母と共に出て來る。）

源太　これは、これは。むさくろしいところですが、さあどうぞこちらへ。

使者　失禮します。（上へ、あがる）あなたが渡邊源太殿で

すか。

源太　さうです。これはわたしの母です。これは從兄弟團次の作、これはわたしの妹です。途中でお會ひになつた惣治はわたしの弟です。

使者　（右内に）あなたのお父さんのところへ唯今伺つて來ました。實に心の正しい御人で、わたしは感服しました。

源太　一體、どういふ御用でお出でになつたのですか。

使者　申しおくれました。あなた方おふたりのお名を聞いて、わたしは九州の菊池から使に參つたのです。是非どちらかお一人劍道の師範役にお抱へしたいと申してをるのです。

源太　どちらか一人。

使者　御親類のことですから、お二人御一緒といふ說も出たのですが、それは今までに例のないことなので、やはりお一人といふことになつたのです。

源太　それで。

使者　それで、お二人ともこの道にかけては優り劣りがないといふことを主人も承知してゐますのでお二人に試合をして頂いて、お勝ちになつた方をお迎へして歸つて來いと命ぜられたのです。

源太　團次は何と申しました。

使者　それには及ばぬ。源太の方がわしより腕が確だ。それに、わしは相當に弟子も持つてゐて、どうやら暮らしにも困らぬが、源太は甚だ逼迫してゐる。勝負には及ばぬから、是非源太を抱へて歸つて貰ひたい――と、かう申されました。

源太　それはわたしからも申し上げたい。團次はなかなかの腕利きです。それに、わたしはこの通りの武骨者で、到底主人に仕へて行くことは出來ないやうな生れつきです。いくら貧しいからと言つて、不適當なものが適當なものの地位を奪ふことは出來ません。勝負には及びません。これは是非團次といふことにおきめが願ひたい。

使者　どうも、兩方でさういふ風に仰しやられては、わたしが困ります――御老母、どう思召します。

母　さあ、わたくしは女の身故、さやうなことは分かりませんが、これは團次が辭退をしたところで源太が受けもしますまいし　源太が辭退したところで團次がお受けをしよう筈がないと思ひます。それでは、あなたがお困りでせうし、第一菊池の殿樣の折角の御意を無にすることになりますから、やつぱり試合をするより外に道はないと思ひます。

使者　源太殿、どうお思ひです。

源太　母の言ふことが尤だと思ひます。試合をいたしませう。

（團次、やつて來る。）

源太　おう。團次がやつて來た。

團次　お使のお方、只今は失禮しました――源太、お前、どういふ御返事をした。

源太　一度はお前と同じやうな御返事をしたが、今お袋の說を聞いて、試合をする氣になつた。

團次　さうか。おれも實はさつきあんな御返事はしたが、あとでよく考へて見ると、おれが辭退をしたところで、お前がおいそれと引き受ける人間ではないし、さうかと言つて折角の御下命を無にするのも勿體ないと思つて、試合をする決心になつた。

源太　さうか。それは丁度よかつた。では、お使のお方、双方とも試合をいたすことになりましたから、宜しく御檢分を願ひます。

使者　それは有難い。それでは早速ながら、明朝大井川のほとりで、試合をして頂くことにいたしませう。準備はこちらでして置きます。

惣治　面白いなあ。面白いなあ。お父さんと伯父さんの勝負か。

母　これ、惣治。何を言ふ。お客樣の前で。

使者　いや、お咎めには及びません。このお子はなかなか面白いお子です。

母　野育ちで爲方がありません。

使者　いや、そこが好いところです。

（源太、團次、哄笑する。右內、かへも微笑む。）

第二幕

第一場

大井川のほとり。

源太と團次、左右から出て來て、舞臺の眞ん中で出會ふ。

團次　やあ。

源太　やあ。

團次　いよいよ今日だな。

源太　いよいよ今日だ。

團次　實はこれからお前の家へ行かうと思つて、少し早く出て來たのだ。

源太　おれもこれからお前の家へ行かうと思つてゐたのだ。

團次　何か用があるのか。

源太　うむ。少し話があるのだ。お前はどうしておれの家

へ來ようと思つたのだ。
團次　おれも實はお前に話して置きたいことがあるのだ。
源太　それはちやうど好かつた。では、ここへ腰かけて話さう。まだ時間はあるだらう。
團次　うむ、半時ぐらゐはある筈だ。腰をかけよう。
（二人、ありあふ石に腰をかける。）
團次　先づ、お前から話せ。
源太　いや、そつちから始めろ。
團次　さうか。それでは言はう。實は今日の試合のことだ。
源太　うむ。
團次　けふの試合は家のほまれだ。吾々のどつちかが世に出る端緒だ　誠に有難いことだ。併し、困ることには、お前とおれとは兄弟同然の間がらだ。同じ腕で同じ力を爭ふやうなものだ　お前はおれより弟子が少なくて貧乏はしてゐるが、實際はおれよりずつと腕があるのだ。おれはきつと負けるに違ひない。腕のない者が腕のある者に負けるのは爲方がないが、若しおれが負けたといふことになると、おれの弟子はみんなおれを離れて行つてしまふだらう。さうなると、おれはあしたから朝夕の糧にも困るやうになるだらう。それもおれ一人なら構はない。可哀さうなのは右内だ。おれはそれが今から心配でならない。若し、そんなことになつたら、どうか右内をお前の弟子とも思つて、末永く世話をしてやつてくれ。そして、時機が來たら、適當な妻を迎へて、孫の顏でも見られるやうにしてやつてくれ。おれは纔めこれだけのことが頼んで置きたかつた。どうか忘れずに心に留めて置いてくれ。
源太　いや、實はおれの方も同じやうなことを頼まうと思つてゐたのだ。お前は弟子も多いし、暮らしも豐だから、いつも延び延びとこの道の修行を積んでゐる。おれはだめだ　おれはお袋が永いあひだ病氣だつたし、その看護や世帶の苦勞で、心も晴み、力も盡きた。骨や筋もへなへなに弛んでしまつた。おれはもう到底お前の敵ではない。おれは負けるにきまつてゐる。若しさうなつたら、おれの暮らしは一層みじめなものになるだらう。おれは好いが、お袋や妹や弟が可哀さうだ　お前にでも世話をしてもらはなければ、三人飢ゑ死んでしまふだらう　かへすがへすもこのことは忘れないでゐてくれ。頼む、頼む。
團次　いや、頼むのはこつちだ。
源太　いや、おれの方が頼まなければならないのだ。
團次　宜しい。ではどつちが勝つにしても、世の中に出た

方が世話をすることにしよう。
源太　どうか、さうしてくれ。
團次　お前もそのつもりでゐてくれ。
源太　うむ。
（九州の使者現れる。二人、立つ。）
使者　ここにお出ででしたか。方々探しました。もう時刻です。
團次　では。
源太　行かう。
（三人、退場。）
（右内とかへ、一緒に登場。）
かへ　大層な人出ですね。
右内　みんな試合を見に來たのです。
かへ　山も木も鈴なりですわ。
右内　人間といふものは妙なものですね。どうしてこんなことが面白いのでせう。
かへ　見世物でも見るつもりで來てゐるのでせう。
右内　劍道などをまるで知らない商人までが澤山來てゐますね。何が面白いのでせう。人と人とが勝負を爭ふ。その結果でその人達の運命がきまる。わたしは恐ろしいことだと思ひます。
かへ　では、あなたは御覧にならないのですか。
右内　到底わたしには見られません。唯わたしは心配だから出て來たのです。この結果でわたしとあなたとの問題もどうなるか分からないと思つて。
かへ　それではけふの勝負で　わたし達の關係も變つて來るのでせうか。
右内　そんな筈はないと思ひます。伯父さんだつて内の父だつて、そんなことで仲違ひをするやうな卑しい人間だとは思ひません。それに、わたしはたとひどうなつても、あなたを離れようとは思ひません。併し、唯何となく心配なのです。心が落ちつかないのです。
かへ　なぜでせう。内のお母さんだつて、あんなに二人のことを心配してくれてゐるのです。お内のお父さんも内の兄も、二人のことは承知してゐるらしいのですから、なんにも心配なことはない筈です。
右内　それはさうです。それはわたしにもよく分かつてゐるのです。それでゐて、なんだかかう、心配で心配でならないのです。
かへ　まあ、妙ですわねえ。
右内　わたしも不思議でならないのです。
（惣治、駈けて出る。）
惣治　早く行つて見ないか。もう始まるぜ。
かへ　（右内に）どうしても、あなた、行くのは厭ですか。

右内　厭です。
惣治　どうして行かないんだ。
右内　僕、見るのが恐ろしいんだ。
惣治　意氣地なしだなあ。ぢやあ、僕、先きへ行くぜ。
（惣治、駈けて去る。二人、見送る。間もなく、遠くで、わつと鬨の聲が上がる。二人は顏を見合す。右内かへの手に縋る。縋られて、かへも右内を抱く。）

第二場

源太の家。

源太の母、神棚に神酒を供へ、ひとりで拜んでゐる。
惣治、ぼんやり歸つて來る。

母　惣治か。どうだつた。
惣治　（默つてゐる）
母　源太が負けたか。（間）　團次が負けたか。
惣治　どつちも負けたんぢやありません。どつちが勝つたんでもないんです。
母　それはどういふことだ。
惣治　やつと聲を合せて、二人が立ち上がると、伯父さんがいきなり打つてかかりました。兄さんがそれを受けたかと思ふと、白樫の木太刀が三つに折れてしまつたのです。
母　それでは勝負にはならないではないか。
惣治　だから、伯父さんも、これは試合の勝ではない、太刀を改めて、もう一度勝負をしようではないかと言ひました。けれども、兄さんは聞かないのです。勝つと負けるは唯天運だ。眞劍でも折れる時は折れるのだ。お前の時に間違ひはない。おれはこの場にゐるのが恥かしいと言つて、折れた太刀を拾ひ集めると、逃げるやうに試合の場所を出てしまつたのです。
母　では、それで勝負がついてしまつたのかい。
惣治　勝負でない勝負がついてしまつたのです。いづれ兄さんには考へがあるんだらうが、僕はくやしくつて溜まらないんです。見物もあんまりあつけないので、みんながつかりしてゐました。
母　（長嘆息する）
（源太、歸つて來る。）
源太　唯今。
母　（微に）　お歸り。
源太　惣治に聞きましたか。
母　（頷く）
源太　見苦しい負けをいたしました。
母　木太刀が折れたのだといふではないか。

源太　さうです。
母　それでは、ほんとの勝負にはならないではないか。
源太　木太刀だから、誰しもそんなことを思ふのです。眞劍勝負だつたら議論はありません。わたしは立派に負けたのです。
（長き間。）
源太　そのお神酒を戴きませう。
母　お酒を飲むのかい。
源太　わたしは負けても、一家の内からあれ程の大名に仕へる者が出れば結構です。それは初めからさう思つてゐました。渡邊一家の爲に祝盃をあげませう。
母　（稍明かるく）さう言へばさうだねえ。では、わたしもお合をしようか。
源太　どうぞ願ひます。
（二人して酒を飲む。源太は獨酌で盃を重ねる。）
母　でも、これからのお前が、わたしは心配でならないのだよ。
源太　これからのわたし。そんなことを心配する必要はありません。わたしは唯役を取りそこねただけです。惡くなると言つて、これより境遇の惡くなりやうはありません。
母　團次との折合が惡くなるやうなことはあるまいね。
源太　そんなことは決してありません。ありやう道理がないではありませんか。
母　お前がさう言つてくれれば安心だけれど……
（右内、登場。）
源太　伯父さん、父が心祝ひの酒宴をしたいと言つてゐます。皆さんお出で下さるやうにとのことです。
源太　有難う。（母の顏を見る）
母　（安心したやうに頷く）
源太　（急に顏を曇らせる。右内に）併し、伯父さんはひどく疲れてゐる。伯父さんは改めて祝ひに行くとして、けふはかへと惣治を代理に出さう。（母に）かへはどこへ參りました。
右内　かへさんはもうわたしの家に來てゐます。
源太　それは早手廻しだな。では、惣治、貴樣行け。
惣治　僕は厭です。
源太　なぜ、厭だ。
惣治　負けた家の人間が勝つた家へ祝ひに行くなんて、そんな恥づかしいことは僕には出來ません。
源太　勝負は人のことではない。一家の一人が名譽を得たのだ。私情を捨てなければならない。
惣治　そんなら、兄さん、なぜ自分で行かないのですか。
源太　（聲荒く）おれは改めて行くと言つてゐるではない

か。

惣治　嘘だ。嘘だ。兄さんだつて行くのは厭なんだ。だから、ひとを代理にやらうとしてるんだ。

源太（叫ぶ）莫迦。

（惣治、昂然としてゐる、母と右内、顏を見合はす。源太、苦しげに惣治を睨む。）

第三幕

第一場

源太の家。

母と惣治、緣側に腰をかけて、話してゐる。

母　もうすつかり冬になつた。

惣治　木の葉がみんな散つてしまひました。

母　もうぢき又雪に閉ぢ籠められるのだね。

惣治　その方が却つて好いと思ひます。どうせ世間とはつきあひのない家ですから。

母　さう言へば。園次伯父さんはまだ九州へ立たないやうだね。

惣治　まだのやうです。でも、もうぢき立つんでせう。この頃しきりに町の方へ買物に出けるさうです。きのふ權次に聞きました。

母　權次といふのは園次の隣に住んでゐる桶作りの子供だね。

惣治　さうです。なんだか、むやみと立派なものを買ひ込んで來ると言つてゐました。

母　何しろ、あの試合の日に右内を迎ひによこしたきり、ぷつつり便りがなくなつたのだからね。

惣治　僕はさうなるにきまつてゐると思つてゐました。いくら體裁の好いことを言つたつて、負けたものと勝つたものが前のやうに仲よしでゐられるわけがないのです。兄さんだつて面白くないにきまつてゐます。向うだつて出世をすれば、僕達のやうな貧しい人間とつきあふのは厭でせう。

母　でも、それが人間の道だらうか。

惣治　人の道はどうだか知りませんが、人間はみんなさうです。

母　可哀さうなのはかへだ。あれつきり右内も訪ねて來ず、こつちから訪ねて行つても、會はせまい會はせまいとするのだ。

惣治　姉さんも、もうこの頃は出かけて行かないやうです。右内なんて意氣地なしは、もう好い加減に諦めてしまふ方が好いのです。

母　それはさうは行かないよ。まだなかなか思ひ切れるど

ころではないよ。右内だつて、やつぱりさうに違ひない。

惣治　あの意氣地なしが、なんの當てになるものですか。

（途端に、奥で女の泣き聲が聞える。）

母　かへだらう。

惣治　さうです。

母　（呼ぶ）かへ、かへ。

惣治　僕は遊んで來ます。（草履を突つかけて、どこかへ出て行つてしまふ）

（かへ、登場。顏色青ざめ、髮亂れてゐる。）

母　かへ。まあここへお出で。

かへ　はい。

母　お前はどうしてさう鬱いでばかりゐるのだい。わたしだつて、若い時もあつたのだから、若い人達の心が分からないのではないのだよ。だが、緣といふものは神ごとだから、一度一緒になつたものが離れることもあり、離れたものが又一緒になることもあるのだよ。嬉しいことも、悲しいことも、これが世の常だと思へば、諦められないこともないぢやないか。お前のやうにさう思ひ詰めてばかりゐたら、しまひには體をこはしてしまふよ。

かへ　（默つて泣いてゐる）

母　この頃は御飯もろくろく食べず、髮なども上げずにゐるやうだが、それは却つてよくないよ。さういふことがあんまり募ると、しまひには親にも悲しい目を見せ、きやうだいにも背くやうなことになるものだよ。わたしだつて、兄さんだつて、決して惡いやうに計らひはしないから、ひとりで考へてばかりゐないで、なんでも思ふ通りを言つてしまふ方が好いよ。

かへ　（愈烈しく泣く）

母　わたしの娘はお前一人、お前の親はこの母一人ぢやないか。その寂しい親子でも、百年千年一緒にゐられるものではない。親子の契りは一世だと言ふぢやないか。その上、若い者が先きに行つて年寄があとに殘るといふためしもあることだ。この頃のお前の樣子を見てゐると、わたしは心配で夜もろくろく寢られはしないのだよ。

かへ　許して下さい。許して下さい。（益烈しく泣く）

母　許すも許さないもありはしないよ。唯、お前が落ちついてゐてくれさへすれば好いのだよ。

かへ　でも、あたし、どうして好いか分からないんですもの。

母　兄さんの心にもなつて御覽。自分より腕のないものに負けて、その上親類のつきあひにさへ隔てを置かれてゐるのだよ。それでも、兄さんはなんにも言はずに、ぢつと堪へてゐるのだよ。

（かへ、又烈しく泣く。母も泣く。源太、歸つて來る。）

源太　どうしたのです、二人とも。

（二人、又烈しく泣く。）

源太　わけを聞くまでもない。わたしにはよく分かつてゐます。（間）まあ、わたしの言ふことをお聞きなさい。右内とかへの仲はわたしも知つてゐます。團次も知つてゐる筈です。それだのに、あいつはわざと知らん顏をしてゐるのです。一身の榮達に心おごつて、武士の道を忘れ、一時も早くここを立ち去らうとしてゐるのです。團次ごとき犬畜生にも劣つた奴を妹の親にするのは口惜しい限りではありますが、若い者の思ひ合つてゐるのを情容赦もなく引き裂くのは、あまりに殘酷だと思つて、實はこの程から仲人を入れて、度々談判をしてゐるのです。いつも曖昧な返事ばかりなので、けふはどうしても確たる返答を得て來いと申しつけましたから、もう追つつけ何とか言つて來るだらうと思ひます。その返事を聞いた上で、又わたしに考へもあります。まあ、暫く待つてゐて下さい。（かへに）これ、これ。お前も武士の家の娘だ。一旦この男と思つた以上は、決して輕薄に思ひ捨ててはならない。この兄がかうしてゐる間は、決して恥をかかせるやうなことはない。さあ、淚をふけ。髮も直せ。氣を取り直して、お母さんのお世話をしろ。

かへ　なんにも申しませぬ。兄さん、有難うございます。

母　それ御覽、かへ。源太はこんなにまでお前のことを思つてゐてくれたのだ。まさか仲人まで立ててあらうとは、この母さへ知らなかつた。

源太　しつかりした返事のとれるまではと思つて、わざと內證にしてゐたのです。話はたいてい仲人の家でしました。

母　（かへに）さあ。かへ。それでは奧へ行つて、髮でも上げてあげよう。

かへ　はい。有難うございます。

（二人、奧へはひる。）

（仲人登場。）

源太　やあ、御苦勞、御苦勞。さあ、どうぞ、これへ。

仲人　恐れ入ります。

源太　どうだつた。けふは何とかきつぱりした返事をしたか。

仲人　いたしました。

源太　うむと言つたか。

仲人　（首を振る）

源太　だめか。

仲人　やつぱり、だめでした。

源太　うむ。

仲人　もう今では身分が違ふと言ふのです。こつちは大名の師範役、向うは野伏も同然だ。天地が倒になつても、この縁組は出來るものではないと、かう申すのです。

源太　うむむ。

仲人　あんまりな言ひやうですから、こつちも突つ込んでやりました。それでも右内樣とかへ樣とは神に誓つて離れまいと誓文まで取り交した仲なのを御存じないのですか。なんぼ親の力でも、お子樣達の心をまで曲げることは出來ますまいと、かう申してやりました。すると、すぐ右内樣をお呼びになつて、それは本當かとお訊きになるのです。右内樣は、それに相違ない。どうかかへ樣を迎へてくれと、きつぱり御返事をなさいました。

源太　うむ、さう言つたか。

仲人　ところが、どうでございませう。團次樣は殊の外のお怒りで、怪しからん奴だ。貴樣が一人子でなければ、直ぐに斬り捨てるのだが、それは先づ許してやる。すぐに女にあてて去り狀を書け。さなくば、遠國へ追ひやるぞ。さあ、父を捨てるか、女を捨てるかと、それはそれはきつい責めやうなのでございます。流石の右内樣もかう言はれては絶體絶命で、たうとう泣きながらこの去り狀をお書きになりました。（紙に書いたものを出して見せる）もうかうなつては、わたくしも申す詞がございませんので、その儘歸つて參りました。なんとも申し上げやうがございません。

源太　いや、飛んだ心配をかけた。いづれ改めて、禮に行く。けふはどうぞ引きとつて下さい。

仲人　では、これで御免蒙ります。

源太　御苦勞だつた。

（仲人、去る。やがて、二人が轉び出る。奧で母とかへの急に泣き出す聲が聞える。）

源太　かへ、聞いたか。

かへ　（烈しく泣く）

源太　お母さん、聞きましたか。

母　（泣きながら）かへと右内のことは兎も角も、わたしは思ひ上がつた團次の心が憎い。

源太　それはわたしもあなた以上です。實は大抵かういふことになるだらうと思つて、豫め心構へして置いたことがあります。それがどんなことでも、決して驚いてはいけません。必ず恥になるやうなことはいたしませんから。

（立つて戸棚から白絹の五つ衣、領巾などの臺にのつたのを恭しく取り出す）

（惣治、歸つて來る。）

源太　おう、惣治、酒の用意をしてくれ。

（惣治、默つて奥へはひる。）

源太　（かへの手をとつて上座に据ゑ、さて母の前に手をつかへて）御存じの通り、家が貧しくなりましてから、傳來の杯、陶物、文、巻物のたぐひまで、一つ一つ米や金に代へてしまひましたので、今では何一つ殘つてをりませぬ。唯、韓鞍一揃、唐蓆二枚、韓竈四組、玉の椀三つ、これだけは格別お父樣の大事にされたものだと聞いて、今までは手をつけずに置きましたが、妹が一代の祝ひごとだと思つて、お母さんにも御相談をいたさず、實はこの程みんな金に代へてしまひました。嫁入の衣裳は勿論、携へ行くべき身の廻りの調度などもそれですつかり用意が出來てゐるのです。この上はかへに嫁入の支度をさせて、團次のところへ押して參るつもりです。それでも、團次がはねつければ、もうこの世でかへの顏は見られぬものとお諦め下さい。

かへ　お志辱う存じます。わたしももう決心をしてをりますから、決して見苦しい振舞はいたしません。

母　團次も人の心は持つてゐよう。仲人には強いことを言つても、源太が自身でかへを連れて行けば動かずにはゐるまい。あの男は一時の榮達に目が眩んだのだ。さうしてその目を覺ましてやるのは、却つて慈悲といふものだ。行くが好い。行くが好い。さつき上京の陰陽師が來て、けふは日がらも好いと言つた。

源太　それではすぐに支度をして下さい。

母　かへ、お出で。

（母とかへ、嫁入の衣裳を捧げて、奥へはひる。入れちがひに、惣治、酒器を携へ出づ。）

源太　惣治、酒を床の間に置いて、その邊を片づけろ。

惣治　兄さん、愈押しかけて行くのですね。やつとこれで僕の胸が透いた。あんまりみんなが意氣地がないので、僕はひとりで癇癪を起してゐたのです。兄さん、しつかりやつて下さい。

源太　まあ、お前は默つてゐろ。子供には關係のないことだ。

惣治　子供だつてその位なことは分かります。僕はこなひだつから、くやしくつて、くやしくつて……（突然泣き出す）

源太　莫迦。泣く奴があるか。姉さんの嫁入ではないか。不吉な。

（惣治、すぐ默る。）

源太　片づいたら、裏へ行つて、貝を呼んで來い。もう來てゐる時分だから。

惣治　はい。（出て行く）

（母とかへ、奥から出て來る。かへは五つ衣を著け、

頭巾をかぶつてゐる。)

源太　(二人を上座に据ゑ、自分は下にゐて) それでは、門出の祝に、三獻いたしませう。

(母と兄と妹の間を杯三度めぐる。)

(惣治、若い者に輿をかかせて出る。)

母　おう、輿の用意まで出來てゐたのか。(思はず聲を立て泣く)

源太　お母さん、不吉ですぞ。

(かへ、靜に立つ。)

第　二　場

團次の家。

團次の前に右内が坐つて、泣いてゐる。供が二人、外で待つてゐる。

團次　男らしくもない。まだ泣いてゐるのか。早く行け。早く行け。

右内　どうしても行かなければならないのでせうか。

團次　まだ、そんなことを言つてゐるのか。お前がゐては都合が惡いのだ。源太がいつ押しかけて來るか分からないのだから。

右内　若し伯父さんが入らしたら、お父さんはどうなさるのです。

團次　どうもしやしない。おれは一旦かうと思つたことは決して變へはしないのだ。釣り合はぬ緣だ。家名の汚れだ。九州大名の師範役となつたおれの後嗣に、野伏づれの娘をめあはすことは出來ないのだ。

右内　いくらふたりが思ひ合つてゐましても。

團次　まだ、それを言ふか。お前は親が大事か。女が大事か。

右内　(默つてしまふ)、

團次　男が一旦思ひ切ると言つて、去り狀まで書いたのに、何といふ未練なことだ。さあ、行け、早く行け。

右内　參ります、參ります。

(右内、下へ降り、供を連れて去る。團次、見送りゐる。別の方角より、源太、かへの乘りたる輿をかかせて來る。)

源太　團次。

團次　おう源太か。何しに來た。

(源太、かへを連れて、簀子にのぼる。輿丁去る。)

團次　これはどうしたのだ。どこへ嫁入るのだ。急なことではないか。

源太　どこへ嫁入するのでもない。お前の息子の嫁にしようと思つて連れて來たのだ。

團次　それは思ひも寄らぬことだ。そのことならさつき仲

人を通じて返事をして置いた。お前はまだその返事を聞かないか。

源太　その返事は確に聞いた。

團次　では、押しつけにかういふことをするのか。

源太　押しつけと言はれれば、それまでだが、かねて右内とかへとの仲はお前も知つてゐる筈だ。親の權力をもつて、子の心を抑へるといふ法はない。かへに落度があるなら聞かう。この去り狀もそれまでは受けとるまい（去り狀を叩きつける）

團次　親の氣に入らぬ嫁を去るのは武士の道だ。

源太　成程、それはさうだ。併し、一日もまだこの家に仕まず、一日もお前に仕へたことがないのに、どこを見て氣に入らぬと言ふのだ。

團次　いや、何と言つても、おれは聞かぬ。すぐに連れて歸れ。

源太　いや、さうはならぬ。それなら、右内を呼んでくれ。右内に一言訊いて見ることがある。

團次　右内はもうここにはをらぬ。

源太　ここにはをらぬ。

團次　泉州へ送つてしまつた。

源太　逃がしたのだな。

團次　逃がしたのだ。

源太　おのれ。（と言つたが、やがて怒を鎭め）かうまで道理を說いても聞いてくれぬなら爲方がない。併し、あの試合の日に約束したことは、よも忘れまい。おれの太刀の不意に折れたのを、お前は何と思つた。だが、それは言ふまい。右内はお前の大事な一人子だ。かへもおれにとつては一人の妹だ。人として憐れみ心のないものはない筈だ。無理ではあらうが、どうか二人を一緒にしてやつてくれ。（兩手をつく）かうして頼む以上は、返事次第でかへも生きては歸るまい。だが、そのやうなことになつたら、お前の爲にもよくあるまい。心を落ちつけて返事をしてくれ。

團次　やかましい。何度言つても同じことだ。（立つ）

源太　あの約束を忘れたか。

團次　忙しいので忘れてしまつた。（行きかける）

源太　待て。

（源太、いきなり妹の襟上を掴み、太刀を拔いて、胸を刺す）

團次　な、な、何をするのだ

源太　獸のやうな貴樣の心がかうするのだ。返す太刀で貴樣を打ち果すのはわけはないが、母が病氣の時、看護をしてくれた禮に、命だけは貴樣にやる。（手を放す。かへ、倒れる）

（源太、あとに裃はず、下へ降りる。）

團次　まあ、待て。

源太　嫁入は濟んだ。もう用はない。

（源太、出て行く。團次、死骸の前に崩れる。）

第　三　場

再び源太の家。

母、機を織つてゐる。惣治、小刀を磨いでゐる。

源太、歸つて來る。

母　おう、源太か。どうだつた。

源太　濟みました。

母　嫁入が濟んだとお言ひか。

源太　はい。

母　さすがの團次も折れたのだね。

源太　いいえ、あいつはどうしても聞かなかつたのです。

母　それでは、どうして。

源太　死骸にして置いて來ました。

母　お前が手にかけたのか。

源太　はい。かへはすつかり覺悟をしてゐました。

母　うむ。

（惣治、矢庭に小刀を持つて飛び出さうとする。源太、その手を摑む。）

源太　どこへ行くのだ。

惣治　姉さんの仇を討ちに行くのです。

源太　誰を討たうと言ふのだ。

惣治　伯父の奴です。團次の畜生です。

源太　莫迦。それをして好いなら、おれがして來る。團次に恨みを報いようとするのは私の心だ。おれが何もかも團次に負けて、忍び難い恨みをも報いずに來たのは、親を重んずるからだ。公の道が大事だからだ。私の怨を以て天下の道を破ることは出來ない。貴樣も武士の弟ではないか。堪へろ。堪へろ。

惣治　堪へられません。堪へられません。

源太　まだ分からぬか。おれは苟にも妹を殺めたのだ。これから公の庭へ訴へ出て、罪を受けなければならないのだ。貴樣までがそんなことをしたら、これからお母さんの世話を誰がするのだ。

惣治　（氣が挫ける）

源太　（手を放す）分かつたか。

惣治　（泣きながら頷く）

源太　では、お母さんを頼んだぞ。（母に）お母さん行つて參ります。

（母、默つて泣いてゐる。惣治、母に縋り寄る。二人、相抱いて泣く。源太、下に降り立つ。）――幕――

ある敵討（四幕）

人　物

川野九十郎　後に近藤一學と稱す
北條造酒之助
淺田十郎兵衞
池田七郎左衞門
近藤源太兵衞　造酒之助の伯父
近藤宇右衞門　源太兵衞の兄
山本五郎兵衞
小山田清左衞門
二和十兵衞
山田又一
高橋喜兵衞
淺田鄕右衞門　十郎兵衞の弟
半左衞門　淺田の家來

時　代

延寶より天和

第一幕

第一場

但馬村岡藩山名主殿の江戸邸の一室。
小姓の北條造酒之助と朋輩の川野九十郎が激しい口論をしてゐる。

川野　いや、貴樣が惡いのだ。
北條　うんにや、貴樣が惡いのだ。
川野　貴樣の狡いのは誰でも知つてゐる。
北條　貴樣の狡猾なのを知らん者はない。
川野　貴樣のやうな奴がゐるのは、村岡の名折れだ。
北條　貴樣こそ獅子身中の蟲だ。
川野　言つたな。
北條　言つたとも。
川野　蟲とはなんだ。
北條　蟲は蟲だ。毒蟲だ。蛆蟲だ。
川野　何を。（刀を拔きかける）
北條　生意氣な。（いきなり刀を拔いて、相手を斬り下げる）
川野　あつ。（息絶える）
（北條、狼狽する。）

（淺田十郎兵衞、池田七郎左衞門、馳けつけて來る。）

（北條、いきなり二人に縋りつく。）

北條　逃がして下さい。逃がして下さい。

淺田　一體、どうしたのだ。

北條　きのふの御前勝負のことから九十郎と喧嘩をしたのです。斬るともなしに斬つてしまつたのです。九十郎は殿樣のお氣に入りです。私はお咎めが恐ろしいのです。

淺田　（池田に）どうしたものかな。

池田　若氣の至りだ。逃がしてやらう。あとはどうともなる。

北條　どうかお願でございます。お願でございます。

淺田　（池田に）だが、若し大事になつたら。

池田　切腹するばかりだ。

淺田　貴公がか。

池田　おれも、貴公も、造酒之助も。

淺田　三人で腹を切るのか。

池田　さうだ。

淺田　よし、引き受けた——造酒之助もそれは承知だらうな。

北條　勿論です。あなた方に御迷惑がかかつたら、私はどんなことでもいたします。

淺田　よし、それでは逃げろ。

北條　有難うございます。

池田　何氣ない態で出て行くのだぞ。

北條　はい。

淺田　早く行け。

（北條、走り去る。）

（池田と淺田、死骸の始末をする。）

第二場

浪人近藤宇右衞門の住居。本鄕。

宇右衞門、一人で經書の裏張りをしてゐる。

近藤源太兵衞、北條造酒之助を連れて來る。

宇右衞門　（目金を外して）源太兵衞か。暫く顏を見せなかつたな。

源太兵衞　御不沙汰をしました。

宇右衞門　御用繁多と見える——殿樣にはお變りはないか。

源太兵衞　至つて御壯健です。

宇右衞門　それは何よりだ。（造酒之助を見る）どうした、造酒之助。けふは伯父さんと一緒か。御前の首尾はどうだ。

造酒之助　はい。（と言つたきり默つてゐる）

宇右衞門　（源太兵衞に）大層顏色が惡いやうではないか。

どうかしたのか。
源太兵衛　實は、兄上、そのことで伺つたのです。
宇右衛門　病氣か。
源太兵衛　いえ、病氣ではありません。
宇右衛門　では、どうしたのだ。
源太兵衛　朋輩の川野九十郎と喧嘩をして、相手を殺めてしまつたのです。
宇右衛門　それはいかんな。
源太兵衛　併し、御存じの淺田十郎兵衛と池田七郎左衛門が庇つて逃がしてくれたのです。それで、私のところへ頼つて參つたのですが、私は主人持でもありますし、長屋住居では人目も多いので、兄上のところへ匿まつて頂かうと思つて、連れて參つたのです。
宇右衛門　出來たことは爲方がない。よし、それではおれが引き受けよう。併し、ここも長屋だから安心は出來ん。（一寸考へて）さうだ。安中の堀田樣で小姓を一人探してゐるさうだから、あしたにも連れて行つて、あすこへ住み込ませることにしよう。
源太兵衛　それは好都合ですな。
宇右衛門　あすこには、お前も知つてゐる池邊が家老をしてゐるから、あれに頼めば間違ひはあるまい。
源太兵衛　成程、あすこには池邊樣がお出ででしたな。
宇右衛門　ところで、北條造酒之助ではいかんから、名を何とか變へよう。（考へる）かうつと……一學といふ名がおれの家にある。近藤一學はどうだ。
源太兵衛　宜しいでせう。
宇右衛門　好いか。（造酒之助に）それでは、けふからお前は近藤一學だぞ。
造酒之助　はい。
宇右衛門　もうさう心配せんでも好い。若氣の至りだ。堀田家へはひつてしまへば安心だ。
源太兵衛　（造酒之助に）ほんとだ。もう心配しないでも好い。
造酒之助　はい。
宇右衛門　酒にしよう、酒に。一升買つて來てくれんか。
（造酒之助、立たうとする。）
宇右衛門　お前はいかん。お前はまだ世を忍ぶ身だ。（笑ふ）
源太兵衛　私が行つて參ります。
宇右衛門　頼むぞ。（金を渡す）

第二幕

第一場

浪人になつた淺田十郎兵衞と池田七郎左衞門の侘住居。谷中。
夕暮。
淺田が一人で飯の支度をしてゐる。
編笠を冠つた池田が歸つて來る。

淺田　どうだつた。
池田　だめだつた。
淺田　源太兵衞のところへ逃げたのは確なのだな。
池田　それは確だ。
淺田　今もやつぱり源太兵衞のところにゐるのか。
池田　どうもそれがゐないらしいのだ。
淺田　それでは、どこにゐるのだ。
池田　源太兵衞の兄の宇右衞門な。
淺田　うむ、あの、浪人をしてゐる。
池田　さうだ。あの宇右衞門のところにゐるらしいのだ。
淺田　宇右衞門はどこに住んでゐる。
池田　本郷だ。けふ家も突き留めて來た。
淺田　よし。それぢやあ、あした二人で行つて見よう――飯が出來た。さぞ腹が減つたらう。一緒に食はんか。
池田　うむ、食はう。
（二人で飯を食ふ。）
淺田　實際、こんなばからしいことはないな。
池田　ばからしいといふよりは腹が立つて來た。
淺田　そりやあ、おれ達も武士だから、一旦言つて逃がしてやつた以上は、責はどこまでも負ふつもりだが、肝心の造酒之助がをらんのでは、どうすることも出來ん――まさか、二人だけで腹を切るわけにも行かんからな。
池田　いや、おれ達は既に切腹以上の目に會つてゐる。あいつを逃がしたばかりに主家を追はれたのだ。造酒之助を討つて出すまでは歸參は叶はんと言ふのだ。
淺田　おれ達がこんな目に會つてゐるのは、噂にも聞いてゐようのに、あいつが姿を見せないのは怪しからん。
池田　おれはあいつが出て來たら、あいつとおぬしと三人で腹を切るつもりだつたが、もうかうなつては、あいつが敵だ。おれはあいつを討ちとつて、主家へ歸參をするつもりだ。
淺田　おれもさつきから考へてゐた。事を起した當人が知らん顏をして隱れてゐるのは怪しからん。いくら年若でも、武士の端くれではないか。あんまりな恩知らずだ。
池田　卑劣極まる奴だ――おれは是非ともあいつを見つけ出して、討つて捨てる。
淺田　おれも同感だ。武士の義理はもう立てるだけ立てた。もうかうなつたら、あいつを討つて捨てるのが武士の意地だ。

池田　討たう。
淺田　是非とも討たう。
（飯の膳を片づける。）

第二場

本郷四丁目の街路。
右から編笠を冠つた池田と淺田が出て來る。
左から近藤宇右衞門が四つ手駕籠に乘つて出て來る。
池田と淺田が、それに目をつける。

池田　宇右衞門だ。
淺田　うむ、宇右衞門だ。
池田　呼び留めろ。
淺田　（大聲に）こら、駕籠。待て、待て。
（駕籠、留まる。）
池田　近藤氏ではないか。
（宇右衞門、顏を出す。）
宇右衞門　池田氏に淺田氏か。暫くだつた。
淺田　挨拶はあとでよい。訊くことがある。北條造酒之助が貴公のところにゐるだらう。
宇右衞門　いや、わしの家にはをらん。
池田　では、どこにゐる。それが聞きたい。
宇右衞門　山名樣を出たといふことは聞いたが、その後のことは知らん。
淺田　伯父甥の間で知らんといふ法はない。
宇右衞門　いや、知らん、知らんことは知らん。
池田　嘘を言ふな。
宇右衞門　嘘は言はん。知らんことは飽くまでも知らん——駕籠屋、早くやれ。
池田　（殺氣を帶びて、淺田と目くばせをする）待て。
（宇右衞門を駕籠から引き摺りおろす）
（淺田、物をも言はずに、宇右衞門を刺す。池田も同時に、一太刀浴びせる。）
（駕籠屋、逃げる。）
（宇右衞門、死ぬ。）
（淺田と池田、編笠を捨てた儘、走り去る。）
（近藤一學（北條造酒之助）通りかかる。）
（宇右衞門の死骸を見て驚く。）
一學　伯父樣、伯父樣——これはどうしたことだ——もう事切れてゐる、（二つの編笠に目をつける。直ぐそれを手にとつて、緒に書いてある名を見る）うむ、池田に淺田か——ううむ。（前を睨む）

第三幕

第一場

旅宿の一室。京都三條。

小間物賣の裝をした近藤源太兵衞、既に元服をした近藤一學。その他小山田清左衞門、高橋喜兵衞、二和十兵衞などが車座になつてゐる。二和は病氣らしく、髮もほつれ、顏も蒼ざめてゐる。

槍、刀、鎖帷子、綿袢子などが、そこらに置き散らしてある。

源太兵衞が、長い手紙を膝の上に廣げて、みんなに話してゐる。

源太兵衞　親父からはかう言つて來たのだ——今年は兄宇右衞門の七回忌に當るではないか——人生古來七十稀といふことがあるから、七十を越してゐるおれには、命はもう入らない。唯、お前が首尾よく敵を討つてくれれば——よし討ち損じても、敵の屋敷を枕にして討死したとでも聞くなら——この世に思ひ置くことはない——それだのに、おれの身の上を案じて、ぐづぐづ月日を送つてゐるやうでは、死んでも冥途の障りだ——不孝の沙汰だ——この世の音信はもうこれ限りだ——とかう言つて來たのだ。（感激して）おれはどうしても今年中に敵を討たなければならん。

小山田（高橋に）さすがは源太兵衞樣のお父樣だ。實に立派なお手紙ではないか——おれはまだお目にかかつたことはないが、亡くなつた親父は一方ならぬお世話になつたものだ。

高橋　去年、あんな失敗さへしなければ、もう疾うに敵は討つてゐたのだ。實に殘念なことをした。

小山田　年貢を納めに行く百姓達の松明を追手の者と間違へるなどとは、おれもよつぽど慌ててゐたのだ。あれは全くおれが惡かつたのだ。

一學　いや、その前にみんなを連れて逃げたのはこのおれだ。おれは事が露顯して村岡勢が押寄せて來たのだと思つた。おれの方がよつぽど臆病者だつた。おぬしはたつた一人で淺田の屋敷へ乘込んだ勇者だ。おれ達の方で留合せをしないから、不思議に思つて、また塀を乘越えて出て見ると、一味のおれ達は一人もゐないで、あの天を焦がすやうな松明だ。これは逃げるのが當り前だ。罪はおれにある。おぬしに罪はない。

小山田　いや、たとひ一人になつても、踏み留つて戰ふのがほんとでした。わたしは大恩のある御先考に對しても、申訣のないことをいたしたと思つてをります。

高橋　全く、あれまでは淺田も池田も油斷をしてをつたやうだが、あれからすつかり用心をしてしまつたからな。

小山田　あれは全くおれが悪かつたのだ。おれはどうしてもその償ひをしなければならん。

源太兵衛（突然）もう古いことを言ふな——過ぎ去つたことを詮議したところで、なんにもなりはせん。たとひどんな失敗があらうと、小山田、高橋、二和、山本、山田などの一味が、この六七年の間、誠心誠意おれ達と辛酸を共にしてくれたに就いては、いくら禮を言つても言ひ足りない——改めて言ふまでもないが、事は甥の一學から起つたのだ。併し、一學の行方が知れないからと言つて、いきなり宇右衛門を討つといふ法があるものか。それも好い。それも好いとする。それを功にのめのめと歸參をして、故郷の村岡で平氣な顔をして暮らしてゐるとは、武士の風上にも置けぬ奴等だ。士道から言つても許し難い公敵だ——しかも眼前、おれにとつては兄の敵一學にとつては伯父の敵だ。

高橋　さうですとも、さうですとも、天地共に容れざる大惡人です。

源太兵衛　おれはこの親父の手紙を見て、もう溜まらなくなつた——あすは是が非でも但馬へ押寄せて行かう。

一學　ええ、行きませう。

小山田　吾々はいつでも參ります。

高橋　二和の病氣が心がかりだが……

二和　いや、おれは途中で斃れるまでも、ついて行く。

（鏡磨の裝をした山本五郎兵衛が歸つて來る。）

一學　おう、五郎兵衛、歸つて來たか。

源太兵衛　間道はどうだ。

山本　すつかり探つて來ました。今度は自分で實地に見て來ましたら、もう大丈夫です。

一學　敵の備へはどうだ。

山本　その様子を窺ふので、思はぬ日がかかりました。併し、御安心なさい。去年の暮れまでは用心をしてゐたやうですが、この頃では、もう大丈夫だと思つたか、すつかり油斷をしてゐるやうです。池田の方にも、淺田の方にも、あまり人數はをりません。

源太兵衛　よし。この機會を外してはならんぞ。山本、疲れたらう。少し休むが好い。あすは愈討入だぞ。

山本　え。ではあした直ぐにお出かけですか。それは有難い——さう聞いたら、疲れも何もどこかへ行つてしまつた。（笑ふ）

（山田又市が歸つて來る。）

小山田　おう、山田、暇乞をして來たか。

山田　うむ。

高橋　お母さんの病氣はどうだ。

山田　もうだめだ。何しろもう六十八だからな。

小山田　それは氣の毒だ。

山田　いや、ところがおれはお袋に叱られて來たのだ――自分は長くこの世にゐる身でない。道端で餓死をしても構はん。お前は孝行者だから、母のことが氣にかかるだらうが、特に心を引かれて敵の俘にでもなつたら、七生までの勘當だ。人におくれぬやうに早く討死をしろ――かう言つて、お袋は寢床から匍ひ出して來て、おれを家の外へ突き出したのだ。(泣く)

源太兵衞　(感動して)似たやうな話があるものだ。山田、これを見ろ。(まだ開いた儘手にしてゐた手紙を山田に渡す)

(山田、默讀する。感激の色、眉宇に現る。)

源太兵衞　愈あすは討入だぞ。(いきなり側に置いてあつた刀を抜いて、刀身をぢつと見入る)

(一同、思はず同時に、刀を抜く。)

小山田　山田、泣くな。

山田　泣きはせん。(泣いてゐる)

高橋　二和、大丈夫か。

二和　大丈夫だ。(立ち上がつて、刀を構へる)

第　二　場

但馬の淺手坂。

源太兵衞、一學、山本、小山田、高橋、勢込んで進んで來る。

二和は一人駕籠に乘つてゐる。

二和　(駕籠の中から、苦しさうな聲で)待て、待て。

(駕籠、留る。一同も足を留める。)

二和　(垂れを上げて顏を出す。形容枯槁してゐる)おれはもうだめだ。堪へに堪へて來たが、これでは村岡へ著くまでの命があるまい。とても晴れの場所へ臨むことは出來ん。如何にも殘念だが、もうかうなつては爲方がない。みんなの足手纏ひになるばかりだ。頼むから、おれを敵の方へ向けて殺してくれ。

源太兵衞　(感動して)好い覺悟だ。おぬしばかりではない。おれ達の命もけふ限りだ。先立つ者もおくれる者も三途の川は手を引いて渡らう。(一學に)盃はないか。

(一學、携帶用の盃と水筒を出す。)

源太兵衞　別れの盃だ。

(一同、飲み廻す。盃を割る。)

源太兵衞　それ、又市。(刀を抜く)

(山田も刀を抜く。)

(二和、垂れを下げる。)

(源太兵衞と山田、左右から駕籠を刺す。悶絶の聲。)

(源太兵衞の命令で、一同、駕籠を上から縛り、その

儘、谷底へ投げ棄てる。）

源太兵衛　行け。

（一同、後をも見ずに押して行く。）

第四幕

第一場

池田七郎左衛門の屋敷の前。但馬村岡。

夕暮。

「火事だ。火事だ。」といふ聲が、方々でする。やがて、半鐘の音もする。

町の者が右往左往する。

身を堅めた一學と小山田と山本が、拔刀して、池田の屋敷へ躍り込む。

第二場

池田の隣家なる淺田十郎兵衛の屋敷の一室。

主人の淺田十郎兵衛と隣の池田七郎左衛門が碁盤に向つてゐる。

途端に、隣に恐ろしい物音人聲がする。

二人、思はず顔を見合す。

池田　何だらう。

淺田　何だらう。

池田　（腰を浮かす）近藤かも知れんぞ。

淺田　（顔色を變へる）近藤に違ひない。

池田　大勢で來たらしいな。

淺田　うむ、大勢だ。

池田　逃げろ。

淺田　逃げろ。

（二人、別々の方角へ逃げる。）

（源太兵衛の聲がする。）

「十郎兵衛はをらんか。出會へ、出會へ」

（源太兵衛、拔刀で現れる。）

源太兵衛　逃げたな。卑怯者。源太兵衛だ。出會へ、出會へ。

（池田が逃げ惑つて、出て來る。）

源太兵衛　おう、七郎左衛門か。兄の敵だ。覺悟しろ。

（池田、いきなり源太兵衛に組みつく。）

（源太兵衛、池田に組み敷かれる。）

（池田、源太兵衛の差添を拔いて、二太刀刺す。鎖帷子を著てゐるので、思ふやうに刺せない。一學が飛んで來る。）

一學　おのれ、七郎左衛門。

（池田を引き倒す。）

（源太兵衞、跳ね起きる。）
（二人で終に池田を爲留める。）
源太兵衞　十郎兵衞はをらんか。
一學　をりません。
源太兵衞　探せ。
（二人、別々の方角へはひる。）
（山田又市と淺田鄕左衞門とが渡り合ひながら、出て來る。そこへ半左衞門が飛び出して來て山田の眉間へ槍をつける。）
（源太兵衞が又戻つて來る。鄕左衞門を斬り下げる。）
（半左衞門、逃げる。戸口で、丁度來た高橋喜兵衞に斬られる。）
源太兵衞　十郎兵衞はをらんか。十郎兵衞はをらんか。
高橋　をりません。どこにもをりません。
（一學、出て來る。）
源太兵衞　をらんか。
一學　をりません。
（小山田と山本が出て來る。）
山本　村岡勢が二三十人押寄せて來ました。
小山田　もうこの屋敷はすつかり取圍まれてゐます。
源太兵衞　十郎兵衞はをらんか。
山田　隣にも、この家にも、もう誰もをりません。

源太兵衞　もうこれまでだ。七郎左衞門も討つた。弟の鄕左衞門も討つた。家來も一人爲留めた。これでも出會はんやうなら、十郎兵衞を爲留めたも同然だ。
一學　だが、殘念だな。畜生。
（外で鬨の聲がする。）
源太兵衞　やつて來たな。（一同を見る）さあ、もう斬り死にだ。
（村岡勢、四方から斬り入る。）
（亂鬪。）

伊左衛門（一幕）

人物

久古　新町の幇間

藤屋伊左衛門

河内　元遊女

おせき　伊左衛門の娘

場所

大阪。京橋の片側町

小さき流れ。流れに小橋かかる。橋の前に自然木を柱としたる門。葭垣。垣の上に赤き壁に白き障子はめたる二階見ゆ。流れの下に流灌頂。門の前に床几。床几の上に毛氈。春の午後の日ざし。暫く舞臺に人なし、小鼓の音、二階より好き音に響く。

太鼓持久古、坊主頭に大黒頭巾を冠り、紫の袱紗に包みし小鼓を抱へ、流れに沿ひて出づ。

久古（ふと立ち留まり、二階の小鼓に耳を傾く）おう、まぎれもない伊左衛門様ぢや、かたかは町とのみで、しかとお宿が知れなんだに小鼓の音で知れた。こちも鼓で挨拶せう。（袱紗を解き、立ち身の儘、二階の鼓に合はして我が鼓を打つ。稍長き間）

（ふと二階の鼓やむ。障子あく。伊左衛門、衰へし顔を出す。）

伊左　やれ、久古か。なつかしい。

久古（鼓をやめる）お久しや、藤屋様。もうお目には當るまいと思ひしに、下司の命も役に立たいでか、また御機嫌のよい顔を見まする。

伊左　よい顔に見ゆるか。先づ、それへ行く。待ちや。（障子を閉ざす）

久古（流灌頂に目をつける）流灌頂がある。さては夕霧様のお弔ひの爲のお下りぢやな。俺も回向せう。（流灌頂の前に跪き、手を合はす）

（伊左衛門、門の内より出て来る　皮の短き紐つけたる荒き縞の羽織。素足に草履ばき。）

伊左（久古の背を打つ）何をする。

久古　夕霧を拜みまする。

伊左　夕霧がどこにゐる。

久古　お立てなされた流灌頂に。

伊左　いや、俺は流灌頂は立てぬ。

久古　でも、今年は七年忌ぢや。それでお下りなされたのであらう。性悪にも似合はず、あの方ばかりは忘れられ

ぬと見えまする。

伊左　いや、年忌は京でした。また淨國寺へも志した。

久古　そんなら、なんでお下りなされた。

伊左　樣子にも知れう。世間晴れての下りなら、長町か北濱へ行く。俺はまたさんざんな身になつた。

久古　またお内をお出なされたか。

伊左　出たのではない。出されたのぢや。女房妾のある身が勘當されたのぢや。

久古　（笑つて）二人ではまだ足りませいでか。

伊左　足らぬではない。とんと何もないと同じ事なのぢや。空なのぢや。

久古　お内儀と萩野樣を左右に抱いて、それが空とは禪宗の坊主が言ひさうな。その悟りがあれば、勘當にはお會ひなさるまい。またいつもの嘘ぢや。

伊左　いや實ぢや。夕霧が死んで後、よう似たと言うて、萩野に阿呆盡したを、女房が聞いて、ここへ下り、請け出して京へ歸つた。それから、暫く廓へは足踏もせいで、一門の褒め者になつた。それで濟めば事もないに、島原の大坂屋に難波といふ女郞が出て、それがまた夕霧に瓜二つぢやと友達が言ふ。

久古　難波なら私もよう知つてをりまする。成程微塵違ひませぬ。夕霧が見たくば難波ぢやと申します。

伊左　初めは取り合ひもせなんだが、ふと見たうなつて、密に行つて見たれば、夕霧にその儘ぢや。そこで女房も萩野もとんとほたらかして通ふ程に、また一門がやかましうなつて、ばらばらと勘當した。

久古　さても氣の多いお人ぢや。それでは夕霧樣もお怨みなされませう。

伊左　何で怨まう。夕霧は俺を置いて死んで行つてしまうたのぢや。

久古　それ故、あの世でお怨みなされませう。

伊左　「あの世」があるなら、俺も生きてはゐぬ。今にも死んで夕霧に會ひに行く。年忌に弔ひはしても、それは心遣りばかりの事ぢや。俺は「あの世」があるとは思はぬ。もう夕霧には佛でも會へぬ。

久古　それなら、なぜ夕霧樣に似た女郞をお買ひなされまする。

伊左　そこぢや。俺は「あの世」はないと思うてゐるが「前の世」はあると思うてゐる。その前世で契つた女に夕霧が似てゐたのぢや。夕霧が初めではない。まだ前に女がある。それが誠の女ぢや。

久古　分からぬ事を仰せられまする。そのやうな事がござりませうか。

伊左　そなたには分かるまい。人は誰でも前の世で先づ女

と契るものぢや。この世へ生れて來る時が、その女との暫くの別れぢや。さて、この世で大きう育つて、前の世で契つた女を探す。これを世間では「性悪」といふのぢや。「遊び」とぬかすのぢや。なんでこれが「遊び」であらう。これが「遊び」なら、命は「遊び」ぢや。

久古　「遊び」がなうては、私等は冷飯も食へませぬ。それはお道理でござりまする。

伊左　そなたにはまだ俺の言ふ事が分からぬ。分からいでも大事ない。先づ聞いてゐよ。それで、前の世の女に似た女を探す。ちと似たのがあれば、直ぐと現をぬかす。したが、似た物は似た物、同じ物ではない。きつと折り合はぬ節が何處ぞに出來て來て、女が厭になる。そこで、またこれに似た他の女を探す。また阿呆を盡す。また丁度に行かぬ所が出來て來る。そこでまた新しい女を探すのぢや。

久古　それはお前の移り氣でござりまする。不心中でござりまする。

伊左　いや、これが心中ぢや。前の世を戀しうも思はず、一門世間がくれた「女房」といふ目隱しで目を隱し、よその女に見向きもせで暮らすこそ不心中ぢや。世間にはこの不心中が、堅人よ聖人よと褒めらるる。世間の男の大方はこれぢや。

久古　されば、その前の世の女とやらが一定この世に生れてをりまするか。

伊左　生れてゐいでか。そこが前の世での契りぢや。前の世の契りは、この世の契りよりずんと堅いわ。

久古　女もその契りを忘れずにゐまするか。

伊左　そこが難事ぢや。男は忘れずに生るるが、女は忘れて生るる。女の不心中は生れぬ先からの事ぢや。

久古　されば、どうして前の世の女とお見當てがつきまする。

伊左　それで男は苦勞する。あれかこれかと迷ふ。目星をつけても、女の心の底を知るまでには、大分の年月が掛かる。前の世の女の心は、覺まされるまでは眠つてゐるのぢや。

久古　夕霧樣は前の世とやらのお內儀ではなかつたのでござりまするか。

伊左　さればぢや。いまだに戀しうは思ふが、俺の探す女ではなささうぢや。眞實前の世の女なら、俺に先立つ筈がない。

久古　でも、それは御病氣故。

伊左　その病氣がそでない證據ぢや。前の世の契りは、この世の命をも僅にする。

久古　されば、萩野樣はどうでござりまする。

伊左　女房が粹の立て損ねぢや。あれは請け出す前に俺の目違ひが分かつてゐた。
久古　すれば、難波がそれぢやと仰せらるるか。
伊左　まだ分からぬ。大方さうでないとは思ふが、今ではあの女より外に見當てはない。それで勘當受けたが、白黒の分かるまでは通ひ續くる心ぢや。そちに頼む事がある。
久古　何なりとも承りませう。
伊左　俺が娘を知つてゐやるか。
久古　京のお内儀のでござりますか。
伊左　女房にはとんと子が出來ぬ。それ、夕霧が死なう五年前に、子を産んだ。桑名に米商してゐる伯父に預けて置いた。それを今度連れて下つたのぢや。
久古　どうなされます。
伊左　廓へ賣つて金にしたい、それで、そちに頼む。
久古　たはけた事を。
伊左　たはけても是非がない。難波に會うた揚錢の殘りが十五兩ある。それを濟まさねば尋ねるにも尋ねられぬ。早う濟まさうとは思へども、今の身では一兩も絞れぬ。詮方盡きて桑名へ下り、娘おせきを連れて來たは、難波が一分も立て、俺も前の世の契りを探りたい爲ぢや。娘を金にしてくれ。

久古　やくたいもない事仰せらるる。夕霧樣が廓でお果てなされたさへ情なう思し召したに、その娘御を廓へ賣り、二代の傾城をさせうとあるは、草葉の蔭から夕霧樣のなんぼう悲しう思し召さう。
伊左　夕霧が事は何とも思はねど、娘は俺とても憎うはない。勿論長う廓へ置くではない。俺が友達に川口屋の清左衛門といふがある。
久古　それは鼻の下に上髭のある、髮を高う結つたお人ぢや。私も存じてゐまする。
伊左　あれは阿呆ぢや。
久古　阿呆ではござりますが、拔けでござります。
伊左　はて同じ事を言ふ。どうした緣か俺ときつう仲がよい。あのやうなれども、眞實のある者ぢや。あれに言うても十五兩は貸さう。なれども、今來たばかりには面目なうて言はれぬ。長う廓に置くではない。一時の逃れ道ぢや。
久古　それなれば、畏りました。
伊左　一兩も慾には入らぬ。十五兩でよい。ひとへに頼む。
久古　畏りました。
伊左　それで話は出來た。（間）　そちは今かた鼓を打つたな。
久古　御挨拶に打ちました。

伊左　うつけにも似ず、よう鳴るわ。

久古　お前のお蔭で鍛上げました。この頃は松囃子にも私が出ぬと始まりませぬ。

伊左　何を打つ。

久古　やはり傾城事でございます。

伊左　むむ、何ぢやな。

久古　江口を打ちまする。

伊左　さらば、曲舞から打つて見よ。

久古　お前大鼓を打つて下されませ。

伊左　心得た。

（伊左衛門、家の内へ入り、直ぐ大鼓を持ち出づ。久古、調べの緒を締める。やがて、二人して鼓を打ち始む。元の遊女河内、町風して出づ、二十あまりの美女。川原に立てたる流灌頂に水を手向く。伊左衛門、久古、直ぐそれに目を留めて、二人同時に鼓をやめる。）

河内　（涙ながらに手を合せて）　ああ誠に月日の立つは夢ぢや。今手向けまする水をよう受け取つて下さんせ。

久古　（河内の側へ歩み寄る）　はて、お愁傷や。さては姉御様は血の上でおなお果てなされ、それ故流灌頂をお立てなされましたか。

河内　いや、さやうではござりませぬ。

久古　そんなら、斬られて死なしやれましたか。

伊左　はて粗相言ふな。

河内　いや、そのやうなことではござりませぬ。お前方を私は見知つてゐまする。

久古　（なほ床几にゐる伊左衛門に向ひ）　ここな悪性者め。後家、比丘尼、腰元、小娘まで、お前の手に掛からぬ者はない。近附でござりませう。

伊左　いや、覺えぬ。

河内　もし、藤屋の伊左衛門様。

久古　そりやこそ。

河内　これ久古殿、久しい。

伊左　それ、おのれぢやは。

久古　いや、覺えませぬ。（河内の顔をぢつと見て）　顔は見たやうなが、名を覺えぬ。名の頭字を聞きたい。

河内　カの字でござんす。

久古　むむ、覺太夫が娘か。

河内　いや、いや。

久古　そんなら、ま一字言うて下されれ。

河内　はて、カハでござんす。

久古　むむ、おかはさんか。

河内　はて、やくたいもない。河内でござんす。

伊左　（驚きて、女の顔をぢつと見詰め）　おう。さては夕霧が妹女郎の河内か。

久古　ほんにさうぢや。町の風になつた故、とんと見違へた。先づこれへ。

（久古、床几の毛氈を川原へ敷く。三人、これに坐る。）

伊左　そなたは井筒屋の八兵衞に請け出されたが、見れば供も連れず、どうした事ぞ。

河内　されば、井八様に請け出され、暫く一緒にゐましたが、井八様は大酒が病で、咽喉からたんと血を吐き、それから煩ひになり、終に死なしやりました。

久古　むむ、さてはその弔ひの爲の流灌頂か。

河内　いや、井八様の弔ひは寺へ頼みました。これは夕霧様の七年忌。深う恩を著ました故、志でござんす。

久古　はて殊勝な。

（娘おせき、十六七の紫帽子。門の内より茶を持ちて出づ。）

娘　茶を參りませ。

河内　（娘の顏をちつと見て）はて、こなさんは夕霧様にその儘ぢや。

伊左　その筈よ。桑名にゐた俺と夕霧が中の子ぢや。

河内　さうでござんすか。（娘に）私はお前のかかさんと懇の者ぢや。おう、いとほしや。（伊左衞門に）もし伊左衞門様。このお子を一夜貸して下さんせ。夕霧様に會はしたい。

久古　いや、不思議な事ばかり聞く日ぢや。

伊左　何をいふ。夕霧に會はさうとは。

河内　されば、夕霧様が生き返りでござる。京では難波という女郎ぢや。ここでは難波津といふが、その儘の夕霧様ぢや。京の大盡がついて來て、ここの京屋で御全盛ぢや。

伊左　（大に驚く）それは京の大坂屋の女郎か。京では天神であつた難波が事か。

河内　如何にもさうでござんす。この所では太夫様でござんす。

伊左　（肝の高ぶり來る樣子にて）やい久古。何を浮々聞いてゐる。最前話した女ぢや。

河内　お前見知つてか。

伊左　見知りどころか。そいつめ故に千貫の身代また捨てた。俺はあれが心中次第、死にもする。共に乞食でもする心ぢや。そこな娘を賣りに下つたも、揚錢濟ましてやりたさぢや。それに、俺がこの態となりたれば、桑名へ行きし留守を幸に、この所へ來る奴ぢや。（悲しげに）久古、難波にも前の世の契りはなかつた。

久古　されば、どうなされます。

伊左　また他の女を探すまでぢや。難波が事はふつつりと思ひ切る。

娘　ととさん、わしは何となるぞ。

伊左　（河内に）さりながら、人の物を負うてゐるのは厭ぢや。娘を十五兩の金にしてくれ。

河内　それなれば、久古殿と共に新町へ行き、埒の明くやうにいたしませう。

伊左　おせき、行てくれるか。

娘　如何にも、ととさんの爲ならば傾城になりませう。

久古　（伊左衞門に）お前はどうなされます。

伊左　飛脚を賴んで、一時も早う金を揚屋へ渡したい。それから、川口屋に後を賴む。その上の分別ぢや。

久古　京へお戻りなされますか。

伊左　京へ戻るか。この儘ここにゐるか。娘を連れて桑名へ行くか。また一人して行方も知らず旅立つか。とんと今では分からぬ。兎にも角にも、俺はまた道を違へた。ま一度道らしい道へ戻るまでは、一足も踏み出しはならぬ。

河内　されば、久古さん、行て參りませうか。

久古　心得た。

（河内、久古、おせきを連れて行きかける。）

伊左　（後より娘に聲をかける）おせき、新町へ入り、二町程行き、左手に扇の書いた暖簾のある格子が、母の夕霧が死んだ所ぢや。回向して通れ。

娘　あい。

伊左　あの方へ行きたりとも、難波津といふ傾城と物言ふな。一つ座敷にもゐたらば聞かぬぞ。

娘　あい。

伊左　久しう置きはせぬ。おつ附け取り戻す程に辛抱しや。

娘　あい。

河内　さらば。

久古　さらば。

（三人去る。伊左衞門、一人殘り、毛氈の上にくづなれゐて、空を仰ぎ、太息をつく。ふと、まろびゐる大皷に目をつけ、物狂ほしげに、それを搔い抱いて、急調に打つ。日かげる。）

――幕――

與三郎（一幕三場）

人物

伊豆屋　喜兵衛
伊豆屋手代伊之助
宿役人　六兵衛
同　　七助
會津屋下男半助
伊豆屋下男忠助
切られの與三郎　伊豆屋の養子
蕎麥屋
下役二人

時代

江戸の末期

場所

伊豆屋の周圍

五月下旬の夜。

なかば戸を閉ぢたる伊豆屋の店先。彩色にて鼈甲櫛の形を描き、その下に「御誂鼈甲品々」と筆太に書きたる潜り障子、中よりの明かりにて燈籠のやうに仄白く見ゆる外、舞臺總て暗し。上手に土藏。下手に店の脇より勝手へ通る潜り戸。元山町としるしある用水桶。幕の明く前より、百萬遍、鐘の音。幕明くと、宿役人のこしらへをした六兵衛、同じこしらへにて鐵網雪洞を下げたる七助、下役二人、弓張を持てる手代伊之助、羽織著流しの伊豆屋老主人喜兵衛、召喚せられし役所より戻りし態にて、店の前に立ちかかりゐる。

店の奥より「南無阿彌だんぶつ、南無阿彌だんぶつ……」と、百萬遍を繰る聲、單調にして陰鬱なる叩き鐘の音、聞え來る。

喜兵衛　いや。皆さん御苦勞でございました。

六兵衛　七助　あなたこそさぞおくたびれでございませう。

下役の一人　時に今夜はお内に御法事でもございまするか。百萬遍がございまするな。

喜兵衛　さればでございます。この百萬遍もあの野良めが、島へやられた船出の日を命日と思うて、毎月毎月御近所へ御迷惑をかけてゐるのでございます。親は未來の事など思うてゐますが、あいつめは親をも世間をも目の内に置かぬやうな惡業ばかり、けふ假のお呼び出しも、やつぱりあいつが事でございました。皆さんにも飛んだ御苦

勞をかけました。
七助　なんのあなた、その御心配には及びませぬ。
六兵衛　年中お店の御厄介になりますわたくしどもでござります。この上とも何なりとも、御遠慮なく御用の筋は仰しやつて下さりませ。
七助　併し、御子息の與三郎様には、何とも彼とも申しやうがござりませぬな。
喜兵衛　いや、いや。もうあいつの事は、わたくしも諦めました。けふもお役所であゝいふ嚴しいお言ひ渡しがあつたのでござりますから、どうか皆さん、若しこの居廻りにあの野良めがうろうろしてゐるやうな事でもござりましたら、決して庇はずと役所へ突き出して下さりませ。若しもの事がありますと、却つてお前方を恨みますぞ。
六兵衛　それはお氣遣ひなされますな。
七助　その事なら、よう心得てをりまする。
喜兵衛　それは有難うござりやす。何は兎もあれ、くたびれ休め、お茶など上がつてお歸りなされませ。
六兵衛　いや、さういたしてはをりますまい。
七助　お内もどうやらお取込の御樣子。失禮ながら、これでお暇いたしませう。
喜兵衛　强ひてお止めはいたしませぬ。そんなら又あしたお目に掛かりませう。（下役二人に）あなた方も御苦勞でござりました。

（喜兵衛、店の潜りへはひる。）

伊之助　さあ、さあ、それではこれから内へ歸つて、ゆつくりお休みなされませい。いやもう、わしはきのふからの事で、大抵粉になりました。
六兵衛　その御心配は御尤だ。わしも親の代から地主をしてゐるので、聞捨にもならずさ。お前さん方と立ち會つて、海老名様のお屋敷へ出たのだが、兎角あすこはやかましい屋敷だてな。
七助　いやもう、ちつと物の言ひやうが悪いと、直ぐとどつこに取つて、目の玉の出る程叱られる。
下役の他の一人　御代官所の事ばかりは、馴れぬといけぬものでござりまするて。

（上手より、やつし股引の番人半助、店行事と書きし提灯を持ち、割竹を鳴らしながら「火の用心、火の用心。」と出て來る。）

半助　これは皆さん、お揃ひだな。
伊之助　おう。おぬしは會津屋の半助どの。
七助　御苦勞でござるの。
六兵衛　御大儀。御大儀。
半助　おい。おい。あの、この家の忠助爺さんはゐねえかね。

伊之助　今そこらにゐたつけが、けふはちつと內も混雜。

半助　混雜でも、なんでも、けふは店番が廻つてゐるわな。

伊之助　その店番の事は承知さ。

六兵衛　大方、今に出るだらうよ。

七助　お前さんは組合だが、いつも不精だ。穴を埋めてやるが好いさ。

半助　なにお前方がさう言ふなら、どうでも好いが……成程、ここの伊豆屋は混雜な筈だ。今會所で聞いて來たがの。家の嗣子の與五郎さんと、嫁御のお鶴さんがゐなくなる。そこへ持つて來て、いつか島へ遣られた與三郎さんが……

六兵衛　（遮つて）　これ、これ。大きな聲で。靜にさつせえ。

七助　靜に。靜に。

（半助、默つて控へる。）

六兵衛　時に、お二人の一件は、あした仁田樣へ別に訴へる事にいたしませうな。

伊之助　それが宜しうござりませう。

七助　わしは三田にゐますが、あすこにもこの家の地面がありますから、この事は、やつぱりあつちの代官所へも屆けて置かにやなりますまい。いづれ、あした又こちらへ出張りませう。

伊之助　それは御苦勞でござりますな。

七助　六兵衛　そんなら、あした。

伊之助　御苦勞樣でござりました。

（伊之助、七助と、提灯と鐵雪洞の交換する。六兵衛、七助、下役二人、下手へはひる。伊之助も、直ぐに內へはひりかける。）

半助　これ、これ。まあ待ちなせえ。

伊之助　それでも、おらあ忙しいわ。

（と、尙行きかける。半助、その袂を捉へる。）

半助　忠助さんはどうしたのだ。早くよこしてくんなせえな。

伊之助　ええ、これ、おぬしも皮肉なものだ。今七助さんにあのくらゐ言はれたではないか。

半助　言はれた事は言はれたが、いつもおれが少し遲く出ると、きつとあの親爺が早く番小屋へ出しやばつて、今の若い奴はしつこしがねえ。寒からうが暑からうが、年がよつても勤める所はきつと勤めるなんのと、三段目の師直を見たやうな事を言つて、若い者を遣り込めてならねえ。

伊之助　そりや誰がよ。

半助　お前の家の師直親爺よ。

伊之助　そりやあ誰の事だ。

半助　忠助親爺の事だわな。

（下男忠助、この少し前より出て來て、二人の話を後で聞いてゐる。老けたるこしらへ。割竹。店番と記したる弓張提灯。）

忠助　（突然、二人の前へ躍り出る）何がどうしたと。（割竹で下を叩く）

（兩人、呆れて詞なし。）

忠助　（半助に）これ忠助なら忠助で好いわい。忠助親爺たあなんの事だ。さあ、もう一遍言つて見せろ。

伊之助　これさ。これさ。まあ好いわな。お前がゐねえと思つて言つたのだ。親爺だから親爺だと言つたらうではねえか。

半助　蔭で言ふ事はしかたがねえ。量見しなせえ。量見しなせえ。

忠助　まあ、まあ。さう言へば堪忍してやるがな。いつでも、おれにばかり番をさせて置くではねえか。今夜は內がちつと取り込んでゐる事があればこそ、遲くなつたのだ。いつもおれよりは半時づつも遲く出張つて、九つを聞くと、こくらこくら居眠りを始め、八つを聞くと白川夜船、明け方には他愛なしだ。丁度おれと組み合ふのが仕合せ、いつでも、おれが一人勤めてやるのだ。

伊之助　まあ、まあ、理窟を言はずとも好いでねえか。

忠助　それでも、こんな年下の者にばかにされるのも……（と、店の內を覗くやうにして）やつぱり旦那樣が惡いからだ。

半助　（分からぬ樣子にて）これ、これ、そりや何を言ふのだ。

伊之助　旦那が惡いなんぞと、滅多な事は言はぬものだ。

忠助　いやさ。こなた衆が知つての通り、與三郎さんや弟御の事で、家中が亂飛亂國、たうとうこんな騷動になつたのも……旦那の心が弱過ぎるからだ。

伊之助　これさ。そんな事は、お前が言つても追つつかねえわな。

忠助　それでも、もう六七年前だ。おれが何かの譯は知つてゐるから、大旦那にかうかうしなさるが好いと言うたれど、その通りしねえもんだから、たうとう今度の一件だ。

半助　さあ、その與五郎樣の內にござらぬ取込を知りながら、こなたの番に出やうが遲いと言つたのは惡かつたよ。

忠助　なんの、與五郎さんはどうでも好いが、それよりもまだ氣に掛かる事が……（と、又店の方を窺ふやうにする）

伊之助　ええ。

忠助　ああ、もうかうなつては後の祭だ。（と、溜息する）

半助　何の事だ。おれにやあ、ちつとも訣が分からねえ……それはさうと、忠助さん、今夜はの、宵の内はお前まあ内の臺所も取込だらうし、勝手に休みねえな。

伊之助　むむ、成程。さうして、九つを打つたら、番小屋へ行くが好い。それからは、貴樣の番になつてゐるものだから……

半助　それから、心任せにするが好い。

忠助　（一寸考へて）成程。さうしようか。おれも今の間にちつと旦那へ……（と、言ひかけて詞を濁す）なんなら、さうして貰はうか。

半助　さうしなせえ、さうしなせえ。それぢやあ一遍廻つたら、こなたは臺所で休みなせえ。九つまではおれが番小屋へ行つてゐるから。

忠助　ぢやあ、さうしてくんねえ。

伊之助　わしもまだ色々用があつた。（と、件の鐵網の雪洞を持ち、立ちかける）

忠助　（始めて、それに心づき）これ、これ。番頭ともあらう者がどうしたものだ。往來へ雪洞を持ち出すとは。店番をする家では餘計氣をつけにやならねえ。火の用心が懸うござるぞ。

伊之助　こりやあ、あやまつた。

半助　それぢやあ、一遍廻んなせえ。おいらもあすこの新道から、直ぐ番小屋へ行つてゐる。（と、上手へ向ふ）

忠助　九つを打つたら、おれが代るぞ。

伊之助　どれ、店の用を片づけようか。

半助
忠助　火の用心。火の用心。

（半助、割竹を鳴らしながら、上手へはひる。伊之助、勝手へ通る潛り戶をはひる。忠助、割竹を鳴らしながら、下手へ向ふ。百萬遍の聲、叩き鐘の音、段々遠くなる。）

（三方飾りの舞臺廻る。舞臺と舞臺との接續、合理的なるべし。）

（濡塗の高塀。忍び返し。非常潛り戶。下手に箱の用水溜。これに元山町と記したる町名札。時の鐘。忠助、上手より、同時に切られの與三郎、下手より、三尺著流し、頬冠りにて、あたりを見廻しながら、出て來る。）

（與三郎、黑塀を見上げ見廻す。忠助、それに目をつけ、大きく「火の用心。火の用心。」と叫びながら割竹を鳴らし、その側を通り過ぎようとする。與三郎、ふと忠助に目を注ぎ、驚く。忠助、訝りながら下手へ掛かる）

與三郎　（呼び留める）おい。爺さん。爺さん。

忠助　（顏だけ振り向ける）なんだ。通りへ出るのなら、

先の曲り角から出さつせえ。この向うの溜りは締切だよ。

與三郎　さうぢやねえ。ちよいと聞きてえ事がある。

忠助　時を聞くのか。また四つが鳴つたばかりだ。（と、行き過ぎようとする）

與三郎　これさ、おれだよ。

忠助（體を振向ける）なんだ。おれだ。大凪な事を拔かすな。ははあ、生醉か。

與三郎　おい、爺や。おれだよ。おれだよ。

忠助　爺やあた。へん。甘つたれた事を拔かすな。誰だね。ははあ、屋根富の弟の源次か。家へ歸りそびれて、お袋へ詫事してくれか。そんな好い氣な事ぢやあねえわ。

與三郎　これ、爺や。おれだ。手前はいつも達者だな。

忠助（提灯をかざして）さては氣違ひだな。これ。おれはそんな汚ねえ若え者に近づきは持たねえぞ。

與三郎　ええ、分からねえ。（と、ずつと側へ寄り、あたりを見廻しながら）與三郎だよ。

忠助（驚く）ええ。（又よく提灯で見る）嘘をつかつせえ。おれがお育て申した坊さんは、そんな醜え男ぢやねえ……ああ、おれが色々あの子の事を思つてゐるものだから、それで、そんな事を……併し、まさか魔者ぢやあるめえが、一體、手前は何だ。

與三郎（一寸考へて）むむ。それぢやあ、おれが面や體の變つた事を……成程、その後おぬしにやあ會はねえから、まだ訣を知らねえのも尤だ。かう、爺やあ。（と、頬冠りの結び目を解く）おれは與三郎だ。

忠助（暫く、ぢつと相手の顏を見てから、驚いて）おう。さうだ。坊さんだ、與三郎さんだ。（と、又ぢつと與三郎の顏を見て）さうして、まあ、お前のその顏の疵は……ははあ、そんなら、この間、噂に聞いた通り……

與三郎　木更津の一件で、面も體もこの通りだ。

忠助　ええ、情ない、變り果てたそのお姿……（と、言ひかけたが、突然提灯を吹き消し、何事かを恐れるやうに、與三郎の手を引つ張る）まあ、まあ、こつちへ來さつしやりませ。（と下手をさす）

與三郎　これさ。どうするのだ。

忠助　ここでは話が出來にくい。まあ、わたしが好い事がございます。もし。（と與三郎の耳へ何か囁く）

與三郎　むむ。ついそこか。

（下手の蔭で、犬がけたたましく吠える。）

忠助　ええ。畜生め。提灯を消したら、吠えやあがる。しつ。しつ。（と、犬を追ふ）ぢやあ、坊さん。

與三郎　おむ。（と、天水桶の蔭に忍ぶ）

（また犬の聲。忠助、下手へ向ふ。舞臺廻る。前に同じく、次の舞臺への接續、合理的なるべし。）

（板屋根の番小屋「唐番火の用心」と記したる掛行燈、竹矢来。高札「元山町裏河岸」と記したる天水桶二つ程。下手に柳の立木。）

（番小屋の戸、一枚明きをり、これに割竹立てかけあり。火のつけてない手丸置いてある。以前の半助、火鉢を控へ、番をしてゐる。）

（忠助、上手より出て來り、番小屋へ立ち寄る。）

半助　（顔を上げて、驚く）おや。もうお前來たのか。今、犬が吠えたつけな。こなたはどつちを通つて來た。

忠助　一廻り廻つて、直ぐ來たんだ。さあ、こなたは暫く休まつせえ。

半助　お前　何を言ふのだ。たつた今、四つを打つたばかりだ、代るなあ九つからだ。

忠助　はて、もう好い。おれが番をするわ。貴様はまあ休め。

半助　そりやあ厭だ。うつかり、そんな事をすると、又さつきのやうに言はれるのだ。おらあ九つまで勤める、勤める。

忠助　これは又聞きわけの悪い。おれが代ると言へば。

半助　はて、九つから代るつもりだよ。

忠助　ええ、おれが代ると言つたら。

半助　なぜそんな事を言ふのだ。

忠助　はて、おれが内の臺所の用は片づいた。どうで家にゐたところが、寢られはしねえから、けふはおれに勤めさせて下せえ。

半助　さう言ふなら、どうでも好いがの。又あとで、さつきのやうに言ふと厭だぜ。

忠助　さつきのは、おれが悪い。量見さつせえ。まあ、どうかおれに代らせてくれ。

半助　色々な事を言ふなう。それぢやあ、おらあ八つを打つと出て來るよ。

忠助　はてまあ、それもどうでも好いから、早く行かつせえ。

（半助、提灯へ火を入れ、割竹を持つて、上手へ向ふ。）

半助　それぢやあ、一廻り廻つて行かう。

忠助　ああ、これ、これ。そつちは今おれが廻つて來た。

半助　はて、年寄といふ者は、色々な事を言ふものだ。

（と、割竹を鳴らしながら下手へ入る。忠助、その後を見送り、直ぐと上の方へ行く。）

忠助　さあ、もうようございます。ここへお出でなされませ。

（與三郎、上手から出て來る。）

與三郎　むむ。こりやあ番小屋だな。かうして毎晩手前が勤めるのか。

忠助　いや。さうではござりませぬ。なんでも家持の店々から人を出して、この通り代り代りに勤めるのでござります。さあ、まあここへお上がりなされませ。

與三郎　好いかえ。

忠助　なんの。氣遣ひはござりませぬ。（と、番小屋にある蒲團の塵を拂ふ）

與三郎　むむ。（番小屋へ上がつて、坐らうとする）

忠助　あ。もしもし。板敷の上は薄縁ばかりで、足が痛みまする。汚なうござりますが、これをお敷きなされませ。

（と、蒲團を勸める）

與三郎　なんの。好いわ。以前とは違ふわ。これ程の身になるまでにやあ、色々苦しい目にも會つて來たのだ。

忠助　でもまあ。（と無理に蒲團をあてがふ）

（與三郎、やむを得ず、蒲團の上に乘る。稍長き間。）

忠助　もし若旦那。以前に變ると仰しやるが、いやもう變つた事だらけ。まあ、その變つた事の始まりに聞きたいは、お前なぜ、そんな、顏へ大層な疵を受けなすつた。どうして、そんな恐ろしい顏にならつしやつた。

與三郎　さればさ。あの木更津へ預けられた時分にの。あの土地に赤間源左衞門といふ道樂者があつて、そいつの女房にお富といふ女があつた。據所ねえわけで、その女をな……（と、口ごもる）

忠助　お前、その女をどうかしたのかやな。

與三郎　そこはまあどうでも好いわ。

忠助　呆れたものだ。

與三郎　言はれて見りやあ、こつちにちつと義理の悪い訣もある。そこで源左衞門といふ野郎の子分等に、寄つてたかつて手籠にされ、それでしやつ面、體へも、この通りの疵だらけよ。（と、膝をまくり、頬冠りを取り捨てる）

忠助　（行燈の明かりを、消したる提灯に移し、又ちつと與三郎を見る）　おう、おう。やれ、やれ、やれ。むごたらしい。ああ、情ねえ事をしやがつたなう。

與三郎　このわけ故に、親父は腹を立て、中々江戸では寄せつけず、それで、手前にも會はねえ仕儀。たうとう、その儘勘當と、體一つを棒に振り、切られの與三と異名をつけられ、そつちこつちとごろつく內、そのお富といふ女を嚊あにして暮らしてゐたが、また程もなく食ひ込み、こんな態で江戸へ來て、お主に會ふのも面目ねえなあ。

忠助　なんの、お前、面目ない事がござりませう。お前さんの御勘當は、親御樣の御立腹ばかりではござりませぬ。これには色々……しかし、その事はまあ後でお話し申しませうが……もし若旦那。（と、與三郎に何か囁き）　そんな噂を聞きましたが、ほんの事でござりますかえ。

與三郎　（平氣で）　ほんの事よ。

忠助　え。

與三郎　おりやあ腹が立つてならねえのだ。おれは養子。あとから出來ても、與五郎は實子。その弟に家の跡を取らせたいばつかりに、心にもねえ身持放埒。併し、まあそりやあ金で濟む事だから構はねえが、あとにも先にも、たつた一度、人の女に惚れたばかりに、一生涯人交はりの出來ねえ體になるとは、天道樣も聞えねえや。さあ、その破れかぶれで、癪に障る奴は片つぱしから、いぢめて歩いた。そのお蔭で、たうとう終が島流しだ。おれはもう口惜しくつて、口惜しくつてしやうがねえから、たうとう島を破つて忍び忍び、やつとの思ひで、ここまで來たのよ。

忠助　（愈驚く）　それぢやあ、愈その恐ろしい所を脱け、島紛失してござつたか。（と、泣き伏す）

與三郎　（あたりに心を使ひながら）　これさ、これさ。そんなに言はずとも好いぢやあねえか。靜にしやれ。靜にしやれ。（と、又あたりを見廻す）　どうで、おれは腐つた體だ。しちくどいやうだが、たつた一度犯した罪ゆゑに、一生涯世の中へ出られねえ燒金を當てられた不運な男だ。どうせ命はねえものと諦めてゐる。唯、お主に聞きてえのは、親父さんや母さんは御機嫌が好いか。弟の與五郎も達者でゐるか。その安否が聞きてえばかりに、うそうそこんな所まで迷つて來たのだ。

忠助　（默つて、泣き伏してゐる）

與三郎　これさ。泣いてゐちやあ分からねえ。父さんやお袋は達者か。與五郎は無事でゐるか。ええ。これ。さぞ親達もおれの事を、憎い奴だと言つてござるだらうな。

（忠助、默つてゐる。かすかに、叩き鐘、木魚の音まじりて、聞え來る。）

忠助　（暫くして）　親御の安否が聞きたいとはまだしもだ。そのお心なら、なぜまあ、だいそれた島破りなどさつしやりました。恨めしいお人だなう。

與三郎　今更そんな事を言つたところで、もう追つつかねえ話だわ。（態と癪に障つたらしい樣子で）　面倒だ。どうで勘當を受けた體だ。親父やお袋の安否などを聞いたところで、しやうがねえわ。ぢやあ、達者でゐろよ。（と、行きかける）

忠助　（狼狽して留める）　これ、これ。まあ待たつしやれ。愚痴を言つたのは、わしが惡い。勘忍して下さりませ。（木魚の音、鈴の音に耳を傾ける）　あれ、あれ。親御の安否が聞きたくば、あの鈴の音や木魚の音をお聞きなされませ。お袋樣や親旦那が、ろくろく夜の目もおよらずに、奥の佛間で看經のお勤めをさつしやるも、御自分達

の後世は措いて、この世のお前の身の爲を、おぼしめしての御囘向でござりまする。せめて、あの音の聞える、ここにござれば、二親にお會ひなされたも同じこと。まあ、下にゐて下さりませ。（と、無理に又與三郎を坐らせる）もし若旦那。けふは幾日と思はつしやるのだ。

與三郎　（考へて）手前に言はれて氣がついた。おれが科が流罪ときまり、伊豆の島へ流されたは、如何さま去年のけふであつた。（と、思ひ沈む）

忠助　別して、けふは祥月とて、宵の内は百萬遍。同行衆を呼び集め、もてなして返すのも、みんなお前の身の祈禱だ。毎月その日になると、大旦那やお袋樣が、座敷へいつでもわたしを呼ばつしやつて、仰しやるには、これ爺よ。どういふ事か與三郎は、頑是ない時分から、乳母をつけてもお主になじむので、守をしてくれたのは、そちばかり、それ淺草の觀音樣、兩國の開帳よ、花火の夜店緣日と、連れ歩いたのもそちばかりぢや。その與三郎が成人して、やつと男一人前になるかと思ふと、知つての通りの身持放埒、世間を兼ねて、據所なく勘當はしたが、たうとう恐ろしい罪を犯して、島流しにまでなるといふのは、よくせき薄い親子の緣。どうで、あれが體では、島で命を終へるであらう。船に乘つた日を命日と思ひ、それで營む志ぢやに依つて、けふの正客は忠助そちぢや。と、膳の上座に据ゑられる心苦しさ。ああ情ない。これがまあ、與三郎樣がおとなしくしてござつて、嫁御でも取らつしやれて、その披露の喜びか、初孫樣の宮參り、初の節句のお祝ひなら、御祝儀の赤あづき飯、末座で喰べても、さぞ嬉しうござりませうが、それと引きかへ、守り育てたそのお子が、島へ行かれたけふの膳。その正客にばつかりは、なりたうもござりませぬと、わしが言へば、御兩親も尤におぼしめし、なんにも仰しやらないで、唯しくしくと泣いてばかり、仕出しは八百屋で、手を盡した結構な本膳も、一箸咽喉へ通らばこそ。わしや毎月毎月、けふの日の來るのが思ひでござりますわいの。（と、泣く）

（與三郎は忠助の信實に心を動かされながらも、態と弱みを見せまいとして、延つ反つし、さまでもなき蚊を拂ひなどする。）

忠助　（それに氣のつきたる態にて）ああ、こりや氣のつかぬ。お前を捕まへて、わが勝手のよい事ばかり。どうも、ここは溝のあるせゐかして、もう蚊が少しづつ出ますわいの。それに夜が更けるせゐか。ひやひやと……（と、與三郎の裝を見る）お前、風を引いては惡うござります。これなと引つかけてござりませ。（と、袷の上へ引つかけし半纏を脫いで、與三郎に著せようとする）

與三郎　好いわえ。好いわえ。うつちやつて置くが好い。もうかうなつちやあ、風も引かねえ。そりやあさうと、親父どのお袋へも物を思はせ、可哀さうに、手前にまでも、そんな思ひをさせるのも、みんなおれが心からだ。おらあ、もうつくづく體に愛想が盡きた。だが、おれが島ぬけの事を、どうして手前知つてゐるのだ。

忠助　さあ、それはの、けさ海老名様のお屋敷から、餓の召し狀。何事かと親旦那様が名老方と同道で、お役所へ出たところが、お前さんのお身の上、かやうかやうの不屆ゆゑ、その方は親里、きつと尋ね參るであらうから、見つけ次第捕めて出せ。若し隱しでもする時は、親は元より繼者までも同罪と、いやもう嚴しいお上のお言渡しを、旦那様が戻る早々、わしへのお話、もし、まあ、ひよんな事になりましたなあ。

（與三郎、これを聞くと、つと立ち上がり、番小屋を驅けて出ようとする。忠助、驚いて、その袖に縋る。）

忠助　もし、お前どこへござる。何處へ行かうと思ふのぢや。

與三郎　知れた事を。名のつて出るわえ。

忠助　（驚く）ええ。

與三郎　よしや、おれがこの江戸へ來たといふ事は、誰も知るめえと思つたに、もうさうなりやあ、これまでだ。名のつて出るのが、いつちの分別。そこを放せ。ええ、そこを放せ。

忠助　いや、いや。そりやなりませぬ。そりやなりませぬ。

與三郎　ええ、放せ。放さねえか。

忠助　いや、いや、放さぬ。これ、若旦那。そりやお前、わるい量見でござりますぞえ。

與三郎　ばかを言ふな。これ、親の首へも繩をつけ、奉公人にも難儀をかけうよりは、男らしく名のつて出て、立派に兇狀受ける心。それがなぜ悪い量見だ。

忠助　ええ。情ない事言はつしやるな。お前、今名のつて出れば、命を助かると思はつしやるか。

與三郎　何の命が助かるものか。悪徒のしまひはかうしたものだ。やる所までやつつけるわよ。

忠助　さ、さ、さ、それが悪い。死ぬのが知れてゐる事なら、よしにして下さりませ。これ、お前が今名のつて出れば、科は島破りだ。荒繩で高手小手に縛り上げられ、忌はしい紙幟、裸馬にのせられて、拔身の槍で先を拂はせ、ここらあたりを引き廻される。その時人が何と言ひますぞ。あれ、あれ、見やれ。あれが元山町の伊豆屋の息子ぢや。あれが切られの與三とやらぢやと、言はれじまひが木の空で、大身の槍で突かるる苦しみ。お前はそれでもよいと思はつしやるか知らないが、それを見聞す

ろ御兩親のお嘆きは、どのやうにあらうと思はつしやりますぞ。なあもし、若旦那。この親爺が惡い事は申しませぬ。どうぞわしが言ふ事聞いて、名のつて出る事は見合せて下さりませ。（與三郎、默つてゐる）もし、若旦那。これ程までに、わしが事を分けて言ひますに、聞き分けては下さりませぬか。これ、默つてござるは不承知か。ええ、不承知なれば是非がない。いつその事に……

（と、手拭にて我が手に首を縊らうとする）

與三郎（慌てて止めて）これ、これ、滅相な、何をするのだ。

忠助　いや、いや、わしが詞を聞き入れぬなら、どうぞ放して殺して下され。死にたい。死にたい。

與三郎　ばかあ言へ。小さい時から世話になつたお主に、さういふ事をさして濟むものか。

忠助　止めさつしやるは、わしが言ふ事聞かつしやる氣か。

與三郎　さあ、それは。

忠助　聞き入れなくば、わしはやつぱり。

與三郎　これ、ばかな。

忠助　そんなら、言ふ事聞かつしやるか。

與三郎　さあ。

忠助　さあ、もし、若旦那、もう生先のない、この親爺わしを不憫と思はつしやるなら、どうぞ名のつて出る事は廢めて下され。

與三郎　成程、手前がそれ程までに言ふ事だ、廢めにするから、さう思へ。

忠助　そんなら、あの、聞き濟んで、思ひ止まつて下さりますか。

與三郎　それもお主に免じてだ。併し、かうなつちやあ、江戸の內にはゐられねえ。これから氣のつかねえ、遠い所へ巢を變へようよ。

忠助　おう、よく言つて下すつた。お前がさういふ氣にならつしやれば、わしに思はくがござります。ちと待たつしやりませ。（と、番小屋を出ようとする）

與三郎　どこへ行くのだ。

忠助　はて、お前樣に餞（はなむけ）をいたします。

與三郎　何を言ふのだ手前に餞を貰つてどうなるものだ

忠助　これ、これから遠方へござるお前ゆゑ、實は餞と申したは……（と、塀の內へ心を遣る）奧にござる親御達へ、一目なりとお前の姿を……

與三郎　ええ（と、立ちかける）

忠助（抑へて）もし。（と、與三郎に囁く）

（時の鐘。忠助、草履を出して、與三郎に穿かせ、手を引いて連れ立つ。忠助は割竹を持ち、與三郎は手拭をわざと不器用にかぶり、手に提灯を持つ。共に、夜

番の心。道具廻る。)

(第一場の舞臺。伊豆屋の表口。但し、潜り障子の外は、既に雨戸がおりてゐて、その上の覗き窓の小障子だけ、ぼんやり明かるく見えてゐる。)

(與三郎、忠助、時廻りの心にて、上手より出て來る。生酔、夜商人の戻りなど、無言にて四五人東西より行き違ふ。犬吠える。忠助、割竹でそれを追ふ。又、時の鐘。)

忠助 まだ旦那様はお休みなされは遊ばすまい。お前、一寸ここに、この割竹と提灯を預けます。番のつもりで、待つてござりませ。

與三郎 いや、いや、よすが好い。却つて、そりやあ悪からう。

忠助 はてまあ、ここに少しの内。わしが一寸奥の様子を見て參りまする。一寸待つて下さりませ。

(忠助、あくせくと勝手口の潜り戸の中にはひる。)

(下手より、夜蕎麥賣、風鈴のつきし荷をかたげ、呼びながら、出て來る。犬また吠える。與三郎、追ふ。)

與三郎 なんぼこんな身なりになつても、割竹で時廻りをしようとは氣がつかねえ。飛んだ目に會はしやあがるわえ。畜生。(と、犬を追ふ。)

蕎麥屋 饂飩蕎麥しつぽく。そばい。そばい。

與三郎 おい、おい。好い所へ來た。一ぺえ下つし。

蕎麥屋 はい、はい。何にしませう。

與三郎 なんでも好いわ。熱くしての。

蕎麥屋 にうめんもござりますよ。

與三郎 やつぱり蕎麥にしよう。

蕎麥屋 はい、はい。

(與三郎、緣先へ提灯を置き、腰をかける。蕎麥屋、揚笊へ蕎麥を入れ、湯を通したりなどする。)

與三郎 つゆが辛けりやあ、湯をまはして、甘え方が好いよ。

蕎麥屋 なに、鹽梅は吟味して上げます。(と、拵へて)へい。お上がりなされませ。

與三郎 (丼を手にして) こりやあ割箸で、凝つたものだの。(と、食ひながら、行燈を見て) 藤の紋どころで、岩附屋か。いつも見かける印だな。

蕎麥屋 この御近所はお馴染でござります。これから四つ辻へ、夜明けまで店を張ります。

與三郎 (食ひながら) こりやあ好い鹽梅だ。

蕎麥屋 どうござりますか。いやもう夜鷹蕎麥とは言ふものの、この頃は好い衆が召し上がるから、氣をつけにやあなりませぬ。その代り、元ばやりには困ります。

與三郎 何でもそれよ。

（この間に代りをする、蕎麥屋、又一つおとを拵へる。）

與三郎　（二杯目を食ひながら）おい、蕎麥屋さん。

蕎麥屋　湯を上げませうかね。

與三郎　何時だらうな。

蕎麥屋　今、九つを打ちました。（と、言ひながら、與三郎の裝を見て）お前様、夜番をしながら、時をお聞きなさるなあをかしいね。

與三郎　え。（と、驚いたが、直ぐ笑ひに紛らして）でも、蕎麥屋さんに時を聞くのは、お定まりの捨臺詞だ

蕎麥屋　はははは。ところで、ここの內では、いつもお爺さんが番に出なさるではございませんか。

與三郎　その爺さんが、おれに代りを頼んで、今用があつて、臺所まで行つたのだ。

蕎麥屋　それぢやあ、代りかね。この夜番も御苦勞様さね。併し、わたしの商賣は、お蔭で餘計賣れますよ

與三郎　おい。湯を下つし。

蕎麥屋　はい、はい。（と、湯を出す）

與三郎　それ、錢よ。

蕎麥屋　（井と錢と兩方をとり）これは有難うございます。また明晩お願ひ申します。

與三郎　早くしまひなせえ。

蕎麥屋　（荷を擔げて、上手へはひる）そばい。そばい。うどん蕎麥しつぽこ。

（風の音。捨鐘。與三郎、あたりを見廻し、內の様子など窺ふ。）

與三郎　長えなあ。あんな事を言つては行つたが、よも親父が會ひはしめえ。こんな事をしてゐたら、なまなか氣がおくれるばかりだ。（と、立ちかける）併しなあ、この門口もこれが見納めか。（と、ぢつと振向いて、家の様子を見る、やがて決心の色を面にあらはして）むむ。どれこの內に。（と、提灯と割竹を置いた儘、つかつかと行きかけ、提灯の明かりに氣がついて、また立ち戻り、提灯を消さうとする）

（忠助、小風呂敷、脚絆、三度笠など持つて出る。）

（與三郎、提灯を置いて、つかつかと駈け出す。）

忠助　（呼び止める）もし、もし、若旦那。まあ、待たつしやりませ。お前、もう直ぐに行く氣であらうが、その身なりでは、猶更人が目をつけます。これ、ここに股引脚絆もあり、風呂敷の中には合羽から着更まで入れてある。又これは親旦那が、いつぞや參宮なされたその折の三度笠、せめてはこれを片身と思つて、この軒下で支度して行かつしやりませ。

與三郎　成程。おれがこの裝ぢやあ、人目につくな。ありがてえ。そんなら、直ぐに支度をしよう。（と、旅支度

にかかる）

忠助　それから、お前がお出でのあらまし、親旦那様御老母様へ、お話を申し上げました。

與三郎　たとひ手前がどう言はうと、勘當受けたおれが體、會ふとは言ふめえ

忠助　さあ、お前が言はつしやる通り、以ての外な親旦那のお詞。あの不孝者めがうせをつたか。いや、そりや途方もない事ぢや。ここらあたりをまごついたら、この上どのやうな難儀をかけうも知れぬ。人の目褄にかからぬ内に、手前早く行つて叩き出せ。汝も汝ぢや。それをここへ來て、おれ達の耳へ聞かす事があるものか。門口踏ますも暖簾のけがれ。どこへなと勝手な所へ行けと、なぜ叱りつけて返しはせぬ。年がひもない愚鈍な奴と、思ひの外に叱られましたわいなう。

與三郎　それ見やあがれ。だから、おれが言はねえ事かえ。ええ、あつたら閑をかかせやあがつた。ざまを見ろえべらぼうめ。

忠助　（泣き聲を出して）　これ、情ない事言はつしやるなたとひ勘當しられても、育てて貰うた親御の家、その門端で、そんな憎さげな口の利きやう。若し、ひよつと……（と、覗き窓の障子を破り、誰か外を覗く様子。中の明かり動く。與三郎、氣がつかず）　若し、ひよつと、親御達がござつたら、僅の間にも、あのやうに人が悪くなるものかと思はれるだけ、お前不孝になりますぞや（と、内の方へ向ひ）　もし、御両親様、御免なされて下さりませ。ありやあ昔の腕白で、わやくを言ふのでござります。

（與三郎、思はず見返る。覗き窓、少し明き、人の影さす。與三郎、それを見て、驅け出さうとするのを、忠助留める。覗き窓、がらりと悉く明く。喜兵衛、涙に濡れた顔を出す。忠助、提灯の光を與三郎にさしつける。與三郎、うつむく。）

喜兵衛　これ、忠助。お主まだそこにゐるか。

忠助　はい。わたくしより旦那様。何と思うて、今頃外を御覧じますぞ。

喜兵衛　さあ。そりやあ、今犬めが表で大層吠えた故、目が覺めて、外の様子を見に來たのぢや。これ。内の門口であまり犬が吠えると、ここの家に何事かあるやうで、世間様の思はくも悪からう。一體、そちがあまり可愛がり過ぎるから、どうも犬めが甘えてならぬ。早く追つ拂つてしまふがよいぞ。

忠助　はい、はい。やかましう吠えた犬は追ひ退けましたが、たつた一つ跡へ殘りました、この子犬、唯一目よう御覧なさりませ。

（忠助、提灯の火を與三郎の顔へさしつける。與三郎、

思はず、顏を上げて、喜兵衞と顏を見合はし、寄りかゝれて、その方へ寄らうとするを、忠助隔てる。)
忠助　旦那樣。むごたらしいこの子犬……
喜兵衞　不憫な事とは思へども、又他の犬の目にかからば、その身の大事、早く追ひやつて下され。
忠助　(喜兵衞に)もし。せめて別れに唯一言。(と、與三郎を前に押しやる)
與三郎　親父樣か、
喜兵衞　おう、倅。(と、胴卷の儘、金を與三郎に投げ與へる)
(與三郎、それを拾つて、戴く。忠助、與三郎を下手へ突きやる。喜兵衞、障子を立てる。)
忠助　火の用心。火の用心。(と、割竹を鳴らす)

傾城淺間嶽（一幕）

人物

禿　文字野
駕舁七兵衛（巴之丞）
同　作兵衛（家老高島成家）
普賢院
腰元美代野
同　しがらみ
同　淸瀧
同　八木澤
局　松ヶ枝
晋羽姫

場所

京都附近

時代

元祿時代の人が樣式的に想像せる古代

舞臺一杯に所作臺を敷き、松の釣枝の後に淺葱幕を垂れる。淺葱幕の前に、淺間開帳の立札を二三本立てたる外、何等の舞臺裝飾なし。

在鄕歌で幕が明くと、下手から振袖姿の禿文字野、大きな風呂敷包をわいがけにして出る。直ぐ後から、駕舁七兵衛、駕をかたげて、追ひかけて出る。

七兵衛　おうい。おうい。駕貸しませう。駕貸しませう。

禿　（振向いて）そんなら貸してたもるか。

七兵衛　負けて遣りませう。淺間の開帳まで七分おやが合點か。

禿　よいとも、よいとも。我が身が言やるほど遣るわいの。

七兵衛　よいか、よいか。（つくづく見て）ああ、ほんにこなさんは可愛らしい子ぢやの。さあ乘らんせ、乘らんせ。

（文字野、駕へ乘る。七兵衛、後から駕を一人で舁がうとする。上がらない。）

禿　これ、これ。何としやるぞいのう。相手を呼んで早う遣つてたもいのう。

七兵衛　僅か七分を二人して取つて、合ふものぢやないわいの。どれ、肩かへて遣らう。

（今度は前へ廻つて擔がうとする。駕が傾いて上がらない。）

七兵衛　こりや。どうでも行かぬわいの。せうことがない。增しを下さるなら棒組を呼んで來ませう。

禿　そちの望み通り遣る程に、早う遣つて賜いのう。

七兵衛　心得ました。（下手に向つて呼ぶ）棒組來いやい。棒組やあい。

（「おうい」と返事がして、駕舁作兵衛、息杖を持つて出て來る。）

七兵衛　何ぢや。われか。われなら厭ぢや。

作兵衛　なぜに。

七兵衛　われとおれとは肩が合はぬ。他の者がゐるなら、おこせ、おこせ。

作兵衛　はて、遣つてくれ。どうして又肩が合はぬぞ。

七兵衛　われは丈が高し、おれは低い、それがどう肩が合ふものぞ。

作兵衛　それは舁ぎやうがある。登り坂の時は、われが先になつておれが後を擔ぐ。又下り坂の時は、おれが先肩をして、われが後を舁けば、それで好からうがの。

七兵衛　坂ではそれも好いが、平地はどうする。

作兵衛　その時は下駄を穿くわい。

七兵衛　はれ、やくたいな駕舁ぢやなあ。

作兵衛　兎角けふは閑ぢや。相借屋のよしみぢや。是非遣つてくれ、遣つてくれ。

七兵衛　そのやうに言ふなら。何とせう、遣つて遣らう。淺間まで七分ぢやが合點か。

作兵衛　なに、あの、淺間まで七分ぢや。こりやならぬ。（と、行きかける）

七兵衛　こりや、こりや、待て。われが去んで、おれ一人で駕が舁けるものかい。

作兵衛　たはけた奴ではあるわいの。こりや、よう合點せいよ。この深草から信濃の淺間までは凡そ百二三十里あるぞよ。それを七分でどう行かれるものかやい。

七兵衛　待て。われも鈍な奴ではあるわい。東山で淺間の開帳がある。その開帳場までの事ぢやわいやい。

作兵衛　むむ、開帳場までか。そんなら遣らう。（と、直ぐ舁かうとする）

七兵衛　待て、待て。話がついたら、先づ一服吸つて行かう。（と、懐から紙煙草入れを出し、火を打ち附ける）

作兵衛も煙草を出す）

作兵衛　ははあ、煙草がない。一服くりやれ。

七兵衛　おれも煙草はないわい。

作兵衛　ええ、吝い奴ではあるわいの。

禿　（駕の中から）煙草がほしいかや。そんなら、これを呑みやいのう。（と、煙草入を出す）

作兵衛　（戴いて）さても結構な煙草入の。むむ服部ぢやお前は小さいが、煙草を上がるか。しをらしいお子ぢや氣の盡きた時の一服は、喜見城の樂しみぢやてなあ。

七兵衛　（禿を見て）でも、仔細らしい奴ではあるわいの。
禿　いや、わしは呑まぬけれど、太夫樣へ吸ひつけて上げるに依つて、それで煙草入を持つてゐるわいの。
作兵衛　ははあ、伊勢茶ぢやな。太夫樣へ上げると言はつしやる。
七兵衛　（作兵衛に）やい、そこな奴。われと棒組をすれば、おれまでが恥をかく。西ぢやわいやい。
作兵衛　西とは。田の畔か。
七兵衛　ええ、たはけめ。島原のことぢやわい。
作兵衛　ははあ、島原の禿か。
禿　おう、わしや禿ぢやわいのう。したが、島原ではない。指いて見やいのう。
七兵衛　むむ、島原でない。そんなら何處であらうぞ。伏見か、大津か。
禿　いや、いや、そこらぢやない。淀、橋本を越えて來た。さあ何處ぢや。指いて見やいのう。
作兵衛　むむ、そんなら長崎丸山か。
禿　いや、いや。
七兵衛　奈良の木辻か。でもあるまいし。
禿　いいや。
作兵衛　そんなら、大阪の新町。
禿　でもないわいのう。
七兵衛　ええ、聞こえた堺の。
禿　おう、乳守ぢやわいのう。
作兵衛　よう一人で參らつしやるの。
禿　いや、太夫樣の心願の事があつて、淺間の開帳へ名代にわしが參るのぢや。早う遣つてたもいのう。
作兵衛　大方それも思ふ男と添ひたい願であらうが、廓の太夫といふ者は心中なものぢやのう。
七兵衛　ああ、その以前は、おれもそのやうに言はれたものぢやが、今では太夫はどうしたぞ。ああ可愛や、可愛や。
作兵衛　何を抜かすやら。
禿　これ、これ、駕舁。早う開帳へ參りたいわいのう。
七兵衛　駕舁と澤山さうに輕しめな、輕しめな。さらば、淺間へ參らうか。
作兵衛　さらば、錢を儲けうか。
（二人、立上がり、後向同士に駕を舁き上げる。）
七兵衛　こりやどうぢや。行かれぬわい。行かれぬわい。
作兵衛　おつと合點ぢや。
（と、今度は又、向ひ合せに擔ぐ。）
七。作　これはしたり、肩が違うた。
（と、始めて本當に擔ぎ、下手へ向ふ。）
作兵衛　おつと肩しよ。
七兵衛　肩しよ、肩しよ。

（と、交々肩を變へながら、音樂に合せ、足を高く上げて、一所を歩む。）

禿　（駕の內にて、投節を唄ふ）

籠の鳥かや恨めしや恨めしや。

七兵衞　何と聞いたか。面白いな。あれが曲輪の投節といふものぢや。聞いて置け、聞いて置け。ああ、その以前は太夫に三味線引かせて、その膝へもたれて、投節を聞いた事もあつたわい。この投節はもとおれが唄ひ出したものぢや。あの、今のもああではないわい。先づ投節をいふものはかうぢやて。

籠の鳥かやナア。さて恨めしや。ナハハンエ。

（と馬士節のやうに歌ふ）

作兵衞　はてつぱらめ。そりや何ぢや。馬士節ぢやぞよ。投節の根元根本まじりなしと言ふはおれが事ぢやて。親代々の投節屋ぢや。もとこちの祖父樣は投屋ぶし右衞門と言ふ。その名をかたどつて投節と名づけたものぢやて。唄うて聞かさうか。

籠の鳥かや恨めしや。（と稱名を唱へるやうに歌ふ）

七兵衞　どん、ぐわらり、チイン。

（と、淺間の住職普賢院、同宿二人を連れて、上手から出る。）

普賢院　こりや、こりや、駕舁ども。もと、その方達に談合がある。（二人、駕をおろす）先づその方達が名は何と言ふぞ。

作兵衞　はい、はい。わたくしは作兵衞と申しまして、ずんと利口者でござります。

七兵衞　へ、へ、へ、へ。わたくしは七兵衞と申しまして、發明な正直者でござります。

普賢院　然らば、その方達の內、一人召し抱へて遣はさう。

七・作　あの、わたくしどもをお抱へ下さるとは。

普賢院　別儀でない。この度東山に於いて、淺間の御本尊を開帳いたす。即ち、愚僧は普賢院と言うて、信州淺間の住僧。それにつき、人雇ひをいたす。五十日が間、給銀は五枚、小袖が一つと大小を渡す。それも儲け流しぢや。とつくりと談合の上、抱へて遣らう。

七兵衞　は、は、有難うござります。侍ならば、わたくしが參りませう。

作兵衞　いや、侍ならわたくしでござります。何と侍男でござりませうがな。

七兵衞　いや、わたくしでござります。

作兵衞　はて、おれぢやわい。

七兵衞　いや、おれぢやと言ふに。

普賢院　やい、やい、せり合ふな、せり合ふな。こりやか

うぢや。何でも一藝に達した者でなければならぬ。それ合點なら抱へるわいやい。

作兵衛　わたくし先づ能書でござります。内には手習子を取ります。けふは休みぢやに依つて、篤に出たのでござります。開帳の疏名でも書きます。又お使を勤める事が上手でござります。ひよつと信濃へ飛脚が立てたいなどといふ事もござりませう。

普賢院　そりや度々ある事ぢや。

作兵衛　さあ、その飛脚の遣りたい時に、たつた一日で往て戻る分別がござりますて。

同宿　これはけうとい一藝でござりますなあ。

普賢院　むむ、そりや又どうしたものぢや。

作兵衛　先づ信濃の淺間へ日歸りに致さうと存じますれば、淺間まで續く心太の突き出しを拵へますぢや。そこで、その突き出しの孔の端へ、信濃へやる狀をもたせかけて、東山からすぽんと突き出しますぢや。

普賢院　何をやくたいもない事を。

（七兵衛、走り寄り、作兵衛を引き退ける。）

七兵衛　こつちへすつ込んでをれ。われがやうな思案で何の抱へられるものぢや。あ、お住寺様、わたくしがはさやうな淺はかな事ぢやござりませぬ。いやもう自慢ではござりませぬが、この上の思案は恐らくあるまいかと存じます。

普賢院　そりや又どのやうな思案ぢや。

七兵衛　今度のお開帳につき、信濃からも澤山坊様がおいでなされたでござりませう。定めて月代をお剃りなさるるであらう。その時に、五十人でも、百人でも、並べ立てて置いて、づく達を一時に產毛もないやうに、又毛の生えぬやうにする鍛錬をいたしましてござりますがな。

普賢院　如何さま、これは手廻しな好い思案。それは又どうして、どうして。

七兵衛　先づ坊様方の頭の毛を美しう一本づつ拔きますぢや。そこで、その坊様達を、五人でも、百人でも、並べ立てて置いて、頭から煮え湯をかけます。

同宿　これは溜らぬ。（と、頭を抑へる）

七兵衛　萬一それでも生えまするその時は、げぢげぢを一匹宛あたまへ置いて廻るぢや。

普賢院　默れ、推參者。愚僧をたはけにするか。

七兵衛　そんなら、その思案は惡うござりまするか。

作兵衛　（又出て來て）やはり、わたくしの方が好うござりませう。

普賢院　いや、いや、もう一藝よしにしよう。人群集のことなれば、氣が短うてはならぬ。氣の長い、腹の立てぬものを抱へると致さうわいの。

七兵衞　氣の長いものなら、わたくしでござります。母の胎内をぎやつと出ませぬ先から、ついぞ腹を立てた事がござりませぬ。氣の長いものなら、わたくしに仰せつけられ下されませう。

普賢院　やい、ここな嘘つきめ。人間と生れて、小さい時から腹立てぬ者があらうか。汝が言ふは、皆嘘ぢや。こゝな嘘つきの、大かたりめが。

七兵衞　やい、芋掘坊主め。おのれが抱へねば抱へいで濟むことを、大がたりの、嘘つきのとは、ここな削り廻しめが、鼻柱をこれで見知らすぞよ。（と、握拳を振り上げる）

普賢院　それ、それ、その腹の立てやうでは、めつたに抱へられぬわい。

七兵衞　ても、ひどいところを爲損うた。（と、握拳をもじもじして引込める）

作兵衞　ああ、それでは行かぬ、行かぬ。眞實氣の長いと言ふはわしが事ぢや。御出家様。どのやうになされましても、腹立てるといふ事はござりませぬ。たとへ足で踏み蹂られても、少しも腹は立ちませぬ。いつそ、お前の足で踏み殺して下さりませ。（と、身をひれ伏す）

普賢院　ああ、おのれも合點の行かぬ奴ぢや。そりや、今踏むぞよ。

作兵衞　さあ、お踏みなされませ。

普賢院　なんと、これでも腹は立たぬか、腹は立たぬか。

作兵衞　ははあ、忝けない。如來菩薩の來迎かや。有難や、有難や。

普賢院　ふむ、これは誠に腹を立てぬ。あつぱれ、この上は、こりやその方を抱へて遣らうわいやい。

作兵衞　ええ、有難うござります。

普賢院　先づ當座の手附に小判一兩。殘りは其方が宿へ持つて渡さう。さやう心得い。（と、一兩の小判を渡す）

作兵衞　ははあ、忝けない、忝けない。七兵衞、これ見ろ。久しぶりで戴いた。おれがところに御逗留。えへん、えへん。（と、ひけらかす）

七兵衞　ほう、それが何ぢや。目腐れ金の一兩や二兩は入らぬ。忌々しい捨坊主めが。おれを抱へをらぬその代りに、ここは通さぬ。（と、息杖を横たへて、往來の邪魔をする）

作兵衞　やい、七兵衞、こちの旦那に粗相するな。

普賢院　こりや、こりや、作兵衞。奉公始めに、拂へ、拂へ。

作兵衞　畏りました

（と、音樂に合せて、息杖にてあしらふ。終に、七兵衞を抑へつける。）

作兵衞　さあ、お旦那、お通りなされませ。

普賢院　おう、あつぱれ、あつぱれ。そちも一所に。

作兵衞　さあ、お出でなされませ。（七兵衞に）こりや、われはいつまでも駕舁せいよ。おりや侍ぢや。は、は、は、侍ぢや。

（普賢院、同宿、作兵衞、皆上手へ入る。）

七兵衞　（その方を向いて）ほう、好い事ぢや。結構な事ぢや。そのやうな好い事の後は、碌な事はないものぢやわい。（と、禿に目をつけ）これは、これは肝心の乘手殿が寢てをらるる。これ、禿どの、禿どの。

禿　（目を覺まして）何ぢやいのう。

七兵衞　こな樣に頼みがあるわいの。

禿　何ぢやぞいのう。

七兵衞　ここから歩いて往て下んせぬか。

禿　歩きたけれど、足が痛いわいの。

七兵衞　これ、禿どの。足が痛くば開帳まで、おれが負うて遣らうが、それで堪忍して下されぬか。

禿　そりや、どうともぢやわいのう。

七兵衞　ほんに素直な子ではあるわいの。さあ、さあ。（と文字野を背負ふ）なんと、又から負うたところは、駕よりは氣が晴れて好からうがの。

禿　大ぶん好いわいのう。

七兵衞　どりや、發足いたさうか。（と、賑かなる囃子物にて、假花道へ掛かる）

（七兵衞、假花道より向う正面の歩みを經て、本花道へ掛かる間に、淺葱幕切つておとす。舞臺、簡素なる塗骨の障子屋臺。枝折戸。柴垣。菊の盛り。琴歌になる。）

七兵衞　これ、こちは幾つぢやぞ。

禿　十一ぢやわいのう。

七兵衞　はて、年よりませた子ぢや。追つつけ好い太夫になるであらう。その時は、わしが買ひに行くぞよ。

禿　なんの、わが身のやうなものに買はれうぞいの。

七兵衞　なんの、わしぢやとて、生れてから駕舁ぢやない。その以前は傾城買もした者ぢやわいの。

（その時、奥より、琴唄が聞えて來る。）

歌　　憎や憎しと思へばいとし
　　　我にひとしき人しなければ

禿　（聞き入りて）さても面白い歌ぢや。どうぞ覺えて太夫樣への土產にしたい。今の節が、ま一度聞きたいものぢやのう。

七兵衞　智者のほとりの童部は習はぬ經を讀むと言ふが、今の一節を聞いて、太夫樣の土產にしたいとは、ああ流石ぢやなあ。これ、これ、あの歌が聞きたくば、最前の

やうに投節を唄うたが好い。するとこれは面白いと言うて、又あちで唄ふところを、こちへ取るぢや。なんと好からうがの。(と、禿を下へおろす)

禿　これは好い思案ぢやわいのう。そんなら、唄はうわいのう。

七兵衛　さあ、唄うた、唄うた。

禿　(唄ふ)けふと暮らせし飛鳥の川の、のうさて幾夜なんなん馴染も替れば、かはる世の朝別れ。

(と、この時、奥より、局松ヶ枝に腰元美代野、しがらみ、二人ついて出る。)

美代野　(枝折戸を開いて)今の歌を唄やつたは、そちか。

七兵衛　(前へ出て)さやうでござります。

美代野　お局様、お姫様のお尋ねなされました歌は、あの者でござります。

局　むむ。やれ、やれ今の歌を唄やつた人か。ても、好い聲ぢやの。この屋敷のお姫様は、きつい小唄がお好きぢやによつて、今のをお聞きなされて、もつと聞きたいと仰しやる。さあ、内へはひつて、唄やいの。

七兵衛　これは、これは。御意にさへ叶ひませうなれば、歌はなんぼでも唄うてお聞かせ申しませう。

しがらみ　この通り申し上げたら、さぞお姫様にもお悦びであらう。さあ、さあ、こちへはひりやいのう。

(七兵衛、文字野をそつと後へ隠して入る。)

局　これ、そこな男、お姫様に歌をお聞かせ申す事は、冥加に叶うたことぢやと有難う思や。

七兵衛　はい、はい、有難うござります。したが、わたくしは日本開山と申す歌唄ひでござります。

美代野　して、そちの名は何と言ふぞ。

七兵衛　わたくしは親より三代の歌唄ひ、鶯啼右衛門と申します。

(と、この時、補襠姿の音羽姫、腰元清瀧、八木澤の二人を連れて出る。)

清瀧　もうし、お局様。最前の歌は、誰が唄ひましたえ。

局　その歌は、これなる男が唄ひましてござります。

姫　そんなら、最前の歌は、そちであつたか。はて、可愛らしい聲ぢやのう。

美代野　さあ、お姫様もお越し遊ばした。歌を唄やいのう

七兵衛　はい、はい、畏りました。したが、滅多には唄はれませぬ。わしが歌は上中下三段に唄ひ分けます秘密の歌でござりますれば、唯はなりませぬが、御合點かな。

局　はて、そりや合點ぢやわいの。

七兵衛　さらば、先づ初音を一寸お聞かせ申さうか。(と、色々に身構へをする)

局　ても面白さうな事ぢや。金が欲しくば何ぼうでも遣ら

う。早う唄やいの。

七兵衞　畏りました。表へ參りまして、蹬の下繕ひを致して參りませう。

（と、文字野を連れて、外へ出る。）

七兵衞　こりや、こりや、禿。今のところで、わしが後から歌を一つ唄うてくれ、頼んだぞ。

禿　わしや厭ぢやわいのう。

七兵衞　ええ、意地の惡い。こりや、わしが金を儲ける事ぢや。一生の頼みぢや。どうぢや。どうぢや。

禿　そちの爲になる事なら、どうなりとしようわいの。

七兵衞　忝けない。忝けない。

（腰元達、内より聲をかける。）

皆々　今の男、歌はどうぢや。歌はどうぢや。

七兵衞　はい、はい、只今それへ參ります。必ずこちら向くまいぞ。

皆々　合點ぢや、合點ぢや。

七兵衞　それへ參ります。（と、内へ入る）こちら向くまいぞ、向くまいぞ。テントンシヤン。それ。

（文字野、七兵衞の後にて、投節を唄ふ。）

禿　染めて口惜しき鷹紫や、本の白地がましぢやもの、白地がな、もとの本の白地が増しぢやもの。

（この間、七兵衞、首を振り、口を動かし、唄ふ眞似をする。腰元達、七兵衞の後の文字野を見つける局。姫に囁く。歌、終る。）

皆々　よう、よう、面白い事であつたわいの。

（この内、局そつと七兵衞の後へ廻り、文字野を抱いて來て、姫の後へ置く。七兵衞、氣づかず。）

七兵衞　なんと、けうといものでござりませうがな。

姫　さても面白い事ぢや。も一つ何ぞ唄うて聞かしやいのう。

七兵衞　いやもうお望みならば、何ぼでも唄うてお聞かせ申しませう。その代りに、お局樣、な、合點か。

局　合點ぢや、合點ぢや。

七兵衞　さあ、唄ひませう。短うても大事ない。どれ、唄ひませう。なあ。も一つ唄ひませうなあ。

（と、後へかけて言ふ。）

皆々　はて、唄やいのう。

七兵衞　はい、はい。テントンシヤン。（と、息杖を三味線にして唄ふ眞似をする。文字野の聲がしないので、咳拂ひをして）テントンシヤン。（と、度々同じ事をするが、一向に聲がしないので、思はず後を見る。と、文字野がゐないので狼狽する）

皆々　これ、我が身は何を尋ねるぞや。

七兵衞　いやさ、ここらに聲がござりましたが、そこらへ

は參じませぬかな。

姫　そちの尋ねる者は、これかや。

（と、後から文字野を出して見せる。）

七兵衞　はい、それでござります。こちへ來い、こちへ來い。（と、文字野を取返し、叉息杖を三味線にして）テントンシヤン。

禿　もう厭ぢやわいのう。

七兵衞　南無三寶。たくみの程が現れた。

局　やい、ここな嘘つきめ。おのれは唄ひもせずに、あの子に唄はせて、ようわたしらを欺したなあ。おのれがやうな奴は入らぬ。あちへ行きをれ。

七兵衞　（しよげて）はい。

姫　皆の者。何とあの子は好い子ぢやのう。近う呼びや。

局　これ、これ、あの子。お姫樣のお呼びなさるる。近うおじや。

禿　わしや、あんなところへ行くは厭ぢやわいのう。

七兵衞　はて、ちやつと行け。また親の言ふ事を聞かぬか。

禿　何をわが身、親ぢやないものを。

七兵衞　叉こいつめが。（腰元達に）いや、あのやうに申す筈がござります。わしがこのやうに見苦しうござりますによつて、どなたがお尋ねなさるるとも、親ぢやと言ふなと申しつけ置きました。それ故、あのやうに申します。（文字野に）こりや、こりや、七分はわれにはずむぞ。往てたも、往てたも。

禿　そなたの爲になる事なら、往て遣らうわいの。

七兵衞　忝けない、忝けない。それで好い、好い。喰物が出ようと儘よ、賤しう食ふまいぞ。菓子などは辭儀するも惡い。紙へ包んで、こちへぽいと。合點か。

禿　そんな事は呑み込んでゐるわいの。

皆々　早うその子を連れておぢやいの。

七兵衞　はい、はい、只今それへ參ります。

（と、文字野を前へ押す。局、文字野の手をとる。）

局　ほんに、可愛らしい子ぢやござりませぬか。

姫　生れつきの綺麗な、尋常な、可愛らしい子ぢや。局、慰みに菓子を遣りやいのう。

局　畏りました。（と、菓子盆を取り出し、文字野の前へ置く）

局　お姫樣から遣はされます。有難う思や。

七兵衞　（遠くから）紙に包んで、こちへぽいとはふつたり、はふつたり。

禿　おう、せはしな。（と、菓子を摑んで、抛る）

七兵衞　おつと、受けとつた。

姫　自らが氣に入つた。わしが手廻りで奉公しやらぬか。

七兵衞　いや、御奉公いたさせませう。

姫　そちはまあ何者ぢや。

七兵衛　はい、即ちこれにをります娘が親父めでござります。年は十年切りまして、銀三十匁下さりませ。四季のお仕着せも銀にして、今とつて歸りませう。

禿　（驚いて）でも、そなたは怖い人ぢやのう。親でもなうて、親ぢやと言うて、わしを賣らうとは、おう怖。わしや去ぬるぞや。（と、表へ出ようとする）

七兵衛　（禿の袖を提へて）こりや禿、奉公すれば、われも身の爲に好い事がある。奉公せい、よう娘。

禿　厭ぢや。駕舁の分で親とはなぜ言やる。駕舁の親は持たぬわいのう。

七兵衛　いや、ここな童めが。おのれが口から駕舁を親に持たぬと。禿がどれ程のものぢや。あの禿めが。

禿　あの駕舁めが。

七兵衛　いや、おのれは舐め過ぎた物の言ひやうをしをるがな、何ぼうそのやうに言うても、禿よりは駕舁が上でござる。

禿　駕舁より禿が好いわいのう。

七兵衛　そりや、どうして。

禿　禿は駕に乘ると、駕舁の肩に上るによつて、それで上ぢやわいの。

七兵衛　人を駕にのせて、錢をとるによつて、駕舁が上ぢや。

禿　禿が上ぢや。

七兵衛　駕舁が上ぢや。

禿　禿が上ぢや。

七兵衛　駕舁が上ぢや。

禿　べべべべえ。

七兵衛　べべべべえ。

二人　べべべべえ。

七兵衛　（いきなり文字野の手をとる）御前樣めぢや。失せい。（と、姫の前へ連れて出る）はい、申し上げます。難いつは禿でござります。わたくしは駕舁でござります。わたくしは駕舁が上ぢやと申します。こいつは禿が上ぢやと申します。きつと御吟味を下されませうなれば、有こうござります。

姫　（局に）あの者は親ぢやと思うたれば、駕舁ぢやさうな。さもしい、あちへ去なしやいのう。

局　畏りました。（七兵衛）やいそこな駕舁。其方に用はない。あたむさい裝をして。あちへ失せぬか。あちへ行け、あちへ行け。

七兵衛　南無三、また爲損うた。（と片隅へ踞る）

美代野　さては、この子は曲輪の禿とやらか。名は何と言ふぞ。

禿　あい。文字野と申しやんす。
しがらみ　むむ、道理で利口なところがあると思うた。さうして所はどこぢや。
禿　乳守でござんす。
しがらみ　乳守とは
七兵衛　（首を延ばして）堺でござります。
局　又さし出をるか。すつこんでをらう。
七兵衛　へえい。（と、又片隅にゐる）
美代野　（文字野に）そちは何といふ者に使はるるぞ。
禿　太夫様に使はれやんす。
しがらみ　名は何と言ふぞ。
七兵衛　傾城のこと。
局　（七兵衛に）またばかを言ふ。
禿　太夫様の名は言ふなと言はしやんしたによつて、言ふことはならぬわいな。
姫　（腰元達に）これ、隱すことなら、聞かいでも好いわいのう。
禿　お前方もちと曲輪へ見物にござんせいなあ。
姫　いや、自らは傾城は見たうないが、大盡とやら、買手とやらの風俗が見たいわいのう。
七兵衛　（息杖を腰にさし、肘を張つて、大盡の身振をする）買手、買手。ああ、太夫は何としたぞ。可愛や、可愛や。
皆々　（文字野に）買手はあのやうな者かや。
禿　歩きやうは似てゐやんすが、あのやうな汚いものを著てはゐませぬわいのう。
姫　あれでも以前は傾城買うたものであらうわいのう。
局　さやうでござりませう。餘り買ひ過ごしての駕舁でがなござりませう。
七兵衛　（空嘯いて）ああ、さやう、さやう。木幡の里に馬は二疋あつたれども、君を思へば、てんと跣足で通うた。雨の降るにも、風の吹くにも、厭はずに通うたが、ああ、昔になつたなあ。（と泣き聲を出す）
皆々　あれ、買手が泣くわいの。
七兵衛　買手おやと言うて泣かぬものか、君故にこがれこがれて鳴く蟲よりも、鳴かぬ買手の身ぞ焦すらんといふ歌もあるわいの。
姫　（七兵衛に）これ、これ。これを著て、買手の風俗をして見やいの。（と、自分の裲襠を脱ぐ）
七兵衛　ははあ、買手が振袖著るは、開闢以來なことぢや。買手の著物といふは、薄綿にして、袖口なども芥子括りは厭らしい。柔に、大間に括り、伽羅の薫がなければ傾城買はぬわいの。
禿　（風呂敷包を解く）買手の著る物をわしが持つてゐる

貸して遣らう。（と、衣裳を取出す）これを著て、早うしやいのう。

七兵衛　買手は著る物を手にとつて著るものぢやない。著せよ、著せよ。

局　はて、横柄なものぢやのう。

七兵衛　著物、著物。

（と、腰元達、側へ寄つて、著物を著せ、帯を結んでやる。）

七兵衛　脇差、脇差。

局　おうおう。

七兵衛　おうおうとはどうぢやいやい。あいあいと言へやい。

局　あいあい。（と、脇差を渡す）

七兵衛　さうぢや、さうぢや。扇、扇。

局　あいあい。（と、扇を渡す）

七兵衛　金の入れてある巾著、巾著。

腰元達　あい、あい。

七兵衛　言はずとも、鼻紙。

腰元達　あいあい。

七兵衛　ところで、この頭巾をとつたところが大盡ぢやて。

（と、頭巾をとる。）

腰元達　さても、好い男ぢや。

（七兵衛、手を叩く。）

禿　あいいい。

七兵衛　煙草盆、煙草盆。

禿　あいいい。

七兵衛　これは禿が一人で少い。（局に）こりや、お前も禿になれ。

局　わしや厭ぢや。

七兵衛　こいつが。大盡の言ふ事を厭とは。

姫　（笑つて、局に）これ、そちも禿になりやいのう。

局　畏りましてござります。

七兵衛　（局に）そちも禿になるか。

局　おう、なる。

七兵衛　これ、あれが言ふやうに返事をいよ。（と、手を叩く）

局　どう言ふのぢやぞいの。

（七兵衛、又手を叩く）

禿　あいいい。

七兵衛　あのやうに言ふのぢやわいの。言うて見や。（と、手を叩く。）

局　あ、い、い、い。（と、噛み切るやうに言ふ）

七兵衛　さうぢやない。細う長う言へやい。

局　あいいい。（と言ひて、咽喉をさする）

七兵衛　あゝ、われは役に立たぬ。もう置け、置け。とてもの事に金が七十三匁ほしい。
禿　また傾城を買やるかや。
七兵衛　いや、米を買ふ。
皆々　何を言やるぞいのう。
七兵衛（自分の著てゐる衣裳を見て）ほう、この著物は大分綿の加減も好い。幸なものがあつたなあ。（と言ひながら、思はず紋に目をつけて、驚く）や、こりや我が紋。（いきなり文字野の手をとつて）禿來い。（と、表へ連れて出る）
七兵衛　これ、わが附いてゐる太夫の名は何と言ふぞ。
禿　太夫樣の名は言ふなと言はんしたによつて、言ふことはならぬわいの。
七兵衛　そんなら、太夫が名を指いて見せう。奧州とは言はぬかや。
禿　よう知つてゐやるのう。奧州樣に附いてゐる禿ぢやわいのう。
七兵衛　嘘を言ふ。奧州が禿は式部と言ふわい。
禿　その式部樣は去年の御影供から勤めに出やしやんして、今では八重桐樣といふ太夫樣ぢやわいの。それで、わしが奧州樣に附いてゐやんす。
七兵衛　さてはさうか。この小袖は太夫とおれが別れる時、形見にやつた小袖ぢやわいやい。
禿（つくづくと七兵衛を見て）さては太夫樣の戀しいと言はしやんす巴之丞樣かえ。
七兵衛　おいやい。
禿　お前に會ひたいとの願ひに、この小袖羽織を、淺間の開帳へ納めに行くのぢやわいなあ。
巴之丞　そんなら、太夫はまだおれを思うてゐるか。可愛や、可愛や。
（この內、姬、局、腰元達、立ち聞きしてゐる。）
姬　や、そんなら、お前が巴之丞樣か。お懷しうござりまするわいなあ。（と、取り縋る）
巴之丞　巴之丞と聞いて懷しいとおつしやるこなたは。
姬　お前と言ひなづけの菅羽の前でござりますわいなあ。
巴之丞　さては、ここは諏訪殿の屋敷か。こりやならぬ。（と、振切つて逃げようとする）
皆々　もうし、巴之丞樣、まあお待ちなされませいなあ。
（一同、追ひかけて、引留める。）
姬　今お目にかかつたばかりで、直ぐに去なうとは、お胴慾でござります。女の心は御存じござんすまいが、思ひ忘るる間はござりませぬ。もうし殿樣、そりや聞えませぬ。聞えませぬわいなあ。（と、取り附いて泣く）
巴之丞　おう道理、道理。そなたと言ひなづけある上に、

傾城に迷うた故、親の勘當を受け、この姿となつた。今更そちに何と對面がならう。人々の手前も面目ござらぬわいのう。

局　そりや苦しうござりませぬ。あなたのお行方の知れるやうにと、お姫樣のお願ひにてのここのお住居、今不思議にお逢ひなされましたも、淺間の御利生でござります。

美代野　たとへ傾城狂ひを遊ばしても、何の大事ござりませう。いつまでも、このお屋敷にお留め申して、なあ皆樣。

皆々　それ、それ、お姫樣と御祝言を。

巴之丞　かくまで零落した巴之丞を、然程に思ひ、夫婦にならるる姫が心底か。

姫　勿體ない。二世かけて夫婦ぢやもの。

巴之丞　ええ、忝けない志。

（と、二人手を取合ふ。途端に、文字野、苦しみ悶える。）

禿　のう、悲しやのう。

皆々（驚いて）何としやつた、何としやつた。（と、介抱する）

禿　この頸にかけた守をはづして下さんせ。熱うてどうもならぬわいなあ。

巴之丞　なに、守とは。

（と、禿の頸から、それを外す。文字野の苦悶やむ）

巴之丞　はて不思議。（と、守を開き見る）こりや起請ぢや。さては奥州の執心ぢやな。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。（と、傍の火鉢の中へ投げ入れる）

（どろどろにて、一同、氣を失ひ倒れる。作兵衞、家老の拵へにて駈けつけ、この態を見て驚き、一人一人活を入れる。）

巴之丞（心づきて）や、そちは作兵衞ぢやな。

作兵衞（ひれ伏して）段々との御不禮。お詫びはゆるゆる。誠は當諏訪の家老高島和田五郎成家でござりまする。若しやそれかと、駕舁に身をやつしての心遣ひ。お役に立つて、何よりの喜び。殿樣お姫樣、お目出たうござります。

姫　それにしても、哀れなは奥州が執心。皆の者、今宵は夜と共に佛間で回向を。

巴之丞　おう殊勝なる志。それがしとても、この世の迷ひを晴らさん爲、共々回向をなすべきぞ。

局　わたくしどもも共々に、お經を讀誦いたしませう。

姫　さあ、皆の者。

皆々　いざ、巴之丞樣。

巴之丞　文字野も來い。（と、禿の手を引く。文字野、呆

れてゐる）

婚禮の音樂（木おびせのシャギリなど）に寺院樂（鐃鉢、木魚などの混合）をかぶせて

——幕——

支那の戈登

——三つの挿話から成る戯曲——

人物

英國工兵少佐チヤアルズ・ゴオヅン } 常勝軍
スタツク大尉
ヲオド中尉

慕　王 } 髪賊
納　王
他の二王
四人の天將
納王の伯父
納王の息

李鴻章（登場せず） } 官軍
程學啓
ペエリイ砲兵少佐
米人バアジエヰン

その他

時代

西暦一八六三年

場所

南清

第一幕

西暦一八六三年六月。

南支那江蘇省崑山。

英吉利の工兵少佐チヤアルズ・ゴオヅンの率ゐる常勝軍（Ever Victorious Army）の陣營の一部。

暗色のセル地の洋服に綠帽を戴き、英國製の滑口銃を手にせる常勝軍の兵卒下士二三十名（總て支那人）口口に罵り騒ぐ——幕あく。

——おれは厭だ。

——おれも厭だ。

——厭だ。厭だ。

——休ませなきやあ、もう戰はやめだ。

——一度勝つたら一度休むのが支那の軍律だ。あいつはそれを知らないのだ。

——常熟（チヤンシユウ）を落した時も休んだのだ。太倉（タイツァン）で勝つた時も休養したのだ。それだのに、今度に限つて休まぬといふ法はない。

――今度の戰ぐらゐ骨の折れた戰はない。乘ハイスン號へつて運河を行つた連中などは隨分やられたらしい。

――何しろ、あの晴夜だ。急を聞いて飛び出して來た蘇州の賊にいきなりぶつかつた連中などは、敵も味方も分からなかつたといふ話だ。

――おれもその中にゐた。よく命があつたと思つてゐる。

――實際みんなよく戰つた。だから、一萬五千にも餘る敵を破つて、この崑山を占領することが出來たのだ。

――いくらゴオヅンの軍略がうまくても、吾々が奮戰しなければ、崑山は落ちなかつたのだ。

――この功績は吾々のものだ。

――それだのに、ゴオヅンは吾々に酬いることを知らないのだ。

――この儘、この崑山を根據地にして、もう松江の本營へは歸らないと言ふのだ。

――酒もなければ女もない。こんな田舍で何が出來るものか。

――おれはどうしても三週間休ませて貰ふ。

――おれはどうしても松江へ歸らして貰ふ。

――それでなけりやあ、もう兵隊は御免だ。

――給料だつて食料だつて滿足にくれやしないのだ。戰へ出るのは分捕だけが目當だ。その分捕もしちやあいかんと言ふ。あんな分からん奴はない。これ見ろ。

――おれは構はず分捕つた。これ見ろ。

――實はおれだつてやつた。これ見ろ。

――おれだつてやつた。

――いくら分捕物をしたつて、休みがなけりやあなんにもなりあしない。

――さうだ。寶の持ち腐れだ。

――休みがなけりやあ、もう戰は厭だ。

――厭だ、厭だ。

――厭だ、厭だ。

（喇叭、鳴る。）

――なんだ。集まれか。厭だ、厭だ。

――誰が行くものか。（軍帽を脫ぎ捨てる）

――厭なこつた。（銃を投げ棄てる）

（喇叭、又鳴る。）

（一同、ふてくされて、胡座をかいたり、寢そべつたりする。）

（ゴオヅン少佐、幕僚を連れて出て來る。少佐は一切武器を帶びず、唯双眼鏡を首にかけ、竹鞭を手にしてゐるだけである。兵卒二名、從ふ。）

少佐　（穩に）　諸君はなぜ隊伍につかんのです。

（一同、默つてゐる。）

少佐　喇叭が聞えないのですか。

（一同、尚默つてゐる。）

少佐　何か不平があるのですか。

――（突然）休ませて下さい。

――休養させて下さい。

少佐　勿論、休養させます。この次ぎは蘇州（スウチョウ）の總攻撃で、これは容易ならん戰です。蘇州を落すには、先づ嘉湖（カコウ）や吳江（ウオコン）を落して、これを孤立させなければなりません。それには十分兵を練る必要があります。

――そんなら、松江へ返して下さい。

少佐　なぜですか。折角、こんな好い場所を占領したのに、それを捨てろと言ふのですか。この崑山は根據地として實に適當な所です。水路が自由で、蘇州へも、太倉へも常熟へも、松江へも直ぐに船で行けます……

――そんなことは、あなたに聞かないでも知つてゐます。

少佐　では、なぜ松江へ歸りたいなどと言ふのです。

――こんな田舍は厭です。

――酒も女もありません。

――松江へ返してくれなければ、もう戰はやめです。

少佐　（呆れたやうに暫く默つてゐる。やがて）いつでも諸君の言ふことはおんなじだ……常熟の時でも、太倉の時でも、戰が濟むと、きつと諸君はそれを要求した。私も出來るだけ、その要求に應じて來たが、今度はもういかん。今この地點を離れるといふことは、戰略上どうしても出來ん。

――そんなら隊伍につかんばかりだ。

――もう戰はやめだ、やめだ。

少佐　まあ、待ち給へ……一體、諸君は何の爲に戰つてゐるのだ。國の爲だ。國の平和の爲だ。さうぢやないか。それ以外になんにも目的はない筈だ……私は外國人だ。外國人でありながら、支那の政府に雇はれて、支那の內亂を鎭定しようとしてゐるのだ。一寸見ると、私はしないでも好いことをしてゐるやうだ。だが、私はさう思はん。私はこれを上帝の命令だと思つてしてゐる。人間として、しなければならんことをしてゐるのだと信じてゐる。

――又お說教か。

――もう澤山だ、澤山だ。

――松江へ返してくれりや文句はねえんだ。

少佐　一體、常勝軍なるものは、上海に居留してゐる歐米人が髮賊の襲來を防がうとして組織したのが始まりだ。だが、今ではもう性質が變つて來てゐる。今日の常勝軍は、單に居留民保護の爲にのみあるのではない。即ち、吾々の同胞の利益の爲のみに存在するのではない。髮賊を支那の平和に害あるものと認めて、淸國政府の爲に、

清の官軍と協力して戰つてゐるのが現在の常勝軍だ。

――分かつてる、分かつてる。

――もう澤山だ、澤山だ。

少佐　私は英吉利の爲に戰つてゐるのではない。英吉利政府の爲に戰つてゐるのでもない。英吉利人の多くは、寧ろ私の行動を怪しんでゐるのだ。非難してゐるのだ。現に、私の父などは信仰の厚い基督教徒であるから、苟も基督教を信奉する髮賊を討つのは神に對する冒瀆だと言つて來てゐる位だ。本國にゐるものばかりではない。現在清國に在留してゐるものでも、髮賊は支那を開明に導くものだ、髮賊は目覺めたる支那だ。その目覺めたる支那を討伐するのは、文明に刄向ふものだと言つて、私を攻擊するものがある。併し、私は堅く信じてゐる。この戰は正義の戰であるといふことを。

――もう好い、もう好い。

――早く松江へ返してくれ。

――休養だ、休養だ。

少佐　成程、髮賊は基督教を信じてゐる。併し、その基督教は自分達に都合の好いやうに作り直した基督教だ。決して正當な基督教ではない。若し彼等が眞に愛の神を信ずるものであつたら、この十二年間に行つたやうな殘虐は敢てしなかつたであらう。若し、彼等に眞に國家を改革する誠意があつたら、行く所として必ず民政が敷かれてゐなければならん。然るに、彼等は唯攻めては取り攻めては取りするだけで、何處に一箇所も民政を敷いた跡がない。彼等は唯奪掠するだけだ。殺戮するだけだ。首領洪秀全の如きは既に三十人の妻を持ち、百人の妾を擁して、日夜美食美酒に飽いてゐるといふではないか。私はかかる人物を基督教徒として遇することは出來ない。かかる人物を國家の先覺者として敬ふことは出來ない。洪は詐僞師だ。山師だ。私はかかる山師が長い間支那帝國の平和を攪してゐるのを默つて視てゐることが出來なかつた。私はそれ故立つた。私の立つたのは、英吉利の勢力を布く爲ではない。奪掠が目的でもない、單に殺戮を喜ぶが爲でもない。支那の動亂は世界の動亂だ。支那の開發は世界の開發だ。私は世界の平和の爲に、人類全體の愛の爲に、自分の國籍を忘れて、この戰に從つてゐるのだ。御覽の通り、私は身に寸鐵を帶びてゐない。いつも携へてゐるのは、指揮棒としてのこの竹の鞭ばかりだ。私は殺す爲に戰ふのではない。奪ふ爲に戰ふのではない。然るに、諸君は稍ともすれば……

（舞臺背後に騷擾の聲起る。）

（砲兵中尉チォド、走りて登場。）

少佐　どうした。

中尉　いくら命令を下しても、誰も隊伍につくものがありません。

（舞臺にゐる兵卒等笑ひ嘲ける。）

少佐　砲兵はどうだ。

中尉　砲兵が最も頑強です。これを御覽下さい。（ポケットから檄文やうのものを出す）

少佐　（檄文を手にする）うむ。どうしても松江へ引き上げなければ、英吉利の士官を大砲で打つと言ふのだな。檄文の起草者は分かつてゐるか。

中尉　分かりません。

少佐　（しづかに）わしには大抵分かつとる。砲兵の下士官を全部ここへ連れて來い。

（チオド中尉、去る。）

少佐　（舞臺にゐる兵卒達に）諸君、事態は實に容易ならんことになつた。私は言ふだけは言ふ。說くだけは說く。だが、それでも分からん奴は……どうするか。そこで見てゐるが好い。

（チオド中尉、砲兵下士官（いづれも支那人）二十餘名を連れて出て、少佐の前に整列させる。）

少佐　（いきなり檄文をひろげて見せる）これを書いたのは誰だ。

（誰も返事をしない。）

少佐　この檄文を書いたのは誰だ。

（一人が「知りません。」と言ふ。他の一人が「知りません。」と言ふ。やがて、口々に總ての下士官が「知りません。」と言ふ。）

少佐　よし。誰も知らんのだな。

（「知りません。」「知りません。」と口々に言ふ。）

少佐　よし。（自分の側にゐる二人の步兵を前に出して銃を構へさせる。）それでは、お前達の內、五人每に一人を銃殺するから、そのつもりでをれ。

（下士官等、恐れ叫ぶ。）

（少佐、その內最も烈しく叫ぶ一人を引きずり出して二人の步兵に「打て。」と命ずる。銃を構へてゐた二人これを射殺する。）

少佐　（チドオ中尉に）あとの者は悉く禁錮する。一時間內に檄文起草者の名を告げなければ、愈五人每に一人を銃殺する。

（下士官等、泣き叫ぶ。その內、一人が少佐の前へ驅けて出る。）

下士の一人　申し上げます。申し上げますから、どうかお許し下さい。閣下。

少佐　言へ。

下士の一人　檄文の起草者は楊（ヤン）です。わたし達は何も知ら

ないのです。
少佐　楊とはどの男だ。
下士の一人（銃殺された下士を指さす）あれです。あの男です。
（少佐、中尉と顔を見合せて、寂しく笑ふ。）
（スタック大尉、登場。）
大尉　總兵閣下。
少佐　なんだ。
大尉　兵がどんどん脫走します。
（さつき舞臺にゐた歩兵達も、もう一人も殘つてゐない。砲兵の下士官達も、一人逃げ二人逃げして、だんだん數が少くなる。）
少佐　（額を暗くして）もうどの位逃げた。
大尉　千人は逃げましたらう。夜分になつたら、もつと逃げませう。
少佐　髮賊の捕虜はどの位をる。
大尉　三千人はをりませう。
少佐　好い兵士がをるか。
大尉　苦戰を續けて來ただけに、吾々の兵よりはしつかりしてゐるやうです。
少佐　よし。それでは、それを使はう。
大尉　賊をお使ひになるのですか。
少佐　きのふの敵が、けふの味方だ――これが支那だ。（寂しく笑ふ）
（遠くに喇叭の音。）
中尉　この死骸はどうしませう。
少佐　軍律の犧牲だ。だが、その犧牲も今では何の役にも立たなくなつた。氣の毒な男だ。叮嚀に葬つてやれ。
（中尉、二人の步兵に銃殺された下士の死骸を運ばせる。）
（少佐、鞭を上げて敬禮する。）
（日が暮れる。）
（支那兵はもう一人もゐない。）
（遂に喇叭の音。）

第二幕

第一場

西曆一八六三年十月。
蘇州寶帶橋附近。
相對せる民家の壁に凭りて、髮賊軍の亞米利加人三名と常勝軍の英吉利士官四名とが、パイプを燻しながら暢氣に話してゐる。
太湖が仄見えて、水鳥が何處かで鳴いてゐる。

英士官A　……ぢやあ、もう降參ときめたか。

米人B　きめた。第一もう城中には食糧がない。流石のバアジエキンも、あんまり豫想を裏切られたんで、もう降伏と覺悟をきめたらしい。

米人A　きのふその事で、ゴオヅンに會つた筈だ。

米人B　けふ第二囘の會見がある筈だ。

英士官B　ほう、さうか。ちつとも知らなかつた。内の大將はなんにも言はんからな。

米人A　なんと言つてもゴオヅンは豪いよ。バアジエキンも強いには強いが、野心があつていかん。それに輕卒だ。

英士官A　でも、内の大將はなかなか買つとるぞ。バアジエキンが髮賊の味方になつたら、少くともこの戰爭は豫定より一年は長引くだらうと言つてゐた。

英士官B　なんでもあいつの親父はナポレオン部下の將校だつたと言ふぢやないか。

英士官　學問もなかなかあるさうだが、唯非常な野心家で、この渾沌の支那で何かどえらいことをしようと思つてゐるらしい。

米人C　ヲオドが死んでから、常勝軍の指揮を引受けた當時は得意だつたが、その地位をゴオヅンに取られたのでひどく癪に障つたんだな。それから、北京へ行つて李鴻章にさんざんゴオヅンの惡口を言つたのだが、李は問題にしなかつた。そこで、吾々三百人を引率して髮賊に投じたのだ。

英士官A　そいつが今になつて、内の大將に款を通ずるといふのは訝しいな。それも何かの陰謀ぢやないか。

米人C　なんとも言へんな。おれ達も言はば欺されて來たんだからな。

米人A　兎に角、おれは早く城が脫走したいよ。ゴオヅンはきつと助けてくれるに違ひないから。

英士官B　それは助けるとも。内の大將は降參して來たものの命は取らないといふのが主義なのだから。

米人B　そこへ行くと官軍の程(チン)はひどいな。

英士官A　あいつは亂暴だ。降伏して來たものでもなんでも殺してしまふのだからな。

英士官A　内の大將も幾度それで怒つたか分からない。崑山の時なども下士や兵卒は反抗する。政府は約束の給料を渡さない。程(チン)は言ふことを聞かないといふわけで、内の大將すつかり怒つてしまつてな。辭職するつもりで、單騎で上海まで歸つて行つたんだ。ところが、著くと直ぐと聞いたのが、バアジエキン反逆の一件だ。これは一身の不快を顧みる時でないといふので、直ぐ又引返して來た。それから、この寶帶橋の占領となつたわけだ。

米人A　そこがゴオヅンの豪いところだよ。ふだんはおと

なしいが、怒るとなると思ひ切り怒る。併し、いくら怒つても、私情の爲に公事を犧牲にするやうなことはしない。そこがゴオツンの豪いところだ。

英士官B　おい、おい。髮賊の士官が常勝軍の大將をさう讃めてはいかんな。

米人A　構ふものか。もうおれは髮賊軍で働く氣はしないよ。

英士官A　實際、かうやつて敵味方が仲よく話をしてゐるところは、ちよいと歐羅巴では見られない圖だな。

米人B　おれ達もよつ程支那化して來たらしいな。

英士官C　考へて見ると、をかしな話だ。支那の內亂で、支那人同志が戰つてゐるのは當り前だとして、一方には吾々英吉利人がついてゐて、一方には君達亞米利加人がついてゐる。支那の國內戰爭で亞米利加人と英吉利人が戰つてゐるのだ。

米人A　全くだ。かうなると、戰爭なんて、なんの爲にあるのか分からなくなるな。

英士官B　どこに戰爭があつて、どことどこが戰爭をやつてゐるのだか、まるで分かりやしない。

（一同笑ふ。）

（遠くで喇叭が鳴る。）

英士官A　おつ。午飯だ。おやあ、失敬するぞ。

英士官B　なるたけ早くやつて來いよ。

米人A　この儘そつちへ行きたい位だ。

米人B　第一、おれの方は飯の合圖もありやしない。

米人C　また兵站部と一喧嘩か。

（一同、笑ひながら、左右へ別れる。）

第二場

同じ時。

同じ場所。

ゴオツン少佐の陣營內（民家）。

米人バアジエキンとゴオツン少佐とが唯二人で對座してゐる。

バアジエキン　では、一昨日お願ひしたことは確なのですね。

ゴオツン　一旦私が引受けた以上は間違ひはありません。あなた方は髮軍に投じたことを悔いてをられるのです。悔いてゐる者を罰することは出來ません。私は降伏して來る者の命はとりません。それどころではない。希望に依つては、あなた方の一部を常勝軍の士官に取立てます、あとは無事に國外へ出られるやうに取計ひます。

バアジエキン　私のしたことは確に輕擧でした。だが、今更そんなことを言つても爲方がない。今はあなたの寛大

な度量に縋るより外に道はないのです。
ゴオヅン　私が寛大なのではない。神が寛大なのです。
（間。）
バアジエキン　ところで、けふ上がつたのは、その時期の問題ですがな。
ゴオヅン　いつにします。
バアジエキン　今夜にしようかと思ひます。
ゴオヅン　どういふ風にやります。
バアジエキン　突撃と見せて、城を脱走します。
ゴオヅン　宜しい。いづれ髮賊がバックして來るでせうから、そいつらだけ大砲で追拂つて、あなた方だけこちらへ收容するやうにしませう。
バアジエキン　どうかさう願ひます。（一寸考へて）ところで、今後の方針ですがな。
ゴオヅン　今後の方針と言ふと。
バアジエキン　私があなたと一緒になつてからのことです。
ゴオヅン　蘇州を落して、南京まで攻め登るだけのことではないのですか。
バアジエキン　そこです。よし髮賊を絶滅したところで、今の支那がどうにもなるものではありません。滿淸政府は既に大國支那を支へる力を持つてゐないのです。

ゴオヅン　では、どうしようと言ふのですか。
バアジエキン　先づあなたと私で蘇州の城を奪ふのです。それから、そこを根據にして、官軍をも髮賊をも討ち破るのです。それから二萬位の軍隊を組織して、北京へ攻め登るのです。さうして滿淸朝廷を覆して新帝國を建設するのです。そして、私が皇帝になつて、あなたが副皇帝に……
ゴオヅン　（突然）ばか。（ベルを鳴らす）
（チオド中尉が現れる。）
ゴオヅン　バアジエキン君を直ぐ城内へお送り申せ。
バアジエキン　だが、ゴオヅン君……
ゴオヅン　もう何も聞くことはない。直ぐお歸りなさい。
（バアジエキン、氣を呑まれて、チオド中尉と一緒に出て行く。）
大尉　總兵閣下。
（スタック大尉、登場。）
少佐　うむ。
大尉　バアジエキンが何か不禮なことでも申しましたか。
少佐　あいつはばかだ。ばか者だ。
大尉　降伏の一件はどうなりました。
少佐　それはもうきのふきめたことだ。
大尉　何か新しい條件でも持つて參つたのですか。

少佐　あいつはばかだ。ばか者だ。ああいふごろつきが横行してるから、支那はいつまで立つても救はれないのだ。

大尉　では、お赦しにはなりませんか。

少佐　いや、約束は約束だ……今夜、突撃と見せて、駈け込んで來る筈になつてゐるから、その手配をしてくれ。ハイスン號から一齊射撃をして、バックをして來る髮賊を追拂ふのだ。亞米利加人が先頭に立つて來る筈だから、洩れなく收容するやうにしてくれ。

大尉　承知しました。

（大尉、去る。）

少佐　（激しく）ばか……ばか……ばか……

第三幕

第一場

西暦一八六三年十二月。

蘇州城内。

夜。

髮賊慕王（モオワン）、納王（ナアワン）、他の二王、四人の天將、いづれも袍をつけ、冠を戴き、卓を圍んで、默禱に耽りゐる。

默禱終る。

慕王　（首席につきゐる）では、これから軍議にかからう。だが、豫め言つて置くが、わしは飽くまでもこの城は棄てん。命を賭しても降伏はせんから、そのつもりでゐて貰ひたい。

納王　だが、事態ここに至つては、降伏をするより外に道はないと思ふ。李の大軍、程の大軍、ゴオヅンの常勝軍に依つて、この城は既に三方から包圍されてゐる。石壘は既に破られた。軍略に富んだ忠王でさへ、既に望のないのを知つてこの城を見棄てたではないか。

慕王　君はゴオヅンと交通するやうになつてから急に軟化して來た。成程、ゴオヅンは立派な軍人だ。降伏すれば罪は問はんといふ彼の詞に噓はあるまい。併し、攻圍軍には李がゐる、程がゐる。あいつらがどうして吾々に危害を加へずに置かう。

納王　ゴオヅンは決して奪掠もしない、降伏者の罪も問はないといふ立派な言質を李からとつてゐる。そのこともはつきり手紙に書いて來てゐる。

慕王　いや、わしは信じない。どうせ死ぬなら、飽くまでも城を守つて死にたい。蘇州を一日守ることは、南京の命を一日延ばすことだ。

他の王　五十歩百歩だ。もう吾々に破滅が來たのだ。天の命ずるところに從ふより外に道はない。

天將の一人　この上戰ふのはむだ骨折だ。

天將の他の一人　犬死だ。

第三の天將　吾々が死ぬのは好い。だが、三萬に餘る同志を敵の殘虐に任せるには忍びない。

慕王　嘘を言ふな。君は自分の命が惜しいのだ。

第三の天將　ばかを言へ。

慕王　ばかとはなんだ。

（王の一人、突然袍を脱ぎ捨てる。）

慕王　な、な、何をするのだ。

王の一人　かうするのだ。

（いきなり劍を拔いて慕王を刺す。他の諸王諸天將も同時に劍を拔いて慕王に襲ひかかる。）

第二場

その翌朝。

蘇州城内、納王の家の前。

髮賊の兵が四五人、納王の家を護衞してゐる。

ゴオヅン少佐、竹の鞭を手にして、ひとり出て來る。

髮賊の兵と一人一人握手する。

少佐　諸王はもう出かけられたか。

兵の一人　皆さんお出かけになりました、降伏式へ。李巡撫のところへ。

少佐　それはよかつた。家族の方はどなたかをられるか。

（納王の伯父が出て來る。）

少佐　あなたは。

伯父　納王の伯父です。

少佐　あなたにはまだ初めてだ。（握手）あなたも部將の一人でしたな。

伯父　はい。

少佐　あなたの勇名はかねてから聞いてゐました。

伯父　（寂しく笑ふ）

少佐　時に、諸王は無事ですか。

伯父　お蔭で萬事好都合に參りました。今しがた揃つて李巡撫のところへ參りました。

少佐　別條はありませんな。

伯父　ありません。

少佐　あれ程、李や程に確めて置いたのですから、大丈夫だとは思つてゐたのですが、どうも不安心なのでお訊ねに參つたのです。

伯父　それはわざわざ恐れ入りました。

少佐　私は常勝軍を崑山まで引き上げさせるのに忙しかつたのです。うつかりこの邊に置くと、いつ奪掠を始めるか分かりませんからな。

伯父　實は吾々もそれを恐れてゐたのです。官軍の方はどうでせう。

少佐　官軍にも決して奪掠はしてならんと言ひつけてありますから、大丈夫だと思ひます。萬一の場合には常勝軍の一部を護衛に殘してありますから、それに防がせます。

伯父　何から何まで行屆いた御處置で、感謝の外はありません。何しろ、宅には婦人などもをりますので……

少佐　いや、大丈夫です。安心して入らつしやい。諸王が無事のやうなら　もう大丈夫です。

（チオド中尉、登場。）

中尉　お出かけになりますか。

少佐　うむ。行かう。諸王もどうやら無事らしいので安心した。だが、官軍の行動は十分監視してゐなければならん。

中尉　それはスタック大尉が注意してゐる筈です。護衛兵もしつかりしたのを殘してありますから大丈夫です。

少佐　では、行かうか。

伯父　これから、どちらへお出かけで。

少佐　慕王の葬式に參列しようと思つて。

伯父　慕王の葬ひを閣下がなさるのでございますか。

少佐　髮軍の老雄です。髮軍に埋葬しなければなりません。

伯父　（落淚して頭を下げる）

（少佐、納王の伯父その他の一人一人握手して、チオド中尉と共に去る。）

（一同、見送る。）

（途端に、納王の家の內部で、婦人の叫び聲が聞える。）

（一同が振向くと、官軍の清兵が手に手に奪掠品を携へて出て來る。）

（納王の伯父、髮賊の兵、これを捕へようとする。）

（官軍の兵、發砲する。）

（格鬪。）

第二場

同じ日の午後。

蘇州城東門に近き河畔。

程學啓、官軍の一部を率ゐて屯特す。

對岸にも官軍大勢、群りゐる

ゴオゾン少佐、スタック大尉、チオド中尉、常勝軍の護衛兵の一部を引率して、急ぎ登場。

少佐　（叫ぶ）程はをらんか。程はどこにをる。

程　（稍狼狽して、前へ出る）　ここにをります。

少佐　なぜ官軍に奪掠を許した。

程　奪掠

少佐　納王の家も襲はれた。璋王の家も襲はれた。

程　そんな筈はありません。

少佐　ないことはない。わしは自分の目で見て來たのだ。

程　それは私の知らないことです。早速調べて、嚴重に處罰しませう。（行かうとする）

少佐　どこへ行く。

程　調べに行きます。

少佐　逃げると承知せんぞ。

程　私も軍人です。そんな卑怯なことはしません。（と言ひながら、走り去る）

（官軍の兵士も同時に走り去る。）

少佐　ああ、だめだ、だめだ。到底支那人と事を共にすることは出來ん。今度こそは紳士らしい戰をしようと思つたのに、蘇が陷落すると、直ぐもうこれだ。ヲオド中尉、直ぐに李の居所を探して、ここへ連れて來い。序に諸王は無事かどうか。それも調べて來い。

（チオド中尉、走り去る。）

（他の方角から、官軍の砲兵士官ベエリイ少佐が出て來る。）

少佐　（直ぐ聲をかける）おう、ベエリイ少佐、君は官軍にをられるのだから、事情が分かつてゐよう。どうして、程は奪掠を許したのだ。

エベリイ　實はそのことで、あなたにお目にかかりに來たのです。程は飛んでもないことをしたと言つて、泣いて悔いてゐます。あなたに申訳がないと言つて、奪掠をした兵を二十人直ぐに銃殺しました。併し、これは決して自分の意志からしたことではない、李の命令に依つてしたことだと、かう申してをります。

少佐　なに……李の命令だと。

エベリイ　はい。

少佐　怪しからん奴だ。その分だと、諸王も首を刎ねられたに違ひあるまい。

ベエリイ　なんでも、そんなことを聞きました。

少佐　なに。首を刎ねられたと。

（ベエリイ、小蔭から支那の少年を一人連れて來る。）

ベエリイ　これは納王の息子です。

少佐　おう、さうか。あなたのお父さんはどうなすつた。

（納王の息、默つて對岸を指さす。）

（一同、對岸を見る。）

（對岸の群集、少しく薄らいで、切りさいなまれた七箇の死骸の横たはつてゐるのが見える。）

少佐　おう。（と言つたきり詞がない。涙が潸然と頰を下る）

（ゴオヅン、突然スタック大尉の腰からピストルを奪ふ。）

少佐　（語氣荒く）諸君、わしは初めて武器を手にした。

この武器は何だ。ジャスチスだ。正義だ。正義が李の肉體に復讐を求めるのだ。

（怒號して走り去る。）

ベエリイ　困つたことになつたな。

スタツク　李が悪いのだ。

ベエリイ　併し、李としては、あの位のことをしなければ腹が癒えんのだらう。隨分長い間苦しめられて來たのだからな。

スタツク　そんならゴオヅンはどうだ。李は蘇州總攻撃になつてから、見物半分にやつと出て來たのではないか。ゴオヅンはこの八ケ月といふもの、軍服がぼろぼろになるまで戰つてゐるのではないか。それでも彼は降伏者の罪は問はないと言ふのだ。

ベエリイ　ゴオヅンは髮賊から賄を受けてゐるといふではないか。

スタツク　ばかなことを言へ。

ベエリイ　だが、さういふ噂は確にあるのだ。

スタツク　李や程の部下にゐる奴は、さういふ下等なことを考へるかも知れんよ。

ベエリイ　それはおれのことか。

スタツク　さうかも知れん。

ベエリイ　失敬なことを言ふな。

（二人、摑み合ひになる。）

（兵の一部が留めにはひる。）

（納王の息、逃げる。）

（チオド中尉、駈けて出て來る。）

スタツク　李はゐたか。

チオド　をりません。どこにもをりません。城内へ逃げ込んだらしいのです。

（ベエリイ、いつの間にか逃げてしまつてゐる。）

スタツク　少佐は非常な怒りやうだ。

チオド　どうしたのです。

スタツク　李が降伏王の首を刎ねたのだ。（對岸を指す）あれを見ろ。

（チオド、對岸を見る。）

（ゴオヅン少佐、ピストルを握つた儘、駈けて出て來る。）

少佐　をらん。をらん。どこにもをらん。（チオド中尉を見る）おう、中尉、李はゐたか。

中尉　をりません。どこにもをりません。

少佐　（ピストルを投げ棄てる）畜生、たうとう逃げてしまつた。

（清朝廷の勅使、官軍の護衛兵を連れて登場。）

勅使　閣下はゴオヅン總兵ですか。

少佐　さうです。

勅使　私は清國朝廷からの勅使です。今囘の勳功に對し、取敢ず頭等功牌と銀一萬兩を御下賜になりました。常勝軍一同へも賜金がありました。（賜金を盛りたる盆を捧げる）

（少佐、竹鞭を振り上げる。）

少佐　歸つて下さい。歸つて下さい。斷じてその賞金は受けません。

勅使　それは不禮に當りますぞ。

少佐　不禮の罪は甘んじて受けます。蘇州陷落後に如何なることが起つたか、それをお調べになれば、私が賞を受けない理由は分かります。歸つて下さい。歸つて下さい。

（勅使等、驚いて去る。）

スタツク　總兵閣下。もう戰はやめですか。

チオド　常勝軍は解散なさいますか。

（ゴオヅン、考へてゐる。）

スタツク　閣下、どうなさるのです。

少佐　（突然）いや、支那人は支那人、英吉利人は英吉利人だ。わしは世界の平和の爲に飽くまでも戰はなければならん。わしは支那を忘れよう。支那を忘れて、世界の爲に働かう――文明世界の爲に……さあ、これから南京だ。（命令するやうに）軍議。

（衣兜から地圖を出して、野戰用の小卓の上に廣げる。）

スタツク大尉、チオド中尉、卓を圍む。）

（對岸には七箇の死骸が見えるのみで、もう人影がない。）

――幕――

日田縣事件（五場）

人物

水野正名　大參事
小河眞文　權大參事
川島澄之助
吉田足穗
太田茂
鹿野淳二
井上達也
下川巳之助
島田莊太郎
大鳥居菅吉
樋口良臣
篠本廉藏
本山岩之丞
川口誠夫
田中隆吉
青木喜太郎
柳瀬三郎
松村雄之進
寺崎三矢吉
太田要藏
今村閭兵衞
横枕覺助
中村彦次郎
師富進太郎
平彦助
以上久留米藩士
大樂源太郎
山縣源吾
小野清太郎（登場せず）
中村要助
以上山口藩脫人
その他

時代
明治四年三月

場所
久留米城下

一

水野大参事役宅。夜。

水野大参事、小河權大参事、床の間を後にして端坐瞑目してゐる。

川島、鹿野、島田、井上、大鳥居、太田、吉田、下川、青木、寺崎、篠本、樋口など、詰め寄るやうに、これを取圍んでゐる。

鹿野　では、水野先生はどうしてもお出掛になるのですか。

水野　(大きく頷く)

井上　小河先生もお出かけになるのですか。

小河　(頷く)

篠本　どうしても、おやめになることは出來ませんか。

水野　出來ない。わしは東京を出る時から、もうその覺悟だつた。わしは人質になるつもりで國へ歸つて來たのだ。

太田　大鳥居や川島は先生のお供をして歸つて來ながら、それに氣がつかなかつたのか。なぜ、船中でお留め申さなかつたのだ。

大鳥居　アメリカの飛脚船で横濱を出た時は少しも氣がつかずにゐたが、遠州灘あたりで、九州鎭撫總督の有栖川宮殿下が同じ船に乗つてをられるのを知つた時は、おれも驚いた。謂はば久留米征伐の宮樣が、久留米藩知事公の代理たる水野大参事と同船をしてをられたのだ。だが、同じ船に薩州の西郷も乗つてゐた。水野先生は西郷に事情を述べて、前後曲直のあるところを監視して貰ひたいと言つた。西郷もそれは氣の毒だ同情に堪へないと言つて、及ぶだけのことはしようと請合つてくれた。おれは幾分それで安心した。まさか、こんなことにならうとは思はなかつた。

吉田　問題は山口藩の脱人を保護したことにある。だが、その巨魁たる大樂源太郎はもう久留米の領内を逃げてしまつた。もう吾々に責任はない筈だ。

下川　脱人を保護したのは、吾々の同志だからだ。尊王の大業は完成して、幸に王政復古にはなつたが、まだ攘夷の一重大事が殘つてゐる。新政府はいくぢなくも幕政を踏襲して外人の侮辱を甘んじて受けてゐる。然るに、山口藩は常備軍を解除して、新政府に媚を呈してゐるのだ。馬關海峽に聯合艦隊と戰つた往年の意氣はどこにある。志ある者が國を逃れて、常備軍の復興を謀るのは當り前のことだ。それを暴徒とは何事だ。おれは大樂を國外へ追ひ出したことさへ心外に思つてゐるのだ。

青木　おれ達は唯無暗やたらに攘夷を稱へるのではない。開港が悪いと言ふのではない。文明の輸入を拒むのではない。長崎にゐるおとなしい阿蘭陀人までを追拂へと言

ふのではない。兵力を以て無理無體に開港を迫つて來た奴等の壓迫に屈從する必要はないと言ふのだ。德川幕府は彼等に對してどういふ處置をした。城下の盟といふ屈辱を甘んじて受けたではないか。假に結んだといふあの條約は、國を辱め、國體をも顧みざるものだ。天下の輿論はこれを許さない。幕府はこれが爲に失脚して、終に政權返上となつたが、幕府が殘したあの屈辱條約は依然として元の儘だ。王政復古した以上、若し攘夷が出來ないと言ふのなら、一日も早く條約の改正をして國體を全うしなければ、畏れながら先帝の遺詔にも背き奉り、外夷に關して斃れた勤王志士の靈に對しても顏向けがならんと言ふものだ。

篠本　さうだ、さうだ。條約の改正だ。だが、その條約の改正は樽俎の間に折衝しようとしても、到底それは望み得られんことだ。名のあるところに從つて、國力を外に展べるのだ。それが第一だ。然るに、今の新政府は、內政にのみ重きを置いて、一切外を見ない。その結果、外に對しては常に畏縮して、口も利かなければ、手も出さない。屈從を屈從とも思はずに、ひたすら外人の鼻息のみ窺つてゐる。山口藩の如きはその雄なるものだ。

鹿野　吾々が山口藩の脫人を庇護したのは、國家を思ふ至誠からしたことだ。その國家の忠臣を國家が攻めるといふのは何事だ。

井上　いや、討伐軍は決して國家ではない。山口藩が國家を示唆したのだ。

太田　默つて斃れるまでも、兩先生を渡すことは出來ん。

吉田　斷じて出來ん。

（一同、騷然。）

小河　待て。先程からあれ程理を說いて聞かしてゐるのに、諸君はまだ分からんのか。僕は決して諸君の主義を否とするのではない。現に吾輩自身も脫人の保護はした。僕が新政府の對外政策に飽き足らんのは諸君以上だ。併し、今の場合を考へろと言ふのだ。九州鎭撫總督の宮は既に大阪表まで出向いてをられる。巡察使の四條少將閣下は鹿兒島熊本山口三藩の兵を率ゐて、既に目近の日田まで押寄せて、今にも久留米へ攻め入らうとしてをられる。政府は既に四國九州の四十二藩に令して四條巡察使の指揮を待たせてある。參謀の大田黑は百何人といふ兵隊を連れて既に善導寺に上陸した。久留米は四國の內に落ち入つてゐるのだ。政府が久留米の人民を怒らせて、わざと兵端を開かせようとしてゐることは火を見るよりも明かだ。決して、その手に乘つてはならん。その手に乘つたら、藩は破滅だ。

水野　その上、藩知事公は東京へ人質に取られたやうな形

になつてをられる。知事公は謹愼を仰せつけられて、赤羽の藩邸は政府の兵隊で圍まれてゐる。知事公はかの還都一件以來、事毎に新政府の嫌疑を受けてをられるのだ。吾々が何等含むところのない廣澤參議の暗殺でさへ、一時は嫌疑が吾が藩にかかつた。若しこの場合、血氣に逸つて、巡察使に楯をつくやうなことをしたら、東京の知事公は如何なる憂目を御覧になるか分からん。

小河　如何にも現在久留米を圍んでゐる兵隊は、鹿兒島山口熊本三藩のものに相違ないが、既に朝命を奉じて、巡察使の指揮の下にある以上、これを官軍と言はなければならん。官軍に手向ふことは錦旗に手向ふことだ。そんなことをしたら、忽ち朝敵の賊名を蒙り、天下の兵を一つに引受けて戰はなければならんことになる。吾が久留米藩は天下に率先して勤王論を唱へた。佐幕俗論家は既に斃れて、今日藩政にあづかるものは悉く勤王の諸士だ。然るに、今その久留米藩が朝敵となつて、累を知事公に及ぼし、あまつさへ久留米城下を焦土に化して、何も知らぬ一般人民を塗炭の苦しみに陷れるのは悲慘の極ではないか。忍び難きを忍ぶのだ。志は事と違つた。目的は蹉跌した。併し、今は恭順を表さねばならん時だ。

島田　どうもこれは兩先生の言はれることが道理だ。吾々は一時この屈辱を忍ばなければなるまい。

水野　さうだ。一時のことだ。吾々二人が出て行つたあとで、官軍は必ず無理無體を持ちかけ、諸君に手を出させようとするに違ひない。併し、如何なることがあつても、忍從して、恭順の誠を表し、一旦兵を引上げさせた上で、正々堂々廟堂に迫り、無名の師を起して一般を騷がした罪を糺し、報復して今日の恥辱を雪ぐが好い。一時のことだ。一時のことだ。

鹿野　併し、殘念だなあ。

井上　今まで先生として敬慕した方々を、おめおめ彼等の手に渡したとあつては久留米藩の恥辱だからな。

太田　全く天下の諸士に對して申譯がない。

川島　いや、併し、今の場合どうにもなるまい。僕も兩先生を引渡すことは飽くまでも反對だつたが、だんだん兩先生の訓話を承つて見ると如何にも御尤もだ。ここは一番忍ばなければなるまい。なあ、大鳥居、貴公はどう思ふ。

大鳥居　兩先生のお詞に從ふより外はあるまい。知事公のお身の上も心掛りだ。一般人民のことも思はなければならん。總てを兩先生の御意志に任せよう。

島田　どうも、この際さうするより外に手段はあるまい。

下川　屈辱は一時だ。吾々の目的は遠大だ。

篠本　吾々は長い間兩先生の指導を受けて來たのだ。この期に及んで兩先生の意に反するやうな行動を執ることは

出來ん。

大島居　では、もう誰も異存はないのだな。(一同、沈默)誰も異存はないか。

(一同、沈默。暗に賛意を表す。寺崎三矢吉唯一人、苦々しげに横を向いてゐる。)

小河　寺崎、君はさつきから一言も口を利かんが、君もやはり同意なのだらうな。君は脫人のことに關して前後最も深い關係を持つてゐる一人だ。現に君は吾々と一緒に、あした巡察使廳へ出なければならん人だ。君の同意はどんなに諸君の心を勵ますか分からない。

寺崎　(突然、聲を勵まして)　いや、僕は同意しません。僕の意見は大反對です。たとひ兩先生がお出かけになつても、僕は決して日田へは參りません。

水野　なに。

寺崎　どうせ一度は國家の爲に斃れる覺悟で始めた爲事です。一か八か、遣れるだけは遣つて見ます。あとがどうならうと、そんなことは構つてゐられません。朝命を矯めた奴原を片つ端から鏖殺しにして、錦旗を主上にお返し申し上げ、以來かやうな者にはお渡しにならぬやう闕下に伏して奏請いたします。

島田　そんな亂暴なことを言ふ奴があるものか。

青木　そんなことをしたら、却つて不敬に當るぞ。

寺崎　ばかを言へ。朝命を矯めた奴等に屈從するのこそ、却つて天意を昧ますといふものだ。おれは斷じて日田へは行かん。兩先生も決して遣らん。

川島　おい、おい、寺崎。どうして君はさう過激なことを言ふのだ。君の眞意はよく分かつてゐる。君は兩先生が救ひたいばかりに、さういふことを言ふのだらう。併し、今の場合さういふことをするのは、却つて兩先生を傷つけることになるぞ。

寺崎　いや、おれは兩先生の爲を思ふのではない。おれは國家の爲に立つのだ。

島田　藩公のことは思はんのか。藩の安危は考へんのか。

寺崎　もう吾々に藩といふものはない。吾々には唯國家があるばかりだ。上御一人があるだけだ。新政府の腰が弱いのも、畢竟は舊大藩に壓迫されてゐるからだ。

島田　君は知事公はどうなつても好いと思つてゐるのか。久留米が滅びても構はんと思つてゐるのか。

寺崎　國體には換へられん。國威には換へられん。攘夷の爲の犧牲なら、知事公も藩も何かあらんやだ。

島田　默れ。貴樣は久留米藩の藩士ではないのか。

寺崎　おれは日本の國民だ。

(突然、井上が寺崎に斬つてかからうとする。一同、留める。)

島田　寺崎、歸れ、歸れ。貴樣のやうな亂暴者に國事を議する資格はない。
寺崎　おれもこんな穢れた場所に同席は御免だ。いくぢなしの寄合め。
井上　なに。（又斬つてかゝらうとする。今度は下川も立つ。一同、二人を留める）
寺崎　おれは一人でも、きつと遣つて見せるぞ。
（寺崎、席を蹴立てて歸る。）
（一同、暫く呆氣にとられてゐる。）
水野　困つたものだな。
小河　困つたものです。
水野　だが、實際あいつは遣るつもりだらうか。
小河　それは分かりません。あいつは煽動家ですが實行家ではありません。口だけのことの出來る男ではないのです。
川島　失禮ですが、小河先生の仰しやる通りです。わたくしは武田先生の門下だつた時分から、彼とは分け隔てなく附き合つてをります。小河、古松、兩先生へも共に趨いてお世話になつたのです。彼の性格はどの諸君よりもわたくしが知つてをります。彼は誠意のない男ではありません。山口脫人庇護の場合にも、彼は身命を賭して働きました。併し、彼は存外小心な男なのです。今度の場合も、彼は日田へ行くのが恐いのです。恐くないまでも厭なのです。自分が厭だもので、他を唆かすのです。唯それだけのことです。
水野　併し、唆かされた相手が若し本氣になつたら一大事ではないか。
川島　如何にもさうです。わたくしもそれを心配してゐるのです。
島田　あいつの家には應變隊の過激黨が大分集まつてゐるといふ噂だぞ。
大鳥居　さう言へば、横枕が今夜來ないのも不思議だな。
鹿野　ここへ來る途中で、太田要藏や今村圓兵衞に逢つたが、二人とも寺崎の家へ行くのだと言つてゐた。
川島　それはいかん。あの二人は中でも寺崎と親密で、しかも非常な過激論者だ。
水野　では、一刻も猶豫することは出來ん。萬一あの輩に暴動を起されたら、吾々の苦衷も水泡に歸してしまふ。
小河　さうだ。何と言つても、川島は隔意のない仲なのだから、一つ行つて取鎭めてくれんか。あの男は決して自分で何もする男ではない。唯はたを取鎭めてくれれば好いのだ。あの男の煽動にはたが乘らんやうにしてくれれば好いのだ。
川島　宜しうございます。參りませう。どうせ過激な連中

の集まりですから、散々にわたくしを罵倒するに違ひありません。併し、わたくしはそんな者は相手にしません。寺崎一人と膝詰談判をしてやります。さうして九つ過ぎる頃まで邪魔をしてやれば、兩先生の駕籠は田主丸あたりまでは參るでせう。さうすれば、たとひ本當に何かしようと思つても、もう何も出來ますまい。兩先生が無事に日田へ向はれたとなれば、當人もきつと諦めて巡察使廳へ參るでせう。

水野　成程、好い考へだ。是非さうしてくれ。

川島　では、一刻も早い方が好いと思ひますから、直ぐにこれから參ります。

青木　だが、川島一人では危ない。おれが一緒に行かう。

井上　僕も一緒に行かう。

川島　いや、君はいかん。君はさつきも危なくあいつを遣つつけるところだつたではないか。

青木　では、おれ一人だけでも連れて行け。

川島　いや、誰も來ん方が好い。

青木　大丈夫か。

川島　大丈夫だ。おれ一人なら、何を言はうと、決して寺崎は怒りはせん。

青木　でも、周圍の者が。

川島　周圍の者と言つたところで、みんな寺崎の子分だ。首領の寺崎が手を出さなければ、子分も手の出しようがあるまい。兎に角、おれは氣が急くから、もう行く。（水野と小河の前に平伏する）では、水野先生、小河先生、どうぞ御機嫌宜しう。無事の御歸藩を祈ります。

水野　あとを宜しく賴みますぞ。

川島　畏りました。

（川島、退場。一同、目送する。）

（入れ違ひに、庭口から、息せき切つて、田中隆吉が飛び込んで來る。）

小河　どうした、隆吉。

（田中、上へ轉び上がる。）

田中　（息を切つて）兩先生の外、お人拂ひを願ひます。

水野　（一同を見て）諸君、暫く遠慮してくれ給へ。

（水野、小河を殘して　一同退場。）

小河　（暫くして）田中、どうした。

田中　（聲を潜めて）一大事でございます。

水野　何事だ。

田中　大樂源太郎が又逃げて參りました。

小河。水野　えつ。

水野　いつ。

田中　たつた今。

小河　どこへ。

田中　わたくしの宅へ。

（水野、小河、顏を見合はす。）

田中　（心の急くやうに）如何いたしませう。

水野　待て。奥へ行つて、大島居と島田を呼んで來てくれ。密議があるからと言つて。

（田中、奥へはひる。）

（水野と小河、顏を見合せて默つてゐる。）

（田中が大島居と島田を連れて來る。）

水野　ずつと側へ寄つてくれ。

（大島居と島田、水野と小河の側へ寄る。）

（水野、囁く。大島居と島田、驚愕して、思はず聲を立てようとする。小河、抑へる。）

（一同、鳩首、議を凝らす。）

——幕——

二

寺崎三矢吉宅。同じ夜。

主人の寺崎、今村同兵衛、太田要藏の二人と床の間の前に鼎坐してゐる。

横枕、中村、師富、平の四人、少し離れて一團をなしてゐる。その他、應懲隊の諸士、足の踏み込めぬ程、そこここに群つてゐる。

杯盤狼藉。一同酒氣を帶びて喧々囂々と論じ會つてゐる。

寺崎　おれは行かん。斷じて行かん。誰がおめおめと巡察使などに縛られるものか。

太田　さうだ。さうだ。決して行くな。

寺崎　兩先生も遣つてはいかん。駕籠を道に要して、是非とも奪ひ取らなきやいかん。

今村　さうだ。さうして直ぐに兵を擧げて巡察使を追つ拂ふのだ。山口や熊本の二中隊ぐらゐがなんだ。

太田　さうだ。さうすれば、豫て示し合せた豐津島原その他各藩の同志が、きつと來應するだらう。

寺崎　各地に潜伏してゐる奇兵隊の諸士も、きつと方々から出て來るだらう。さうしたら、これを糾合して、直ぐに日田を奪取するのだ。それから九州の兵を引き纏めて下の關へ押し渡るのだ。それから、山口を乘取つて、ここを根據地にして義兵を擧げるのだ。

太田　さうだ。今が遣り時だ。おれ達の目的が達せられるのは今だ。

寺崎　今を措いて他に機會はない。その好機會を手を拱いて逃がさうなどとは、何といふ腰拔武士だ。水野、小河兩先生には、兩先生の立場がある。だが、若い者達が直ぐとそれに同意して、官軍でもない官軍に屈服しような

どとは、何といふ意氣地なしだ。川島などはおれの少年時代からの親友で、常に行動を共にして來た奴だが、あの優柔不斷な態度はどうだ。
太田　あいつは今度東京へ行つてから、ひどく意氣地がなくなつた。きつと東京で臆病風でも引いて來たのだらう。
（一同、笑ふ。）
（途端に、奥の方で、「川島が來た。」「川島だ。」「川島だ。」といふ聲がする。）
寺崎　なに、川島が來たと。あいつ、考へ直したか。
今村　さうだ、さうだ。きつとさうだ。あいつあやまりに來たのだ。
（川島、刀を提げて、周圍には目もくれず、大勢の中を押し分け押し分けまつ直ぐに寺崎の側まで來て坐る。）
寺崎　おう、川島。貴公吾々の味方になりに來たのか。大に宜しい。まあ、一杯やれ。
川島　（杯を受ける）君は愈戰ふ氣か。
寺崎　勿論だ。君も戰ふ氣になつたのだらう。
川島　いや、おれは戰はん。
寺崎　なに、戰はん。
川島　機會はもう去つてしまつた。
寺崎　いや機會は今だ。
川島　まだそんなことを言つてゐるのか。兩先生のお詞がまだ貴樣には分らんのか。
寺崎　兩先生は兩先生だ。吾々には吾々で、また覺悟がなければならん。おれは百姓は厭だ。
川島　おれだつて百姓は厭だ。勝算があればおれだつて戰ふ。勝算はあるのか。
寺崎　ある。
川島　では、これを聞かう。
寺崎　吾々が立てば熊本の同志が三百人は直ぐに來る。島原は藩を擧げて立つだらう。豐津藩も同樣だ。各地に潜伏してゐる奇兵隊も立つて、きつと山口を回復するだらう。みんな久留米の立つのを今か今かと待つてゐるのだ。
川島　だが、熊本の同志が立つといふなら、久留米の遣るのを待つには及ぶまい。三百人もゐるなら、直ぐに熊本城を乘取り、これを根據にして呼號したら、九州は必ず響の如く應ずるだらう。然るに、彼等がその大事な熊本を棄てて久留米へ來るといふのは分からん。それは誰かが作り拵へた流言に相違ない。それとも熊本の同志が愈城を乘取つて兵を擧げるといふのなら、君等も同志を率ゐて熊本へ趨いたらどうだ。さうして、天下の兵を一手に引受けたら、或は志を貫くことが出來るかも知れん。然らずんば、到底勝算はない。
横枕　（下座から）よせ、よせ、寺崎。そんな臆病者の議

論などは聞くな。
師富　さうだ、さうだ。邪魔者の議論は聞くには及ばん。聞けば迷が出る。迷が出れば考が動く。斷じて聞くな。
中村　そんな奴の議論をぐづぐづ聞いてゐると、時が遲れて機會を失ふぞ。機會は再び來るものではないぞ。
平　そんな奴にかかり合つてる隙はない。叩き出せ。叩き出してしまへ。
（「叩き出せ。」「叩き出せ。」といふ聲が方々で聞える。）
川島　いや、おれは歸らん。飽くまでもおれは留める。身命を賭してもおれは留める。
横枕　腰拔侍。臆病者。
川島　何と言はれても、おれは動かん。今の場合、輕擧盲動するのは國の破滅だ。
横枕　因循姑息も國の破滅だぞ。
平　もうこんな奴には構はずに、どんどん實行に取りかゝれ。
横枕　兩先生の駕籠を奪ふのだ。それから日田を襲撃するのだ。
寺崎　まあ、待て。おれは川島の言ふところにも一理あると思ふ。
横枕　だめだ、だめだ。そんな奴の言ふことに動かされてはだめだ。
寺崎　いや、決して無暗と動かされはせん。併し、熊本の同志が立つなら、熊本城に據る筈だと言ふ一言には一理ある。若し吾々が立つても、熊本の同志が馳けつけてくれなかつたら、吾々はどうすることも出來ん。吾々の人數は餘りに少ない。
今村　おい、おい、大將がそんな意氣地のないことを言ひ出しては爲方がないではないか。
太田　熊本の同志はきつと來る。おれは確な筋から聞いた。三百人は來ないまでも、二百人はきつと來る。
中村　どんなことがあつても、百人はきつと來るといふ報告がおれのところへ來てゐる。
川島　それ見ろ。人數のことでさへ、既にさうまちまちだ。熊本の同志が立つなら、熊本を棄てる筈はない。
横枕　いや、おれ達は熊本の同志などあてにしてゐるのではない。來んなら來んで構はん。おれ達は自分でやる。
寺崎　だが、それは無謀だ。勝算のないのに戰ふのは犬死だ。
横枕　何が犬死だ。國家の爲に死ぬのがなんで犬死だ。攘夷の爲に斃れるのがなんで犬死だ。
（「犬死ぢやない。」「犬死ぢやない。」といふ聲が聞える。）

寺崎　待て。おれも犬死ぢやないと思つてゐた。藩がどうならうと、知事公がどうならうと、これは飽くまで戰はなければならんと思つてゐた。だが、だんだん川島の話を聞いてゐる內に、これは一番考へ直さなけりやならんと思つた。

（「考へ直すことはない。」「考へ直しちやならん。」などといふ聲がする。）

寺崎　成程、この際戰はんのは屈辱には違ひない。併し、それは唯外見だけのことだ。肉體は縛られても精神は縛られん。吾々の目的は遠大だ。一時の恥を忍んでも永遠の策を立てなければならん。苟にも錦旗に楯をついて、朝敵の汚名を受けたら、多年の苦心も水の泡だ。

横枕　だめだ、だめだ。川島の臆病風が移つたのだ。

寺崎　いや、斷じて臆病で言ふのではない。この屈辱に堪へるには金鐵の心が要る。

（「言ひ抜けだ。」「恐くなつたのだ。」「大將がやらなきや、おれ達だけでもやつて見せるぞ。」などといふ聲がする。それに對して、「いや、寺崎の言ふのが本當だ。」「屈辱は一時だ。」「目的は遠大だ。」などと言ふ聲が聞える。）

（議論が二派に分れて、詞の聞き取れぬ程混亂する。）

（罵る聲怒る聲が頂點に達した時、殷々と鐘の音が響いて來る。）

――何時だ。

――丑三つだ。

――だめだ。もう兩先生の駕籠は行つてしまつた。

――もう追つかけても、とても追つつくまい。

（一同、絕望して首を垂れる。）

（稍長き沈默。）

川島　（微笑を含んで、寺崎の前へ向き直る）寺崎、日田へ行くか。

寺崎　（決心を面に表して）うむ、行く。

川島　では、別盃だ。

（川島、寺崎に杯をさす。）

――幕――

三

大鳥居菅吉の寓居。或商家の裏座敷。翌日の午後。

主人の大鳥居はじめ、島田、樋口、篠本、本山、川口、吉田、太田（茂）、鹿野、井上、下川など、鳩首して、聲を潜め、頻に密議を凝らしてゐる。

川島、登場。この光景に意外の面持をする。

大鳥居　（川島の來たのに氣がついて）おう、川島、疲れてゐるところをよく來てくれた。

川島　また何事か起つたのか。
大鳥居　兎も角も、ゆうべの禮を言はなければならん。よく寺崎を留めてくれた。お蔭で兩先生も無事に日田へ行かれた。寺崎もたうとう日田へ行つたと言ふではないか。
川島　いや、なかなか骨が折れた。併し、夜明けまで居坐つて、たうとう寺崎を日田へ立たせた。
大鳥居　それは大手柄だつた。さぞ應變隊の過激黨が憤慨したらうな。
川島　一時はどうなるかと思つたが、こつちがぢつと堪へてゐたので、たうとう血の雨を見ないで濟んだ。先づ、これで一時の片はついた。
島田　ところが、ここに又一つ大難事が湧いて來た。
川島　（心配さうに）なんだ。何事だ。
島田　（一同に）諸君、あたりに氣をつけてくれ給へ。
（一同、あたりを警戒する。）
（大鳥居と島田、ずつと川島の側へ寄る。）
島田　（聲を潜めて）大樂源太郎が又久留米へ歸つて來たのだ。
川島　（笑ふ）冗談を言つちやいかん。もう大樂は久留米にをりやせん。小河先生も、それだけは安心しろと言はれた。
島田　ところが、ゆうべ、突然又戻つて來たのだ。
川島　（驚く）一人でか。
大鳥居　四人で。
川島　誰のところへ。
大鳥居　田中隆吉のところへ。
島田　ゆうべ君が寺崎のところへ出かけると間もなく、田中があの席へ飛び込んで來た。兩先生の外、人拂ひになつたが、やがておれと大鳥居が呼ばれた。話を聞くと、そのことだ。兩先生が言はれるには、折角これまで苦心して來たことも、これではみんな水の泡になつてしまふ。だが、日田へ出發の時刻は迫つてゐる。どうか、自分達の出發後、みんなと相談して、事の破れにならぬやう宜しく始末を頼むと、しみじみとしたお頼みだ。實に僕等は途方に暮れた。
大鳥居　至急にどうにかしなければならぬが、僕等はこれまで親しく關係したことでないので、一向工夫がつかん。どうしたら好いだらう。好い考へはあるまいか。
川島　成程、それは一大事だ。だが、僕も今まで多少は關係して來たが、潜伏といふことには一向關係したことがないから、これといふ妙案もない。併し、ぐづぐづしてゐれば、直ぐに捕まへられるに相違ない。萬一、大樂等が捕へられたら、藩知事公のお身の上が危ない。
島田　さうだ。吾々もそれを懸念してゐるのだ。

大鳥居　大樂が捕へられて、何もかもしやべつてしまつたら取返しはつかん。たとひ一度でも知事公は大樂に會つてをられるのだから。なあ、川島、なんとか處置のつけようはあるまいか。

川島　（突然、或希望を面に表して）さうだ。若津に藩の蒸汽船の千歳丸が來てゐるといふ話だ。あれに脫人を載せて逃がしたらどうだ。おれも若手の同志を連れて同船しても好い。さうして、あとを晦ましたら、どうにも捕まへようがあるまい。さうだ。會計に金を出して貰つて、千歳丸で逃げよう。

島田　うむ。成程、それは好い考へだ。大鳥居はどう思ふ。

大鳥居　（首を傾げて）だが、それでも逃げ延びることは出來ない。必ず捕へられるにきまつてゐる。若し捕へられれば、何もかも漏れてしまふだらう。さうなつたら、もう破滅だ。

（突然、日付役の一人襖を排して入り來る。）

——誰だ。誰だ。無斷ではひつて來てはいかんではないか。

日付役　お許し下さい。急の御用で、島田樣にお目にかかりに參つたのです。

島田　おれはここにゐる。なんだ、なんだ。

日付役　きのふ佐賀の兵が若津に押し渡り、千歳丸に乘込んで、大砲を引きおろし、機械類にも總て封印をしてしまつたさうです。その知らせがありましたので、直ぐに御報告に參りました。

島田　しまつた。（間）川島、千歳丸も取られてしまつたぞ。

（日付役、去る。）

（一同、沈默。）

川島　（決心を面に表して）もうかうなつた以上は爲方がない。可哀さうだが、片づけてしまふより外に手段はあるまい。

（一同、顏を見合はす。）

大鳥居　（暫くして）實はみんなもその意見だつたのだ。だが、君には何か他の策があるだらうと思つて、それで君を呼びにやつたのだ。君までが、その意見なら、もう爲方がない。

樋口　（後からにじり出る）いや、わしは初めから不同意だつた。そんな殘忍酷薄なことがあるものか。大樂は同士だ。天下の事を共にしようと吾々が盟つた同志だ。その再び得難い同志を、今日まで助けて置いて、もう爲方がないからと言つて殺すといふ法はない。諸君がどうしても遣ると言ふなら、吾輩は刑法局に出て、一部始終を訴へる。それでも好いか。

島田　それなら、どうしたら好いのだ。誰も好んで遣りた

いと言つてゐる者はないのだ。君に良策があるなら聞かうではないか。

樋口　わしはさつきから言つてゐる。大樂等をお城の内へ入れて生米をかじらせて置くのだ。暫く辛抱させて置いたら、決して分かる氣遣ひはない。その内には、事も落著して、兵隊は引上げてしまふに相違ない。暫くの間のことだ。

大鳥居　それが出來れば好い。併し、お互にしても、いつ捕縛されて出て行かなければならんことになるか分からん。さうなつたあとはどうなるのだ。もう大樂を保護するものはない。大樂はきつと捕へられる。彼が捕へられたら、もう取返しはつかん。

樋口　飽くまで遣ると言ふのか。そんなら遣り給へ。わしはこれから直ぐ刑法局へ訴へて出るから。（立ちかける）

島田　（笑つて）訴へるなら、訴へるが好い。刑法局の總裁は鵜飼先生ぢやないか。鵜飼先生は既に吾々に同意してをられるのだ。

川島　まあ、樋口、待て。成程、樋口の言ふところにも一理ある。吾々が手を下すまでもない。大樂に自決を迫つたらどうだ。

島田　それだ。それはもうだめなのだ。ゆうべそのことを聞くと、おれはすぐ田中に案内させて大樂を訪ねたのだが、そして、暗に自裁を迫つたのだが、彼は少しも吾々の衷情を汲んではくれんのだ。却つて久留米を死地に陥れるつもりでやつて來たと言はんばかりの態度なのだ。あいつはかう言ふのだ。長州でも嘗て俗論沸騰して奈何とも爲し難き苦境に陥り、正義の士は相踵いで殺された。もう誰も手を出す者がない。殆ど自滅を待つ狀態となつた。その時、敢然兵を擧げて頽勢を挽回したのが高杉晋作だ。今日の久留米の狀態もこれと寸分違はない。諸君が思ひ切つて立てば、必ず事は成就するのだ。今が決心のし時だと言つて、おれの論には一向耳を貸さんのだ。弟の山縣が大樂に向つて、さう御自分の考ばかり言ひ張られても、藩には藩の御事情もあらうから、萬事お任せになつた方が宜しからうと口を添へたのを汐に、一先づ引き上げることにはしたが、一時はあまり大樂が自分勝手を言ひ募るので、おれはいつそその場で遣つてしまはうかとも思つた。併し四人を相手にして、ひよつと手創でも負うたら、忽ち一般に知れ渡つて、隱すことも何も出來ぬやうになるから、ここは忍ぶ時だと思つて、話は早々に切り上げた。それで、兎も角も潜伏の手筈だけはして置かなければならんから、誰はどこ、彼はここと、それぞれ別にして置いたが、實におれは殘念だつた。

大鳥居　（川島に）さういふわけで、樋口一人反對はした

が、實は君の來る前に、一議は既に決してゐたのだ。併し、吾々は今日まで、大樂のことには直接關係してをらん。君はこれまで脫人のことに關係してゐるのだから、君も一緒に遣つたといふことになれば、萬一若手連中にこの事が知れても、事情が疎通するから、是非君にも同意をさせようといふことになつたのだ。併し、君は必ず不同意を稱へるだらうと言ふので、一時は言はん方が好いといふ說も出たのだが、國事多難になつてから、何事も一緒に話し合つて來た仲だから、この一事のみ話さぬといふのも心持が惡い。それに、藩知事公に關した大事なことを君は知つてゐるのだから、話をしたら、きつと同意をするだらうと、自分も信じ、島田も亦さう言ふので、來て貰つたのだが、やはり同意をしてくれたのは有難かつた。

川島　いや、同意にも同感にも、事實さうするより、今の場合他に道はあるまい。樋口、君ももうかうなつたら爲方があるまい。

樋口　（苦笑して）　川島までが同意では爲方がない。おれも遣らう。

大島居　よし、それで話はきまつた。それでは、これから、それぞれの受持を定めよう。みんな側へ寄つてくれ。

（一同、大島居の廻りに丸くなる。）

大島居　大樂は一番の大物だが、これは川島と吉田に遣つて貰はう。これは太田が連れ出すのだ。大樂の弟子の中村要助は鹿野の受持として、井上下川の三人で遣るのだ。大樂の弟の山縣と小野淸太郞は、別々に引放すことが出來んかも知れんから、島田の受持にして、おれ、樋口、篠本、本山、川口の六人がかりで遣ることにしよう。あの二人は屈强な若者だからな。

島田　よし。そこで、その手段だ。どうか、みんなもつと側へ寄つてくれ。

（一同、更に首を寄せ合ふ。）

川島　（聲を潜めて）　おれは高野の濱で遣らうと思ふ。あの八幡の裏手だ。太田は一旦、大樂を自分の家へ連れて行くのだ。それから……（だんだん聲が小さくなつて、終に聞えなくなつてしまふ）

（雨が降つて來る。）

――幕――

四

筑後川の砂濱。高野八幡宮の裏手。

朧月夜。雨しとしとと降る。

舞臺暫く空虛。鐘鳴る。

土手の篠藪ががさがさする。

やがて、川島が顔を出す。

川島　もうやつて來さうなものだな。

吉田　（顔を出す）　あまり遅いな。

川島　（道へ出る）　途中で取逃したのではあるまいな。

吉田　（これも道へ出て、向うを透し見る）　そんなことはあるまい。太田のことだ。

川島　（きつと向うを見る）　や、誰かやつて來たぞ。傘をさして。

吉田　二人か。

川島　いや、一人だ。

吉田　一人だと。

川島　今頃こんなところへ他の人間がやつて來る筈はない。きつと太田だ。

吉田　太田なら大樂を連れて來る筈だ。

川島　さうだ。若し他の者だといかん。隠れよう。

（二人、又竹藪へ隠れる。）

（太田、一人で急ぎ足で出て來る。）

太田　（聲を潜めて）　吉田、吉田。

吉田　（川島と一緒に躍り出る）　おう、茂さんか。どうした。大樂はどうした。

川島　（詰め寄つて）　取逃したか。

太田　（落ちついて）　いや、取逃しはせん。實は宵の内にもうおれの家へ連れて來て置いて、約束の時刻が來たから、直ぐ連れ出さうとしたのだが、蟲が知らせたか一向動かん。いろいろなことを言つてゐて、容易に立たうとしないのだ。時刻はどんどん移るし、どうしたものだらうと思つてゐると、幸に柳瀬三郎がやつて來た。それから、柳瀬にそつと事情を述べて、柳瀬にやつて貰ふことにした。柳瀬の言ふことは大樂もよく聞くのだ。併し、柳瀬一人では危ないと思つたから松村雄之進を呼び寄せて、これにも手筈を言ひ含めた。それから、やつと四人でおれの家は出たが、大樂の奴、動もすれば他の道へ行かうとするのだ。どうもおれを疑つてゐる樣子なので、これはおれが離れた方が却つてよからうと思つた。そこで、用があると嘘をついて、三人に別れた。近道を來たので、おれの方が先になつたのだらう。もう追つつけ來る筈だ。油斷は出來んぞ。

川島　大丈夫か。

太田　大丈夫だ。二人で連れて來るのだから、容易に逃すことではない。

（遠くで人の話し聲がする。）

吉田　やつて來たやうだぞ。

（三人、急いで藪の中に隠れる。）

（柳瀬と松村が大樂を眞ん中にして、何か小聲で話し

ながら出て來る。）

（突然、柳瀨が大樂に斬りつける。大樂、柳瀨に飛びかかる。松村、後から大樂を斬り下げる。川島と吉田と太田が飛び出した時は、もう大樂は川へ轉り込んでゐる。）

太田　もう遣つてしまつたのか。

柳瀨　うむ、もう遣つてしまつた。

吉田　早く誰か首をとれ。

松村　うむ。（首をとる）

川島　死骸を殘してはいかん。（藪の中から鍬を持つて來る。）

柳瀨　鍬を持つて來たのか。

川島　袴の下へ隱して持つて來た。

吉田　早くやれ。

（川島、濱を掘る。吉田、手傳ふ。川の水がはひつて來るので、穴がなかなか深くならない。）

太田　懷にある書類を出せ。

松村　うむ。（死骸の懷から書類を出す）

太田　（風呂敷を出して）これへ包んでくれ。

松村　うむ。（書類を包む）首はどうしよう。

太田　構はんから、その儘提げて行け。（川島に）穴はまだか。

川島　砂が崩れて來るので、容易に深くならん。

（川島、一所懸命に鍬を動かす。）

太田　よし。みんなでやれ。

（一同、力を協せて穴を掘る。）

五

城內。本庄一行氏舊宅。（水野大參事が移る筈になつてゐて、既に修繕も終つてゐたのだが、大參事が捕はれの身となつたので、その儘明き家同然になつてゐた家）同じ夜の深更。

（島田、大島居、樋口、篠木、本山、川口、鹿野、井上、下川など環坐して、中央に大德利を据ゑ、茶碗で冷酒を飲んでゐる。）

島田　中村はさすが大樂の弟子だけある。小僧だと思つてゐたが、潔く切腹をしたとは豪いな。

井上　「今さらに何か思はむ武士のけふを限りの死出の山道」歌は平凡だが辭世まで讀みをつた。

鹿野　全く落ちついたものだつた。

大島居　おれの方は、なかなかそんな落ちついたことではなかつた。どうかして山縣と小野を引放さうと思つたが、どうしてもだめだ。二人一緒に遣らなければならんことになつた。幸に兵馬倥偬の間に轉戰した川口本山のやう

な勇士がゐてくれたので、たうとう豆津の濱の渡し場で遣つてしまつたが、おれなどは實に危なかつた。山縣がおれを目がけて斬りつけて來た時、若しおれが受け損じたら、それこそ命はなかつたらう。はつしと受け留めた時は、火花で向う岸の肥前がありありと見えた。(笑ふ)

(一同、笑ふ。)

島田　待て。だが、まだ安心はならん。肝心の大樂がどうなつたか分からん。川島達はどうしたのだらう。

鹿野　餘りおそいな。

大鳥居　さうだ。あれを取逃したら、吾々の苦心も水の泡だ。

井上　爲損じたのではあるまいか。

下川　いや、そんなことはあるまい。

徳本　太田はなかなか智略に富んでゐるからな。

本山　併し、腕が心配だ。

(突然、襖を排して、川島、吉田・太田、柳瀬、松村が現れる。)

大鳥居　おう、川島、どうだつた。

島田　爲損じたか。取逃したか。

(川島、默つて、大樂の首を環座の中央へ出し、その儘そこへ置かうとする。)

島田　待て。(紙を出して、疊の上に廣げる)

(川島、紙の上へ首を置く。)

(一同、瞑目。首うな垂れて、聲がない。)

島田　(稍あつて、首に向ひ、兩手を突いて)　大樂源太郎君。國難この極に至つて奈何ともし難い。百計は既に盡き果て、策の施すべきものは一もない。國の爲、君の爲やむを得ずかかる處置をとつたのだ。どうか許してくれ。追つつけこの怨みはきつと酬ゆることにする。どうぞ瞑目してくれ。

(一同、啼涙に咽ぶ。)

(樋口、茶碗に酒をつぎ、にじり出て首の前に供へる。)

樋口　大樂、大樂。君は吾々の得難い同志だつた。その同志を吾々は討つたのだ。同志が同志を殺したのだ。こんな理不盡なことがこの世にあらうか。なぜ、同志が同志を殺さなければならなかつたか。それはこれからおれ達のする爲事で分かつて來る。おれ達はこの屈辱に堪へて、更に大きな爲事をしなければならんのだ。君の肉體は亡びても、君の魂は吾々の内に殘つてゐる。君の志は吾々の手できつと貫徹して見せる。冥府で見てゐてくれ。おれ達が何をするか。おれ達が何をするか。おれ達が何をするか……(涙に咽んで、あとが言へなくなる)

(一同、肅然。)

―幕―

金玉均

主要人物

金玉均
朴泳孝
洪英植
徐光範
閔泳翊
閔台鎬
朴英敎
李寅鐘
黃龍澤
高永錫
申重模
劉大致
邊樹
松山泰藏　日本公使
今村進　日本公使館書記官
小林眞造　公使館附武官
上村中隊長
高木
岡本
井上
高橋　（日本志士）
壯士、刺客、日本兵、韓兵、その他

時代

明治十七年十一月——十二月

場所

朝鮮京城

一

明治十七年十月二十日の夜。
朝鮮京城、外衙門參議金玉均邸客間に於ける「日本酒會」。

主人、金玉均、客、代理公使今村進、公使館附武官小林眞造、志士高木、岡本、井上、高橋などの日本人に混りて、金の黨士朴泳孝、洪英植、徐光範、金の反對黨なる閔泳翊、閔台鎬、親清黨の金宏集、金允植など。

卓二つ。各の卓の上に、神仙爐、沈菜、餅、團子。日本製の酒徳利と猪口が異彩を放つてゐる。

宴は既に半。主客皆醉ふ。

（兩閔兩金と日本の志士とが爭つてゐる。）

高木　小國とはなんだ。

井上　弱國とはなんだ。

泳翊　併し、地圖の上では……

高橋　地圖の上ではいくら小さくても、膽つ魂は大きいぞ。

岡本　清國のやうにずうたいばかり大きくて血が通つてゐない國とは違ふぞ。

宏集　それはさうかも知れませんが、忌憚なく言へば、日本はまだ兵力が足りません。財力が足りません。

小林　兵力は必ずしも人數だけの問題ぢやない。日本の兵には訓練がある、規律がある、擧國一致の精誠がある。一騎當千のつはものばかりだ。

台鎬　併し、衆寡敵せずといふ詞があります。いくら日本の兵が強くても、多勢に無勢では致し方がありますまい。現に、壬午の變亂でも……

小林　待ち給へ。君は又それを言ふのか。あの時は堀本中尉が教官として來てゐただけで、日本の軍隊は來てゐなかつたのだ。それでも、三十二人の公使館員が一團となつて、國旗と公使を守りながら、正々堂々と仁川まで引き上げたのだ。とても清國人などに出來る藝當ではないぞ。

岡本　宏集君、君は現に謝罪の副使として濟物浦條約に調印をした一人ではないか。國王が國書を以て罪を謝したのだ。五十萬圓の償金も拂つたのだ。あの事件は、決して朝鮮の名譽ではない。

允植　如何にもさうです。併し、あれは大院君の排外思想が無知の暴徒を唆かしたので、決して國民全體の意志ではありません。

泳翊　その大院君を天涯萬里の異境に幽閉してくれたのも、清國の機敏な處置です。若し、あの時北洋大臣があの敏速な行動に出なかつたら、朝鮮は今どうなつてゐるか分からないのです。

岡本　その代り、モルレンドルフなどいふ怪しげな獨逸人をよこして、朝鮮の內事外交に干渉の手を延ばし始めたのだ。さうして、君達はその干渉を甘んじて受けてゐるのだ。

台鎬　でも、吾々は清國に恩があります。今日の平和は清國のお蔭で得られたのですから。

高木　「今日の平和」か。うまく言つたな。なぜ「王妃黨の勝利」とは言はんのだ。なぜ「閔族の橫暴」とは言はんのだ。

泳翊　いや、吾々は決して王妃の爲に黨を作るものでもなければ、閔族の多數を誇るものでもありません。現に、世間からは吾々の反對黨と見られてゐる金、朴、洪、徐

の諸君をさへ政府の要路に立ててゐるではありませんか。

井上　いや、それは單なる手段に過ぎない。君等は決して親日黨たる金君や朴君を快く思つてゐるのではない。

高橋　公使館を燒いても、國旗を侮辱しても、償金さへ拂へばそれで好いと思つてゐるのだからな。

台鏞　諸君は吾々が比較的淸國に親しんでゐるのを見て、不快に思つてゐられるのでありませうが、これはやむを得ないことで、實際吾々は支那のお蔭で……

岡本　もう分かつた。支那のお蔭はあつても、日本のお蔭はないと言ふのだらう。

泳翊　必ずしもさうだとは言ひません。併し日本が吾々に對して十分親切だといふことはちと言ひ兼ねるのです。

今村　（始めて口を開く）なぜです。なぜ、そんなことを言ふのです。

泳翊　私は亞米利加へ參る時、日本へ寄りました。そして、亞米利加人のチヤウタンといふものを通辯に雇つて連れて行かうとすると、なぜか日本の政府はそれを阻害したのです。

今村　それは、その亞米利加人の資格に缺けるところがあつたからでせう。それは寧ろ日本政府の親切と言はなければなりません。

泳翊　そんなら、外に適當な人を世話してくれれば好いのですが、それもしてくれないのです。

（一同無言。）

台鏞　（冷笑して）兎に角、吾々は淸國に恩はあつても、日本に恩は……

岡本　ないと言ふのか。

泳翊　（斷乎と）ありません。

高木／井上　（同時に）何を。生意氣な。

（日本人一同、立ち上がる。）

（南閔兩金も立ち上がる。）

（あぶなく摑み合ひになりさうになる。）

（今まで沈默してゐた金玉均、驚いて、その間へ割つてはひる。）

金　まあ、待ち給へ。今夜の會は親睦の爲にやつたのではないか。親睦會が討論會になつてはいかん。（南閔兩金に）まあ、諸君もさう興奮しないでくれ給へ。けふは日本酒の會だ。日本の諸君に一歩讓るさ。

泳翊　いや、讓るといふことは出來ん。正義は飽くまでも正義だ。

台鏞　第一、こんな酒なんか、ちつともうまくない。

允植　老酒の方がよつぽどうまい。

高橋│岡本│（同時に）何を無禮な。

（摑みかからうとする。）

金（兩閔兩金に）まあ、諸君は醉つてゐる。今夜は歸り給へ。あしたになれば分かることだ。好いさ、好いさ。朝鮮は如何にも支那のお蔭を蒙つてゐる。だが、日本の世話にもなつてゐないことはない。それで好い、それで好い。分かつた、分かつた。

（金は押し出すやうにして、兩閔兩金を部屋の外へ連れて出る。）

（朴、洪、徐などが頻に日本の志士を宥める。）

（直ぐ、金が一人で歸つて來る。）

高木（まだ興奮してゐる）おい、金君。君はどうして今夜あんな奴等を呼んだのだ。

井上　みんな君の反對黨ぢやないか。

岡本　閔泳翊なんて奴は、面を見ても蟲唾が走る。あんな奴が前にゐると、折角灘の生一本を振舞はれても、一向うまく飲めやせん。

高橋　不愉快つたらない。二言目には、日本のことを小國だの弱國だのと言やがる。

高木　彼等には支那より有難い國はないのだ。

金（徐に笑つて）まあ、まあ、諸君、僕があやまるから赦してくれ給へ。

高木（しつこく）だが、なんだつて、あんな奴等を呼んだのだ。

金　それは僕も公明な態度が執りたかつたからだ。吾黨ばかりで集まると、直ぐと目をつけられるからな。

井上　目をつけられたつて構はんぢやないか。君の親日黨たることは既に天下周知の事實なんだから。

金　いや、併し、輕擧盲動は出來ん。吾々の目ざすところは高遠だ。一時の快を貪つて、國家百年の計を失つてはならん。

今村（宥めるやうに）まあ、まあ、兎に角、これで水入らずになつたんだから、一つ愉快に飲み直さうぢやないか。

洪　一時はどうなるかと思つたが、まあ無事に濟んで結構だつた。

朴　それでも、よく先生達、おとなしく歸つたものだな。

今村　そこは金君の外交的手腕ですよ。

徐　いや、彼等の所謂「衆寡敵せず」主義に依るものでせう。

（一同笑ふ。）

（酒盃、また廻る。）

金（今村に）併しねえ、今村さん。僕はどうも日本政府の眞意が測りかねますよ。清國の覊絆は、どうしても脫し

なければならんと思つてゐますが、さうかと言つて、今の狀態では、日本に全然依賴することも出來ないのです。

今村　すると、日本が信じられんと言ふのですか。

金　さうです。日本政府の腰がきまつてゐないと思ふのです。

小林　なぜ、そんなことを言ふのですか。

金　小林中隊長にはまだお話しませんでしたが、今村書記官にはこなひだも話したことです。僕が日本に依賴するやうになつたのは、壬午の亂の謝罪使として朴君と一緒に東京へ行つた時からのことです。あの時は、實際日本は恃むに足る國だと思ひました。軍備擴張も決して日本の爲のみではないと言はれた井上外務卿の詞にも、言外に深い意味が讀まれました。國債問題も委任狀さへあればといふところまで話が進みました。ところが、國へ歸ると間もなく、趙寧夏の奴が淸國からモルレンドルフといふ獨逸人を顧問に雇つて來ました。閔泳穆や閔泳翊は、直ぐとこいつに附和して自家の利益を計り始めました。モルレンドルフの背後に淸國のゐることは疑を容れないのです。北洋大臣は外洋人の顧問を通じて朝鮮の內政に干涉するといふ實に巧妙な手段を執つたのです。僕は事毎にモルレンドルフと爭ひました。當五當十錢の鑄造問題などに就いては、半日も論爭を續けました。僕は貨政の弊を說いて、國債の途に優れることを主張したのです。幸に主上は僕の意見をお納れ下すつて、三百萬圓の國債委任狀をお渡し下すつたのです。閔族やモルレンドルフは隨分妨害運動をしましたが、もう主上の御決心が堅いのだから、どうにもしやうがありません。そこで、モルレンドルフは搦手から僕を陷れようとしたのですね。巧に松山公使に近づいて、僕のことを惡しざまに言つたものです。顧問の外國人だとは言ひながら、兎にも角にも朝鮮の內政に參與してゐる人の詞です。輕卒な松山公使は忽ちそれを信じてしまつたのですね。公使の僕に對する態度が急に變つて來たのです。

洪　君が委任狀を持つて出發する時、松山公使に會つて、モルレンドルフを信じてはいけないと言つたら、公使はひどく怒つて、そんな莫迦なことがあるものかと言つたさうだね。

金　さうだ。怒りやうと言つたらなかつた。（小林に）公使はもうすつかり籠絡され切つてゐたのですね。併し、僕は平氣でした。一外交吏がどう思つたつて構はない。僕の相手は日本の政府だ。さう思つて、意氣揚々と出發したものです。ところが、日本へ着いて見ると驚きました。井上外務卿の態度がまるで以前とは違ふのです。初めからもう受けつけないと言ふ風なのですね。委任狀を

出して見せても、一向に信用しない樣子なのです……僕は咄嗟に氣がつきました。松山公使がもう外務卿のところへ、なんとか電報を打つてよこしたのに相違ないと思つたのです。ところが、だんだん日本政府の樣子を見てゐると、單に松山公使の反感だけが原因ではないのですね。僕が朝鮮へ歸つてゐる僅數ヶ月の間に、日本政府その者の方針がまるで變つてしまつてゐたのですね。前には可なり積極的なことを言つてゐたのが、今度は暫く手を斂めて動かないといふ態度なのですね。これではどうにもしやうがないと思ひましたが、金を持つて歸らなければ主上に對して申譯がありませんから、亞米利加公使のビンガムといふのに泣きついて見ましたが、歐米ではまだ朝鮮がどういふ國であるかをさへ知らないのですから、これも物にはなりません。爲方がなしに第一銀行の澁澤さんに賴んで、たとひ十萬でも二十萬でも借りて歸らうと思つたのですが、これも外務卿の許可がなければといふことで、結局だめでした。散々な失敗で、國へ歸つて來ると、いつの間にか當五錢が鑄造されて行はれてゐるといふ始末です。僕の顏は日本のお蔭でめちやめちやに潰れたのです。もうさうなると、閔族は公然僕に反對の態度をとつて、益清國と密接な關係を結ぶ。モルレンドルフの如きは、朝鮮の害は當五錢に非ずして金玉均なりとまで公言するやうになりました。僕はもうつくづく厭になつて、無理にお暇を願つて、一時田舍へ引込んでしまひました。

徐　それが又引つ張り出されるやうになつたのは、日本通商條約の紛議からだつたかな。

金　ああ、さうだ。もうその時は松山公使が日本へ歸つたあとで、今村さんが代理公使になつてゐたから、總てが圓滑に行つた。かう言ふとお世辭のやうになるが、今村さんは實際親切だし、吾黨の熱誠をも十分認めてゐてくれるのだが、日本の政府の態度が今のやうぢやあ、どうにもならんよ。

岡本　成程、君の言ふことは分かつた。併し、政府がどういふ態度を執らうと、吾々日本の國士が君達の味方をすれば好いではないか。僕等は君達の熱誠に動かされて、君達の運動を助けようとしてゐるのだ。人數が足りなければ、いくらでも日本から呼ぶぞ。

金　いや、その御厚志は有難いが、やはりそれだけでは事を起すことは出來んよ。朝鮮の惡政を除くには閔族を滅ぼさなければならん。その閔族の背後には淸國が控へてゐるのだ。

井上　淸國が控へてゐようと何が控へてゐようと、ちつとも恐れることはないではないか。

金　それは大言壯語に過ぎん。一國家に當るには、少くとも一國家に依賴しなければならん。僕はその依賴しようとしてゐた國家に裏切られたのだ。僕は親日黨の故を以て王妃黨に憎まれながら、僕自身日本を信ずることが出來ないといふ窮境に陷つてゐるのだ。

今村　いや、金君、それは言ひ過ぎる。松山公使との問題は、双方の意志に疏通を缺いたところがあつたからです。成程、日本の政府があなたに對して冷淡だつたのは、松山公使の報告があつたからでもありませう。併し、公使があなたを疑つたのは、あの時の時勢が時勢だつたからです。公使ももう今日ではそれを後悔してをられるに違ひありません。併し、それは個人の感情問題で、日本政府の朝鮮に對する政略は一度でも變つたことはない筈です。況や、目下は安南問題から淸國と佛蘭西との間に事が起らうとしてゐる時です。この際若しあなた方が起てば、日本の政府も決して唯傍觀はしてゐまいと思ひます。

金　（探るやうに）今村さん。大局勢の好いことを言ひますが、して見ると、日本の政府の態度は又變つて來たと見えますね。

今村　それは初めから變化はないと言つてゐるではありませんか。

金　さうすると、あなたの今のお詞は、あなた一個人としてのお詞だけではないのですね。

今村　それは前言の限りではありません。

金　それです。それだから、僕は疑はざるを得ないのです。

今村　併し、私は自分に與へられてゐない權限を使用することは出來ないのです。兎に角、もう十日程すると、松山公使が歸任する筈ですから、さういふ問題は直接公使にお話になるが好いと思ひます。

金　公使が歸るといふことは僕も聞きました。併し、公使は僕に會ふでせうか。

今村　勿論、喜んで會ひます。

金　少しも恥ぢずにですか。

今村　それは私には分かりません。併し、公使はきつとあなたにお詫を言ふでせう。

金　さうですかねえ。

（急に風が吹いて來る。）

（戶障子ががたがたと鳴る。）

（一同、ぎよつとする。）

（風だと分かると、一同笑ふ。）

高橋　なんだ。風か。おどかしやあがる。

洪　いつでも、十月の今頃になると、きつと大風が吹くのだ。

徐　ちやうど神仙爐を使ひはじめる時分だ。

井上　この、餅や團子にも謂はれがあるのか。

徐　これは農家の祝だ。豐年の祝だ。

朴　ねえ、諸君、この風については、面白い傳説があるんだ。

高木　ほう。どんなことだ。

朴　昔高麗の王が船で江華島へ行幸をした時、船頭の孫石といふ者が舟を難所へ進めた。すると、王は忽ち疑つて、臣下に命じてこれを斬らせた。その難所を今に孫石頃と言つてゐる。毎年今頃になると、孫石の怨で風が吹くのだと言つて、江華島では決して船を出さないのだ。

金　（突然）それだ。その傳説が朝鮮國王の象徴だ。

岡本　疑ひ深いと言ふのかか。

金　いや、さうではない。船は是非とも難所を漕ぎ拔けなければならない場合がある。それが國王には分からないのだ。

井上　いや、疑ひ深いのは朝鮮人一般の天性だ。

金　いや、決してさうではない。

高木　さうではないと言ひながら、現に君は日本人を疑つてゐるのだ。

金　さうだ。だから、僕は寂しいのだ。

（金、苦しげに笑ふ。）

（一同、沈默。）

（風、ますます吹き募る。）

二

同年同月卅一日の午後。

京城、日本公使館の寢室。

松山公使。病褥にゐる。

村岡醫師、診察を終り、歸りかけてゐる。

松山　どうです。もうあしたは起きられませうか。

村岡　ええ、もう熱もとれましたから、お起きになつても構ひません。唯今年は特別に氣候が惡いやうですから、外出をなさる時は、餘程御注意にならんといけません。

松山　有難う。やつぱり船の中で風を引いたのですね。

村岡　さうです。それに多少疲勞もあるやうです。あとで、もう一日分藥をお屆けしますから、どうか召し上がつて下さい。

松山　ええ、有難う。

村岡　では、これで。

（村岡醫師、一禮して去る。）

（松山、枕の側に置いてある手紙を一二通開封して讀む。）

（今村書記官、登場。）

今村　あの、金玉均が訪ねて參りましたが……

松山　會はう。

今村　お會ひになりますか。

松山　あの男なら、遠慮がないから、寢室で會つても構はんだらう。

今村　そりやあ構ひますまい。併し、金は大分閣下を恨んでゐるやうですから……

松山　會はん方が好いと言ふのか。いや、それは却つて會つた方が好い。あの男は大した經綸のある人物ではないが、國を思ふ意氣が壯で、爲事の上にも機敏なところがある。僕はモルレンドルフの辯口に載せられて、大分彼を誤解したが、やつぱり彼は日本にとつて有用の人物であることが分かつた。それに、きのふも君に話した通り、政府の方針ももうすつかり定つたのだから、今後はどこまでも彼等と親しくして行かなければならん……

今村　では、ここでお會ひになるのですね。

松山　うむ。この儘會はう。直ぐ通してくれ。

今村　宜しうございます。

（今村、去る。）

（入れ違ひに、金がはひつて來る。）

松山　（半起き上かりて）おう、金君、暫くだつた。

金　暫くでした。御病氣は如何ですか。

松山　いや、もう起きても好いのだが、用心して寢てゐるのだ。きのふも金宏集と金允植がやつて來たから、會つて、暫く話したよ。

金　僕も一緒に伺ふ筈だつたのですが、新築の運動場へ亜米利加公使や英吉利領事を招いてゐたので、失禮しました。

松山　フウドさんやアストンさんは相變らずか。

金　相變らずです。我黨に對しては絶えず好意を持つてくれてゐますが、いつも唯「時機を待て」と言ふばかりで、あまり深入はしたくない樣子なのです。それでも、日本のやうに態度の始終豹變するのよりは、まだ增しです。

松山　いや、君、それは君の誤解だ。日本の態度に決して變化はない。僕はきのふも金宏集にさう言つてやつた。「朝鮮の外衙門には清國の奴隷となつてゐる者が少くない。僕はそんな連中と事を共にするのは厭だ。」と。それから、金允植にも言つてやつた。「君などは漢學も出來るし、清國に意を傾けてゐるさうだから、いつそ清國の官吏になつてしまつたらどうだ。」と。

金　（稍意外の面持にて）ほんとにそんなことを仰しやつたのですか。

松山　（得意げに）ほんとに言つた。外務協辦の尹泰駿にも會つたら、うんと罵倒してやるつもりだ。

金　それ程のあなたが、どうして去年はあんなに僕のする

ことを妨害なすつたのですか。僕はまだどうしてもあなたを信ずることが出來ません。實はけふ伺つたのも、あの時の怨を言ひに參つたのです。

松山 (默つてゐる)

金 朝鮮の國勢は壬午の變以來、危急存亡に瀕してゐます。大院君が淸國へ擒になつてから、宮廷は外戚閔族の跋扈跳梁に委せられてをります。國民は惡政に苦しみ、官吏は私腹を肥やすに日もこれ足らざる狀態です。百事君主を誣議して害を國民に爲すものは卽ち閔黨です。あなたはさう思ひませんか。

松山 (默つてゐる)

金 その閔黨の背後にあつて、傀儡の糸を操るものが、卽ちモルレンドルフなのです、陳樹棠なのです、袁世凱なのです、更に北洋大臣李鴻章なのです。横暴なる淸國の政府なのです、あなたはさう思ひませんか。

松山 (默つてゐる)

金 朝鮮をこの危急から救ふ策は、先づ第一に淸國の羈絆を脫することです。それには政府の改革です。兵力の充實です。先立つものは何よりも財力です。そこで、僕は實狀を主上に訴へて、國債委任狀を賜はりました。喜び勇んで、日本へ渡つて見ると、井上外務卿の僕に對する態度が、まるで以前とは違つてゐるではありませんか。涙を呑んで亞米利加公使に縋りましたが、これもだめでした。第一銀行の澁澤さんに賴んで、たとひ豫定の十分の一でも二十分の一でも借りようとしましたが、これも外務卿の許可がないからと言つて拒ねつけられました。僕の計畫は悉く畫餅に歸してしまつたのです。(泣く) 松山さん、一體、これは誰がしたことですか。だ、誰がしたことですか。

松山 (目を閉ぢて、尙沈默を續ける)

金 僕は期せずして主上を欺いたのです。閔黨は指をさして僕を笑ひます。モルレンドルフは公然僕を國家の荼毒だと主張します。僕は身の置きどころがなくて、一時東郊の別莊へ姿を隱してしまひました。その殘念さ口惜しさは、いまだに忘れることが出來ません。(泣く) 松山さん、一體、これは誰がしたことですか。だ、誰がしたことですか。

松山 (やうやく口を開く) 分かつた。分かりました。君の言ふことは一々尤もだ。あれは全く僕の誤解から起つたことで、今になつて見ると、なんともお詫びの申しやうがない。君が日本で非常に困られたことも、實は聞いてみんな知つてゐる。あれは全く僕が人にあやまられたので、なんとも申譯がない。併し、いくら詫びたところで、もう過ぎ去つたことはどうにもならない。この償ひ

はきつとするから、まあ將來を䀹目してくれ給へ。
金　（まだ相手を信じないで）それでは、少くとも僕に對するあなたの疑惑は、もう解けたのですね。
松山　解けたどころではない。僕は微力ながら君達を助けて、朝鮮の改革に盡さうとさへしてゐるのだ。
金　（皮肉に笑つて）それはさういふ風に日本政府の方針が變つて來たからですか。
松山　（まじめに）國家の方針といふものは、決して一所に膠着すべきものではない。時に從つて變じ、勢に應じて動くのが國家の政策だ。
金　僕は三年前から、朝鮮を改革して、絆を清國から脫するには、日本に力を藉りるより外に手段はないと思つてゐました。然るに、その日本の態度は變幻常なき狀態で、吾黨はそれが爲にどれ程困苦を重ねて來たか分からないのです。僕は今になつて、あなたがそんなことを仰しやる意味が分かりません。
松山　分からんことがあるものか。佛蘭西は今安南問題に端を發して、既にクウルベ提督を東方に遂らうとしてゐる。清國は今累卵の危きにゐるのだ。この機會を利用しないで、外に機會があるものか。
（突然、今村書記官が現れる。）
今村　閔泳翊が參りましたが……

金　それでは、僕は歸りませう。（今村に）裏門から出て行きますから、どうか閔には僕の來たことは言はないで下さい。（松山に）あなたもどうぞ。
松山　大丈夫だ。では、もう行くか。折角自重してくれ給へ。
（金、默つて、別の扉口から去る。）
松山　（今村に）閔を通してくれ給へ。
今村　お會ひになりますか。
松山　會ふ。
（今村、去る。）
（やがて、閔がはひつて來る。）

三

同年十一月一日の夜。
金玉均邸の密室。
金玉均、洪英植、徐光範、卓を圍んで、小酌す。
徐　すると、日本政府の方針が變つて來たのだな。
金　確に變つて來たに違ひない。それでなくて、あの弱蟲の松山が、どうしてあんな勢の好いことを言ふものか。
洪　そんな勢の好いことを言つたのか。
金　勢が好いと言ふよりは、寧ろ過激なのだ。金宏集や金允植なども、ひどくやつつけたらしい。

洪　清黨だといふところでか。
金　さうだ。尹泰駿も今にやつつけてやるなどと言つてゐた。だが、僕は一度ひどい目に會つたせゐか、どうもあの松山といふ人間が信じられん。
徐　どうも輕卒な男らしいな。
金　非常に輕卒な男だ。
（扉を叩く音がする。）
金　誰だ。
（外で聲がする。）
聲　（暗號を言ふ）天。
金　（暗號で答へる）ヨロシ。
（朴がはひつて來る。）
金　公使館へ行つて來たか。
朴　行つて來た。
金　公使はゐたか。
朴　ゐた
金　どんなことを言つてゐた。
朴　實に過激なことを言つてゐた。清國は今度の戰で佛蘭西に敗けるにきまつてゐる。君等が改革の爲に立つのは今を措いて外にはないなどと。
金　それから、まだ何か言つてゐたか。
朴　大院君の拘禁は不法だ。あれをあの儘にして置く法はないとも言つてゐた。
金　もう他に言つてゐたことはないか。
朴　朝鮮の內政は是非とも改革しなければならん。それには、歐米の公法に從つて、速に他國の覊絆を脫しなければならん。それは日本政府も望むところだ……
金　はつきり、そんなことを言つたか。
朴　うむ、はつきり言つた。
金　だが、僕にはまだ信じられんな。言ふことがあんまり突飛だから。
朴　實際、一國の公使たる者があゝ輕々しく物を言つては困るな。
金　僕もそれを言ふのだ。折角ここまで計畫が進んで來てゐるのに、松山の輕卒な行動で事が破れるやうなことになつたとしたら實に殘念ではないか。
徐　もうかうなつたら、一刻も早く事を擧げることだな。機先を制することだな。
洪　僕も同意だ。もうかうなつたら援助などは入らん。僕は僕の一身を挺して國家の爲に戰ふつもりだ。天若し僕を憐まば、事はおのづから成らう。
金　（笑つて）君の熱誠は認めるが、どうもさう簡單にはいかんよ。事大黨の宮廷に張つてゐる根は深いし、又それに培つてゐる淵源も可なりに廣く遠いのだからな。

金　（扉を叩く音がする。）
金　誰だ。
辟　（暗號を言ふ）　天。
金　（暗號で答へる）　ヨロシ。
（朴の兄、朴英敎が顏色を變へて來る。）
朴　どうしました。兄さん。
英敎　あした、松山公使が參内をするさうだ。
朴　うむ、それは僕も聞いてゐますが……
英敎　ところが、謁見式が濟んだら、秘密で主上に申し上げたいことがあるから、密室で拜謁が願ひたいといふのだ。今、それで外衙門は揉つた揉んだの最中だ。
金　それはいかん。早速參内して、事情を確めて來よう。
（立つ）　どうも實に困るな。いきなりそんなことを言ひ出せば、人が騷ぐにきまつてゐるぢやないか。
朴　ほんとにさうだ。（立つ）　ぢやあ、僕も一緒に行かう。今夜は又徹夜だぞ。
金　勿論だ。
（二人、出かける。）

四

同年同月二日の午前。
王宮内、誠正閣。

日本公使接伴の諸閣及諸大臣の奧に參つてゐるのが見える。
公使に隨行して來た今村書記官が、ひとりで廊下に出てゐる。
禮服を著た金玉均が、急いで出て來て、直ぐ今村の側へ寄る。
今村　謁見は濟みましたか。
金　無事に濟みました。今、人拂ひで密奏の最中です。
今村　誰も侍立してゐないのですか。
金　主上は僕に侍立をお命じになつたのですが、嫌疑を受けるのは厭ですから、李祖淵に代つて立つて貰ひました。
今村　（笑つて）　相變らず用心深いことですな。
金　僕は輕忽なことをするのは嫌ひです。
今村　併し、もうここまで來たら五十歩百歩ではありませんか。君は獻上品を見ましたか。
金　見ました。村田銃十六挺でしたね。
今村　外務卿からのと兩方併せて十六挺です。
金　あの獻上品にも意味があるのですか。
今村　（笑つて）　勿論です。
金　併し、僕には信じられませんな。それに、公使の言動の輕卒なのには驚く外はありません。（聲を潜めて）　あんな態度をとつて、事前に事が破れたらどうするのでせ

う。かうしてゐる間も、主上に向つて、どんな過激な言辭を弄してゐるか分からないのです。僕は心配でなりません。

今村　（笑つて）　大丈夫です。心配することはありません。もう日本の政府の方針はきまつてゐるのですから。又それでなければ、天性柔弱な松山公使が、あんな態度に出る筈はないのです。

金　たとひ日本政府の方針が急に變つたにしても、公使の擧動は餘りに過激に過ぎます。これでは、事を擧げるにも擧げられません。

今村　（聲を潜めて）　心配はありません。直ぐに著手するが好いです。

（松山公使、李祖淵を從へて現れる。）

金　（走り寄る）　密奏は濟みましたか。

松山　濟んだ。（得意さうに、李祖淵を顧みながら）　君は密奏の內容を知つてゐるか。

金　知りません。

松山　（大きな聲で）　壬午の亂の償金の內、四十萬圓お返し申して來たのだ。

金　（驚く）　えつ。

松山　但し、この金は軍備の外には一切使つて貰ひたくないといふのが日本の要求だ。（得意げに笑つて）　どうだ。金君。分かつたか。

（間。）

金　（小聲に、獨語のやうに）　いや、分からん……僕には信じられん。どうしても信じられん……

（諸閔諸大臣、公使を迎へに出て來る。）

五

同年同月四日の夕。

朴泳孝邸の一室。

主人朴、客金玉均、洪英植、徐光範、鼎座す。

洪　きのふの天長節に韓圭稷が呼ばれて來てゐたのは、どういふわけだらう。

金　あれが日本人の迂遠なところだ。松山は韓を日本の味方だと思つてゐるのだ。

洪　抱腹絶倒だね。

徐　併し、誰だか淸國領事のことを、骨なしの海月だと言つたのは痛快だつたな。

金　あれは岡本君だ。

徐　當人の陳には勿論分からないし、陳がモルレンドルフに聞いても分からないと言ふし、アストンは日本語が分かる癖に、分からんやうな顔をしてるのだから面白かつた。

金　それより、きのふ僕はあの席で、はじめて上村中隊長に會つたが、あの人はなかなかしつかりした人らしいな。

徐　うむ、あの人は本國でもなかなか評判の好い人だ。頭は單純な人だが、頼りにはなる人だ。

金　僕はああいふ重厚な人が好きだな。松山のやうな輕佻な人間は大嫌ひだ　けふは關稅問題で外衙門へ來たのは好いが、談判が濟むと、衆人稠座の中で淸國の現狀を罵倒して、今にも日淸兵を交へさうなことを言ふのだ。あんな輕卒な人物はない。

朴　併し、今の場合、あの人を頼りにするより、他に頼るところはないのだからな。

金　僕はあんまり頼りにはしてゐないな。

朴　頼りにしないと言つたつて、日本兵の援助がなければ、どうにもしやうはないぢやないか。

金　僕もそれで苦しんでゐるのだ。

徐　僕等の部下の訓練がもう少し出來てゐれば、日兵などは頼りにしないのだがな。

朴　兎に角、もうかうなつては、どうにもしやうがない。たとひ松山公使は信じられんでも、あの人があああいふ態度をとるやうになつたのは、日本政府の方針が決定したからに違ひない。現に、をととひ償金を還納したのでも、それは分かるではないか。

金　ところが、僕にはどうもまだ信じられんのだ。

朴　信じられんと言つて、現に今夜今村書記官を呼んだのも、愈吾々の決心を打明ける爲ではなかつたか。

金　それはさうだが……

（今村書記官、突然姿を現す。）

今村　やあ、おそくなつて失敬しました――今まで公使につかまつてゐたのでな。

朴　お忙しいところを、御足勞でした。

今村　何か重大な事件ですか。

金　（もはや遲疑の色なく）至急あなたのお耳に入れて置きたいことがありますので。

今村　ほう。どういふことですか。

金　諸君、もつと側へ寄つてくれ給へ。

（一同、座を進める。）

金　先づ第一にお斷りして置きたいのは、きのふ日本公使館へお招きになつた韓圭稷が全く日本黨ではないといふことです。

今村　さうか。それは失敗でしたな。僕もあれは親露派だと思つてゐたのだが、公使がどうしても呼ぶといふものだから……

朴　親露派でもあれば、淸黨でもあるのです。兎に角、立

漢な事大黨で、醜類の最たるものです。

今村　いや、それは失敗でした。今後はそのつもりでつきあひませう。（間）事件といふのはそれだけですか。

金　いや、それだけではありません。もつと重大なことがあるのです。

今村　ほう。まだあるのですか。

金　（聲を潜めて）愈例の計畫を實行することになりました。

今村　（少しも驚かずに）好いでせう。おやりなさい。併し、その方法は。

金　第一策は刺客に淸國人の裝をさせて、一擧に閔泳穆、韓圭稷、李祖淵の三人を屠るのです。そして、その罪を閔臺鎬父子になすりつけるのです。

今村　併し、そんなことがさう巧く行くでせうか。

金　第二策は京畿の監司沈相薰に説いて、宴會を白鹿洞の別莊で催させるのです。そして、その席で事を擧げるのです。

朴　白鹿洞には洪君の別莊もありますし、あたりも靜で、事を行ふには屈强の場所なのです。

今村　併し、沈は近い内に轉任になるといふ噂ではありませんか。

金　それでは、第三策に依りませう。近い内に郵政局の新築が落成しますから、その披露の宴で事を擧げるのです。

今村　併し、そこへは各國の公使や領事が列席するでせう。

金　勿論です。

今村　そんなところで事を擧げて、若し關係のない者に累を及ぼしたら、どうするのです。

金　多少の犧牲はやむを得ません。

今村　でも、若しそれが國際問題にでもなつたら……

金　萬々そんなことはありません。

今村　それが保證出來ますか。

金　出來ます。

今村　（笑つて）そんなら、さうするのも好いでせう。

金　さういふ際には、勿論吾々の味方をして下さるでせうね。

今村　日本の態度はもう決定してゐます。それはもう幾度も君にさう言つてゐるではありませんか。

金　宜しい。分かりました。

今村　話はそれだけですか。

金　それだけです。併し、この事はまだ公使にも言はないで置いて下さい。

今村　言はない方が好ければ、言はずに置きませう。（立つ）では、餘り長くゐても怪しまれますから、これで失禮します。

徐　（一同、挨拶をする。今村、去る。朴、送つて出る。）

　金君、僕等はまだ一向聞いてゐなかつたが、今の計畫はほんとなのかね。

金　なあにでたらめさ。朴君と相談して、唯今村の氣を引いて見たのさ。

徐　さうか。

洪　なあんだ。

（二人、哄笑する。）

（朴が歸つて來る。）

六

同年同月十一日の夜半。

金玉均の密室。

金と朴と徐と、卓を圍んで小酌す。

朴　英國領事の意見はどうなのだ。

金　アストンの意見はかうだ。世間では日淸が今にも兵を交へるやうに言ふが、事實は決してさうではない。成程日本の軍隊は淸國より精銳でもあらうが、氣の毒なことに財政が甚しく逼迫してゐる。日本人は利口だから、決して、この際干戈を交へるやうなことはあるまい。松山公使が頻にそんなことを言ふのは、朝鮮人に對する虛勢に過ぎまいと、かう言ふのだ—— 僕は確に當つてゐると思ふた。あの、六日の招魂祭の餘興などは、殆ど兒戲に類してゐる。

徐　うむ。あの赤白か。

朴　僕は知らないが、何をしたのだ。

徐　上村中隊長の兵を赤組白組に分けて擊劍をさせたのだ。赤が日本で、白が淸國だと言ふのだ。赤が勝つと、松山公使は躍り上がつて喜んだ。吉兆だ吉兆だと叫んでな。

金　ばかばかしい。僕はなんにも知らないものだから、その明くる日、閭巷に寄せて日館を訪ねて、松山に最後の決心を吐露したのだが、あとで今の赤白の話を聞いて、ばかばかしくなつて來た。

（扉を叩く音がする。）

金　李寅鍾が歸つて來たかな——誰だ。

聲　天。

金　ヨロシ。

（壯士李寅鍾、登場。）

金　どうだ。様子が分かつたか。

李　分かりました。袁世凱は五六日前から密々に軍中に令を下して、夜半でも帶を解いたり履を脫いだりすることを許さないさうです。兵士の外出なども一切許可しないさうです。閔泳翊も右營使の資格で、東別宮を離れないさうです。さうして、袁と同じやうに一刻も兵士に武裝

を解かせないさうです。前營大將の韓圭稷も、左營大將の李祖淵も、戰時と同じ警備をしてゐるさうです。

朴　さあ、愈始まつたぞ。

金　徐君、君は直ぐ載弼のところへ行つて、上村中隊長にこの報告をさせてくれ給へ。これはおそくても今夜の內が好い。朴君は夜が明けたら直ぐ洪君と一緒に松山公使のところへこの事を傳へてくれ給へ。

（朴と徐、立ち上がる。）

（途端に、銃聲霰のやうに聞える。）

金　なんだ。

徐　何だらう。

朴　この夜なかに。

李　さては愈始まりましたかな。

金　そんな筈はない。そんな筈はない。

（壯士黃龍澤が飛び込んで來る。）

李　どうしたのだ。

金　何事が起つたのだ。

黃　（息を切らしながら）なんでもありません。日本の兵士が不時演習を行つてゐるのです。（息を切らしながら）私も驚いて駈けつけたのですが、演習だつたので、安心しました。

金　（大喝する）ばか。ばか。松山といふ奴は何といふばかなことをするのだ。

七

同年同月十五日の晝。

日本公使館の一室。

金玉均と松山公使、對座す。

松山　お驚きになつたさうだな。

金　お驚きになるのが當り前です。僕だつて驚きました。十二日の朝早くお召しがあつたので、早速參內しますと、前の晩からまだお休みにならずに入らつしやるのです。

松山　それはお氣の毒のことをしたな。併し、外衙門からお使があつたので、一應辯明をして置いたから、もうお分かりになつたことだらう。

金　何がお分かりになつたと仰しやるのです。

松山　不時演習の意味が。

金　僕には分かりません。

松山　分からん 君に分からんと言ふのは不思議だ。第一、あれは僕の知らんことだ。併し、聞くところに依れば袁世凱の屯營でも、君の國の四營でも、殆ど戰時に變らない警備をしてゐるさうではないか。日本ばかりが悠暢に構へてゐることは出來ない。それは規模の大きな演習なら、一應照會もしようが、不時演習は兵士の勤怠を見る

爲に、突然やるところに値打があるのだ。不時演習を前から報告してしまつては、なんにもなりはしない。

金（憤然と）いや、そんな講義はあなたに聞くまでもありません。

松山　それでは、なぜ分からんなどと言ふのだ。

金　僕は唯目下の形勢に注意して貰ひたいのです。目下の形勢に注意して、もう少し愼重な態度がとつて貰ひたいと言ふのです。事もないのに袁世凱が軍備を嚴にする。閔泳翊が一緒になつて、戒嚴これ努める。この二事だけでも、日本の爲に主上はどんなに御心を苦しめてをられるか分からないのです。それだのに、日本があんな事をしてくれては、主上の御心配も水の泡になつてしまふではありませんか。唯さへ日淸交戰の噂が高いのに、あんなことをされては、人心愈恟々たるばかりです。僕は不時演習の可否を論じてゐるのではありません。唯、その時を得ないのを難じてゐるのです。

松山（笑つて）まあ、さう心配せんでも好いさ。なあに、今に淸國軍の方でも始めるよ。

金　そ、そんな不眞面目な、そんな……（殆ど泣かんばかりに憤慨する

（書記生某、登場。）

書記生　金さん、お宅から急用ださうで、お迎ひが見えました。

金（直ぐと氣持を取直して）有難う。直ぐ歸ると言つて下さい。

書記生　は。

（書記生、去る。）

金　松山さん。今のは冗談だと思ひますが、どうかもうこれからは輕々しいことを仰しやらないで下さい。

松山　分かつた、分かつた。安心してゐ給へ。

金　では、これで失禮します。

（金、去る。）

（今村書記官、登場。）

今村　大分金をおいぢめになりましたな。

松山　あいつはどうも正直過ぎるよ。その癖、どうしてもおれを信じられんのだ。

今村　その癖、力にはしてゐるのですが……

松山　それが彼等の分らんところさ。

（松山、笑ふ。）

（今村も誘はれて笑ふ。）

八

同年同月十六日の晝。

劉大致の家。

劉、一人病床にゐる。

金玉均、朴泳孝、連れ立つて登場。

二人、劉の前に跪拜する。

劉、體をもたげる。

金　どうか、先生。その儘に、その儘に。

朴　國事に忙しいので、つい御不沙汰をいたしましたが、御容態は如何でございます。

劉　いや、わしの容態よりは國家の容態だ。日本の公使が再來してから、ひどく物情騷然としてゐるやうだが、君等の計畫はどうなつた。わしはそればかり心配してゐるのだ。

金　時々御報告に上がると好いのですが、お上の御用と同志の會合に寸暇も得られないので、つい御心配をかけるやうなことになつてしまひました。併し、計畫は著々進行してをりますから、どうか御安心を願ひます。

劉　それは結構だ。わしはまあ、出來るだけ早いが好いと思ふな。併し、日本政府の方針はどうなのだ。それもわしは心配してゐるのだが……君等は日本の眞意を十分に知つてゐるのか。

金　相當には知つてをります。日本の政府も今度は餘程堅い決心をしてをるやうです。併し、たとひ日本政府の援助がなくても、もう起たなければならない時が來ました。目下の朝鮮は糧なくして背水の陣を敷いてゐるやうなものです。危急は刻々に迫つて來てゐます。もう日本の態度如何などは論じてをられません。以前、僕等をあれ程疎外した松山公使が、今度來てからの應援ぶりは餘りに過激で、却つて禍を僕等に及ぼしさうですが、これも時です。僕等は運を天に委して、一死國家に奉ずる覺悟です。どうか、先生、心を安んじて御攝養下さい。

劉　わしの心配してゐるのは、日本兵が僅二百人しかゐないことだ。成程、訓練や規律は淸國軍に優つてゐようが、淸兵は二千からゐる。數に於いて餘りの相違だ。わしはそれが氣遣でならん。

朴　併し、先生、戰ひは必ずしも兵の多寡には依りません。

劉　それはさうであらうが、二千に二百では餘りの相違だ。

金　併し、それよりも大きな相違は、彼等の心と僕等の心との相違です。

劉　（笑つて）成程、一以て十に當るか。

金　（笑つて）一以て百に當る位です。

劉　その決心があれば大丈夫だらう。しつかりやり給へ。

金　やりますとも。旬日を出でずして、朝鮮は屬邦の醜衣を脫ぎ捨てるでせう。

朴　先生、きつとそれまで生きてゐて下さいよ。

九

同年同月十七日の午後。

金玉均邸の密室。

金、壯士李寅鍾、李昌奎。

金　閔泳翊は近頃咽喉が悪いとかいふことで、まるで參內しないのだ。人にも一切會はんさうだ。

寅鍾　でも、ゆうべ袁世凱を訪ねたことは確です。

昌奎　なんでも、餘程長い間密談をしたらしいのです。

寅鍾　高を探偵にやりましたから、もうぢき何とか報告して來るでせう。

（扉を叩く音。）

寅鍾　高かな――誰だ。

聲　天。

金　ヨロシ。

（壯士申重模がはひつて來る。）

金　申か。何か情報があるか。

申　えらいことがあります。モルレンドルフが獨逸から輸入した大砲が二門、延慶堂にありましたな。あれを、ゆうべ夜半に、修繕するところがあるからと言つて、閔泳翊が吳兆有の屯營へ運ばせたさうです。

（三人、顏を見合はす。）

金　すると、それは袁世凱の陣を訪ねてから後のことだな。

申　それは分かりません。

（扉を叩く音。）

寅鍾　今度は高だらう。

金　誰だ。

聲　天。

金　ヨロシ。

（壯士高永錫、登場。）

金　どうだ。分かつたか。

高　分かりました。閔泳翊はゆうべ確に袁世凱を訪ねたのです。三時四十分に、閔は袁世凱を連れて右營へ歸つたさうです。それから、なんでも餘程長い間二人で筆談をしたさうです。その草稿は閔がどこかへ隱したさうです。袁はそれから吳兆有の陣を訪ねて、夜が明けてから下都監へ歸つたさうです。

金　ふむ。すると、その間に大砲を運ばせたのだな。愈油斷は出來んぞ。諸君、直ぐ又密偵を續けてくれ給へ。何よりも知りたいのは、その筆談の內容だ。

寅鍾　どうかして探つて參りませう。吾黨の梁鴻在は閔泳翊の信任を得てゐますから、梁君に頼んだら、存外早く知れるかも知れません。

金　妙案だ。何分頼む。

（一同、立つ。）

十

同年同月二十五日の午後。

日本公使館。

松山公使と金玉均。

金　アストンは相變らず時機を待てと言ふのです。來年の春はパアクス公使も來ることだから、それまで待てと言ふのです。その癖、近い内に變事の必ず起ることは豫想してゐるらしいのですね。頻に居留民のことを案じてゐますから、それは必ず保護をする、その代り亂後の結局に對しては十分好意が持つて貰ひたいと言つて來ました。

松山　さすがは君だ。さう釘をさして置けば大丈夫だ。ところで、亞米利加公使の方はどうだ。

金　フウトとは大分議論をしました。これもやつぱり時機の尚早を稱へるのですね。併し、どうしても今の儘ではゐられないと言ふなら、暫く旅行をして來たらどうだと言ふのです。長崎か上海へでも遊びに行つて、歸つて來てから事を擧げても好いではないかと言ふのです。僕がどうしてもこの機會を逸することは出來ないと言ふと、自分は前から一度平壤の方へ旅行をしたいと思つてゐた。ちやうど長崎にゐる軍艦が仁川へ來る筈だから、一緒にそれへ乘つて、案内役を勤めてはくれまいかなどと言ふのです。さすがにフウトは老獪ですね。

松山　併し、好意は持つてゐるのだらう。

金　それは十分に持つてゐるのです。その日も晩餐などをくれて、夜おそくまで引留められました。

松山　よし。英吉利、亞米利加が先づさういふ態度なら心配はない。露西亞は寧ろそれを喜ぶ側だらうし、獨逸領事のゼンブッシュは餘り利害は感じてゐまい。

金　列國側は寧ろ心配はありません。僕の心配してゐるのは、却つて日本政府の態度です。

松山　事ここに及んでゐるのに、君はまだそれを疑つてゐるのか。

金　僕等が事を擧げるのは、單に端緒を開くのです。最後の解決は日本政府に賴るより他に道はないのです。この通り、僕は少しも隱さずに話をしてゐるのですから、あなたもどうか本當のことを言つて下さい。

松山　君も疑ひ深い男だな。松山泰藏不才なりと雖、既に公使の重任を帶びて外國へ來てゐるのだ。遠く本國を離れて來てゐる以上、朝夕自國の政府と連絡をとることは不可能だ。公使の公使たる所以はそこだ。公使は政府の代表だ。公使は政府そのものだ。その位のことが君に分ら

ん害はないではないか。

金　勿論、それは分かつてゐます。併し、僕は苦しい經驗を嘗めてゐるのです。日本の政府はいつ何時方針を變へるか分りません。けふ僕等に親善であるかと思ふと、直ぐあしたは僕等を疎外するのです、さうかと思ふと、そのあくる日は又僕等を勵ますといつた調子です。たとひ、あなたがどういふ內命を受けて來られたにしても、それはいつ何時變るか分らないのです。これは僕一箇の經驗に徵しても明かなことです。朝鮮の國狀はもう一刻も忽に出來ないのです。僕等はあなたの歸任される以前から旣に或決心をしてゐたのです。實を言ふと、日本の援助如何などは問題にしてゐなかつたのです。僕はあなたが又來られると聞いて、却つてそれが妨害になりはしないかと思つて心配した位です。あなたとこんな相談をするやうになつたのは、寧ろ意外なことで、僕はこれを世の中の移り變りに過ぎないと思つてゐます。僕等の決心はもう定つてゐるのです。もう何も申し上げることはありません。

松山　いや、さう言はれては話のしやうもないが、たとひ政府の方針がどう變らうと、僕は僕で決心してゐることがあるのだ。どうか疑はないで、合議すべきことは合議してくれ給へ。

金　（考へてゐる）

松山　まだ信じられないのか。政府の方針はどう變化しようと僕は僕として決心してゐることがあると言つてゐるのだ。

金　（笑つて）それはほんとですか。

松山　誓つても好い。

金　（笑つて）では、一應の御相談だけはして置きませう。

松山　一應では困る。すつかり言つてくれなくては。こつちにも準備があるから。

金　分かりました。それでは申し上げませう。事を擧げたら、先づ第一に主上を江華へお遷し申さなければなりません。

松山　それはいかんと思ふな。

金　なぜですか。

松山　國王お一人なら、直ぐにも御遷居が出來ようが、御婦人方はなかなかさうは行くまい。若し、その方々が淸國軍の手にでも落ちたら、あとがきつと面倒なことになるだらう。僕はそれより御所の守備を飽くまでも嚴重にする方が好いと思ふな。

金　併し、どこかへお遷ししなければ、日本兵に來て貰ふ名義がなくなるではありませんか。たとひ景祐宮へでも、桂洞宮へでも。

松山　それは却つて危險だと思ふがな。
金　危險だから、日本兵に來て貰ふのです。第一、主上にお座所を遷して戴かなくては、醜類を始末するのに不便で爲方がありますまい。
松山　（考へて）まあ、その問題はあとでゆつくり研究することにしよう。それから、次ぎに聞いて置くことは。
金　事を擧げると同時に起つて來るのは金の問題です。これはどうしたらいいでせう。先年は亞米利加人に謀つて失敗しましたが、今考へて見ると、かういふ問題は英吉利人に賴むのが一番好いと思ひますが。
松山　何も亞米利加や英吉利に賴ることはあるまい。三百萬圓ぐらゐの金なら、いつでも日本で用立てることが出來ると思ふ。
金　あなたはそれを保證しますか。
松山　君はまだ僕を疑ふのか。
金　目下の場合、一度に何百萬といふ金は入らないのです。二三十萬も用意があれば足りると思ふのですが、それはどうでせう。
松山　待つてくれ給へ。（ベルを押す）
（書記生、登場。）
松山　今村君を呼んでくれ。
（書記生、退場。）

（今村書記官、入れ違ひに登場。）
松山　今村君、仁川、釜山、元山及び京城在留の日本商人の資産を併せたら凡そいくら位になるだらう。
今村　十五六萬圓は大丈夫でせう。
松山　よろしい。
今村　御用はそれだけですか。
松山　それだけだ。
（今村、去る。）
金　（笑つて）まあ、金のことは、けふがけふ入るわけではありませんから、必要な場合が來たら御盡力を願ひます。
松山　それは大丈夫だ。さういふことは一切心得てゐるから、唯事を擧げる手段をあやまらないやうにしてくれ給へ。
金　內政の改革と奸類の殲滅には飽くまでも僕等が任じます。唯事を擧げたら、直ぐに兵を出して、主上の御保護と暴民の鎭壓に力を盡して下さい。これはどうしても公使にやつて頂かなければならないことです。
松山　よく分かつた。さうはつきり言つてくれれば愉快だ。その點は安心してゐて貰ひたい。併し、事が起つて、吾々が行くとなると、是非國王のお招きがなければならんが、それに就いての策はどうだ。

金 （笑つて） 主上お手づからのお手紙があつたら好いでせう。

松山 それなら好い。唯一字書いて下すつても結構だ。

金 （笑つて） 勅使は一等大臣朴泳孝ですかな。

松山 （笑つて） 極めて妙だ。たとひ、淸國兵が千ゐようと二千ゐようと、我が一箇中隊の兵を率ゐて北岳に據れば、二週間は支へることが出來る。南山に據つても、二日の守備は斷じて憂なしだ。

金 （立つ） では、大體お話も濟みましたから、これで失禮をします。僕は今後もう公使館へは伺ひません。事を擧げる日が決定しましたら、朴君か洪君をよこします。計畫の細目も、その時申し上げます。けふお別れをすれば、もうどこでお目にかかれるか分かりません。御健勝を祈ります。

松山 有難う。まあ、しつかりやつてくれ給へ。

（金、扉を排す。）

（公使、送つて出る。）

十一

同年十二月一日夜半。

東洞、金玉均の別莊の廣間。

金、朴、洪、徐、鼎座す。卓上に書類。

金 では、それできまつた。もうみんなの來るのを待つだけだな。

洪 みんなは何時に來るのだ。

徐 二時には集まる筈だ。（時計を見る） もうあと十五分だ。

金 洪君、君はけふ日本公使館へ行つたか。

洪 うむ。こつちへ來る前に寄つて來た。

金 公使はゐたか。

洪 ゐたらしいが出て來なかつた。今村書記官が出て來て、もう公使の心はきまつてゐるから、却つて會はん方が好いだらうなどと言つてゐた。

徐 今村書記官はなかなか外交がうまいな。

金 愈計畫のきまつたことを話したか。

洪 話した。十二月七日に決行すると言つて置いた。本當の日を言ふのは危險だと思つたからな。

金 それは上出來だつた。さうしたら、何と言つた。

洪 おそいぢやないかと言ひをつた。

金 それから、君は何と言つた。

洪 七日以前は月があるからだめだと言つた。兎に角、七日より遲れることはない。七日には日本の千歳丸が仁川へ來るから、是非それまでには決行するつもりだと言つた。

金　それはどういふわけだ。

洪　日本の政府の方針は始終變るから、又何か變つた命令でも來ると、松山公使の決心がぐらつくからだ。

金　それを今村書記官にさう言つたのか。

洪　うむ、言つた。

金　は、は、は、愈それは上出來だつた。

朴　は、は、は、は。洪君、君もなかなか隅へ置けなくなつたな。

洪　それは金君のお仕込みだ。

金　（直ぐまじめになる）冗談は措いて、主上を景祐宮へお遷し申す一件は話したか。

洪　話した。

金　今村書記官は何と言つてゐた。

洪　江華へ遷すことは絶對に反對だが、景祐宮なら、公使も承知するだらうと言つてゐた。

金　つまり承知したのも同然なのだな。

洪　さうだ。もう書記官との間に話が出來てゐたらしいのだ。

徐　（横から口を出す）さう言へば、金君、君は主上にこの事を申し上げたか。

金　始終君側に人がゐるので、こなひだまではどうしても申し上げることが出來なかつたが、二十九日にちやうど好い機會があつたので、大凡のことは申し上げた。

徐　主上は何と仰しやつた。

金　主上は飽くまでも僕を信ずると仰しやつた。（聲を潜めて）實は、もう密勅まで戴いてゐるのだ。

徐　さうか。もう密勅まで戴いてゐるのか。

朴　內には主上の御信任があり、外には日軍の援護がある。吾々の計畫はもう成つたも同じことだ。

（壯士李寅鐘、黃龍澤、申重模、李昌奎、高永錫、李圭貞、杜殷明、金鳳均、李殷鐘、尹景純、李圭完など三々五々入り來る。徐光範、點檢す。）

金　ほう、これでみんなか。

寅鐘　柳赫魯、崔殷章、林殷明、朴三龍、李熙禎、李錫尹は各所へ密偵に參つてゐますので不參です。

金　（書類を廣げながら）それでは、早速決定事項を諸君に傳へよう。缺席の諸君へは出席の諸君から便宜遺漏なく傳へて貰ひたい。（間）愈事を擧げるのは來る四日ときまつた。午後の八時から九時の間に、××××××××若し當日雨が降つたら、翌五日の同刻に行ふのだ。諸君も知る通り、別宮は徐君の家と墻一重を隔ててゐるだけだ。宮の後門は卽ち徐君の家の庭前だ。依つて、徐君が萬事を總裁する。（書類を見ながら）、諸君の部署配置を言はう。火を放つのは李寅鐘指揮の下に、李圭完、

杜殷明、尹景純、崔殷童の四人がやるのだ。既に邊樹に頼んで置いた布袋が三十箇出來て來てゐる。それに細かく折つた柑を詰めて、豫め徐君の家の南庭から別宮の北門まで運んで置くのだ。日が暮れたら、墻を越えて、別宮の正殿内へそれを運ぶのだ。別に××を入れた小瓶三十箇を携へて行つて、柑を入れた布袋に注ぎかけ、××××××××××るのだ。東西の廊下には劇藥を配置して、×××盛になると、おのづから××するやうにしかけて置くのだ。(間) 火が起れば、各營の將軍が駈けつけて來るに違ひない。併し、病氣などで來ない者がないとも限らない。松山公使が來てから、大分諸方に疑惑の種を播いてゐるから、或は疑つて來ない者があるかも知れない。さうなると、事は成らない。そこで、洪君が今度出來た郵政局の局長に任じたのを幸に、同じ晩に新築落成の宴を局で開くことにして、豫め四營將軍の故障の有無を調べて置くのだ。郵政局へ彼等を集めて置きさへすれば、火が起れば、勢駈けつけなければならないことになる。事を行ふのは火災場だ。敵一人に味方二人が當ることにして、各位に短劍一振、短銃一挺を與へる。倘怯懦事を過まつてはならんから、日本人四人を定めて、一組毎に一人を配する。日本人には總て朝鮮服を着せる。

朴（書類を金の手から取る） あとは僕が言はう。（書類を見る）これからが肝心だから、よく聞いてゐてくれ給へ――閔泳翊に當るのは、尹景純と李殷鍾だ。尹泰駿に當るのは、朴三龍に黄龍澤だ。李祖淵に當るのは、崔殷童に申重模だ。韓圭稷に當るのは、李圭完に林殷明だ。李寅鍾と李熙楨は年長だから、一切の號令をする。火が起つて、人が集つたら、二人が發砲する。發砲と同時に、各位は一齊に手を下すのだ。この間一瞬の遲速があつてもならない。

洪（書類を取る） 探偵通信は柳赫魯、高永錫の係りだ。泥洞附近には申福模が一隊の壯士を率ゐて隱れてゐて、火が上ると同時に、諸大臣の通路たる金虎門を塞いで閔台鎬や閔泳穆や趙寧夏が參内するのを待伏して手を下すことになつてゐる。尹景純の弟尹景完は前營の小隊長で、最近吾黨に投じたものであるが、當夜は特に當直を願ひ出て、主上御寢室前の閤門を、五十名の兵卒で堅めてゐて、若し繩を洩れて宮中へはひる者があつたら、その場で處置することになつてゐる。金鳳均と李錫尹は豫め××を宮中仁政殿の廊下に隱して置いて、吾黨が變に乘じて入闕する時、附いてはひつて火をつけることになつてゐる。その他、宮中の婦人に同志が一人あつて、これが××××を竹の管に入れて置いて、外で火が起ると同時に、通明殿へ××××××ことに内約が出來てゐる。

金　（書類を見ずに）別宮で火が起ると同時に、日本公使館から兵士三十人を金虎門と景祐宮洞へ出して、變事に備へる約束が出來てゐる。尙、混雜の際、同志討をしないにも限らんし、日本人との連絡も取らなければならんから、總て同志は暗號で應答することにする。暗號は從來も用ひた「天」と「ヨロシ」だ。

徐　それから、同志に日本人の顏を知つてゐて貰はなければならないから、あした鴨鷗亭の朴君の別莊で一緒に鴨飯をすることになつてゐる。諸君、洩れなく來てくれ給へ。欠席の諸君へも間違なく傳へてくれ給へ。時間は朝の十時から夕刻までだ。

朴　もうこれで言ふことはなかつたかな。

金　もう何もない。

朴　それでは酒にしよう。不分明な點があつたら、酒間に訊ねて貰ふことにして。（手を叩く）

洪　けふは大に飲むぞ。

徐　飲むのは好いが、また馬から落ちんやうにしてくれ。

金　おい、徐君、なぜ、そんな不吉なことを言ふのだ。（急に顏を曇らせる）朴君、金虎門へ來る日本兵は何人だつたかな。

朴　（書類を見る）三十名と書いてある。

金　三十名……三十名……それで足りるかな。（不安になる。）

（杯盤が運ばれる。）

十二

同年同月四日の夜。

典洞、郵政局の門前。

局の右隣に藁屋根の人家。

左手に大なる溝。

あたり暗く、靜寂。

突然、溝の中から、人間らしい黑いものが飛び出す。

同時に、人家からも人らしい黑い影が現はれる。

後の黑影　（聲を潜めて）誰だ。うろうろ出て來たのは。

前の黑影　まだか。

後の黑影　（すかし見る）木村だな。引込んでゐろよ。

前の黑影　あんまり合圖がおそいので退屈しちまつた。

後の黑影　まだ機會が來ないのだらう。急に計畫が變つたのだからな。

後の黑影　別宮がやめだと聞いた時は狼狽したよ。おれはもう徐の家へ行つてゐたのだ。

後の黑影　それにしても、よくみんなに連絡がとれたもの

だな。

前の黒影　傳令の高永錫といふ男は、なかなかすばしつこい奴だ。(局の方を見る)　それにしても、何をぐづぐづしてるのだらう。

後の黒影　まだ目的の人物が足りないのだらう。

前の黒影　いや、醜類は大抵集まつてゐるさうだ――おれの組には奴等の顏を一々知つてゐる人間がゐるのだ。

後の黒影　それは都合が好い。各國の領事や公使も來てゐるのだらう。

前の黒影　みんな、なんにも知らずに來てゐるやうだ。

後の黒影　あの人達に害を加へてはならんぞ。

前の黒影　それは大丈夫だ。

後の黒影　松山公使は來ないやうだな。

前の黒影　今村書記官が代理だ。

後の黒影　松山さん怯えたな。

前の黒影　いや、公使館の方の堅めをしてるのだらう。

後の黒影　袁世凱は早く歸つたやうだな。

前の黒影　あいつは利口な奴だ。危險なのを知つて、時刻より前に來て、みんなの碌に集まらん内に歸つて行つてしまつた。

(局の窓が一つ明く。白い布が振られる。)

前の黒影　(直ぐそれに目をつける)合圖だ。

後の黒影　(これも窓を仰ぐ)　よし。(直ぐに駈けて家の内へ入る)

(前の黒影、溝の中へ飛び込む。)

(靜寂。)

(暫くすると、家の中から二三の黒影が飛び出す。)

黒影　(苛立聲で)　まだか、まだか。

(屋根の上で聲がする。)

聲　この火藥はだめだ。

下の黒影　マッチで藥に火をつけろ。

上の聲　よし。

(屋根の上で藁を引拔く音がする。)

(忽ち、屋根が燃え出す。)

(「しめた。」といふ聲が何處かで低く聞える。)

(黒影は又姿を隱す。)

(やがて、郵政局の内部が騷しくなる。)

(方々の窓が明く。)

(「火事だ」「火事だ」といふ聲が聞える。)

(火は餘焔と燃え上がつて、今にも郵政局を舐めようとする。)

(局内騷然。)

(黒い人影が人家からも溝の中からも、ばらばらと出て來る。)

（郵政局から四五人の人が駈け出して來る。それを掻き分けるやうにして、狼狽した閔泳翊が姿を現す。）
（地面の上に俯伏してゐた黑影の一人が、いきなり躍りかゝつて、閔を背後からぐさりと刺す。）
（閔、悲鳴をあげて、局内へ逃げ歸る。）
（局内、前より一層騷がしくなる。）
（突然、局内から日本人らしい五六人の青年がピストルを亂射しながら飛び出して來る。）
（黑影、暫く戰ふが、やがて四散する。）
（少時靜寂。）
（金玉均と朴泳孝と徐光範とが、局の三方から出て來て、門前で落ち合ふ。）

徐　（聲を潜めて）失敗したな。
朴　（聲を潜めて）閔の傷はどうだ。
金　致命傷ではない。
徐　もう誰も怯えて出て來はせん。
朴　それに、刺客も散つてしまつたやうだ。
徐　ピストルを打つたのは誰だ。
朴　日本から來た郵便技手の連中だ。困つたことをしてくれた。
金　事情を知らんのだから、やむを得ない。
徐　やつぱり初めの計畫通り別宮をやつた方がよかつたらしいな。
金　今そんなことを論じてゐる場合ではない。君は直ぐに金虎門へ駈けつけて、申福模に豫定の行動をとるやうに命令してくれ給へ。僕は朴君と一緒に王宮へ駈けつけて、日兵來護の御親書を戴くことにするから。
徐　よし。（直ぐに走り去る。）
（金と朴と、手を携へて走り去る。）
（火勢愈烈しく、終に郵政局の一端に燃え移る。）
（悲鳴、喚聲、人影右往左往す。）

十三

同じ夜。
王宮、金虎門。
申福模の率ゐる韓兵の一隊が堅めてゐる。
空は火で赤い。諸所に爆發の音がする。
徐光範が門内から出て來る。

申　主上は慶裕宮へお遷りになつたか。
徐　やつとお遷りになつた。
申　日本公使館への使はもう出たか。
徐　まだ出ない。御親書がなかなか出ないのだ。
申　それはいかんな。
徐　なあに、もうぢき出る。金が附いてゐるから大丈夫だ。

（高永錫が門外へ駈けつける。）

申　誰か。

（韓兵、銃劍を構へる。）

高　天。

申　ヨロシ。何か報告があるか。

高　閔泳穆がやつて來る。用意は好いか。

申　宜しい。

（高、門内へ駈け入る。）

（間もなく、閔泳穆が輿に乘つて現れる。從者五六名。）

申　誰か。

閔　外衙門督辦閔泳穆。

申　何用だ。

閔　天機奉伺に參つた。

（詞の終らぬ内に、門内から刺客が躍り出て、閔を刺し殺す。從者、逃げ去る。）

（死骸、門内へ運ばれる。）

（入れ違ひに内官邊樹が門外へ出ようとする。）

（後から徐光範が呼び留める。）

徐　どこへ行く。

邊　日本公使館へ。

徐　御親書が出たか。

邊　この通りだ。（紙片を示す）

徐　（讀む）「日使來衞」（邊樹の顏を見る）御親書だな。

邊　（あまり確でなく）さうだ。

徐　よからう。早く行け。

（邊樹、走り去る。）

申　（徐を見て）もう大丈夫だ。

徐　うむ。

（閔台鎬、從者を連れて、門外へ駈けつける。）

申　誰か。

閔　内衙門督辦閔台鎬。

申　はひつて宜しい。

（閔、門内へはひらうとする途端に、刺客が躍り出て、一撃これを斃す。從者、逃げ去る。）

（死骸、運び去られる。）

（趙寧夏が輿に乘つて來る。）

申　誰か。

趙　判書趙寧夏。

申　斬れ。

（刺客が躍り出て、趙を刺し殺す。）

（死骸が運び去られる。）

（高永錫が門内から駈けて出て來る。）

高　李祖淵も斬られた。尹泰駿も斬られた。韓圭稷も斬られた。宦官長の柳在賢も主上の御前で斬られた。もう君

側に侍す者は、吾黨の士ばかりだ。

（一同、歡聲をあげる。）

（遠くに、日本兵の行進喇叭が聞える。）

十四

十二月六日の午後。

慶裕宮前門内。

日本兵と韓兵との混成隊が警備してゐる。

金玉均と松山公使が、立ちながら、言ひ爭つてゐる。

金　それはいけません。それはいけません。今手を引くといふことはありません。

松山　でも、もう新政府は立派に出來上がつたのだから。いつまでも吾々が關係してゐることは、列國の感情もどうかと思ふのだ。

金　それは初めから覺悟の前ではありませんか。それだから、僕があやつて、英吉利領事や亞米利加公使の諒解を得て歩いたのです。

松山　英吉利や亞米利加は好いが、淸國の感情がどうかと思ふのだ。何等の通牒なしに兵を動かしたのだからな。

金　それには御親書といふものがあります。

松山　でも、あれには御名もなし、印璽もないのだからな。

金　松山さん、あなたは何といふことを言ふのです。現に、こないだ、御親筆なら一字でも結構だと仰しやつたではありませんか。

松山　併し、袁世凱の態度が大分强硬のやうだからな。

金　いくら强硬でも構ひません。御親書一札で、どこまでも押し切ることが出來ます。

松山　ゆうべも宜仁門を開けと言つて來たのだらう。

金　ですから、けさ早く返事をしてやりました。さういふ指揮を受ける筈はない。宜仁門閉鎖は王族警固の爲にしてゐることで、私の爲にしてゐることではない。今後、さういふ御干渉があれば、當方でも斷乎たる處置に出る…………

松山　大分强く出たな。僕にはさういふ勇氣はない。

金　勇氣がないと言つて、ここまで計畫の進んだのを、今更手を引くといふことがあるものですか。その位なら、初めから兵を出さない方がよかつたのです。

松山　まあ、さう怒つてくれては困る……

（朴泳孝と徐光範が來る。）

金　（二人の方を向いて）どうだつた。

朴　（首を振つて）だめだ。

徐　右營も左營も前營も後營も錆だらけだ。早速解剖して掃除をするやうに命令して來たが、實に困つたことだ。

松山　（わきから口を出す）朴君、どうしたのだ。

朴　金君が調べてくれと言ふから、各營の銃器を見て歩いたのですが、どれもこれも錆だらけで、とても物の役に立たないのです。

金　（思はず目に涙を浮べる。松山に）さあ、さういふ有様ですから、尙お願ひするのです。今、あなたに兵を撤回されたら、事は必ず敗れます――三日で宜しい……どうか三日待つて下さい。その內には、こつちの軍備も整ふと思ひますから、どうか三日待つて下さい……（聲涙共に下る）

松山　宜しい。三日待たう。つい勢に驅られて、飛んだ深入をしてしまつたが、もうかうなつたら爲方がない。如何にも三日待たう。

金　金のことはどうしませう。在留の日本商人から借りると言つたところで、それは容易なことではないでせう。英吉利人に賴みませうか。

松山　又そんなことを言ふ。まだ君は僕を信ずることが出來ないのか。

金　併し、深入云々のお詞もありましたから……

松山　軍事と金とは別だ――日本の大藏省には三百萬圓ぐらゐの金はいつでも遊んでゐるから、決して心配はない……………

（門外から、傳令が一人驅けて來る。）

金　なんだ。

傳令　淸國の士官が一人、主上に拜謁をこひに參りました。

金　（直ぐ）ならんと言へ。吳兆有か袁世凱か張光前が自身で來るなら接見を許す。無名の士官に拜謁は許されんと言へ。

傳令　は。（驅け去る。）

朴　（徐に）きのふ一日はひどく靜だつたが、ゆうべから急に動き出したな。

徐　袁世凱から密書が王妃のところへ屆いたといふ情報があるが……

金　（直ぐ）そんなことは斷じてない。使の來る隙間がない。風聲鶴唳だ。

朴　日本公使館は大丈夫だらうか。

松山　公使館は小林中隊長が堅めてゐるから大丈夫だ。

（傳令が又驅けて來る。）

金　なんだ。

傳令　袁世凱が拜謁に參りました。

金　自分で來たのか。

傳令　はい――兵士を六百名引率して。

金　なに。兵を連れて來た。それはいかん。袁司馬の謁見は差支ないが、兵士を率ゐて入闕することは絕對にならん

んと言へ。若し、言ふことを聞かなかつたら、非常手段をとれ。

傳令　は。（駈け去る）

金　（直ぐ）徐君、直ぐに各營の手配を賴む。一戰は免れまい。（徐、走り去る）松山さん、誰かを上村中隊長のところへやつて下さい。

（松山、日本兵の一人に旨を含める。日本兵走り去る。）

（韓兵の士官、號令を下す。警備隊、銃劍を構へる。）

（忽ち、門外に銃聲起る。）

朴　始まつたぞ。

（傳令、飛んで來る。）

金　どうした。

傳令　隊長が、御命令通り傳へましたら、いきなり發砲いたしました。

金　應戰してゐるか。

傳令　してをります。

（銃聲、霰の如く聞える。門内へも彈が飛んで來る。）

傳令　一隊が分かれて、宜仁門へ向ひました。宜仁門の防備を願ひます。

金　宜しい。

（傳令、走り去る。）

金　松山さん、宜仁門へ行きませう――上村中隊長の兵を連れて。

松山　宜仁門へ。

金　ここは李圭完に杜股明がゐるから大丈夫です。宜仁門が危險です。宜仁門へ行きませう。宜仁門へ。

（金、松山を促して、走り去る。）

（銃聲益烈し。龍旗門外に繞る。）

（日暮れかかる。）

十五

同日の夜。

王宮、宜仁門内。門は堅く鎖さる。

上村中隊長、日本兵を率ゐて、門樓に登り、外に向ひ射撃す。

松山公使、諸兵に護られて、不安げに佇む。

松山　（下から聲をかける）上村君、敵の數はどの位だ。

上村　もう五百ぐらゐになりました。まだ、どんどん殖えて來る樣子です。

松山　韓兵もゐるのか。

上村　大分まじつてゐます。

松山　怪しからん。

上村　みんな清國の教育を受けたものらしいのです。清國の士官が指揮をしてゐます。

松山　どうも、さう多數では、とても防ぎ切れまい。
上村　なに、そんなことはありません。
（金玉均が駈けて來る。）
松山　（金に）御座所は大丈夫か。
金　まだ大丈夫です。併し、前門は餘程の苦戰らしいのです。王妃は北廟へ遷られました。
松山　それはいかん。北廟には吳兆有がゐるではないか。
金　王妃はもう淸國の手に落ちてゐるでせう。
松山　國王は今お一人か。
金　お一人です。
松山　それでは、國王も危ないな。
金　そんなことはありません。朴君が附いてゐるから大丈夫です。
（日本の傳令が駈けて來る。）
松山　なんだ。
傳令　日本公使館が三回淸國兵に襲はれて、たうとう燒かれました。
松山　ああ。
傳令　小林中隊長が戰死をされました。
松山　ああ。
傳令　警備隊は公使館を突出して、居留民の保護に當つてをります。居留民も多數殺害されました。

（傳令、走り去る。）
松山　ああ、もうだめだ。
金　だめなことはありません。もう少しの奮鬪です。吳も張も攻勢はとつてゐません。袁世凱さへ防ぐことが出來れば、こつちの勝利です。主上は吾々を信頼してをられます……
（朴泳孝が駈けて來る。）
金　（朴に）どうしたのだ。なぜ、お側に附いてゐないのだ。
朴　（泣く）だめだ。たうとう北廟へお遷りになつた。
金　（憤激して）なぜ……なぜ、君はお留め申さなかつたのだ。
朴　身をひれ伏してお留め申したのだ。泣いてお留め申したのだ。併し、どうしてもお聞き入れがないのだ。どうしても一人でゐるのは厭だと仰しやるのだ。その內に前門の敗れた報告があつたので……
金　前門は敗れたか。
朴　うむ……それで、たうとうお立退になつてしまつたのだ。
金　君は見す見すそれを捨てて來たのか。
朴　さうではない主上には洪君がお附き申して行つた。身命を賭しても、北廟からお連れ戾すからと誓つて出て行

つた――僕は急いでそのことを君に言ひに來たのだ。

松山　こりやあ、金君、愈だめだな。もう手を引いて、再擧を計つたらどうだ。

金　いや、まだだめなことはありません。洪君はきつと主上を連れて歸つて來ます。

朴　僕もさう思ふ。きつと洪君は……

（高永錫が駈けて來る。顏色を變へてゐる。）

金　高君、どうした。

高　洪君が斬られた。

金　えつ。どこで。

高　北岳の關羽廟で、

朴　誰に。

高　淸國兵に。

金　主上はどうなされた。

高　王妃と一緒に吳兆有の淸軍に投ぜられた。間もなく、輿で袁世凱の屯營へ向はれた。

松山　もうだめだ。（上村中隊長に）上村君。打ち方をやめて、みんなおろしてくれ。

（中隊長の命令で、日本兵、地上へ降りる。）

（外では銃聲が續く。）

松山　もうかうなつては爲方がない。ここを脫出して仁川へ逃げるより外にしやうはない。けふあすには千歲丸が來る筈だ。あれへ乘つて日本へ歸らう。金君も朴君も一時日本へ來給へ。

（金と朴、手を取り合つて、泣いてゐる。）

松山　さあ、もう一刻も猶豫は出來ない。ここで死んだら犬死だ。日本へ逃げて再擧を計り給へ。

金　（首を上げる）再擧。

朴　再擧。

松山　さあ、行かう。（二人の手をとる）上村君、門を開いて脫出するのだ。

（中隊長、命令を下す。）

（日本兵、門を開いて突進する。）

（銃聲、喚聲、更に起る。）

（松山公使、金、朴、兵に紛れて門外へ駈けて出る。）

（淸國兵、門內へ崩れ入る。）

十六

同年同月九日の夜。

千歲丸の甲板。

背景に仁川港の燈火きらめく。

星寒く、天澄む。

金玉均、朴泳孝、薙髮、洋服、佇立して、仁川港を見

る。

松山公使、遠く離れて立つ。

朴　夢だ。夢だ。もう一遍やり直すのだ。

金　(低く)　うむ。

朴　僅二日の夢だつたな。もう今頃は事大黨の新内閣が出來てゐるだらう。

金　うむ。

朴　日本だけに依つたのが失敗だつた。寧ろ列國に依つた方がよかつた。

金　僕はさうは思はん……僕は日本を疑つてゐる。飽くまでも日本を疑つてゐる……それでゐて、どうしても日本が棄てられない……僕は日本を疑ひながら、どうしても日本に頼らずにはゐられない。……僕の失敗はこの矛盾撞著から來てゐるのだ……。

朴　なんにしても兵力が足りなかつた。二千に二百ではどうにもしやうがない。僕等は日本兵を頼み過ぎた。

金　いや、兵力の問題ではない……この失敗を生んだのは僕の矛盾からだ……どうしても日本が信じられない……どうしても日本の外に頼る國はない……

朴　この船はその日本へ向つてゐるのだ。日本は必ず僕等を保護してくれるだらう。再擧だ。再擧だ。

金　(思はず首を上げて)　うむ、再擧。

(松山公使、近づく。)

松山　(優しく)　もう下へ行つて休まうぢやないか。

金　(低く)　ええ。

(松山、下へ降りて行く。)

(聲太く汽笛鳴る。)

(金、朴、思はず手を取り合ふ。)

(二人、朝鮮を背にして泣く。)

森有禮（五幕）

主要人物

森金之丞（有禮）（第一幕、廿三歳。第二幕、廿六歳。第三幕、三十歳。第四幕、第一場、四十歳。第二場、四十三歳。第五幕、四十三歳。）

波多野治右衛門　公議人、新庄藩
雨森謙三郎　公議人、松江藩
內田仲之助　公議人、鹿兒島藩
橫山正太郎（安武）　有禮の兄
荒非常之進　從者
矢田部良吉　外務文書大令使
外山正一　辨務少記
龜山某　大垣藩士
吉田淸成　大藏少輔
李鴻章
高崎正風
兒玉佐一　內務省屬
西野文太郎　內務省土木局計算課勤務
中川某　文部大臣秘書
岡本淸重　家扶
座田重秀　文部屬
黑田淸隆　內閣總理大臣

場所

日本、亞米利加、支那

時代

明治二年から廿二年まで

第一幕

第一場

明治二年（西暦一八六九年）五月二十七日の午後。公議所議場。

正面奥の議長席に議長心得森金之丞。その後に辨事、參與、議定、公卿、諸侯、若干名。右手に、議事取調掛、公議所書記、數名。左手に學校、刑法、外務、軍務、會計、神祇などの諸執政官。議長席を狹みて對座す。

議長席より少し前に投票箱。その前に筆生二名對座。

筆生より少し前に議案臺。議案臺より又少し隔たりたる前に又投票箱。
投票箱、議案臺等を中に挾みて、左右五列に公議人（貢士）對座す。（公議人の員數は實際に於ては二百七十餘名なれども、舞臺に於ては必しも然るを要せず、但し、少くとも百五十名を下らざること。）

幕あく。議長心得森金之丞、起立しゐる。

森　公議所書記小野淸五郎提出の議案第十號「切腹禁止可然の議」は、可とするもの三人、否とするもの二百人で、否決と相成りました。これから廿二日の前會に提出して置きました不肖森金之丞の議案第十二號の討論に移ります。

公議人の一人　討論の必要はない。

公議人の他の一人　否決、否決。

森　討論に移るに當りまして、念の爲に今一應、議案並にその提出理由を朗讀いたします。（刷物をひろげて讀む）第一、官吏兵隊の外帶刀を廢するは隨意たるべき事。第二、官吏と雖も脇差を廢するは隨意たるべき事。（少し間を置きて）　制度寮撰修森金之丞。謹んで案ずるに、人の刀劍を帶するは、外は以て人を防ぎ、内は以ておのれの身を護するところにて、天下動亂の時要すべきあり。然れども世運漸くに文明に赴き、人々おのづから道義の尊きを知るに至つては、粗暴殺伐の惡習おのづから相息み、これらのものも畢竟虛飾に過ぎざるのみ。方今國家鎭定、皇運日に隆興、良法以て内を正し、兵制以て外を守る。この際に當つて、人各禮節を砥礪し、所謂粗暴殺伐の惡習、變じて道義自守の良俗と化すべきなり。故に自今以後、官吏兵隊を除くの外、帶刀相廢し候儀隨意たるべし。尤官吏と雖も、脇差相廢し候儀隨意たるべし。是何ぞ偏に文事を重くし、武事を輕くするに非ず。固より文武同體、唯その名を異にするものにして、政治の相つて擧るところ、人各篤く意を注ぎ、二つながらこれを盛興すべきなり。今ここに陳ずるところの二題目は、唯その弊習を一新して、聊皇政隆興の際に裨補あらむことを思ふのみ。伏して諸賢の高評を待つ。謹識。（着席する）

公議人の一人　議長。第百三番。

森　第百三番。新庄藩波多野治右衞門氏に發言を許します。

波多野　（起立）　諸君、拙者は慨嘆に堪へません。切腹禁止の議と言ひ、又この帶刀廢止の議と云ひ、天下の公議所に向つて、よくもかくの如き非國家的な議案が持出されたものだと思ひます。

公議人の一人　さうだ、さうだ。

波多野　議案提出者たる森氏は、帶刀を以て「粗暴殺伐の惡習」だと言はれるのであります「虚飾」だと言はれるのであります「弊習」だと言はれるのであります。併しながら、果して帶刀は「粗暴殺伐の惡習」でありませうか。「虚飾」でありませうか。「弊習」でありませうか。抑も日本刀は大和魂の權化であります。大和魂は「虚飾」ではありません。「弊習」ではありません、否、決して「粗暴殺伐」ではありません。

公議人の一人　議長。第五十九番。

森　第五十九番、松江藩雨森謙三郎氏に發言を許します。

雨森　不肖雨森は波多野氏に全然同意見であります。たとひ隨意にせよといふ法令が出たにしても、苟も大和魂のある者は帶刀を廢さうとはいたしますまい。想ふに議案提出者は徒に洋風に心醉して、國風の貴きを忘れられたものでありませう。

公議人の一人　その通りだ、その通りだ。

公議人の他の一人　毛唐の眞似だ。

公議人の更に他の一人　大和魂は毛唐にはないぞ。

雨森　本議案は國家の精華を蔑にした議案だと思ひます。極言すれば國家その者を危くするの議案だと思ひます。故に不肖雨森は極力反對いたします。

公議人の一人　議長　第百二十四番。

森　第百二十四番、鹿兒島藩内田仲之助氏に發言を許します。

内田　私は同藩の藩士たる森氏からかかる愚案の提出せられたることを、諸君の前に恥づるものであります。

公議人の一人　貴公が反對なら、恥づるには及ばんぞ。

内田　諸君も御承知の通り本案の提出者たる森氏は慶應元年、齢十九にして歐洲へ留學せられたのであります。それ故、森氏の教育は概ね西洋で受けられたものであると言つても差支はないのであります。從つて、森氏は西洋の歴史には通じてをられても、日本の歴史には盲目であられるのではないかと思ひます。建國以來、日本が萬國に比類なき國體を守つて來られたのは、抑も何の力でありませう。

公議人の一人　日本刀のお蔭だ。

公議人の他の一人　大和魂だ。

内田　本朝の大勢は神武建國以來九變して武家の代となり、武家の代また六變して終に王政復古したのであります。建武中興の御政務以來、今上陛下の御親政に至るまでの朝廷の御苦勞は如何程でありましたらう。その間、皇統の連綿として一系亂るることのなかつたのは、皇威の侵すべからざるに依れることは勿論ではありますが、また一面、朝敵現るる毎に死生を賭して必ずこれを鎭撫し

た忠勇義烈なる武士の功績に負ふところが多いのであります。

公議人の一人　さうだ、さうだ。

內田　森氏は事もなげに「方今國家鎭定」と言はれたが、果して今の國家は帶刀を廢しても可なる程鎭定したでありませうか。現に本年正月四日の御詔勅にも「一治一亂、內安ければ必ず外の患あり。豈戒愼せざるべけんや。」と仰せられてあります。次いで本年二月十一日、紀元の大節に、畏れ多くも我が鹿兒島藩主たる島津公に賜はつた優渥なる御詔勅の內にも、「凡そ國體を正し、强暴に備へ、大義を立て、民安を慮り」との御詞があります。抑も一治一亂に備へるものは何でありませうか。强暴に備へるものは何でありませうか。拙者はもはや多言を費しません。本議案は日本の國體を危くするものであります。滿場一致の否決を希望いたします。

公議人の一人　同意、同意。

公議の他の一人　刀をよしてピストルを持たうと言ふのか。

（笑聲、起る。）

公議人の一人　武士の魂が奪へると思つてゐるのか。

公議人の他の一人　森は武士の魂を英國に忘れて來たのだ。

公議人の更に他の一人　早く便船で取り寄せ給へ。

（笑聲、起る。）

森　（起立す）　靜肅に願ひます。議案提出者として、今一應趣意のあるところを申し述べますから、暫時御靜聽を願ひます。

公議人の一人　もう澤山だ。

公議人の他の一人　聞かないでも分かつとる。

森　いや、まだ十分お分かりにならぬ點があるやうであります。旣に提出理由書にも認めあります通り、私は決して文事を重くして武事を輕くするものではありません。同藩の內田氏は森は外國で學問をしたので、日本のことは知らないのであらうと申されました。これは誠に意外なお詞であります。鹿兒島藩士たる內田氏が我が鹿兒島の學風を御承知ない筈はありません。若し御承知がないとすれば、內田氏こそ薩藩第一の怠け武士だと言はなければなりません。

內田　（憤然と）　怠け武士とは何だ

森　苟も鹿兒島藩士たるものが鹿兒島藩の學風を知らなければ、怠け武士だと言はれても爲方がありますまい。

公議人、一人　鹿兒島のことなどはどうでも好い。

公議人の他の一人　早く議案の說明をし給へ。

森　成程、私は弱年にして歐洲の地を踏みました。かの地

で教育を受けました。併し、それまでは懈怠なく藩の教育を受けたのであります、諸君も御承知の通り、我が鹿兒島藩に於いては、年齢六七歳に及べば、集會所に於いて、經書歷史の輪讀並に習字運動の三課を課せられます。十五歳以上になれば、每夜軍書の輪讀を課せられ、運動としては相撲、戰鬪演習、並に兎狩などをいたします。私も藩士の子弟として一通りかうした教育を受けたのであります。その上、別に兄の葛藤太に就いて漢學を學びました。川上八郎左衛門先生に就いて天眞流の武術も學びました。森は淺學短才ではありますが、日本のことをまるで存せぬ程無學ではありません。帶刀廢止の議案を以て日本歷史の無知に出來するものだと斷定せられるのは、誠に迷惑至極であります。

公議人の一人　それでは何に由來するのだ。

公議人の他の一人　毛唐人に由來するのか。

（笑聲、起る。）

森　國家が國防内亂に備ふるところなかるべからざることは、不肖森もよく心得てをります。併し、それが爲には既に軍備が出來てをります。兵隊の組織があります。治に居て亂を忘れずといふことは、成程立派な覺悟ではありますが、今は建武時代でもなければ戰國時代でもありません。日本の歷史に比類なき御一新の大業が成つた萬民鼓腹の時であります。英米佛伊は勿論、最近瑞典、那威、西班牙、北獨逸聯邦の諸外國とも同等の交際をするやうになつた時代であります。日本は既に日本の日本に非ずして世界の日本であります。かかる時代に於いて、兵隊以外の者が武器を帶びるといふことは、第一無用であるばかりでなく、野蠻時代の遺風だと言はなければなりません。

公議人の一人　無用ではない。御一新は何で出來たのだ。

公議人の他の一人　野蠻とは何だ。

公議人の更に他の一人　まだ人民は鼓腹してはをらんぞ。

森　今日諸外國に於いて、兵隊以外の者の平素武器を帶びてゐる國はどこにもないのであります。はじめて日本へ渡來した外國人は、この奇異なる帶刀の風俗を見て、必ず恐怖と疑惑に襲はれるでありませう。日本は好戰國である。日本は野蠻國であるとして、必ず一種の警戒をするやうになるでありませう。

公議人の一人　日本を恐れるのだから好いではないか。

森　いや、それは外交上由々しき大事であります。外交とは平和的折衝の意でありまして、決して恐喝若しくは威嚇の意ではありません。條理公道を楯にして、一歩も假借すべからざるは言ふまでもないことではありますが、苟にも武力を誇示して條理を壓迫するが如きは、卑屈卑

怯なる外交と言はなければなりません。

公議人の一人　帶刀がなんで恐喝だ。

公議人の他の一人　誰が條理を壓迫せよと言つた。

公議人の更に他の一人　帶刀は武力の誇示ではない。

公議人の一人　卑怯とはなんだ。卑怯とはなんだ。

公議人の他の一人　無禮なことを申すな。

（議場、漸く騷然として來る。）

森　どうか今暫く御靜聽を願ひます。先程、日本刀は大和魂の權化だといふお說がありました。如何にもそれは然樣でありませう。併し、權化は飽くまでも權化でありまして、實體ではありません。大和魂は無形の魂でありまして、有形の刀劍ではありません。

公議人の一人　屁理窟を言ふな。

公議人の他の一人　大和魂は無形ではないぞ。

森　若し大和魂が刀劍その者であるとすれば、賊に襲はれて刀劍を奪はれた時、諸君の大和魂は盜賊の手に渡ることになるのであります

公議人の一人　刀を奪はれる莫迦があるか。

公議人の他の一人　莫迦なことを申すな。

（議場、益々騷がしくなる。）

森　諸君の謂はゆる大和魂とは然樣な脆弱なものなのでありますか。建武御中興以來、一天萬乘の皇室を守護し奉つて參つたものは、然樣な脆弱なものではありますまい。尊王は忠烈無比たる意志でありまして、殺伐野蠻なる兇器ではありません。

公議人の一人　兇器とは何だ。

公議人の他の一人　武士の魂を侮辱するな。

（議場、愈々騷然。）

森　國家を守るものは斷じて刀ではありません。魂であります。

公議人の一人　いんや、刀だ。

公議人の他の一人　御一新はどうして出來た。

公議人の更に他の一人　貴公はもう忘れたか。

公議人の一人　忘恩者。

公議人の他の一人　國賊。

公議人の更に他の一人　西洋崇拜。

（議場、囂々。）

――命が惜しけりや議案を撤囘しろ。

――さうだ、撤囘しろ。

――歸りを氣をつけろ。

――國賊。賣國奴。

森　どうか靜肅に願ひます……

（怒聲、罵聲、議場に滿つ。）

（森、終に卓上の木板を打つ。）

（それでも、議場の憤怒は鎮まらない。）
（議場、總立になる。）

第　二　場

同年六月二十日の夕刻。
森金之丞邸の一室。
森の兄横山正太郎、薩摩絣の單衣に袴を穿ち、机の前に正座して、頻に何か認めゐる。稍長き間。
森金之丞、襖を排して出づ。

横山　（筆を置いて、振向く）金之丞か。
森　はい。（兄の前に手を突いて、禮をする）只今歸りました。
横山　御苦勞だつた。（弟の顏をぢつと見る）大層蒼い顏をしてゐるではないか。また刺客にでも襲はれたか。
森　いや、さうではありません。
横山　役所で何か不首尾でもあつたか。
森　（辭令書やうのものを懐から出して、兄の前に置く）それを御覧下さい。
横山　（書類を手に執る）「徴士並に職務を免じ、位記返上仰せつけらる」（呆れたやうに弟の顏を見る）これはどうしたことだ。
森　その通りです。
横山　どうしてこんな目に會つたのだ。何か不都合があつたのか。
森　帶刀廢止の建議が祟つたのです。
横山　あれはこの六月二日の會議で否決されたと言つてゐたではないか。
森　さうです。滿場一致で否決されました。
横山　それなら、それで一件落著に及んでゐるわけではないか。
森　私もさう思つてゐました。ところが、太政官では、あまり世間が騷がしいから、一先づ役を引いてくれろと申すのです。
横山　岩倉さんや大久保さんがそんなことを言ふのか。
森　岩倉さんや大久保さんは、寧ろ私を庇護してくれたのですが、周圍がどうしても言ふことを聞かなかつたらしいのです。
横山　周圍が聞かないと言つて、岩倉や大久保ほどの人物が、それに負けるといふ法があるものか。
森　薩藩の先輩が一番反對したらしいのです。私を殺さうとしたのも多くは同郷人らしいのです。
横山　何といふことだ。太政官ではお前が刺客につけ狙はれてゐるのを知つてゐるのか。
森　それは知つてをられます。いつも氣の毒だ氣の毒だと

言つてをられます。

横山　氣の毒だと言ひながら、役を取り上げるとは何事だ。卑劣極まるではないか。

森　（寂しく笑つて）天下の大勢には勝てないのでせう。

横山　（熱して來る）それが果して天下の大勢だらうか。おれはさうは思はん。役人どもは維新の功に誇る唯一部の武人を恐れてゐるのだ。一時を糊塗して、一身の安きを求めてゐるのだ。おれはお前とは學歷も違ふで、意見の上では多少とも相違してゐる點がないではない。例へば廢刀の可否についても、おれには又おれで意見がある。併しながら、公議所は天下の議を集める場所ではないか。建言輿論を求める場所ではないか。可否は問はず、廢刀の建議をしたことが、なぜ惡いのだ。それに何の罪がある。幾分過激ではあつたかも知れんが、國を思ふの誠意は、お前の書いた趣意書にも十分現れてゐる。どこに不忠がある。どこに不敬がある。免職とは何だ。位記剝奪とは何事だ。

森　まあ、兄さん、さう興奮しないで下さい。

横山　お前はおとなしく引きさがるつもりか。

森　既に天裁をも經たことでありますから、この際少しでも不平らしい行爲に出るのは、却つて不忠不敬に當ると思ひます。

横山　（首を垂れる）それは如何にもさうだ。

森　それに、自分の精神が貫徹しなかつたのは、畢竟自分の考慮に足らぬところがあつたからだと思ひます。お國のお爲を思つてしたことではありますが、世間を騷がした點は重々申譯がないと思つてをります。

横山　それで、お前はこれからどうするつもりだ。

森　國へ歸ります。國へ歸つて四五年うんと勉強をいたします。折角拔擢されて官職につきながら、かうした結果を見ましたのは、畢竟自分の學問が足りないからだと思ひます。大言壯語をするやうですが、只今の日本には人物らしい人物が一人もをりません。眞の儒者もゐなければ、眞の豪傑もをりません。昌平校あたりの賣名學者が幅を利かしてゐる世の中です。國家が私を必要とする時期は必ず來ると思ひます。それまでに十分勉強をして、立派に御奉公の出來る資格を作つて置きたいと思ひます。

横山　その覺悟を忘れてはならん。お前はまだ二十三だ。まだまだ先が長い。もう一度初めから遣り直すことにしても、決しておそくはない。

森　はい。きつと御期待に背かないやうにいたします。ところで、兄さんはどうなさいますか。

横山　おれか。おれは東京を離れることは出來ん。おれは役人は嫌ひだ。仕官の望みもない。併し、お國は今累卵

の危きに臨んでをる。幕府を倒した當時の意氣は今の政府には見られない。明治の新政は昨の非を今日の是としてをる。大臣參議は驕奢を極め、官員は名利を事とし、官を尊ばずして能を尊び、官の爲に人を求めず人の爲に官を求めてをる。廉恥もない。忠誠もない。輕薄の風は天下に漲つてゐる。おれはこの狀態をこの儘見殺しにすることは出來ん。殊に憂ふべきはこの頃盛なあの征韓論だ。おれはけふも實は佐田を訪ねて、一論判して來たのだが、彼等の唱ふる征韓論なるものは、總て政略から出たもので、決して大義名分から出たものではない。一體、我が國の現狀はどうだ。庶民は困弱飢餓に迫つてをる。政令は枝葉にのみ走つて、根本國是は今に定まつてをらん。一新とは名のみで、一新の德化はどこにも見られない。若し國力が眞に充實してゐるなら、朝鮮如きが我に非禮を加ふる道理はないのだ。それを考へないで、唯朝鮮を小國と侮り、妄に無名の師を興して、若し萬一にも蹉跌したならば、天下の人民は何と言はう。たとひ大勝利を得たにしても、名義を失つたら、長く世界の誹を免れることは出來まい。佐田の如きは己を欺き、人を欺き、國事を以て戲れとするものだ。おれはこれらのことを書に認めて、聞かれるまでは幾度でも建白するつもりだ。おれの味方は一人もない。しかも一人の至誠は以て萬人の心を飜すことが出來ると信じてゐる。おれはこの建議の納れられるまでは、斷じて東京の地は去らん。

森　事に大小はありますが、私の帶刀廢止の議も、兄さんの非征韓論も、根ざすところは同じだと思ひます。武力が政略の具となる時、國家は土の如く崩れずにはゐません。折角、御健鬪を祈ります。

横山　うむ。どうしても聞かれんやうなら、死を以ても諫めるつもりだ。

森　いや、それはいけません。死ぬのはいけません。現在、私のやうな場合でも、昔なら切腹をするところでせうが、今は時勢が違ひます。私は一時の恥を忍んで、他日大に爲すところあらうとしてをります。兄さんも命を輕んじないで、飽くまでも生きて世を救つて下さい。

横山　いや、最後の手段は死より外はない。おれの死が諸公の胸に響いて、一人でも非を悟る人が出來たら、おれの死も決して冗にはならん。

森　分かりました。もう強ひてお留めはいたしません。

横山　（弟の手を執る）金之丞、禮を言ふぞ。おれの心を知つてくれるのはお前ばかりだ。

森　（兄の手を堅く握る）私の心を知つて下さるのも兄さんだけです。

（書生、慌しく出づ。）

書生　（息をはずませて）お客様です。
横山　おれのところへ來たのか。弟のところへ來たのか。
書生　森先生にお目にかかりたいと申してをります。
森　どうかしたのか、ひどく息をはずませてゐるではないか。
書生　先程から參つてゐたのでございますが、御密談のやうでございましたから、暫く差控へてをりましたところ、早く取次げと申して、脾腹を蹴られたのでございます。
横山　亂暴な奴だな。何人で來た。
書生　お三人でございます。府中藩の方だとか承りました。
横山　毛利か。まだ腰刀が祟つてゐるのだな。金之丞、早く行つて諭してやれ。
森　免職の上位記返上だと申したら、大抵滿足するでせう。
横山　大きにな。は、は、は、は、は。
森　は。は。は。
（森、襖に手をかける。）

第二幕

明治五年（西暦一八七二年）四月廿七日の午前。
亞米利加華盛頓日本辨務使館の一室。（當時の辨務使館は或ビルヂングの一部かホテルの數室を借りて設けられたるものなるべし）
中辨務使森有禮、フロツクコオトを着け、暖爐のマンテルピイスの上に黑塗の小さい位牌を飾つてゐる。
從者荒井常之進、花を持つて登場。
荒井　行つて參りました。
森　買つて來てくれたか。それは有難う。（花を受取つて、直ぐそれを位牌の前に捧げる）
荒井　ほかに御用はございませんか。
森　外山はアリントン・ホテルへ行つたやうか。
荒井　はい。もうお出かけになりました。
森　矢田部はもう起きたか。
荒井　疾うにお目覺めで、もう新聞を調べて入らつしやいます。
森　宜しい。それでは、もう行つて好い。
（荒井、退場。）
（森、姿勢を正して位牌の前に立ち、合掌默禱する。稍長き間。）
（外務文書大令使矢田部良吉、英字新聞を片手にして、案内なしにはひつて來る。）
矢田部　いや、これは失禮しました。
森　（顏を上げて振向く）構はん、構はん。もう濟んだ。
矢田部　けふはお兄い樣の……

森　祥月ではないが命日なので。

矢田部　では、毎月さうやつてお祀りになるのですか――ちつとも存じませんでした。

森　これでは餘り西洋心醉でもないだらう。は、は、は、は。（椅子にかける）

矢田部　（椅子にかけながら）　全くお兄い樣は惜しいことをいたしましたな。

森　正直一途な人だつた。死を以ても當路の惡政を諫止せずには置かないとよく言つてゐたが、まさかに實際やらうとは思はなかつた。わしが東京にゐたら、どんなにしても留めるのだつたが、何しろ薩摩へ島流しになつてゐたのでな。（寂しく笑ふ）

矢田部　もう三年になりますな。

森　さう。をとゝしの七月のけふだつた。

矢田部　併し、閣下が再び迎へられて、かうした大任をお帶びになつたのですから、地下の横山先生はさぞ御滿足でございませう。

森　いや、それは分からん。政府は相變らずの政府だからな。現に岩倉大使の一行が條約改正の相談に遥々ここまでやつて來ても、條款一つ携へて來んやうな始末だからな。かうした政府に仕へることは、決して地下の兄の喜ぶところではあるまいと思ふが、命ぜられた任地が外國でもあつたし、將來聊か期するところもあるので、兄の墓に詫びて、こつちへやつて來たのだ。

矢田部　お志の程はよく分かつてをります。外山や私をお連れになつて、自由に教育方面の研究をさせて下さるのにも、將來の御畫策がよく見えてをります。

森　教育だ。教育だ。何を措いても教育だ。教育がなければ、政治家も軍人も一文の價値はない。今の政治家はみんな御一新のどさくさ紛れに出世をした成り上がり者だ。正式の教育を受けたものは一人もありはせん。各藩の藩士に至つては更に一層無知蒙昧だ。若しあの手合に少しでも教育らしい教育があつたら、わしが公議所に提出した廢刀案なども議論なしに理解が出來る筈なのだ。今の時世に、用もないのに刀を差して歩くなどといふ野蠻なことがあるものか。さういふ野蠻な風があるから、何度わしは刺客に襲はれたか分からない。兄の横山もたうとう刀で腹を切つてしまつた。

（間。）

矢田部　さう言へば、切腹禁止の議を出した小野淸五郎も暗殺されたのでしたな。

森　あれも先覺者の一人だつたのに、實に惜しいことをした――わしが國へ歸ると、間もなくやられたのだ。

矢田部　まあ、こちらにゐれば、それだけは安心ですな。

森　併し、油斷はならんよ。吉田のやうな分からん奴が渡來して來るからな。
矢田部　さう言へば、たうとうお書きになりましたな。（新聞を出して見せる）
森　外債募集反對論か。いくら說いても吉田には分からんから、亞米利加の當路に警告を與へたのだ。吉田は同藩で、わしがはじめて英國へ留學した時に一緒に行つた一人だが、どうしてああ物が分からんのかなあ。
矢田部　吉田さんは餘り英語がお出來にならないやうですが、キリアムスが附いてをりますから、きつと通譯して聞かせたでせう。今頃はさぞ怒つてをられるでせう。
森　今にきつと談判に來るだらう。さうしたら、また條理のあるところを說いてやらう。
矢田部　今の日本の狀態で、二千萬圓からの外債を募るといふことは全く不利益だと思ひます。
森　君もさう思ふだらう。國計の基礎もまだ出來てゐなければ、條約の改正さへまだいつ出來るか分からん狀態だのに、單に諸侯の家祿を買ふ爲や鐵道の敷設などの爲に外國に公債を募るなどとは言語道斷のことだ。吉田は廟議廟議と、廟議の一點張りだが、たとひ廟議でも政府の命令でも、日本に不利益だと思へば、職務上わしは默つてゐることは出來んのだ。

森　（誰かがドアをノックする。）
おはひり。
（辨務少記外山正一、登場。）
外山　何か御用談ではなかつたですか。
森　いや、例の外債募集の反對論を述べてゐたのだ。
外山　今も大使のところで、その噂がありました。
森　さう、さう、君はアリントン・ホテルへ行つてくれたのだつたね。御苦勞だつた。岩倉公はお變りはないか。
外山　大層御元氣でした。
森　公債募集のことはどう言つてをられる。
外山　誰にもしつかりした意見はないやうです。木戸さんも山口さんも、外國のことは森がよく知つてゐるのだから、或は森の意見が正しいのかも知れんなどと言つてをられました。
森　困つたものだな――伊藤さんや大久保さんからの便りはないやうか。
外山　まだ、ないさうです。
森　一體、二人が條款を持つて歸つて來るまで、ここに待つてゐて、是非とも條約の改正をするつもりなのだらうか。
外山　さあ、それもしつかりは定つてゐないやうです。あまり來るのが遲いやうなら、さう便々と待つてはをられ

んといふやうなことも言つてをられました。

森　困つたものだな——ところで、わしの出向くやうな用はなかつたか。

森山　來月朔日までは、ホテルで靜養をされるさうです。朔日には癲狂院を參觀に行かれるさうで、閣下にも是非御同行が願ひたいと言つてをられました

森　こなひだの招魂祭については、なんにも話がなかつたか。

外山　アリントンの招魂祭ですか。大使は好いものを見たと言つて、大層喜んでをられました。殊に、南北戰爭に就いての閣下の御說明が有難かつたと言つてをられました。餘程感服されたものと見えて、リンコルンのことを、幾度も言つてをられました。

森　（矢田部の顏を見て）そら、これが敎育だ。君。

（荒井、登場。）

荒井　（森の側へ行つて、名刺を出す）かういふ方が見えました。

森　（名刺を見る）カメヤマ——日本人だな。

荒井　さうです。

森　十五分位でよければ會ふと言へ。

荒井　はい。

（荒井、退場。）

矢田部　何者でせう。

森　心配はない——わざわざ旅費を使つて、ここまでわしを殺しに來る奴もないだらうから。

外山　併し、油斷は出來ません。

森　大丈夫だ　わしはどんな場合にも油斷はしてをらん。

（荒井、龜山某を案內して來る。）

（龜山は白い布で包んだ刀らしいものを持つてゐる。）

（矢田部と外山は、出て行かうとして、これに目をつけ、ぎよつとする。）

森　（矢田部と外山に）君達は暫くあつちへ行つてゐてくれ給へ。

（二人はまだ躊躇してゐる。）

森　（威嚴を以て）早く行き給へ。

（兩人、去る。）

（龜山、森の前にいきなり平伏する。）

森　それでは、お話が出來ません。どうか椅子へかけて下さい。（自分が先づ椅子にかける）

龜山　はい。（素直に椅子にかける）

森　御用は何ですか。

龜山　はい。（躊躇する）

森　どうか遠慮なく言つて下さい。

龜山　はい。（まだ躊躇してゐる）

森　時間がないのですから、どうか早く言つて下さい。

龜山　（卓の上に兩手を突いて、頭を擦りつける）　申し上げます……わたくしは先生に對して、實に申譯のないことをいたしました。けふはそのお詫びに參つたのであります。

森　（訝しげに）　餘り唐突で分からんが、どういふことですか。

龜山　（決心したやうに）　先生、わたくしは嘗て先生を暗殺しようといたしたものであります。

（間。）

森　それはいつのことですか。

龜山　先生が帶刀廢止の建議をなすつた時であります。

森　うむ。あの時は隨分大勢につけ狙はれました。

龜山　わたくしも、なんにも分からずに、憤慨した一人でありました。

森　あなたは士族ですか。

龜山　申しおくれましたが、大垣藩のものであります。

橋　舊藩の士族はみんな憤慨したやうですな。

龜山　わたくしはどうしてもあなたを倒さなければならないと思ひました。

森　なぜ倒さなければならないと思つたのです。

龜山　それはお答が出來ません、今日になつて見ると、冷汗背を潤すばかりであります。わたくしは屢先生を道に要したのですが、食ひ違ひ、食ひ違ひして、どうしても先生を捕まへることが出來ませんでした。その内に、先生はたうとう薩摩へ歸つてしまはれました。併し、それが爲にわたくしは救はれたのであります。その後　一時の興奮から醒めて、だんだん先生の仰しやつたことを考へてゐる内に、どうも自分の頭は何かに縛られてゐるのではあるまいかといふ風に考へて來ました。そこで、今まで排斥してゐた洋學を研究し始めました。わたくしの眼界は忽ちに開けて參りました。世の中の見方がまるで變つて來ました。それから、その後いろいろと準備をいたしまして、たうとう今度こちらへ渡つて參るやうなことになつたのであります。わたくしはこれから亞米利加のカリホルニヤで開墾に從事するつもりであります。實に、今になつて見ると、お詫の申しやうもない不埒なことをいたしました。

森　では、その謝罪に來たのですか。

龜山　さうであります。（森の顏をぢつと見る）　先生、赦して下さいますか。

森　（いきなり龜山の手を取る）　君は實に偉い人だ。

龜山　お赦し下さいますか。

森　赦すも赦さんもありません。あなたは學問をしたお蔭

で、眼界が開けて來たと言ひましたね。その一言を、わたくしは何よりも嬉しく思ひます。

龜山　（涙を流して）これでやつと安心しました。實はもう一週間も前からこの地へ參つてゐたのでありますが、どうしてもお訪ねをすることが出來ませんでした。けふは非常な覺悟でやつて參つたのであります。

森　それは却つてお氣の毒でした。

龜山　さう仰しやられては申し上げやうがありません。（白い布で包んだものを解く）就いては、これがその當時わたくしの差してをりました刀であります。紀念として、これを先生に差し上げたいと存じますが、お受け下さいませうか。

森　（刀をとつて押し戴く）有難く頂戴いたします。

龜山　（立つ）公務のお妨げをいたして申譯がありません。それでは、これでお暇をいたします。

森　（立つ）もう直ぐここを立つのですか。

龜山　今夜にも出發したいと思つてをります。いづれカリホルニヤの方から御通信をいたします。將來事業の上で御厄介になることも澤山あるだらうと存じます。その節は何分宜しくお願ひ申し上げます。

森　どうぞ、何なりと遠慮なく命じて下さい。暇があつたら、又このワシントンへも遊びに來て下さい。

龜山　有難う存じます。

森　（握手する）それでは、さやうなら。

龜山　失禮いたしました。

（龜山、去る。）

（森、龜山から貰つた刀を、マンテルピイスの上の、位牌の前に捧げる。そして、また合掌默禮する。それから、デスクに向つて讀書を始める。）

（從者荒井、顏色を變へて登場。）

荒井　閣下、閣下、吉田理事官樣がおいでになりました。

森　（微笑しながら立ち上がる）たうとうやつて來たか。

荒井　なんだか大層怒つて入らつしやいます。お留守だと申しませうか。

森　ばかを言へ。直ぐにここへ通せ。

荒井　でも、非常な御劍幕ですから、若し間違ひでもあつては……

森　餘計なことを言はずに、直ぐ通せ。

荒井　はい。（行きかける）

森　矢田部や外山はどうしてゐる。

荒井　お部屋に入らつしやいます。

森　吉田の來たことは二人に言ふな。

荒井　畏りました。

（荒井、退場。）

（森、部屋の中央なる圓卓に歩み寄り、卓に手をかけ、姿勢を正す。大藏少輔吉田清成、荒々しく登場。）

吉田　森、貴樣は怪しからん奴だ、（衣兜から英字新聞を出して、卓の上に叩きつける）これは何だ。

森　まあ、かけ給へ。（椅子を指す）

吉田　（新聞を指す）これは何だ。これは何だよ。

森　讀んだか。

吉田　讀まんでどうする。

森　（兩樣の意味で）分かつたか。

吉田　分からん。分からんから談判に來たのだ。

森　（新聞を手にとる）どこだ。どこのところが讀めない。

吉田　（新聞をはたき落す）文字ではない。なぜ、こんな不埒なことをするのか、それが分からんのだ。

森　では、坐れ。返答をするから。

吉田　（椅子にどさりとかける）さあ、坐つた。

森　（椅子にかける）一體、何が不埒だと言ふのだ。

吉田　不埒ではあるまいか。おれは日本政府を代表して、廟議の決するところを携へて來てゐるのだ。然るに、政府の代任として外國へ派遣されて來てゐる辯務使が、これに反對するといふ法があるものか。況や第三者たる外字新聞に投書して、これを誹毀するに於いてをやだ。貴樣は日本の役人ではないのか。

森　おれは日本の役人だ。日本の役人だから日本の爲を思ふのだ。日本の爲になることなら、誰に向つて物を言つても差支はないではないか。勿論、政府の命令を受けないで言つた詞は、利害とも責任は自分にあると思つてゐる。

吉田　今度の祿制を目して、政府を盜賊にたとへ、公然減奪又は買奪の詞を用ひたのは不埒だ。苟も祿と名のつく以上、それが所有財産でないことは明なことだ。それ故、これを沒收したところで何の差支があらう。これを賊と呼ぶ道理は斷じてない。若し、あるにしても、政府の代任たる者が、かやうな言辭を弄して、自國政府の光榮を傷つけるといふ法があるものか。

森　政府を盜賊にたとへたのは、論理上の議論に過ぎない。また減奪買奪の文字を嫌ふなら文學者に聞いて見給へ。その意味が直ぐに分かるから。一體、君の持つて來た條件の内に「諸族高を祿と見做せば」といふ詞がある。これが第一おれには分からん。これ蓋し東洋流行、無理の理より生ずるの理かな。

吉田　苟も政府の代任たる役人は、努めて政府の信用と名譽とを辱かしめないやうにしなければならない。これが交際吏員としての第一の職務だ。故に、政府の處置が果して全國の安危に關するやうな場合は、書を呈して利害

を述べるか、使を出して事を議らせるか、或は自身歸つて意見を陳述するが好いではないか。命を奉じて來た理事官に迫るといふ法はない。

森　いや、おれはさうするのが一番好いと思つたからさうしたのだ。

吉田　そんな亂暴な詞があるか。

森　いや、決して亂暴な詞ではない。

吉田　いや、亂暴だ。

森　おれが亂暴なら、貴樣は分からず屋だ。

吉田　分からず屋とは何だ。さんざん人に恥を掻かせて置いて。

森　掻くやうな恥を持つて來たのが悪いのだ。

吉田　なに。（立ち上がる）もう一度言つて見ろ。

森　幾度でも言ふ。亞米利加三界まで恥を擔いで來たのは、貴樣の頭が悪いからだ。

吉田　何を。

（吉田、森に掴みかかる。）

（森も吉田を捩ぢ倒さうとしたが、ふと兄の位牌とその前に捧げてある刀に目をつける。突然、手を放して、絨氈の上に膝を突く。）

森　積に障つたら、腹の癒るまでおれをぶて。

（吉田、氣の狂へるが如く、森に鐵拳を浴びせる。）

森　ぶて、ぶて、いくらでもぶて。ぶつてゐる内には、貴樣の目も明いて來るだらう。

（森、目をつむる。）

（吉田、尚續けて打つ。）

（矢田部、外山、ドアを押して駈け入る。この態を見て、立ち竦む。）

第三幕

明治九年（西暦一八七六年）一月廿五日の午後。

清國保定府の一室。

特命全權公使森有禮、李鴻章と卓を挾んで對話す。双方稍熱してゐる。

日本公使館附鄭一等官書記、翰林院學士ハンホニヤン、英語通辯官ホンユリヤン列席す。

森　……永久とは何ですか。それは到底望むべからざることです。

李　望むべからざることとはどういふ意味ですか、では、條約といふものは、自國の都合で、破つても構はないと言ふのですか。

森　これは不思議な御質問です。日本人にさういふ御質問の理解出來るものは一人もありますまい。

勿論、條約といふものは、これを議定する際に、十分雙方の意に適ふやうにして作るものです。併し、一度きめたものは、永久に動かすことが出來ないといふ道理はありません。時勢の變遷に連れて、必ず改めなければならない箇條が出來て來ます。

李　勿論、それはさうです。併し、現今貴我兩國の間に結ばれてゐる條約は完全無缺なものです。それに、一旦締約した以上は、少くとも十年間は、雙方ともこれを固守しなければならないと思ひます。

森　如何にもさうです。期限をきめた以上は、その期限は守らなければなりません。併し現在の條約が完全無缺のものでないことは、閣下もよく御承知のことでせう。

李　それはなぜですか。なぜそんなことを言ふのですか。

森　總理衙門大臣などが私に向つて言はれました――朝鮮は清國の屬國である。だから、條約に揭げ言ふところの屬地の一つであると。

李　勿論、さうです、朝鮮事件について、衙門と貴國の公使館との間に往復した書翰の趣意は私も詳しく承知してゐます。即ち、朝鮮は清國の屬隷であつて、貴我の條約に基き、貴國からも屬國として見らるべきものの一つです。

森　併し、條約の内には、朝鮮が貴國の屬國だといふことを明示してある條款はどこにも見えません。これに反して、我が政府は終始朝鮮を獨立不羈の國として認めてゐます。獨立國として待遇してゐます。列國は勿論、恐らく貴政府とてもさうに違ひありません。現に貴政府は嘗て明言しました――朝鮮には自國の政府があつて、隨意に内外の事務を處理してゐる。清國は毫もこれに干與することはないと。

李　如何にもさうです。如何にも朝鮮は獨立國です。併しながら、その國王は清國皇帝の命令に依つて立つのを常としてゐます。だから清國の屬隷だと言ふのです。

森　併し、それは貴國と朝鮮との交誼に關する單に禮儀の問題ではありませんか。朝鮮獨立の問題には何の干係もないことです。

李　いや、朝鮮は清の屬國です。これは昔からみんなのよく知つてゐることです。

森　もうその問題はやめにいたしませう。いくら討論をしても際限がありませんから。それよりは、緊急に閣下の御注意を願ひたい一事がありますから、それを述べることにいたしませう――貴我の條約の内に、一方が他方の封土を侵掠してはならんといふ一款がありますが、領土の限界が確定してゐない爲に、嘗ては臺灣事件を起し、今度は又朝鮮事件を起すやうなことになりました。私が

現在の條約を不完全だとする理由は、この一條でもお分かりになるでせう。和親を目的とする一致から斯くの如き紛紜を醸すことは、弊國の爲のみならず、貴國の爲にも憂ふべきことではありませんか。

李　いや、それはいけません。貴國が事を起さなければ、なんでこんな紛紜が生じませう。砲船を出して朝鮮海の測量をなすつたのは貴國ではありませんか。さういふことをなさらなければ、朝鮮の方でも發砲などはしなかつたでせう。畢竟朝鮮が貴國の砲船に發砲したのは、貴國自らが招いたことなのです。況や公法で禁じてある三英里以内の海岸に侵入し、城地を陷れ、人を殺し、財を掠むるに於いてをやです。

森　いや、それは違ひます。我が砲船は海水測量が目的で朝鮮へ行つたのではありません。偶水を求める爲に船を寄せたのです。船を寄せるには、先づ海水の深淺を實測して、進退を無難にしなければなりません。その上、砲船の帆柱には歴然と國旗が揭げてあつたのです。それにも關らず、突然これに向つて發砲するといふのは、我が國の名譽を汚すものだと言はなければなりません。勿論、直ぐに問罪の師を出して、彼を膺懲するのは容易なことではありますが、我が國はさういふ處置に出るのを好まないので、修好の使を派遣したわけであります。閣下は又我が國の砲船が公法上禁せられてゐる場所へ侵入したのが悪いといふやうに仰せられましたが、公法といふものは、これを遵守する國に對して用ふべきもので、朝鮮のやうに公法の何物たるかを知らず、却つてこれを嫌忌するやうな國に對して用ふる必要はないと思ひます。

李　それは如何にも御尤です。併し朝鮮は決して貴國との交通を嫌つてゐるのではありません。唯その影響を恐れてゐるのです。自餘の外國が貴國の例に倣つて、狡猾な商業を營むことになると、朝鮮は忽ち亡びてしまふからです。

森　いや。その心配はありません。諸外國にいたしたところで、航海安全の爲に朝鮮海測量の自由をさへ許してくれれば、必ずしも開國通商は求めますまい。

李　いや、外國人の欲望は決してそこには留まりますまい。

森　それはさうかも知れません。併し、通商を迫るといふことは、どこの國でも出來ません。たとひ我が國でも、さやうな强迫を朝鮮に加へようとは思ひません。

李　それは保證出來ますか。

森　勿論のことです。苟も朝鮮に於いて外交を拒絶する正理があるなら、それを行ふのも好いでせう。或は日本や淸國のやうな唇齒の國だけを容れて、自餘の外國を拒むとしても好いでせう。

李　さういふことが出來ませうか。
森　勿論出來ると思ひます。現に我が國の例を見ましても、今から三百年前に、歐洲の諸外國を容れて交易を營んだことがありましたが、だんだん内政に關與して參りましたので、和蘭國を除くの外は悉くこれを逐斥して再び日本へ來ることを禁じました。而來蘭人が良好友愛の情を我に示しましたことは、恰も貴國が我が國に對するのと同樣でありました。故に貴國及和蘭は數百年の間、我が國と交通があつたわけですが、その間自餘の諸外國は一切我が國へはひることが出來なかつたのです。漸くその禁が解かれて、日本が諸外國一般と交通するやうになつたのは、つい二十年前のことです。
李　果してさうなら、朝鮮もその計畫を變へなければなりません。
森　實は私もさうした件に就いて、貴政府の協力同心を得たいと思つて、貴國へ渡來したわけですが、今日になつて貴政府の意のあるところを見ると、甚しく私の期待に背くものがあるのです。
李　それはどういふわけですか。
森　貴國の大臣達は朝鮮の爲に事務を處理する誠意を持つてをられません。日本が朝鮮へ修好の使を出したことに就いても、その主意を知りながら、これを賛成する意志がないのです。唯、條約の中の和親條款――或は招撫條款と言つても好いでせう――例の無用な領土不可侵の條款です。唯あればかりを問題にして、何度手紙を頂いたか分かりません。かやうな待遇を受けるのは、實に失望の至りです。
李　それは如何にもお氣の毒でした。併し、我が政府が朝鮮に關して、さういふ處置をとつたのには相當理由のあることです。一體、我が政府の見るところを以てすると、貴政府は事を行ふに當つて、甚しく急激に過ぐる嫌ひがあります。況んや今日の朝鮮はまだ貴國の望を十分滿足させることが出來る程度まで來てをりません。しかも、貴國は――臺灣事件の例を見ても分かるやうに――動もすれば隣邦を擾亂し、機に乘じてこれを奪はうとする意があるやうに見受けられます。
森　成程、貴國に比べると、日本は輕躁でもありませう。清國人たる閣下の目から見れば、或は短慮にも見えるかも知れません。併し、今日の朝鮮が日本の望を滿足させる程度にまで來てをらぬといふお說は首肯いたしかねます。我が國が朝鮮政府に求めるところのものは、極めて容易な一二件に過ぎません。先づ第一は、朝鮮が我が國に對して、國威相當の禮を盡すことで、第二は朝鮮海を我が國の船が安全に航海が出來るやうにして貰ふことで

す。日本が朝鮮に求めることは、この二件以外にはないのです。こんな至當なこんな簡單な要求を拒むのは、天譴を畏れざるものと言はなければなりません。また閣下は今、日本は動もすれば隣國を擾亂し云々のことを言はれましたが、これは英明な閣下のお詞とも覺えません。申すまでもなく、日本は四方海に圍まれた島國でありまして、水に依つて生を營むものと、陸に依つて生を營む者と、その殆ど同じであります。日本の人民が海利事業に熱心なのは、この理由からでありまして、政府も亦これが爲に保護の道を設けなければならないのであります。閣下の仰せられた征臺一件も、さうしたわけから、已むを得ず起つたことで、我が政府が莫大の費用と苦心とを厭はずに、あのやうなことをしたのは、唯政府が政府たるの義務を盡さうとしたからです。若し征伐が目的だつたら、どうして一旦占有した臺灣の一部を棄てる道理がありませう。

李　分かりました。朝鮮のことに就いては、早速一書を總理衙門へ遣しませう。我が政府があなたのお手紙に對する返事の內に、和親の條欵――卽ち雙方互に領地を侵すことを禁ずる條欵を引いたのは、如何にも聊か輕率でした。

森　その御一言を承つて安心しました。どうか貴政府が十分我が政府の眞意をお汲み下さればと願つてゐます。

李　暫くお待ち下さい。私の手紙に依つて、總理衙門が熟考する間、どうか待つてやつて下さい。

森　畏りました――貴國へ到着いたしまして以來、こんな愉快なことはありません。今夜は枕を高くして眠ることが出來ます。

（外交的緊張、弛む。）

李　それでは、お茶を上げますから、ゆつくりして行つて下さい。

森　有難うございます。

（李鴻章、卓上の鈴を振る。）

（綠茶、運ばる。）

李　失禮だが、あなたはお幾つですか。

森　三十になります。

李　お若いに似合はんしつかりしたお方だ。私はもうあなたの倍に近い。この通り、髮の毛ももう大分白くなりました。

森　いや、併し、お元氣なことはなかなか若い者の及ばぬところです。

李　勿論、あなたは外國へ行かれたところがあるでせうな。

森　前後二囘參りました。一度は西へ向つて東から歸り、二度目は反對に東へ向つて西から歸りました。

李　それは愉快でしたらうな。

森　まるで夢のやうでした。

李　ところで、この頃貴國では舊來の制服を棄てて、洋服を用ひられるやうになつたと聞いてゐますが、それはどういふわけですか。

森　極めて簡單な理由からです。日本舊來の服裝は無事安逸に世を送る人には適してゐますが、多忙多用な人間には全く不適當です。それで、時勢の變遷につれて、新式な制服をとるやうになつたのです。

李　併し、衣服といふものは、祖先を憶はせるものですから、子孫たる者はこれを貴重して、いつまでも保存すべきではないでせうか。

森　いや、吾々の祖先が若し今日生きてゐたら、きつと吾吾と同じことをしたらうと思ひます。吾々の祖先は既に千年も前に、貴國の服が我が國の服より便利だと思ふと、直ぐにこれを採用してをります。凡そ何事につけても、他國の長を採るのが、我が國の美風です。

李　貴國の祖先が私の國の服を採つたのは賢いやり方です。私の國の服は作るのも容易なら、材料も一切貴國のもので間に合ひます。第一歐羅巴の服を眞似るやうに金がかかりません。

森　成程、貴國の服は如何にも美術的ではありますが、便利といふ點では如何かと思ひます。袖も大きくて粗末です。髮の毛を結んで長く垂れるといふやうなことも日本の國民には適しません。ところが、洋服の場合はさうではありません。成程、經濟の原理を知らない人は贅澤のやうにも思ひませうが、勤勉は富の基、怠惰は貧の源です。便利な服を著て一所懸命に働けば、現在費すところに據つて、將來無限の報酬が得られると思ひます。

李　成程、それは如何にもさうでせうが、それに依つて貴國獨立の精神が歐洲の配下に委ねられるやうになつても、あなたは少しも恥ぢませんか。

森　少しも恥ぢません。私はこの變革を却つて世界に誇らうと思ひます。一體、この變革たるや、決して外から強迫せられたものではありません。全く我が國自己の好むところから出たものであります。日本は昔から亞細亞、亞米利加、その他いづれの國を問はず、その長ずるところを取つて、常に自國の短を補つて來たのであります。

李　我が國では決してさういふ變革は行ひますまい。唯軍器とか鐵道とか電話とかいふ器械方面のことは、確に西洋の方が優れてゐるのですから、これを採用しないわけには行かないのです。

森　一體、將來のことといふものは、容易に分かるもので

はありません、たとひ貴國にしても、四百年前に現在の制服を好んだ人はないでせう。

李　併しこれは我が國だけの變革で、決して洋風を用ひたのではありません。

森　併し、變革はやつぱり變革です。殊に、貴國の變革は强迫に出たもので、貴國の人民は容易にこれに服さなかつたと言ふではありませんか。

李　いや、併し、それは衆愚のことで、變革の動機は勤王の志にあつたのですから、やむを得ません。

（間。）

李　時に、亞細亞と歐羅巴の交際は將來どうなりませう——これに就いての御意見が伺ひたいものだが。

森　それは大問題です。この問題は各種の國民、各種の宗教の權威にも關係のあることで世界二大洲の智力と富との競爭如何にある事だと思ひます。併し、私は亞細亞人ではありますが、亞細亞が歐羅巴と對抗の出來る時機はまだまだ數百年後でなければ來ないと思ひます。單に外面から見ましても、今日の亞細亞人の下賤野卑なことは禽獸を距ること遠くないと思ひます。

李　なぜそんなことを言ふのですか。

森　何よりも先づ第一に言ひたいのは婦人に關することです。一體、婦人を尊ばなければならないのは、天の定めた理法です。婦人は人間の母です。一國一家の母です。然るに、亞細亞洲では、どこの國へ行つて見ても、婦人を卑んで、これを遇する道を知りません。まるで獸か何かのやうに扱ふのです。私が亞細亞人を下賤だと言つた意味は、この一事を見てもお分かりになりませう。

李　これは不思議な議論を承るものです。あなたは一體耶蘇教徒なのですか。

森　いや、私は耶蘇教にせよ、佛教にせよ、回教にせよ、宗教と名のつくものを一つも奉じてはをりません。現に御覽の通りの俗人です。唯常に正道を守つて、人を害さないといふことを一身の目的としてゐるだけです。併し、己れの心が己れの心を迷はして、常に實行の難きを嘆じてをります。

李　どうも實にあなたは豪い方だ。孔夫子のやうなお方でもあなたの仰しやるやうなことなら、謹んで聽くでせう。併し、あなたのやうな豪い方がをられるのに、どうしてあなたの國は外征などといふ輕擧妄動を企てられるのでせう。しかも、お國は今財政困難で巨額の公債をさへ歐洲に負うてゐるといふではありませんか。

森　併し、苟も思慮のある人間なら、豫め計畫するところなくして、妄に事業は起しますまい。

李　それは勿論のことです。併し、現在のやうに莫大な經

費を計上して、この上にも外債を積むやうなことがあれば、國家は終に滅亡してしまふでせう。

森　外債のことに就いては、以前から私も聊か考慮を費してをります。一體負債といふものは、その方法と時機さへ宜しければ、必ずしも忌憚すべきものでありません。現に我が國の歐洲に對する負債の如きは、國家にとつて實益の顯著たるものがあるのです。

李　それはどういふわけですか。負債は決して好いことだとは思ひませんが。

森　それはかうです。以前外債のない時代には、國民一般に理財の方法も知らなければ國家の形勢にも無頓著でありましたのが、今日では、たとひ小額でも外債があるといふことから、國民が理財の方法を會得して、常にその可否を論じ、一擧手一投足にも深い注意を拂ふやうになりました。その上、百般の工業を起して、その利潤を以て外債支償に充てようと努めるやうになりましたから、外債は却つて我が國の財政を善良に導いたと言はなければなりません。

李　それは結構なことです。服制の變革と言ひ、外國に對する負債と言ひ、それが貴國の幸福になるなら慶賀に堪へません。唯併し、歐洲に對する負債の増加は必ず貴國の獨立の束縛になるだらうと思ひますから、今後は御注意が肝要です。

森　御懇情の程感謝いたします――それでは、今日はこれで失禮いたします。

李　お歸りですか。それでは、朝鮮の一件は早速總理衙門の方へ申し遣しますから、暫くお待ち下さい。

森　委細承知いたしました。

（一同起立。禮。）

第四幕

第一場

明治十九年（西暦一八八六年）十二月某日の午後。

高崎正風邸の客間。

文部大臣森有禮、書生に案内せられて登場

書生　只今直ぐお見えになります。

（森、默つて頷く。）

（書生、去る。）

高崎　やあ。年末でいそがしいところを、よく來てくれた。

森　いえ、役所の方の用事はもう大抵片づきました。

高崎　家庭の方の用事はどうだ。

森 （默つて、高崎の顏を睨む） そんなことで私をお呼びになつたのですか。

高崎 さうではない。（笑つて） まあ、さう向きにならんでも好いではないか。

森 いや、併し、家庭の問題は家庭の內で解決するといふのが私の主義です。如何に先輩でも、他人の干渉は許しません。

高崎 誰が干渉すると言つた。僕は唯氣の毒だと思つて、見舞を言はうとしたのだ。

森 別に氣の毒なことはありません。

高崎 併し、君の男女同權論には多少の修正が施されるだらうな。

森 なぜですか——家內が不都合をしたからだと仰しやるのですか。

高崎 （默つてゐる）

森 そんなことで私の男女同權論が動いて溜まるものですか。その證據には、結婚をした時契約書を取交したやうに、離婚をする場合にも、双方諒解の上、契約書を破棄したのです。

高崎 それでは、奥さんが同意をしなければ、離別もしなかつたといふわけだね。

森 勿論です。

高崎 それは分からんな。

森 お分かりにはなりますまい。

高崎 世間ではかう言つてゐるぞ——男女同權などといふことを稱へるものだから、女がそんな不都合なことをするやうになるのだと。

森 いや、それは違ひます。女の不都合は女の不都合で、男女同權とはなんの關係もないことです。その證據には、同權論が稱へられる以前にも、さうした事實はあつたではありませんか。

高崎 （笑つて） 成程、これは一本參つた——ところで、君は後妻を迎へる氣があるか。

森 適當なのがあれば、貰つても好いと思つてゐます。

高崎 岩倉公が末のお孃さんを上げたいと言つてをられるのだが。

森 岩倉さんのお孃さんだから、何でも彼でも貰へと言ふのでは困りますが、交際をして見て、氣に入れば貰つても好いと思ひます。

高崎 さうか。それでは、そのことを先方へ傳へよう。

森 （少し打解ける） その御用だつたのですか。

高崎 いや、それもあつたが、實はけふは君にあやまることがあるので、わざわざ來て貰つたのだ。ところが、いきなり男女同權論で食つてかかられたので、話がわき道

へそれてしまつたのだ。
森　何をあやまると仰しやるのです。
高崎　例の黴の生えた勤王の一件だ。あれはこの頃になつて、つくづく君の說が本當だと思ふやうになつた。
森　いや、あれは酒の上で言つたことです。さう仰しやられると却つて恐縮です。
高崎　いや。ほんとに吾輩の勤王論などは、もう黴が生えて、犬も食はぬやうになつてしまつた。
森　あなたがそんなことを仰しやるのは不思議です。
高崎　いや、もう黴の生えた勤王論などは再び言はん。もうけふからは宗旨變へだ。
森　どう宗旨をお變へになるのです。
高崎　これからは歐羅巴主義だ。
森　飛んでもない。氣でもお違ひになつたのではありませんか。
高崎　いや、決して氣は違はん。
森　でも、あなたのやうな勤王家が急に歐羅巴主義にならうと言つたつて、それは出來ることではありますまい。
高崎　いや、決して出來んことはない。過つて改むるに憚ること勿れといふことがある。また君子は豹變するといふこともある。勤王家が歐羅巴主義になつても、決して怪しむことはない。さあ、わしが歐羅巴主義になつた以上は、何も彼も歐羅巴流儀にしなければ氣が濟まん。第一、君の係である教育なども、早速歐羅巴流儀にしてくれんと困る。若し、さうせんやうなら、君の首を貰ひに行くかも知れん。
森　（聲を上げて笑ふ）それはをかしい。現に歐羅巴流儀に爲しつつあるではありませんか。併し、あなたの仰しやるやうに、さう早急には行きません。五六年の内には、きつと歐羅巴流にして見せます。
高崎　爲しつつあるといふ議論があるものか。わしは君も知る通り、英語も出來ず、佛蘭語も出來ず、獨逸語も出來ないが、歐羅巴大陸は一通り廻つて見て來た。勿論風俗や人情も探り、教育の方面も注意して見て來た。ところが、どこの國へ行つて見ても、きつとその國の國語學校といふものがある。さうして、小學の讀本はその國の詞を正しく話させ、その國の文章を正しく書かせる階梯になつてゐる。佛蘭西へ行けば、佛蘭西のことを先づ第一に敎へてゐる。獨逸へ行けば、獨逸のことを先づ第一に敎へてゐる。英吉利へ行つて見れば、英吉利のことを先づ第一に勉强させてゐる。かうして見ると、學校といふものはその國の國民を作る場所である。ところが、今君達の爲しつつあることはどうだ。成程、髮の毛を切つて、洋服を著て、時計を下げたり、目金をかけたりする

位のことは爲しつつあるやうだが、日本の學校が果して日本人を作つてゐるかどうかは疑はしい。なぜと言へば、君が貴い學位を授けた博士とか學士とか言はれる人達の中に、手紙一つ滿足に書けぬ人があるではないか。わしは二三人さういふ人を知つてゐるので、始終手紙を貰つてゐるが、いつもてにはや語格が間違つてゐる。佛蘭西や英吉利の博士に、自國の文法を間違へて手紙を書くやうな人が一人でもゐるだらうか。どうだ。ちやきちやきの博士が、氣の毒な程日本の文法を知らぬ手紙をよこしたのだ。それでも日本の博士と言はれるか。わしが歐羅巴流にして貰ひたいといふのは、ここのことだ。歐羅巴の學校はその國の人を製造する場所である。日本の學校は英吉利人を製造する場所なのか、佛蘭西人を製造する場所なのか。英を學ぶものは英でなければならない。佛を學ぶものは佛でなければならない。日本の學問を隅つこの方へ押し込んで置いて、それで日本の學校だと言はれるか。日本の教育だと言はれるか。どうだ。早速あしたから歐羅巴流にして貰ひたいと思ふがどうだ。

森　（頭へ手をやる）　成程、これは一本參つた。實はそのこと就いては、私もかねて心配してゐるのです。かう言ふ自分も、日本文で手紙を書けば、きつと間違ひをするに違ひないのです――あなたは人が惡い。

高崎　いや、決して惡くはない。君の說に依つて自分の說を變ずるぐらゐ人が好いのだ。

森　もう澤山です。けふは一本參りました。

（高崎、笑ふ。）

（森も笑ふ。）

第　二　場

明治二十二年（西暦一八八九年）一月二十八日の午後。

文部省の會議室。

直轄學校長會議。

森有禮、自席に起立して、演說す。

森　……現今帝國大學その他諸學校の氣風を見まするに、決して未だ滿足すべき狀態に達してをりません。蓋し、これは時勢の然らしむるところでありまして、諸君に於いても既にお氣づきのことであらうと思ひます。ところで、今これを滿足すべき狀態へ進めようとするには、主として學政の目的を明示し、萬事この目的に向つて進むのが第一だと思ひます。さて、學政の目的とは何でありませうか。これは詳言せずとも、既に諸君の知悉せられるところであります。抑も政府が文部省を設立して、學政の責を負はせ、その上國庫の資力を借りて諸學校を維持する所以のもの、畢竟國家の爲であるとするならば、學政の目的

も亦專ら國家の爲といふことに歸著しなければなりません。例へば、帝國大學に於いて教務を執る場合に、學術の爲と國家の爲とに關することがあれば、國家のことを先づ第一にしなければならないのです。學政の上から見れば、諸學校の教育は生徒その人の爲にするのではなくて、國家の爲にするのです。一體、教育といふことは教科書の材料を列べて事物を知らせるといふに留まりません。一般國民の心を確め、精神上の方向を指示し、一つの重點に歸向せしむることが最も重要なことであります。これは甚だ困難な爲事でありまして、二千年前の支那で行はれた周の世の教育を、その儘今日の世の中に移さうとしても　出來ることではありません。歐羅巴には宗旨があつてそれが少年の精神を固めることになつてゐますが、これはお國に於いて採るべきことではありません。然らば、お國の教育の結果をして、人心歸一ならしむるにはどうしたら宜しいでありませうか。幸にして、我國には萬國に類のない優美な國體があります。それは何だと言ふと、外ではありません。即ち、御國の國體、萬世一系の一事であります。この一事より外に教育の基礎とすべきものはありません。御國の人民たるものは、遠い祖先から子孫の末に至るまで、千代に八千代に、御國の國土のあらん限り、萬世一系の天子に侍づき奉つてゐるのでありまして、こんな有難い國體は世界のどこへ行つても二つとは見られないのであります。この國の成立を以て教の基礎とすることが、教育上第一の主義とならなければなりません。これを棄てて、他に依るべきところはどこにもありません。どこにもありません……

（拍手。）

第五幕

第一場

明治廿二年二月八日の宵。

内務省屬山口縣人兒玉佐一の寓居。

主人の兒玉、同鄕の青年四五名、大きな卓を圍んで夕飯を食つてゐる。

兒玉　憲法發布も近づいたな。

青年の一　あす、あさつて、しあさつてか。

青年の二　市中はえらい騷ぎをやるらしいな。

青年の三　新聞で見ると、なかなか奇拔な催しがあるらしい。

青年の四　山車や御輿も隨分出るらしい。

青年の一　それぢやあ山王の祭も同じことだな。

青年の二　東京人はお祭騷ぎが好きだ。中にはわけも分か

らずに騷ぐ奴もあるのだらう。

兒玉　いや、いくら騷いでも好い。お祭騷ぎはおれも好きな方ではないが、今度ばかりはいくら祝つても祝ひ足りないやうな氣がする。

青年の三　ほんとだ。君主獨裁が一滴の血をも流さずに立憲帝政に移るのだからな。

青年の四　古往今來、萬國を通じて、かういふ例はあるまい。

兒玉　ない。全くない。その代り、この二十二年の間の今上陛下の御苦勞はどの位であつたらう。おれはそれを思ふと、涙がこぼれて來る。

青年の三　板垣が民選議院設置の建白をしてからも、もう十六年になるからな。

兒玉　板垣などが何を言はずとも、陛下は既に御登極の際から、このことを天地神明に誓つてをられたのだ。有難いことだ。

青年の一　大典の當日には、西鄕も賊名を除かれるさうだな。吉田松陰へも贈位があるさうだな。

兒玉　大赦令が出て、國事犯は全部釋放されるさうだ。愈有難いことだ。

（內務省土木局計算課勤務西野文太郎、登場。）

兒玉　おう、西野、歸つて來たか。早く飯を食へ。けふはおれがけんちん汁をこしらへて置いた。

（西野、默つて卓につく。）

兒玉　大層顏色が惡いぢやないか。體でも惡いか。

西野　（首を振る）　いや。

兒玉　役所で喧嘩でもしたか。

西野　（首を振る）　いや。

青年の三　どうしたのだ。

西野　いや、どうもしやせん。

兒玉　ぢやあ、飯を食へ。

西野　うむ。（まづさうに飯を食ふ）

青年の三　一體、貴樣、この頃どうかしてるぞ。

青年の四　背水庵からこつちへ移つて來た時は、ひどく愉快さうだつたが、この頃又すつかり沈んでしまつたな。

兒玉　青年は元氣がなくちやいかん――今も話してゐたことだが、しあさつては愈憲法發布だ。一つみんなで東京市中をあばれ廻らうぢやないか。

青年の二　おれも東京人のお祭さわぎには不贊成だつたのだが、今兒玉の話を聞いて、大いに祝ふ氣になつた處だ。

青年の一　どうせ役所も休みなのだから、東京中見物して步かうと思つてるのだ。千載一遇の大典だからな。

青年の四　（西野に）　なぜ默つてゐるのだ。

（西野、やつぱり默つてゐる。）

兒玉　西野、貴樣はこの大典をめでたいとは思はんのか。

西野　それはめでたいと思つてゐる。

兒玉　今上陛下の御治績を有難いとは思はんか。

西野　恐れ多いことだ有難いことだと思つてゐる。

兒玉　それでは、なぜもつと快活にせんのだ。

西野　唯一つ氣になることがあるからだ。

青年の三　分かつた。森文部大臣の不敬事件だらう。

西野　さうだ。

青年の四　貴樣は頻にこなひだからあのことを言つてゐるが、あれは果して事實なのか。

青年の三　おれは事實だとは思はんな。この正月に文部省でした演說の筆記を見ても、森は立派な國體主義者だ。あんなことを言ふ人が、苟にも皇室の御先祖に對して不禮を働くなんて、おれには考へられないな。

兒玉　聞くところに依ると、森といふ男は、秀才ではあるが、非常に傲慢な男ださうだ。だから、人に憎まれて、さもないことを大業に言ひ觸らされるのだらう。

青年の一　耶蘇信者だといふ噂もあるな。

青年の二　だから、神官や僧侶に憎まれてゐるだらう。

青年の四　さう言へば、西野の親父も神官ださうだな。

西野　いや、おれは宗教上の憎みなどから人を律しはせん。森は日本の國民として、誰が見ても許すべからざる行爲を敢てしたのだ。おれは德島から轉任して來る途中、伊勢へ寄つて、すつかり調べて來た。

兒玉　では、森は一體どんなことをしたのだ。

西野　森が三重縣へ學事視察に行つたのは、をととしの十二月だ。神宮へ參拜したのは二十八日の午後二時五十分頃だつた。案內役は尾寺禰宜だつたが、豐受大神宮の前まで來ると、森はステッキで御門扉の御帳を高く上げて、中を覗いたさうだ。尾寺禰宜が、この門內へは皇族以外のものはひることが出來んのだと言ふと、さうかと言ひながら、左の手で帽子をとつて、輕く頭を一度下げたきりで、その儘二見ヶ浦の賓日館といふ宿屋へ引き上げてしまつた。皇太神宮へはたうとう參拜しなかつたのだ。

兒玉　それは事實か。

西野　確な事實だ。その時隨行したといふ山田の或新聞記者から親しく聞いて來たことだ。

青年の二　事實とすれば怪しからんことだ。

西野　怪しからんといふ程度のことではない。帝國の臣民として實に許すべからざる不敬な行爲だ。況んや、これが教育の大任を雙肩に擔つてゐる文部大臣たるに於いてをやだ。

兒玉　併し、唯それだけのことなら、さう深く咎めるには

及ばんと思ふ。おれは靴の儘神殿へ上がつたやうなことを聞いたが、まさかにそんなことはしなかつたのだ。

西野　咎めるに及ばんとはどういふ意味だ。ステッキで御帳を揭げたといふだけでも、不敬至極ではないか。

靑年の三　それは森が日本のことを知らんからだ。あの人はうま煮のことを馬の肉だと思つたと言ふではないか。

西野　それは昔のことだ。森も今日ではもう四十三だ。日本のことを知らんでは、もう濟まん。

靑年の四　おれは森がそんな不忠不敬な人間だと思ふことは出來ん。さつき兒玉も言つたやうに、あの男の傲慢な態度が、さうした流言を生んだのだと思ふ。

西野　流言とは何だ。おれは實際調査して來たのだ。

靑年の二　事實さういふことがあつたのなら、第一當局が默つてはゐまいと思ふが。

靑年の一　森は昔帶刀廢止の建議をして、位記返上を食つたことさへあると言ふではないか。亞米利加で理事官の吉田と喧嘩をした時も、日本へ召還されたといふ話ではないか。それに、それ程の不敬を敢てしながら、安穩でゐられるわけがないと思ふ。

西野　それは今の內閣が腐敗だからだ。

兒玉　それでは、森一人が惡いのでなくて、今の內閣全部が惡いことになるではないか。

西野　勿論のことだ。

靑年の三　森は西洋崇拜であるかも知れんが、國家主義者たるに於いては、昔から終始一貫してゐる。おれはどうしても森を不敬罪に問ふことは出來ない。

西野　森の國家主義は舶來の國家主義だ。日本で生れた國家主義ではない。

靑年の三　併し、森は日本の國體の世界に比類のないことを賞讚してゐる。

西野　それは政略の上からだ。腹からほんとにさう思つてゐるのではない。

靑年の一　それがどうして分かる。

西野　ステッキで御帳を揭げた一事でよく分かつてゐる。

兒玉　どうも、さういふ風にいつまでも一つことに拘泥してゐては困るな。兎に角、しあさつての大典には大赦令も出るといふのだ。もう好い加減に許してやれ。

西野　いや、許すことは出來ん。曠古の大典に、あんな非國民を列席させることは斷じて出來ん。

兒玉　出來んといつたつて、どうすることも出來んではないか。

西野　いいや、出來る。

兒玉　どうして出來る。

西野　おれが命を棄てれば、なんでもない。

兒玉　そんなことで命を棄てる莫迦があるか。

（一同、笑ふ。）

兒玉　さあ、もうそんな議論はやめにして、小川町へ散歩にでも行かうではないか。

青年の二　行かう、行かう。

青年の三　前景氣を見に行かう。

（一同、立ち上がる。）

兒玉　西野、貴樣行かんのか。

西野　おれは一寸調べ物があるから、留守居をする。

青年の四　をかしな奴だな。ぢやあ、みんな行かう。

（一同、退場。）

（西野、一人殘り、葛籠の中から紙を出して、食卓の上に廣げる。それから、筆と硯を持つて來て、何か書き始める。紙の上に涙が落ちる。）

第二場

同年同月十一月午前七時。

森文部大臣官邸の應接室。正面に扉。扉の向うは廊下。中川秘書、西野文太郎を案内して、登場。正面の扉、開いた儘になりゐる。

中川　どうぞおかけ下さい。

（西野、椅子にかける。）

中川　（椅子にかけながら）大臣は御參內前で時間がおありになりませんから、私が代つてお目にかかります。私は秘書の中川といふものです。

西野　實は秘密に閣下へ申し上げたいことがあつて參つたのですが。

中川　併し、何分にも參內の時間が切迫してをりますので。また明日にでも。

西野　いや、今日御參內前に是非ともお耳へ入れて置かなければならないことがあるのです。

中川　私が承るわけには參りませんか。

西野　實はけふ、閣下を途上に要して暗殺を企ててゐるものがあるので、その顛末を直接閣下に申し上げたいと思つて參つたのです。

中川　（驚いて）それは一大事ですが、さういふことなら、委細をお話し下されば、折を見て私から大臣へ必ずお傳へいたします。

西野　いや、重大事件ですから、直接大臣にお目にかからなければ、申しあげることは出來ません。

（大禮服を著た森有禮、廊下の外を通りかかる。）

西野　（戸口へ走り寄る）閣下は大臣でありますか。

森　さうだ。

（西野、いきなり左の手で森の胴に抱きつき、袴の下

に隱してゐた出刄庖丁を揮つて、森の右の脇腹を刺す。
森、應接室へ倒れ入る。）

中川　（呼ぶ）賊だ。賊だ。

（家扶岡本清遠、飛んで來る。中川と力を合せて、西野を組伏せる。）

（屬官座田重秀、駈けつけて來る。）

（西野、跳れ起きて、再び大臣を刺さうとする。）

（座田、仕込杖を拔いて、西野を斬り下げる。）

（岡本、中川、大臣を抱へ起す。）

第　三　場

同年同月同日午前十時。

文部大臣官邸の二階。大臣居室。

森、病床に横たはりゐる。中川、座田、主治醫など侍しゐる。

森　（譫言のやうに）中川、中川。

中川　（摺り寄る）はい、はい。

森　中川はをらんか。

中川　中川はここにをります。

森　兇漢はどうした。

中川　座田君が直ちに成敗しました。

森　斬つたのか。

中川　はい。

森　可哀さうに。何で斬つた。

中川　仕込杖で。

森　仕込杖で。（間）兇漢はおれを何で刺した。

中川　（答へない）

森　何で刺したのだ。

中川　はい。庖丁で。

森　庖丁で。

中川　はい。

森　おれの兄は日本刀で腹を切つた……おれは庖丁で刺された……兇漢は仕込杖でやられた。

（沈默。）

森　（譫言のやうに）兇器は……兇器は……

（沈默。）

（岡本家扶、大禮服の內閣總理大臣黑田清隆を案內して來る。）

（黑田、直ぐ森の枕頭に行く。）

黑田　森、森。

（森、瞑目して答へない。）

黑田　安心せい。憲法發布の大典は、歡呼の內にめでたく終つたぞ。

（森、目を開く。）

黒田　天皇陛下から優渥な御沙汰があつたぞ。

（森、微に笑つて、僅に頷く。やがて又瞑目す。）

（百一發の祝砲、遠く響く。）

（市民歡呼の聲、遙に聞ゆ。）

永井荷風篇解說

關　秀　一

先生名は壯吉。荷風と號す。一に金阜また石南と稱す。明治十二年己卯十二月三日東京市小石川區金富町に生る。考は諱匡溫久一郎と稱す。字は耐甫、禾原と號す。尾張の人なり。漢洋の學に通じ特に詩を善くす。官を辭するの後日本郵船會社の社員たりき。母は鷲津氏。一女三男を產む。先生は其の伯なり。仲は貞二郎といひ鷲津氏を冒す。叔は威三郎といひ農學博士なり。先生初め小石川服部坂黑田小學校に入り後小石川竹島町東京尋常師範學校附屬小學校に轉じ神田一ツ橋高等師範學校附屬中學校に進み明治三十年四月を以て業を卒ふ。此の間書を岡三橋に畫を岡不崩について學び、又漢詩を岩溪裳川について學べり。先生中學科の業を卒ふるの年秋九月先考に從つて淸國上海に遊び十一月歸京し東京外國語學校に入り支那語を修むる事三年。いまだ業を卒ふるに及ばずして廢學し文藝の士と交遊す。明治三十五年九月米國に遊學し橫濱正金銀行紐育支店及び佛國里昂支店に雇はれ明治四十一年八月に至つて歸朝す。明治四十三年二月慶應義塾大學部の聘する所となり文學科の生徒を敎ふること數年病を得て辭せり。爾來專ら筆硯に親む。先生初め某氏の女を娶りしが和せずして去り、尋いで新橋の妓を納れしが亦去れり。子なし。

以上は春陽堂版明治大正文學全集第三十一卷永井荷風篇に附せられた先生の略傳であるが、今本書に轉載するに當つては更に增補すべき一項がある。

それは明治三十三年七月から凡そ一年間先生が狂言作者見習としてまだ團十郎も先代菊五郎も生きてゐた頃の歌舞伎座に勤められたといふ事實であつて、此の體驗こそ實に外遊六年間に親しく見聞された歐米演劇の造詣と相俟つて後年先生の戲曲に獨自の境地を齎したものであらう。

本書の成る年先生は正に五十歲の誕辰を迎へられる筈であるが、前後三十年に彌つて世に發表された作品は長短篇併せて三百、著書は春陽堂版「荷風全集」全六卷の他三十に垂々としてゐる。

この中戲曲は未完に終つたものを除いては本書收錄の九篇以外「異鄕の戀」一篇、戲曲集は春陽堂版「三柏葉樹頭夜嵐」同じく「秋の別れ」の二集である。

「異鄕の戀」三幕は發賣禁止になつた明治四十二年博文館版「ふらんす物語」中に加へて發表されたものであるが、先生は爾來篋底に秘して再び世に示す意志を持つては居られ

ない。

從つて本書は先生の眞の戯曲全集となるもので、將來への定本となすべく制作年代順に配列し幾多の校訂がすべての上に施された。

平維盛　一幕は明治四十三年九月明治座に於ける初世市川左團次七回忌追善興行に際しその中幕狂言として執筆されたもの。同年同月雜誌「三田文學」にも載せられ新體の戯曲として時の劇壇から非常な注目を受けた。役割は、維盛（左團次）與三兵衛（左升）舍人武里（壽美藏）石童丸（ぼたん）小宰相局（歌右衛門）皐月（莚女）であつた。

秋の別れ　一幕は明治四十四年一月雜誌「三田文學」に發表されたもの。様式を西歐の歌劇に倣つた事は新しい試みであつた。大正十一年十二月帝國劇場に於て市川左團次一座が上演した。役割は、白樂天　左團次　旅の書生（壽美藏）[illegible]頭（左升、荒次郎）都の女（宗之助）で、松居松葉氏が舞臺監督であつた。

わくら葉　三幕は明治四十四年十月雜誌「三田文學」に發表されたもの。

煩　三幕は大正元年一月雜誌「中央公論」に「暴君」と題して發表されたもの。「わくら葉」と共に彼のオオヂエ、デューマの流を汲んでゐると稱される社會劇である。大正八年二月有樂座に於て花田偉子一座が上演し、後大正十一年七月帝國劇場に於て「伯爵」と改題して專屬俳優一座が再び上演した。帝國劇場に於ける役割は、川原忠澄（[illegible]）川原忠正（壽三郎）水山新太郎（勘彌）等がその主なるもので平岡權八郎氏が舞臺裝置の事に當つた。

三枡葉梢頭夜嵐（みつがしはこずゑのよあらし）四幕は大正四年四月雜誌「三田文學」に發表されたもの、籾山書店版「荷風傑作鈔」の編者が所謂「殊更江戸演劇世話物の舊體に則りて仕組みたる」先生の「趣味の一面を代表する傑作」である。大正九年五月帝國劇場專屬俳優一座によつて上演された。主なる役割は、出羽守、延壽齋（宗十郎）延壽太夫（宗之助）富本豐前掾（松助）等であつた。

旅姿思掛稻（たびすがたおもひのかけいね）一幕は大正五年秋の作、翌年一月雜誌「文明」に「懸想狐」と題して發表された淨瑠璃所作事である。大正十一年六月帝國劇場に於て中幕狂言として上演された。役割は、傳心（[illegible]右衛門）旅の女（梅幸）で常盤津文字兵衛手附、藤間勘衛振

附であつた。

開化一夜艸（かいくわひとよぐさ）　二幕は大正九年七月雜誌「新小說」に發表されたもの。發表の際附せられた九ヶ條の上演心得書と六ヶ條の禮金の事とは、作中二三の臺詞と相俟つて當時の劇壇に痛烈な諷刺を與へたものであるが本書には出版者の都合によつて省かれて仕舞つた。

夜網誰白魚（よるのあみたれとしらうを）　三幕は大正十年明治座三月興行に書卸されたもの。役割は、重五郞（左團次）傳次郞（勘彌）白瀧（秀調）政吉（左升）留藏（荒次郞）等であつた。

早春　一幕は大正十一年二月雜誌「明星」に發表されたもの。

森鷗外篇解題

水木京太

「玉篋兩浦嶼」は鷗外先生最初の創作戲曲で明治三十五年十二月雜誌「歌舞伎」號外として出た。これは特に伊井蓉峰のために、翌年一月市村座上演臺本として執筆されたものである。初め先生からファウストの筋を聞いた伊井が、之を座附作者に中幕に仕組ませたいと云ふのでその不可能を說き、代りにこの浦島を書き與へた。ファウストが老人から若者に變るのと丁度反對に、壯年の者が忽ち老翁になるところ、題材として浦島を選ぶ一つの原因になつた。

浦島太郎をして上の卷で人の世の事業を思はせて平安な龍宮の生活を捨てさせ、更に下の卷で後の太郎の世界征服の首途に際會させ「事業をわかき　わがすゑに　つたへおこなふことをうる、これもひとつの不老不死」と觀ぜしむるところに、先生の創見をうかゞふことが出來るが、しかし先生の意圖はもつと大きいところにあつた。

即ち我邦の舞臺に現れたことのない「白を主にする劇」を試みられたのである。見るよりも聞くべき芝居を創められたもので、在來の歌舞伎芝居に對する革命的な企にちがひないものだつた。先生自身ハウプトマンの「日出前」の例を引かれ「獨逸の從來の戲曲と「日出前」との懸隔を見るに、決して日本從來の脚本と浦島との距離より大きいとは謂はれない」と語られたほどで、之を書き之を上場したのは當時として隨分大膽なことだつた。

國民傳說を取材したこの處女戲曲は、幽玄莊重の調を永くわれらの胸に傳へる名曲であるが、それと共に前述の如き劃期的任務を果したといふ歷史的價値をさへ有する作品なのである。

「日蓮上人辻說法」は第二作である。明治三十七年先生が日露戰役に出征間際に書かれ、二月號の「歌舞伎」に發表され四月歌舞伎座に於て中車（當時八百藏）羽左衛門梅幸等に依つて上演された。これは浪漫的な歌舞伎劇の手法に對して、無駄のない簡素な古典的手法を用ひて、鎌倉の大路に他國侵逼難を說く上人を描き出し、この種の戲曲の模範たるべき作品である。寂寞の夕暮の情景、人物の出入、群衆の使驅、緊張せる問答等巧に舞臺効果を擧げてゐるので、初演の翌年新聞劇評家から成る「若葉會」と、大正になつてから帝劇でと二度上場された。

其後の先生は一時殆んど文壇と關係を絕たれたが、四十二年一月雜誌「スバル」の創刊號に久し振りに戲曲を投じられた。それは「プルムウラ」であつて、古代印度の信度國の王女の妖しき復讐を題材としたものである。私の傳聞

に誤りがないとすれば、この作は歌右衛門（當時芝翫）が先生に乞うて上演の許可を得た由であるが、この象牙の牀に臥す美しき王女の姿を舞臺に見さる間に、歌右衛門のすでに老いたことを遺憾に思ふものである。

最初の現代劇「假面」が同年四月「スバル」に出た。當時自然主義文學の勃興時代に、意志の勝利を示し假面の哲學を說く主人公を拉し來つたのは、そこに特別の意味がなかつたのであらうか。……先生の令弟三木竹二氏の知遇を得てさきに「兩浦嶼」を與へられた伊井は、同六月の新富座で再び先生の作品の初演者たることを得た。

つゞいて書かれたものは四十二年十一月「スバル」の「靜」であり、四十三年四月「中央公論」の「生田川」である。いづれも古代のことを現代語で書かれた點で新生面を拓かれたものである。先生は「ブルムウフ」の由來を記された後に、時代物を書くについて文體のむづかしさを訴へられ「文體を極古くしようとすれば、早稻田で試みた「妹背山」の翻譯のやうになるが、それでは人に分らな過ぎる。稍雅言に近い位な處で優しく書かうといふのでいつか「浦島」を書いた事があるが、あれをもう一度しようとも思はない。それから「日蓮」を書いた時には少し狂言詞を加味して見た。それもこの場合には面白くない。そこで今度は今までの淨瑠璃にあるやうな七五調の大部分占めてゐる文で書いて見た。これも書いてしまつて見ると感心しない。嫌に古めかしい様な感じがする」と語つて居られる。

「兩浦嶼」以來つねに白を主として動きを眼目としない芝居を書かれて來た先生は、かくして耳遠い古代詩を避けて遂に古劇を現代語で試みられることになつた「生田川」に謠の象徵を用ひ、「靜」に怪しき漁師と怪しき少女を出したのは、しかも現實的に墮るのを避けられる用意とも見られる。古典的な手法で飽までも均整の美を具へた作品である。……「生田川」は四十三年六月、自由劇場第二回試演に有樂座で上演され、「靜」はずつと遲れて大正十年三月守田勘彌の文藝座が帝劇で上演した。

四十四年の八月九月「三田文學」に發表された「なのりそ」は上品な求婚者の喜劇であるが、大正二年十月河合武雄の公衆劇團のために與へられた「女がた」こそ、先生の作中の變り種である。十分賑かでしかも騷々しくなく、好色漢が活躍し女形が變裝したりしても、それがあくどくもなくくすぐりはならずに、先生のくつろいだ好謔を聞くやうな面白いフアルスである。再演されないのが不思議である。

先生が最後に筆を執られた作は大正三年三月「新小說」の「曾我兄弟」で、その二月帝劇に於ける尾上菊五郎の狂言座のために、河竹默阿彌の曾我敷皮の改作である。この

事に當つた先生の用意は「舊劇の未來」並に「舊劇を奈何すべきか」と題する文章に明かであるが、舊劇を味ふに邪魔になるものを除き、舊脚本の場割、出來事の進陟、人物の出入等を保存した上、全く新しい文章字句を以て書き直したのがこの「曾我兄弟」である。世界の新文藝に接した者には、到底現形の儘では味ふことの出來なくなつた舊劇を、新劇の様式に書き直して鑑賞に堪へる改作模範本を作らうと、近侍した者が「人が話を聞いたら嘘だと思ふ程の參考書を集めた」と告げてゐる位に、根本史實の研究まで行つた上に筆を執られたのである。そしてまづ身を以て範を垂れ、後人に尊い暗示を殘された。

……わが劇壇の恩師であり慈父である先生は、柵草紙の「山房論文」以來、「調高矣洋弦一曲」以來、論筆に紹介にまた戲曲飜譯に依つてつねに先驅者として後進の道を拓かれた。先生自身の創作戲曲とてもすべて先驅者の精神を以て書かれぬはない「兩浦嶼」をはじめ一作ごとに新しき境地を示さぬものなく、後進はその啓示に依つてわが進むべき道を知らされたものばかりである しかも先生はその一つに執することなく、次々に後進のために惜しまず新しき門を開放されたので、わが劇壇も辛うじて今日に達することが出來たのである。私は先生の功績を今更數へ立てるよりも、たゞたゞ感謝と敬慕の情を捧げたいと思ふ。

過渡期の要求が然らしめたとはいへ、飜譯及び紹介の量の夥しきに比して、創作戲曲の數少きことは何としても憾である。一つ一つすぐれた作品でありみな後人のために尊い指針となつたとはいへ、わが劇壇の父たる先生は僅に十指に餘るほどの作品を殘した丈である。私はこの篇を手にして、嘗つて永井荷風先生の書かれた言葉を感慨深く思ふものである。――「先生はいつも獨りである。一所に歩かうとしても、足の進みが早いので、つい先きへ先きへと獨りになつて仕舞ふのだ。競爭といふやうな熱のある興味は先生の味はうとしても遂に味へない處であらう。自分は先生の後姿を遙かに望む時、時代より優れ過ぎた人の淋しさといふ事を想像せずに居られない。」

小山內薫篇解題

明治四十二年の末自由劇場の「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」試演の幕が上つた時から、先生はすでにわが演劇史上不朽の人となつた。大正にはひつた頃は、演出者として戲曲飜譯家として演劇學者として劇評家として、いづれの方面に於ても劇壇の第一人者たつた。私は慶應義塾の一學生として、親しく先生の教へを乞ひ得ることに光榮と幸

福とを感じながら、たゞ一つ物足りなくてならないことがあつた。それは先生が戯曲を書かない事だつた。

先生が單に講壇の學者ならばそれははじめから無理な註文とも云へるが、先生は押しも押されもせぬ立派な小說家として立つてゐたから「書くこと」を持たない筈がなかつた。

「先生、脚本を書いて下さい。」

おづおづしながらも、心では詰るやうなつもりで度々先生に云つたが、この稚い「理想の追求」を先生が介意されるわけはなかつた。しかし私は實際その事を私心からでなく——望んでやまなかつた。日本の劇壇のため私は眞面目にさう考へた。當時體を成さぬやうな脚本が作者が小說家として盛名ある故を以て上演されたり、下らぬお有難芝居が新劇として適用したりするのを見ると、脚本を書かぬ先生がまだるこしくてならなかつた。

演劇學者として崇拜してゐる先生が、一度筆を執れば戯曲家として人の上に出ることの痛快さもあつたが、それ以上にその實現の可能を信じて疑はなかつた。先生は泰西の戯曲や演劇理論をひろく渉漁してゐる上に日本の舊劇や新派にまでも通じてゐる。すでに「書くこと」を有してゐる以上、この嚢中のものを縱橫に驅使することに依つて、必ずいゝ作品を書かれるにちがひない。いやすぐれた作品は先生のやうに戯曲の技巧を心得た人の手に成るもので、「内に胎むもの」などを賣物にする手合からなんぞ生れるものではない。それを、徒に惡作の跋扈するのを拱手傍觀してゐるといふのは、たゞに先生のために取らないばかりでなく、全く劇壇の損失であると考へた。だから立派に大義名分の立つ義憤を以て敢て「理想の追求」を行ひ得た次第である。

しかし先生は仲々脚本を書いてくれなかつた。——それは頼まれ仕事と云つた風の脚色や飜案やは、先生の劇場に於ける修業年期の眞砂座時代からして來られた。しかしそれらの仕事は先生の智識や機智や趣向やを要求するだけのものだつた。「誕生日」だの「男見るべからず」だの「忠貞奇譚」だの「夜明け前」だの、本篇に輯錄されない仕事に接して、新小說に出た「俊寛」一つを手にしながら永い間待たなければならなかつた。——大正十年の秋まで。しかも先生は遂に立つた。

「第一の世界」は先生自身處女作と呼び、始めて戯曲の創作家としての全面容を世に問はれた作である。「私は良心を盡して、この作を書き上げたと信じてゐます。」とも云はれ「この一つの作をした爲に、實際二十年から若返つたやうな氣」がされたとも云はれ、先生の全的な心力が感ぜられる。しかもこの作は同時に先生が一流の戯曲作家たること

を事實を以て示した。卽ち左團次一座に依る帝劇の上演は、當年最大の見事な成功を舞臺で收めたのである。

この作を書き下す前に先生が自分で定めた態度を語つてゐるが、それには次のやうなことがある。

(一)「時間」と「空間」との問題の外、何等の「舞臺的束縛」を受けるな。

(二)唯「人間」を書け、「人間」と「人間」との關係を書け。それ以上を書くのはまだ早い。

(三)强ひてテイマを作り出さうとするな。テイマは自然に生れて來るもので、作り出すべきものではない。若し、テイマがあるなら、宇宙人生を包むやうな大きなテイマであれ。

(四)あらゆる 'Theatricalities' (芝居らしき事) から解放せられよ。何となれば「芝居らしきこと」ほど「芝居」の力を微弱にするものはないから。

(五)問題を提供しようとするな。なぜなら、自分はまだ ultimate な問題を提供する程深い哲學は持つてゐないから。

(六)問題が自然に出て來ても、强ひてそれを解決しようとするな。藝術の目的は問題の解決ではない。

(七)愛情を以て――實に細かい愛情を以て――舞臺へ出て來る一人々々の人物を扱へ。どんな輕い役目で出て來る人物をでも、決して憎んだり蔑んだりしてはならない。

(八)戲曲の本質は――ユリウス・バアブの言つたやうに――對話である。總ての表現を對話に置け。ト書きで戲曲を書かうとするな。舞臺監督並に看客の想像力を尊重せよ。

(九)出來得る限り簡素に書け。エッセンスだけ書け。細かい事は、惜しいと思つても、切り捨てろ――

「第一の世界」にはこれらの實踐が明かに見られた。先生はまづあらゆる「芝居らしさ」を捨てた。出來得るだけ簡素に書いた。そして實に舞臺的な言葉を以て對話を書いた。それがよく劇的効果を擧げ、緊張した氣分の中に力强く主人公を描き出すことが出來たが、この事は先生にしてはじめてよく爲し得ることである。粗剛と簡素の別を知らず、舞臺の呼吸に無智であり、「芝居らしさ」の何たるかを辨へざる者には到底達し得ざる境地である。あまねく戲曲の手法に通じてゐればこそ、それを離れて無技巧的な巧な表現を行ひ得たのである。――そしてこれが其後の作品の特色ともなつてゐる。

この作以後は、宛も堰を切つて落したやうに「ベテスダの池」「三人と三人」「息子」「許嫁」等を次ぎ次ぎに書かれたが、それらの作品を收めた「現代戲曲全集」の第十一卷の

跋文に先生は自ら記してゐる。――「戯曲家としての私はまた一年生であると云つて好い。演出については二十年近い研究と經驗を重ねて來た。東西の戯曲についても可なり長い檢討を續けて來た。然し「自ら戯曲を作ること」については、殆んどまだなんにも知らないと言つて好い。天分の厚薄はやむを得ないこととして、戯曲作家としての私は未知數である。そして、私はそこに私自身の希望をつないでゐる。」

勿論これは先生の謙遜の言葉であるが、先生は絶えず一年生のごとく眞摯な精進をつゞけて來てゐるのは事實で、一作といへども停滯を見せたマンネリズムの作品を書かない。清新な形式と技巧とはつねに先生と共にある。――それはすぐれたスタイリストだからである。

水上瀧太郎氏は「小說集「窓」「蝶」「笛」などに收められた短篇の、各々の內容の持つ韻律に從つて異る形式の多種多樣なのには驚いてしまつた」と云はれたが「はつきりとつかんだ內容に、最も適當な形式を與へて、簡潔明瞭に描く」ことに於ては小說家小山內薰も戯曲家小山內薰も違ふところないのである。しかもその描法が、表現技巧が、あらゆる手法に通ずる先生のこれと選んで上のものとて、些の遲疑なく躊躇がない。つねに明快である。先生の戯曲に接すると、宛も名人の打ち下ろす碁石が戞然と響くが如き爽かさを覺えるのである。

かくの如くスタイリストたる先生は、震災後に書いた名作「亭主」「奈落」等を經て、文化史的意義を持つスケェルの大きい「森有禮」を描くに當つては、おきまりの傳記劇に飽き足らずに、映畫劇的とも云ふべき多場面の新手法を執つた。爾來「ある敵討」「金玉均」「シネマトグラフ」等異色ある一群の作品を成して劇壇に大きい衝動を與へ多くの追從者模倣者まで生むに到つた。

わづか十年足らずの間の近業を收めたこの篇を以てしても先生は戯曲家中の第一人者として君臨することが出來るが、それは他の所謂大家達とちがつてすでに固定した姿ではなく、成長しつゝある姿である。私が三つの名作として擧げたい「第一の世界」と「亭主」と「森有禮」を見るに、スタイリストたる先生の適確なすぐれた表現のことは措いても、人生に對する視野が次第にひろく大きくなつて來てゐるではないか。しかも先生はいつまでも一年生のつもりで精進を怠らずにゐるではないか。――今後戯曲家として先生がどういふ方向に進展するかは豫測の外にあるその意味では未知數とも云へる。たゞもつと偉大になることだけは期待してよいのである。

先生の戯曲は單なる讀物に終る机上戯曲ではない。すべて舞臺の上ではじめて眞價をあらはした底の作品が多い。

こゝに心覺えまでに主なるものゝ上演記錄を附して置きたい。但し病臥中時日の調査が不可能なので上演者名を擧ぐるに止ることを憾とする。

「第一の世界」左團次（帝劇）。築地小劇場。
「三人と三人」築地小劇場。
「捨兒」澤之助（有樂座）
「西山物語」左團次（歌舞伎座）
「亭主」菊五郎（新橋演舞場）
「奈落」築地小劇場（小劇場と公園劇場と二回）
「吉田御殿」上演禁止（帝劇）
「吉利支丹信長」澤正（市村座）
「ある敵討」井上（松竹座）
「シネマトグラフ」築地小劇場。
「森有禮」左團次（歌舞伎座にて二回）
「圓タクの悲哀」羽左衞門（歌舞伎座）五九郎（昭和座）
「息子」菊五郎（帝劇と新橋演舞場と二回）築地小劇場。
「綠の朝」菊五郎（帝劇）
「塵境」小堀（有樂座）
「伊左衞門」幸四郎（新歌舞伎研究會、帝劇）
「與三郎」幸四郎（新歌舞伎研究會、帝劇）
「淺間嶽」吉右衞門（新富座）

以上

日本戯曲全集・第四十卷
現代篇第八輯・第三回配本

著作權者代表者檢印

禁無斷上演

昭和三年五月二十日印刷
昭和三年五月二十三日發行
（非賣品）

著作者　森鷗外
　　　　永井荷風
　　　　小山内薫
發行者　和田利彦
印刷者　島源四郎
製本者　高崎鐵五郎

東京市京橋區南傳馬町二丁目
發行所　春陽堂
電話京橋　六五二
　　　　　四四一五
振替東京一六一七

東京市小石川區諏訪町五六常磐印刷所印刷



